

續國譯漢文大成

文學部 二十九

309

65

鉄

石



始



續國譯漢文大成

吉田待郎氏

贈本

文學部第二十九册(第八帙の二)

韓退之詩集 下の一



309  
65

韓昌黎集下卷目次

卷六

古詩

符讀書城南	一
示爽	九
人口城南登高	三
病鷗	一六
華山女	二
讀皇甫湜公安園池詩書其後	二七
路傍塚	三三
食曲河驛	三四
過南陽	三六

韓昌黎集下卷目次

灑吏	三七
贈別元十八協律 六首	四五
初南食貽元十八協律	五
宿曾江口示姪孫湘 二首	六一
答柳柳州食蝦蟇	六三
別趙子	六
除官赴闕至江州寄鄂岳李大夫	七
南山有高樹行贈李宗閱	七
猛虎行	八

韓昌黎集下卷目次

卷七

古詩

雪後寄崔二十六丞公……………八七  
 送僧澄觀……………九一  
 獻山南鄭相公樊員外……………九七  
 和武相公詠孔雀……………一〇三  
 感春 三首……………一〇五  
 行香贈盧李二中舍人……………一〇九  
 晚寄張十八助教周郎博士……………一一一  
 題張十八所居……………一一二  
 奉酬盧給事雲夫四兄曲江荷花行見寄……………一二四  
 奉和錢七兄曹長盆池所植……………一二九  
 記夢……………一三〇  
 南內朝賀歸呈同官……………一三六

朝歸……………一三一  
 雜詩 四首……………一三三  
 讀東方朔雜事……………一三七  
 龍瘡鬼……………一四三  
 示兒……………一四七  
 庭楸……………一五四  
 甌月喜張十八員外以王六秘書至……………一五七  
 和李相公攝事南郊覽物興懷呈一二知舊……………一五九  
 和裴僕射相公假山十一韻……………一六三  
 與張十八同效阮步兵一日復一夕……………一六六  
 送諸葛覺往隨州讀書……………一六九  
 南溪始泛 三首……………一七三

卷八

聯句

城南聯句……………一八二  
 會合聯句……………二一五  
 鬪雞聯句……………二二三  
 納涼聯句……………二四〇  
 秋雨聯句……………二五一  
 征蜀聯句……………二六〇

同宿聯句……………二七三  
 莎柵聯句……………二七六  
 雨中寄孟刑部幾道聯句……………二七七  
 遠遊聯句……………二八四  
 晚秋郾城夜會聯句……………二九六

卷九

律詩

題楚昭王廟……………三三五  
 宿龍宮灘……………三三八  
 叉魚招張功曹……………三三〇

李員外寄紙筆……………三三五  
 次同冠峽……………三三六  
 答張十一功曹……………三三八

郴州祈雨	三四〇
湘中酬張十一功曹	三四三
榔口又贈 二首	三四三
題木居士 二首	三四五
晚泊江口	三四七
湘中	三四八
別盈上人	三四九
喜雪獻裴尚書	三五〇
春雪	三五五
聞梨花發贈劉師命	三五九
春雪聞早梅	三五九
早春雪中聞鶯	三六三
梨花下贈劉師命	三六四
和歸工部送僧約	三六六
入關詠馬	三六七
木芙蓉	三六八
題張十一旅舍三詠	三七〇
榴花	三七〇
井	三七一
蒲萄	三七二
硤石西泉	三七三
梁國惠康公主挽歌 二首	三七四
和崔舍人詠月二十韻	三七八
詠雪贈張籍	三八二
酬王二十舍人雪中見寄	三九一
送侯喜	三九二
學諸進士作精衛石填海	三九五
奉酬振武胡十二丈大夫	三九五
奉和庫部盧四兄曹長元日朝廻	三九七
寒食直歸遇雨	四〇〇

送李六協律歸荆南	四〇一
題百葉桃花	四〇三
春雪	四〇四
戲題牡丹	四〇五
盆池 五首	四〇八
芍藥	四一一
奉和魏州劉給事使君三堂新題 二十一詠	四一二
新亭	四一四
流水	四一五
竹洞	四一五
月臺	四一六
渚亭	四一七
竹溪	四一七
北湖	四一八
花島	四一九
柳溪	四一九
西山	四二〇
竹遷	四二〇
荷池	四二一
稻畦	四二二
柳巷	四二二
花源	四二三
北樓	四二三
鏡潭	四二四
孤嶼	四二五
方橋	四二五
梯橋	四二六
月池	四二七
遊城南 十六首	四二八
賽神	四二九

題于賓客莊……………四三九

晚春……………四三三

落花……………四三三

楸樹 二首……………四三三

風折花枝……………四三四

贈同遊……………四三五

贈張十八助教……………四三七

題韋氏莊……………四三八

晚雨……………四四〇

出城……………四四〇

把酒……………四四一

嘲少年……………四四二

楸樹……………四四三

遺興……………四四四

卷 十 律 詩

送李尚書赴襄陽八韻……………四四七

和席八十二韻……………四五〇

和武相公早春聞鶯……………四五五

太安池(闕)……………四五五

遊太平公主山莊……………四五五

晚春……………四五六

大行皇太后挽歌詞 三首……………四五七

廣宣上人頻見過……………四六一

閒遊 二首……………四六三

酬馬侍郎寄酒……………四六五

和侯協律詠筍……………四六七

過鴻溝……………四七二

送張侍郎……………四七三

贈刑部馬侍郎……………四七五

奉和裴相公東征途經女几山下作……………四七六

鄭城晚飲奉贈副使馬侍郎及馮李二員外……………四七七

酬別留後侍郎……………四七九

同李二十八夜次襄城……………四八〇

同李二十八員外從裴相公野宿西界……………四八一

過襄城……………四八二

宿神龜招李二十八馮十七……………四八三

次硤石……………四八四

和李司勳過連昌宮……………四八五

次潼關先寄張十二闕老使君……………四八六

次潼關上都統相公……………四八八

桃林夜賀晉公……………四八九

送李員外院長分司東都……………四九〇

晉公破賊回重拜台司以詩示幕中賓客愈奉和……………四九三

獨釣 四首……………四九五

枯 樹……………四九五

元日酬蔡州馬尚書去年蔡州元日見寄之什……………四九〇

詠燈花同侯十一……………五〇二

祖席口前字……………五〇三

秋 字……………五〇六

送鄭尚書赴南海……………五〇七

答道士寄樹雞……………五一二

左遷至藍關示姪孫湘……………五一二

武關西逢配流吐蕃……………五二一

次鄧州界……………五二二

題臨瀟寺……………五二四

晚次宜溪辱韶州張端公使君惠書敘別 二首 五三五  
 題秀禪師房 五三八  
 將至韶州先寄張端公使君借圖經 五三九  
 過始興江口感懷 五三〇  
 韶州留別張端公使君 五三一  
 量移袁州張韶州端公以詩相賀因酬之 五三四  
 次石頭驛寄江西王十中丞閣老 五三六  
 遊西林寺題蕭二兄郎中齋堂 五三七  
 自袁州還京行次安陸先寄隨州周員外 五四〇  
 題廣昌館 五四二  
 寄隨州周員外 五四四  
 酒中留上襄陽李相公 五四六  
 題屏峰驛梁 五四九  
 賀張十八祕書得妻司空馬 五五二  
 杏園送張徹侍御歸使 五五四

雨中寄張博士籍侯主簿喜 五五六  
 奉和兵部張侍郎酬鄆州馬尚書祗召途中見寄 五五八  
 早春與張十八博士籍遊楊尚書林亭 五五〇  
 奉使常山早次太原呈副使吳郎中 五五三  
 夕次壽陽驛題吳郎中詩後 五五五  
 鎮州初歸 五五六  
 同水部張員外曲江春遊寄白二十二舍人 五五六  
 和水部張員外宣政衙賜百官櫻桃詩 五七一  
 早春呈水部張十八員外 二首 五七四  
 送桂州嚴大夫 五七六  
 奉酬天平馬十二僕射暇日言懷見寄之作 五七八  
 奉使鎮州行次承天行營奉酬裴司空 五八〇  
 鎮州路上隨酬裴司空相公重見寄 五八二  
 奉和僕射裴相公感恩言志 五八三  
 和僕射相公朝迴見寄 五八五

奉和李相公題蕭家林亭 五八六

補遺

外集詩五首

芍藥歌 五九五  
 海水 五九九  
 贈崔立之 六〇二  
 贈河陽李大夫 六〇五  
 苦寒歌 六〇七  
 贈同遊者（已見正集） 六〇八

遺詩十六首

同賈牟韋執中尋劉尊師不遇 六〇九  
 春雪 六一二  
 贈族姪 六一三

奉和杜相公太清宮紀事陳誠上李相公十六韻 五八八

嘲肝睡 二首 六一七  
 畫月 六二二  
 贈張徐州莫辭酒 六二五  
 辭唱歌 六二七  
 知音者誠希 六二九  
 酬藍田崔立之詠雪見寄 六三〇  
 潭州泊船呈諸公 六三三  
 飲城南道邊古墓上 六三五  
 池上絮 六三六  
 有所思聯句 六三七  
 遺興聯句 六三九  
 贈劍客李園聯句 六四二

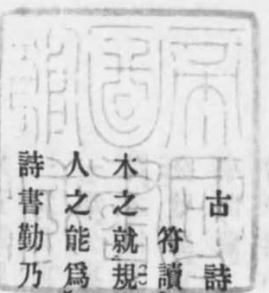
新添詩七首

鄆州谿堂詩并序……………六四六  
 送陸欽州詩并序……………六五七  
 送李愿歸盤谷并序……………六六一

送張道士并序……………六七〇  
 送鄭十爲校理并序……………六七七  
 送汴州監軍俱文珍并序……………六八三  
 石鼎聯句詩并序……………六八七

韓昌黎集 卷六

文學博士 久保天隨 譯解



古詩

符讀書城南

本之就規矩在梓匠輪輿  
 人之能爲人由腹有詩書  
 詩書勤乃有不勤腹空虛  
 欲知學之力賢愚同一初  
 由其不能學所入遂異閭  
 兩家各生子提孩巧相如  
 少長聚嬉戲不殊同隊魚

符、書を城南に讀む

木の規矩に就くは、梓匠輪輿に在り。  
 人の能く人たるは、腹に詩書あるに由る。  
 詩書勤むれば乃ち有り、勤めざれば腹空虛。  
 學の力を知らむと欲すれば、賢愚同一初。  
 その學ぶ能はざるに由つて、入るところ遂に閭を異にす。  
 兩家各子を生む、提孩にしては巧に相如く。  
 少や長じて聚まつて嬉戲す、同隊の魚に殊ならず。

古詩 符讀書城南



年至十二三頭角稍相疎  
 年十二三に至つて、頭角稍や相疎なり。  
 二十漸乖張清溝映汗渠  
 二十、漸く乖張し、清溝、汗渠に映ず。  
 三十骨節成乃一龍一豬  
 三十にして、骨節成る、乃ち一龍一豬。  
 飛黃騰踏去不能顧蟾蜍  
 飛黃は騰踏し去り、蟾蜍を顧ること能はず。  
 一爲馬前卒鞭背生蟲蛆  
 一は馬前の卒と爲り、背を鞭たれて蟲蛆を生ず。  
 一爲公與相潭潭府中居  
 一は公と相と爲り、潭潭たり府中の居。  
 問之何因爾學與不學歟  
 これに問ふ、何に因つてか爾る、學ぶと學ばざるとか。  
 金壁雖重寶費用難貯儲  
 金壁は重寶と雖も、費用して貯儲し難し。  
 學問藏之身身在則有餘  
 學問は之を身に藏む、身在らば餘あり。  
 君子與小人不繫父母且  
 君子と小人と、父母に繫らず。  
 不見公與相起身自犁鋤  
 見ずや公と相とを、身を起す犁鋤よりす。  
 不見三公後寒饑出無驢  
 見ずや三公の後を、寒饑出づるに驢なし。  
 文章豈不貴經訓乃菑畬  
 文章、豈に貴からざらむや、經訓、乃ち菑畬。

潢潦無根源朝滿夕已除  
 潢潦の根源なきは、朝に滿ちて夕に已に除かる。  
 人不通古今馬牛而襟裾  
 人として古今に通せざれば、馬牛にして襟裾。  
 行身陷不義況望多名譽  
 身を行つて不義に陷る、況んや名譽多きを望むをや。  
 時秋積雨霽新涼入郊墟  
 時秋にして積雨霽れ、新涼、郊墟に入る。  
 燈火稍可親簡編可卷舒  
 燈火、稍や親むべく、簡編、卷舒すべし。  
 豈不且夕念爲爾惜居諸  
 豈に且夕に念はざらむや、爾の爲に居諸を惜む。  
 恩義有相奪作詩勸躊躇  
 恩義相奪ふあり、詩を作つて躊躇を勸む。

【字解】(一)規矩、定規、圓を畫くを規といひ、方を畫くを矩といふ。(二)梓匠、輪輿、木工の總名。孟子盡心章に「梓匠輪輿は能く人に規矩を與ふるも、人をして巧ならしむること能はず」とあるに本づく。なほ其詳は、周禮考工記に見え、梓人は斧鑿を作り、又欵器を作るので、いはば造物師、匠人は大工。輪人は車の輪を作り、輿人は輿を作る。(三)詩書、詩經と書經。六經中、最も必要なるものである處から、經といふ稱に用ふ。(四)問、門に同じ、即ち入口。(五)提孩、孟子盡心章に孩提之童とあつて、その法に「二三歲の間、孩提するを知り、提抱すべきものなり」とある。(六)少長、少は多少の少、精やといふに同じ。(七)頭角、前の文帝が初めて生まれた時、鼻起が之を抱くと、角にして頭上に角が出て、又引込んだといふことがある。又吳志に魏王有三角、發背未達といふ句がある。(八)ここでは、頭の先といふ位に見れば善い。(九)乖張、隔りが出来る。(十)汗渠、濁れる溝。(十一)骨節、脱文に「禽獸の骨を節といふ」とある、これは下の「一龍一豬」に對して云ふ。(十二)龍、脱文に「龍龜の長、能く淵、能く明、能く巨、能く綱、春分にして天に登り、秋分にして淵に潛む」とある。(十三)精、黍、高粱と通用す、ぶた。(十四)菑畬、古詩 符讀書城南

飛黃。淮南子に、黃帝之時、飛黃服驥、とあつて、一名を飛黃といひ、即ち神馬である。高誘の注に「飛黃は、狐の如く、背上に角あり、これに乗すれば、應三千歲」とある。【一】輸餘、蝦蟇、ひき蛙。【二】公與相、公は三公、即ち太師、太傅、太保、相は丞相。【三】潭潭、深遠の貌。【四】府中居、官宅。【五】金鑿、黄金白鑿。【六】父母且、且は語助で、意弱なし。【七】豐祖、祖と帥。【八】富命、易に不三萬命とあり、爾雅に「田一成を命といひ、三成を命といふ」とある、即ち耕すこと。【九】積後、積は積水、後は後埃の水、ともに渾なきを云ふ。【一〇】朝滿夕已餘、孟子に「初くも惟れ本なし、七八月の間、雨澤まり、溝澮皆盈つ、その溢るるや、立どころにして持つべきなり」とあるに本づく。【一一】馬牛而羸、牛馬にして衣裳を着けたるが如しといふ意、孟子に「飽食煖衣、逸居にして教なければ、禽獸に近し」とあり、史記項羽本紀、韓生の語に「人は謂ふ、楚人は沐猴にして冠す」とあり、この句、韓は孟子に則り、句法は史記に則る。【一二】穢雨、長雨。【一三】郊墟、魏文に「墟は丘」とあるが、ここでは郊野と見れば善い。【一四】雷轟、雷轟。【一五】居諸、詩の邶風日月の篇に、日居月諸、照臨下土とあつて「日や月や」と訓するが、居諸の二字を日月と同義に看做す。【一六】思無有相奪、思、以て之を愛し、讓、以て之に教へ、一寸見れば矛盾にして立立せざる如きが故に、相奪といふ。【一七】歸、歸、歸して決せざるの貌。

【題義】符は韓愈の子、城南は其別荘の在つた處である。孟郊に喜符郎の詩及び游城南韓氏莊の作があり、張籍の祭退之の五古に、去夏公請告、養疾城南莊、及び子符奉其言、甚於親使令の句がある。又韓愈の墓銘及び登科記を見ると、韓愈の子は利といふのが唯だ一人で、長慶四年に、進士の第に登つた。して見ると、符は、利の小子であらう。この詩は、元和十一年の秋の作で、符が七八歳に成つて城南の別荘に居り、はじめて、讀書を學ぶに就いて、賦して示し、以て勤學を勧めたので、その大旨は、學べば君子となり、學ばざれば小人となるといふ一邊に在る。

【詩意】材木が役に立つて、定規に従ひ、色色の物に細み立てられるのは、主として、梓匠輪輿等、工人の意匠に因るのである。それと同じく、人が人として、世に立つて天晴の仕事をするのは、主として腹に聖經を蓄へ、十分學問をしてからの事である。詩書を讀誦して勉強すれば、得るところがあつて、學問の根柢も出来るが、もし勉強しなければ、學問は尻から抜け、腹は空空として、全く物が無い。さて學問の効果如何といふと、元來、人類は、皆平等で、賢智愚昧も、生まれた當時に於ては、決して差別なく、本然の性は、全く同一であるのだが、學問が出来ないと、終には入口を異にして、各、別別の處へ這入る様になるのである。今二軒の家で、子を生みたりとせむに、笑つたり抱かれたりする二三歳の時に於ては、その智慧も大抵同じ位であるし、稍や長じて、相聚まつて遊び戯れる時に於ては、水中同隊の魚と一般である。しかし、十二三になると、學問する方は、嶢然頭角を露はして、一段と高くなり、學問しない方は、自然に疎外される。やがて、二十になると、だんだんに間隔が廣くなり、一は清き溝の如く、一は濁れる渠の如く、それが相映じて、愈よはつきりと見える。次いで、三十にして十分發達し切つた時には、一は神龍が九天の上に變化するが如く、一は豚が糞土の間に蠢蠢たるが如く、九で較べ物にならない。そこで、學べる者は、神馬の如く飛騰し去り、學ばざるものは、羸馬の遅鈍、さながら墓の如く、のそのそして居るのを、顧る暇が無いから、片片の方は、全く置いてきばりにされて仕舞ふ。學ばざるものは、氣の毒にも、馬前の走卒となり、時に過れば、

背を斬たれ、その跡の肉が腐れば、蛆が湧いて、まことに見られた態では無いが、かの學びし者は、立身出世、目ざましく、或は三公となり、或は宰相となり、大きく立派なる官宅に住んで居る。如何なれば、兩者、その始に於ては、略は同じく、終に於ては、此の如く霄壤も當ならざるが如くなつたか、それは全く學ぶと學ばざるとに因るのであるまいか。黄金白璧は、貴重なる寶であるが、これを買ふには、錢が入るし、おまけに、いつまでも貯へて置くといふことは出来ない。唯だ學問だけは、これを身に藏して置けば、人にも盗まれません、その身の生きて居るかぎり、自ら十分の用がある。元來、或は君子となり、或は小人となるは、父母の生んだ時には關係せず、唯だ學ぶと學ばざるとに因るので、現に三公とか宰相とかいはれる人で、勳績を手にする百姓から立身したものであるし、それと反對に、三公の子孫であつても、零落して、寒を防ぐに衣なく、飢を凌ぐに食なく、外へ出るにも驢馬さへもない様に成つたものもある。文章は、まことに貴いものであつて、名譽も之に因つて得られるが、經學の教が其根柢となり、即ち田を鋤き起す機なもので、すべて根柢の無いものは、決して長くは續かず、たとへば、溜まり水が朝に滿つるも、夕に忽ち涸れると同じ様である。されば、人にして古今の事に通せざれば、牛馬が衣服を着て居る様なもので、もとより、道を知らねば、平生の行狀、動もすれば不義に陥り易く、到底名譽の多きことを望む譯には行かない。今しも秋にして、長雨漸く霽れ、三伏の暑氣、すでに退き、新涼、郊野に滿ちて、窓の燈火、そろそろ親むべく、

まことに勉學の好期節、書物を卷きつ符べつするには、恰も宜しき折柄である。されば、朝夕勉學を心がけ、汝自身の爲に、日月を惜んで、決して無益に暮らすことなく、學問に一心になるが善い。抑も恩愛厚ければ、兎角、子に甘くなり易く、それでは、後の爲に宜しくないから、義を以て教へて愛に溺れず、ここに斯詩を作つて、躊躇の惰念を勵ますのであるから、汝も善く心得て、何につけても勉強が第一であるぞ。

【餘論】この詩は、其子に勉學を勧めたのは善いが、人生唯一の目的が富貴利達に在る様に云つたのは、韓愈の平生にも似合はず、どうも宜しくないといふ人がある。陸唐老は「退之、六藝の文を吟ずるを絶たず、百家の編を繙くを停めず、諸生を招き、館舎を立て、その行業の未だ至らざるを勉勵して、深く其實望を有司に戒む、これ豈に吾が道に利心ある者ならむや。佛骨の一疏、議論奮激、かつて、去就禍福を以て其操を回さず、原道の一書、千百言を累ねて、異端を攘斥す、力を用ふることに、殆んど孟軻氏と等し。退之、學ぶところ、行ふところ、亦た愧づるなし。惟だ符讀書城南の一詩、乃ち目を潭潭の居に駭かし、鼻を蟲蛆の背に拵ひ、切切然として、その幼子に餌するに、富貴利達の一美を以てす、向の得るところに戻ることある者の如し」といひ、洪邁は「退之、その子に訓じ、これをして腹に詩書ありて、力を學に致さしむ、美なり。然れども、その中、富貴を覬覦するの語あるを免れず、杜牧之、小姪阿宜に寄するの詩、その意、亦た韓と類す」といつて居る。なる程、潭潭也

る府中の居を以て、爲學者の理想の如く言つて居るのは、まことに淺俗であるが、言つて聞かせる相手が、七八歳の小俸である處から、分かり易く、解し易きを旨とし、そこで、かう云つたので、韓愈の本志に非ざること論なく、こころは、彼の心を十分に察しなばならない。されば、樊汝霖は「魯直、かつて、この詩を書し、その後に跋して曰く、或は謂ふ、韓公、當に後世に開くに性命の學を以てすべし、當に誘ふに富貴顯榮を以てすべからず、涪翁曰く、熙寧元豐の間、大儒の過や、又何をか學ぶ。孔子曰く、齊の景公、馬千駟あり、死するの日、民得て稱するなし、伯夷叔齊は、首陽の下に饑ゑ、民、今に至つて之を稱す、韓公の言、その勸奨の功に於て、趙を異にして、歸を同じうす」とある。これは、潭潭府中居以外、究極の意義を付度して言つたので、まことに、公平の見を推すべきものであらう。次に朱竹垞は「幼稚に示す、但を厭はず、且つ全く是れ淺語、然れども、古色淵然、骨力正に爾かく濃厚」といひ、「讀書を論じ、必ず經術行義の上に歸到す、これ昌黎、學に根本ある處」といひ、何義門は「馬前卒の六句、過早に非ざるなり、子の才質、すでに高からず、而して學を爲す、亦た序あり、始らく先づ情の最も切近する者を以てこれが勸誡と爲し、その子をして、先づ經訓の根源を講求せしむ、すなはち、知るところ、日に以て明かに、道の遠きもの、大なるもの、庶はくは、凌節苦難の患あるに至らざるのみ」といひ「唐人尤も門第を重んず、能く其職位を保ち、其祭祀を守るには、身を立て、道を行ひ、名を後世に掲ぐることに、これに基づく」といひ「唐人、進士

を重んじて、明經を薄んず、學ぶところの者は詩賦文章、ひとり韓氏、この學を爲すのみ。曰く、古今に通ずるには、書を讀み、并せて史學及び當代六典開元禮の屬を該ね、身を行ふには一己に迷ね略は躬行に及ぶ」とあつて、これ等を細觀すれば、その教訓の旨意も、自然明白になることと思ふ。なほ此等に就いて、趙鳳北の議論があるが、便宜上、後に示兒の詩の處に記することにす。

示爽

爽に示す

宣城去京國。里數逾三千。  
念汝欲別我。解裝具盤筵。  
日昏不能散。起坐相引牽。  
冬夜豈不長。達旦燈燭然。  
座中悉親故。誰肯捨汝眠。  
念汝將一身。西來曾幾年。  
名科掾衆俊。州考俱吏前。

古詩示爽

今從府公召。府公又時賢。今、府公の召に従ふ、府公、又時賢。

時輩千百人。孰不謂汝妍。時輩千百人、孰か汝を妍と謂はざらむ。

汝來江南近。里閭故依然。汝、江南の近きに來らば、里閭、故と依然たらむ。

昔日同戲兒。看汝立路邊。昔日、同戲の兒、汝を看て路邊に立たむ。

人生但如此。其實亦可憐。人生、但だ此の如し、其れ實に亦た憐むべし。

吾老世味薄。因循致留連。吾老いて、世味薄く、因循、留連を致す。

強顏班行內。何實非罪愆。強顏なり班行の内、何ぞ實に罪愆に非ざらむ。

才短難自力。懼終莫洗滌。才短くして、自ら力め難し、懼らくは、終に洗滌する莫か

臨分不汝誑。有路即歸田。分に臨んで、汝を誑かず、路あらば、即ち田に歸らむ。

【字解】(一)宜城、唐書地理志に「宜州は宜城郡、江南道に屬す」とある。(二)解脫、しばらく旅裝を解く。(三)體建、體は殷梁の殷、たのしき安。(四)西華、西、長安に來りしこと。(五)名科、一に科名に作り、もと同職、即ち進士の試験。(六)州考、即ち進士進士の試験。(七)府公、刺史を指す。(八)時賢、一代の名賢。(九)里閭故依然、宜城は江南に在つて、そこに韓愈の別業があつた。(一〇)世味薄、世間の事に對する興味が薄くなつた、即ち世事を薄しとすること。(一一)因循、ぐづぐづる。(一二)致留連、その處居すむる。(一三)強顏、厚顏に同じ、顔面皮。(一四)洗滌、むかしの過失を洗ひ雪ぐ。

【題義】蔣注に「韓の譜系を按ずるに、公の子姪に爽と名づくるものなし。疑ふらくは、韓湘の小字たらむ。湘は、長慶三年、進士の第に登る」とある。そして、韓湘は、登第後、大理丞に仕官したことがある。この人は、仙術が好であつたといふことで、いづれ、後に詳しく述べる場合もある。それから、湘の弟に滂といふものがあつて、世系表に寶難丞に仕官したとあるが、韓愈の作れる墓志に、年十九で死んで、未だ嘗て仕へずとあるから、これは、世系表が誤つて居るのである。湘滂二人は、老成、即ち十二郎の遺子で、韓愈の從孫である。老成は、食を求める爲に、久しく、江南、多分宜州に居て、その地で病死したので、その詳細は、例の祭三十二郎一文に見えて居る。老成の歿後、その子供達は、上京して、韓愈の世話に成つて居たので、中にも、韓湘は、曩に郷貢進士となつた位だから、上京後、數ば試に應じたが、久しく登第せず、仍つて、宜州の刺史から招かれたを幸に、取り敢へず、その地に赴かうとしたから、韓愈は、その行を送る爲に、小宴を催し、仍つて、この詩を作つたのであらう。なほ強顏班行内の一句に因つて、前人は「この詩、當に是れ知制誥たる時の作なるべし」といつた、即ち韓愈が陽山江陵の貶謫より北歸し、河南令より國子博士となり、比部郎中史館修撰より陞進したので、元和十年頃であらう。

【詩意】宜城の地たるや、この長安を去ること、甚だ遠く、三千里にも超えて居る。その遠隔の地へ汝が今往かうとするのであるから、流石に、名残が惜まれて、しばらく、旅裝を解かしめ、心ばかり

なる内輪の小宴を催した。一日が暮れても、坐客は解散せず、偶々歸らうとするものがあると、他の者が起つたり坐つたりして、これを引き留める。冬の夜は、随分長いが、それにも關せず、燈燭を燃やして、夜あけにも及んだ。座中の者は、いづれも、親戚故舊であつて、汝の遠行を送るのであるから、汝を棄てずばかりして眠つたりするものは無い。おもへば、汝は、一身を以て、西、この長安に來てから、もう幾年になるか。その間、度度進士の試験を受けたが、いつも、衆後の爲に掩はれて成功しなかつた。しかし、元と相當に才能があるので、郷貢進士には、とつくの昔に及第し、試験官の前に呼び出されたこともあつたので、何分、運命だから仕方がない。今しも、宣州の刺史から招かれて、遠く其地に赴くとのことであるが、刺史たるものも、一時の名賢であつて、その眷顧を受けたのは、もとより、名譽といはねばならず、同時の者が、千人百人寄り集まつた處で、汝の才の美を稱せざるものも無い位。汝が江南なる宣州の附近に往つたならば、そこには、我が別業が猶ほ存し、村里の規模も昔の儘なるを見るであらう。そして、幼時一緒に遊んだ兒童輩は、ともに長じて人となり、汝の歸り來るを見ると、路邊に立ち、つくづくと眺め入つて、汝を迎へるであらう。人生は、大抵かくの如きもので、立身出世は、なかなか容易な事ではなく、汝の如きは、先づ善い方としないでならぬ。吾は年すでに老い、恐ろしく思圖して、ここに居すわり、厚顔にも朝官の班に列して居るが、もとより、何も出來ぬ身で、俸祿を私するのは、罪愆で無いとも云へぬ位の事は知つて居る。但し、本來の

短才は、如何に奮發しても、自ら努力することが六つかしく、懼らくは、これまでの過失を洗ひ清めることも出來ぬであらう。ここに汝と別るるに臨み、僞らざる告白を爲すが、もし然るべき路だにあらば、官を罷めて、故郷に歸田したいと思ふので、何も、いつまでも、官位俸祿を貪つて、後進の邪魔をする考ではない。

【餘論】朱竹垞は「純ら是れ真率の意、これ姪に示す詩」と云つた通り、すべて、情真にして語華ではあるが、兎角、淺近の識を免れず、結二句の如きも、毎度の口癖で、格別新しいものではない。

人日城南登高

人日城南より高きに登る

初正候纔兆涉七氣已弄

初正、候、纔に兆し、七を涉つて、氣すでに弄す。

靄靄野浮陽暉暉水披凍

靄靄として、野は陽を浮べ、暉暉して、水は凍を披く。

聖朝身不廢佳節古所用

聖朝、身、廢せられず、佳節、古しへ用ふるところ。

親交既許來子姝亦可從

親交、すでに來るを許し、子姝、亦た從ふべし。

盤蔬冬春雜樽酒清濁共

盤蔬、冬春雜はり、樽酒、清濁共にす。

令徵前事爲觴詠新詩送

令は前事を徵して爲し、觴は新詩を詠じて送る。

扶杖凌圯趾。刺船犯枯葑。

杖に扶けられて、圯趾を凌ぎ、船を刺して、枯葑を犯す。

戀池羣鴨廻。釋轡孤雲縱。

池を戀うて、羣鴨廻り、轡を釋れて、孤雲縱なり。

人生本坦蕩。誰使妄倥傯。

人生、本と坦蕩、誰か妄りに倥傯たらしむ。

直指桃李園。幽尋寧止重。

直に桃李の園なるを指し、幽尋寧ろ止だ重びするのみなり。

【字解】(一) 初正、新年に同じ。(二) 涉七、七日を経過した。(三) 氣已弄、陽氣が動き始めた。(四) 驚蟄、ほんのりした

暖。(五) 浮陽、太陽が浮べる。(六) 暉暉、輝く貌。(七) 披凍、氷が解ける。(八) 子鉄、鉄は班に同じ。(九) 冬春雜、齊冬

のと新春の二つの種類が混合して居る。(一〇) 命、即ち酒令、唐注に「東漢の賈景伯、酒令九篇あり、今傳はらず」といひ、又

劉貢父の説を引いて「唐人、酒を飲む、喜んで命を以て罰と爲す、今人、雜管歌謡を以て命と爲す、即ち白傳の謂はゆる醉割翻彩地小

令、是れなり。その故事等を擧げ、物色して命を爲すは、即ち謂はゆる命割三前事、爲、是れなり」とある。(一一) 圯趾、圯は土橋。(一二)

刺船、棹して船を行く、莊子の漁父に「吾、子而去らむと、乃ち船を刺して去り、堂間に返歸す」とあり、杜市の詩に、劉勰思三郎客と

ある。(一三) 枯葑、葑は菘根、唐注に「詩の谷風、采葑采菲、葑は香賦、爾雅に菘、云ふ菘葑なり」と。類按するに、その字、本と

同じ、但し物を異にする、故に香を異にするのみ」とある。又淮南子に「天旱して葑葑燥く」とあり、庾肩吾の詩に、黑米生三葑葑とあり、

杜市の詩にも、黑米生三葑葑とあり、楊慎の説に「葑葑は、根、相結んで生じ、歳久しくして、水上に浮ぶ、根最も堅くして、善く

糾結す、土泥を以て上に著け、その莖を刈り去り、結る時、火を以て焼けば、便ち餅種すべし」とある。(一四) 釋轡、轡は轡れ

る。轡は鋭く突つた山。(一五) 縱、ほしいまま、勝手に振舞ふ。(一六) 坦蕩、路平にしてなだらかなること。(一七) 倥傯、楚辭、楚辭、

劉向の九嘆に楚、然傷於山陸」とあつて、王逸の注に「倥傯は、窮乏困苦のごときなり」とある。(一八) 寧止重、止は唯だ、重は再

びする。

【題義】荆楚歲時記に「正月七日を人日と爲す」とある。董島の問題には、更に之を詳説し「俗、正

月一日を雞と爲し、二日を狗と爲し、三日を猪と爲し、四日を羊となし、五日を牛と爲し、六日を馬

と爲し、七日を人と爲す」とある。城南は、前にも見えた通り、韓愈の別墅の在る處で、符が書を讀

んだのも、即ち其地である。この詩は、正月七日、親交眷屬を城南の別墅に會し、園中の高い處へ登

つたりして遊んだことを敘したのである。その果して何年に屬するかは分からぬが、篇中に子姪亦可

従とあるより見れば、子は符、姪は爽で、前の詩と同じ頃の作と思はれる。

【詩意】曆、すでに改まつて、新春の季候も、どうやら、兆候を顯はし來り、すでに、七日を経過し、

陽氣が、そろそろ動き出した。試に野外の景色を眺むれば、ほんのりと霞みこめたる野には、日光を

浮べ、さらさらと耀く水は、氷が解けて居る。吾が生、何の幸か。この清平の御世に際して廢置せら

れず、そして、今日、古しへより持て囃す佳節であるから、ここ城南の別墅に於て、小集を催したの

である。親交の人人は、わが招きに應じて、いづれも來會するとの返詞があつたし、子姪の輩にも、格

亦た従つて參れといつて、一緒に引き連れて來た。もとより小集で、且つ田舎びた處であるから、格

別の御馳走もなく、盤上の菜蔬は、去年のと今年のとを取り交せてあるし、樽中の酒は、清んだのと

濁つたのと、兩つながら用意してあるから、各好きな方を飲むが宜しい。酒令は、すべて故事を徵

し、杯は新詩の成るに従つて次から次へと送つて行く。座中の興、すでに盡くれば、園内に出て遊び

廻るも面白く、或は杖に扶けられて、土橋の邊を逍遙し、或は池の中なる船に棹して、菰根の枯れて半ば泥となつた處に衝き當る、羣る鴨は、餌でも漁つて、どこかに居たが、やがて池を暮うて歸り來り、眺めやる彼方の尖れる峰を離れて、白雲一片、さながら、拘束なきが如く、勝手に卷舒する。おもへば、人生は、元と平坦で、なだらかなものであるのに、如何なれば、多數の人は、困苦するのか。それは、畢竟、分に安んじ命を樂むことをせずして、富貴利達を求めらるからであらう。われは、此に在つて、自ら満足して居るので、格別の望もない。やがて、二三月の頃、桃李の花の盛に咲き出づる頃ともならば、再び此に來て幽尋するは勿論の事、興さへ湧けば、何度でもかまはない。

【餘論】 蔣之翘は「詩、極めて清健朴野、退之、能く自ら本色を去る、故に佳なり」といひ、朱竹垞は「絶えて塵語に似たり、但だ、筆、塵語に比して較や重きのみ」といひ、又盤蔬以下の數句を評して「瑣事淺景、一一喜ぶべし」といつた。まことに、この詩は、樂天的の氣分に満ちて居て、内容は、格別目ざましいことではないが、一應無難に言ひおほせ、自然清新の致を帯びて居る。

病鷓

病鷓

屋東惡水溝有鷓墮鳴悲

屋東の惡水溝、鷓あり、墮ちて鳴くこと悲し。

青泥揜兩翅。拍拍不得離。  
羣童叫相召。瓦礫爭先之。  
計校生平事。殺却理亦宜。  
奪攘不愧恥。飽滿盤天嬉。  
晴日占光景。高風送追隨。  
遂凌紫鳳羣。肯顧鴻鵠卑。  
今者運命窮。遭逢巧丸兒。  
中汝要害處。汝能不得施。  
於吾乃何有。不忍乘其危。  
丐汝將死命。浴以清水池。  
朝餐輟魚肉。暝宿防狐狸。  
自知無以致。蒙德久猶疑。  
飽入深竹叢。饑來傍階基。

青泥、兩翅を揜ひ、拍拍として、離るを得ず。  
羣童、叫んで相召し、瓦礫、争うて之に先んず。  
生平の事を計校すれば、殺却、理亦た宜なり。  
奪攘して愧恥せず、飽滿、天を盤りて嬉ぶ。  
晴日、光景を占め、高風、追隨を送る。  
遂に紫鳳の羣を凌ぎ、肯て鴻鵠の卑きを顧みむや。  
今は運命窮まり、巧丸の兒に遭逢す。  
汝が要害の處に中り、汝が能く、施すを得ず。  
吾に於て乃ち何か有らむ、その危きに乘するに忍びず。  
汝が將に死せむとするの命を丐うて、浴するに清水の池。  
朝餐に魚肉を輟め、暝宿に狐狸を防ぐ。  
自ら以て致すなからむを知り、徳を蒙つて久しうして猶  
飽いては深竹の叢に入り、饑、來つて階基に傍ふ。  
疑ふ。



亮無責報心。固以聽所爲。亮に報を貰むるの心なく、固より以て爲すところに聽かす。

昨日有氣力。飛跳弄藩籬。

昨日、氣力あり、飛跳して藩籬を弄す。

今晨忽徑去。曾不報我知。

今晨、忽ち徑に去り、かつて我に報じて知らしめず。

僥倖非汝福。天衢汝休窺。

僥倖は汝の福に非ず、天衢、汝、窺ふを休めよ。

京城事彈射。豎子豈易欺。

京城、彈射を事とす、豎子豈に欺き易からむや。

勿諱泥坑辱。泥坑乃良規。

泥坑の辱を諱む勿れ、泥坑は乃ち良規。

【字解】(一) 惡水溝、下水の溝。(二) 鷓、即ち鷓。(三) 拍拍、ばたばたする、漢書東方朔傳に「これを擊つこと拍拍たり」とある。(四) 相召、相呼ぶ。(五) 伊先之、先を伊ふ。(六) 計校、計數校量。(七) 生平、平生に同じ。(八) 殺却、却は語助にして意通なし。(九) 春風、春ひき込む。(一〇) 盤天、天をめぐる。(一一) 占光景、わが物顔に景色を占領する。(一二) 高風、高空を吹き渡る風。(一三) 紫風、蔣注に「退之、紫鴻の字を用ふ、是れ個對の法、老杜亦た時に之あり」といつて居る。即ち鴻の字が紅と同音である處から、紫を以て之に對したのである。(一四) 巧丸兒、丸は彈き玉、巧に彈き玉を投げつける人。(一五) 要害、要害とは、自分の方には要地となり、敵には害地となる處といふのが本義であるが、このは、無所といふ體で、後漢書來歙傳に「歙自ら表を書して曰く、臣、夜、人定まるの後、何人にか賊傷せられ、臣の要害に中る」とある。(一六) 後能、能は才能。(一七) 可致、致ふ、後漢書寇恂傳に「願はくは、陛下、兄弟の死命を可せ」とある。(一八) 噴宿、日暮に寐させる。(一九) 氣壯、氣壯に同じ。(二〇) 階基、階段の下の土階。(二一) 亮、まことに。(二二) 藩籬、二字ともに垣。(二三) 天衢、都大路。(二四) 彈射、彈射を以て取る。(二五) 豎子、彈射の人をいふ。(二六) 泥坑辱、惡水溝に陥つた恥辱。(二七) 良規、よき訓戒。

【題義】蔣注に「説文に、鷓は鷓なり、鳥の貪惡なる者なり、その性、攫むことを好んで、善く飛ぶ、病めば能はずとあり、公の意、蓋し譏るところあるなり」といひ、顧嗣立は「必ず指すところあり、誰たるかを知らず、大約、恩を受けて背き去る者のみ」とある。その初、傷つた鷓を救つたのは事實かも知れぬが、この詩は即ち之に託して、背恩の小人輩を諷刺したのである。

【詩意】わが家の東なる下水の汗い溝の中に、一羽の鷓が落ち込んで、悲しげに鳴いて居た。よく見ると、青い泥は、雙方の翅に一ばいばかり、いくら、ばたばたしても、溝から飛び離れることが出来ず、ひどく、弱つて居た。その上、近處の惡太郎どもは、大聲に叫んで相呼び、先を争つて瓦礫を打ち付け、散散な目に遇はした。勿論、鷓の平生の事を考へると、これを殺した處で、道理上、差支ないことである。抑も鷓は、さまざまの物を奪ひ盗んで、少しも恥とせず、それで、満腹になれば、さも得意らしく、天空を繞つて、輪を繪きつつ飛び廻り、晴れた日などは、我が物顔に光景を占斷し、そして、高い處を吹く風に送られて、互に追隨して居る。彼の態度は、憎憎しき程で、禽鳥の王と稱せらるる鳳凰の羣をも凌いで、その上に飛び、鴻鵠などは、賤い卑いものとして顧みもしない。然るに、今は運命の窮まるに遇つたものと見えて、彈射に巧なる人に出合つたものだから、忽ち丸を急所の中てられて、折角の才能も施すに由なく、この溝の中に落ち込んだ始末で、おもへば、まことに氣の毒な事である。そこで、我輩は、もとより關係もないが、その危きに乘じて、愈よ苛め付けられるの

を見て居るに忍びず、例の悪太郎どもに向つて、汝の命ををして、溝の中より引き上げ、清水の池ですつかり洗ひ上げ、その後、毎日、朝の食事には、膳に付けられた魚肉を食はずして、汝に與へ、日暮に寝させる時には、狐狸の用心をして、夙夜心を費して、随分いたはつて遣つた。然るに、畜は、自分でどうすることも出来ない知りつつも、人の世話に成つて居ながら、久しうすると、その人が危難を加へはしないかといつて疑ふ様な風で、決して、自分の方に信頼しない。そこで、食に飽けば、深竹の叢に入り、飢ゑて來ると、そこから又出かけて、階段の土臺に倚り添うて居る。かくの如く、心から人に馴れないから、愛らしい處は、少しも無い。但し、自分は、あまり可哀相だと思つたから、救つて遣つたので、もとより報を責むる心なきが故に、その爲す儘に任せて置いた。すると、昨日は、大分氣力が出て、垣根の邊を飛び廻つて居たが、今朝は、忽ち何處かへ飛び去つて仕舞ひ、自分に挨拶さへもしなかつた。今回、汝は、僥倖を以て助かつたのであるが、僥倖てふものは、決して、汝に幸福を與へるものではない。汝は、今後、都大路などを窺はぬが善い。京城の中には、彈射を事とする手合が多く、中にも、その上手なものは、決して、欺くことは出来ないから、汝にして、うかうか都大路に出たならば、忽ち彈き落されて仕舞ふ。前日、汗い溝の中に落ちた恥辱は、決して諱み隠すにも及ばず、その事は、まことに善き戒であるので、汝は、決して之を忘れてはならぬ。

【餘論】何善門の評に「朱公叔、劉伯宗と交を絶ち、詩を作つて曰く、

北山有鴟。不潔其翼。飛不定向。寢不定息。餓則木攫。飽則泥伏。臍餐食汗。臭腐是食。填腸滿味。嗜慾無極。長鳴呼風。謂風無德。風之所趣。與子異域。永從此訣。各自努力。

公の此詩刺るところ、又加ふるに思に負いて反覆するを以てするなり」とあるし、又顧嗣立の評に、「この詩、毎に一二語を虚頓して、深一步法を用ふ。計三校生平事、殺却理亦宜、亮無責報心、固以聽所爲、是れなり。通篇、是れ比、分明、負心の人の爲に寫照す、老杜の義備行と正に是れ相反す」とある。要するに、畜に託して、小人の思に負き反覆定まらざることを敍したので、極めて、周匝に述べ立ててである。

華山女

華山の女

街東街西講佛經。街東街西、佛經を講じ、

撞鐘吹螺闍宮庭。鐘を撞き、螺を吹いて、宮庭闍がし、

廣張罪福資誘脅。廣く罪福を張つて、誘脅を資け、

聽衆狎恰排浮萍。聽衆、狎恰して浮萍を排す。

黃衣道士亦講說。黃衣の道士、亦た講說、

古詩華山女

【字解】(一) 街東街西、長安市中、麗處といふ義。(二) 廣張罪福、前生の罪業、未來の福徳などに就いて誇張して述べる。(三) 誘脅、誘惑したり脅迫したりする。(四) 狎恰、專注に「狎恰は唐人の語、白樂天櫻桃の詩に、恰恰頭千萬頭」とある。すると、狎恰は恰恰と同義で、

座下寥落如明星。座下寥落として明星の如し。

華山女兒家奉道。華山の女兒、家、道を奉ず、

欲驅異教歸仙靈。異教を驅つて、仙靈に歸せしめむと欲す。

洗妝拭面著冠帔。妝を洗ひ、面を拭うて、冠帔を著く、

白咽紅頰長眉青。白咽、紅頰、長眉青し。

遂來昇座演真訣。遂に來つて座に昇つて、真訣を演ぶ、

觀門不許人開扇。觀門、人の扇を開くを許さず。

不知誰人暗相報。知らず、誰人か、暗に相報す、

旬然振動如雷霆。旬然振動して、雷霆の如し。

掃除衆寺人跡絕。衆寺を掃除して、人跡絶え、

驕驕塞路連輜輶。驕驕路を塞いで、輜輶を連ぬ。

觀中人滿坐觀外。觀中、人滿ちて、觀外に坐し、

後至無地無由聽。後れ至るものは、地なくして、聽くに由なし。

俗の字には格別意味はなく、服職し

く其數の頗多なることを云つたので

あらう。【一】如明星。事跡星の

如しといへると同義。【二】仙靈

道家の教。【三】冠帔。帔は上衣。

【四】真訣。道家の奧義。【五】觀

門。觀は道士の居處。【六】旬然

鳴り轟く聲。【七】輜輶。後漢書

袁紹傳に「輜輶裝設、街陌に堪接す」と

あり、說文に「輶は車前の衣、車後

を輶となす」とあつて、車の母衣、

つまり高貴の人の乗車。【八】脫

劍。劍は麗環。【九】天門貴人。朝

廷の高官。【一〇】六宮。後宮、もと

六處に區別された故に云ふ。【一一】

玉皇。天子、天帝に擬して云ふ。

【一二】青冥。大空。【一三】事恍惚

その事、秘密に涉りて知り難きない

ふ。【一四】青鳥。山海經に「三危の

抽釵脫劍解環佩。釵を抜き、劍を脱し、環佩を解けば、

堆金疊玉光青熒。金を堆し、玉を疊んで、光青熒。

天門貴人傳詔召。天門の貴人、詔を傳へて召す、

六宮願識師顏形。六宮、師の顔形を識らむことを願ふ。

玉皇領首許歸去。玉皇首を領いて歸り去らむことを許す。

乘龍駕鶴來青冥。龍に乗じ、鶴に駕して、青冥より來る。

豪家少年豈知道。豪家の少年、豈に道を知らむや。

來繞百匝脚不停。來り繞つて百匝、脚停まらず。

雲廳霧閣事恍惚。雲廳霧閣、事恍惚。

重重翠幔深金屏。重重翠幔、金屏深し。

仙梯難攀俗緣重。仙梯攀ち難く、俗緣重し、

浪憑青鳥通丁寧。浪りに青鳥に憑つて、丁寧を通す。

【附義】この詩は、華山に修行して居た女道士が、大に世人の崇信を受け、はては、宮中に召されて、

天子から賜はつたことを述べ、その實、この女道士は、専ら色を以て、世の浮薄なる富貴子弟を誘惑して居るので、まことに怪しからぬものだといふことに及んだので、當時、道教の腐敗漸く甚しきことは、これを見ても分かる。

【詩意】 刺下は、佛教流行の世で、長安城中、東の町でも、西の町でも、到る處、佛經を講説し、鐘を撞いたり、法螺を吹いたりして、これに和し、梵唄の聲の聞がしきは、九重の宮庭にも譽徹する位。坊主どもは、過去の罪障、未來の幸福などに就いて誇張し、面白をかしく説き立て、或は誘惑を爲し、或は脅迫をなして、信者を引き入れるを第一とし、聽衆は、押しかけ、詰めかけ、さながら水中の浮草が入り亂れて居るが如くである。道家の方でも、黄衣を著けた貴き有徳の道士が、坊主と同じく説教をするが、到底相及ばず、座下に來つて聽講するものは、寥寥として、晨星の如き有様である。ここに、華山の女兒があつて、その一家は、道教を信奉して居る處から、自分も、矢張り入道し、この有様を見て、ひどく心外に思ひ、異教の信者を驅つて、仙靈の道に歸せしめむと企てた。その女道士は、綺麗に身じまひを爲し、在俗の妝を洗ひ落し、顔を拭ひ、頭には冠を戴き、身には上衣を著流し、そして、咽喉は白く、頬は赤く、長い眉は青く、さながら天女の如くであつて、遂に或る道觀に來り、麗面なく座に昇つて、仙家の秘奥を述べ、その間、堅く觀門を鎖ざして、妄りに人が戸を開くことの出來ぬやうにして置いた。然る處、誰が言ひ傳へたか知らぬが、そろそろと人が遣つて來て、その門を搦

り動かし、忽然として雷霆の如き響を爲し、やがて、一同觀内になだれ込んで仕舞つた。そこで、多くの寺どもは一掃されて、人跡全く絶えたるに反し、この觀に來る途中、驢馬の名馬は路を塞ぎ、母衣をかけた貴人の車は、相連り、はては觀中に人が一ぱいに成つて、仕方がないから觀外にも坐し、後れて來たものは、坐つて其説教を聞くことさへ出來ぬ位であつた。兎角する内に、例の女道士は、釵を抜き、腕環を外し、環佩を解けば、いづれも金玉で造つた結構なものばかりで、その光、青瑩として輝きわたり、そこで打寛ろいで、愈々眞訣の講義を始めた。これが忽ち評判に成つて、はては、在朝の貴人が天子の詔を傳へて、この女道士を召し出し、六宮の後妃どもは、是非一度お目にかかつて、師の顔形を見知つて置きたいと申されるからと云つて、強ひて之を伴うて入朝すると、天子は御機嫌斜ならず、拜闕も滞りなく済んで、成程と頷かれ、やがて御暇を賜はつて、その道觀に歸つて來たが、その飄飄たるは、龍に乗じ、鶴に跨り、大空を横絶して來たかと疑はれ、とても、この世の人ならぬ有様であつた。然るに、長安家の少年輩は、もとより仙道に志あるものでもないのに、口ごとに此處に來て、その觀を百度も周り歩いて、しばらくも脚を停めない。それは、何の爲であるか、雲窓霧閣の中には、何か人言はれぬ秘密を包蔵して居るに相違なく、翠幔は重重として、金屏を環らした奥の方は、極めて深く、甚だ怪しいことである。かかる始末であるから、折角の女道士も、仙梯を攀ちて登仙することは、もとより六つかしく、俗縁愈々重く、到底、この浮世を脱出することは出

來す、そして、仙家の使の役をする青鳥に託して、丁寧懇懃の意を通じ、専ら此類の者どもを呼び寄せやうとして居るのは、まことに、怪しからぬ始末である。

【餘論】一つの世でも、邪教と稱せらるるものは、教理以外、人の弱點に付け込んで之を誘惑する手段を講ずるが普通で、華山の女道士も其一である。この詩は、結末數句、ことさらに虚無缥缈の詞を弄して居るが、諷意は、顯然として、容易に摸索することが出来るので、單に女道士の所行を假借したものとするのは、大なる誤である。若溪漁隱叢話に「退之神仙を見るも、亦た伏せず、云ふ、我事屈曲自世間、安能從此巢神山」と。謝自然を賦しては、すなはち曰く、童顏無所識と。誰氏子を作つては、すなはち曰く、不從而誅未晩耳と。惟だ華山女の詩は、頗る假借す、知らず、何を以て、之を得たる」とあるが、朱子は之を賦し「或は怪む、公、佛老を排斥して餘力を遺さず、しかも、華山の女に於て、獨り假借すること此の如しと。非なり。これ正に、その妻色を衒ひ、仙靈を假り、以て衆を惑はすを讀り、又時君察せず、失行の婦人をして宮禁に入るを得せしむるを讀るのみ、その卒章、豪家少年、雲鶴霧閣、翠幔金屏、青鳥丁寧等の語を觀るに、褻慢甚し、豈に真に仙神を以て之を處せむや」と云つて、無論この方が正しい。それから、この篇中、白咽紅頰長眉青の七字は、巧に女道士の風度を寫し出し、さながら畫のやうであるといふので、ひかしから、特に有名である。許彦周詩話に「詩人、人物態度を寫し、移易すべからざるに至る、元微之の李娃行に云ふ、鬢髮峨峨高一尺、門前立地見春風」と。これ定めて娟婦たり。退之、華山女の詩に云ふ、洗妝拭面著冠帽、白咽紅頰長眉青、と。これ定めて是れ女道士。東坡芙蓉城の詩を作り、亦た長眉青の三字を用ひて云ふ、中有二人長眉青、烟如微雲淡疎星、と。便ち神仙の態度あり」といひ、何孟春は「退之、華山女を詠するに、白咽紅頰長眉青、澄觀を送るに伏犀抑腦高頰權、石鼎聯句の序に白鬚黑面、長頭而高結喉、李愿の盤谷に歸るの序に、曲眉豐頰、清聲而便體、秀外而思中、鬚輕髭、曳三長袖、粉白黛綠、等の語、皆寫眞の文字なり」と云つて居る。これを觀れば、韓愈の詩文に於ける、縝密の注意を以て、その語句を鍊り、専ら新警を旨としたことが分かる。

讀皇甫湜公安園池詩書其後

皇甫湜、公安園池の詩を讀み、其後に書す

晉人目二子。其猶吹一映。晉人、二子を目す、其れ猶ほ一映を吹くがごとし。

區區自其下。願肯挂牙舌。區區として其下よりせば、願ふるに、肯て牙舌に挂らむや、

春秋書王法。不誅其人身。春秋は、王法を書す、その人の身を誅せず。

爾雅注蟲魚。定非磊落人。爾雅は、蟲魚を注す、定めて磊落の人に非ず。

湜也困公安不自閒窮年。

湜や公安に困み、自ら閒に年を窮めず。

枉智思掎摭。

智を枉げて、掎摭せむことを思ふ。

糞壤汗穢豈有臧。

糞壤汗穢豈に臧きことあらむや。

誠不如兩忘但以一架量。

誠に如かず、兩つながら忘れ、但だ一架を以て量るには。

我有一池水蒲葦生其間。

我一池の水あり、蒲葦、その間に生ず。

蟲魚沸相嚼日夜不得閒。

蟲魚沸いて、相嚼み、日夜、閒なるを得ず。

我初往觀之其後益不觀。

我、初め往いて之を観る、その後、益す観ず。

觀之亂我意不如不觀完。

これを觀れば、我が意を亂る、如かず、観ずして完きには。

用將濟諸人捨得業孔顏。

用ふるときは將に諸人を濟はむとす、捨るときは孔顏を

百年詎幾時君子不可閒。

百年詎ぞ幾時ぞ、君子閒なるべからず。業とするを得む。

【字解】(一) 晉人曰二子。莊子曰、劍首を吹くものは映するのみ、鏡は人の響むるところなり、鏡身も鏡吾人の前に這ふは譬へば猶ほ一映するがごときなり」とあり、その注に「觀吾人は業の賢者、姓は鄭、字は吾人」とある。この吾人も、無論、鏡吾人で、二子は即ち鏡身。一映の映は息を吹きかける。(二) 爾雅。邪壤の注爾雅の序に「爾雅は諸國の指歸を導する所以」とあり。(三) 公安。縣名、江陵府に屬し、後世の湖廣通州府。(四) 持世。佛法に「持は攝引なり、世は捨ふなり」とある。(五) 糞壤。

汗穢。この處に脱誤があるといふので、この詳は、餘論の項中に述べることにし、ここでは、文字通りにして解釋することにする。  
【六】孔顔。孔子と顔回。

【題義】これは、皇甫湜が、公安縣に赴任し、その地の或る園地に遊んで詩を作つて、それを韓愈に寄せたから、韓愈は、これを讀んで、その後、に題する爲に作つたので、大體の旨意は、こんな詩を作る様な事では駄目だ、それよりも、せつせと勉強して、孔顔の道を窮めねばならぬ、苟くも、儒學に專なる以上は、かかる閒文字を弄する暇は無い筈だといふのである。そして、皇甫湜の原詩は、傳はらない。元來、湜の詩に於ける、もとより觀るべきものなく、陸渾山火の詩でさへも、後世に傳はらぬ位で、どうせ、この詩も、格別の者では無かつたらうといふことである。蔣注に「公の集に、湜の陸渾山火に和し、及び公安園池詩の後に書するあり。今、持正集を考ふるに、二詩皆亡し。その他の詩も、亦た多く見えず。これ豈に偶然逸するか、抑も以て世に傳ふるに足らざるか。洪景廬曰く、皇甫湜、李翱、皆、韓門の弟子なりと雖も、しかも、詩を作る能はず。涪溪の石間に、湜が元結の爲に作れる一詩あり、乃ち唐人の文章を論ずるのみ、風格殊に采るべきなきなり。劉放曰く、持正詩を能くせず、糞壤の間より掎摭すとは、公、これを讀る所以なりと、豈に或は然るか、湜、かつて陸渾尉となり、仕へて工部郎中に至り、東都に分司たり、留守裴度、辟して判官となす。この詩、當に陸渾尉の後、郎中と爲るの前になつて作れるなるべし」とある。

【詩意】戴首人は、堯舜二子を目すること、尋常の人に同じく、格別偉いとは思はず、いくら、堯舜を譽め立てて話しても、息を吹きかけた位に思つて居る。元來、區區として、堯舜の下に甘んずる様では、到底詰まらぬ人で、齒牙に挂くるにも足らず、そこへ行くと、戴首人は、一寸奇矯の様ではあるが、一面からいへば、尤も至極なことである。春秋は、孔子が王法に本づいて褒貶したもので、何も其人の身を誅するが爲にしたのではなく、飽くまで、道に叶つたもので、儒教の正義は、まさしく此に在る。爾雅の如きは、ほんの字書で、蟲魚の名を注したるに過ぎず、そんなことをして居るのは、決して、磊落の人ではない。今皇甫湜の作つた圓池の詩を見ると、取りも直さず、爾雅の蟲魚を注したるが如く、春秋の王法には、全然關係なく、要するに、取るに足らぬ業くれである。皇甫湜は、小吏として、公安の地に困み、のんきに年を窮めることが出来ず、平生大に弱つて居る。若し、智を枉げて、何か引き上げ、拾ひ出して、一仕事やらかさうと思へば、宜しく其物を擇ぶべく、糞穢汗穢とも稱すべき區區の圓池などが何に成らう。それよりも、圓池などは、兩つながら忘れ去り、それは尋常一様の物として見るが善いので、その手を著くべき範圍は、外に幾らもある。元來、圓池などは瑣瑣たるもので、全く話にも成らない。わが家にも、一つ池があつて、蒲葦の類が其間に叢生し、そして、蟲魚が自然と其内に湧いて、互に噛み合ひ、日夜閉なるを得ざる位。われも初めは往いて之を觀て、いささか打興じたが、その後、次第に之を觀ぬやうに成つた。何となれば、これを見る

と、蟲魚の相嚼む状態から、機様の事を聯想するからで、それよりも、圓池などを觀ずして、心を打澄まして居た方が、はるかに善い。苟くも、男兒たるものは、志を立つること、宜しく大なるべく、幸にして世に用ひられるれば、治國平天下の素願を遂げて、普ねく諸人を救済し、不幸にして世に用ひられぬ時は、退いて孔丘・顔回の事を行ひ、儒を業として、大道を不朽に傳へるが宜しい。人生は百年といふが、まことに短いもので、ちぎりに過ぎて仕舞ふから、君子たるものは、平生せつせと勉強して、閒暇などは無かるべき筈で、さも樂樂と圓池の詩などを作つて居る様なものは、吾が徒に非ずといひたい位、皇甫湜たるもの、宜しく反省すべきである。

【餘論】湜也困公安、不自閉窮年、枉智思、持糞穢汗穢豈有威の四句は、朱子が「この詩、多く曉るべからず、當に闕くべし」といつた通り、どうしても誤脱があるので、或は不自閉其閒、窮年枉智思、持糞穢汗穢間に、汗穢豈有威となし、或は糞穢の七字を糞穢多汗穢、豈必有否威に作り、或は其末句を豈有威不威に作つたりして居る。そして、何義門は、不自閉其閒、題下に二首の持糞穢汗穢間に、糞穢多汗穢、豈有威不威とするのが一番善いといつた。又一本には、題下に二首の兩字があつて、胡元任は「我有二池水の下、當に別篇となすべし」といひ、蔣之翘も「恐らくは、或は然らむ」といつた。但し、前にも一寸言つた通り、ここでは、通行本の儘、且つ一首として、上の如く解釋した。それから、黃氏日抄に「皇甫湜の詩後に書す、意を圓池に留むるは、猶ほ爾雅の蟲

魚を注するがごとし、狂げて持捕せむことを思はば、常に孔顔を業とすべし。愚、謂へらく、これ世俗の失を鑑すべし。蓋し、閩池の適は、物を玩ぶに非ざるなし、仲舒、心を大業に潛め、三年閩を窺はず、知る、常に務むべきところに汲汲たるものは、外誘、期せずして絶ゆるなり」といひ、一應尤もである。

路傍塚

路傍の塚

堆堆路傍塚。一雙復一隻。

堆堆たり路傍の塚、一雙復た一隻。

迎我出秦關。送我入楚澤。

我を迎へて秦關を出で、我を送つて楚澤に入らしむ。

千以高山遮。萬以遠水隔。

千は高山を以て遮られ、萬は遠水を以て隔つ。

吾君勤聽治。照與日月敵。

吾が君、勤めて治を聽く、照は日月と敵す。

臣愚幸可哀。臣罪庶庶可釋。

臣の愚、幸に哀むべく、臣の罪、庶はくは、釋すべし。

何當迎送歸。緣路高歷歷。

何ぞ當に歸るを迎送し、路に緣つて高く歴歷たらむ。

【字解】(一) 塚、里塚、即ち我が邦の一里塚の標なるもので、説文に「塚は、土を封じて墓となし、以て里を記するなり、十里に塚一、五里に雙塚」とあるを見れば、五里目には一つ、十里目に二つ建てられて里程を標して居るのである。(二) 秦關、長安附近、

今の陝西會は、古しへの秦の地で、これは、多分、武關を指したのであらう。武關は、即ち秦楚の分界である。(三) 楚澤、澤は平地。江の南北兩岸は、古しへの楚で、その地勢平衍なるが故に云ふ。(四) 聽治、天下の政を聽く。(五) 照與日月敵、帝は日月と同じく兩界までも照らすといふ義。(六) 臣罪、前に楚戰中の時傳にも記して置いたが、これは、韓愈が佛骨表を上つて、罪を覆たことで、唐帝に「憲宗、使者を遣し、風潮に往き、佛骨を迎へて禁中に入れしむ。愈、表を上つて極諫す。帝、大に怒り、持して宰相に示し、將に抵すに死を以てせむとす。張度、崔羆曰く、愈の言、肝膽をり、これを罪すること誠に宜し。然れども、内、至愚を懐くものに非ざれば、安んぞ能く此に及ばむ。願はくは、少しく寛假し、以て諫諍を來たせ」と。乃ち潮州刺史に貶す」とある。(七) 緣路、街道に傍ふ。

【題義】この詩は、元和十四年の春、佛骨表を上つて罪を獲、潮州に左遷された其途中の作である。韓愈の長安を發したのは、正月癸巳の日で、雪中に藍關を過ぎて姪孫韓湘に一律を示し、それより、商洛を経て、武關を過ぎ、仍つて此詩を作つたので、以下數首は、すべて、その後の作である。

【詩意】路傍の一里塚は、堆く土を盛り上げてあつて、十里に一雙、五里に一雙といふ様に、引き續いて居る。今次わが旅行を爲す際にも、一里塚は、我を迎へて秦關を出でしめ、又我を送つて楚澤に入らしめた、顧みれば、千萬個の一里塚は、高山遠水を以て遮り隔てられ、ここからは、一つも見えないが、わが行、愈よ遙になつたことは、云ふまでもない。今しも、主上は勵精して、政務を聞こし召され、帝徳は、日月と同じく、行き渡らぬ限もない位。流石に臣の愚を、氣の毒に思召され、臣の罪過は、どうやら御赦免になることであらう。ここから、潮州に行くものの、あはれ願はくは、遠



からず長安に歸ることとなり、此等の一里塚に送迎されて、再び此あたりを旅し、街道に傍うて、その歴史として高く聳えて居るのを見たいものである。

【餘論】趙師北は千以高山一遮の二句を擧げ、韓愈が創出した句法の中の最も佳なるものとした。全篇の旨意は、路城に因つて興を起し、他日北歸の日あらむことを庶幾したのである。

食曲河驛

曲河驛に食す

晨及曲河驛。悽然自傷情。晨に曲河驛に及び、悽然として自ら情を傷ましむ。

羣鳥巢庭樹。乳雀飛簷楹。羣鳥は庭樹に巢ひ、乳雀は簷楹に飛ぶ、

而我抱重罪。子子萬里程。而かも、我、重罪を抱き、子子たり萬里の程。

親戚頓乖角。圖史棄縱橫。親戚、頓に乖角、圖史、棄てて縱橫。

下負明義重。上孤朝命榮。下は、明義の重きに負き、上は、朝命の榮に孤く。

殺身諒無補。何用答生成。身を殺すも、諒に補ふなくむば、何を用つて生成に答へむ。

【字解】(一) 曲河驛 風儀の項に説明して置く。(二) 簷楹 軒楹の垂木。(三) 子子 孤立して伴なき貌。(四) 乖角 角は兩と通ず、垂き隔くる。(五) 明義重 杜荀の詩に於公負明義とある、交遊間の文意。(六) 諒 まことに。(七) 生成 天地に同じ。

【題義】曲河驛は、蔣注に「驛は商鄧の間に在り、今の河南の治に在り、公の潮州に之く、藍田關より商陵に入り、將に鄧州を過ぎむとして作る」とあつて、即ち前詩に次いで作つたのである。

【詩意】まだ夜の明けぬ内に出發し、早朝に曲河驛に差しかかり、四邊の風景を見ると、悽然として、自ら我が心情を傷ましめた。羣がる鳥は、驛の人家の庭樹に巢ひ、雛を哺む雀は、軒端を飛び廻つて居る。かくの如く、鳥や雀でさへ、各その依る處があるのに、われ獨り重罪を抱き、子子として一身に伴もなく、これより、萬里の旅程を経て、潮州に赴かねばならぬ。一家の眷屬は、俄に分隔し、今まで日夕相親んで居た書物も、散らした儘、棄てて置いて來た。おもへば、下は、朋友間の交誼の重きに負き、上は、折角相當の官職に拜された朝命の辱さにも違ひ、まことに不心得至極、上にも、下にも、兩つながら相濟まぬ次第であるが、それには、聊か理由があるので、われは、天地の化育に報ゆる爲め、この身を殺しても、刻下の弊事を救濟し、いささかなりとも、世の神補と成らうとしたので、耿耿たる此心、まことに知る人ぞ知るである。

【餘論】結二句は、自己の抱負を述べたので、例の藍關の七律、欲爲三聖明一除弊事の一句と結局同じ意味である。

過南陽

南陽を過ぐ

南陽郭門外、桑下麥青青。

南陽郭門の外、桑下麥青青。

行子去未已、春鳩鳴不停。

行子、去つて未だ已まず、春鳩、鳴いて停まらず。

秦商邈既遠、湖海浩將經。

秦商、邈として既に遠く、湖海、浩として將に經むとす。

孰忍生以感、吾其寄餘齡。

孰か、忍んで生きて以て感へむ、吾、其れ餘齡を寄せむ。

【字解】(一) 南陽、紹義の項に説明して置く。(二) 行子、行人、游子と同じ、自ら稱して言ふ。(三) 秦商、秦は古しへの國中、即ち長安。商は商山で、武關の近傍。(四) 湖海、南方の楚地を指す。

【題義】南陽は、唐書地理志に「鄧州南陽縣、山南道に屬す」とある。今の南陽府で、河南に屬して居る。これは、前詩の後を承け、南陽を通過した時の作である。

【詩意】南陽を過ぎて、郭門の外に出づると、桑の木の下には、麥が青青と延びて居る。わが行忽忽、去つて止まらず、そして、鳩の聲が長閑けく、絶えず聞こえる。頭を回らせば、秦關商山は、邈として、すでに遠く隔り、これより先は、湖海浩渺たる間を過ぎて行かねばならぬ。いつそ一思ひに死ねば、却つて宜しく、生きて居て、絶えず心に憂戚を懐くといふことは、誰にしても、忍び兼ねることであるが、われは、猶ほ爲すあるの身なるに因り、餘齡を其憂戚の中に寄せる覺悟で、されば

こそ、從容として、はるかに、潮州の謫地にも向ふ次第である。

【餘論】この詩は、中間四句、對偶を以て成り、聲律も大體合拍であるが、なほ聊か平仄の合はぬ處があつて、いはば半古半律の一體である。

瀧吏

瀧吏

南行逾六旬、始下昌樂瀧。

南行、六旬を逾え、始めて、昌樂の瀧を下る。

險惡不可狀、船石相春撞。

險惡狀すべからず、船石、相春撞す。

往問瀧頭吏、潮州尙幾里。

往いて、瀧頭の吏に問ふ。潮州、尙は幾里。

行當何時到、土風復何似。

行いて、當に何時にか到るべき、土風復た何似。

瀧吏垂手笑、官何問之愚。

瀧吏、手を垂れて笑ふ、官、何ぞ問ふことの愚なるや。

譬官居京邑、何由知東吳。

譬へば、官の京邑に居るは、何に由つてか、東吳を知らむ。

東吳遊宦鄉、官知自有由。

東吳は遊宦の郷、官の知る、自ら由あり。

潮州底處所、有罪乃竄流。

潮州は底の處の所ぞ、罪あるものは乃ち竄流せらる。

儂幸無負犯。何由到而知。儂幸にして自犯なし、何に由つて、到つて知らむ。「ひと。官今行自到。那遽妄問爲。官、今行いて自ら到らむ、那遽に妄に問ふことを爲さ」不虞卒見困。汗出愧且駭。虞らざりき、卒に困められむとは、汗出でて愧ぢ且つ駭く。吏曰聊戲官。儂嘗使往罷。吏曰く、聊か官に戯る、儂、かつて使して往いて罷む。嶺南大抵同。官去道苦遠。嶺南大抵同じ、官の去る、道苦だ遠なり。下此三千里。有州始名潮。ここを下ること三千里、州あり、始めて潮と名づく。惡溪瘴毒聚。雷電常洶洶。惡溪、瘴毒來り、雷電、常に洶洶たり。鱷魚大於船。牙眼怖殺儂。鱷魚は、船より大に、牙眼、儂を怖殺す。州南數十里。有海無天地。州南數十里、海あつて天地なし。颶風有時作。掀簸眞差事。颶風、時あつて作り、掀簸眞に差事。聖人於天下。於物無不容。聖人の天下に於ける、物に於て容れざるなし。比聞此州囚。亦有生還儂。比ら聞く、此州の囚、亦た生還の儂ありと。官無嫌此州。固罪人所徙。官、この州を嫌ふ無かれ、固より、罪人の徙さるところ。

官當明時來。事不待說委。官、明時に當つて來る、事、説くを待たずして委なり。官不自謹慎。宜卽引分往。官、自ら謹慎せざるも、宜しく、即ち分を引いて往くべし。胡爲此水邊。神色久懺惶。胡すれぞ、此水邊、神色久しく懺惶たる。瓶大餅甕小。所任自有宜。瓶は大にして餅甕は小なり、任するところ、自ら宜し。官何不自量。滿溢以取斯。官、何ぞ自ら量らず、滿溢以て斯を取るや。「きあり。工農雖小人。事業各有守。工農は小人と雖も、事業、各守あり。不知官在朝。有益國家不。知らず、官、朝に在つて、國家を益する有りや不や。得無貳其間。不武亦不文。其間に貳として、武ならず、亦た文ならず。仁義飾其躬。巧姦敗羣倫。仁義、その躬を飾り、巧姦、羣倫を敗るなきを得むやと。叩頭謝吏言。始慚今更羞。頭を叩いて吏に謝して言ふ、始め慚むて今更に羞づ。歷官二十餘。國恩竝未酬。官を歴ること二十餘、國恩竝びに未だ酬いず。凡吏之所訶。嗟實頗有之。凡そ吏の訶するところ、嗟、實に頗る之あり。不卽金木誅。敢不識恩私。金木の誅に卽かすとも、敢て恩私を識らざらむや。

潮州雖云遠、雖惡不可過、潮州遠しと云ふと雖も、惡、過ぐべからずと雖も、於身實已多、敢不持自賀、身に於て實に已に多し、敢て持して自ら賀せざらむや。

【字解】(一) 遠、越える。(二) 昌黎、許注に「昌黎は漢の名、水滸波にして瀾と爲る。家の額叔云ふ、李君留ふ、樂昌五里に昌山あり、樂石あり、瀾は嶺上五里に在り、縣を樂昌と名づけ、瀾を昌黎と名づくるなり、今廣東韶州に在り」と記し、水滸波に「瀾水又南して峽を出づ、これを瀾口といふ、又南して曲江縣東を過す」とある。瀾といふ字の本義は、急流であつて、これを瀾と同じにするのは、邦人の誤用である。(三) 春、互に衝突する。(四) 瀾、瀾が險惡で、行舟の難に罹るものが多いから、時に吏を置いて、これを警戒して居るものと見える。(五) 潮州、唐書地理志に「潮州南臨郡、嶺南道に屬す」とある。(六) 土風、土地の風俗。(七) 何似、如何に同じ。(八) 飛手、手を舉げるといへば、會釋することであるが、これは、反對に、雖も爲さず、只だ笑つて居るといふ義。東坡の詩に瀾吏無官只笑僕とあるは、即ち之を轉用したのである。(九) 京邑、長安附近。(一〇) 游官、遊歷同義、極めて暇な官に任じて赴任する處。(一一) 有由、由は理由。(一二) 負犯、法に負き罪を犯すこと。(一三) 不虞、測らざりき。(一四) 卒見、不意に道り込められる。(一五) 僕、吳人の自稱、吾に同じ。(一六) 瘴毒、瘴は瘴熱の氣。(一七) 鯨魚、永州記に「鯨魚、大なるもの、凡そ數丈、善く人を食ふ、一生百卵、成形するに及びては、蛇となり、龜となり、蛟となるものあり、甚だ難」とあり、又韓集中に祭鯨魚又あることは、雖でも知つて居ることである。(一八) 有海無天地、文選の海賦に「浮天無岸とあるに本づく。一壑大海だけで、天地もないといふ義。許注に「史記に、崑崙斗して海に入ると書す。斗は起なり。今、地理を以て之を考ふるに、此は斗して海に入ると、文雖も同じからず」とあるが、そんな事は、嘗て論ずるに及ばず、ここでは、只だ海の大さなことを言つたものと見れば宜しい。(一九) 風、大暴風。(二〇) 叢、尋常ならざること。(二一) 生還、この僕は人といふ義。(二二) 宜即引分往、おのが分限を考へて往くが善い、即ち此語の身であることを忘れるなといふ義。(二三) 懼、憂、劉禹の九歌に「耳聞喉而懼驚とあつて、王逸の注に「憂恐、依歸するところなきなり」とある、即ち失意の義。(二四) 瀾、大瀾、小瀾

雄の方言に「瀾柱の間、これを瀾といふ、周禮の間、これを瀾といふ」とあり、郭璞の說に「今、江東通じて大瀾を名づけて瀾と爲し、亦た瀾を呼んで瀾と爲す」とある。(二五) 風、其間、方巖卿の說に「國君二十六篇、大瀾、仁義禮樂を以て風言となす、曰く、六風俗を成し、兵、必ず大に敗れむ」とあり、許注に「洪慶善、阮瞻の語を引く、亦た非なり」とある。阮瞻の語とは、大人先生傳に、人の此生に在るは風が標中に寄生して居ると同じだといつたことを指す。(二六) 始、今、始、漸は心に一寸愧ぢる、漸はやがて顔色に顯はれることで、二字、自ら軽重の別がある。(二七) 所、阿は叱る、譴責する。(二八) 金木、莊子の列禦寇に「外利を爲すものは、金と木となり」とあつて、郭象注に「金は刀鋸斧鉞を謂ひ、木は繩索桎梏を謂ふ」とある。(二九) 惡、不可過、許注に「惡、一に惟今に作る、その義、蓋や長ぜり、蓋し、再び上句瀾瀾を疊々、又下文に接して言ふなり、二字、或は又惟思に作る、亦た過すべしと雖も、然れども、下文と相應せず」とある。但し、ここでは、姑らく文字通りに解釋して置く。

【題義】この詩も、元和十四年、潮州に赴く途中の作に係り、昌黎瀾の守吏との問答に託して、おのが身世の感を述べたのである。

【詩意】長安を出て、南行すること、すでに六十日に超え、今しも、昌黎の急流を下らむとして居る。その急流の險惡なることは、到底名狀すべからず、河の中には、亂石争ひ峙ち、それが船と互に衝突する。そこで、瀾頭の守吏に向ひ、潮州は、この先、まだ何里程あつて、これから行けば、何日頃到着するか、又潮州の土地の風俗は如何といつて問うて見た。すると、瀾吏は、手を垂れた儘、碌碌挨拶もせず、一笑して扱ていふには、貴官の間は、折角ながら、實に馬鹿げて居る。たとへば、長安附近に在職して居る役人は、東吳の事など知る由なきと同じく、ここに居るものは、潮州の事など、知

らう筈がない。しかし、東吳は、役人の呑氣な遊び場所と稱せられて居る位だから、役人どもが色色と傳聞して、自然その地の事を知つて居るのも、尤もである。潮州は、如何なる處かといへば、罪あるものの流竄される處で、ただの人は、滅多に行かない。私は、幸にして、法に負き罪を犯したことがないから、どうして、そんな處へ参りませう。貴官は、これから、御自身、その地に行かれるのであるから、ここで遷て安りに問ふにも及ばぬことであるといつた。料らざりき、われは、ここに、區區たる瀟吏の爲に、一本参らされたので、冷汗が出て、心に愧ぢ且つ駭いた。すると、瀟吏も、流石に氣の毒と思つたか、改めて云ふには、前言は、聊か貴官に戯れたので、どうか氣に掛けないで下さい。實は、私も、或る時、使して、その潮州に参つたことも御座りまするが、嶺南の風土は、大抵、どこでも同一であります。貴官は、ここから御出になると、まだ道程が大分遠慮であつて、三千里程で、やつと、潮州に参られます。抑も、潮州の地たるや、險惡なる溪谷には、毒熱の氣が鬱積し、雷電は、常にけたたましきばかり、水中には鱷魚が居て、その體は船より大きく、牙や眼の怖ろしき、私は、覺えず、ぞつとした位。それから、州南數十里の外は大海で、渺渺として畔岸を知らず、さながら、天地なきが如く、その間には、時時大暴風が起り、あらゆる物を巻き上げて、他には類稀れな位。今しも、聖人が天下に君臨せられ、物として容れられざるはなく、この潮州に遣られたものは、いづれ罪過ある者と決つて居るが、この頃は、罪を赦され、北方に生きて還る人も往往にして有

るといふ話。貴官は、潮州を嫌つてはならぬ。ここは、もとより罪人の徙される處で、貴官も、この清時に際して、その地に行くといふ上は、如何なる事に因つて赴任するか、そんな事は、説くを待たずして、自然明白である。されば、貴官は、たとひ、自ら謹慎せぬまでも、おのが分限を考へて往かれたら善いので、如何なれば、この水邊に立つて、ほんやりした顔色をして居られるか、さりとて、諦めの餘り悪いことではないか。ひとしく水を盛る器でも、壺は大きく、壺は小さく、それで各々の宜しきところがある。然るに、貴官は、如何なれば、自己の身の程を量らず、強ひて、滿溢を取らうとして、こんなことに成つたのであるか。工農は、小人であるが、その事業は、各々分擔して守るところがあつて、それぞれ無くてはならぬものに成つて居る。貴官は、朝廷に在つて、果して國家に益する様な事を爲したか、それとも、六風のひととして朝廷に立ち交り、武もなく、さうかといつて文もなく、唯だ仁義を以て其身を飾り、そして、内實は、御上手を言ひ、惡だくみを廻らして、多くの同類を傷ふ様なことをした爲に、今次、貶謫の憂き目を見たのではないかと云つた。そこで、われは、頭を下げて瀟吏に謝し、汝の言を聞いて、始めは心に怒ちたが、だんだん話を聞くと、愈よ以て羞ぢ入つて穴にでも入りたい位。われは、在官凡そ二十餘年、しかも、國恩未だ酬いず、今汝の讒め立てた處は、ひしひしと思ひ當つて、實際さういふ事は、餘程有つたので、刀鋸斧鉞捶楚桎梏の誅に就かずとも、朝廷より特別に受けた御恩の程は分かつて居るから、空おそろしい様な氣がする。今、潮州

は、たとひ遠隔の地であるにしろ、又土地がらが悪くて、到底行かれぬ様な處であるにしろ、われに取つては、まことに過分の事で、天恩は身に餘る位、これを持って、自ら賀するのが至當で、われは、これより、甘んじて、その地に赴く覺悟である。

【餘論】朱竹垞は「遠地の險惡を道はむと欲し、却つて、問答を設爲し、又吳音野語を借り、以て其真切の意を致す。語調全く古樂府を祖として來る。大抵、これ等の語を作す、専ら才力を以て運す、一毫雕琢、藻繪俱に使ひ得ず」といひ、何義門は「この篇、朴拙に似たりと雖も、然れども、用筆極めて精妙、一平筆順筆なし」といひ、「自ら詠へ、兼ねて後命を望む、亦た體を得たり」といひ、乾隆帝は「君子、恐懼を以て修省すとは、瀧吏篇の謂なり。道ふ莫れ、英雄氣短し」といひ、沈德潛は「氣味音節、これを漢人の樂府に得たり、韓詩中、推して別調と爲す。吏言を借り、以て規諷す、主意此に在り」といつた。大體、瀧吏が初めには潮州を知らぬといひ、次に前のは戲答であつたといひ、以て戲愕を發したのは、長篇轉折の妙處である。惡溪瘴毒聚より以下、潮州の風土を敘した處は、語語質實、絶えて及び易からず、これを學ばむとするも、手を下す處がない。なほ瀧吏が宛ら相識らずして猜度する語は、太だ妙であるし、作者が其人の語を借りて己を罪するは、眞に己を罪するもので、愈よ劃切である。

贈別元十八協律 六首

元十八協律を贈別す 六首

知識久去眼、吾行其既遠。

知識久しく眼を去り、吾が行、其れ既に遠し。

曹曹莫警省、默默但寢飯。

曹曹として、警省するなく、默默として、但だ寢飯す。

子兮何爲者、冠珮立憲憲。

子や何する者ぞ、冠珮立つて憲憲。

何氏之從學、蘭蕙已滿曉。

何の氏にか從つて學べる、蘭蕙、すでに曉に滿つ。

於何翫其光、以至歲向晚。

ここに何ぞ其光を翫んで、以て歳の晩に向ふに至れるや。

治惟尙和同、無俟於譽譽。

治は惟だ和同を尙ふ、譽譽に俟つなし。

或師絶學賢、不以藝自輓。

或は絶學の賢を師とし、藝を以て自ら輓かす。

子兮獨如何、能自媚婉婉。

子や獨り如何、能く自ら媚びて婉婉たり。

金石出聲音、宮室發關鍵。

金石、聲音を出し、宮室、關鍵を發く。

何人識章甫、而知駮蹄踠。

何人が章甫を識らむ、しかも、駮蹄の踠くを知る。

惜乎吾無居、不得留息偃。

惜いかな、吾に居なく、留めて息偃せしむるを得ず。

臨當背面時裁詩示縫綉 背面の時に當るに臨み、詩を裁して縫綉を示す。

【字解】(一) 知微 相知れる人人。(二) 香香 暗き貌。(三) 曾曾 書注に「史記鄧通王傳、かつて曾者なきを爲す。蘇林謂ふ、曾蘇することなしと爲す、香蘇するところなきなりと。その意、喚すべからざるに似たり。而して、顔注、又以爲へらく、曾財を省せずと。亦た非なり。按するに、禮記、重器を曾はす、金玉成器を曾ること母れ。注、曾云ふ、思ふなりと。これを評にするに、蓋し曾を以て思慮計度の意と爲すといふ」とある。(四) 富富 詩經に「爾風令德」とあるのを禮記には「富富に作り、又詩に「無然富富」とあつて、毛傳に「猶ほ欣欣のごときなり」とある。(五) 商商 楚辭に「予既滋蘭之九畹」とある。(六) 和同 老子に「其光を和らげ、其塵を同じうす」とある。(七) 警警 楚辭に「余固知三警警之爲忠」とあつて、王逸の注に「忠貞」とある。(八) 自曉 周禮に「聚車組輓とあつて、鄭氏注に「輓は官路を謂ふなり、輓の官猶なり、容貌を謂ふなり」とある。(九) 純純 禮記の内則に「純純」とある。(十) 金石出聲音 莊子に「曾子、甯に居る、履履表なく、徒を見いて商頌を歌ふ、聲、天地に滿ち、金石より出づるが若し」とある。(十一) 關關 老子に「善く閉づるものは、關關なくして開くべからず」とある。(十二) 章市 莊子に「宋人、章市を賣して諸婦に適く、婦人斷髮文身、これを用ふるところなし」とあつて、司馬彪の注に「章市は冠の名なり」とある。(十三) 駘駘 駘馬の語が原曲する。文選東都賦に「駘駘三輪足」とあつて、李善注に「駘は駘なり」とあり、又杜甫の高都驪馬行に「駘駘高知」駘駘とある。(十四) 息偃 休息する。(十五) 背面 韓愈の祭三龜員外文にも「解手背背、遂十一年とある、即ち分居すること。(十六) 縫綉 縫と同じ、縫さざる情思。

【題義】元十八は、如何なる經歷の人か分らない。書注に「元十八、詩に于て其名を見ず。柳子厚の集に送元十八山人南遊一序あり、亦た其名を著はさず。樊澤之謂ふ、元十八集處は、樂天集大林寺に遊水序に見ゆ」とある。しかし、この元十八は協律郎に官して居て、山人ではない處を見ると、はじめ無官で、後に任官したのか、それとも、又別人であるが、その邊の事は、今から考へることが出来ない。この詩は、韓愈が潮州に赴く途中、元十八に遇ひ、やがて別るるに際し、賦して贈つたのである。

【詩意】平生相知れる人人は、すでに眼中より消え去り、わが旅も、すでに遠きに至り、その間、心は暗くぼんやりして、思念省察を爲すでもなく、黙黙として、唯だ眠食を貪るばかりである。君は、如何なる人なれば、冠佩を著け、欣欣然として居られるか。君は、元と誰に就いて學ばれたか知らぬが、關意すでに腕に滿ち、天晴、修養を積まれ、光彩自然と外に發越し、歳の將に暮れむとする荒寒の天地に立つて居る如く優れて見える。抑も、治を爲すには、和光同塵を旨とすべく、蹇蹇たる忠貞を上へに見せつける様では、宜しくない。或は、今の世に行はれぬ教學を身に體した様な大賢を師とし、専ら内を治め、心を練つて居られるらしいが、區區たる藝能を以て自ら推挽せぬが善い。君は、獨り如何なれば、言貌ともに優しく、ことさらに異を立てず、世間並にして、偉らく見せない様に出來るのか。その修養の程、愈よ床かしい。されば、時あつて歌ふとき、その聲清越、金石より出づるが如くであるが、宮室は唯だ關鍵に因つて開かれると同じく、その中に儲へたものを滅多に人の前に廣げることがない。されば、何人も、章市の冠の貴きを知らず、矢張役にも立たぬものとして格別重

要視しないが、流石に、駿馬が「たび馳すれば、その蹄は屈曲して高く擧がるが如く、才能の十分あることは、世に認められて居る。惜むらくは、われは今旅中の身で、おのが住居ともいふものもないから、君を留めて、ゆつくり休息せしめ、そして教を受けることも出来ない。そこで、別を爲し、面を背けむとするに際し、特に詩を作つて君に贈り、以てわが繼續の情思を致す次第である。

【餘論】この一首は、元山人の人物を寫し出して、敬慕の念を寄せたので、即ち詩を贈る所以の意を述べたのである。何義門は「頗る陳思老杜の風あり」といつた。

英英桂林伯實惟文武特 英英たり桂林の伯、實に惟れ文武の特。

遠勞從事賢來弔逐臣色 遠く從事の賢を勞し、來つて、逐臣の色を弔ふ。

南裔多山海道里屢紆直 南裔、山海多く、道里、屢ば紆直。

風波無程期所憂動不測 風波、程期なく、憂ふところは、動もすれば測られず。

子行誠艱難我去未窮極 子が行、誠に艱難、我、去つて未だ窮極せず。

臨別且何言有淚不可拭 別に臨んで、且つ何をか言はむ、涙あつて拭ふべからず。

【字解】(一) 英英桂林伯 英英は、すぐれた眼。桂林伯は、桂管觀察使を云つたので、即ち發行立を指す。唐書に「發行立、兵を率んで法あり、軍勢を以て、累りに河東令を授かり、虜風行、桂管觀察使に徙る」とある。この人は、柳宗元とも同じく河東の出身たる故を以て、至極親密で、宗元の死後、歸葬の費を支辨したことは、韓愈の作つた柳子厚墓誌銘の末に見えて居る。(二) 文武特 詩經に「百夫之特」とあるに本づく、特に傑出したもの。(三) 從事賢 即ち元協律を指す。(四) 逐臣 韓愈自ら言ふ。(五) 南裔 南方の邊裔。(六) 紆直 曲直に同じ、縱横出入屢ば紆する、こと。(七) 未窮極 まだ行き終らぬ。

【詩意】桂管觀察使の發行立は、その人物、秀絶、文武兩道にかけては特に傑出して居る當代の偉人であるが、今次、從事の賢者たる協律郎元十八を使者として遣され、逐臣たる子の起居を伺はしめられたので、その厚意、まことに感謝に堪へぬ。南方の邊界は、海山交錯し、驛路も縱横出入、屢ば變じ、加ふるに、風波の爲に、豫め旅程を期することも出来ず、不測の兇變が起りはせぬかと、それが第一心配である。貴下が此に來られたのも、まことに御苦勞千萬であるが、われは、ここを去つて、なかなか行き盡せぬので、もう道中も厭に成つた位。ここに別を爲すに際し、何といつて申し上げることもなく、涙は頻りに流れて、拭ひ去ることも出来ない。

【餘論】これは、連作中の正意で、發行立に對する挨拶を旨としたのである。

吾友柳子厚其人藝且賢 吾が友柳子厚、その人、藝且つ賢。



吾未識子時、已覽贈子篇。吾、未だ子を識らざる時、すでに、子に贈るの篇を覽る。

寤寐想風采。於今已三年。寤寐に風采を想ふ、今に於て已に三年。

不意流竄路。旬日同食眠。意はざりき流竄の路、旬日食眠を同じうせむとは。

所聞昔已多。所得今過前。聞くところ、むかし已に多きも、得るところ、今前に過ぐ。

如何又須別。使我抱悵悵。如何か、又須らく別るべき、我をして悵悵を抱かしむ。

【字解】(一) 柳子厚、即ち宗元。(二) 贈子篇、柳子厚集に送元九八兩序といふ一篇があつて、韓愈が子厚に與へた書にも

「元生を送るの序を見る」とあり、この如も矢張りそれを指したのである。(三) 寤寐、さめても寐ても。(四) 想風采、讀書集光

傳に「天下、風采を想望す」とある。(五) 悵悵、詩經に中心悵悵とあつて、即ち悵悵の意。

【詩意】わが友の柳子厚は、多藝にして且つ賢明なる人である。吾、未だ君を識らざりしとき、君に贈れる子厚の送序を覽たことがあつたので、さめても、寐ても、君の風采を想像して、決して忘れることなく、數ふれば、今日すでに三年の久しきに及んだ。然るに、料らざりき、今次、潮州に左遷せられる路すがら、君に遇うて、旬日の間、起臥飲食を同じうせむとは。耳にしたことは、昔日、すでに可なり多かつたが、面のあたり得たところは、今日、愈よ前度にも過ぎ、ここに、君の人物が、すつかり分かつたので、まことに欽仰の念に堪へられぬ。しかし、又、是非お別れをせねばならぬといふの

で、われをして、中心悵悵、悵悵を抱かしめるのも、已むを得ぬことである。

【餘論】これは併せて柳子厚に傍及し、今昔を低徊したので、朱竹垞は「真率の意宛然、固よりはれ到り難し」といつて居る。

勢要情所重、排斥則埃塵。勢要は情の重んずるところ、排斥すれば、埃塵のごとくす。

骨肉未免然、又況四海人。骨肉も未だ然るを免れず、又況んや四海の人をや。

嶷嶷桂林伯、矯矯義勇身。嶷嶷たり桂林の伯、矯矯たり義勇の身。

生平所未識、待我逾交親。生平、未だ識らざるところ、我を待つこと、交親に逾えたり。

遺我數幅書、繼以藥物珍。我に數幅の書を遺り、繼ぐに藥物の珍を以てす。

藥物防瘴癘、書勸養形神。藥物は瘴癘を防ぎ、書は形神を養ふを勸む。

不知四罪地、豈有再起辰。知らず四罪の地、豈に再び起つの辰あらむや。

窮途致感激、肝膽還輪困。窮途、感激を致す、肝膽、還た輪困たり。

【字解】(一) 勢要、權要に同じ。權勢を得て要路に居る。(二) 四海人、尋常天下の人。(三) 嶷嶷、史記の五帝本紀に其嶷嶷

集とあつて、素隱に「徳高きなり」とある。【一】 煇煇 詩に煇煇武臣とある。【二】 生平 平生、從來。【三】 交親 交友親戚。  
【七】 棄物 棄物。【八】 瘴癘 瘴癘と瘴癘。【九】 四脚地 書經に「四脚して天下成な履す」とあつて、共工鑿兜等を脚せしことな  
いふ。ここでは捕刑の者を流す地。【一〇】 再起 再び任用される。【一一】 輪囷 漢書に「輪木の根盤、輪囷離奇」とあつて、こつ  
こつ節くれ立つて居る貌。

【詩意】 權勢あつて要路に居り、つまり、世に時めくものは、人情として、重要視されるが、一朝、  
排斥されて、その地位を失ふと、これを視ること、塵埃に異ならず、骨肉の間柄でさへ、その通りで、  
尋常天下の人に於ては、霜更の事である。されば、今次左遷の厄に遇ひし此身を誰も構つて呉れぬの  
は、この世の常態で、もとより怪むに足らぬことである。ここに、桂管觀察使たる裴行立は、その徳、  
焜焜として高く、一身に義勇を兼ね、矯矯として、人なみ優れて居られるが、從來、われとは未だ相  
識らざりしに拘はらず、われを待つこと交游親戚にも逾え、元協律といふ下役の者を態態遣はして、旅  
中の苦を勞はれ、數幅の自筆と珍らしい藥物とを贈られた。その藥は、以て毒熱瘰癧を防ぐべく、そ  
の書は、これを觀て心身を養へといつて勸めて呉れた。顧みれば、重罪の者を放流する地に追ひ遣ら  
れた位であるから、再び任用される時もなく、この窮途に當り、裴君の御厚意、骨身にしみて有り難  
く、感激の極、肝膽の輪囷として、うごめくを覺ゆるばかりである。

【餘論】 この首は、裴行立の志感を頌したので、讀者をして、その人物を想見せしめる。

「ならざるを思ふ。」

讀書患不多。思義患不明。

書を讀んでは、多からざるを思ひ、義を思つては、明か

患足己不學。既學患不行。

己を足れりとして學ばざるを思ひ、既に學んで行はざる

子今四美具。實大華亦榮。

子、今、四美具り、實大にして華も亦た榮ふ。「を思ふ。」

王官不可闕。未宜後諸生。

王官、闕くべからず、未だ宜しく諸生に後るべからず。

嗟我擯南海。無由助飛鳴。

嗟す、我が南海に擯げられ、飛鳴を助くるに由なし。

【字解】 【一】 思義 義は書中の義理。【二】 四美 上の四患を除き去りしものをいふ。【三】 王官 協律郎の職をいふ。【四】  
擯 排斥、斥逐。

【詩意】 書を讀めば、廣きに渉るを旨とすべくして、多からざるを思ふべく、書中の義理を思索しては  
明かならざるを思ふべく、おのが才藝を以て足れりとして學ばざるの弊を思ふべく、すでに學べば之  
を身に行はざるを思ふべきである。然るに、君は、書を讀むこと既に多く、義を思つて既に明かに、  
己に在るものを足らずとして愈よ學び、すでに學んで之を躬行し、四美盡く具はり、實も大きけれ  
ば、華は固より美事で、まことに此上もない事である。協律郎は、閒職とはいへ、もとより王官で、闕  
くべからざるものに相違ないが、君は其職に力を費し盡し、問學躬行の工夫に於て缺くるところあつ

て、諸生どもに後れを取る様なことが有つてはならぬ。われ若し此に居らば、十分に助言して、大道に進ませるやうにするが、如何せむ、南海の潮州に斥逐せられ、ここに愈よ別れねばならぬので、君の飛鳴するを助けることの出来ないのは、如何にも遺憾である。

【餘論】この一首は元協律の學術に就いて言ひ、更に一段の修養を積まむことを希望したのである。

寄書龍城守君驥何時秣書を龍城の守に寄す、君が驥、何時か秣はむ。

峽山逢颶風雷電助撞碎峽山、颶風に逢ひ、雷電、助けて撞碎す。

乘潮簸扶胥近岸指一髮潮に乗じて、扶胥を簸り、近岸、一髮を指す。

兩巖雖云牢木石互飛發兩巖、牢しと云ふと雖も、木石互に飛發。

屯門雖云高亦映波浪沒屯門高しと云ふと雖も、亦た波浪に映じて沒す。

余罪不足惜子生未宜忽余が罪、惜むに足らず、子が生、未だ宜しく忽にすべからず。

胡爲不忍別感謝情至骨胡すれぞ、別るるに忍びず、感謝、情、骨に至る。

【字解】(一)龍城守 唐書地理志に「柳州龍城郡」とあつて、こゝでは、柳州刺史柳宗元を指す。(二)君驥 驥は馬。(三)

何時秣 詩經に「晉林其馬」とあつて、注に「鬪ふなり」とある、即ち秣を興へて、出發の用意をする。(四)峽山 蔣注に「峽山一名は中宿峽、今の廣東廣州清遠縣に在り、崇山峻立、中江流を貫く」とある。(五)撞碎 莊子に「齊人の井、飲む者相撞つたり」とある。衝いたり、撃つたりする。(六)扶胥 地名、廣州に在る。韓愈の南海神廟碑に「廟は今の廣州治の東南、海道八十里、扶胥の口、黃木の樹に在り」と記してある。(七)屯門 山名、廣州に在る。

【詩意】一書を柳州刺史の柳君に寄せて、その起居を候し、且つ御伺をするが、君は、何時、馬に秣つて北歸の途に就かれるか、いづれ、さういふ時もあるから、心のどかに待つて居るが宜しい。抑も嶺南の地たるや、その光景、中原と異にして、驚心駭目の事が多い。峽山に於て、大暴風に遇つたが、雷電が其勢を助けて、衝いたり、撃つたりして、まことに凄まじい位。やがて潮に乗じて、扶胥の港口に入らむとすれば、扁舟は波に簸られ、近い處の汀岸は、一髮を拖いた様である。名だたる兩巖は、石質牢固なれども、その上に生えた木と石とが、互に飛發して居るし、屯門の山は高いけれども、亦た波浪に映じて、水面以下に没する様である。かくの如く、海山の險甚しく、とても人の來る處ではない。子が罪を得て、ここに左遷されたのは、固より惜むに足らざれども、ひとしく此近傍に居る君は、自重して其生を忽にしてはならぬ。如何なれば、われは、此に元協律に別るるに忍びず、そして、感謝の情が骨に染むのであらうか。

【餘論】この詩は、併せて柳宗元に寄せたので、地近けれども、相會するを得ず、因つて、千萬保重

せむことを嘲したので、結二句は、矢張、元協律との別に歸著して居る。して見ると、柳宗元に寄する書も、元協律に託したものに相違ない。なほ以上六首の總評として、顧嗣立は「六首、俱に是れ唐調、然れども、立格稍や新なり」といつて居る。

初南食貽元十八協律

初めて南食し、元十八協律に貽る

蟹實如惠文。骨眼相負行。蟹は實に惠文の如く、骨眼相負うて行く。

螺相黏爲山。百十各自生。螺は相黏して山と爲し、百十各自ら生く。

蒲魚尾如蛇。口眼不相營。蒲魚は、尾、蛇の如く、口眼相營ます。

蛤卽是蝦蟇。同實浪異名。蛤は卽ち是れ蝦蟇、實を同じうして浪りに名を異にす。

章舉馬甲柱。鬪以怪自呈。章舉と馬甲柱と、鬪はすに怪を以てして自ら呈す。

其餘數十種。莫不可歎驚。その餘數十種、歎驚すべからざるなし。

我來禦魘魅。自宜味南烹。我來つて魘魅に禦る、自ら宜しく南烹を味ふべし。

調以鹹與酸。芼以椒與橙。調するに鹹と酸とを以てし、芼するに椒と橙とを以てす。

腥臊始發越。咀呑面汗辟。腥臊、始めて發越、咀呑すれば面汗辟し。

惟蛇舊所識。實憚口眼瘳。惟だ蛇のみは、舊と識るところ、實に口眼の瘳なるを憚る。

開籠聽其去。鬱屈尙不平。籠を開いて、その去るを聽せば、鬱屈して尙ほ不平。

賣爾非我罪。不屠豈非情。爾を賣るは、我が罪に非ず、屠らざるは、豈に情に非ずや。

不祈靈珠報。幸無嫌怨并。靈珠の報を祈らず、幸に嫌怨を并す無かれ。

聊歌以記之。又以告同行。聊か歌うて、以て之を記し、又以て同行に告ぐ。

【字解】「蟹」かぶと蟹、山海經に「蟹は、形、惠文の如し」とある。惠文とは何かといふと、唐注に「惠文は、秦漢以來の武冠なり、詩中、中管仲は、金縢詔誓の節を加へ、これを趙惠文冠といふ」とある。それから、嶺表錄異に「蟹は、眼、背上に在り、雌、雄を負うて行く」とあり、劉涓子本經の注に「蟹は、形、惠文冠の如く、青黑色、十二足、脚に似たり、足、悉く腹下に在り、長さ五六寸、雌、常に雄を負うて行く。漁者、これを取れば、必ず其蟹を得」とあり、西陽雜俎に「蟹、海を過ぐる、輒ち背に相負ふ、高さ尺餘、帆の風に乘じて遊行するが如し、今、嶺表の上、一物あり、高さ七八寸、石珊瑚の如し、俗呼んで蟹帆となす、冠と爲すべし、白角に次ぐ」とある。【骨眼】骨は背の眼りだらうといふ説もある。唐之翹は、上の蟹帆の事を附雜異より引き「韓公、骨の字を用ふる、亦た疑ふべきなし、更に必ずしも妄に改むるを爲すべからざるなり」といつたが、これは骨としても、矢張り、背上の骨であるし、且つ骨と背と字が間違ひ易いので、背と直した方が意義が明かになる。【蟹】蟹、唐注に「蟹は昔家、字書に蟹の字なし、賈彦遠云ふ、五代の潘崇微、王逵の兵を鑿石に敗ると。亦た地名、字書に見はれずむばあるべからず、蓋し闕誤なり」といつて居る。嶺表錄異には「蟹は、即ち牡蠣なり、初めて海邊に生ずるときは、拳石の如し、四面漸く長じ、高さ一二丈の者は、蟻

巖、山の如し。一孔内に蝸肉一塊あり、肉の大小、孔の生するところに隨ふ。南來る毎に、諸孔皆開く、小蟲あつて入るときは、之を合して以て腹に充つ」といひ、雷州雜編に「蟹殼は、即ち牡蠣なり、中に肉あり、その殼の大小に隨ふ。高さ四五尺の者あり、水底に之を見れば、山岸の如し。呼んで蟹山と爲す」とある。【一】蒲魚 唐注に「蒲魚は即ち鰻魚なり」とあるが、詳しい説明がないから、如何なる魚かよくは分らぬ。【二】蛤 一に山蛤といふ、本草注に「青蛙、蟾蛤、長脚蟾子は皆蝦蟇の類」とあり、本草圖經に「蝦蟇に、一種大にして黄色なるあり、多く山石中に在つて蟬蟻し、能く氣を呑み、風露を飲み、蟾蟻を食はず、これを山蛤といふ」とある。【三】草蝦 即ち草魚、釋音に「草蝦に八脚あり、身上肉あり、白の如し、亦た草魚といふ」とある。【四】馬甲柱 眞珠貝の一種で、その貝柱が美味である。趙植鰻の侯勳録に「海物異者に云ふ、玉瑛柱は、その甲、美にして、瑛玉の如し。肉柱唐寸、江瑛柱といふ。郭景純の江賦に云ふ、玉瑛海月、吐三納石華」と。退之、馬甲柱といふ、是れ此なり」とある。【五】蝦蟇 左傳文公十八年に「これを三畜に投じ、以て魘魅に繫る」とあつて、即ち遺地に貶謫されしことをいふ。【六】南烹 南方の料理。【七】調 調理する。【八】毛 詩經に左右毛之とあるが、この時は引き抜くこと、このは、藥物にする、汁をかけて味をつけること。【九】椒 椒と橙の汁。【一〇】風 嘔吐、嘔んで膈を下す。【一一】汗 汗、汗は赤い。顔に油汗が流れる。【一二】蜜 蜜、淮南子に兩侯之珠とあつて、高誘の注に「兩侯、大蛇の斷斷せしを見、蜜を以て傳けて之を塗る。後、蛇、大江中に於て、珠を銜んで以て之に報ず、因つて兩侯の珠といふ」とあり、又同じ事が搜神記に見えて「兩侯、行いて大蛇の傷けるものを見、救うて之を活かす、その後、珠を銜んで、以て報ず、淮南子に謂はゆる兩侯の珠とは是れなり」とある。

【題義】この詩は、はじめて南方の料理を食ひしに因り、賦して元協律に貶つたので、無論、前詩と同時の作である。南食は、今でも廣東料理、北方のとは、自然違つて居るが、その材料が違つて居るからで、北方では、單に牛豕の肉のみを用ふるに反し、南方は海産に富み、且つ種種の物があるから、それを合せて調理するので、この詩を見ても、かぶと蟹、牡蠣、蒲魚、山蝦蟇、章魚、貝柱などがあ

る。韓愈は、もとより食ひ慣れぬ處から、大に弱り果て、殊に蛇に至つては、到底食ふ氣に成らず、これを放ち去つたいふことである。この詩は、辭句も淺俗で、大體に於て名作と稱し悪いが、風俗史の資料としては、他に比類なきものである。

【詩意】かぶと蟹は、實際、惠文の冠の様な形をして居て、それが海を涸ぐときには、背上の眼をきらめかし、雌が雄を負うて行くとのことである。牡蠣は、互に粘著して一塊を爲し、その大、山の如く、幾百幾千といふものが、個個別別に生を爲して居る。蒲魚には、蛇の如き尾があつて、その端が口であるから、口と眼とは全く關係なきが如くである。山蛤は、即ち蝦蟇で、實は同じきも、妄りに其名を異にして居る。章魚と貝柱とは、奇怪なるものの兩大關である。その餘の數十種、一として驚歎を値せぬものは無い。われは、魘魅に當る爲に、四裔に投せられた貶謫の身で、今次、この地方に來たのであるから、いやでも、應でも、これから南方料理を開こし召さねばならぬ。その南方料理は、鹹酸を以て調理し、胡椒や橙汁で味を付けて食ふやうに成つて居るが、腥臊の氣が發越するから、慣れぬものは、なかなか口に出ることが出來ず、咀嚼して無理に嚥み下すと、顔に油汗が流れる位。しかし、これ等は、まだ善いとして、蛇は従前見て知つて居るが、その口、眼、その模様の猙獰なるを心に憚つて居たので、どうしても食ふ氣には成れず、籠を開いて、その逃れ去るに任かせた。處が依然として、其處にとぐろを巻いて居て、どうやら捕へられたことを不平に思つて居るらしい。そこ

で、われは蛇に向ひ、汝を捕へて賣つたのは、何も我が罪ではない。加ふるに、汝を屠らずして放つたのは、情あることではないか。たとひ、恩に報ゆる爲め、靈珠を贈られることは、望まないにしても、せめては、われを他人と一緒に嫉妬せぬ様にして呉れるといつた。南方料理の品目は、ざつと上に述べた通りで、聊か之を詩に記して、且つ同行の人人に告げる次第である。

【餘論】朱竹垞は「異物を實記し、亦た自ら一體を成す、下句亦た多く工なり」といつた。

宿曾江口示姪孫湘 二首 曾江口に宿し、姪孫湘に示す 二首

雲昏水奔流。天水滌相圍。雲昏くして水奔流、天水、滌として相圍む。

三江滅無口。其誰識涯圻。三江、滅して口なく、其れ誰か涯圻を識らむ。

暮宿投民村。高處水半扉。暮宿、民村に投すれば、高處、水半扉。

犬雞俱上屋。不復走與飛。犬雞、俱に屋に上り、復た走と飛とならず。微なるを。

篙舟入其家。暝聞屋中啼。舟に篙して其家に入れば、暝に屋中に啼くを聞く。

問知歲常然。哀此爲生微。問うて知る、歲ごとに常に然るを、哀む、この生を爲すの

海風吹寒晴。波揚衆星輝。海風、寒晴を吹き、波揚がつて衆星輝く。

仰視北斗高。不知路所歸。仰いで北斗の高きを視るも、路の歸るところを知らず。

【字解】「二」 滌はびこる貌。「三」 三江、瓊巖の下に説明して置く。「涯圻」二字ともに汀岸。「上屋」この屋は屋樓。

【五】 屋中啼、家の中で啼く、啼は、方言に「哀んで泣かざるを啼といふ」とあり、史記に「村、象著を爲つて、其子啼く」とある、涙を出さずに悲しげに啼くこと。「六」 爲生微、生活状態の極めて低きをいふ。

【題義】曾江は、廣城府增城縣に在つて、三江の合流する處である。韓愈の往つた時は、江水汎濫、

三江混じて一となり、江口も見えぬ位。姪孫湘は、前にも見えたが、字は北渚、老成の子、韓愈の兄

弇の孫である。青瑣高議に「湘、字は清夫、公の姪たり」とあるは誤である。この詩は、矢張、潮州

に赴く途中、曾江の會流する處に投宿し、折から、大水汎濫の實況を観たるに因つて、取り敢へず、

賦して、従行の姪孫韓湘に示したのである。

【詩意】雲は昏くして垂れかかり、濁水は勢すさまじく奔流し、そして、空や水といった様に、はびこつて相圍み、三江合して一となり、江口は跡方もなく、何處が岸だか、誰でも一寸分からね位。ここに日暮に際し、宿を求めて、民村に投せむとすれば、そこは、随分高い處であるが、洪水は、門扉の中程にも及び、雞犬は難を避けて皆屋根に上り、走りもせず、飛びもせず、大に弱り切つて居る。やがて、舟に棹して、その家に入ると、夕暮の暝きに際し、家の隅で、悲しげに啼く人の聲が聞こえ

る。様子を問へば、かういふ洪水は、毎年有るとのこと、それにつけても、この地方住民の生活状態の極めて低いのは、まことに、氣の毒千萬の事である。兎角する内に、海より來る強風は、大空を吹き拂つて、寒いながらも晴れわたり、江中の波は、勢よく揚がつて居るが、天上には、羣星が爛として輝きわたつて居る。仰いで、北斗の高きを視、長安の方角も、それと察せられるが、そこに歸るべき路を知らず。われは讀官の身、民庶の難を見ては、愈よ痛嘆に堪へぬ始末である。

【餘論】朱竹垞は「嶺南は、不時汎濫し、或は平夜公署を溢没す。ここに賦するところは、宛然として盡き出せり」といつた。この詩の起四句は、詞筆極めて鋭、結四句は、感憤自然盡きざるの妙がある。

舟行亡故道、屈曲高林間。

舟行、故道なく、屈曲す高林の間。

林間無所有、奔流但潺潺。

林間、有るところなし、奔流但だ潺潺たり。

嗟我亦拙謀、致身落南蠻。

嗟す我が亦た謀に拙く、身を致して南蠻に落つるを。

茫然失所詣、無路何能還。

茫然として詣るところを失ふ、路なくして何ぞ能く還らむ。

【字解】「故道」これまで有つた驛路。「南蠻」蠻は南夷の稱、ここでは潮州を指す。

【詩意】大洪水の爲に舟を乗り出したが、本来の街道は、何處とも知らず、高い林の間を屈曲して、

舟を進めた。林間にては、何も見るところなく、唯だ奔流の響潺潺たるを聞くのみである。顧みれば、予は、世わたりの謀に拙く、その爲に、罪を得て、南蠻の地に貶謫されるやうなことに成り、茫然として、どこへ往つて善いか分からず、加ふるに、路なき上は、引き還すことも出來ず、進退ここに谷まつて居る。

【餘論】何義門は、嗟我亦拙謀の二句を擧げ「東坡の謀、生看拙否、送老此蠻村、語意此に本づく」といつた。

答柳柳州食蝦蟇

柳柳州の蝦蟇を食ふに答ふ

蝦蟇雖水居、水特變形貌。

蝦蟇は、水に居ると雖も、水にして、特に形貌を變ず。

強號爲蛙蛤、於實無所校。

強ひて號して蛙蛤と爲すも、實に於て校ぶるところなし。

雖然兩股長、其奈脊皴皴。

然かく兩股長しと雖も、其れ脊の皴皴を奈かむ。

跳躑雖云高、意不離淖淖。

跳躑高しと云ふと雖も、意、淖淖を離れず。

鳴聲相呼相、無理只取鬧。

鳴聲相呼んで和し、理なくして只だ鬧を取。

周公所不堪、灑灰垂典教。

周公も堪へざるところ、灰を灑いで典教を垂る。

我棄愁海濱。恒願眠不覺。我、棄てられて、海濱を愁ふ、恒に眠の覺めざるを願ふ。  
 叵堪朋類多。沸耳作驚爆。朋類多く、耳に沸いて、驚爆を作すに堪へ叵し。  
 端能敗笙磬。仍工亂學校。端に能く笙磬を敗り、仍つて工に學校を亂る。  
 雖蒙句踐禮。竟不聞報效。句踐の禮を蒙ると雖も、竟に報效を聞かず。  
 大戦元鼎年。孰強孰敗撓。大戦元鼎の年、孰れか強く、孰れか敗撓せる。  
 居然當鼎味。豈不辱鈞罩。居然として、鼎味に當る、豈に鈞罩を辱しめざらむや。  
 余初不下喉。近亦能稍稍。余初め喉に下らず、近ごろ亦た能く稍稍たり。  
 常懼染蠻夷。失平生好樂。常に懼らくは、蠻夷に染み、平生の好樂を失はむことを。  
 而君復何爲。甘食比豢豹。しかも、君、復た何すれぞ、甘食して豢豹に比す。  
 獵較務同俗。全身斯爲孝。獵較して俗に同じくせむことを務む、身を全うする斯を「  
 哀哉思慮深。未見許廻權。哀いかな、思慮深く、未だ廻權を許されず。孝と爲す。」

【字解】(一) 蝦蟇 題義の下に注す。(二) 水特變形貌 蔣注に「下の水の字、或は未に作る。是非非ず。その水に作れるは、言ふ、水族の中に於て、特に其形貌を異にするなり。と、この説も、亦た文理を成さず、攻を俟つ」とあつて、要するに、その意味

は判明せぬ。但し鄙見を以てすれば、水特變形貌の字は、上の水居を承けて、同じに用ひたものと見るべく、唐人には、數ば例のあることである。すると、この句の意は、水居することば、格別必要もないが、ただ料斗の變形するまでは、是非水居せねばならぬといふ意であらうか。(三) 豢豹 蝦蟇の別名。(四) 無所校 この校の字は當るといふ體に見ればならぬので、比較して相當ること。(五) 波節 説文に「波は、皮の細起するなり」とあり、玉篇に「波は面皮の氣を生ずるなり」とある。即ち蝦蟇の表皮の此を指す。(六) 澤潭 左傳僖公十五年に「晉の武馬、澤に墮つて止まる」とあつて、杜預の注に「澤は泥なり」とある。又成公十六年に「前に澤あり」とあつて、その注に「澤は泥なり」とある。二字、ともに泥、即ちぬかるみ。(七) 周公所不韋 この二句は、周公も蝦蟇の鳴聲の響しきに堪へられなかつたものと見え、その作られた周禮の中に、蝦蟇を退治することを述べられたといふ意、周禮備氏の條に「蠃風を去るを掌る、牡蠃を燒き、灰を以て灑げば死す」とある。蔣注に「王十朋曰く、蝦蟇は水蟲、人の害を爲さず、蠃風の類と同じからず。然れども、周官云云、謂ふ、蠃と蠃風と、尤も驚鳴して人耳に聒し、故に之を去ると。予、竊に謂へらく、これ周公の心を用ふるに非ず、後世傳習の訛して其說を附益するなり、退之、その事を詩に述ぶ、未だ勸むるを死れず」とある。周禮に、蝦蟇を除く爲め、蠃風投入まで置いたといふのは、どういふ譯か知らぬが、蠃風は、唯だ博洽を示す爲に之を引用し、且つ世俗普通の解釋に従つたので、格別ひどく穿鑿するにも及ばぬことであらう。(八) 蝦蟇 不韋に蝦蟇の如く聞こえる。(九) 敗笙 笙磬の聲を亂す。(一〇) 亂學校 學校に於ける鼓鐘の邪聲になる。(一一) 句踐禮 韓子に「越王、吳を伐つ、人の死を輕んぢむことを欲す。出でて怒龍を見るや、乃ち之が爲に射す。從者曰く、愛を此に敬する。王曰く、その氣あるが爲めの故なりと。勇士遂に頭を以て獻するものあり」と見ゆ。(一二) 大戦元鼎年 漢書武帝紀に「元鼎五年秋、龜と蝦蟇と闘ふ」とある。(一三) 敗撓 左傳に「君の翼を長れて師徒撓敗す」とあつて、杜預注に「撓は曲なり」とある。曲げられて敗れる。(一四) 鼎味 食品。(一五) 鈞罩 鈞で取り網で取る。つまり江海の魚をいふ。(一六) 稍 少しづつは食へる。(一七) 豢豹 文選、收叔の七豢に豢豹之胎とある。ここでは、飼養又は野生の獸類の體。(一八) 廻權 獵の時に獲物の多少を比較する。(一九) 全身斯爲孝 禮記に「父母全うして之を生み、子全うして之を歸す、孝と謂ふべし」とある。



【題義】柳宗元が柳州に居て、蝦蟇を食ひ習ひ、大分うまく成つたといふことを詩に作つて、態態韓愈に寄せたから、韓愈は、この詩を作つて之に答へたのである。しかし、柳宗元の集を見ても、その原作といふ様なものは、載つて居ないから、大方、散佚して仕舞つたのであらう。無論、この詩は、韓愈が潮州に居た時の作である。そして、柳宗元の事は、唐書の本傳に「元和十年、柳州刺史に徙る。南方の進士たるもの、走ること數千里、宗元に從つて遊ぶ、世に柳柳州と號す」とある。蝦蟇は、即ち前の初肉食の詩に蛤即是蝦蟇、同實浪異名とあつた其物で、本草圖經に「蝦蟇は、腹大に、形小に、皮上に黒斑點多く、能く跳り、時に呷呷の聲を作す、陂澤の間に在り」と記してある。

【詩意】蝦蟇は、水中に住むけれども、その水が必要なのは、科斗が蟻形するまでの間に限られて居る。これを強ひて號して蛙といひ、蛤といふけれども、實際は、異なつたもので、比較しても、相當なところが無い。蝦蟇は、兩股が長いが、脊の皮膚の上に黒斑の斑があつて、蛤蛙と異なつて居る。それから、躍りはねて随分高く飛び上るが、その意、依然として、泥のぬかるみを愛し、常に其處に住んで居る。羣をなして鳴くときには、その聲相和し、唯だ譯もなく聞かしのが特徴である。むかし、周公も、蝦蟇の聲の響しきに堪へられなかつたものと見え、灰を灑げば、これを死なして根絶することが出来るといつて、周禮の中にも書き込み、後世まで典故として傳はつて居る。今、われ罪を得て、この潮州の海濱に謫居し、平生愁に堪へぬ處から、せめては、夜だけでも安眠したいと念じ

て居るが、蝦蟇の同類極めて多く、耳邊に近く爆然として鳴き立てるに至りては、まことに堪へられない。蝦蟇の聲の喧しきは、笙簫の雜音を亂るべく、又學校に於ける絃誦の邪魔にもなる。蝦蟇は、古くから史上に見えて居るので、越王句踐は、賦して之を禮したといふが、その爲に、蝦蟇が報效を爲したといふことも聞かないし、漢の武帝の元鼎中、蛙と大戦争を遣つたといふが、孰れが強く、孰れが負かされたか、その結果は、不明である。しかし、南方の地に於ては、食品として珍重するので、釣られたり網されたりする江海の魚類も、これに對しては、遜色ある位。われは、はじめて之を試食した時には、全く咽を下り兼ねた位であつたが、近ごろは、だんだん慣れて來て、少しづつは食へる様になつた。それにつけても、懼るるところは、いつしか、蠻夷の習俗に化せられて、從前の嗜好を失ひ、全く蠻化して仕舞ひはせぬかといふことである。聞けば、柳君は、大さう之を好み、獸肉と同じ様だといはれるさうだが、全體どうしたものか、どうやら蠻化されたのではないか。獵に當つては獲物の多寡を較べるといふ様に、周囲の人人と務めて俗を同じうするは、さることながら、折角父母の生んで呉れた此身は、死ぬまで之を全うするのが孝道で、へんな物を矢鱈に食つて、萬一の事があつてはならぬ。君は、まだ棹を廻らして北歸することを許されず、なほ其折を待つて居らねばならぬ身であるから、随分、思慮を深くして、身體を大切にせねばならぬ。

【餘論】朱竹垞は「只だ是れ戲筆、句を下せば、故らに俚と爲し、以て快を取る、亦た俳諧の類」と

いひ、蝦蟇その物を寫せる處は、ざつと、こんなものであるが、大體の旨意は、極めて明白で、且つ如何にも尤もらしく、本來の慣習嗜好に合はぬものは、矢鱈に食はぬ様にせよといつて、柳宗元に忠告したのである。

別趙子

趙子に別る

我遷於揭陽。君先揭陽居。我、揭陽に遷る、君、先づ揭陽に居る。  
揭陽去京華。其里萬有餘。揭陽、京華を去る、その里萬有餘。  
不謂小郭中。有子可與娛。謂はざりき、小郭の中、子が與に娛むべきあらむとは。  
心平而行高。兩通詩與書。心平にして行高し、兩つながら詩と書とに通ず。  
婆娑海水南。簸弄明月珠。海水の南に婆娑として、明月の珠を簸弄す。  
及我遷宜春。意欲攜以俱。我が宜春に遷るに及びて、意、攜へて以て俱にせむと欲す。  
擺頭笑且言。我豈不足歟。頭を擺つて、笑ひ且つ言ふ、我、豈に足らざらむや。  
又奚爲於北。往來以紛如。又奚ぞ北に爲さむ、往來以て紛如。

海中諸山中。幽子頗不無。

海中諸山の中、幽子頗る無きにあらず。

相期風濤觀。已久不可渝。

風濤の觀を相期し、すでに久しくして渝るべからず。

又嘗疑龍蝦。果誰雄牙鬚。

又かつて疑ふ、龍蝦、果して誰か牙鬚に雄なる。

蚌贏魚鼈蟲。瞿瞿以狙狙。

蚌贏魚鼈の蟲、瞿瞿以て狙狙たり。

識一已忘十。大同細自殊。

一を識つて、すでに十を忘る、大は同じうして細は自

欲一窮究之。時歲屢謝除。

一たび之を窮究せむと欲す、時歲、屢ば謝除す。

今子南且北。豈非亦有圖。

今子南し且つ北す、豈に亦た圖ることあるに非ざらむや。

人心未嘗同。不可一理區。

人心、未だ嘗て同じからず、一理もて區すべからず。

宜各從所務。未用相賢愚。

宜しく各務むる所に從ふべく、未だ相賢愚するを用ひず。

【字解】【一】揭陽、舊注に「揭陽は廣の縣、南海郡に屬す。唐に遷りて、潮州の治となる。廣州記に云ふ、大庾、始安、臨賀、桂陽、揭陽を五嶽と爲す」とある。【二】萬有餘、莊子に本づく。【三】小郭、小さな城郭。【四】可與娛、詩の鄭風に「可與娛」とある。【五】心平而行高、漢書の宣元六王傳に「章元成、經明かにして行高し」とある。【六】婆娑、晉書陶侃傳に「荊州刺史となり、將に長沙に歸らむとす。顧みて王愷期に謂つて曰く、老子婆娑、正に諸君輩に坐せらる」とあつて、入り交つてうろちする。

【七】明月珠、史記の李斯傳に「明月の珠を弄す」とあり、都陽傳に「明月の珠、夜光の璧」とある。【八】遷宜春、舊注に「元和十

四年七月己丑、憲宗、尊號を上つて、天下に大赦す、十二月二十四日、公、潮州より袁州に景移す。即ち宜春郡なり。今、江西に屬して、袁州となす」とある。【一〇】擢頭、首を振る、不承知の貌。【一一】同子、兩人に同じ。【一二】龍蝦、爾雅の注に「大蝦は海中に出づ、長さ二三尺、體の長さ數尺」とあり、王隱の交廣記に「或は廣州刺史陸修に語る、蝦須長さ一丈と。修、信ぜず。その人、後、東海に至り、蝦須長さ四丈四尺なるを取り、封じて以て修に示す、修、乃ち服す」とある。【一三】蚌、蚌の類に「龍となし、龍となし、蚌となす」とある。蚌は蛤類の大なるもの、龍は蚌の類。【一四】龍蝦、昔紀に狂夫龍蝦とあつて、毛傳に「守るなきの貌」とある。【一五】狙狙、狡黠の貌。【一六】一理區、左傳に「人心の同じからざるは、この面の如し」とある。【一七】相賢愚、互に甲乙する。

【題義】蔣注に「趙子、名は徳、公、潮州刺史たりしとき、海陽尉を攝し、州學の生徒を督す。東坡の謂はゆる、潮人、初め學を知らず、公、趙徳に命じて、これが師たらしむ。即ち其人なり、公、潮より袁に移るとき、詩、以て之に別る。徳は潮人、公與に俱にせむと欲せしが、不可なるのみ」とある。趙徳は、東坡の潮州韓文公廟碑に進士とあるから、即ち郷貢進士である。

【詩意】われ始めて潮州に左遷されしとき、君は先づて其地に居た。潮州は、長安を去ること、萬里餘にして、まことに僻遠の地であるが、かかる小さな城郭の中に、君の如く與に語るに足る人が居ることは、まことに豫想せぬところであつた。君は、心平にして、行高く、且つ詩書兩經に精通し、天晴、學問の根柢が出来て居る。しかも、大海の南なる潮州に、嬖妾としてうろついて居て、明月の珠に比すべき才徳を發弄して居られる。今や、われは、袁州に量移されしに因り、攜へて一緒に其地

に赴かうとした處が、君は、首を振つて、笑ひながら云ふには、現在の我が職は、格別なものではないが、われに取りては、足りない譯もない。何すれば、わざわざ北に向ひ、往來粉如として、面倒臭いことを致さうか。自分は、懲徳づくではなく、甘んじて、この地方の教育に従事し、それで一生を終れば善いので、決して他處に移らうといふ考もない。この潮州の近海なる諸山の中には、高隱の幽人どもが随分有つて、自分は、これ等の人人と海上の風濤を見物しやうといつて約束したこともある。すでに久しく歳月を経過したが、その約束も、反古にはならない。それから、潮州附近には、さまざまな海産があつて、中にも、龍蝦は、牙鬚の雄大なるを以て知られ、その他、蛤類だの、螺だの降つて魚鼈の類が、罨羅として寄り聚まつて居る。自分は、かつて之を調べかけたが、一を讀つて、すでに十を忘れ、大綱は同じでも、細目に至りては、もとより殊なつて居るので、是非一度、心ゆくばかり研究したいと思つて居る内に、歳月が屢ば遷つて仕舞つた。今、貴下は一たび南して、この潮州に來られ、未だ一年ならざるに、又北して袁州に移られる、それは自分に企圖するところがあるからでありませうといつた。なる程、人心は、もとより同じからず、又一理を以て區劃する譯にも行かぬので、各、その務むべきところに従事して、その天職を全うすれば、それで善いので、何も甲乙の別を設けて、彼此いふにも及ばぬ次第。そこで、予は、趙子の志を諒とし、再び之を強ひぬことにし、ここに別を發することになつた。

【餘論】朱竹垞は「只だ是れ俱に北するを肯せざるの意を述ぶ、亦た灑灑喜ぶべし」といつた。趙子の同行を謝絶したことは、その口を借りて之を述べ、極めて劃切である。結四句は、論贊的に、作者が附け加へたので、これを以て、その本領を窺ふことが出来る。

除官赴闕至江州寄鄂岳李大夫

官を除せられ闕に赴いて江州に至り、鄂岳李大夫に寄す

盆城去鄂渚。風便一日耳。  
不枉故人書。無因帆江水。  
故人辭禮闈。旌節鎮江圻。  
而我竄逐者。龍鍾初得歸。  
別來已三歲。望望長迢遞。  
咫尺不相聞。平生那可計。  
我齒落且盡。君鬢白幾何。  
年皆過半百。來日苦無多。

少年樂新知。衰暮思故友。  
譬如親骨肉。寧免相可不。  
我昔實愚癡。不能降色辭。  
子犯亦有言。臣猶自知之。  
公其務賞過。我亦請改事。  
桑榆儻可收。願寄相思字。

【字解】盆城、即ち江州、唐開元中、益水は清益山より出で、因つて以て名と爲す。今の九江德化縣に出づ」とある。白樂天の琵琶行に江州を記して、住近益江地低窪とあると同じである。鄂渚、楚辭に樂三鄂渚而反顧とあつて、唐には鄂州、今の湖廣武昌府。帆江水、帆の字を動詞にしたので、杜市の詩に浦帆晨初發とあると同義。旌節、李程は元和十三年四月、禮部侍郎に拜せられ、六月出でて鄂州刺史鄂岳觀察使となつた。禮闈は、即ち禮部省。旌節、旗と節旄、天子より地方長官に賜はる表驗のもの。龍鍾、廣韻に「龍鍾は、竹の名、年老いたるものは、竹の枝葉搖曳して、自ら持禁せざるが如し、故に云ふ」とある。しほしほとして、元氣の無い貌。長迢遞、道里遠く相隔るをいふ。過半百、年五十を過ぎた。可、不可否に同じ。日苦無多、苦は甚だ、今後来るべき日は甚だ少い。樂新知、楚辭の九歌に樂莫樂兮新相知とある。可、不可否に同じ。愚癡、癡、一に驢に作る。降色辭、顔色を和らげ、言語を低くする。子犯、左傳僖公二十四年に子犯曰く臣、驪純を負ひ、君に従つて天下を巡る、臣の罪、甚だ多し、臣、驪純之を知る、囚んや君をや」とある。買過、過失を救す、願師古の撰書法に「買とは其罪を緩恕するを謂ふなり」とある。改事、左傳宣公十二年に「雙子、鄭を圍む。鄭伯肉袒羊を率心

て以て逆へて曰く、改めて君に事へしめて、九縣に夷しくすれば、君の直なり、孤の直なり」とある。ここでは、従前の事は水に流して、改めて交際を全くしやうといふ意。樊汝霖の説に「詩語を反復するに、李と會て讀あり、是に至り、因つて之を謝するが若し。故書、大故なければ、塞てす、これが之を思つて、且つ事を改めむことを明ふ所以なり」とある。【七】 魯編 後漢書の馮異傳に「これを東陽に失うて、これを桑榆に收むといふべし」とある。前には東の方で失敗したが、今度は西の方に功を立てて之を償うたといふ意。【八】 相思字 漢の古詩十九首に客從遠方來、遺我一書札、上言長相思、下言久離別とある。

【題義】 この詩は、元和十五年九月、韓愈が袁州から召し還されて、國子祭酒に拜せられむとせし時、行いて江州に次して作つたのである。除官は、顔師古の漢書注に「凡そ除といふは、故官を除去して新官に就く」とある。鄂岳李大夫は、原注に李程とある。鄂岳大夫は即ち鄂岳觀察使で、唐書地理志に「江州潯陽郡、鄂州江夏郡、岳州巴陵郡、江南道に屬す」とある。又李程は、舊唐書の本傳に「李程、字は表臣、隴西の人、貞元十二年、進士の第に擢んでらる。元和十三年四月、禮部侍郎に拜し、六月出でて鄂州刺史鄂岳觀察使と爲る」とある。詩を見ると、李程が豫め書を以て招いたから、韓愈は、江州に立ち寄りて之と會見し、そして、この詩を贈つたものらしい。

【詩意】 益城の稱ある江州は、鄂渚から風の都合さへ善ければ、唯だ一日で行かれるといふ、極めて便利の處であるが、一寸寄り路に成るから、わが舊友が前以て書面を寄せられぬ時は、舟に帆かけて江水を渡るに因なく、その儘、行き過ぎたであらう。わが友李程は、近ごろ、禮部省より出で、旌節を賜はつて、この江邊の要地を鎮撫することとなり、まことに目ざましい立身である。それに引きか

へ、我は、竄逐の身の上で、龍鍾として、老いさらばひ、今次、やつと召し還されることに成つたので、その相反すること、まことに甚しい。君と別れて、すでに三年、潮州だの袁州だのに居た時分は、これを望めども、道里遠く相隔つて居た。今、この邊、咫尺の地を通りかかつて、お目にかからなかつたらば、平生の有様をも審にすることは出来なかつたであらう。さて過つて見ると、君と我と、升沈各異なれども、年の寄つたことだけは同じで、我が齒は、だんだんに抜けて、將に盡きむとし、君の鬢も、大分白くなつた。お互に、齡すでに五十を過ぎ、今後來るべき日は、甚だ少く、つまり壽命は最早長くないので、まことに心細いことである。年の若い時には、新に知つた人を樂むが、老年になると、昔馴染の友人を慕はしく思ふのが人情で、君と我と、懷舊の念に堪へないのも、尤も至極の事であつて、さきに、一寸仲違ひをしたことなどは、今から思へば、何でも無いことである。たとへば、親身の骨肉でさへも、兎角互に可否するを免れないし、その上、われは性來愚鈍であつて、人なみに、顔色を和らげ、言葉を低くして、調子を合せることが出来なかつたから、かくの如き事にも成つたのである。子犯も、行き届かなかつたことは、私でさへも知つて居ると云つた通りで、われも、その不慮なりしことは、十分熟知して居る。されば、君に於ても、枉げて、わが過失を赦して貰ひたいので、我も、すつかり、事を改めて、交誼を全うしたいと思ふ。そこで、君にして、前日の事を忘れ、たとへば、功を桑榆に收めたるが如く、今後、更に御厚情を下し賜はるならば、どうか、時時手

紙を以て相思の文字を寄せられたものである。

【餘論】朱竹垞は「眼前の意、寫し得て活潑、即ち口説と一般なるが如く、正に淺顯を以て佳」といひ、乾隆御批には「情意纏綿、詞氣逶迤、人をして意また消えしむ」と。起四句は、今次江州に立ち寄りしことを述べ、故人辭禮閣より平生那可計に至る八句は、彼此の事を相互に分説し、我齒落且盡の四句は、會晤の時の感慨、少年樂新知の四句は、往日離離せしことを追憶し、我昔實愚癡以下は、責を引いて咎を己に歸し、そして、將來の交誼を囑望したので、よく情義を盡して居る。

南山有高樹行贈李宗閔

南山に高樹あり行、李宗閔に贈る

南山有高樹。花葉何衰衰。

南山に高樹あり、花葉何ぞ衰衰たる。

上有鳳凰巢。鳳凰乳且棲。

上に鳳凰の巢あり、鳳凰乳して且つ棲む。

四旁多長枝。羣鳥所託依。

四旁に長枝多く、羣鳥の託依するところ。

黃鶴據其高。衆鳥接其卑。

黃鶴は其高きに據り、衆鳥は、其卑きに接す。

不知何山鳥。羽毛有光輝。

知らず、何の山の鳥ぞ、羽毛に光輝あり。

飛飛擇所處。正得衆所希。

飛飛として處る所を擇び、正に衆の希ふところを得たり。

上承鳳凰恩。自期永不衰。

上は鳳凰の恩を承け、自ら期す永く衰へざるを。

中與黃鶴羣。不自隱其私。

中は黃鶴と羣し、自ら其私を隠さず。

下視衆鳥羣。汝徒竟何爲。

下は衆鳥の羣を視る、汝が徒、竟に何すれぞ。

不知挾丸子。心默有所規。

知らず、丸を挾むの子、心に黙して規るところあり。

彈汝枝葉間。汝翅不覺摧。

汝を枝葉の間に彈す、汝の翅、覺えず摧く。

或言由黃鶴。黃鶴豈有之。

或は言ふ、黃鶴に由ると、黃鶴、豈に之あらむや。

慎勿猜衆鳥。衆鳥不足猜。

慎んで衆鳥を猜ふ勿れ、衆鳥、猜ふに足らず。

無人語鳳凰。汝屈安得知。

人の鳳凰に語るなし、汝が屈、安んぞ知るを得む。

黃鶴得汝去。婆娑弄毛衣。

黃鶴、汝の去るを得て、婆娑として毛衣を弄す。

前汝下視鳥。各議汝瑕疵。

前に汝が下視せし鳥、各、汝が瑕疵を議す。

汝豈無朋匹。有口莫肯開。

汝、豈に朋匹なからむや、口あるも肯て開く莫れ。

汝落蒿艾間。幾時復能飛。

汝、蒿艾の間に落つ、幾時か復た能く飛ばむ。

哀哀故山友。中夜思汝悲。哀哀たり故山の友、中夜、汝を思ひて悲む。  
路遠翅翎短。不得持汝歸。路遠くして、翅翎短し、汝を持して歸るを得ず。

【字解】「一」哀哀、哀哀に作るべく、文選南都賦に「數三華之哀哀」とあつて、その注に「下通の韻」とある。「二」孔、孔を養ふ。「三」挾丸子、彈き玉を持つて居て鳥を打つて歩く人。「四」有所規、規は圓る、東坡の五禽言に「去年夢不熟、挾彈規我肉」とあるは、即ち此語に本づいたのである。「五」猶、猶よ。「六」當文、よもぎ。

【題註】南山有高樹行は、この詩の起句を取つて、その儘題にしたので、蔣注に「詩意に據るに、鳳皇は表度を謂ひ、挾丸子は李德裕・李紳・元稹を謂ふなり」とある。李宗閔は、舊唐書の本傳に「字は損之、鄭王元懿の後、貞元二十一年、進士の第に擢んでらる」とある。又新書の本傳に「表度、蔡を伐つ、引いて彰義觀察判官となす。蔡、平らぐ、知制誥たり。長慶の初、錢徽、貢舉を興る。宗閔、所親を徵に託するや、李德裕・李紳・元稹、ともに徵の士を取るに實を以てせざるを白し、坐して、劍州刺史に貶せられしが、俄に復た中書舍人となる。これに由つて嫌怨、顯に精神の禍を結び、四十餘年解けず」とあつて、韓愈の此詩及び下篇の猛虎行は、蓋し長慶の初に作つたものと稱せられて居る。又宗閔の本傳に「宗閔、はじめ、表度に引用せらる。度が李德裕の宰相たるべきを薦むるに及んで、宗閔、遂に與に怨と爲す。韓愈、南山猛虎行を作つて之を規す」とあるが、表度が德裕を薦めた

のは、韓愈の死後五年であるから、この言は、折角ながら、誤つて居る。なほ茗溪隱叢話に「退之、宗閔は、ともに、裴晉公、淮西を征する時の幕客なり。退之、南山有高樹行及び猛虎行を作つて、宗閔に贈り、皆略は其終身爲すところを盡す。然れども、退之恙なきの時、宗閔、わづかに中書舍人たり、爲すところ、尙ほ未だ暴ならず、錢徽が貶せられしより後、牛李の憾、はじめて結ぶ。その相たるに至りては、退之死する久し、遂に封川行あり。前汝下視鳥、各議汝瑕疵、鳥鶴從噪之、虎不、知所歸といふもの、何ぞ其れ明瞭あるや」といつて居る。

【詩意】南山に丈高い木があつて、花葉ともに榮え、枝もたわわに下に垂れる位。その上に鳳凰が巢を造り、そこで、雛を育てつつ棲んで居る。その木の四旁には、長い枝が多く分岐して居る處から、羣鳥が其處に身を託して居る。中にも、黃鶴は高い枝に棲み、衆鳥は卑い枝に巢つて居る。すると、何處の山に居た鳥か知らぬが、羽毛に光輝あつて、まことに見事なものであるが、飛飛として、その住むべき處を擇んで居る内に、とうとう、この南山の木を見付け出し、衆鳥の希望するところの者を得たので、その得意、想ふべしである。かくて、その鳥は、これを上にして、鳳凰の恩を受け、それも永久に衰へぬ積りで居るし、これを中にして、黃鶴と羣し、自ら其私情を隠さず、すべての事を打明けて、その交も親密であるし、これを下にして、衆鳥の羣を見ては、尤で相手にするにも足らぬものとして居る。然るに、金彈を持つて小鳥を打つて歩く人があつて、心中何やら領いて、圖るところある

が如く、遂に汝が枝葉繁れる間に棲んで居るのを見て、その丸を投げつけると、見事に中つて、汝の翅は、推かれて仕舞つた。まことに氣の毒な話。或人は、それは黄鶴が汝の居處を丸を挟む人に教へたからだといふが、世に黄鶴とも有らうものが、そんな事をする氣遣はない。さうかといつて、衆鳥の所爲でもないのに、汝、慎んで衆鳥を猜疑してはならぬ。元と元と衆鳥などは、疑ふだけの價値も無い位。しかし、汝が丸に中てられた後は、まことに身じめなもので、誰も其事を鳳凰に語るものなき故に、鳳凰は、汝の屈辱を知らず、それから、黄鶴も、汝が居なくなつてからは、相手となるものが無いからといふので、威張り出し、婆娑として、これ見よがしに其毛衣を弄して居るし、疊に汝が眼底に見下した例の羣鳥どもは、汝の缺點を彼此言つて非難して居る。汝にしても、同類が何處かに無い譯でも無いが、あまり騒がしいものだから、口あるも絶えて之を開くことが出来ない位。汝は既に丸に中てられて、蒿艾の間に落ち、何時氣力を回復して、再び飛ぶことが出来やうか。故山に居る汝の友は、哀哀として心に痛み、中夜に汝を思つて悲んで居るが、何分にも路遠く、且つ翅が短いから、汝の射落された處まで往つて、汝を連れて歸ることが出来ない。

【餘論】不知何山鳥は、即ち李宗閔に擬したので、鳳凰は裴度、黄鶴と羣鳥とは、ひとしく裴度の門下で、その官位の高下を以て分け、宗閔が氣の毒な地位に陥つたことは、この詩を見て分かるので、裴度は全然これを知らず、裴度門下の人人は、却つて其失意に乗じて、自ら威張り出したり、又非難したりして居る。朱竹垞は「古歌謠、諷諭するところあれば、必ず其辭を雜亂す、此は却つて帖し得て、本大明白にし了る」といひ「すでに豈有之、不足猜といひ、却つて又毛衣を弄し、瑕疵を議す、人情を曲盡す」と云つて居る。

猛虎行

猛虎行

猛虎雖云惡、亦皆有匹儕。猛虎は惡と云ふと雖も、亦た各、匹儕あり。  
羣行深谷間、百獸望風低。深谷の間を羣行すれば、百獸風を望んで低る。  
身食黃熊父、子食赤豹臍。身は黃熊の父を食ひ、子には赤豹の臍を食はしむ。  
擇肉於熊豹、肯視兔與狸。肉を熊豹に擇ぶ、肯て兔と狸とを視むや。  
正晝當谷眠、眼有百步威。正晝、谷に當つて眠れば、眼に百歩の威あり。  
自矜無當對、氣性縱以乖。自ら當對なきを矜つて、氣性縱にして以て乖れり。  
朝怒殺其子、暮還食其妃。朝に怒つて其子を殺し、暮に還つて其妃を食む。  
匹儕四散走、猛虎還孤棲。匹儕、四に散走し、猛虎、還た孤棲。



狐鳴門兩旁、烏鵲從噪之。

狐は門の兩旁に鳴き、烏鵲從つて之に噪ぐ。

出逐猴入居、虎不知所歸。

出でて逐へば、猴入つて居り、虎は歸るところを知らず。

誰云猛虎惡、中路正悲啼。

誰か云ふ、猛虎惡しと、中路にして正に悲み啼く。

豹來銜其尾、熊來攫其頤。

豹來つて其尾を銜み、熊來つて其頤を攫む。

猛虎死不辭、但慚前所爲。

猛虎死、辭せず、但だ前の爲すところに慚づ。

虎坐無助死、況如汝細微。

虎坐ながら、助なくして死す、況んや、汝の細微なるが如し。

故當結以信、親當結以私。

故には當に結ぶに信を以てすべし、親には當に結ぶに私

親故且不保、人誰信汝爲。

親故すら、且つ保たすむば、人、誰か汝を信するを爲さむ。

【字解】(一) 匹類、なま、同類。(二) 望風、望風を望んで下に平伏す。(三) 黃龍、文王が妾里に囚はれた時、散宜生が

黃龍を得て、以て射に獻じ、西伯の難を免れしめたといふことがあつて、參らしいものと見える。(四) 赤豹、楚辭の九歌に乘、赤豹、兮文狸とある。雖は虎の子、ここでは、單に子といふ義に用ふ。(五) 當對、相當るに足る程の數。(六) 氣儘、氣儘であつて道理に背いたことをする。(七) 妃、配偶。(八) 孤、孤、自分ひとり住居。(九) 中路、路中に同じ。(十) 銜、くは

【題義】蔣注に「諸本、贈李宗閔の字あり。或は云ふ、猛虎行は、樂府の舊題にして、前詩の類に

非ざるなり。大抵、この題、誤つて、上題、贈李宗閔の四字を以て猛虎行の上に綴り、後人、これに因る。その實、この詩は、宗閔の爲に作らざるなり。今、題、この詩の意を按ずるに、公必ず爲にするなきの作に非ず。舊題にして託するに新意を以てす、亦た何ぞ爲すべからざらむ。新史と雖も考を失す、本と信するに足らず。然れども、史、詩に因つて謬る、詩、史に因つて傳會するに非ざるなり。その宗閔に贈るの作なることは、疑なし」と云つて居る。まことに、方崧卿が「新書又謂ふ、裴度、李德裕を薦め、宗閔、これを怨み、爲に此詩を作ると。薦事は太和三年に在り、公、歿すること久し、據るべからず」といつた通り、李德裕を推薦した其時の事ではなく、史上に歴然たる事實は見えないが、兎に角、李宗閔が勢を失した時に作つたのであらう。但し、李宗閔を猛虎に比し、猛虎の性質毒惡なる處を寫したのを見ると、宗閔、その人も、矢張、さういふ様な事を遣つたのかも知れぬが、その詳は、今より考へ知ることが出来ない。

【詩意】猛虎といふものは、その性質、極めて毒惡であるが、各、その同類があつて、團結を爲して居る。それが羣を爲して、深谷の間を行くと、あらゆる獸類は、その威風を望んだばかりで、恐れ入つて、平伏して仕舞ふ。猛虎は、自分では黃熊の父を食ひ、子には赤豹の子を宛がつて食はしめる。すでに、熊豹の肉を態態擇ぶ位であるから、兎や狸の如き小さな獸類は見むきもしない。眞晝に谷間に眠つて居ると、その眼中、なほ百歩の間を見透す程の威力があつて、如何なる獸類も怖れて近づか

ない。猛虎は、自分に敵對するものなきを誇り、その氣性は、如何にも我儘であつて、且つ道理に合はぬ事をさへ敢てする。そこで、一たび怒り出すと、骨肉恩愛の親をも忘れ、朝には其子を殺し、夕には其雌を食ふことさへある。ここに於て、その同類の者どもは、その暴威に堪へず、四に散じ去り、やがて、猛虎は、唯だ獨り其住處に遺つて來た。すると、狐どもは、猛虎の同類を失ひしに乘じ、これを馬鹿にして、その洞窟の入口に聚まつて鳴き、鳥鶴も從つて噪ぎ立てた。猛虎は、うるさくて堪まらぬ處から、洞窟から出て來て之を逐ふと、その隙を覗つて、猴が洞窟に入つて、猛虎の住處を占領し、中から其入口を塞いだので、さしもの猛虎は、歸るところを失つて、まごまごして大に閉口した。誰か猛虎を暴惡なりといふか。今しも、その住處を失ひ、山路の間に於て悲啼して居るのは、まことに氣の毒である。かくの如く、弱りはてて、大に氣力も抜けて仕舞つたものだから、前に猛虎母子に食はれた熊や豹の一族が、その仇を報いむが爲に來り襲ひ、豹は其尾を噛み、熊は其頤を攫み、猛虎を散散な目に合はした。猛虎は、死ぬことは厭はぬが、前日暴威を恣にした其所行に比して、今日の衰態あまり甚しいと愁づるばかりである。猛虎は、助勢するものも無いから、力盡きて、坐ながら死んで仕舞つた。讀者よ、猛虎の威を以てしてさへ、その末路は、かくの如く、まことに見じめなものであつたので、まして、汝等の如き細微なるものは、如何なる死に態をするか、豫め測り知ることが出來ない。顧みれば、猛虎が死んだのは、その匹儔を亡つて孤立したからであつて、それ

につけても、同類が相親んで團結をなし、それで、一大勢力を形成するといふことは、最も必要である。元來、ふるくから關係のあるものは、結ぶに信義を以てすべく、特別に親密の關係あるものは、結ぶに私情を以てすべく、さうして、團結して互に助け合ふ様にすれば、滅多に不慮の禍に罹ることとは無い。これに反して、親故の者でさへも、その交誼を保つことが出來ぬ様であれば、全く他に對する道を知らず、謂はゆる縦にして且つ乖れることの最も甚しいもので、誰しも、決して汝を信せず、全然孤立するより外は無いことになる。

【餘論】何分にも、李宗閔に關する事實が不明であるから、解釋も的確を失する嫌があるが、兎に角、李宗閔も純然たる君子ではなく、一時勢力を得た時には、勝手な振舞を爲し、その爲に、一朝失意の地に立つと、誰も之を援助するものがなく、遂に慘禍を免れなかつたものと見える。尤も、この時は、宗閔に關係なく、かくの如き手合を戒めたものとしても宜しい。朱竹垞は「聲色太だ風、語大に直、前篇の婉雅、蘊藉あるに若かず」といひ、又結四句を評して「正意、指し得て太だ實なるを嫌ふ」といつて、その餘りに直截なるに懐らぬ様である。乾隆御批には前首と併せて「二首皆哀吟、涕泣して道ふ、宵雅の遺則なり」とある。

韓昌黎集卷七

古詩

雪後寄崔二十六丞公 雪後、崔二十六丞公に寄す

藍田十月雪塞關 藍田十月、雪、關を塞ぐ。

我與南望愁羣山 我、興きて南望、羣山愁ふ。

攢天鬼嵬凍相映 天に攢まつて、鬼嵬、凍つて相映す。

君乃奇命於其間 君、乃ち命を其間に寄す。

秩卑俸薄食口衆 秩は卑く、俸は薄くして、食口衆し。

豈有酒食開容顏 豈に酒食の容顏を開くあらむや。

殿前羣公賜食罷 殿前の羣公、食を賜うて罷み、

驂驢踏路驕且閑 驂驢路を踏んで、驕り且つ閑へり。

古詩 雪後寄崔二十六丞公

【字解】 ① 藍田 長安の東南

に當り、終南山脈の躡きしとする處

に在る。古しへの秦の嶺關、今の

陝西省西安府藍田縣。 ② 十月

即ち初冬。 ③ 我興 長に起き出

でたこと。 ④ 秩 官等。 ⑤

俸 月給。 ⑥ 食口 食するも

の。 ⑦ 開容顏 愁顏を開いて歡

笑する。 ⑧ 羣公 公卿輩。 ⑨

賜食 天子より御膳に召し出され

ること。 ⑩ 驂驢 韓天子傳に「左

に驂驢を服して、驂驢を右にす」と

稱多量少鑿裁密、多きを稱り、少きを量り、鑿裁密、  
 豈念幽柱遺榛菅、豈に念はむや、幽柱の榛菅に遺らるるを。  
 幾欲犯嚴出薦口、幾びか嚴を犯して薦口を出さむと欲す。  
 氣象肆兀未可攀、氣象肆兀、未だ攀つべからず。  
 歸來殞涕揜關臥、歸り來つて、涕を殞し、關を揜うて臥す。  
 心之紛亂誰能刪、心の紛亂、誰か能く刪らむ。  
 詩翁憔悴斷荒棘、詩翁、憔悴して荒棘を斷る。  
 清玉刻佩聯玦環、清玉、佩を刻して、玦環を聯ぬ。  
 腦脂遮眼臥壯士、腦脂眼を遮つて、壯士を臥す。  
 大弰挂壁無由彎、大弰壁に掛けて、彎くに由なし。  
 乾坤施惠萬物遂、乾坤施して、萬物遂ぐ。  
 獨於數子懷偏慳、獨り數子に於て、懷、偏に慳なり。  
 朝秋暮暗不可解、朝秋暮暗、解くべからず。

あつて、郭璞の説に「驛騎は、色、  
 耶の如くして赤し」とある。【一】  
 屬且附、屬とは勢の善きこと。附は  
 詩經に四馬既附とあつて、その注に  
 「調習なり」とある、即ち調練を経た  
 ること。【二】屬、人物を見分  
 けて登庸する。【三】幽柱遺榛菅  
 柱の名木が遺榛菅茅の中に忘れられ  
 て在る。【四】犯嚴、禁を犯す、  
 即ち職外の仕事をする。【五】薦  
 口、推舉の言葉。【六】肆兀、肆  
 しきこと、六つかしきこと。【七】  
 揜、この關は即ち門。【八】斷  
 能刪、斷は除き去る、拂ひ退ける。  
 【九】詩翁憔悴斷荒棘、詩注に「詩  
 翁は、孟郊を謂ふ。斷荒棘とは、  
 已に死するを言ふなり」とある。  
 【一〇】清玉刻佩聯玦環、詩注に「白  
 虎通、玦は環の周ならざるなり。說

我心安得如石頭

我が心安んぞ石の如く頑なるを得む。

とある。【二】關脂遮眼、目やにが目を閉ぢ塞ぐ。目やには、本と涙管から流れ出る液、即ち涙が眼珠の表面を磨き洗つたので  
 あるが、ここでは、關から出た脂と考へたのである。【三】臥壯士、これは驕奢を指す。頭緒は、中年の頃、久しく目を病んで、一時  
 は潰れさうであつたが、その内に、幸にも全癒した。【四】大弰挂壁、詩經に形弓環合とあつて、大弰とは大きな弓。【五】遂  
 生育すること。【六】慳、意地の悪いこと。【七】朝秋暮暗、秋は歡歡、暇り泣をする。暗はなげく、泣く。つまり、朝夕泣いて  
 居る。楚辭に長嘆息而增歎とあり、後漢書に「暮陵の郭を望み、暗いて曰く、氣往なるかな」とある。

題義

崔二十六は、前にも見えて居た通り、名を斯立、字を立之といひ、矢張、韓門に遊んだ人で、  
 この頃、藍田縣丞といふ微官に居た。この詩の破題に藍田十月とあるのは、元和十年十月で、その  
 頃、孟郊は已に死し、張籍は目を煩つて居たから、詩翁壯士の句がある。この詩は、雪後、崔斯立に  
 寄せ、その人を懐ふに因つて、朋友の振はざることを嘆息したのである。

詩意

まだ初冬の頃であるのに、料らずも、大雪が降つて、藍田關も塞がつて、通行も出来ぬとい  
 ふ話、われ亦た早起して南望すれば、羣山慘澹として、さながら愁ふるが如く、峰尖鬼窟として天  
 に攢まり、しかも、それが氷雪の爲に凍合し、寒光凜然、相映して見える位。しかも、君は關の在る  
 藍田といふ處の縣丞となつて、命を其間に寄せて居られるが、この劇寒の折から、如何に起居するか  
 と、第一それが案じられる。君は、官等も低く、月給も手薄であるのに、寄食する人が多いから、と

ても酒食を豊にし、愁顔を開いて打興することなどは出来ぬ。おもへば、殿前の羣公卿は、時たま、天子から御宴に招かれ、結構な者を頂戴し、その出入の際は、赤毛の名馬に跨り、その馬は、まことに勢よく、且つ十分訓練されて居るから、乗つて居る人まで、さも得意らしく見える。しかも、これ等の羣公卿は、いづれも、才能ある人か如何か。元來、才能の多少を量り、人物を嚴密に見分けて登庸するといふのが、必然の事であるのに、君の如き人が、微官に居るのは、たとへば、幽柱の名木が荆榛菅茅の間に棄てられたと同じで、まことに、意料外の事である。予は、僧越ながら、おのが職分を超えて、君の爲に推薦の言葉を出さうといふので、幾たびか決心したが、何分あたりの状勢が六つかしくて、到底うまく運ぶことが出来ず、むなしく、茅屋に歸り來り、流るる涙せきあへず、悄然門を閉ちて横臥して居るので、わが心の紛亂は、誰も之を除き去ることが出来ない。わが門下に孟郊といへる詩人があつたが、これも世に容れられず、憔悴の極、遂に窮死し、やがて、荒棘を切り開いて、わづかに埋葬を済ました位、その孟郊の作つた詩を見ると、綺麗な玉で、腰の飾とする環佩を作り、玦だの、環だのが相連つて居るが如く、光彩陸離として、人目を眩するばかり。又一人張籍といふ者もあるが、頃ろ目を煩らひ、目やにに目おたを塞がれて、大に弱つて居る處は、折角の大弓も、壁に挂つた儘では彎くことが出来ぬと同じく、天晴の才ありながら、今は詩どころでは無いといふ境涯である。乾坤は、汎く恩恵を施し、萬物をして各、生育せしめるに、ひとり以上數

子に對し、ことさらに意地を悪くして、各、これを困窮せしめて居るので、朝夕歎き悲んでも、その理由は、解するに由なく、わが心、もし石の如く頑固であれば、何とも思はず、冷眼に看過するが、何分さうも成らず、まことに同情の切なるに堪へられぬ次第である。

【餘論】朱竹垞は、全篇を評して「蒼勁餘あり、但だ婉潤の致に乏し、然れども、却つて練り得て細に入る。大約、亦た杜詩に本づいて來る。第だ中間力を著け得ざる處、稍や杜に遜る、詩と文と、固より是れ天分、兩派に就くを見るべし」といひ、心之紛亂の句を評しては「鍛語の妙、幾んど神に入る」といひ、清玉刻佩の句を評しては「聯珠環、俱に斷荒棘に本づいて來る、即ち玉樹を埋めて土中に著くるの意」といつた。次に乾隆御批には「起調激越、極めて同谷歌に似たり」といつて、専ら破題の四句を推賞して居る。

送僧澄觀

僧澄觀を送る

浮屠西來何施爲。浮屠、西より來つて、何をか施爲する、

擾擾四海爭奔馳。擾擾四海、争つて奔馳。

構樓架閣切星漢。樓を構へ、閣を架して、星漢を切る、

【字解】「浮屠、後漢書襄楷傳に「浮屠は即ち佛陀、但だ聲轉するのみ」とあつて、即ちブツダの音

譯、浮屠、波歇、物陀、母駄、佛徒、那多とも書くが、皆同じで、文字に

誇雄鬪麗止者誰

雄を誇り麗を鬪はして、止むものは誰ぞ。

僧伽後出淮泗上

僧伽、後に淮泗の上に出で、

勢到衆佛尤恢奇

勢は衆佛に到つて、尤も恢奇。

越商胡賈脫身罪

越商胡賈、身罪を脱せむとし、

珪璧滿船寧計資

珪璧滿船、寧ろ資を計らむや。

清淮無波平如席

清淮波なく、平、席の如し。

欄柱傾扶半天赤

欄柱傾扶、半天赤し。

火燒水轉掃地空

火は燒き、水は轉じ、地を掃うて空し。

突兀便高三百尺

突兀便ち高し三百尺。

影沈潭底龍驚遁

影は潭底に沈んで、龍驚き遁れ、

當晝無雲跨虛碧

晝に當つて雲なく、虛碧に跨る。

借問經營本何人

借問す、經營、本と何人。

道人澄觀名籍籍

道人澄觀、名籍籍たり。

意味があるのではない。舊譯では知者、新譯では覺者としてある。(一)西來、印度より來りしこと。(二)切星漢、天上の銀河にも觸れる。(三)止者誰、これが最後といふものもな、引き續いて絶えざること。(四)僧伽、高僧の名、李愚の泗州普光王寺碑に「僧伽は、龍朔中、西より來る。かつて、臨淮を經制し、發念して寺を置き、すでに成る。中宗、名を普光王と賜ふ。景龍四年三月二日を以て、京に示滅す」とあり、紀聞錄に「僧伽大師は西域の人、姓は何氏、唐の龍朔の初、名を楚州觀興寺に歸す。後、泗州臨淮縣信誠坊に於て、地を乞ひ、檀を施し、金像一軀を創り得たり。上に普照王佛の字あり、遂に寺を建つ。中宗、名を開き、使を遣し、迎へて應福寺に入る。景

愈昔從軍大梁下

愈、むかし、軍に従ふ大梁の下、

往來滿屋賢豪者

往來す滿屋賢豪の者。

皆言澄觀雖僧徒

皆言ふ、澄觀は、僧徒と雖も、

公才吏用當今無

公才吏用、當今無しと。

後從徐州辟書至

後徐州より辟書至る、

紛紛過客何由記

紛紛過客、何に由つてか記せむ。

人言澄觀乃詩人

人は言ふ、澄觀乃ち詩人、

一座競吟詩句新

一座競うて詩句の新なるを吟す、

向風長嘆不可見

風に向つて長嘆、見るべからず、

我欲收斂加冠巾

我、收斂して、冠巾を加へむと欲す。

洛陽窮秋厭窮獨

洛陽窮秋、窮獨に厭き、

丁丁啄門疑啄木

丁丁門を啄いて、啄木かと疑ふ。

有僧來訪呼使前

僧あり來り訪ふ、呼んで前ましむれば、

龍四年、崩坐して終る。中宗、寺に于て塔を建てしむ。俄にして、大風欲起、臭氣、長安に滿つ。近臣奏す、僧伽、化驗して臨淮に在り、恐らくは、歸らむと欲す、と。中宗、心に許す。その臭、俄に息み、奇香飄烈、五月送つて臨淮に至り、塔を起して供養す、即ち今の塔なり」とあり、又洪興祖は「李太白の僧伽歌に云ふ、此僧本是南天竺、爲法頭陀來此國」と。又云ふ、盛子孫三鏡江淮、久、學過真心說空有」と。蓋し、江淮に相遇ふなり。太白、豪傑中に于て郭子儀を識り、隱逸中に司馬承貞を識り、浮屠中に僧伽を識る、すなはち其人知るべし」といつて居る。泗州は今直隸省鳳陽府に屬して居る。【一】珪璧、ともに玉。【二】虛碧、碧色に同じ、即ち大空。【三】籍籍、

伏犀挿腦高頰權。

伏犀腦に挿んで頰權高し。

惜哉已老無所及。

惜いかな、已に老いて及ぶところなし。

坐睨神骨空潸然。

坐ながら、神骨を睨んで、空しく潸然。

臨淮太守初到郡。

臨淮の太守、初めて郡に到る。

遠遣州民送音問。

遠く州民をして、音問を送らしむ。

好奇賞俊直難逢。

奇を好み、俊を賞する、直に逢ひ難し。

去去爲致思從容。

去去爲に致せ思從容。

漢書劉屈氂傳に「事歸諸たり、如何

ぞ歸すべきや」とあり、説文に「歸

歸は歸聲」とある、即ち人口に噴し

きこと。【二】從軍大梁下、宣武軍

幕に佐たりしことをいふ。【一〇】

公才、晉書陳騭傳に「王導、常に騭に

問つて曰く、孔愉は、公才あつて公

望なし、丁潭は公望あつて公才なし、

之を能ぬるものは其れ類に在るか」と

ある。公才は公務を處理する才。

【二】東川、漢書酷吏傳に「爪牙の

更を能にするが爲に任用す」とある、官吏として役に立つ。【三】徐州府書至、徐州節度使張建封の幕に従事となりしことをいふ。

【四】我欲數加冠巾、前に軍師を送る時に、方幹數之、且欲冠其類とあつて、これと同類、即ち其心を數盡し、選置させて冠巾を加へるといふこと。【五】丁丁、詩經に伐木丁丁とある。【六】啄木、鳥の名。【七】伏犀、後漢書李固傳に「狀如犀、奇表あり、頂角犀を覆す」とあつて、その注に「伏犀なり、脊、額上に當り、髮際に入つて隆起するを謂ふなり」とある。つまり、額の角の骨が隆起して犀角を伏せた體に見える。【八】高頰權、文選洛神賦に「鬢承權」とあつて、李善の注に「權は兩頰」とある、頰權は即ち頰骨。【九】臨淮太守、唐書地理志に泗州臨淮郡とあつて、これは泗州刺史を指す。【一〇】爲致思從容、わが從容として相思ふ意。

【題義】澄觀の略傳は、あまり書物に見えぬが、この詩に據つて見ると、僧伽の塔を泗州に建てた

ことがあつて、當時の一名僧である。この詩は、韓愈が貞元十六年洛陽に在る時に作つたのである。

【詩意】佛教は、西印度から傳來し、如何なる事を施し爲すか知らぬが、これを崇信するもの、愈よ

多く、四海の蒼生、擾擾として、争つて其方に奔馳して、齊しく之に歸依し、因つて、到る處に寺を

建てるといふので、樓を構へ、閣を架し、その高きことは、天上の銀河にも接觸せむとし、加之、

結構裝飾の雄麗を競うて、止むところを知らぬ位。ここに僧伽といふは、近時の名僧であつて、淮西

二水の邊より出で、その羣衆を歸服せしめる勢は、衆佛に比敵すべく、特に恢奇と稱せられて居た。

そこで、越國だの、胡地だの商人は、元と邊境の者で、利を逐ふを第一とし、隨分人を欺いたりし

て、ひどいことをするが、一たび僧伽の高徳を聞くと、恐れ入つて、其身の罪障を逃れむが爲に、盛

んに財寶を喜捨し、舟に積み載せて淮水より運ぶ珪璧の類は、いくらとも分からねぬ位であつた。その淮

水は、極めて清く、流も緩かた、平かなることは席の如く、その河の邊に僧伽の住んで居た寺があつ

て、そこに、記念の塔があるが、その欄柱などは、皆朱塗で、眞直に押し立てて、半天に赤く見える。

地上に於ては、或は失火があつたり、洪水があつたりして、その邊の建物は、すべて一掃されたが、

この塔のみは、依然として儼存し、突兀として、三百尺の高さに及び、巍然として、一方に雄視して

居る。その塔の影が淮水の深い淵にうつると、そこに栖む龍も驚いて遁るべく、又白晝に雲なくして、

よく晴れた時には、大空に跨るが如く見える。この塔を経營した人は、誰かといふと、即ち澄觀と

いふ坊さんであつて、その名聲は、籍籍として、人口に膾炙しい位。前年、予は、宣武軍の幕に佐として、大梁の下に居たことがある。その時、往來して、わが寓居を訪ふものは、皆その地の賢豪であつて、いづれも、澄觀は坊主であるが、公務を處理する才もあり、官吏としても役に立つて、當今の世には、一寸その類も無い程であると云つて居た。その後、徐州の張建封から召し出しの文書が来た故に、大梁を引拂つて轉任した。もとより、紛紛たる過客も同然であるから、澄觀の名は聞いたが、これを記憶して居なかつた。それから、徐州に行くこと、又ぞろ、澄觀の噂をするものがあつて、あれは天晴な詩人であるといひ、一座の人人は、競うて頃ろ作つたといふ詩句を朗吟して聞かせて呉れた。かくの如く、澄觀は世才もあり、詩才もあり、今の世には珍らしい坊さんであるが、まだ縁なくして之と相見ず、風に向つて、むなしく長嘆し、成らうことなら、その出世間の心を取り戻し、冠巾を加へて還俗したらばと思つた。今、予は洛陽に在るが、偶ま秋の末の物淋しき風景に對し、おのが身の貧窮孤獨なるに飽きはてて、大に塞ぎこんで居ると、ほとほとと門を敲くものがあつて、丁度、啄木鳥が木のうろをつつくが如くであつた。誰かといへば、坊さんが尋ねて來たとのことで、因つて呼んで之を進ましめ、第一に、その容貌を見ると、兩方の額骨は犀角の伏したるが如く、それが腦の邊まで挿み、頬の骨も高くなつて、まことに異相である。さはれ、惜むべし、大分年が寄つて居て、還俗したとて、最早間に合はず、今少し若かつたらばと思ふばかりで、坐ながら、その神骨の奇

なるを眺めては、涙潸然として流れる。今しも、新任の泗州刺史は、初めて郡に至り、遠く州民を澄觀の處に造して起居を候せしめ、早く歸つて貰ひたいと云つたさうで、澄觀も、近近その地に歸るといふから、まことに名残り惜い。われは、奇を好み、俊を賞し、かういふ人物は大好であるが、今後、なかなか逢ふことが出来ず、澄觀が此地を去るに就いて、從容として相思ふ我が意を致したので、その真意を推察して貰ひたい。

【餘論】 僧伽より澄觀を引き出し、その人物を賞して、別離に及んだのである。朱竹垞は「稍や波瀾歩驟あり、大約四節に分つ。意、筆下に操縦自如、枯澀ならず、これを讀めば、意趣餘あるを覺ゆ」といひ、中間の處で「塔影を狀する妙絶、直に塔を將て説いて完く、方に僧名を出し、倒挿法、遂に頂に緊し、吏才詩才の二節に分つ」といひ、結末に於ては「これは是れ、その儒に歸する由なく、奈かむともするなく、且つ泗州に適かむとするを嘆す」といつた。

山南鄭相公樊員外酬答爲詩其末咸有見及語樊封以示  
愈依賦十四韻以獻

山南の鄭相公、樊員外、酬答して詩を爲り、その末に咸な及ばるの語あり、



梁維西南屏山厲水刻屈梁は維れ西南の屏、山厲しうして水刻屈せり。  
 稟生宵勦剛難諧在民物生を粟くる、勦剛に宵たり、諧へ難きは、民物に在り。  
 榮公鼎軸老烹幹力健侃榮公は鼎軸の老、烹幹力健侃。  
 帝咨女予往牙轟前空塊帝咨ふ、女、予がために往けと、牙轟、前に空塊たり。  
 威風挾惠氣蓋壞兩剛拂威風、惠氣を挾み、蓋壞、兩つながら剛拂す。  
 茫漫華黑間指畫變悅歎茫漫たり華黑の間、指畫すれば、變じて悅歎たり。  
 誠既富而美章彙霍炳蔚誠に既に富んで美なり、章彙、霍として炳蔚たり。  
 日延講大訓龜判錯衰敵日に延いて大訓を講じ、龜判、衰敵を錯ゆ。  
 樊子坐賓署演孔刮老佛樊子は賓署に坐し、孔を演じて老佛を刮る。  
 金春撼玉應厥臭劇蕙鬱金春いて撼けば、玉應す、厥の臭、蕙鬱よりも劇し。  
 遣我一言重踞受惕齋慄我一言の重きを遣る、踞いて受け、惕んで齋慄す。  
 辭慳義卓闊呀豁疚拮据辭慳にして、義卓、闊たり、呀豁、拮据に疚る。

如新去叮嚀雷霆逼颺颺  
 綴此豈爲訓俚言紹莊屈

新に叮嚀を去つて、雷霆颺颺に逼るが如し。  
 此を綴る、豈に訓と爲さむや、俚言、莊屈に紹ぐ。

【字解】【一】梁、即ち梁州、唐書地理志に「梁州は、山南西道に屬す、德宗の興元元年、改めて興元府となす」とある。今の陝西漢中府。即ち鄭餘慶が節度使として駐在せる處。【二】西南屏、屏は藩屏、詩經に大邦維屏とある。【三】勦剛、廣韻に「勦は剛捷なり」とある。【四】榮公、鄭餘慶は榮陽郡公に封せられしが故に云ふ。【五】鼎軸、朝廷の鼎鼐となり樞軸となる、極めて重要な地位。【六】烹幹、幹注に「烹は、老子、大國を治むるは小幹を烹るが如しの義を取り、幹は幹旋を謂ふ、猶ほ宰割と云ふがごときなり」とあるが、鄭剛立の注には「烹の字は、上の鼎の字に頂し、幹の字は、上の軸の字に頂し来る、舊注未だ脱む」といつて、この方が善い。【七】健侃、侃強と同じ、漢書陸賈傳に「新造未集の道を以て此に侃強す」とあり、文選に侃侃強強以撰臂とある。即ち強力を以て他を威服すること。【八】女予往、書の堯典に「帝曰く、兪り、汝往けや」とあり、文選に侃侃強強以撰臂とある。【九】空塊、字ともに塵埃で、即ち塵を捲いて押し進めるといふこと。【一〇】畫、文選子虛賦に「下摩三圖畫、上拂三羽畫」とあつて、つまり天地。【一一】剛拂、幹注に「下摩三圖畫、文選に剛拂に作る、賈山傳贊、自下剛、上、序傳、只だ剛に作る、古しへ、剛、剛の字、皆通用す、揚子に剛三虎牙、莊子に喜則文氣相剛、漢書衛山王贊に臣下漸剛、使然、今集韻、剛の下摩の字を出さず、非なり」とある。それから、杜市の詩に氣剛風買過とある。剛拂は剛かし拂ふ。【一二】華黑、書經に「華陽黑水、惟れ梁州」とあつて、山南の所領をいふ、兩者ともに襄陽縣に在る。【一三】悅歎、文選思立賦に歎三神化而輝輝とあつて、李善注に「歎は輕舉の貌」とある。【一四】炳蔚、鳥に「大人虎嘯、その文炳たり。君子豹變、その文蔚たり」とある。二字ともに文章を形容して云ふ。【一五】齋慄、公羊傳に「費とは何ぞ、璋は判白、弓は編賈、龜は背純」とあつて、何休の注に「判は半なり、半圭を璋といふ」とあり、孔穎達の傳に「白は天子に藏し、青は諸侯に藏す、故に判といふ」とある、龜判は龜と玉。【一六】衰敵、劉熙の釋名に「衰は卷なり、卷龍を衣に衰くなり」と



玉を執るものが、衰敝を著るものと一緒になり、官民の重だちたるものは、そこに掛けて講説をするといふことに成つた。それから、わが友樊宗師は、節度副使として、賓客に坐し、孔子の教を演舌して、釋道二教を排撃し、専ら正學の鼓吹に力めた。その間、二人は唱酬されたが、その作を見ると、金鳴つて玉應ずるが如く、それにつけても、二人の交契は、その臭、蘭や鬱金よりも甚しいといひたい位。その詩の中には、子の事を云つてあるとかで、態態、寄せられたから、跪いて之を受け、謹んで拜誦すると、言辭簡約、義理富厚、そして、子の缺點に就いて、特に忠告を賜はつた個處もあるの、新に耳囊をはちくつた後に、雷霆のおどろおどろしき、颯風の凄じきを聴くが如く、全く以て恐れ入つて仕舞つた。そこで、この詩を作つて御返辭としたが、もとより訓と爲すに足らず、俚下の言、ただ莊周屈原に繼ぐだけである。

【餘論】はじめに、鄭餘慶の政を爲すをいひ、次に樊宗師に及び、次いで二人の唱和を寄せられたことから、この詩を作つたことに及んだので、次序は整然として居るが、その感想といふのは、如新去叮嚀の二句だけで、ひどく恐れ入つて仕舞つた故に、韓愈の眞精神が分ならず、要するに、龍頭蛇尾である。そして動もすれば海溢に流れ、強ひて韻を越ふ様な處があつて、韓愈の作としては、もとより下位に居るものである。前に引いた通り、樊宗師の體に效うて、わざと奇詭の語を試みたのであらう、朱竹垞が「艱澁にして甚だ意味なし」と云つたのは、やや苛酷ではあるが、まさしく正論に

中つたものである。それから、鄭笑二人の原作は、今傳はつて居ない。

奉和武相公鎮蜀時詠使宅韋太尉所養孔雀

武相公の蜀に鎮する時、使宅に韋太尉が養ひしところの孔雀を詠するに和し奉る

穆穆鸞鳳友、何年來止茲。穆穆たり鸞鳳の友、何の年か來つて茲に止まる。

飄零失故態、隔絕抱長思。飄零して故態を失ひ、隔絶して長思を抱く。

翠角高獨聳、金華煥相差。翠角、高く獨り聳え、金華、煥として相差ふ。

坐蒙恩顧重、畢命守堦墀。坐に恩顧の重きを蒙る、命を畢るまで、堦墀を守れ。

【字解】(一)穆穆、文彩ある貌。(二)鸞鳳友、鸞鳳の下に注して置いた。(三)翠角、孔雀の頭の上に毛が尖つて立つて居て、恰も角の如きをいふ。即ち冠毛。(四)金華、孔雀の尾の端に圓く金色の斑文あるをいふ。(五)煥相差、差は參差で、煥然として次第に並ぶ。(六)堦墀、堦は階下の地。

【題義】武相公は武元衡、舊唐書の本傳に「元衡、字は伯蒼、河南緱氏の人、進士登第、元和二年正月、門下侍郎平章事に拜せられ、出でて劍南西川節度使となる」とある。使宅は、節度使の官舎。韋太尉は韋阜、舊唐書の本傳に「阜、字は城武、京兆の人、貞元元年、檢校戸部尚書劍南西川節度使に

拜せらる。順宗即位、檢校太尉を加ふとある。爾雅翼に「孔雀は、南海に生ず、蓋し鸞鳳の亞なり」とある。この詩は、武元衡が節度使となつて、蜀中に赴任せし時、その官舎に前任の韋阜が飼つて置いた孔雀が居たので、それを詠じた詩を作つた。それを韓愈が見て、和して此首を作つたのである。但し、武元衡は、在任六年にして、元和八年三月、召し還されて朝政を乗ることになつたので、韓愈が詩を見たのも、その時に相違ないから、即ち追和したのであらう。

【詩意】孔雀は、羽毛に文章があつて、鸞鳳の同類と稱すべく、まことに見事なものであるが、何時から茲に來て養はれて居るのか、檻の中に押し込められて、自由を缺き、飄零して、その故態を失ふも無理ならず、その産地たる熱帯地方とは、遙に隔つて居るから、長き思に堪へぬらしく、まことに傷ましいことである。しかし、打見れば、翠色の冠毛は、高く獨り聳え、金色の斑文は、煥然として並列し、依然として、舊の如く、格別衰へはてた様でもない。何にしろ、ここに養はれ、坐ながら恩顧の重きを蒙つて居る上は、主人の厚意に報いて、生涯、この階下の地を守つて、おとなしくして居るべき筈である。

【餘論】區區たる短章、もとより平生の伎倆を發揮するに及ばず、おまけに、題が題であるから、極めて平凡に出來て居るのも、蓋し止むを得ぬ次第である。

感春三首

感春三首

偶坐藤樹下暮春下旬間。

偶坐藤樹の下に坐す、暮春下旬の間。

藤陰已可庇落葉還漫漫。

藤陰すでに庇すべく、落葉、還た漫漫。

壘臺新葉大瓊瓏晚花乾。

壘臺として新葉大に、瓊瓏として晚花乾く。

青天高寥寥兩蝶飛翩翩。

青天高く寥寥、兩蝶飛んで翩翩。

時節適當爾懷悲自無端。

時節適ま當に爾るべし、悲を懷いて、自ら端なし。

【字解】(一)暮春、陰曆の三月。(二)可庇、物を蔽ふことが出来る。(三)落葉、落花に同じ。(四)漫漫、地上に散り散きたる貌。(五)壘臺、壘臺に同じ。(六)瓊瓏、花の落つる聲。(七)翩翩、蝶は二羽の貌。(八)翩翩、或は翩翩に作り、又翩翩に作る、皆同じ。

【題義】感春とは、春時節物の移り行くさまを見て、心に感じたので、この詩は、元和十一年三月、中書舍人たりし時の作である。

【詩意】春は暮れ行く三月下旬の頃、ふと藤の下に坐した。藤の木陰は、すでに物を蔽ふに足るべく、落花は地に散り鋪いて、漫漫として居る。見上げれば、壘臺として、若葉は大きく、耳を澄ませば、瓊瓏として落つる残の花は、やがて乾いて、塵と成つて仕舞ふ。折から、天は晴れて、寥寥として

居るし、花の香を尋ぬる雌雄の雙蝶は、翩翩として飛んで居る。藤の花は、百花の殿といふべく、その藤が散つたから、春は、もう盡きたので、いかに名残が惜しい。時節の推移上、必然の事で、悲むにも當らないと思ふものの、矢張、心中に悲を懐くことを免れない。

黃黃燕菁花。桃李事已退。黃黃たる燕菁の花、桃李、事すでに退く。

狂風簸枯榆。狼籍九衢内。狂風、枯榆を簸ひ、狼籍たり、九衢の内。

春序一如此。汝顔安足頼。春序、一に此の如し、汝の顔、安んぞ頼るに足らむ。

誰能駕飛車。相從觀海外。誰か能く飛車に駕し、相從つて海外を觀む。

【字解】(一) 燕菁、かぶ、方言に「燕菁は、燕菁なり、燕菁これを類といひ、齊楚これを類といひ、關西これを燕菁といひ、越韓の間、これを大芥といふ」とある。(二) 事已退、花の盛りは、すでに終つた。(三) 枯榆、榆樹は甚だ高大で、未だ葉を生ぜざる内に、枝間は先づ葉を生じ、その形が錢に似て小、色白くして串を成すので、これを榆葉といひ、俗に之を榆錢といふ。それから、葉が落ちて葉も亦た落ちて落ちる、つまり、葉が即ち花であつて、その葉の枯れた色みしたのを枯榆といつたのである。(四) 九衢、都大路。(五) 春序、春の節序。(六) 飛車、山海經に「奇肱國の人、一臂にして百食を取り、飛車を作り、風に従つて遊行す」とある。【詩意】燕菁の花は黄色に咲き出で、桃李の花は、開いたけれども既に散つて仕舞ひ、風すさまじく榆の葉を簸り落し、都大路に狼籍として居る。春の節序の推移は、かくの如く、榮枯盛衰、必ず相承けるものと決まつて居るから、汝の顔の美しき、どうして頼むに足ることが出来やう。もし飛車に駕し、風に従つて遠く行くものがあるならば、われは、これに従つて、海外を遊觀したいので、つまり、この浮世より脱出したいと思ふのである。

晨遊百花林。朱朱兼白白。晨に百花の林に遊べば、朱朱と白白と。

柳枝弱而細。懸樹垂百尺。柳枝は弱にして細、樹に懸つて垂ること百尺。

左右同來人。金紫貴顯劇。左右同じく來る人、金紫、貴顯劇し。

嬌童爲我歌。哀響跨笙笛。嬌童、我が爲に歌ふ、哀響、笙笛を跨ゆ。

艷姬蹋筵舞。清眸刺劍戟。艷姬、筵を蹋んで舞ふ、清眸、劍戟を刺す。

心懷平生友。莫一在燕席。心に平生の友を懷ふ、一も燕席に在るなし。

死者長眇芒。生者困乖隔。死者は長く眇芒、生者は乖隔に困めらる。

少年眞可喜。老大百無益。少年、眞に喜ぶべし、老大、百ながら益なし。

【字解】(一) 金紫、金帯紫綬、高官の人の禮服。(二) 貴顯劇、貴顯なること甚し。(三) 跨笙笛、笙笛にも跨る。(四) 艷、席を踏みしめる。(五) 清眸刺劍戟、傅武仲の舞賦に「盼三股股一則態三清眸」とある。そして、この句は、眸子清朗、劍戟の刺すが如し

といふ意。【六】渺茫に同じ。

【詩意】朝早く、百花の咲き亂れた林の中に行つて見ると、紅いのや、白いのや、相映じて紛糾して居る。それから、柳の枝は、しなやかにして細く、それが木に懸つて、百尺も長く垂れて居る。左右を見ると、同じく、花見に来た人があるが、いづれも、金帯紫綵の禮装いかめしく、世に時めく貴顯の大官たることは言はずもがな。そこで、花下に簾を開いて、心のどかに留賞すると、嬌童は、我が爲に歌ひ、その聲の匂やかにして悲げなるは、笙笛も及ばず、麗姬は、席を踏みしめて舞ひ、その眸子の清らかなるを移して我が方を眺めると、さながら、劍戟を以て刺された様である。ここに、懐かしきは、平生の親友で、一人も此席に来て列して居るものもなく、死んだものは、長しへに渺茫として、もとより再會に由なく、生きて居るも、兎角、何事かに邪魔されて相見ることが出来ない。願みれば、少年の頃は、まことに喜ぶべく、十分愉快を極めたが、年が寄ると、置いてきばりを食つた如く、唯だ一人残されて、あらゆる物事につけて、益するところなく、いたづらに、感涙を増すのみである。

【餘論】東坡は、麗姬の二句を評して「退之の詩、不解文字飲、惟能醉紅裙、清苦自ら飾るもの如し、麗姬踊、能舞、清眸刺劍戟」と云ふに至りては、すなはち知る、この老子、箇中の典、復た淺からず」と云つて、冷かして居る。それから、連作三首の總評として、朱竹垞は「言外、別に一種閑寂の味あり、然れども、意あつて、ことさらに枯淡の調を爲すが若し」といつたが、なる程、神氣流注の活趣を缺いて居るので、前に在つた秋懷などは比べ物にも成らぬやうである。

早赴街西行香贈盧李二中舍人

早く街西に赴きて行香し、盧李二中舍人に贈る

天街東西異、祇命遂成游。天街東西異なるも、祇だ命じて遂に遊を成す。

月明御溝曉、蟬吟堤樹秋。月は明かなり御溝の曉、蟬は吟す堤樹の秋。

老僧情不薄、僻寺境還幽。老僧、情、薄からず、僻寺、境、還た幽なり。

寂寥二三子、歸騎得相收。寂寥たり二三子、歸騎、相收むるを得たり。

【字解】【一】天街、都大路。【二】御溝、宮城を廻る溝。【三】堤樹、御溝の傍に在る堤の樹。【四】得相收、互ひに一緒になる。

【題義】この詩は、朝早く起きて、長安の街西なる或寺に參詣し、盧汀・李逢吉といふ二名の中書舍人に遇ひ、一緒に連れ立つて歸つて來る時、賦して二人に贈つたのである。盧汀は、前にも見えて居たから、ここに述べぬが、李逢吉は、舊唐書の本傳に「字は盧舟、隴西の人、進士の第に登り、元和九

年、中書舍人に改めらる」とある。すると、この詩は、無論九年以後の作で、韓愈は、何の官に居たか分からぬが、もしかすると、十一年正月、中書舍人に遷つた後で、二人と同役の誼があつたのであらう。李逢吉は、小人を以て目せられたもので、韓愈が之と親交ある筈もなく、同役なればこそ、かくの如く詩を示したのであらう。そして、第四句に蟬吟堤樹秋とある上は、その年の秋の事に係るのであらう。

【詩意】ひとしく長安の内ではあるが、吾輩の居宅は都大路の東、寺は西に在つて、いささか懸け離れて居るが、ふと思ひ立つた儘、馬を命じて、ここに遊を成した。時しも、夜の明けむとする頃で、残月は、明かに御溝にうつり、やがて隄樹に蟬が鳴き出して、世は、すでに秋に成つた。その寺の老僧は、情淺からずして、色色世話もして呉れるし、僻地に在るだけに、寺の境内は、極めて清幽である處から、留賞覺えず時を移した。ここに相知れる二三の人が、淋しげに其處に居たから、丁度善いといふので、道づれになり、一緒に馬をならべて歸つて來た。

【餘論】事實は何でもないことであるが、兩聯は、流石に面白いので、蔣注には「三四、語極めて凄麗、曉行の景色、畫くが如し」といひ、朱竹垞は「頷聯、冲淡の趣あり」といひ、何義門は「夫聯、柳渾・何遜の語に似たり」と云つて、ともに、月明蟬吟の一聯を激賞して居る。それから、この詩は中間四句が對偶に成つては居るが、平仄は合拍せず、例の半古半律の一體である。

晚寄張十八助教周郎博士 晚に張十八助教・周郎博士に寄す

日薄風景曠、出歸偃前簷。日は薄くして風景曠く、出でて歸つて前簷に偃す。

晴雲如擘絮、新月似磨鎌。晴雲、絮を擘くが如く、新月、鎌を磨くに似たり。

田野興偶動、衣冠情久厭。田野、興偶ま動き、衣冠、情久しく厭く。

吾生可攜手、歎息歲將淹。吾が生、手を攜ふべし、歎息す、歳の將に淹せむとするを。

【字解】(一)日薄、日の色が薄くなつた。蔣注に「暮注に、薄は迫なり、國語に今會日薄矣、悲事之不集とあり、今、語勢を許にするに、但だ白晝天の謂はゆる旌旗無光白色薄の如きのみ。暮注、是に非ず」とある。(二)擘絮、綿を引きむしる。(三)新月、陰曆二日三日頃の月。(四)厭、あく、あきはてる、蔣注に「厭、本と厭の字、大冒の聲に从ふ、亦た髪に作る、左傳、無厭將及我と同じ」とある。(五)將淹、淹は盡きる、蔣注に「歳は云ふ、淹は當に淹に作るべし、魂なりと。今按ずるに、古字、本と通用す」といひ、李白の詩に東溟下築梁將淹とある。

【題義】この詩は、或日の暮に、賦して張・周二人に寄せたので、原注に「張籍・周況なり」とあり、又一本には周郎の郎の字が無いが、その方が善いかと思はれる。張籍は、前に總説の中に略傳を載せて置いたが、舊唐書の本傳に「籍、字は文昌、調して太常寺太祝に補せられ、國子助教授に轉す」とある。周況は、韓愈の作れる周況妻韓氏墓志に「四門博士周況の妻韓氏は、禮部郎中雲卿の孫、開封尉愈の女」とあるから、韓愈の従弟の娘の婿である。すると、二人ともに國子四門學の教官であつたので、

この詩は、元和七年、韓愈が同じく國子博士であつた時の作であらうと思はれる。

【詩意】日の色が次第に薄くなつて、今日も暮れむとし、夕の景色は、物とはなしに曠濶に見える。子は、一寸散歩して歸宅し、そして、前簷の下に偃臥して居る。先刻打ち見たる田野の景色は如何といふに、暗れた空の白雲は、さながら綿をちぎつたやうであるし、宵にはのめく新月は、恰も鑲を磨いた様である。かくの如き晚景を見て、吟興偶ま動いたが、これにつけても、衣冠を身につけて、官途に升沈することは、心から、すでに厭きはてて仕舞つた。われは、君等二人と手を攜へて、塵外に逍遙したいと思つて居るが、歲月頻りに移り、しかも意の如くならず、元の通り愚圖愚圖して居るのは、まことに嘆息に堪へぬ次第である。

【餘論】この詩も、前首と同じく、半古半律の體であつて、前聯の敘景が殊に面白い。朱竹垞は「昌黎の詩、大抵意真、又振灑せず、境自ら別なる所以」といひ、何義門は「擊絮、磨鑲、皆田野の事、新聲」といつた。すると、第二句の出歸の二字が極めて緊要であつて、中間四句は、これから出て來るのである。

### 題張十八所居

張十八の居るところに題す

君居泥溝上溝濁萍青青

君は泥溝の上に居る、溝濁つて萍青青たり。

蛙謹橋未掃蟬嘒門長扇

蛙は謹しくして、橋未だ掃はず、蟬は嘒いて、門長扇扇。

名秩後千品詩文齊六經

名秩、千品に後れ、詩文、六經を齊ふ。

端來問奇字爲我講聲形

端に來つて奇字を問へば、我が爲に聲形を講す。

【字解】泥溝、地名であらう。【橋】門前の小橋と見える。【蟬】嘒、鳴く、但し蟬に限つて云ふ。【名秩】名秩、官名秩。【千品】種種の階級の人。【六經】六經に本づいて語句を整へる。【問奇字】漢書揚雄傳贊に「劉歆の子棻、かつて雄に従つて奇字を作るを學ぶ」とあつて、奇字は、顏師古の注に「古文の異なるもの」とある。【聲形】周禮に「保掌氏は、國子に六書を教ふるを掌る」とあり、説文に「一に曰く指事、二に曰く象形、三に曰く諧聲、四に曰く會意、五に曰く轉注、六に曰く假借」とある。聲形は諧聲、象形を合稱して六書の義に用ひたのである。

【題義】張十八は、前首に見えた通り張籍。蔣注に「張籍は長安の西街に居る、孟東野の詩に謂はゆる西明寺後窮張太祝なり」とある。すると、この頃、張籍は、まだ眼病に悩んで居たのであらう。又張籍が之に酬いた詩に酬韓庶子と題するを見れば、韓愈が中書舍人から降されて、太子右庶子と成つた時で、韓愈の此詩は、元和十一年五月以後、多分その年の秋に作つたものであらう。

【詩意】君は、長安の西の場末なる泥溝の邊に居るが、名にしおふ溝は、水が濁つて、浮草が青青と一ぱいに成つて居る。そして、門前の小橋を掃除せず、人も橋の上を通らぬから、溝の中には、蛙の聲が轟しく、門は閉ぢた儘で、家の周囲の木には、蟬が頻りに鳴いてゐる。君は、天晴の才學ありな



から、官秩なほ卑くして、種種の階級の人にも後れ、詩文は六經に本づいて、文字を鑿へてある。われは、奇字を問はむが爲に訪問すると、六書の講釋をして呉れて、まことに、有り難き仕合せであつた。

【餘論】朱竹垞は「蛙蟬、是れ村居の音楽、蟬噪林逾靜の二句に本づき、換骨し來り、添へて兩層となす」と云つた。蟬噪は、梁の王籍の蟬噪林逾靜、鳥鳴山更幽といふ一聯の出句で、ひかしから、極めて著名である。韓愈の此聯は、前の月明御溝曉や、晴雲如擘絮と略ぼ相似て居るが、聊か及ばぬ處がある様に見える。それから、張籍の和詩は、前に云へる如く、酬韓庶子と題して、

西街幽僻處。正與傾相宜。尋寺獨行遠。借書常送還。家貧無易事。身病是閒時。寂寞誰相問。只應君自知。

といふので、樊汝霖は、これを評して「公の詩、落句に奇字を用ふ、張が酬答の落句に云ふ、寂寞誰相問、只應君自知」と。亦た揚子雲の事を用ふ、唐人酬答、意に和すること、かくの如し」と云つて居る。

奉酬盧給事雲夫四兄曲江荷花行見寄并呈上錢七兄閣老張十八助教

盧給事雲夫四兄 曲江荷花行を寄せらるるに酬い奉り、并せて錢七兄閣老張十八助教に呈上す

曲江千頃秋波淨、曲江千頃、秋波淨、平鋪紅雲蓋明鏡、平に紅雲を鋪いて、明鏡を蓋ふ。大明宮中給事歸、大明宮中、給事歸り、走馬來看立不正、馬を走らし來り見て、立つこと正しからず。遺我明珠九十六、我に遺る明珠九十六、寒光映骨睡驪目、寒光骨に映じて、驪目睡る。我今官閒得婆娑、我、今、官閒にして婆娑たるを得たり、問言何處芙蓉多、問うて言ふ、何の處か芙蓉多きと。擘舟昆明度雲錦、舟を擘して、昆明、雲錦を度る、脚敲兩舷叫吳歌、脚は兩舷を敲いて、吳歌を叫ぶ。太白山高三百里、太白山は高し、三百里、

古詩 奉酬盧給事雲夫四兄曲江荷花行見寄

【字解】曲江、前に荷花、詩の處に見えて居た。長安の南郊に在つて、唐時遊樂の地。【一】紅雲、紅い蓮の花が一帶に連つて居るのを形容したので、三堂の詩に水上驚紅雲といふと同義。【二】明鏡、池水を形容して云ふ。【三】大明宮、唐書に「東内大明宮は、神苑の東南に在り、本と永安宮。貞觀八年に置く。九年、大明宮と改む。龍朔二年、蓬萊宮と號す。咸亨元年、含元宮と改め、尋いで大明宮に復す」とある。【四】給事、即ち給事中、盧汀は即ち此官に任じて居た。【五】九十六、汀の詩は九十六字であつたといふので、今は傳はらぬが、字數の上から見ると、長短句であつたに相違ない。

負雪崔嵬挿花裏 雪を負うて、崔嵬、花裏に挿む。

玉山前却不復來 玉山、前に却りて、復た來らず、

曲江汀澗水平盃 曲江、汀澗として、水、盃に平かなり。

我時相思不覺一 我、時に相思うて、覺えず一たび首を廻らす。

廻首

天門九扇相當開 天門九扇、相當つて開く。

上界真人足官府 上界の真人、官府足れり、

豈如散仙鞭笞鸞 豈に如かむや、散仙の鸞鳳を鞭笞して、

鳳終日相追陪 終日相追陪するに。

終日相追陪

安心して目をつぶつて睡るといふことであらう。【一】官開 轉意は時に中書舍人より太子右庶子に降つたので、即ち前詩と同じ頃の作である。【二】遊樂 逍遙する。【三】芙蓉 楚辭の九歌は芙蓉兮木末とあつて、王逸の注に「芙蓉は荷花なり」とある。又本草に「蓮は、その葉を荷と名づけ、その花、未だ發かざるを菡萏となし、すでに發くを芙蓉となす」とある。【四】擘舟 舟を擘き出す。【五】昆明 漢書武帝紀に「元狩三年、昆明池を穿つ」とあつて、臣瓚曰く「長安の西南に在り、周回四十里」とある。【六】雲錦 文選の海賦に「雲錦散文於沙洲之際」とある。則創立の注に「按するに、河南紀に、雲錦二流あり、派に荷花常に異なるもの多しと。王融の記に見ゆ。公、或は常用するも、未だ知るべからざるなり」とある。但し、そんな六つかしいことではなく、鸞の暮を關つた様に成つた間を度り行くといふことであらう。【七】調戲 調戲。晉書夏侯惇傳に「惇は、會稽水興の人、上は、浮橋に遊る。太尉賈充曰く、卿、頗る能く土地間曲を作すかと。惇、ここに於て、足な以て戲を扣き、聖を引いて喚轉すれば、清激偉偉、大風、應じて遊り、水を含み、天に噴けば、雷雨聲集、叱咤呼すれば、雷電聲集、氣を集めて長槍すれば、沙塵のこくと起る。王公以下、恐れて避に之を止む」とある。樊汝霖の說に「東坡の詩、調戲三兩枝、歐三小海、亦た是れ統の事を引用す」とある。【八】太白山 一純志に「太白山は、關中の諸山、これより高きはなし。積雪、六月まで消えず」とあり。三秦記に「俗に云ふ、武功太白、天を去ること三百」とある。なほ其詳は、南山の詩の條に見ゆ。【九】玉山 太平寰宇記に「藍田山は、關西三十里に在り、一名玉山」とある。【一〇】汀澗 水の浚んで居ること。【一一】水盃 水は平にして、その少なることは、堯ら至中に見るが如しといふ意。【一二】天門九扇 君門九重といふ意。【一三】上界真人足官府 關況集の五源賦に「碧陽の仙人王遠琴子高言ふ、下界功滿つれば方に上界に超ゆ、上界は官府多し、地仙の快活なるに如かず」とあり、辭注には、この句を解して「言ふは、上界の真人、豈は官府の事あり、聖夫が地上の散仙と作つて、終日嬉遊するに如かざるなり」とある。

【題義】盧給事は盧四、名は汀、字は雲夫。錢七、名は徽、字は蔚章。閻老といへば侍郎で、即ち今の内閣員、但し何部だか分からぬ。張十八は張籍、國子助教である。この詩は、盧給事が曲江荷花行といふ詩を作つて寄せられたから、この詩を賦して酬い、且つ併せて錢徽、張籍の二君に呈すといふので、字解の中に述べた通り、前詩と同じ頃の作である。

【詩意】曲江池は廣さ一千里、時しも、秋水方に漲つて、波光甚だ淨く、おまけに、紅い蓮の花が一ぱい咲き満ちて、さながら、紅雲を鋪きたるが如く、それが鏡と見まがふ水面を蔽うて居る。盧給事

古詩 奉酬盧給事雲夫四兄曲江荷花行見寄

は、大明宮より退出し、直に馬を走らし、曲江に來つて、荷花を賞し、佇立の姿勢正しからず、いろいろな風をして眺めあかした。そこで、詩を作つたといつて、曲江荷花行の一篇を寄せられた。全篇九十六字、一字一珠、即ち九十六顆の明珠を贈られたが、寒光骨に映するを覺えるばかり、羅龍はおのが領下の珠を大事にして、滅多に睡らないといふが、これ程多くの明珠を貰つたから、目を塞いで、やすやすと睡つて居る。われは、此頃太子右庶子に轉じて、勤務も暇である處から、逍遙することも出来るが、何處が第一遊が多いか、一つ往つて見やうといふので、わざと場所をかへて、昆明池に乗り出し、脚を以て兩舷を叩きつつ大聲に吳歌を唱へた。仰ぎ見れば、太白山は、高さ三百里、その名に負かず、雪を戴いて、白く崔嵬たるが、蓮の花の間に挿み、玉山の稱ある藍田山などは、これに威壓されたものか、前に在りながら、退却して、再び出て來ない。おもへば、曲江は、水色澄んで綺麗であるが、ささやかなことは、盆中に水を平に盛つた様なもので、到底くらべ物にはならない。その時、われは、盧給事を思うて、覺えず一たび首を回らしたが、九重の宮門は、左右相當つて開き、給事その人は、そこに出仕して居られる。上界の神仙は、尊いには相違ないが、さまざまの官府があつて、ひどく六つかしく、それより、地上の散仙として、鸞鳳を鞭ち、終日追陪して遊び戯れる方が、はるかに面白く、願はくは、給事を此に呼んで來て、共に昆明の荷花を眺賞したいものである。

【餘論】曲江荷花行を示されたに就いて、却つて昆明の荷花を説き、成らうことなら、一緒に眺めたといふ意を言外に持たせた處が、即ち此詩の生命である。何義門は「波瀾を開出し、客を翻して主と作す、盤谷篇と同一の機械にして、結構大に別」といひ「曲江掲過して、却つて昆明を説く、妙なり、又昆明より曲江を挽合するは尤も妙、恰も好く相思回首の句に接す」といひ、乾隆御批には「紅雲明鏡中、特に雪山の倒影あり、便ち異様の精采を寫し得たり、結、酒脱に似て、正に情を忘るる能はざるを恐る」とある。

奉和錢七兄曹長盆池所植

錢七兄曹長の盆池植うるところに和し奉る

翻翻江浦荷、而今生在此。翻翻たり江浦の荷、而して今、生じて此に在り。  
 擢擢菰葉長、芳根誰復徙。擢擢として、菰葉長じ、芳根、誰か復た徙さむ。  
 露涵兩鮮翠、風蕩相磨倚。露は涵して、兩つながら鮮翠、風は蕩して、相磨倚す。  
 但取主人知、誰言益盜是。但だ主人の知を取る、誰か言ふ、益盜是れなりと。

【字解】(一) 翻翻 葉の翻る状を形容したのであらう。(二) 擢擢 高く抜き出でたる貌。(三) 盆盆 盆も素焼の水盤。

【題義】錢七は前首に見えた錢徵、曹長は即ち侍郎。この詩は、錢徵が盆池に種ゑた蓮だの菰だのを

古詩 奉和錢七兄曹長盆池所植

詠じたるに因り、これに和して作つたので、矢張、前詩と同じ頃の作であらう。

【詩意】翻翻たる江浦の蓮は、今この盆池の中に種ゑられて活きて居るし、擗擗たる真菰の葉も伸びて居るが、誰が其根を此に徙したのか、この二種は、同じ處に育つて、曉早く露に濡ふ時は、ともに、翠色いとも鮮かであるし、風に吹き動かされる時は、互に摺れ合つて、倚りかかつて居る。蓮といひ、真菰といひ、主人の玩賞を得ればこそ、かくは生長して、その姿態を弄して居るので、何も盆盎に等しき此池が宜しいといふのではない。

【餘論】主意は、結末二句に在るので、反説すると、たとひ其處を得ずとも、主人の意には背かぬ様にせよといふので、議論の意味があるのかも知れない。

記夢

夢を記す

夜夢神官與我言、夜夢む、神官、我と言ふ、  
羅縷道妙角與根、羅縷、道妙なり角と根と。  
掣搯陬維口瀾翻、陬維を掣搯して、口瀾翻、  
百二十刻須臾間、百二十刻須臾の間。

【字解】〔一〕神官、仙官に同じ、即ち仙人。〔二〕羅縷、三國志の魏文帝紀に羅縷堂閣殿とあり、東晉の費家賦に且羅縷而自陳とあつて、評に之を言ふこと。〔三〕角與根、國語に「辰角見はれて雨畢り、

我聽其言未云足、我、その言を聽いて、未だ足を云はず、

捨我先度橫山腹、我を捨てて、先づ横山の腹を度る。

我徒三人共追之、我が徒三人、共に之を追ふ、

一人前度安不危、一人は前に度り、安くして危からず。

我亦平行蹋蹴、我、亦た平行して蹴蹴を蹋む、

神完骨躡脚不掉、神完く、骨躡うして、脚掉かず。

側身上視溪谷盲、身を側てて上に視れば、溪谷盲し。

杖撞玉版聲彭航、杖、玉版を撞けば、聲彭航たり。

神官見我開顏笑、神官、我を見るや、顔を開いて笑ふ、

前對一人壯非少、前に對する一人、壯にして少きに非ず。

石壇坡陀可坐臥、石壇、坡陀として、坐臥すべし、

我手承頰肘拄座、我、手もて頰を承けて肘もて座を拄ふ。

隆樓傑閣磊鬼高、隆樓傑閣、磊鬼として高し、

古詩記 夢

一一一

天根見はれて水瀾る」とあつて、その注に「辰角は大星、蒼龍の角、天根は亢底の間」とある。朱子の解に「角根は即ち辰卯の二位、二十八宿の起るところなり」とある。〔二〕陬維、朱子の解、上文の體きに「この句、言ふは、陬維は、過じて寅申巳亥の四隅を謂ふなり、この四隅を掣ふれば、十二辰二十八宿の位に周らむ」とある。又淮南子の天文訓に「西南を背陽の維となし、東南を常羊の維となし、西北を踵趾の維となし、東北を報徳の維となす」とあり、又地形訓に「河水は東海の東北隅に出で、赤水は其東南隅に出で、洋水は其西北隅に出づ、亦た滄淵の名なり」とある。すると、陬は滄淵、航は四方の中間で、兩處は非常に懸け離れて居る。〔三〕瀾翻、瀾の如く翻へる。

天風飄飄吹我過 天風飄飄、我を吹いて過ぐ。

壯非少者哦七言 壯にして少に非ざるもの、七言を哦す、

六字常語一字難 六字は常語にして、一字は難し。

我以指撮白玉丹 我、指を以て白玉丹を撮る、

行且咀噍行詰盤 行く、且つ咀噍し、行く、詰盤す。

口前截斷第二句 口前に截斷す、第二句、

綽慮顧我顔不歡 綽慮、我を顧みて顔歡ばず。

乃知仙人未賢聖 乃ち知る、仙人未だ賢聖ならず、

護短憑愚邀我敬 短を護し、愚に憑つて我に敬を邀むるを。

我能屈曲自世間 我能、屈曲、自ら世間。

安能從女巢神山 安んぞ能く、女に從つて神山に巢はむ。

前、房六に處り、白虎、昂七に在り、朱雀、辰二に在るを謂ふ。曾、玄武虛危の位に朝するなり。一陽の氣を迎へ、通火の妙用を以て、虛危に始まる、一日に在つて言へば、正に子中に當る、故に須臾の間といふ」とあり、又「百二十刺須臾間は、參同契の如し。十二卦、十二律を以て十二時、隔火陰符の候に配す。然れども、一日の間之あり、一刻の間、亦た之あるなり。公、蓋し深く金丹の旨を

【六】百二十刺 蔣注に「或は云ふ、重慶遺言ふ、世間只百刺あり、百二十刺は、星紀を以て言ふなり」と。今按するに、星紀の説、未だ詳ならず、但だ漢哀帝紀、かつて夏實良の説を用ひ、漏刻は百二十を以て度となす、事は哀紀に見ゆ」とある。現に、漢書哀帝紀に「詔して曰く、漏刻は百二十を以て度と爲す」とあつて、顏師古の注に「舊漏は、晝夜ともに百刻、今その二十を増す、是れ齊人甘忠可の造るところ、今、賀良等、重訂て言ひ、遂に之を施行す」とある。それから、蔣注には、長洲金居敬毅の説を引いて「上三句の意は、皆、參同契に本づく、角極取象は、曾

傳たり、乃ち世間に個強たるか」とある。これだけでは未だ十分でないが、六つかしい處は抜きにして、解釋することにする。【一】獻帝 安からざる貌。【二】曾 蔣注に「小字騰騰とあつて、注に「足を擧げて高き貌」とある。【三】首 開黑、暗い。【四】彭 玉體を撞く聲。【五】披陀 蔣注に「途憲師詩の披陀と同じ、語は楚辭の招魂に見ゆ。然れども、唐人多く披陀の字を通用す又郭璞子虛賦の注、音婆羅、故に一本亦た髮陀に作る。披陀は平かならざる貌とある。【六】頤 頤下を指といふ。【七】機 つまみ取る。【八】咀噍 漢書司馬相如傳の大人賦に「咀噍芝英、含嚙瓊華」とあつて、咀は嚙む、噍は嚙と音轉相通じ、又、かむといふ也。【九】詰盤 反覆する。【十】綽慮 蔣注に「二字、未だ詳ならず、疑ふらくは、必ず一の誤れるものならむ」とある。【十一】我能屈曲 朱注に「これ言ふ、我、もし能く屈曲して人に從はば、自ら世間に居て流俗に徇はむ、安んぞ能く女に從つて山間に居り、又屈曲を免れざらむや、猶ほ柳下惠の云ふところ、道を枉げて人に事ふ、何ぞ必ずしも父母の邪を去らむやと云ふがことよみ」とある。【十二】神山 即ち三神山、史記の封禪書に「この三神山は、その傳、渤海中に在り」と見ゆ。

【題義】この詩は、夢に仙人に逢つたことを記したのであるが、語意晦澁で、どうも、はつきりしない。蔣注に「この詩、蓋し託諷の意あり。公、執政に忤ひ、左遷して右庶子と爲る時に作る。前の盧公の荷花に酬ゆる詩の末に云ふ、豈如散仙鞭、咎驚風、終日相追陪、と。而して、此詩の末に亦た云ふ、我能屈曲自世間、安能從女巢神山」と。昔、俯仰人に隨ふ能はざるの意あり、その左遷の時たるを知るべきなり」とある。

【詩意】ある夜、夢に仙人に遇つた處が、その仙人は、我が爲に色色の事を語り聞かせた。彼は、角根二位から二十八宿が起るといふ様に、宇宙開闢の始を詳しく話したが、その道、玄妙にして、まこ

とに尊いことである。次に、阪維の四隅に依つて、二十八宿の位地が完成するといふ様に、この世界の出来上つたことまで話したが、瀾翻として口を休めることなく、最後に、一日は百二十刻、かなり長い様であるが、無限無窮の宇宙から観れば、ほんの須臾の間に過ぎぬといつた。われは、その言葉に拜聴したが、どうも十分満足出来ぬ處から、もつと聞きたいと思つて居ると、その仙人は、われを捨てて、横に長く延びた山脈の半腹を度つて、とつと往つて仕舞つた。これを逃がして成るものかといふので、われ等三人、一緒になつて、之を追つかけた。その一人は、われよりも前に渡つて行つたが、足元も確かで、少しもあふないことはない。われは、第二で、一寸困難な處でも平氣で打ち過ぎ、心神驚かず、骨高く響え、そして踏みしめる足も震はず、身を側てて遙に山の上の方を見ると、溪谷相合して、雲嵐が閉ぢ籠めた爲めでもあらう、一帯に、暗くて、何やら少しも分らない。そこで、杖を以て四邊を敲き廻すと、さながら玉版でも撞つ様に、彭飢たる音を發した。例の仙人は、ふり回つて、我が追ひ来るを見、につこりと破顔して笑つたが、その仙人の連でもあらう。一番前に居るのは、齡方に壯にして、少年とも見えぬが、石壇の少し高くなつた處に坐臥して、前の仙人を待ち受けて居た様であつたから、われは、その人に對して禮を爲し、地上に平伏した儘、手を以て頤を承け、肘を以て座を支へて居た。仰ぎ見れば、今まで暗くて様子が分らなかつた處が明るくなつて、眼前には、高樓傑閣、磊鬼として聳え、天風は飄飄として我を吹いて過ぎた。すると、その齡壯にし

て少年とも見えないといふ其人は、七言の詩を歌ひ出したが、六字までは普通の語で、何の造作も無いが、あとの一字が六つかしめて、何といふ意味が分らない。その間、われは、指を以て白玉丹の粒をつまみ、行く行く之を嚼みながら、行く行く口の中で其文句を反覆して居た。その人は、わが頻りに反覆するを見て、とても了解せぬものと思つたか、第二句以下を打切つて、復た吟せず、わが方を顧みて、如何にも不満らしい顔をして居た。これまでが夢で、そこで初めて分かつたが、仙人と雖も、未だ賢聖の域に至らぬものであるから、おのが短を護り、愚を恃み、そして、われに向つて尊敬する様にと求めたのであらう。しかし、われは、何だか譯が分らなかつたから、格別敬意をも表せず仕舞つたので、われ若し能く屈曲して、容るるを取つて人に従ふことが出来る位ならば、矢張、浮世に居て、流俗に徇ひ、功名富貴を心がくべく、いかで、汝に従つて、三神山に栖むことを願ふべき。すでに屈曲して人に従ふことが出来ぬから、この世を去つて、物外に身を寄せやうと思ふのに、仙人仲間が、かういふ風では、矢張駄目なので、この身は、天地の間に容れられる處がない。

【餘論】この詩は、はじめ本當の仙人らしいものに遇つたが、その後を追つて行くと、第二の仙人に遇ひ、その者は、まだ塵俗を脱せぬ様で、これでは、従つて至道を學ぶことも出来ず、さて困まつたものであるといふ様な意味を夢に託して述べたので、韓愈が折角江陵から召し還され、追追と立身したまでは善かつたが、この頃、又太子右庶子に降されたに就いて、その依るべき人なきを嘆息したも

のに相違ない。東坡は「太白の詩に云ふ、遺我鳥跡書、讀之了不聞と。太白は氣を尙ぶ、乃ち自ら字を識らざるを招ぐ、如かず、退之の偏強にして、我能屈曲自世間、安能從女巢三神山」と云ふには、といひ、又「退之言へるあり、我能屈曲自世間云、退之の性氣、出世間の人と雖も、亦た容るる能はざるなり」と云つた。

南内朝賀歸呈同官

南内に朝賀し歸つて同官に呈す

薄雲蔽秋曦、清雨不成泥。

薄雲、秋曦を蔽ひ、清雨、泥を成さず。

罷賀南内衙、歸涼曉淒淒。

賀を罷む南内の衙、歸れば涼しくして曉淒淒たり。

綠槐十二街、渙散馳輪蹄。

綠槐十二街、渙散として輪蹄を馳す。

余惟慙書生、孤身無所竇。

余は惟れ慙書生、孤身、竇すところなし。

三黜竟不去、致官九列齊。

三たび黜けられて、竟に去らず、官を致して、九列と齊し。

豈惟一身榮、佩玉冠簪犀。

豈に惟一身の榮、玉を佩びて簪犀を冠するのみならむや。

混蕩天門高、著籍朝厥妻。

混蕩として天門高く、籍を著けて厥妻を朝せしむ。

文才不如人行、又無町畦。

文才人に如かず、行、又町畦なし。

問之朝廷事、略不知東西。

これに朝廷の事を問へば、略ぼ東西を知らず。

況於經籍深、豈究端與倪。

況んや、經籍の深きに於て、豈に端と倪とを究めむや。

君恩太山重、不見酬神梯。

君恩、太山重し、神梯を酬ゆるを見ず。

所職事無多、又不自提撕。

職とする所、事多きなし、又自ら提撕せず。

明庭集孔鸞、曷取於鳧鷖。

明庭に孔鸞を集む、曷ぞ鳧鷖を取らむや。

樹以松與栢、不宜間蒿藜。

樹うるに松と栢とを以てす、宜しく蒿藜を間ふべからず。

婉孌自媚好、幾時不見擠。

婉孌自ら媚好、幾時か擠せられざらむ。

貪食以忘軀、鈔不調鹽醢。

食を貪つて以て軀を忘るるは、鹽醢に調へられざることと鈔し。

法吏多少年、磨淬出角圭。

法吏、多くは少年、磨淬して、角圭を出す。

將舉汝愆尤、以爲己階梯。

將に汝の愆尤を舉げて、以て己が階梯と爲さむとす。

收身歸關東、期不到死迷。

身を收めて關東に歸り、期すらくは死に到つて迷はざらむ。

【字解】【一】秋曦、秋の太陽。【二】清雨、すがすがしき雨。【三】罷賀、朝賀を呈る。【四】南内、麗儀の處に注して置く。

古詩 南内朝賀歸呈同官

【二】 衛 役所。【三】 韓 十二街。中朝事跡に「天街の兩畔、槐を樹ゆ。俗、號して槐街といふ」とあり、白樂天の遊園の詩に、下觀十二街、綠槐間「紅塵」とある。十二街は、天街、即ち都大路で、左右に分かれて十二寸なるが故に云ふ。【四】 漢 散、清散、跡の無いこと。【五】 漢書漢紀傳に「上、人に謂つて曰く、蓋し汲黯の懸なるや」とある。馬良正直、風直。【六】 無所實、實は求める。【七】 三 論語に見えたる字面、皇甫湜の書いた韓愈の墓誌に「公、御史御史中書舍人となり、前後凡そ三たび貶せらる。刑部侍郎と爲るに及び、憲宗の傳骨を迎ふるを言うて、潮州に貶せらる」とある。この時に謂はゆる三黜は、未だ潮州に貶せられざる前、右庶子となるの日に作つたのである。【八】 九列 漢書循吏傳に「信臣を召して九卿に列す」とある。【九】 尊卑 卑角で造つた響、これは冠を止める爲めであらう。【一〇】 著 齊注に「韓は、二尺の竹履、その年紀名字物色を記して、これを宮門に懸け、案省して相應すれば乃ち入るを得るなり」とある。【一一】 厭妻 韓愈の妻盧氏、示兒の詩に「恩封高平君、子孫從朝禮とあつて、歲朝、宮中に入朝した。【一二】 無町畦 莊子の人間世篇に「復且つ無町畦を爲し、亦た之と無町畦を爲す」とあつて、注に「威儀なきなり」とある。【一三】 豈免 韓愈 莊子の大宗師に「反復終始、端倪を知らず」とある。端倪は、物の末梢。【一四】 釋 體類のしひな、極めて些少の端。【一五】 提 韓 一緒に成つて事を始末する。【一六】 明庭 朝廷。【一七】 孔望 孔望と望。【一八】 角圭 圭角と同じ。【一九】 魁尤 過失。【二〇】 階梯 はしこ、立身の要具。【二一】 開東 開は谷關で、……では河南の故郷をいふ。

【題義】 雍錄に「唐の都城三大内あり、太極宮は西に在り、故に西内と名づく。大明宮は東に在り、故に東内と名づく。別に興慶宮あり、南内と號するなり」とあり、蔣注に「南内を興慶宮といふ、東内の南に在り、この時に罷賀南内衙と云ふは、即ち南内なり、奉酬盧給事」の詩に大明宮中給事歸と云ふは、即ち東内なり。南内は、本と玄宗藩に在る時の故宅、高宗龍朔二年に置く」とある。この詩は、元和十一年、韓愈が太子右庶子に在官した頃、ある時、南内に朝賀して歸り、賦して同僚に示したのである。

【詩意】 空は掻き曇つて、薄い雲は、なほ秋の日を蔽ひ、すがすがしき雨が少し降つたが、路が悪くならぬ位。この朝、南内に朝賀し畢つて、おのが役所に歸つて来たが、曉氣凄凄として、秋は、いと冷かである。綠槐が並木をなせる都大路には、車馬を驅るものが多いが、一過し去れば、跡だに見えない。予は、元と懸念なる一書生であつて、眇たる此身は、格別求めるところもなく、三たび、官を黜けられたが、それでも平氣で罷めずに居ると、やがて又ぼつぼつ用ひられて、九卿と同列に成つた。すでに、わが一身に恩榮を蒙り、腰に玉を佩び、頭に犀角の簪を載せて居るばかりでなく、わが妻さへも、竹簾に名を書きつけられ、泥濘として高き天門九重の中にも出入して參賀することが出来るので、まことに有り難き仕合である。わが文才は、固より人に如かず、行状も又威儀なくて、文行ともに觀るに足らず、朝廷の典故などを問はれても、一向その詳しいことは知らず、まして、經籍の深遠なる義理に至りては、その端くれをだに研究せぬ位。それなのに、刻下の官職に居るのは、君恩の重きこと、泰山に比すべく、しかも、まだ稗粒ほどの報いを致さない。もとより、わが職務は閒散であつて、人と一緒に遣らねばならぬといふ程のことでもなく、顧みれば、わが身の朝廷に於けるは、全く無用で、いはば、唯だ員に備はるのみである。今や、朝廷の上には、孔雀や鸞に比すべき文彩の



見事なる人人があるから、堯や家嶋の如き吾輩には、全然用が無いし、松や柏の如き天晴棟梁の材となるべきものを用ひられて居るから、蓬や菴に比すべき吾輩などは、何にも成らない。煥燿として、様子よく見せかけて居た處で、いづれは排除されて仕舞ふに相違なく、食を食つて振を忘れる様な家畜は、肉があつて味も善いからといつて、やがて鹽や醋で調理されるに相違なく、とても、麒麟などの様に、その身に徳を備へた爲に尊ばれるものと比較することは出来ない。おまけに、今日、朝廷の取締をして居る法吏どもは、いづれも、少年新進の士で、せつせと琢磨し、圭角稜稜、決して他を容赦せず、汝の過失を擧げて、立身出世の階梯としたいといふので、始終つけ規つて居るから、たまつたものではない。それよりも、早く身を始末して、關東なる故郷に退隱し、死に至るまで、心迷はざらむことを期した方が、はるかに宜しい。

【餘論】この詩は、朝賀の事より、自己の人物操守に及び、結末に於て、法吏の苛酷なることに道及して居る。乾隆御批に「心を法吏に戒め、始めて身を收むることを擬す、すなはち、己に爲にするあつて爲る、中間躬を省み、分を引くは、乃ち朝士座右の銘と爲すに足る」とあるのも、成程と頷かれる。なほ、朱竹垞は破題の八句を賞して「退之點景、毎に閒淡の趣を得たり」と云つて居る。

朝歸

朝歸

峨峨進賢冠。耿耿水蒼佩。  
服章豈不好。不與德相對。  
顧影聽其聲。頰頰汗漸背。  
進乏犬雞效。又不勇自退。  
坐食取其肥。無堪等豐贖。  
長風吹天墟。秋日萬里曠。  
抵暮但昏眠。不成歌慷慨。

峨峨たる進賢の冠、耿耿たる水蒼の佩。  
服章、豈に好からざらむや。徳と相對せず。  
影を顧みて其聲を聴き、頰、汗を漸す。  
進んで犬雞の效に乏しく、又自ら退くに勇ならず。  
坐食、その肥を取り、豐贖に等しきに堪ふる無し。  
長風、天墟を吹き、秋日、萬里曠す。  
暮に抵つて但だ昏眠、歌うて慷慨することを成さず。

【字解】(一)峨峨、高き貌。(二)進賢冠、唐注に唐志、百官の朝服、皆進賢冠、後漢與服志、進賢冠は、古しへの緇布冠、又儒者の服とあり、杜市の詩に、良相頭上進賢冠とある。(三)水蒼佩、唐書に「五品皆水蒼玉」とあり、禮記に「大夫は水蒼玉を佩びて純組の綬」とあり、波雲錦に「白玉水蒼は、これを佩べて文色似たるところなり」とある。(四)頰頰、頰を赤くして愧ぢ入る。(五)犬雞、孟嘗君の雞鳴狗盜の事を暗用す。(六)取其肥、十分なるをいふ。(七)豐贖、つんど目くら。(八)天墟、宮闕の有る一郭。

【題義】この詩は、退朝の後、賦して其感慨を敘したので、前首と同時の作だらうといはれて居る。  
【詩意】頭には、峨峨たる進賢冠を戴き、腰には耿耿たる水蒼佩をつけ、我ながら、服章は、まこと

に見事であるが、わが才徳と相稱はざるのが遺憾である。そこで、影を顧みて、佩玉の聲を聞けば、  
覺えず顔を赤めて、慙汗背を濡す位。わが一身、進んで雞鳴狗盜の如き報效も爲し得ず、さうかとい  
つて、潔く官を罷めて退き去ることも出来ず、格別の要務もなく、唯だ俸祿を頂戴し、坐食して餘あ  
る程、つんばや目くらと同じであることは、まことに堪へられない。ここに、退朝せむとすれば、長  
風は天上の宮闕を吹き、秋日高くさし上つて、萬里に曠し、爽氣、身に沁みて、仕事をするには持  
て来いといふ様な時節、それなのに、われは舍に歸り、日暮に至るまで惰眠を貪り、歌うて慷慨する  
ことだに爲さざるは、まことに附甲斐なきことの極みである。

【餘論】進之犬雞效の四句が一篇の精神で、韓愈その人、右庶子の閒職に居るを屑しとせざる意蘊  
は、ここに顯然として居る。

雜詩四首

雜詩 四首

朝蠅不須驅、暮蚊不可拍。

朝蠅は驅るを須ひず、暮蚊は拍つべからず。

蠅蚊滿八區、可盡與相格。

蠅蚊、八區に滿つ、盡く與に相格すべしむや。

得時能幾時、與汝恣啖咋。

時を得ること、能く幾時ぞ、汝の與に啖咋を恣にせしめむ。

涼風九月到、掃不見蹤跡。

涼風、九月到らば、掃うて、蹤跡を見ず。

【字解】「一」八區、八方に同じ、世界。「二」啖、食つたり刺したりする。「三」掃、一掃する。

【通義】蔣注に「公、時に右庶子たり、而して、皇甫鉞、程昇の徒、事を用ふ。元和十一年なり。故  
に、此時及び讀東方朔雜事、驅瘧鬼は、昔事を指し、物に託して作る」とある。つまり、當時の小  
人輩を諷して、自己の不遇を嘆じたのである。

【詩意】晝の中は、蠅が居て、まことにうるさいが、態態これを驅るにも及ばない。夜になると、蚊  
が居て、まことに困まるが、これを拍いて追ふことは六つかしい。今や蠅と蚊とは、世界に充滿し、な  
かなか、相格して之を除き去ることは出来ない。しかし、蠅蚊の時を得るのは、暑い時分に限るので、  
幾時も無いことだから、いささか辛抱して、汝が食つたり刺したりするに任かせて置かう。見よ、秋  
の末、九月にもなつて、涼風颯として吹き至らば、蠅でも、蚊でも、盡く一掃して、跡方もなくなる  
ので、ほんの少しの間の事である。

【餘論】朱竹垞の評に「これは、讒佞者に喩へ、盡く去るべからざるを言ふ」とある。

鵲鳴聲楂楂。鳥噪聲搜搜。

鵲鳴いて、聲、楂楂たり、鳥噪いで、聲搜搜たり。

爭鬪庭宇間持身博彈射。

庭宇の間に争鬪し、身を持って彈射に博ふ。

黃鵠能忍饑兩翅久不擘。

黃鵠は、能く饑を忍び、兩翅久しく擘かず。

蒼蒼雲海路歲晚將無獲。

蒼蒼たり雲海の路、歲晚將に獲なからむとす。

【字解】(一) 彈射 彈き玉で射得す。(二) 黃鵠 鵠は鴻雁の聲、大鳥。(三) 不擘 開かず。

【詩意】鵲の鳴く聲は、楂楂として居るし、鳥の噪ぐ聲は、搜搜として居る。その鵲と鳥とが庭宇の間に於て、相争つて居た處が、無慙にも、その身を以て彈射に代へ、必ず他を斃さうとして居る。これに反して、黃鵠は、能く飢を忍び、兩の翅を久しく開かずして、その飛ぶべき時機を待つて居る。海なす雲は、蒼蒼として路遠くとも、一たび飛べば、千里を馳せる位。歲、將に暮れなむとして、しきりに獵をする人が往來するが、決して、そんなものに獲られるやうなことはない。

【餘論】朱竹垞の評に「これは、黨を立つるものに喩へ、空しく相彈射するを言ふ」とある。

截椽爲構榑。斲楹以爲椽。椽を截つて構榑と爲し、楹を斲つて以て椽と爲す。

束蒿以代之。小大不相權。蒿を束ねて以て之に代へ、小大相權らず。

雖無風雨災得不覆且顛。風雨の災なしと雖も、覆り且つ顛せざるを得むや。

解轡棄馱。蹇蹇驅使前。轡を解いて馱を棄て、蹇蹇、鞭つて前ましむ。

崑崙高萬里。歲盡道苦遠。崑崙高きこと萬里、歲盡きて、道、苦だ遠なり。

停車臥輪下。絕意於神僊。車を停めて輪下に臥し、意を神僊に絶つ。

【字解】(一) 椽 楚辭の九歌に柱棟令闕とあつて、椽はたるき。(二) 構榑 文選長門賦に施三塊木之構榑令、委三參差以三椽とあつて、法に「拱斗の屬」とあり、説文に「構榑は柱上の所なり」とあり、又禮記にも見え、梁上の短柱。(三) 榑 柱。(四) 束蒿 たるき、椽より椽に架する材。(五) 蒿 よもぎ。(六) 不相權 比較にならぬ。(七) 解轡 手綱を解き棄てる。(八) 馱 馱、名馬。(九) 蹇蹇 跛足の驢馬、この句は、北史陽休之の言に「將に千里を涉らむとし、馱驢を殺して蹇蹇に置つ」とあるを用ひたのである。(一〇) 崑崙 西北に在つて、嵩高を去ること五萬里、地の中に於て、その高さ萬一千里と稱せられて居る。(一一) 苦遠 甚だ遙かなること。

【詩意】椽を截つて短柱となし、柱を削つてタルキとなすのは、先づ善いとして、蓬の莖を束ねて之に代へた處で、その物の大小、とても比較に成らず、従つて、役に立つ等もなく、風雨の災害は無いにしても、未だ幾ならざるに其家は顛覆して仕舞ふ。これと同じく、手綱を解いて馱驢の名馬を棄て、そして跛足の驢を鞭つて、無理無態に進ましめ、目ざすは崑崙の仙境、その山の高さは一萬里、一年かかつて往つても、道なほ遙にして、とても到著せず、さうなると、車を停めて輪下に横臥し、

神仙の事を断念して引きかへすより外はない。

【餘論】朱竹垞の評に「これは、力小にして任重き者に喻へ、顧覆を恐るるを言ふ」とある。

雀鳴朝營食、鳩鳴暮覓羣。  
雀は鳴いて、朝に食を營み、鳩は鳴いて、暮に羣を覓む。

獨有知時鶴、雖鳴不緣身。  
ひとり時を知るの鶴あり、鳴くと雖も、身に縁らず。

暗蟬終不鳴、有抱不列陳。  
暗蟬は終に鳴かず、抱くあるも列陳せず。

蛙黽鳴無謂、閤閣祇亂人。  
蛙黽は、鳴くこと謂はれなく、閤閤として祇だ人を亂る。

【字解】【一】營食、餌をあさる。【二】覓羣、友を呼ぶ。【三】知時鶴、春秋繁露に「鶴は花牛を知る」とある。【四】暗蟬、即ち暗の蟬、本草の法に「兩脛居云ふ、暗蟬は暗蟬なり、鳴く能はざるもの」とある。【五】有抱、木を抱く、木に止まる。【六】暗蟬、不列陳、見える様にせぬこと。【七】無謂、無意味なること。【八】閤閤、蛙黽の形容。

【詩意】雀は朝に鳴いて何をあさり、鳩は暮に鳴いて其友を呼び集める。しかし、鶴は、天性靈慧にして時を知り、夜半になれば鳴くので、その鳴くは、もとより自分の身の爲にするのではない。それから、暗の蟬は、どうしても鳴かず、木に止まつて居ても、見えぬ様になつて居るから、人に捕へられることもない。ここに、又蛙といふものがあるが、その鳴くのは、おのが身の爲でもなく、天の時を知るが爲でもなく、全然無意味で、唯だ八釜しく鳴き立てて、人の耳を亂し、うるさいと思はせるのみである。

【餘論】朱竹垞の評に「これは、言詞煩雜なるもの、徒に人をして厭はしむるに喻ふ」とある。

讀東方朔雜事

東方朔の雜事を讀む

嚴嚴王母宮、下維萬仙家。

嚴嚴たり王母の宮、下は維れ萬仙の家。

噫欠爲飄風、濯手大雨沱。

噫欠すれば飄風となり、手を濯へば大雨沱たり。

方朔乃豎子、驕不加禁訶。

方朔は乃ち豎子、驕らしめて禁訶を加へず。

偷入雷電室、鞠棹掉狂車。

偷に雷電の室に入り、鞠棹として狂車を掉かす。

王母聞以笑、衛官助呀呀。

王母聞いて以て笑ひ、衛官も助けて呀呀たり。

不知萬萬人、生身埋泥沙。

知らず、萬萬の人、生身、泥沙に埋まることを。

簾頓五山踏、流漂八維蹉。

簾頓して五山踏れ、流漂して八維蹉ふ。

曰吾兒可憎、奈此狡獪何。

曰く、吾が兒、憎むべし、この狡獪を奈何と。

方朔聞不喜。褫身絡蛟蛇。

方朔、聞いて喜ばず、身を褫いて蛟蛇を絡む。

瞻相北斗柄。兩手自相授。

北斗の柄を瞻相し、兩手自ら相授む。

羣仙急乃言。百犯庸不科。

羣仙急に乃ち言ふ、百犯庸つて科せず。

向觀睥睨處。事在不可赦。

さきに睥睨の處を觀れば、事は赦すべからざるに在り、

欲不布露言。外口實諠譁。

布露して言はざらむと欲すれども、外口、實は諠譁と、

王母不得已。顏頰口齟嗟。

王母已むを得ず、顏を嚙めて、口、齟嗟す。

領頭可其奏。送以紫玉珂。

頭を領いて其奏を可なりとし、送るに紫玉の珂を以てす。

方朔不懲創。挾恩更矜誇。

方朔、懲創せず、恩を挾んで更に矜誇す。

詆欺劉天子。正晝瀾殿衙。

劉天子を詆欺して、正晝、殿衙に瀾す。

一旦不辭訣。攝身凌蒼霞。

一旦、辭訣せず、身を攝して、蒼霞を凌ぐ。

【字解】(一) 龍殿。唐注に「古しへ、殿殿とす。詩に維石巖巖、一本、殿殿に作る、音同じ。ここには、下輩高仙家と云ふ、當に巖巖を以て龍と爲すべきに似たり」とある。(二) 王母宮。集仙錄に「西王母は、龜嶺の金母なり、居るところの宮闕、星宿の圖、閭風の高に在り。城あり、千里、玉樓十二、瓊華の閣、光碧の宮九層、玄室紫雲丹房あり、左に希池を帯び、右に碧水を噴らす」とある。(三) 噫欠。方朔傳の說に「氣を塞むるを噫となし、口を開るるを欠と爲す」とある。又莊子に「大塊の噫氣」とあり、說文に

「欠は、口を張つて氣暢ふなり」とあり、宋書に「孟頰、亢聲欠欠するを以て勸せらる」とある。噫欠の二字、ともに欠伸、即ちちくび。(四) 禁詞。說文に「詞は大言して怒るなり」とある。(五) 鑰入雷電室。漢武內傳に「西王母云ふ、東方朔は、むかし太山上仙の官舎たり、方丈に至り、樓に雷電を弄し、波を激し風を揚ぐ。九源丈人、乃ち天帝に言ひ、遂に人間に歸す」とある。(六) 物變。文選洞簫賦に雷霆變物とあつて、李善の注に「大變なり」とあり、又晉の李暉の雷賦に鼓雷變之通變とある。(七) 呀呀。口を開く聲。(八) 驚頓。あふり倒す。(九) 玉山。即ち玉樓。(一〇) 八難。四方四角。(一一) 蹙。蹙蹙、蹙蹙の聲で、つまづく。(一二) 披。漢書高帝紀に「大人、常に臣の無賴なるを以て」とあつて、その注に「晉灼曰く、江淮の間、小兒の多詐狡猾を謂うて無賴となす」とある、狡猾は即ち無賴と同義。又神仙傳に「王方平、麻姑の爲に曰く、了に復たこの狡猾變化を爲すを喜ばざるなり」とある。(一三) 裸身。身につけて居た衣の紐を解いて、悉く脱ぎ棄てる。(一四) 相授。授は兩手で相托する、もむ、これを。(一五) 不科。即科に行はぬ。(一六) 睥睨。莊子に「睥睨と雖も、睥睨する能はず」とあつて、注に「睥睨なり」とある。ここでは、上の北斗を瞻相せしことを云ふ。(一七) 布露。その狀をさらけ出す。(一八) 齟嗟。舌嚙に同じ。(一九) 可其奏。奏上せしことを許す。(二〇) 紫玉珂。珂は玉に次ぐ一種の石といふのが本體であるが、このは押韻の爲に添へたので、特別意味もない。(二一) 懸創。二字ともに懸る。(二二) 詆欺。漢書枚乘傳に「枚阜の賦に誣欺あり、東方朔、又自ら其文を詆欺す」とあつて、師古の注に「誣は欺なり、欺は誣なり」とある。詈り恥かしめる。(二三) 劉天子。漢の武帝、姓は劉氏なるが故に云ふ。(二四) 瀾殿衙。東方朔の本傳に「朔、かつて辭うて殿中に入り、殿上に小遣し、不敬を勸せられ、免じて庶人と爲す」とある。

【題義】東方朔は、漢書にも傳があるし、その他の諸書にも見えて居るが、ここに云ふのは、漢武帝内傳であつて、その文に「帝、長生を好む。七夕、西王母、その宮に降る。頃くあつて、桃七枚を案め、四枚を以て帝に與へ、自ら三枚を食うて曰く、この桃、三十年に一たび實ると、時に東方朔、殿

の東廂朱鳥隔中より母を窺ふ。母、帝に謂つて曰く、この窺隔の兒、かつて三たび來つて吾が此桃を  
 偷む。むかし、太山上仙宮令と爲つて、方丈に到り、擅に雷電を弄し、波を激し、風を揚げ、風雨  
 時を失ひ、陰陽錯進、蛟鯨をして陸行せしめ、海水暴に竭き、黃鳥淵に宿するを致す。ここに于て、  
 九濼丈人、乃ち太上に言ひ、遂に人間に譴す。その後、朔、一日、雲龍に乗じて飛び去り、在るとこ  
 ろを知らず」とある。顧嗣立の注には「按ずるに、漢書東方朔傳、朔、字は曼倩、平原厭次の人、班  
 固の贊に曰く、朔の談諧、逢占射覆、その事浮淺、衆庶に行はれ、童兒牧豎、眩耀せざるなし。而  
 して、後世の好事者、因つて奇言怪語を取つて、これに附着す。公の詩、皆經史に本づく。而して、  
 この作、ひとり専ら内傳を取る、亦た偶然戲筆、故に之に題して雜事といふなり」とある。そこで題  
 して「東方朔の雜事を讀む」といつて居るが、讀んだ後の感想といふのでもなく、直に其事を敘し、そ  
 の間に於て、時に作者の旨意が窺はれるといふに過ぎぬ。如何なる故で、こんな詩を作つたかといふ  
 と、蔣注に「退之、神仙を喜ばず、この詩、必ず爲にするところあつて作れるならむ。大抵、權を弄  
 し、恩を挾むものを譏るのみ」とあるが、先づ其邊の事だらうと思はれる。

【詩意】西王母の宮殿は、高く聳えて、金碧丹青の彩、まばゆく、まことに、立派であつて、その下  
 には、多くの仙人どもの家が竝んで居る。もとより、遙なる天上の仙界の事であるから、そこで、欠伸  
 をすると、下界に於ける颯風となり、一寸手を洗へば、それが大雨滂沱として降つて來る。ここに、

東方朔は、仙家の一豎子であつたが、王母などは、格別叱り懲らしもしなかつたので、常に勝手に振  
 舞ひ、ある時は、すつと雷電の室に入つて、おどろおどろしく車を動かして鳴り轟かせたものだから、  
 下界では、風雨時を失ひ、陰陽錯進をするといふ騒ぎであつた。王母は、これを聞いて、又例の癖か  
 といつて笑ひ、侍衛の者どもは、あまり甚しいでは無いかといつて、あいた口も塞がらぬ位、現に、  
 下界に於ては、萬萬人といふ極めて多數の人達が、生身の儘、泥沙の中に埋められ、五嶽は、簸ひ動い  
 て倒れて仕舞ひ、八紘は、洪水の爲に流漂して蹉跎して仕舞つた。そこで、流石の王母も、あとでは、  
 大に怒られ、吾が兒の惡戯も、あまりひどい、まことに憎むべき者だと仰せられた。東方朔は、従前  
 王母の寵を待んで居たから、これを聞くを喜ばず、身に著けて居た衣をぬぎ棄て、蛟蛇をからみ付け、  
 北斗の柄をちつと見つめて、兩手で之を攫み取つて動かせぬやうにして、愈よ暴れ廻つた。すると、羣  
 仙は、急に王母に奏問し、これまで、方朔は、随分悪いことをしても、毎に處罰されなかつたが、今  
 度といふ今度、北斗を睨んで之を攫んだといふに至りては、到底赦すことが出來ない。たとひ、その  
 罪を書き立てて他に知らすことを爲さないにしても、外間の取沙汰は、なかなか劇しく、喧騒の極で  
 あるから、是非何とか始末されなくてはならぬと申し上げた。そこで、王母も、已むを得ず、顔をしか  
 め、口に嘆息しつつ、頷いて其奏上を可とせられ、紫玉を送つて、その表驗とせられ、東方朔は、  
 下界に還謫されることに成つた。しかし、方朔は、決して懲りもせず、相變らず王母の恩を挾んで人

に誇り、漢の武帝をたぶらかして、白晝に殿上に於て小便をするといふ様な狂態を演じた。方朔は、しばらく人間に居たが、ある時、暇乞もせず、不意に立ち去り、身を整へて軽く舉がり、雲龍に乗じて、大空の蒼蒼を凌いで飛んで往つたといふが、大方、その故宮に歸つたのであらう。

【餘論】主として、人界に墮譎される以前、東方朔が天上に於て、暴はれ廻つた其有様を鏡したのて、事柄が面白いから、特に力を入れて、この一段を想化したので、武帝との關係などは、多く世人の耳目に在つて、陳套であるから、故らに之を避けたものと見える。今の世にも、君龍を得て權を弄するものがあつて、それで罰せられつつも、さして重科に處せられず、その内に又元へ戻り來る様なものがあるが、丁度、東方朔の様だといふのが、大體の主意であると思える。朱竹垞は、「これ、却つて天后の時の事を刺るに似たり」といつた。すると、王母が東方朔を眷愛し、兎角、依怙の沙汰ある様に見える處が、丁度當年の則天武后が幸臣を寵するに似て居るからといふ積りであらう。これは、従前、外の人の餘り言はぬことである。兪瑒は又、「この詩、洪興祖、以て權を弄するものを諷ると爲す。結語を觀るに云々と、殊に然らざるなり。意ふに、亦た文人が造化を播弄するを指す。雙鳥の詩に爾か云ふが如し。然らずむば、何ぞ獨り方朔を取つて之を權伴に擬せむや」といつて、この方が、はるかに合理的であるが、今は、しばらく舊説に従つて、上の如く解釋して置いた。

謹瘧鬼

瘧鬼を謹む

屑屑水帝魂、謝謝無餘輝。

屑屑たる水帝の魂、謝謝として餘輝なし。

如何不肖子、尙奮瘧鬼威。

如何か、不肖の子、尙ほ瘧鬼の威を奮へる。

乘秋作寒熱、翁嫗所罵譏。

秋に乗じて、寒熱を作し、翁嫗に罵り譏らる。

求食歐泄間、不知臭穢非。

食を歐泄の間に求めて、臭穢の非なるを知らず。

醫師加百毒、熏灌無停機。

醫師、百毒を加へ、熏灌、機を停むるなし。

灸師施艾炷、酷若獵火圍。

灸師、艾炷を施し、酷なること、獵火の圍むが若し。

詛師毒口牙、舌作霹靂飛。

詛師、口牙を毒し、舌に霹靂の飛ぶを作す。

符師弄刀筆、丹墨交橫揮。

符師、刀筆を弄し、丹墨交も橫揮す。

咨汝之胄出、門戶何巍巍。

咨、汝の胄出、門戶何ぞ巍巍たる。

祖軒而父頊、未沫於前徽。

祖は軒にして父は頊、未だ前徽を沫めず。

不修其操行、賤薄似汝稀。

その操行を修めず、賤薄、汝に似たるは稀なり。

豈不忝厥祖、視然不知歸。

豈に厥祖を忝めざらむや、視然として歸るを知らず。

湛湛江水清。歸居安汝妃。

湛湛として江水清く、歸居して汝の妃を安んぜよ。

清波爲裳衣。白石爲門畿。

清波を裳衣となし、白石を門畿となし、

呼吸明月光。手掉芙蓉旂。

明月の光を呼吸して、手に芙蓉の旂を掉かし、

降集隨九歌。飲芳而食菲。

降集、九歌に隨ひ、芳を飲んで、菲を食ふ。

贈汝以好辭。出汝去莫違。

汝に贈るに好辭を以てす、出でよ、汝去つて違ふこと莫れ。

【字解】【一】屑屑、項細の貌。【二】水帝、顓頊高陽氏は、水德を以て、少昊金天氏に繼いで天子となりしが故に、水帝といふ。

【三】謝謝、辭に滅びむとする貌。【四】歐淫、吐瀉に同じ。漢書嚴助傳に「夏月暑時、歐淫霍亂の病、相隨つて屬す」とあり。杜

甫の北征に、老夫情慟惡、歐淫臥數日とある。【五】醫師、周禮に「醫師は、醫の政令を掌り、毒藥を聚めて醫事に供す」とある。

【六】百毒、毒ば、毒藥。今日の意味とは一寸違ふ處があるので、つまり劇藥の醜、その用ひ方に因つては、有效であるもの。【七】

煎酒、煎じて酒さかける。【八】灸師、増韻に「體を灼いて病を療するを灸といふ」とある、灸をすゑる人。【九】艾炷、もぐさと

線香。【一〇】疽師、まじなひをする人。【一一】毒口牙、口を痛くする。【一二】符師、お札を出す人。【一三】刀筆、前書蕭何曹參

傳贊に「被泰の刀筆吏より起る」とあつて、顏師古の注に「刀は削り書する所以なり。古しへは、簡牘を用ふ、故に吏刀筆を以て自

ら隨ふなり」とある。このは、お札を削つて書きつけること。【一四】丹墨、朱墨に同じ。【一五】曾出、系圖の由つて出づる處。

【一六】亂斬而交頤、亂交は黃帝軒轅氏で、交は顓頊。【一七】未休於前、離騷に「勞苦功高、今猶未休」とあつて、王逸の注に「休は已むな

り」とある。又劉季標の劉涓子に答ふる書に「余、その音微の未だ休まざるを悲む」とある。前條は遺德、遺烈といふ様なこと、父祖の遺

德なほ未だ止まずといふ意。【一八】悉厥祖、詩經に「無念爾祖」とある。【一九】頤然、詩經に「有頤面目」とあり、國語に「余、頤然

たりと雖も、しかも人ならむや」とある、あつがましき貌。【二〇】安汝妃、汝の配偶者と共に安んずる。【二一】門畿、詩經の注に

「畿は門内なり」とある。【二二】芙蓉旂、旂は旗。【二三】九歌、王逸の楚辭序に「楚俗鬼を信じ、祠を好み、必ず歌樂鼓舞を作り、

以て諸神を樂ましむ。屈原、その祠の鄙陋を見、因つて爲に九歌の曲を作る」とある。【二四】飲芳而食菲、楚辭の九歌に芳菲菲兮

攝之食とある。非は茂る貌、猶ほ芳のごとし。

【題義】瘧はおこり、寒熱往來し、ひどい時には身體まで震へる。漢書儀に「顓頊氏、三子あり、生

まれて亡び去つて疫鬼となる。一は江水に居る。これを瘧鬼と爲す」とある。蔣注に「この詩も、亦

た必ず諷するところあらむ。前詩とともに、當に晉元和十三年、刑部侍郎たる時に作るなるべし」と

ある。しかし、諷諭の如何は、暫く措いて、單に瘧鬼を詠じたものと見ても差支は無い。

【詩意】水帝と稱せらるる顓頊も、崩後ここに數千年、その魂は、屑屑として、有るか、無きか、分

からず、すでに滅びかかつて、餘輝も見えぬ位。然るに、如何なれば、不肖の子たる汝のみが、瘧鬼

として、今に猶ほ暴威を逞うするのであるか、汝瘧鬼は、秋に乗じて、人の身に病を起さしめ、寒熱

往來し、翁孺などは、之に罹ると、ひどく閉口し、汝を罵り諷つて居る。そして、食事をしても、間

もなく吐瀉して仕舞ひ、その臭く穢いことは、言語道斷であるが、どうにも仕方がない。そこで、醫

師は、種種の劇藥を調合し、これを煎じて飲ませ、すこしも停まつて居る時の無い位、つづけて服用

せしめる。灸をすゑる人は、もぐさと線香とを用意して、病者の體を灼き、その苛酷なることは、瘧

の時、火を以て驅り立てると一般。まじなひをする人は、口を痛くして、霹靂の如き大聲を揚げる。

古詩讀 瘧 鬼

一四五



お札を出す人は、板を刀で削つて、筆で之に書きつけ、爲に朱墨を用ひ、交る書きなぐる。汝の系圖の由つて出づる處を考へると、門戸巍巍、まことに大したものであつたので、黃帝を祖となし、顯頊を父となし、二帝の餘烈、なほ滅びずして、この世に殘つて居る。しかるに、汝は、操行を修めず、その行の賤劣にして輕薄なる、他に比類なき位。かくては、まさしく汝の祖を辱しめるものであるのに、汝は、視然として、歸着するところを知らず、勝手に振舞つて居るのは、まことに怪しからぬ話。汝の居る江水は、浩浩として清いから、汝は、態態、そこから出て来て人に害を加ふことを止め、その住所に歸つて、汝の配偶者と一緒に安居し、その清波を以て衣裳となし、白石を以て門庭となし、そして、明月の光を呼吸し、手に芙蓉の旗を振り立て、同類と共に一緒に集まつて降り、九歌につれて催さるる歌樂鼓舞を樂み、芳菲を飲食したら善いので、汝の居るべき處は、ちやんと定まつて居て、まことに先上もない。ここに、汝に好辭を贈るから、汝は篇と我が意を體せよ、取り敢へず汝は出で行け、そして、必ず去つて我が意に違うてはならぬ。

【餘論】朱竹宛は「格調、楚騷に本づいて來る、筆、蒼ならざるに非ず、但だ語味寡きを恨む」といつた。中間、醫師、灸師、祖師、符師を分説する處は、韓愈の常用筆法である。浩浩江水清以下八句、措辭明堂、前に反映して、特に異彩を放つて居る。

示兒

兒に示す

始我來京師止攜一束書。始め、我、京師に來りしとき、止だ一束の書を攜ふるのみ。

辛勤三十年以有此屋廬。辛勤三十年、以てこの屋廬あり。

此屋豈爲華於我自有餘。この屋、豈に華と爲さむや、我に於ては、自ら餘あり。

中堂高且新四時登牢蔬。中堂、高く且つ新なり、四時、牢蔬を登ぐ。

前榮饌賓親冠婚之所於。前榮には賓親を饌す、冠婚の於てするところ。

庭内無所有高樹八九株。庭内には、有るところなし、高樹八九株。

有藤婁絡之春華夏陰敷。藤あり、これを婁絡し、春は華さいて夏は陰を敷く。

東堂坐見山雲風相吹噓。東堂坐して山を見る、雲風相吹噓す。

松泉連南亭外有瓜芋區。松泉、南亭に連り、外に瓜芋の區あり。

西偏屋不多槐榆駢空虛。西偏は屋多からず、槐榆、空虛に駢す。

山鳥旦夕鳴有類澗谷居。山鳥、旦夕鳴き、澗谷の居に類するあり。

主婦治北堂膳服適戚疏。主婦は、北堂を治し、膳服、戚疏に適へり。

恩封高平君。子孫從朝裾。  
 開門問誰來。無非卿大夫。  
 不知官高卑。玉帶懸金魚。  
 問客之所爲。我冠講唐虞。  
 酒食罷無爲。棊槩以相娛。  
 凡此座中人。十九持鈞樞。  
 又問誰與類。莫與張樊如。  
 來過亦無事。考評道精麤。  
 蹀躞媚學子。牆屏日有徒。  
 以能問不能。其蔽豈可祛。  
 嗟我不修飾。事與庸人俱。  
 安能坐如此。比肩於朝儒。  
 詩以示兒曹。其無迷厥初。

恩、高平君に封せられ、子孫、朝裾に従ふ。  
 門を開いて、誰か来ると問へば、卿大夫に非ざるはなし。  
 官の高卑を知らず、玉帯に金魚を懸く。  
 客の爲すところを問へば、我冠、唐虞を講ず。  
 酒食罷めて、無爲なるときは、棊槩以て相娛む。  
 凡そ、此座中の入、十の九は鈞樞を持す。  
 又誰と與にか類りなると問はば、張樊とに如くはなし。  
 來り過ぎて、亦た無事なるときは、道の精麤を考評す。  
 蹀躞たり、學に媚ぶるの子、牆屏日に徒あり。  
 能を以て不能に問ふ、その蔽豈に祛くべけむや。  
 嗟、我、修飾せざれば、事、庸人と俱にせむ。  
 安んぞ能く坐ながら此の如くして、肩を朝儒に比せむや。  
 詩以て兒曹に示す、其れ厥初に迷ふ無かれ。

【字解】(一) 始我來京師。咸意は、貞元二年、年十九で、はじめて長安に上京した。(二) 一東書。一つに束れた書。(三) 幸。李吉勳。【一】此屋。韓愈の宅は長安の增安里に在った。【二】爲。韓は學問立派なること。【三】高且新。こしらへが高く、そして近ごろ新に普請した。【四】時。李。專法に「登、或は樂に作る。云ふ、中堂は時紀に同じ、而して、前堂は以て觀覽に備するなり。今、後するに、公、袁氏先廟の碑を作つて、觀覽三進、の階あり。登、半階」と語意正に同じ。必ずしも、樂の字となし、乃ち時紀と爲すを須ひざるなり」とある。專法は、太半少半の半、即ち樂内、蓋は樂内、四時の間。こゝで祖先の樂をするをいふので、必ずしも、時紀を指すのではない。【五】前堂。專法に「沈氏樂譜に云ふ、退之示兒の詩に云云、屋裏、これを樂といふ、東西には之あり、未だ知らず、前堂安くにか在る。蕭亮樂書、以爲へらく、然らず、云ふ、王元長の曲水詩序に云ふ、詩三進、而淨樂、五區法には、樂を以て屋櫺と爲す。櫺一名は、櫺、一名は字、即ち屋の四邊なり、又、これを櫺といひ、又、これを櫺といふ。樂譜に云ふ、屋櫺の兩頭起るものを樂と爲す。故に記に言ふ、洗は東樂に實つ、又東樂より升り、西北樂より升る。上林賦に「備俗之徒、參於南樂、すなはち、即ちゆる樂は、東西南北皆之あり、故に李華の會元殿賦、又風雨交四樂の賦あり、樂未だ唯、爲さず。前堂は、加雜甘泉賦に、列前施於上樂」と云ふが如き、是れなり」とある。前堂は、前方の庇のある處。【六】懷。懷親。東晉親舊の人人に御馳走する、即ち座敷。【七】高樹。後、の詩に見えた樹木であらう。【八】雲。莊子に「卷其といふ字面があつて、その注に「猶ほ袖攀の如きなり」とある。即ちからみ付く。【九】相吹。互に吹き飛ばし合ふ。【一〇】松果。吳は柏と同字、即ちはぜの類、諸本に果に作つたのは誤である。【一一】瓜。瓜字。瓜や芋、即ち野菜を植ふる。【一二】西。西邊の片よつた處。【一三】棊。棊とにれ。【一四】空地。空地。【一五】主婦。即ち韓愈の妻、范陽の盧氏。【一六】膳。膳。衣食。【一七】連。連。觀覽に相應する體にする。【一八】恩封高平君。朝恩を以て高平郡君に封ぜられた。【一九】從。從初。參初する時の禮服の裾に従つて付きまよふ。【二〇】金魚。唐唐書の輿服志に「古しへの景袋、織文品ふるに魚袋を以てし、高祖は、五品以上に隨身魚袋、三品以上に魚袋を給し、餘るに金を以てし、四品は銀を以てし、五品は銅を以てす。又開元の初、唐馬都尉從五品は假紫魚袋」とある。魚袋をつけるは、五品以上、三品以下で、銀もしくは銅を以て造つてある。【二一】我冠。高い冠を戴く、儀容の堂堂たるを云ふ。【二二】酒食罷無爲。酒

食が済んで何も事なければといふ。【二六】 藤原 唐人の時に長宿天國へ遊、皇子地掛とあつて、妻は突、罪は實、北史に「齊の爾朱世隆、元世隆と稱號す、忽ち同上段然として娶あるを聞く。一局子、重く倒立す」とある。【二七】 十九持約、十中の九人までは朝政に參與して居る。【二八】 藤原 誰が眞實に來訪する。【二九】 眞實 眞實・美宗師の二人。【三〇】 眞實 眞實の眞、又眞不眞。【三一】 可也 疑は無く。【三二】 嗚我 一に我知に作る、書注に「按ずるに、我知の字、即ち下文の安能知此、及び本軍の無邊三厥初」と相照す、但だ嗚我に作る時は、勝勢差や優なり。蓋し、我修飾せずとは、謙辭に非ず、乃ち眞不、向に我をして修飾せざらしめば、この爵位・居家・交遊の盛を敢て能はざるのみと。然らば、我知は乃ち嗚我の注同なり、故に今只だ嗚我に作ると雖も、しかも我知の二字、義亦た自ら通ずるなり」とある。【三三】 無邊厥初 書經に「無邊厥初」とあるに同じ。

【題義】 示兒の兒は、大方例の韓視、即ち前に讀書城南とあつた幼名を符といつた其人であらう。この時は初に始我來三京師とあり、その下に、辛勳三十年とあるから、韓愈の年四十九、即ち元和十二年、吳元濟の征討に従つて歸り、功を以て刑部侍郎に遷つた時分であらう。大體は、刻下住宅の模様、交遊の有様を敘し、自分が此の如くなつたのも、畢竟修飾したからで、汝等も、その初を慎んで、随分勉強せねばならぬといふ處に在るのである。

【詩意】 その初、自分が田舎から長安に上京した時は、進士の試験を受ける爲であつて、參考用として、一束の書を攜へしのみ、全く裸一貫の貧乏書生であつた。しかし、辛苦勉強すること三十年の久しきを経て、どうやら生計も樂になり、現在住んでゐる此家をも所有する位になつた。この家は、もとより立派でもないが、我に取つては不足なく、自然餘ある位。中堂は、土臺も高く、近ごろ新築した

ので、そこで四時の間、先祖の祭を爲し、祭肉・菜蔬を煮める。その前方の庇ある處は、客間の廣い座敷で、ここで賓客親書を饗應し、冠婚の如き大禮をも行ふのである。その前なる中庭には、何もなすが、丈高き楸樹が八九本あつて、藤が之にからみ付いて居る。その藤は、春に花さき、夏には清陰を地に敷いて、頗る風情を添へる。中堂の東なる一棟、即ち東堂は、遠く郭外を眺むべく、坐ながら山が見えて、雲風の互に吹き廻す景色も、面白い。そして、松とはせとが、雜植してあつて、南亭に連り、その外は、瓜芋の如き野菜を種ある處である。中堂の西べりには、建物多からず、槐だの、榆だのといふ雜樹が、空地に影を隠して繁茂し、山鳥が朝夕に來り鳴き、さながら谷間の閑居に似て居る。中堂の後は、即ち北堂で、主婦の坐つて居る處。主婦、即ち我が妻は、多くの食客・客どもの世話をして、親疏に従つて衣食各、相適ふ様にし、随分骨の折れることである。頭ろは、辱くも、天恩の厚きを拜して、高平郡君といふ爵位を賜はり、參賀の時に禮服を著ると、子孫どもが珍らしがつて、付きまとふ位である。それで、門を開いて來りしものを誰かと問へば、卿大夫に非ざるはなく、官の高卑は知らざれども、腰に玉帯を環らし、銀銅の魚袋を佩びて居る處を見ると、五品以上の朝貴たることは、申すまでもない。その來訪せし客人が何を爲すかといへば、峩冠を戴き、威儀堂堂、唐虞三代の道を講究して、主人公の歡を乞ふのである。さて、御積古が濟ひと、食事となり、酒食すに畢りて、何もすることが無い時には、雙六の戲を爲して相親んで居る。凡そこの座中の人は、十中

九までは、朝政に參與し、鈞樞を握つて居る當世のチヤキチヤキである。それから、どういふ人が頻繁に出入するかといへば、張籍・樊宗師の二人が一番で、その來訪して、折よく、主人の暇な時に當れば、道德の精疏を考究評論して居る。その他、學問に媚びて、あるが上にも、勉強したいといふ者は、隱隱として、尋ね來り、磨屏の間に伺候して、弟子と稱し、主人の教を乞ふものが毎日やつて來る。元來、能を以て不能に問うた處で、何の役にも立たず、その蔽はれたものは、除き去ることも出來ないので、主人の無學、甚だ覺束ない様だが、兎に角、弟子どもが多くある。わが現在の住居の有様は、上に述べた通りで、自分ながら、先づ相當に出世をしたものである。それといふのも、畢竟、學行を修飾したからで、もし我にして修飾しなければ、すべての事は、庸人と共にし、格別世に出でずして終つたに相違なく、どうして坐ながら此の如く、肩を在朝の羣儒に比することが出來やう。そこで、その事を詩に作つて汝等に示すので、汝等も、厥初を慎み、少壯の間、勉強して修飾することを怠つてはならぬぞ。

【餘論】これも前の符讀「書城南」と同じく、おのが現在の境涯を以て足れりとし、兒童に對して威張つて居るやうな氣味で、兎角、後人の批議を免れぬ。蘇東坡は之を杜甫と比較し、「退之の兒に示す詩に云ふ、主婦治北堂、勝服適成疏、恩封高平君、子孫從朝裾、開門問誰來、無非聊大夫、不知官高卑、玉帶懸金魚。又云ふ、凡此塵中人、十九持鈞樞」と示すところ、皆利祿の事なり、老杜に至つ

ては然らず。その宗武に示すに云ふ、試吟青玉案、莫羨紫香囊、應須飽經術、已自愛文章、十五男兒志、三千弟子行、曾參與游夏、達者得升堂と示すところは、皆聖人の事なりといひ、朱熹は「退之の此篇、誇るところは、乃ち二鳥に感じ、符書を讀むの成功極致にして、宰相に上る書に謂はゆる道を行ひ世を憂ふるものは、すでに復た言はず、その本心、何如ぞや」といつた。但し、これは、倅殊に幼童に示すのであるが、極めて平易な事柄を述べ、わざと六つかしいことを避けたので、結末、修飾を励め、厥初を慎めといふを見れば、究極に於て、その道に向はむことを勸むるの意は、もとより顯然として明かである。趙臨北は「示兒の詩、自ら言ふ。辛勤三十年、はじめて此屋あり」と。而して、備さに屋宇の壇爽を述べ、妻は誥封を受け、往還するところ、公卿大夫に非ざるなし、以てその學を勤めむことを誘ふ。これ已に小見に屬す。符讀「書城南」の一首、亦た以へらく、兩家子を生み、提孩の時は、朝夕相同じうして、甚だしき差等なきも、長ずるに及びて、一龍一猪、或は公相となり、勢位赫奕、或は馬卒となり、日に鞭笞を受く、皆、學と不學との故に由る、と。これ亦た徒に利祿を以て、子を誘ふ。宜なり、宋人の其後を議するや。知らず、利祿を舍いて、専ら品行を論ずるは、これ宋以後、道學諸儒の論、宋以前は、固より此説なきを。顏氏家訓・柳氏家訓を觀るも、亦た何ぞ嘗て榮辱を以て勸誡と爲さざらむや」といつて居るが、表面上の事は、無論、これで盡して居る。

庭楸

庭楸

庭楸止五株。共生十步間。  
 各有藤繞之。上各相鉤聯。  
 下葉各垂地。樹頭各雲連。  
 朝日出其東。我常坐西偏。  
 夕日在其西。我常坐東邊。  
 當晝日在上。我在中央間。  
 仰視何青青。上不見纖穿。  
 朝暮無日時。我且八九旋。  
 濯濯晨露香。明珠何聯聯。  
 夜月來照之。萋萋自生煙。  
 我已自頽鈍。重遭五楸牽。  
 客來尙不見。肯到權門前。

庭楸、止だ五株のみ、ともに十歩の間に生ず。各、藤あつて之を繞り、上は各相鉤聯す。下葉は各地に垂れ、樹頭は各雲と連る。朝日、その東に出づれば、我、常に西偏に坐す。夕日、その西に在れば、我、常に東邊に坐す。晝に當つて、日、上に在れば、我、中央の間に在り。仰ぎ視れば、何ぞ青青たる、上、纖穿を見ず。朝暮、日なき時、我且つ八九たび旋る。濯濯として、晨露香しく、明珠、何ぞ聯聯たる。夜月、來つて之を照らし、萋萋として、自ら煙を生ず。我已すでに、自ら頽鈍、重ねて、五楸の牽くに遭ふ。客來るも、尙は見えず、肯て權門の前に到らむや。

權門衆所趨。有客動百千。  
 九牛亡一毛。未在多少間。

權門は、衆の趨るところ、客あり、動もすれば百千。九牛に一毛を亡ふ、未だ多少の間に在らず。

往既無可顧。不往自可憐。  
 往けば既に顧るべきなく、往かざれば、自ら憐むべし。

【字解】(一) 共生十歩間。十歩間の狭い處に列植して居る。(二) 鉤聯。引き釣つて連接する。(三) 樹頭。樹の頂。(四) 西偏。西の隅。(五) 纖穿。すきまの隙間。(六) 八九旋。八九回も其處に來る。(七) 萋萋。管の漚方の生草百首に萋萋嘉草とあつて、勢よく茂り合ふ。(八) 肯。權門前。舊史に昭公、少くして、孟郊・張籍と友とし善し、權門豪士を顧ること、僥倖の如く、體然として顧みずとある。(九) 未。未だ多少間。多少に關係しない。

【題義】庭楸の楸は、ひさぎ、松楸といつて、松と共に墓地などにも植ゑるが、玩賞用として、庭中に植ゑることもあると見える。この庭楸は、前詩に庭内無所有、高樹八九株とあつた其中の木で、つまり、高樹の過半数を占めて居ると見える。それから、各有藤繞之、上各相鉤聯とあるは、前詩の有藤繞之、春華夏陰敷と全く同じである。この詩は、前篇に於て未だ申べざりし意を賦出したので、無論、同時の作である。

【詩意】庭中の楸樹は、たつた五株で、それも、方十歩の狭い處に列植して居る。五株とも、藤が絡みついて、上の方では、互に鉤聯して居るし、下の方では、楸樹の葉が各地に垂れ、樹の頂は高く雲と連つて居る。ここは、中堂の中庭であるから、われは、常に其近くに居るので、朝日が樹の東より

出るとき、我は光線の眩ゆきを避けて、西べりに坐し、夕日が樹の西に懸るとき、我は東邊に坐し、日中、太陽が丁度頭の上に来るとき、我は五株の中央の處に坐つて居る。仰ぎ見れば、如何にして、青青と枝葉が繁茂し、少しも隙間もないのか。それから、朝暮日の見えぬ頃は、最も趣があるので、我は八九回も其處に来て彷徨して居る。朝早くは、濯濯として晨露も香しきやうで、その露の粒は、明珠の聯聯たるに似て居る。夕暮には、夜月來つて之を照し、その茂れる處から、煙を生ずるやうに見える。われは、生來、頑愚鈍なるが上に、この五楸に心を牽かれて、常に其處を離れず、客が來ても、これに面會せず、わざわざ權門に至ることなどは、決して無い。抑も權門は、衆人の趨り集まる處で、客の多きこと、動もすれば百千に及ぶが、その主人は、なかなか、殘らず引見することが出來ぬし、その逢ふのは、九牛の一毛に比すべき位、それとても従前關係のあるものに限りに、來客の多少には關係しない。自分も、少しく權門に伺候すれば、もつと出世をするかも知れぬが、平生が平生だから、たとひ、今驟に往つた處で、顧みられることもなく、往かざれば、只だ自ら運命の拙きを憐むだけである。

【餘論】この篇は、楸樹を敘した處が、極めて面白いので、朱竹垞は「東西中日夕等分敘、亦た古樂府の餘調、然れども略ぼ瑣絮を覺ゆ」といひ、何義門は、濯濯晨露の數句を賞して「愈よ朴、愈よ妙、絶えて古樂府に似て秀絶」といひ、乾隆御批にも「東西朝暮を歷敘し、繁にして殺ならず、彌よ古意あり」と稱して居る。但し、我已自頑鈍以下の感慨は、まことに淺俗に失し、折角の妙趣を打破したやうで、いかにも遺憾である。

翫月喜張十八員外以王六祕書至

月を翫び、張十八員外の王六祕書を以て至るを喜ぶ

前夕雖十五月長未滿規 前夕は十五と雖も、月長じて未だ規に滿たず。

君來晤我時風露渺無涯 君來つて我に晤ふの時、風露渺として涯なし。

浮雲散白石天宇開青池 浮雲は白石を散じ、天宇は青池を開く。

孤質不自憚中天爲君施 孤質自ら憚らず、中天、君が爲に施す。

翫翫夜遂久亭亭曙將披 翫翫として、夜、遂に久しく、亭亭として、曙將に

況當今夕圓又以嘉客隨 況んや、今夕の圓なるに當り、又嘉客を以て隨ふをや。

惜無酒食樂但用歌嘲爲 惜むらくは、酒食の樂なく、但だ歌嘲を用つて爲すことを。

【字解】(一) 月長 月が大きくなる。(二) 未滿規 規は圓を作るもの、仍つて圓と同職に用ひ。すつかり圓いとまでは行かぬ。(三) 孤質 月を指して云ふ。(四) 爲君施 君の爲に好景致を施へた。(五) 亭亭 空の高きをいふ。(六) 歌嘲 歌つたり諷笑

古詩 既月喜張十八員外以王六祕書至

【題義】張十八員外は張籍。この時、水部員外郎であつた。王六は、原注に王建とある。王建の略傳は、總說中に述べて置いた。以の字、一本に與に作つてあるが、もと以と與と義相通するに因つて用ひたので、どちらでも宜しい。以の字、或は能く左右する義に取るなどいふが、そんな六つかしいこととは言はずとも善い。蔣注に「公、長慶四年の夏、病を以て告に在り、八月に至つて、百日に滿ち、吏郎侍郎を免す。詩、蓋し此時の作ならむ」とあつて、いづれ、確な據り處があることとおもふ。すると、この詩は、韓愈の死ぬ少し前で、この後、作つたのは、この巻の終に載する南溪始泛の三首だけである。

【詩意】昨夜は、中秋であつたが、月は大きいといふものの、十分圓くはなかつた。君が来て予と相見た時、夜は漸く更けむとし、一天の風露、渺として涯際なく、仰げば、まことに綺麗に晴れて居て、ちぎれちぎれた浮雲は、白石を散したるが如く、空は青く澄んで、池のやうであつた。月は、誰憚るとしもなく、ひとり中天に在つて、君の爲に好風景を開いた。月を賞して覺えず時を移したから、夜は愈よ遅くなり、やがて、空は亭亭として高く、曙色將に披かむとした。昨夕でさへも此通り、まして、今宵は既望の夜で、月は丁度まん圓く、その景致、想ふべく、その上、君は嘉客を連れて來るか、愈よ以て面白いに違ひない。惜むらくは、吾は病を養つて居る位だから、酒食の樂を繼にす

ることが出來ず、唯だ歌詠談笑するだけであるが、マア緩つくりして居て貰ひたい。

【餘論】これは、張王二人が遣つて來ると、大に喜んで直に作つたものと見えるので、今夜の事は、まだ十分の材料がないし、昨夜の事は、まだ詩に作つてなかつたから、取り敢へず、昨夜の幽興を追憶して細敘し、仍つて、今夕の事に及んだのである。朱竹垞は「清空寫意」といひ「拘拘として題上に在つて藻飾せず、但だ自己の意思を説く。詩、未だ工ならずと雖も、却つて、詩は志を言ふの意旨を得たり、胸次自ら起」といひ「當夜の月は説かず、却つて前夕の月を追念す、格亦た新」といつて、流石に語語肯綮に中つて居る。

和李相公攝事南郊覽物興懷呈一二知舊

李相公、事を南郊に攝し、物を覽て懷を興すに和し、一二の知舊に呈す

燦燦辰角曙、亭亭寒露朝、燦燦として辰角曙け、亭亭として寒露朝なり。

川原共澄映、雲日還浮颿、川原ともに澄映、雲日還た浮颿。

上宰嚴祀事、清途振華鑪、上宰、祀事を嚴にし、清途、華鑪を振ふ。

圓丘峻且坦、前對南山標、圓丘峻にして、且つ坦なり、前は南山の標に對す。

古詩 和李相公攝事南郊覽物興懷呈一二知舊

村樹黃復綠、中田稼何饒、村樹、黃復た緑、中田、稼何ぞ饒なる。  
 顧瞻想巖谷、興歎倦塵囂、顧瞻して巖谷を想ふ、歎を興して塵囂に倦む。  
 惟彼顛暝者、去公豈不遠、惟れ彼の顛暝の者、公を去る、豈に遠からざらむや。  
 爲仁朝自治、用靜兵以銷、仁を爲して、朝自ら治まり、靜を用ひて、兵以て銷ゆ。  
 勿憚吐捉勳、可歌風雨調、吐捉の勳を憚る勿れ、風雨の調へるを歌ふべし。  
 聖賢相遇少、功德今宜昭、聖賢、相遇ふこと少し、功德、今宜昭す。

【字解】(一)辰角、辰は房星、角は東方の宿の名。楚辭に角宿未沒、唯靈安藏とある。房星が角宿に来て夜が明ける。(二)李、ひるき韻。(三)當日、謝靈運の詩に當日相輝映とある。(四)上宰、李相公を指す。(五)振華、立派な馬銜を鳴らす。(六)圓丘、廣雅に「天を祭る大壇」とある。(七)南山、終南山の題項。(八)中田、田中に同じ。(九)稼、禾穀。(一〇)塵囂、左傳昭公三年に「塵囂塵塵、以て居るべからず」とある。(一一)顛、莊子に「富貴の地に顛冥す」とある。倒れ暈る。(一二)吐捉、史記の魯世家に「一沐に三たび髪を捉り、一飯に三たび哺を吐く」とある。今人が吐捉と使用するのは、韓詩外傳に本づくのである。(一三)宜昭、詩經に宜昭勳同とある。

【題義】李相公は、即ち前に見えた李逢吉、舊唐書の本傳に「元和十一年四月、朝議大夫門下侍郎同平章事を加へ、出でて劍南東川節度使となり、長慶二年、召し入れて復た門下侍郎平章事となる」とある。この詩は、李逢吉が天子の御名代として、南郊に天を祀り、その際、打見たる風景に對して、

感興を催し、詩を作つて、一二の舊知に寄せたから、韓愈が之に和して作つたので、即ち長慶二年の作である。

【詩意】燦爛たる房星が角宿に當つて、夜がほのぼのと明けると、白露は處狭きまで置きあまり、一帶の平原は、澄んで相映するが如く、雲日ともに淨くして、さながら空中に浮飄するかと思はれる。この時しも、李相公は、記事の御名代を仰せ付かつて、立派な鎧を馬にはませて、綺麗に掃き清めたる大道をしづしづと乗り出した。天を祭る圓丘は高くして、その上は平坦であり、そして、位置からいふと、前は終南の絶頂に對して居て、そこで例の祭儀を行はれるのである。その間なる村村の木は、すでに黄ばみたるものあり、なほ緑なるもあり、田の面の稻は十分に熟して居る。顧みて、終南の巖谷の幽邃なるを想ひ、都門の塵囂には飽き果てて、覺えず歎聲を發するばかり。かの富貴に顛冥して居る俗物は、公を去ること甚だ遠く、丸で相手にされざるは、至極結構であるが、仁を行へば、朝廷の上、自然に治まり、靜を用ふれば、騒亂いつしか平らぎ、武器も鎔かして仕舞つて善い様になるといふことで、その邊の事に特に御注意を願ひたい。古しへの周公が一食に三たび哺を吐き、一沐に三たび髪を捉へて、天下の士を引見したといふ其程の勤勞を憚らず、専ら人材を登庸したならば、やがて、風雨自ら調ひ、世は太平となるであらう。何は免もあれ、聖君賢相の相遇ふは、極めて希なことで、今、君の功德が天下に宜昭されるのは、上帝の御心にも協ふ次第である。



【餘論】朱竹垞は「前十二句、これ文選の調」といつた。李逢吉は、もとより賢相といはるべき人でもないのに、韓愈が此詩を贈つたのは、材能の人を用ひて至治を致す様に有りたといつて矚望したので、決して、阿諛の言を呈したのではない。

和裴僕射相公假山十一韻 裴僕射相公の假山十一韻に和す

公乎眞愛山。看山且連夕。公や眞に山を愛す、山を見て、且夕に連る。  
猶嫌山在眼。不得著脚歷。猶ほ嫌ふ、山の眼に在るを、脚を著けて歷るを得ず。  
枉語山中人。句我澗側石。枉げて山中の人に語る、我に澗側の石を句へよ。  
有來應公須。歸必載金帛。來つて、公の須に應ずるあらば、歸るとき、必ず金帛を載す。  
當軒乍駢羅。隨勢忽開坼。軒に當つて、乍ち駢羅し、勢に隨つて、忽ち開坼す。  
有洞若神劒。有巖類天劃。洞あり、神の劒るが若く、巖あり、天の劃せるに類す。  
終朝巖洞間。歌鼓燕賓戚。終朝巖洞の間、歌鼓、賓戚を燕す。  
孰謂衡霍期。近在王侯宅。孰れか謂はむ、衡霍の期、近く王侯の宅に在らむ。

傅氏築已卑。磻溪釣何激。傅氏、築くこと、すでに卑し、磻溪、釣、何ぞ激せる。

逍遙功德下。不與事相推。功德の下に逍遙し、事と相推せず。

樂我盛明朝。於焉傲今昔。我が盛明の朝を樂み、焉に今昔に傲る。

【字解】(一)且連夕。朝より續けて夕に至る。(二)駢羅。脚を著けて其處を歷る。(三)句。漢書西域傳に「我、若に馬を句へむ」とあつて、その注に「與ふるなり」とある。(四)須。もとめ、要求。(五)當軒。軒に近接する。(六)駢羅。並び連る。(七)開坼。開き、くじける。(八)神劒。神の力で劒る。(九)天劃。天然が劃割する。(一〇)終朝。終日に同じ。(一一)歌鼓。歌と樂鼓。(一二)賓戚。賓客親戚。(一三)衡霍期。謝靈運の詩に、遊宮三羅浮行、息必登霍期とある。その霍を衡霍と改めたので、衡は衡山、前に衡嶽廟の詩の處で詳しく注して置いた。霍は、冀州、即ち今の山西霍州に在る名山。(一四)傅氏。傅説、書經に「説、傅巖の野に築く」とある。傅説は、其地で版築の工事に役夫となつて居たが、武丁に用ひられて、宰相となつた。(一五)磻溪。太公望を云ふ。阮籍の勸晉王箋に「呂尚は、磻溪の漁者」とあり、尚書中候に「王、即ち契を水畔に題し、磻溪の水に至れば、呂尚、崖に釣る」とあつて、王は即ち文王、又將注に「磻溪は、今の鳳翔寶雞縣に在り。太公、ここに釣つて一魚を得たり、腹に瑤玉あり、文に曰く、周受呂、呂佐と。今石上尚ほ兩膝の痕を遺す」とある。(一六)不與事相推。被は捨ふ、取る。世間の俗事を取り上げぬ。

【題義】裴僕射相公は、原注に「裴は裴度を謂ふなり」とある通りで、憲宗の朝に於ける一代の名臣である。原注には、唐書の本傳を引いて「元和十年、詔して、度を以て門下侍郎同中書門下平章事と爲す。十四年、姦臣皇甫鉞に構へられ、相を罷めて、檢校左僕射河東節度使となる」とある。すると、この詩は、元和十四年頃に作つた様だが、卷首の年譜を見ると、この詩を長慶二年の作として

ある。即ち其前年に、裴度は、鎮州行營都招討使となつて深州を鎮撫し、この年二月には、司空東都留守となり、三月、穆宗詔を下し、これを留めて政を輔けしめたが、六月、罷められて右僕射となり、李逢吉が代つて同平章事となつて、朝政を專にした。蔣注には「舊史に、裴度、李逢吉に問せられ、長慶二年六月、相を罷めて尙書左僕射となる、公、この和篇及び感恩言志、朝廻見寄の作あり」とあつて、尙書左僕射を右僕射と訂正すべき外は、すべて、確實である。この詩は、裴度が相を罷めて家居するに當り、庭中に假山を造り、仍つて、十一韻の詩を賦したから、それに和して作つたのである。但し裴度の原作は、今傳はつて居らぬ。

【詩意】裴度は、心から山を愛せられ、仍つて、庭中に假山を造り、その山を眺めて、朝より夕に及ぶ位。しかし、山が眼中であるだけで、脚を著けて、そこに登れぬのを甚だ遺憾に思ひ、もつと大きく築き上げやうといふので、枉げて山中の人に語り、我に洞峙の石を與へよといはれた。そこで、公の需に應じて、石を運び込むものがあると、歸りには、車一ぱい金帛を載せて、その謝禮に當てられた。その石を軒に近く竝べ連ね、高下の勢に隨つて、開いて据ゑ付けると、流石に奇趣があるので、洞窟は神の力で廻つたやうであるし、巖は天然が剝削した如く、決して、人工とは見えない。巖洞すでに成りしが故に、終日、賓客戚屬を其處に會し、歌鼓に興を添へて、酒宴を催された。衡霍の如き名山と相期するは、容易ならぬことであるのに、それが眼のあたり、王侯の邸宅に於て、やすやすと

出來るといふのは、まことに、思ひがけぬことである。むかし、傳説は版築の間に居たので、その身分は、甚だ賤しいし、太公望は、磻溪に釣して、文王を引き寄せたので、その行爲は、聊か過激である。わが裴公は、之と異にして、功德すでに成りし後、身を抽いて閑地に逍遙し、世間の詰まらぬ事は、斷じて取り上げもせず、聖明の朝に遇へるを樂みつつ、世外の逸興を恣にして、今古に倣つて居られる。

【餘論】朱竹垞は「意を經ざるが若し、然れども、意態却つて流便、喜ぶべし。この詩は、是れ作者を踴躍せしめ、前詩は、是れ作者を勉強せしむ」といつたが、つまり、前首と此首とは、作者自身、氣乗りの工合が違つて居るからである。次に、何義門は、當時園庭の盛なりしことに論及し「晉の會稽王道子の嬖人趙牙、道子の爲に東第を開き、山を築き、池を穿ち、功用鉅萬。孝武帝、かつて其弟に幸し、道子に謂つて曰く、府内に山あるは甚だ善し、然れども、修飾太だ過ぎたり」と。帝、去る。道子、牙に謂つて曰く、上、山は是れ人力の爲すところたるを知らば、爾必ず死せむ」と。道子は、帝の弟相王、當時一假山を築くだに、尙ほ以て異事と爲す。齊に至つて、武陵王、自ら貧弱を薄んじ、後堂の山を名づけて首陽山池といふ。これより遂に園用を盛にし、人力盡く園圃に費す。唐より今に至るまで、視て常事と爲すと雖も、裴韓の如きも、詩を賦して相誇り、かつて疑を致さざるなり」とある。後に、宋の李格非は、洛陽名園記を作つたが、現に、裴度の別墅も、綠野莊といつ

て、洛陽に在つたので、この假山も洛陽の別墅に在るのかとも思はれる。なほ、何義門は「傅巖瀛溪の時、その功德、尙ほ未だ昭宣せず、これ表公の山池、尤も其盛に當る所以、觀語仍ほ分寸を失はず」といつて居る。

與張十八同效阮步兵一日復一夕

張十八と同じく、阮步兵の一日復た一夕に效ふ

一日復一日。一朝復一朝。一日復た一日、一朝復た一朝。

祇見有不如。不見有所超。祇だ如かざるあるを見て、超ゆるところあるを見ず。

食作前日味。事作前日調。食も前日の味を作し、事も前日の調を作す。

不知久不死。憫憫尙誰要。知らず、久しく死せず、憫憫として、尙ほ誰をか要する。

富貴自繫拘。貧賤亦煎焦。富貴、自ら繫拘し、貧賤、亦た煎焦す。

俯仰未得所。一世已解鑿。俯仰、未だ所を得ず、一世すでに、鑿を解く。

譬如籠中鶴。六翻無所搖。譬如、籠中の鶴、六翻、搖くところなきが如し。

譬如兔得蹄。何用東西跳。譬如、兔の蹄を得たるが如く、何ぞ東西に跳るを用ひむ。

還看古人書。復舉前人瓢。還た古人の書を看、復た前人の瓢を舉ぐ。

未知所究竟。且作新詩謔。未だ究竟するところを知らず、しばらく新詩を作つて謔ふ。

【字解】(一) 祇見有不如。誰に如かぬのか、無論古人であらう。(二) 繫拘。つないで拘束する。(三) 煎焦。煎りつけ焦がす。未得所。然るべき安心立命の處。(四) 解鑿。くつわを解いて馬を乗り出す。(五) 六翻。籠は裏に在る太い羽で、それが六本ある。飛ぶには、これが必要なので、これを抜けば飛べなくなる。(六) 得蹄。わなにかかる。(七) 未知所究竟。この先どうなるか分らない。

【圖義】張十八は例の張籍、數ば前に見えて居た。阮步兵は阮籍、晉書の本傳に「字は嗣宗、陳留尉氏の人、歩兵校尉となる。能く文を屬し、詠懐の詩八十餘篇を作るとある。そして、一日復一夕といふ詩も、詠懐中に載せてある。韓愈の此詩は、張籍と共に、阮籍の詠懐中の一日復一夕の詩に倣つて作つたのである。方嶽卿は「阮嗣宗の詠懐詩、百篇に近し、その一、六韻一首に云ふ、一日復一夕、一朝復一朝、顔色改平常、精神自損消、その一、七韻一首に云ふ、一日復一朝、一昏復一晨、容色改平常、精魂日飄淪。公の詩、その體に效ひ、而して、これを釋して曰く、一日復一日、一朝復一朝、と。然れども、その題は、實に一日復一夕に效ふより始むるなり。後人、詩語、題と相應せざるを以て、併せて易へて一日の字を作る、實は非なり」といひ、蔣注にも、そつくり之を引いてある。そこで、念の爲め、左に上記、阮籍の詩二首の全篇を引抄することにする。

古詩 與張十八同效阮步兵一日復一夕

一日復一夕。一夕復一朝。顔色改平常。精神自損消。胸中懷湯火。變化故相招。萬事無窮極。知謀苦不饒。但恐須臾間。魂氣隨風飄。終身履薄水。誰知我心焦。

一日復一朝。一昏復一晨。容色改平常。精魂日飄淪。臨觴多哀楚。思我故時人。對酒不能言。悽愴懷酸辛。願耕東臯陽。誰與守其真。愁苦在一時。高行傷微身。曲直何所爲。龍蛇爲我鄰。

【詩意】一日復た一日、一朝復た一朝といふ様に、日を送り、月を送つて、この世に生きながらへて居るが、顧みて、おのが身を見れば、依然として、舊の如く、格別の進境もなく、古人に如かざるところあつて、超越したところは少しも無い。食ふものは、前日の通りの味であり、爲すところの事は、前日と同じ調子、つまり、毎日毎日、同じ事を反覆して居るに過ぎない。かくて、久しく死せず、惘然として、誰を要せむとするか、自身でも分らない。もし、身、富貴なれば、物事につけて、牽束縛されるし、貧賤なれば、煎りつけ焦がされる様な苦痛を免れない。俯仰、ともに、落ち付くべき適當の個處を得ず、しかも、生を此世に享け、くつわを外づして馬を乗り出したからには、もう後へ引き戻すことも出来ず、たとへば、籠中に閉ぢこめられた鶴の如く、六翻依然たれども、狭い窮屈な處では、それを動かすことが出来ない。又たとへば、兎が罠にかかつた様なもので、いくら、じたばたして、東西に跳りはねて見たところで、仕方がない。考へて見れば、どうして善いか分らないが、

又ぞろ、古人の書を読み、その間には、前人と同じく、飄酒を酌んで、自ら慰めるより外に仕方がないので、この先、どうなるか分らないが、ここに新詩を作つて、おのが感慨を歌ひ出した次第である。

【餘論】この詩は、人生の無意味に近きことを述べて、胸中の感憤を寄せたので、一讀慘然、人をして樂まざらしめる。朱竹垞は「甚しくは阮に似ず、阮は天然、自ら肆にす、これは稍や安排あり、然れども、氣格亦た古淡」といひ、つまり、阮籍は行筆に意を用ひないが、この詩は、後出の者だけあつて、いくらか技工を著けたといふのである。

送諸葛覺往隨州讀書

諸葛覺の隨州に往きて書を読むを送る

鄴侯家多書、挿架三萬軸。

鄴侯、家に書多し、架に挿む三萬軸。

一一懸牙籤、新若手未觸。

一一、牙籤を懸け、新なること、手、未だ觸れざるが若し。

爲人強記覽、過眼不再讀。

人と爲り、記覽に強、眼を過ぐれば再び讀まず。

偉哉羣聖文、磊落載其腹。

偉なるかな、羣聖の文、磊落、その腹に載す。

行年餘五十、出守數已六。

行年、五十に餘り、出でて守たること、數、すでに六。

京邑有舊感。不容久食宿。

京邑に舊感あれども、久しく食宿するを容さず。

臺閣多官員。無地寄一足。

臺閣に官員多けれども、一足を寄するに地なし。

我雖官在朝。氣勢日局縮。

我、官して朝に在りとも、氣勢日に局縮。

屢爲丞相言。雖懇不見錄。

屢ば丞相の爲に言ふ、懇なりとも、録せられず。

送行過漣水。東望不轉目。

行を送つて、漣水を過ぎ、東に望んで、目を轉せず。

今子從之遊。學問得所欲。

今、子、これに従つて遊ぶ、學問欲するところを得む。

入海觀龍魚。矯翮逐黃鶴。

海に入つては龍魚を觀、翮を矯げては黃鶴を逐へ。

勉爲新詩章。月寄三四幅。

勉めて新詩章を爲り、月三四幅を寄せよ。

【字解】(一) 鄭侯。唐書に「李暹、字は長源、貞元三年、中書侍郎、同中書門下平章事に拜せられ、累りに鄭顯俊に討ぜられ、子繁、隨州刺史に累遷す」とある。(二) 家多書。何遜門の說に「厚齋意云ふ、李暹の受持書二萬餘卷を聚め、子深を流めて、門を出すを許さず、讀むを求むるものあらば、別院にて書を供す。鄭侯家傳に見ゆ。書の多きこと、自つて来るあり」と見ゆ。(三) 牙。銀牙を削つて造つた薄い札。後には、付け紙で番名を記せしものないふ。西京雜記に「經閣の圖書、皆表するに牙籤を以てす」とあり、舊唐書經籍志に「甲乙丙丁、四部の書、各一部となし、經庫は紅牙籤、史書庫は綠牙籤、子庫は碧牙籤、集庫は白牙籤、以て之を分別す」とある。(四) 孟郊。ここでは魁儒の號、即ち高く敬み上げてあること。(五) 漣水。前に前集卷二詩の中に見えて居たが、京兆の藍田谷より出で、瀛波に至つて漣水に入る。

【題義】 諸葛覺は、多分、灑師といふ坊さんが還俗したのであらうといふこと。何義門の言に據ると「諸葛覺は、貫休集中に珽に作る、その珽を懐ふの詩に、出山因覺孟、踏雪去尋韓。注に云ふ、「孟郊・韓愈に洛下に遇ふと、又注に云ふ、諸葛、かつて僧となり、然と名づく」と。公の詩、蓋し其人を送るなり」とある。ここで、貫休の集を見ると、懐諸葛珽二首とあつて、珽の下に「一に覺に作る」とある。そして、その詩は、

諸葛子作者。詩曾我細看。出山因覺孟。踏雪去尋韓。謬獨哭不錯。常流飲實難。知音知便了。歸去舊江干。

扁馬與羸童。微吟冒北風。店孤僧共歇。日落思無窮。囊草無非刺。魏人那識公。鶯花五陵道。去去與誰同。

といふので、謬獨の句下に「諸葛云ふ、思牽吳舳起、吟索剡雲開」とあり。「僧と爲つて、然と名づく」の下に「詩あり、云ふ、到處自整井、不能飲常流」とあり、魏人の句下に「魏に投せしが、遇はずして去る」とある。僧と爲つて然と名づくでは分からぬが、これは、一字を脱して居るので、もしくは灑然といふのではあるまいか。今、これ等を綜合すると、諸葛覺は、はじめ坊さんであつたのが、還俗した後、學を修め、洛陽に居て、韓愈・孟郊の二人と知り、又詩をも作り、後には魏に往つたが不遇であつたのであらう。隨州は李泌の子繁が刺史たりし地、その家に藏書多きが故に、諸葛

覺は、學問修業の爲め、且つ李繁の教を受けむが爲に、その地に赴かむとし、因つて、韓愈が此詩を作つて、その行を送つたのである。

【詩意】名だたる李鄴侯の家には、藏書頗る多く、書棚の上には、卷物仕立が三萬軸もあつて、一紙の札をつけて書名を記し、平生の整理も、手入も、行き届いて居るから、いづれも汗損せず、丸で新しくして、まだ手をだに觸れぬ様である。今の主人の李繁は、人と爲り博聞強記で、一度目を通せば、すつかり諸記して、再び讀むことなく、古來、羣聖の書かれたものは、高く積んで、其腹の上に載せてある。しかも、行年五十を踰えて、官途甚だ進まず、外に出でて刺史となること、前後六回に及び、都には、先祖からの舊宅あるも、そこに落ち付いて食宿することが出來ず、臺閣には官員も多いが、李繁は其列に屬つて足を入れるやうな適當な職もなく、まことに不遇で、氣の毒な位。われは、朝廷に在官して居るが、政治腐敗の折から、朋黨の爲に散散な目に遇ひ、往年の意氣、日に増し衰ふるばかり、屢は丞相の爲に意見を述べ、その言極めて懇切なれども、一向取り上げて呉れないので、李繁の如く、外に在る方が、むしろ、却つて善いかも知れない。さきに、李繁が隨州に赴任するとき、長安の郊外なる灑水の邊まで送つて行つたが、すでに別れし後、東の方を望んで、目を移さなかつた。今、君は、隨州に往つて、李繁の門下に遊ぶといふが、定めて、おもふ存分の勉強も出來るであらう。かの李繁は、學問にかけては、その大を志し、たとへば龍魚の海に在るが如く、黃鶴が一舉千里の翼

を拊つて高く飛ぶが如く、随分偉い人であるから、君も、その學風を傳へる様にすることが善い。そして、閒暇な時には、詩でも作つて、毎月三四幅づつ送つて見せて呉れろ。

【餘論】この詩は、諸葛覺の行を送るのであるが、これから行つて世話に成らうといふ李繁の事を詳述したのは、取りも直さず、諸葛覺の参考に供し、且つその勉強を勵むる爲である。朱竹垞が「亦た是れ快調」といつた通り、文字は平易明瞭、その旨趣も至極穩當で、韓集中に於ては、稀に見る小じんまりした佳作である。そして、結末、詩を寄せよといふを見れば、諸葛覺が當時すでに詩名あつたことも、容易に推測される。

南溪始泛二首

南溪に始めて泛ぶ 三首

榜舟南山下、上上不得返。

舟を榜す南山の下、上り上つて返るを得ず。

幽事隨去多、孰能量近遠。

幽事去るに隨つて多く、孰れか能く近遠を量らむ。

陰沈過連樹、藏昂抵橫坂。

陰沈として連樹を過ぎ、藏昂として横坂に抵る。

石轟肆磨礪、波惡厭牽挽。

石は轟にして磨礪を肆にし、波は惡くして牽挽に厭く。

或倚偏岸漁、竟就平洲飯。

或は偏岸に倚つて漁し、竟に平洲に就いて飯す。

【點】點暮雨飄。梢梢新月偃。【點】點として暮雨飄り、梢梢として新月偃す。  
 餘年懷無幾。休日愴已晚。【點】餘年幾くもなきを懷る、休日すでに晩きを愴ふ。  
 自是病使然。非由取高蹇。【點】自らは是れ、病然らしむ。高蹇を取るに由るに非ず。

【字解】【一】榜舟。榜は刺す、即ち棹を刺して舟を行ふこと。【二】南山。終南山。【三】上上。茶を濁つて止まざること。  
 【四】南事。おもしろいこと、逸興などいふに同じ。【五】點去。行くに隨つて。【六】巖岸。低昂高下といふに同じ。【七】石。石の角角しきこと。【八】牽挽。舟を引き上げる。【九】偏岸。片よりたる岸、岸が片よるとは、一方に深い淵があつて、そこに魚が多く居る。【一〇】平洲。平圓なる沙洲。【一一】點點。ばらばら。【一二】梢梢。廣雅に「區區、梢梢は小なり」とある。細い、小さい。【一三】愴。ふす、低く見えるをいふ。【一四】餘年。餘生に同じ。【一五】休日。病氣療養の爲に乞ひ得たる暇日。【一六】已。晩。最早盡きむとして居る。【一七】高蹇。高は高尙、蹇は僂蹇。わざと俥がつて腰居する。

【題義】南溪は、終南山の麓に在つて、そこに、始めて舟を泛べて遊んだ時に、此詩を作つたのである。これは、長慶四年の秋、既、月、喜、張十八員外以王六秘書一至の詩の後のことで、韓愈は、病を養つて、城南の別墅に居た時、この南溪へは、あまり遠くない處から、病間に此遊を試みたのである。その翌、五年の初に、張籍が作つた韓愈を祭る詩の中に、公爲游溪詩、唱和多慷慨とあるのは、即ち此詩を指したのである。

【詩意】終南の麓なる南溪に舟を浮べ、棹して流を溯り、頻りに上り上つて返ることも出来ぬ位に

なつた。愈よ行けば愈よ面白く、逸興の加はるときは、路の遠近などは、頭から考へない。その間、陰沈として木木の連れる其蔭を過ぐることもあり、巖たびか高下する様な阪路に接することもあつた。溪中の石は、かどかどしくして、さながら、礪ぎ出したるが如く、波は、荒くして、舟を引き上げるも、厭になるほど、骨が折れた。或時は、片よりたる岸に臨んで網打を試み、或時は、平圓なる沙洲の上に於て、食事をした。すると、天色やや曇り、暮雨がばらばら降つて來たが、ほんの時雨で、しばらくして止み、細い新月が山の峽に低く顯はれた。おもへば、われは病を得て、まだ全治せず、餘生幾もない様な氣がしてならぬし、病氣の爲に、願つて置いた休暇も、もう盡きなむとして、何となく心配でならぬ。わが此に在つて浮世と全然隔絶して居るのは、全く保養の爲めであつて、何も故らに俥がつて隠遁したのではない。

【餘論】起結數句を除いて、その他は、すべて對偶の文字である。曲事の十字は、對句ではないが、善く勝境の眞趣を盡して居るので、朱竹垞は「兩語妙絶」といひ、それから、點點暮雨に就いては、「屬對、工にして自然」といつた。なほ、蔣之翘は、全篇を評して「寫し得て眞率、雕琢を用ひず」といつて居る。

南溪亦清駛而無機與舟。南溪、亦た清駛、しかも、機と舟となし。

山農驚見之。隨我觀不休。山農、驚いて之を見、我に隨つて觀て休まず。  
 不惟兒童輩。或有杖白頭。惟だ兒童の輩のみならず、或は杖つける白頭あり。  
 饋我籠中瓜。勸我此淹留。我に籠中の瓜を饋り、我に勸めて此に淹留せしむ。  
 我云以病歸。此已頗自由。我は云ふ、病を以て歸り、これ已に頗る自由。  
 幸有用餘俸。置居在西嚳。幸に餘俸を用ふるあり、居を置いて西嚳に在り。  
 困倉米穀滿。未有旦夕憂。困倉に米穀滿ち、未だ旦夕の憂あらず。  
 上去無得得。下來亦悠悠。上去去るも、得得たるなし、下り來るも、亦た悠悠。  
 但恐煩里閭。時有緩急投。但だ恐らくは、里閭を煩はし、時に緩急の投するあらむ。  
 願爲同社人。雞豚燕春秋。願はくは、同社の人となつて、雞豚春秋に燕せむと。

【字解】(一) 清驛 驛は馬の疾行する貌。謝靈運の詩に「清驛夕流駛」とある。(二) 山農 山中の農夫、即ち終南山邊の農夫であらう。(三) 杖白頭 杖をついた白髮の老翁。(四) 置居 住居を定める、即ち城南の別墅を指す。(五) 西嚳 西郊に同じ。(六) 困倉 米倉。(七) 旦夕憂 朝夕の食物にも差支へるといふ豫念の心配。(八) 上去 上去、長安に上つて去ること、即ち官省に出勤すること。(九) 里閭 村里の人人。(一〇) 緩急投 急な出来事があれば世話になる。(一一) 同社人 社は穀神を祀る廟で、社に因つて村里が一團に成つて居る。そこで、同社といへば、同村同里といふこと。(一二) 雞豚 雞や豚を料理する。(一三) 燕春秋 春秋の

彼岸時分に村人を招待して、小宴を催す。

【詩意】南溪の水は、綺麗に澄んで、そして、勢よく走つて居る。これを渡るに舟楫なく、仕方が無いから、徒渉せむとした。すると、山中の百姓は、これを見て驚き、やがて、わが後について來て、ちつと見て居た。萬一の事があつては成らぬと思つたので、その親切は、感謝すべき程である。その百姓は、ひとり兒童のみならず、中には、杖をついた白髮頭の老人も居たので、摘んで來たばかりの瓜を籠の中から取り出して我に贈り、そして、こゝは、まことに風景の好い處であるから、いつまでも此に淹留して居られよといった。われは之に答へて、自分は、近ごろ、病氣保養の爲に此に來て居るので、今は頗る自由な身である。幸にして、棄て扶持を頂戴して居るから、別墅を西郊に設け、倉中には米穀が一ばいで、さし詰め、食ふに困る様なことはない。長安に往つて、官省に出勤したところ、格別得意といふ譯でもなく、暇を乞うて、この田舎に來て居ると、却つて、のんきである。しかし、村の諸君を煩はして、急な用事の起つた時、御世話になるのは、まことに恐れ入る次第で、願はくは、これより同じ社中の氏子となり、平等の交際をなし、春秋の彼岸には、雞や豚で小宴を催したいから、その時は、皆皆打揃つて、是非來て貰ひたい。

【餘論】朱竹垞は「古ならず、唐ならず、昌黎の本色」といつたが、これより先、蔣之魁が「物に即いて心を寓す、愈よ朴にして愈よ切、柳柳州、この派に於て尤も近し」といつた。これは、柳集中で



も、特に田家三首などを指したものでらしいから、左に其全詩を擧げて、聊か參考に供することにす

尊食徇所務。驅牛向東阡。雞鳴村巷白。夜色歸暮田。札札未相聲。飛飛來鳥處。竭茲筋力事。持用窮歲年。盡輸助徭役。聊就空自眠。子孫日以長。世世還復然。

籬落隔煙火。農談四鄰夕。庭除秋蟲鳴。疏麻方寂歷。蠶絲盡輸稅。機杼空倚壁。里胥夜經過。雞黍事簞席。各言官長峻。文字多督責。東鄉後租期。車穀陷泥澤。公門少推恕。鞭朴恣狼藉。努力慎經營。肌膚真可惜。迎新在此歲。唯恐踵前跡。

古道饒羨藜。菜茹古城曲。蓼花被隄岸。陂水寒更涼。是時收穫竟。落日多樵牧。風高榆柳疏。霜重梨棗熟。行人迷去住。野鳥競棲宿。田翁笑相念。昏黑慎原陸。今年幸少豐。無厭饋與粥。

足弱不能步。自宜收朝蹟。足弱くして歩する能はず、自ら宜しく朝蹟を收むべし。  
羸形可輿致。佳觀安可擲。羸形、輿して致すべく、佳觀、安んぞ擲つべしや。  
卽此南阪下。久聞有水石。卽ちこの南阪の下、久しく水石あるを聞く。  
挖舟入其間。溪流正清激。舟を挖いて其間に入れば、溪流正に清激。

隨波吾未能。峻瀨乍可刺。波に隨ふこと、吾、未だ能はず、峻瀨、乍ち刺すべし。  
驚起若導吾。前飛數十尺。驚は起つて、吾を導くが若く、前に飛ぶこと數十尺。  
亭亭柳帶沙。團團松冠壁。亭亭として、柳沙を帶ひ、團團として、松、壁に冠す。  
歸時還盡夜。誰謂非事役。歸るとき、還た夜を盡す、誰か事役に非ずと謂はむ。

【字解】(一)足弱 左傳昭公七年に「孟賁の足不良弱行、史朝曰く、弱足の者は居れ」とある。(二)朝蹟 詩經に「念彼不服」とあつて、毛傳に「道に循はざるなり」とある。ここでは朝の足跡。(三)羸形 瘦せ衰へた姿。(四)輿致 晉書陶潛傳に「刺史王安、これを要して州に還る。その乗するところを問ふ。答へて云ふ、素より脚疾あり、因つて、籃輿に乗じ、亦た自ら反るに足るとある。(五)佳觀 よき眺め。(六)挖舟 漢書に「舟を挖いて水に入る」とあつて、顏師古の注に「挖は曳くなり」とある。(七)可刺 前に見ゆ、舟を刺す。(八)亭亭 柳帶沙 蔣注に「柳帶松冠、一に帶柳松冠に作り、又帶柳松冠に作る。云ふ、これ楚辭吉日辰良の體なり」と。又接するに、亭亭帶柳沙は、體なし。且つ此兩句、對偶を用ふ、亦た何の害あらむ。故に曲げて之が説を爲すこと、此の如し」とある。(九)事役 一かどの仕事。

【詩意】病後、まだ十分に快復せざるが故に、足が弱くて、歩むことも出來ず、朝の散歩などは、爲さぬ方が善い。瘦せた身體は、輿に乗つて、運んで貰ふ外仕方がない。まことに、人にも迷惑をかける次第であるが、よき眺めは、打ち棄てて置く譯にも行かない。この南阪の下に水石の勝ある由、久しく聞いて居たから、そこで此まで遣つて來た後、舟を曳かせて、その間に入つて見ると、溪流は、

まことに綺麗で、澄み切つて居る。波に随つて舟の之くところに任かすといふ様なのんきな事は、自分には出来ず。何でも、更に溯つて、川上に行かうといふので、早瀬に差しかかると、棹も一緒にさされた。すると、鷺が驚いて高く飛ぶこと數十尺、さながら吾を導くが如くである。岸邊には、柳が亭亭として高く、そして遠くから眺めると、岸の沙を帯びて居るやうに見え、松は團團と一かたまりに成つて、絶壁の上に冠して居る。留賞、すでに久しきに亘り、歸つて来た時、夜も大分更けたが、天晴、一かどの仕事を成し遂げた様な氣がした。

【餘論】 蔣之翘は「全詩玄澹、能く自家の本色を除く、特に帶沙冠壁の句、清麗なるのみならず」といひ、朱竹垞は「鍊り得て、已に痕なく、但だ微に力を著くる處あるを免れず、これ等、陶に在つて亦た之あり、これは則ち又陶を隔つる一間のみ」といつて居る。全篇中、精彩に富んだ處は、抱舟入其間以下の八句で、陶謝以外、その勝を擅にしたる好文字である。

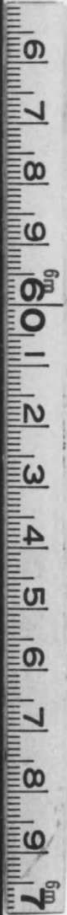
終

續國譯漢文大成

文學部 三十

309  
65

漢  
大



始



續國譯漢文大成

吉田待郎氏

本

文學部第三十册(第八帙の二)  
韓退之詩集 下の二



韓昌黎集卷八

聯句



蔣之翘は「聯句の詩、唐虞の庶歌より始まり、下にして漢武の柏梁、即ち顧愷之、桓玄、殷仲堪、陶淵明も亦た皆作あり。或は曰く、聯句は、古しへ、この法なく、退之より始まると、非なり」といつたが、徐師曾は、文體明辨に於て、更に詳説して「聯句の詩は、柏梁より起る。人ごとに各一句、集めて以て篇を成す。その後、宋の孝武の華林曲水、梁の武帝の消暑殿、唐の中宗の内殿諸詩、皆漢と同じ。唯だ魏の懸瓠方丈、竹堂讌響は、人各二句、稍や前體を變ず。これより以て、遂に「ならず、人各四句なるものあり。陶靖節集に載するところの如き、是れなり。人各一聯の者あり、杜市と李之芳及び其甥宇文或と作るところの如き、是れなり。先づ一句を出して、次なるもの、之に對し、就いて一句を出し、前人復た之に對するものあり、韓昌黎に載する城南の詩の如き、是れなり。然れども、必ず其人意氣相投じ、筆力相稱うて、然る後、能く之を爲す、しからざれば、狗尾續貂、後世の議を免れ難し」といつて居る。柏梁の聯句の如き、各人一句一意、必ず

聯句

しも、意義が連続して居らぬので、それを聊か連続する様にしたのは、後世の事である。しかし、唐代、殊に韓集に見えた聯句は、大抵、五排で、又五古にしても、多くの場合に於て、對偶を旨として居るので、それは才思を競ふ上に於て、最も面白いからである。それから、各人一聯宛のものもあるが、城南聯句の如く、初めに、誰か一句出し、それから、二句ずつ毎に人の出した出句（即ち無韻の句）を承けて、對偶の落句（即ち有韻の句）を作り、且つ自分が又新に出句を出すといふのが一番面白い。又たとひ、全篇自分一人で作った様には行かすとも、意義は略ぼまとまつて居るのを善しとして居る。後になると、七言もあり、又近體の聯句などもあるので、聯句は、何の體に限るといふ規定などは無いから、かまはない。しかし、究竟は、吟人の消閒の游戲に外ならぬものである。

城南聯句

城南聯句

竹影金瑣碎。郊泉音玉淙琤。  
 瑠璃翦木葉。愈翡翠開園英。  
 流滑隨仄步。郊搜尋得深行。  
 遙岑出寸碧。愈遠目增雙明。

竹影は金瑣碎、泉音は玉淙琤。  
 瑠璃は木葉を翦り、翡翠は園英を開く。  
 流滑、仄に隨つて歩し、搜尋、深きを得て行く。  
 遙岑は寸碧を出し、遠目は雙明を増す。

乾穉紛挂地。郊化蟲枯揭莖。  
 木腐或垂耳。愈草珠競駢睛。  
 浮虛有新斲。郊摧扞饒孤撐。  
 囚飛黏網動。愈盜倬接彈驚。  
 脫實自開坼。郊牽柔誰繞榮。  
 禮鼠拱而立。愈駭牛躅且鳴。  
 蔬甲喜臨社。郊田毛樂寬征。  
 露螢不自暖。愈凍蝶尙思輕。  
 宿羽有先曉。郊食鱗時半橫。  
 菱翻紫角利。愈荷折碧圓傾。  
 楚膩鱣鮪亂。郊獠羞螺蟹并。  
 桑螵見虛指。愈穴狸聞鬪獍。  
 逗翳翅相築。郊擺幽尾交撈。

乾穉、紛として地を挂へ、化蟲、枯れて莖を掲る。  
 木腐、或は耳を垂れ、草珠競うて睛を駢ぶ。  
 浮虛、新斲あり、摧扞、孤撐。  
 囚飛、網に黏して動き、盜倬、彈に接して驚く。  
 脫實、自ら開坼し、牽柔、誰か繞榮する。  
 禮鼠、拱して立ち、駭牛、躅つて且つ鳴く。  
 蔬甲、社に臨むを喜び、田毛、征を寬うするを樂む。  
 露螢、自ら暖かならず、凍蝶、尙ほ輕きを思ふ。  
 宿羽、曉に先つあり、食鱗、時に半ば横ふ。  
 菱は翻つて紫角利く、荷は折れて碧圓傾く。  
 楚膩、鱣鮪亂れ、獠羞、螺蟹并す。  
 桑螵、虚しく指すを見、穴狸、鬪つて撈きを聞く。  
 翳に逗まりて、翅、相築き、幽を擺うて、尾、交も撈つ。

蔓涎角出縮愈樹啄頭敲鏗  
 修箭裏金餌郊翠鮮沸池羹  
 岸殼坼玄兆愈野蛙漸豐萌  
 窰煙罨疏島郊沙篆印廻平  
 痒肌遭蚝刺愈啾耳聞雞生  
 奇慮恣廻轉郊遐睚縱逢迎  
 巖林跋遠睫愈縹氣夷空情  
 歸跡歸不得郊捨心捨還爭  
 靈麻撮狗蝨愈村稚啼禽猩  
 紅麩曬檐瓦郊黃團繫門衡  
 得雋蠅虎健愈相殘雀豹趨  
 東枯樵指秃郊刈熟擔肩積  
 遊旋皮卷鬣愈苦開腹彭亨

蔓涎、角出縮し、樹啄頭敲鏗す。  
 修箭、金餌を夏み、翠鮮、池羹を沸かす。  
 岸殼、玄兆を坼き、野蛙、豐萌を漸にす。  
 窰煙、疏島を罨ひ、沙篆、廻平に印す。  
 痒肌、蚝刺に遭ひ、啾耳、雞生を聞く。  
 奇慮、廻轉を恣にし、遐睚、逢迎を縱にす。  
 巖林、遠睫を取め、縹氣、空情を夷む。  
 歸跡、歸ることを得ず、捨心、捨つれば還た争ふ。  
 靈麻、狗蝨を撮り、村稚、禽猩を啼かす。  
 紅麩、檐瓦に曬らし、黃團、門衡に繫く。  
 得雋、蠅虎に健なり、相殘うて雀豹趨る。  
 東枯、樵を東ねて樵指秃し、熟を刈りて擔肩積し。  
 遊旋つて皮卷鬣、苦開いて腹彭亨。

機春潺浚力郊吹簸飄飄精  
 賽饌木盤簇愈靛妖藤索緝  
 荒學五六卷郊古藏四三塾  
 里儒拳足拜愈土怪閃眸偵  
 跡道補復破郊絲窠掃還成  
 暮堂蝠蝠沸愈破窳伊威盈  
 追此訊前主郊答云皆冢卿  
 敗壁剝寒月愈折簞嘯遺笙  
 桂熏霏霏在郊葦跡微微呈  
 劔石猶竦檻愈獸材尙挈楹  
 寶唾拾未盡郊玉啼墮猶鎗  
 臆綃疑闕豔愈妝燭已銷檠  
 綠髮抽珉甃青膚聳瑤楨

機は春く潺浚の力、吹は簸の飄飄の精。  
 賽饌、木盤簇がり、靛妖、藤索緝ふ。  
 荒學五六卷、古藏四三塾。  
 里儒、足を拳めて拜し、土怪、眸を閃かして偵ふ。  
 跡道、補うて復た破れ、絲窠、掃うて還た成る。  
 暮堂、蝠蝠沸き、破窳、伊威盈つ。  
 追うて此に前主を訊へば、答へて云ふ皆冢卿と。  
 敗壁、寒月を剝り、折簞、遺笙を嘯く。  
 桂熏、霏霏として在り、葦跡、微微として呈はる。  
 劔石、猶ほ檻に竦え、獸材、尙ほ楹を挈ふ。  
 寶唾、拾うて未だ盡きず、玉蹄、墮ちて猶ほ鎗たり。  
 臆綃、疑を闕づるかと思ひ、妝燭、すでに檠に銷ゆ。  
 綠髮、珉甃に抽んで、青膚、瑤楹を聳かす。



白蛾飛舞地。愈幽靈落書棚。  
 惟惜集嘉詠。郊吐芳類鳴嚶。  
 窺奇摘海異。愈恣韻激天鯨。  
 腸胃繞萬象。郊精神驅五兵。  
 蜀雄李杜拔。愈嶽力雷車轟。  
 大句幹玄造。郊高言軋霄崢。  
 芒端轉寒煖。愈神助溢杯觥。  
 巨細各乘運。愈湍瀾亦騰聲。  
 凌花咀粉葉。郊削縷穿珠櫻。  
 綺語洗晴雪。愈嬌辭睍雜鴛。  
 酣歡雜弁珥。郊繁價流金瓊。  
 茵茗寫江調。郊萎蕤綴藍瑛。  
 庖霜餽玄鮓。愈浙玉炊香梗。

白蛾、舞地に飛び、幽靈、書棚に落つ。  
 惟だ惜むらくは嘉詠を集む、芳を吐いて鳴嚶に類せり。  
 奇を窺うて海異を摘み、韻を恣にして天鯨を激す。  
 腸胃、萬象を繞らし、精神、五兵を驅る。  
 蜀雄、李杜抜き、嶽力、雷車轟く。  
 大句、玄造を幹し、高言、霄崢を軋る。  
 芒端、寒煖を轉じ、神助、杯觥に溢る。  
 巨細、各、運に乗じ、湍瀾、亦た聲を騰ぐ。  
 花を凌いで、粉葉を咀ひ、縷を削つて、珠櫻を穿つ。  
 綺語、晴雪を洗ひ、嬌辭、雜鴛を睍す。  
 酣歡、弁珥を雜へ、繁價、金瓊を流す。  
 茵茗、江調を寫し、萎蕤、藍瑛を綴る。  
 霜を庖して玄鮓を餽にし、玉を浙うて香梗を炊ぐ。

朝饌已百態。郊春醪又千名。  
 哀匏盛駛景。愈冽唱凝餘晶。  
 解魄不自主。郊痺肌坐空墜。  
 扳援踐蹊絕。愈炫曜僊選更。  
 藥巧競採笑。郊駢鮮互探嬰。  
 桑變忽蕪蔓。愈棹裁浪登丁。  
 霞鬪詎能極。郊風期誰復賡。  
 臯區扶帝壤。愈瓊蘊郁天京。  
 祥色被文彥。郊良才挿杉櫂。  
 隱伏饒氣象。愈興潛示堆坑。  
 擘華露神物。郊擁終儲地禎。  
 訐謔壯締始。愈輔弼登階清。  
 空秀恣填塞。郊呀靈滄渟澄。

朝饌、すでに百態、春醪、又千名。  
 哀匏、駛景を盛め、冽唱、餘晶を凝らす。  
 解魄、自ら主ならず、痺肌、坐ながら空しく墜る。  
 扳援、蹊蹊絶え、炫曜、僊選更る。  
 藥を愛めて、競うて笑を採り、鮮を駢べて、互に嬰を探る。  
 桑變じて忽ち蕪蔓、棹裁して浪りに登丁。  
 霞鬪、詎ぞ能く極めむ、風期、誰か復た賡せむ。  
 臯區、帝壤を扶け、瓊蘊、天京を郁にす。  
 祥色、文彦を被らしめ、良才、杉櫂を挿む。  
 隱伏、氣象饒なり、興潛、堆坑を示す。  
 華を擘いて神物を露はし、終を擁して地禎を儲ふ。  
 訐謔、締始を壯にし、輔弼、階清に登る。  
 空秀、恣に填塞、呀靈、滄渟澄。

益大聯漢魏。愈肇初邁周贏。  
 積照涵德鏡。郊傳經僊金籙。  
 食家行鼎鼐。愈寵族低弓旌。  
 奕制盡從賜。郊殊私得逾程。  
 飛橋上架漢。愈線岸俯規瀾。  
 瀟碧遠輪委。郊湖嵌費播擎。  
 荷首從大漠。愈楓櫺至南荆。  
 嘉植鮮危朽。郊膏理易滋榮。  
 懸長巧紐翠。愈象曲善攢珩。  
 魚口星浮沒。郊馬毛錦斑駘。  
 五方亂風土。愈百種分鉏耕。  
 葩蘂相妬出。郊菲茸共抒情。  
 類招臻側詭。愈翼萃伏衿纓。

益大、漢魏を聯ね、肇初、周贏に邁えたり。  
 照を積んで德鏡を涵し、經を傳へて金籙を僊ぶ。  
 家に食して鼎鼐を行ね、族を寵して弓旌に低かしむ。  
 奕制盡く賜に從ひ、殊私、程を逾ゆるを得たり。  
 飛橋、上つて漢に架し、線岸、俯して瀾を規る。  
 瀟碧、遠く輪委し、湖嵌、擲撃を費す。  
 荷首は大漠よりし、楓櫺は南荆より至る。  
 嘉植、危朽鮮く、膏理、滋榮し易し。  
 長を懸けて巧に翠を紐し、曲を象つて善く珩を攢む。  
 魚口、星浮沒し、馬毛、錦斑駘たり。  
 五方、風土を亂し、百種、鉏耕を分つ。  
 葩蘂相妬んで出で、菲茸共に情を抒情。  
 類招いて側詭に臻り、翼萃まりて衿纓を伏す。

危望跨飛動。郊冥升躡登閔。  
 春游櫟羅靡。愈彩伴廳婪娛。  
 遺燦飄的曠。郊淑顏洞精誠。  
 嬌應如在寤。愈頽意若含醒。  
 袖毳翔衣帶。郊鵝肪截佩瑣。  
 文昇相照灼。愈武勝屠挽搶。  
 割錦不酬價。郊構雲有高營。  
 通波切鱗介。愈疏晚富蕭蘅。  
 買養馴孔翠。郊遠苞樹蕉楸。  
 鴻頭排刺茨。愈鶴徽攢瓊橙。  
 鴛廣雜良牧。郊蒙休賴先盟。  
 罷施奉環衛。愈守封踐忠貞。  
 戰服脫明介。郊朝冠飄彩絃。

危望、飛動に跨り、冥升、登閔を躡む。  
 春游、羅靡を櫟み、彩伴、婪娛を廳かす。  
 遺燦、的曠を飄し、淑顏、洞精誠を洞す。  
 嬌應、寤に在るが如く、頽意、醒を合むが若し。  
 袖毳、衣帯に翔り、鵝肪、佩瑣を截る。  
 文昇、相照灼し、武勝、挽搶を屠る。  
 錦を割いて價を酬かず、雲を構へて高營あり。  
 通波、鱗介に切ち、疏晚、蕭蘅に富む。  
 買養、孔翠を馴れしめ、遠苞、蕉楸を樹う。  
 鴻頭、刺茨を排し、鶴徽、瓊橙を攢む。  
 廣きに驚せて良牧を雜へ、休を蒙つて先盟に賴る。  
 施を罷めて環衛を奉じ、封を守つて忠貞を踐む。  
 戰服、明介を脱し、朝冠、彩絃を飄へす。

爵勳逮值隸(シロ)愈簪笏自懷繡(シロ)  
 乳下秀嶷嶷(シロ)郊椒蕃泣惶惶(シロ)  
 貌鑑清溢匣(シロ)愈眸光寒發硯(シロ)  
 館儒養經史(シロ)郊綴威觴孫甥(シロ)  
 考鐘饋肴核(シロ)愈憂鼓侑牢牲(シロ)  
 飛騰自北下(シロ)郊函珍極東京(シロ)  
 如瓜煮大卵(シロ)愈比線茹芳菁(シロ)  
 海嶽錯口腹(シロ)郊趙燕錫媼媪(シロ)  
 一笑釋仇恨(シロ)愈百金交弟兄(シロ)  
 貨至貂戎市(シロ)郊呼傳鸚鵡令(シロ)  
 順居無鬼瞰(シロ)愈抑橫免官評(シロ)  
 殺候肆凌翦(シロ)郊籠原匣置緇(シロ)  
 羽空顛雉鷓(シロ)愈血路進孤鸞(シロ)

爵勳、值隸に速び、簪笏、懷繡よりす。  
乳下秀でて巖巖たり、椒蕃泣いて惶惶たり。  
貌鑑清くして匣に溢れ、眸光寒くして硯を發す。  
儒を館して經史を養ひ、威を綴つて孫甥に觴す。  
鐘を考いて肴核を饋り、鼓を憂つて牢牲を侑む。  
飛騰、北下よりし、函珍、東京を極む。  
瓜の如くして大卵を煮、線に比して芳菁を茹ふ。  
海嶽、口腹に錯はり、趙燕、媼媪を錫ふ。  
一笑、仇恨を釋き、百金、弟兄に交る。  
貨は貂戎の市より至り、呼は鸚鵡の令を傳ふ。  
順居、鬼の瞰むなく、抑横、官評を免る。  
殺候、凌翦を肆にし、籠原、置緇を匣らす。  
空に羽して雉鷓を顛し、路に血して孤鸞を進らしむ。

折足去蹠躄(シロ)郊蹙鬢怒髮鬢(シロ)  
 躍犬疾翥鳥(シロ)愈呀鷹甚饑魚(シロ)  
 算蹄記功賞(シロ)郊裂腦擒控振(シロ)  
 猛斃牛馬樂(シロ)愈妖殘臬鶴悻(シロ)  
 窟窮尙嗔視(シロ)郊箭出方驚抨(シロ)  
 連箱載已實(シロ)愈礙輟棄仍贏(シロ)  
 喘觀鋒刃點(シロ)郊困衝株楨盲(シロ)  
 掃淨豁曠曠(シロ)愈聘遙略萃萃(シロ)  
 饒叔飽活鱗(シロ)郊惡嚼嚙腥鱗(シロ)  
 歲律及郊至(シロ)愈古晉命韶諷(シロ)  
 旗旆流日月(シロ)郊帳廬扶棟蕘(シロ)  
 磊落奠鴻璧(シロ)愈參差席香蕘(シロ)  
 玄祇社兆姓(シロ)郊黑租饒豐盛(シロ)

折足去つて蹠躄し、蹙鬢怒つて髮鬢たり。  
躍犬、翥鳥よりも疾く、呀鷹、饑魚よりも甚し。  
蹄を算へて功賞を記し、腦を裂いて控振を擒ふ。  
猛斃れて牛馬樂み、妖殘はれて臬鶴悻なり。  
窟窮つて尙ほ視るに嗔り、箭出でて方に抨くに驚く。  
箱を連ねて、載せて已に實てり、輟を礙へて、棄てて仍  
喘いで鋒刃の點するを觀、困んで柱楨を衝いて盲す。  
掃ひ淨めて、豁として曠曠、聘すること遙にして萃萃  
饒叔、活鱗に飽き、惡嚼、腥鱗を嚼ふ。  
歲律、郊至に及び、古晉、韶諷を命す。  
旗旆、日月を流ね、帳廬、棟蕘を扶く。  
磊落として鴻璧を奠き、參差として香蕘を席く。  
玄祇、兆姓に社し、黑租、饒豐盛を饒つ。

慶流<sup>三三〇</sup> 瘡痍<sup>三三〇</sup> 愈威暢<sup>三三〇</sup> 捐<sup>三三〇</sup> 輻<sup>三三〇</sup> 輞<sup>三三〇</sup>  
 靈燔<sup>三三〇</sup> 望<sup>三三〇</sup> 高<sup>三三〇</sup> 同<sup>三三〇</sup> 郊<sup>三三〇</sup> 龍<sup>三三〇</sup> 駕<sup>三三〇</sup> 聞<sup>三三〇</sup> 敲<sup>三三〇</sup> 廳<sup>三三〇</sup>  
 是<sup>三三〇</sup> 惟<sup>三三〇</sup> 禮<sup>三三〇</sup> 之<sup>三三〇</sup> 盛<sup>三三〇</sup> 愈<sup>三三〇</sup> 永<sup>三三〇</sup> 用<sup>三三〇</sup> 表<sup>三三〇</sup> 其<sup>三三〇</sup> 宏<sup>三三〇</sup>  
 德<sup>三三〇</sup> 孕<sup>三三〇</sup> 厚<sup>三三〇</sup> 生<sup>三三〇</sup> 植<sup>三三〇</sup> 郊<sup>三三〇</sup> 恩<sup>三三〇</sup> 熙<sup>三三〇</sup> 完<sup>三三〇</sup> 別<sup>三三〇</sup> 剝<sup>三三〇</sup>  
 宅<sup>三三〇</sup> 土<sup>三三〇</sup> 盡<sup>三三〇</sup> 華<sup>三三〇</sup> 族<sup>三三〇</sup> 愈<sup>三三〇</sup> 運<sup>三三〇</sup> 田<sup>三三〇</sup> 間<sup>三三〇</sup> 強<sup>三三〇</sup> 毗<sup>三三〇</sup>  
 蔭<sup>三三〇</sup> 庚<sup>三三〇</sup> 森<sup>三三〇</sup> 嶺<sup>三三〇</sup> 槍<sup>三三〇</sup> 郊<sup>三三〇</sup> 啄<sup>三三〇</sup> 場<sup>三三〇</sup> 翻<sup>三三〇</sup> 祥<sup>三三〇</sup> 鴨<sup>三三〇</sup>  
 哇<sup>三三〇</sup> 肥<sup>三三〇</sup> 翦<sup>三三〇</sup> 韭<sup>三三〇</sup> 薤<sup>三三〇</sup> 愈<sup>三三〇</sup> 陶<sup>三三〇</sup> 固<sup>三三〇</sup> 收<sup>三三〇</sup> 益<sup>三三〇</sup> 覺<sup>三三〇</sup>  
 利<sup>三三〇</sup> 養<sup>三三〇</sup> 積<sup>三三〇</sup> 餘<sup>三三〇</sup> 健<sup>三三〇</sup> 郊<sup>三三〇</sup> 孝<sup>三三〇</sup> 思<sup>三三〇</sup> 事<sup>三三〇</sup> 嚴<sup>三三〇</sup> 訪<sup>三三〇</sup>  
 掘<sup>三三〇</sup> 雲<sup>三三〇</sup> 破<sup>三三〇</sup> 罽<sup>三三〇</sup> 帟<sup>三三〇</sup> 愈<sup>三三〇</sup> 採<sup>三三〇</sup> 月<sup>三三〇</sup> 泚<sup>三三〇</sup> 劫<sup>三三〇</sup> 泓<sup>三三〇</sup>  
 寺<sup>三三〇</sup> 砌<sup>三三〇</sup> 上<sup>三三〇</sup> 明<sup>三三〇</sup> 鏡<sup>三三〇</sup> 郊<sup>三三〇</sup> 僧<sup>三三〇</sup> 孟<sup>三三〇</sup> 敲<sup>三三〇</sup> 曉<sup>三三〇</sup> 鉦<sup>三三〇</sup>  
 泥<sup>三三〇</sup> 像<sup>三三〇</sup> 對<sup>三三〇</sup> 聘<sup>三三〇</sup> 怪<sup>三三〇</sup> 愈<sup>三三〇</sup> 鐵<sup>三三〇</sup> 鍾<sup>三三〇</sup> 孤<sup>三三〇</sup> 春<sup>三三〇</sup> 鐘<sup>三三〇</sup>  
 瘞<sup>三三〇</sup> 頸<sup>三三〇</sup> 開<sup>三三〇</sup> 鳩<sup>三三〇</sup> 鴿<sup>三三〇</sup> 郊<sup>三三〇</sup> 蜿<sup>三三〇</sup> 垣<sup>三三〇</sup> 亂<sup>三三〇</sup> 蚪<sup>三三〇</sup> 蝶<sup>三三〇</sup>  
 甚<sup>三三〇</sup> 黑<sup>三三〇</sup> 老<sup>三三〇</sup> 蠶<sup>三三〇</sup> 蠋<sup>三三〇</sup> 愈<sup>三三〇</sup> 麥<sup>三三〇</sup> 黃<sup>三三〇</sup> 韻<sup>三三〇</sup> 鷓<sup>三三〇</sup> 鴒<sup>三三〇</sup>

慶流ひて瘡痍を蠲き、威暢びて輻輞を捐つ。  
 靈燔高同を望み、龍駕敲廳を聞く。  
 是れ惟れ禮の盛なる、永く用ひて其宏を表はす。  
 徳孕んで生植を厚うし、恩熙まりて別剝を完うす。  
 宅土、盡く華族、運田、強毗を間ふ。  
 蔭に蔭して嶺槍森たり、場に啄んで祥鴨翻る。  
 哇肥えて韭薤を翦り、陶固うして益覺を收む。  
 利養、餘健を積み、孝思、嚴訪を事とす。  
 雲を掘つて罽帟を破り、月を採つて泚劫を漉す。  
 寺砌、明鏡に上り、僧孟、曉鉦を敲く。  
 泥像、對して怪を聘せ、鐵鐘、孤春鐘を春く。  
 瘞頸、鳩鴿開がしく、蜿垣、蚪蝶を亂る。  
 甚黒くして蠶蠋老い、麥黃にして鷓鴒韻く。

詔<sup>三三〇</sup> 曙<sup>三三〇</sup> 遲<sup>三三〇</sup> 勝<sup>三三〇</sup> 賞<sup>三三〇</sup> 郊<sup>三三〇</sup> 賢<sup>三三〇</sup> 朋<sup>三三〇</sup> 戒<sup>三三〇</sup> 先<sup>三三〇</sup> 庚<sup>三三〇</sup>  
 馳<sup>三三〇</sup> 門<sup>三三〇</sup> 填<sup>三三〇</sup> 偈<sup>三三〇</sup> 仄<sup>三三〇</sup> 愈<sup>三三〇</sup> 競<sup>三三〇</sup> 豎<sup>三三〇</sup> 轆<sup>三三〇</sup> 碌<sup>三三〇</sup> 砵<sup>三三〇</sup> 砵<sup>三三〇</sup>  
 碎<sup>三三〇</sup> 纈<sup>三三〇</sup> 紅<sup>三三〇</sup> 滿<sup>三三〇</sup> 杏<sup>三三〇</sup> 郊<sup>三三〇</sup> 稠<sup>三三〇</sup> 凝<sup>三三〇</sup> 碧<sup>三三〇</sup> 浮<sup>三三〇</sup> 錫<sup>三三〇</sup>  
 賊<sup>三三〇</sup> 繩<sup>三三〇</sup> 覲<sup>三三〇</sup> 娥<sup>三三〇</sup> 婺<sup>三三〇</sup> 愈<sup>三三〇</sup> 鬪<sup>三三〇</sup> 草<sup>三三〇</sup> 擷<sup>三三〇</sup> 璣<sup>三三〇</sup> 璣<sup>三三〇</sup> 璣<sup>三三〇</sup>  
 粉<sup>三三〇</sup> 汗<sup>三三〇</sup> 澤<sup>三三〇</sup> 廣<sup>三三〇</sup> 額<sup>三三〇</sup> 郊<sup>三三〇</sup> 金<sup>三三〇</sup> 星<sup>三三〇</sup> 墮<sup>三三〇</sup> 連<sup>三三〇</sup> 環<sup>三三〇</sup>  
 鼻<sup>三三〇</sup> 偷<sup>三三〇</sup> 困<sup>三三〇</sup> 淑<sup>三三〇</sup> 郁<sup>三三〇</sup> 愈<sup>三三〇</sup> 眼<sup>三三〇</sup> 剽<sup>三三〇</sup> 強<sup>三三〇</sup> 叮<sup>三三〇</sup> 睨<sup>三三〇</sup>  
 是<sup>三三〇</sup> 節<sup>三三〇</sup> 飽<sup>三三〇</sup> 顔<sup>三三〇</sup> 色<sup>三三〇</sup> 郊<sup>三三〇</sup> 茲<sup>三三〇</sup> 疆<sup>三三〇</sup> 稱<sup>三三〇</sup> 都<sup>三三〇</sup> 城<sup>三三〇</sup>  
 書<sup>三三〇</sup> 饒<sup>三三〇</sup> 罄<sup>三三〇</sup> 魚<sup>三三〇</sup> 齒<sup>三三〇</sup> 愈<sup>三三〇</sup> 紀<sup>三三〇</sup> 盛<sup>三三〇</sup> 播<sup>三三〇</sup> 琴<sup>三三〇</sup> 箏<sup>三三〇</sup>  
 奚<sup>三三〇</sup> 必<sup>三三〇</sup> 事<sup>三三〇</sup> 遠<sup>三三〇</sup> 覲<sup>三三〇</sup> 郊<sup>三三〇</sup> 無<sup>三三〇</sup> 端<sup>三三〇</sup> 逐<sup>三三〇</sup> 羈<sup>三三〇</sup> 僮<sup>三三〇</sup>  
 將<sup>三三〇</sup> 身<sup>三三〇</sup> 親<sup>三三〇</sup> 烟<sup>三三〇</sup> 魅<sup>三三〇</sup> 愈<sup>三三〇</sup> 浮<sup>三三〇</sup> 跡<sup>三三〇</sup> 侶<sup>三三〇</sup> 鷓<sup>三三〇</sup> 鴒<sup>三三〇</sup>  
 腥<sup>三三〇</sup> 味<sup>三三〇</sup> 空<sup>三三〇</sup> 奠<sup>三三〇</sup> 屈<sup>三三〇</sup> 郊<sup>三三〇</sup> 天<sup>三三〇</sup> 年<sup>三三〇</sup> 徒<sup>三三〇</sup> 羨<sup>三三〇</sup> 彭<sup>三三〇</sup>  
 驚<sup>三三〇</sup> 魂<sup>三三〇</sup> 見<sup>三三〇</sup> 蛇<sup>三三〇</sup> 蚓<sup>三三〇</sup> 愈<sup>三三〇</sup> 觸<sup>三三〇</sup> 嗅<sup>三三〇</sup> 值<sup>三三〇</sup> 蝦<sup>三三〇</sup> 蟛<sup>三三〇</sup>  
 幸<sup>三三〇</sup> 得<sup>三三〇</sup> 履<sup>三三〇</sup> 中<sup>三三〇</sup> 氣<sup>三三〇</sup> 郊<sup>三三〇</sup> 忝<sup>三三〇</sup> 從<sup>三三〇</sup> 拂<sup>三三〇</sup> 天<sup>三三〇</sup> 根<sup>三三〇</sup>

詔曙、勝賞を遲ち、賢朋、先庚を戒む。  
 門を馳せて填つて偈仄、駘を競うて轆つて碌砵砵。  
 碎纈、紅杏に滿ち、稠凝、碧錫に浮ぶ。  
 賊繩、紅娥婺を覲し、草を擷はしめて璣璣を擷ぶ。  
 粉汗、廣額を澤し、金星、連環を墮す。  
 鼻は偷に淑郁に困み、眼は剽めて叮睨を強にす。  
 この節、顔色に飽き、この疆、都城と稱す。  
 書饒くして魚齒を罄し、紀盛にして琴箏に播す。  
 奚ぞ必ずしも、遠覲を事とせむ。無端、羈僮を逐ふ。  
 身を將て烟魅に親み、跡を浮べて鷓鴒に偈ふ。  
 腥味空しく屈を奠り、天年、徒に彭を羨む。  
 魂を驚かして蛇蚓を見、嗅に觸れて蝦蟛に値ふ。  
 幸に中氣を履むを得たり、忝くも天根を拂ふに從ふ。

歸私暫<sup>(三)</sup>休<sup>(三)</sup>暇<sup>(三)</sup>。愈<sup>(三)</sup>驅<sup>(三)</sup>明<sup>(三)</sup>出<sup>(三)</sup>庠<sup>(三)</sup>。私に歸つて休暇を暫くし、明を驅つて庠費に出づ。

鮮<sup>(三)</sup>意<sup>(三)</sup>竦<sup>(三)</sup>輕<sup>(三)</sup>暢<sup>(三)</sup>。郊<sup>(三)</sup>連<sup>(三)</sup>輝<sup>(三)</sup>照<sup>(三)</sup>瓊<sup>(三)</sup>瑩<sup>(三)</sup>。鮮意竦として輕暢、連輝照らして瓊瑩。

陶<sup>(三)</sup>喧<sup>(三)</sup>逐<sup>(三)</sup>風<sup>(三)</sup>乙<sup>(三)</sup>。愈<sup>(三)</sup>躍<sup>(三)</sup>視<sup>(三)</sup>舞<sup>(三)</sup>晴<sup>(三)</sup>晴<sup>(三)</sup>。陶喧、風乙を逐ひ、躍視、晴晴を舞はしむ。

足<sup>(三)</sup>勝<sup>(三)</sup>自<sup>(三)</sup>多<sup>(三)</sup>詣<sup>(三)</sup>。郊<sup>(三)</sup>心<sup>(三)</sup>貪<sup>(三)</sup>敵<sup>(三)</sup>無<sup>(三)</sup>勅<sup>(三)</sup>。足勝、自ら詣ること多く、心貪、敵勅きことなし。

始<sup>(三)</sup>知<sup>(三)</sup>樂<sup>(三)</sup>名<sup>(三)</sup>教<sup>(三)</sup>。愈<sup>(三)</sup>何<sup>(三)</sup>用<sup>(三)</sup>苦<sup>(三)</sup>拘<sup>(三)</sup>傳<sup>(三)</sup>。はじめて知る名教を樂むを、何ぞ用ひむ拘傳に苦むを。

畢<sup>(三)</sup>景<sup>(三)</sup>任<sup>(三)</sup>詩<sup>(三)</sup>趣<sup>(三)</sup>。郊<sup>(三)</sup>焉<sup>(三)</sup>能<sup>(三)</sup>守<sup>(三)</sup>確<sup>(三)</sup>確<sup>(三)</sup>。愈<sup>(三)</sup>景<sup>(三)</sup>を畢<sup>(三)</sup>へて詩趣に任かす、焉ぞ能く確確を守らむ。

【字解】(一)竹影金瑣時 沈括は「竹影金瑣時、乃ち日光、竹影に奔ざるなり」といひ、洪慶善は之を説して「謂ふ、日光、その中に在りと、必ずしも直破せず。もし日影金瑣時といへば不可なり」といつた。つまり、竹の色は日光を受けて輝き、それが揺れると、金が細かに散る様に見えるといふ義であらう。(二)玉涼瑤 文選陸機の詩に山帶河清瑤、飛泉激鳴玉とある。なほ樊汝霖は「荆公の詩に云ふ、風泉隔屋撞三真玉、竹月輝階貼碎金、語、これに本づく」といつて居る。(三)琉璃樹木葉 廣雅に「琉璃は珠なり」といひ、漢書西域傳には流離に作り、顏師古の注に「大秦國より出づ、采澤光潤、飛玉に類たり」とある。木葉の色、碧にして、琉璃で作つたやうだといふ意。(四)翡翠同開英 異物志に「翠鳥は、形、燕の如し。赤くして雄なるを翡といひ、青にして雌なるを翠といふ」とある。開英は、開中の花。すると花が翠鳥、翡翠の體だといふ意。(五)流滑履仄步 傾斜ある處は、まことに滑り易いが、其處を歩くといふこと。(六)遶翠 遶に見えぬ山。(七)遠目增雙明 遠方を眺めて、雙眼が明かに明かるといふ意。庾澄詩話に「韓退之の嘲句云云、もとより佳句なり、後、謝無逸の仙遊圖、水一山碧、不覺舉頭雙眼明に至り、退之の語を敷衍するが若し。然れども、句意痛快、亦た自ら喜ぶべきなり」とある。(八)乾糶 糶は稻の糶。(九)注地 注はささへる、ここでは

地に垂れて居るをいふ。(一〇)化鳥枯樹意 蔣注に「化鳥は鳥の變化するもの、蟬蟻の類の如し。枯樹意と言ふは、化鳥すでに枯れて、なほ草木の意を保持するなり」とある。樹はかかへもつ。(一一)木腐或垂耳 木の腐敗したところから葉が生える。(一二)草珠競眩暈 珠なす草の實は眩暈を列べたやうである。(一三)浮虛有斯斯 木の虚になつて居る處を斧で打ち揺いたといふ意。(一四)摧折樹孤撐 摧は砕く、扱は動かす。木を伐つて断となし、それが山と積み上げてある。古樂府に不見山巔樹、摧折下爲斷とある。(一五)因飛點細動 小さな飛鳥が細絲の累にかかつて因へられ、そして、まだ動いて居る。(一六)雙暎棲理窟 暎は鳥が物を食ふこと。鳥が物を食み食ふとき、暎を飛ばすものがあつて、大に驚いて居る。杜市は麻麻黃鳥啼といひ、唯雀野枝壁といひ、李白は寄曹蕘雀莫三相尊といつて居る。(一七)脫實自同拆 實が自然と殼から抜け出した。栗の實のいがより脱し、糠の實が其殻より抜け出せし類。(一八)幸柔惟綬綯 しなやかな柔は、誰が引いて繞らしたのか、矢張り、自然にさうなつて居るといふ意。(一九)讀風拱而立 圓尹子に「拱風を師として禮を制す」とあり、爾雅翼に「今河東に大風あり、能く人立し、兩脚を頭上に変ふ、或は之を雀風といふ。韓退之の謂はゆる讀風拱而立なり」とあり、埤雅にも「河東に大風あり、能く人立し、前二足を頭上に交へ、跳舞して善く鳴く」とある。(二〇)駭牛聞且鳴 蔣注に「駭、或は駭に作る、音、快と云ふ。駭文に、馬行いて化危するなり。時に僮僕快快、韓詩に既駭駭駭に作る。故に西京賦に云ふ、駭獸駭駭、これ當に快に从ふべし」と。今按するに、駭聞の二字、牛に於て鳴取るなし、疑ふらくは、當に駭に作るべし。而して、聞の字、當に觸に作るべし、乃ち牛に於て意あり。又上字と相偶す。然れども、据るところなし、姑く此に附すとある。この儘で解すると、駭いた牛が跳り上つて鳴く。(二一)蕝甲喜喧社 社日に近くなつて、蕝に時いた蕝菜が芽を出した。(二二)田毛 毛は田の生するところ、周禮に「宅、毛せざるものは禮布あり」といひ、その鄭玄注に「桑麻を樹えざるなり」とある。つまり、征は租稅。田畑の課稅の寛大なるを樂む。(二三)宿羽 この二句は、蔣注に「宿鳥、未だ曉ならずして先づ飛ぶあるなり。鳥の食を求むるもの、半ば水中に横ふなり」とある。(二四)菱翻紫角刺 庚信の詩に紫菱生三紫角とあつて、菱の實が紫に熟し、その角が尖つて居る。(二五)荷折碧圓傾 杜市の詩に回荷浮三小葉とある。蓮の葉が折れて、碧色の圓い葉が傾いた。(二六)池風體鮪風 鮪風は南方の香味といふ意。鮪鮪は、詩經に有鮪有鮪とあり、爾雅翼に「鮪は、口、頰下に

在り、長鼻軟骨、潜水にも亦た之あり。鯢、蓋し鮪の類。鯢は肉黄に、鮪は肉白し。今、江東、鯢を呼んで黄魚となす」とあり、詩經の注には「鯢魚は鮪に似て、黄色鋭頭、口、頰上に在り、背上面下、皆甲あり、大なるものは千餘斤、鮪は鯢に似て小、色青黒」とある。兩者、ともに鯢の類。【一七】 滄海鱗蟹并 滄は西南夷の別名。鱗や蟹の如き、蠻人の食ふやうなものまで有るといふ。【一八】 桑維見處指 桑維は桑上の蝶、維は尺蠖とあり、又「屈伸の蟲なり、人の指を以て物を度り、後指を移して前指に就くの狀の如し。古しへ謂はゆる布指尺を知るもの、故に之を尺蠖といふ」とある。處指は、蔣注に「空しく跡あるをいふ」とある。すると、桑の葉の上には尺取蠶の歩いた跡があるといふ意。【一九】 穴窟聞圓聲 穴に棲む蛙が、なかなか強くて善く跳ふといふ義であらう。【二〇】 返駟却相驚 蔣注に「還は止なり、駟は陰なり。言ふは、鳥、林陰に止まつて、その翅、相觸るるなり」とある。【二一】 掃馬尾交掃 蔣注に「掃は擊なり、蛇尾の如き圓蹄に擲うて、その尾、相擊つなり」とある。【二二】 羶角出縮 羶の上に凝する蟲は、頭の角を出したり、縮めたりするといふので、これは蝸牛を指す。留雅異に「蝸牛は、羶に似て、頭に兩角あり、行けば出で、擲けば縮まる。首尾、數中に縮す。盛夏日中は、樹葉の上に懸り、溼津、すてに盡くれば、墮つて即ち腐死す」とある。【二三】 樹啄蝮蝮 木の表皮を啄む鳥は、ことごとく音をして、頭で敲くやうだといふので、これは啄木鳥を指す。留雅異に「啄木は、口、雞の如く、長さ數寸、常に枯木を啄み、その蠶を取る。頭上に紅毛あつて、鵝頂の如し、土人、呼んで山啄木となす」とあり、真淑の俳諧集に、左氏の詩を引いて、南山有鳥、自名啄木、飢則啄樹、暮則巢宿とある。【二四】 松節裏金餌 條簡は釣竿を指す、留雅に「東南の美なるもの、會稽の竹箭あり」と記してある。裏はたむむ、金餌は精選した餌。長い釣竿に良き餌をつけて、水中に輪を垂れ、時々魚が引くと見えて、竿がたむむといふ意。【二五】 翠鮮湧池魚 翠鮮は翠魚。淨山の魚は翠魚と呼ばれて、池一ぱいが美の極に見えろといふ義。【二六】 岸發拆支光 蔣注に「岸に蟲發あつて拆開し、光象を立つるが如し」とあるが、蟲の發といへば頑細なもので、それが、ト蠶の際、蠶の甲を灼いて破れた様に見えろといふのも、甚だ當を得ない。これは、岸その物が、中が空虚で、發の様に見え、その發の皮といふべき處に縱横の破れ目があるといふことでは無からうか。【二七】 野麋 麋は犬部。【二八】 密烟 密は其を燒く煙、そこから立ちのぼる煙。【二九】 羶球鳥 羶は覆ふ、鳥は水中の鳥。【三〇】 沙棠 沙が風水に漂ぶ。

れて自然に篆字の横な跡が残つて居る。【三一】 題平 蔣注に「華山に青柯平、種葉平あり、地の平處に因つて以て名と爲すなり。題平は、題曲の平處と云ふ」とある。【三二】 辨肌 辨は、ぞつと裂けがして身體の露ふこと。【三三】 絳刺 絳は有毒の毛蟲、それが人を刺す。【三四】 呌耳聞聲生 蔣注に「初生の雞、その聲啾啾然たるなり」とある。【三五】 宿慮志題 淨世離れのした思に耽つて、幾たびも振り回見る。【三六】 題歸 文選西都賦に歸三秦嶺とあり、既文に「歸は望なり」とある。はるかに眺める。【三七】 駭遠遊 駭に「脚名、疑は挿接なり、駭匪に挿んで相接するなり」とある。【三八】 羶氣 羶氣は山氣、青緑色」とある。【三九】 夷空情 夷は樂ましむ、空情は世事と相關せざる情思。以上二句は、嶺林を望み、羶氣を觀、目を眺め、以て情を樂ましむといふ意。【四〇】 雲麻換狗豕 雲麻は胡麻、仙家などで飯に交へて食ふ處から、雲麻といつたのであらう。換は、取る。狗豕は、犬にたかるだに。胡麻は、丁度、犬の豕を拾ひ取つた様であるといふ意。傳雅に「胡麻、その狀、狗豕の如きを以て、故に名づく」とある。【四一】 村稀啼禽語 禮記に「猩猩能言不、禽獸を離れず」とあり、白虎通に「禽は鳥獸の總名」とあり、文選吳都賦に「猩猩啼いて禽に就く」とあり、異物志に「交趾封溪、猩猩あり、夜、その聲を聞くに、小兒の啼くが如きなり」とある。この句は、小兒の啼くこと、恰も猩猩の如しといふ意。【四二】 紅雲噴噴瓦 紅雲は果實の乾んで紅なるもの、或は乾葉ともいふ。佛の寶などを佛の瓦の上に曝らしてあつて、それが乾を帯びて赤くなつたといふ意。【四三】 黃閣聖門術 黃閣は瓜實、一に天瓜といふ。即ち東瓜、その大きな瓜が門の處にぶら下つて居る。許彦周詩話に「城南嘲句、紅閣聖三善瓦、黃閣聖三門術、これ乾葉と瓜實とを説く、これを讀んで、なほ西北村落間の氣象を想見す」といひ、竹坡詩話に「紅閣黃閣は、二物を狀して名いはず、人をして、既目して之を思はしむ。秋曉經行して、身、村落の間に在るが如し。杜の北征の詩、或紅如三丹砂、或黑如三點漆、これ亦た秋冬間蕭瑟見るところを説く。然れども、退之に比すれば、頗る自ら力を省く」といつて居る。【四四】 得梅端虎健 左傳莊公十一年に「商を得たるを克つといふ」とあり、古今注に「端虎は、形、蜘蛛に似て色灰白、善く端を捕ふ」とある。即ち端取蜘蛛。それが大きな獲物を取つたといふ意。【四五】 相殘奮豹趨 奮豹は奮の驚なるもの、端虎を以て故に名づく。玉篇に「題は狼黨なり」とあつて、題るといふこと。強い奮が互に喧嘩をして躍つて居る。【四六】 東枯樹指壳 枯枝を束ねる爲に、樹先の皮が硬くなつて居る。

【五七】 刈熟掃屑 熟した稻を刈つて之を掃ふ爲に、農夫の屑は赤く服れ上つて居る。【五八】 遊皮鹿 果實の油い皮を剥くと、その皮が、ぐるぐると巻き縮む。【五九】 苦肉腹影 苦い瓜の大きなのを割がむとし、丁皮人の腹の如く彫れて居る。【六〇】 横巻流水の力で米を舂く、即ち水車の仕掛。社預が過機水碓を作つたといふ説もあるし、李白の詩に水碓雲母碓とある。【六一】 吹簫 簫。吹は風、莊子に「笑を鼓して精を掃す」とあつて、ふるひで簫り、批條塵埃を除いて米を白くする。【六二】 雲根木登 廟社に神儀を供へる爲に、木製の櫓を多く用ひる。【六三】 駭妖 駭妖 駭法に「駭妖、或は妖駭に作る。駭、或は駭に作り、或は併に作り、又併に作る。今按ずるに、紙は、廣韻に云ふ、小兒の服なり」と。今猶ほ以て漫百破羅の名と爲す。或は又疑ふ、この句、下の駭細三娘婆、ととも、今の駭細と爲す。但だ、二説、これを此に用ひて、皆意圖なし。疑ふらば、當に披に作るべし。楚俗切、收なり、取なり、獲なり。妖は、狐狸の屬、能く妖媚を爲すものなり。駭は、當に米に从ふべし。駭中、繩索を以て、急に罪人を得するの名なり。言ふは、妖狐を捕へ取つて、繩索を以て之を縛するのみ」とある。【六四】 兎學五六卷 駭法に「兎學は兎羅の學、道釋二氏の書の如きなり」とある。【六五】 古藏四三卷 古藏は葛城、その基地に三四の墓が立つて居る。【六六】 學足 足を曲げる。【六七】 土怪 家語に「季桓子、井を穿つ、土怪の如きものを獲たり、その中に羊あり、孔子曰く、土の怪は贖羊なり」とある。【六八】 踏道 葛城の道で人を通ずる處。【六九】 絳雲 駭法に「時に謂はゆる贖羊在戸の如く、戸に人の出入なければ、細を結んで之に當る」とある。【七〇】 編細拂 軍飛して、その塵がしきないふ。【七一】 伊威 或は伊威に作る、蟲の名、前に段三狐狐詩に見ゆ。【七二】 家脚 左傳襄公十四年に「先君、家脚あり」の杜預注に「上脚なり」とある。【七三】 割 破る。【七四】 遺室 遺せし室を吹く様である。【七五】 挂指 釋名に「婦人の上服を挂といふ」とあり、古樂府に衣上香指在と見ゆ。【七六】 葦跡 漢書班婕妤傳に「葦干に近く雙えて居る。【七七】 獸材 柱上に刺して獸形を爲せるをいふ。【七八】 駭 駭に獲みかからむと居る。【七九】 絳雲 細干に近く雙えて居る。【八〇】 獸材 柱上に刺して獸形を爲せるをいふ。【八一】 駭 駭に獲みかからむと居る。【八二】 寶 寶未盡 晴晴を以て珠璣に喩へたので、飛燕外傳に「后、蹶つて、使侍の袖に墜す。使侍曰く、袖の墜、人の靴袖を染めて、正に石上の華に似たり」とあり、李白の詩にも、晴晴落九天、飄飄生珠玉」とある。【八三】 玉唾 寶珠 駭法に「唾、或は唾に作り、又唾に作る。唾、一に掃に作り、亦た或は題に作る。云ふ、蜀郡賦、玉唾相輝、題は條上の飾なり、故に曰く、寶珠、と。餘は隨つる聲。本と或は理に作る。今按ずるに、上下の文章、皆婦女の事、もし題に作らば、即ち上句當に題に作るべし。然れども、文意に非ず。又謂は柱礎、亦た拾ふべき物に非ざるなり、唾に作るを是と爲す」とあつて、唾液を以て玉筋に喩へたのである。南史に「陳の文帝、簾を石上に投ぜしむ、餘聲あり」とある。【八四】 疑問 駭法に「言ふは、紗中、尙ほ佳人を圖顯するを疑ふなり」とある。【八五】 絲髮抽班 絲髮は細草を云ふ、班は石の玉に次ぐもの。疑は、井壁、風俗通に「疑は碑を集めて井を修するなり」とある。井戸の邊の敷石の間から、細草が抽き出した。【八六】 青膚瑩瑩 青膚は青藤、瑩は水。昔を帯びた美事草木が雙えて居る。【八七】 獸 紙魚。【八八】 書標 即ち書架。【八九】 鳴嬰 詩經に嬰其鳴矣とあつて、即ち黃鳥を指す。【九〇】 海異 海産の珍らしいもの。【九一】 天 大きな鯨。【九二】 綾 まとふ。【九三】 五兵 漢書百官表に「教ふるに五兵を以てす」とあつて、似師古の注に「五兵とは、弓矢戈矛戈戟を謂ふなり」とある。【九四】 蜀 蜀中の地、李白は蜀人、杜甫は晩年久しく蜀中處處に流寓せしが故に云ふ。【九五】 嶽力 山嶽を動かす力。【九六】 常車 駭法に「李杜對するに常車を以てす、未だ其說を詳にせず、車の字、もし電の字に作らば、尙ほ可ならむのみ」とある。【九七】 幹支道 造化を部統する。【九八】 雲 雲 高い天空。【九九】 芒 芒は穀類の細毛、その細毛の先端。【一〇〇】 轉機 寒熱を變化せしめる。【一〇一】 瀧 瀧の水の急に流ること、瀧は水の濁つて流れざること。【一〇二】 削 絲を細くし、く。【一〇三】 珠 珠 珠は珊瑚、即ちゆすら、さくらんぼ、こゝでは小さな果實の義に用ふ。【一〇四】 弁耳 弁は皮冠、耳は耳飾。史記滑稽列傳に「前に瑩耳あり、後に遺替あり」といふに同じ。【一〇五】 流金 流金は美玉、金玉を併せて流失する。【一〇六】 荷 蓮花。【一〇七】 江 江南の別、駭法に「文選劉休文の詩に、遊覽江南、幽靈遇の時に采菱調急、江南歌不絶、李善、皆、古江南詞、江南可採蓮を引いて以て之を釋す。東野の本集、亦た喜んで江南の字を用ふ」とある。【一〇八】 蓮 蓮 蓮法に「青花圓實、亦た玉竹と名づく」とある。【一〇九】 藍 藍 藍田の玉矣。【一一〇】 鹿 鹿 鹿支脚、杜甫の詩に細葉結三脚とあり、又脚細結とある。支脚は、黒色の鹿、それを脚にして、その肉の白く綺麗なきことが霜の如くである。【一一一】 浙玉吹香 浙は米をとぐ、香は米の精良なるもの。魏略に「太祖、王朗を嘲つて曰く、君が骨香精に在つて執











を帯びて、さながら翡翠の羽の色かと訝かるばかり。傾斜の處は、歩を移す度に滑り易いが、そこを過ぎて、次第に幽邃な處を搜り尋ねて分け入つた。ふりさけ見れば、遠山は天邊に一寸ばかり碧を拖き、眺やめる兩目は、愈々明かなるを覺えた。近きあたりには、乾いた稻の穗が、紛として地に堆き位、多くの蟲どもは、秋に値うて、枯死した草木の莖にしがみ付いて居る。木の腐つたのには、名も知らぬ草が生え、草の實は、珠を爲して、まるで眼晴を聯ねたやうである。木の虚に成つて居る處は、新に斧で打ち摧かれ、又木を伐つて薪としたのが、山と積み上げられてある。小さな羽蟲は、蜘蛛の巢にかかり、むごくも囚へられた儘、まだ死に切らずして動いて居るし、物を盗み食ふ鳥は、彈を飛ばすのに驚いて居る。熟した果實は、自然と殻を開いて脱け出で、しなやかな蔓は、誰か牽いたともなく、自然に延びて居る。木などに卷き付いて居る。地鼠は、人立して、禮するが如く、牛は何に駭いたか、躍り上つて、牟牟と鳴いて居る。如に蒔かれた菜蔬は、芽を出して、社日に臨めるを喜ぶが如く、耕地の租税の寛大なのは、何よりの事である。露を帯びたる螢は、光りこそすれ、暖かではなく、凍えたる老蝶は、瘦せ衰へて居るが、尙は軽く飛ばむことを思うて居る。林に宿つた鳥は、曉に先づて起ち、魚は餌を食ふとき、半は其身を水中に横へ、頭だけを出して居る。菱の實は、紫に熟して、波に翻り、その角が鋭く尖つて居るし、蓮は折れて、碧色の圓い葉が傾いて居る。南方の珍珠たる鱧鮓は、水中に泓ぎ廻つて居るし、野蠻人の食ひさうな蝶や蟹などは、一緒に聚まつて居る。桑の葉の

上には、尺取蟲が指で度る様にして這つて行つた跡があるし、穴に住む蟻は、なかなか強くて、善く戦ふといふ話も聞いて居る。鳥は林陰に止まつて、その翅相觸れ、蛇などは、幽僻の物かげに押し遣られて、その尾を以て相撃つ位。蔓の上に涎を引ツかけて、のそのそと這ひ行く蝸牛は、其角を出したり縮めたりして居るし、木の表皮をつついて蟲を食ふ啄木鳥は、頭を以て、ことごとく敲いて居る。善い餌をつけて、釣を垂れると、時々大きいのが掛つたと見えて、長い竿が撓むことがあるし、魚は極めて多く羣れて、池一ぱいが羹の様に思はれる。下が虚になつて、さながら甲殼の形を爲せる岸は、龜裂を生じて、龜卜の兆かと思はれ、野に蒔かれた大麥は、そろそろと芽を萌して來た。瓦を燒く窯の煙は、長く延いて、水中の島を罩め、廻曲せる平沙の汀には、風水の蕩搖した跡が篆字を書いた様に成つて居る。ぞつと寒け立つて、肌の震ふのは、有毒の毛蟲に觸れたからであるし、やつと解化したばかりの雛ツ子の鳴くのが、啾啾然として、近く耳邊に聞こえる。かくの如く、都では一寸見られぬ様様の物を目にし、浮世を離れた思に耽つて、幾度も回顧し、又頻りに遠望して、勝手に逢迎する者を逃がすまいとして居る。山丘の巔なる林は、眼蓋に挿む様にして相接し、青標色を爲せる風氣は、世事と相關せざる我が心情を樂ましめる。されば、此より足跡を移して歸らうと思つても、なかなか歸られず、この風景に戀著する心を捨てようとしても、捨てかけて又争ひ、つい愚圖愚圖して、なほ立ち去らず、相變らず、眺めあかして居る。胡麻の熟したるは、狗にたかる蟲を聚めたるが

如く、百姓の子供の嗜くのは、丸で狸程の様である。村人の家の有様を見ると、檐の上には、果實を乾かしてあるが、それが真赤になつて蠟を帯びて居るし、大きな冬瓜は黄色になつて、門によら下つて居る。蠅取蜘蛛は、大きな物に打克つて、これを獲たので、その勇健なるを知るべく、雀豹は互に相争つて跳つて居る。枯枝を束ねる爲に、樵夫は、指先を臺なしにし、熟した稻を刈り取つて擔ぐ爲に、農夫は、肩を赤くして居る。果實の漆皮を剥くと、ぐるぐると卷き縮み、苦い瓜の大きいのを割かうとすると、丁度、人の腹の様に膨れて居る。水車は、潺湲たる流水の力によつて、ひとりて米を舂くやうに成つて居るし、風に向つて、ふるひを簸へば、糝糠塵埃を除いて、米が白くなる。城南の郊外に見るものは、ざつと、この通り。その邊には、又墓地だの、宅地だのがあつて、中には、随分荒廢して居る處も見える。廟社には、神像を供へる爲に、木製の皿に盛り、妖狐を捕へたといふので、藤蔓を繩にして縛つてある。道釋二氏の書五六卷を讀んだといふ里中の儒者は、足を屈めて拜し、あたりには、古塚が三四基あつて、土怪と稱すべきものが、瞳を閃かして偵つて居る。その墓所に通ずる道は、いつか修理したのであらうが、今は又ひどく荒れて居て、蜘蛛が巢を張つて、掃つても、跡から直にかけける。墓の近邊には家があるが、その堂宇は、蝙蝠の住所となり、日暮になると、その聲、沸くが如く、窸も壞れて、伊威といふ蟲が一ぱい居る。そこで、この前の主人は、どういふ人かといふと、いづれも、上卿といはれる御歴歴であつた。しかし、今は、壁破れて寒月の光を剥ぎ、

折れた竹のさわさわと鳴るのは、遺愛の笙を吹くかと疑はれる。婦人の衣の香は、罪罪として、なほ在るが如く、履の跡は、馳げながら、残つて居る。劍の如く尖りたる石は、今でも欄干に近く聳えて居るし、獸形を彫刻した柱は、尙ほ軒に向つて攫みかからうとして居る。美人の唾と疑はれる珠璣は、地上に散亂して、拾へども盡きず、涙が流れて其儘凝つたやうな玉の箸は、そこらに落ちて、鎗然として聲ある様に想はれる。窓には、薄い絹が懸つて居て、その中には、なほ佳人を慕うかと疑はれ、綺麗な蠟燭は、燭臺の上で燃やし盡されてゐた。緑の髪と見まがふ細草は、井戸の周囲の敷瓦の間に抽き出で、青い膚に似たる古苔は、見事な木の高い處にも生えて居る。かつて舞をした處には、白い蝶が飛んで居るし、書棚からは、紙魚が落ちて来る。むかし、此處で詩を作つた人も、段段有つて、嘉詠多く存し、芳詞を吐くことは、さながら鶯の如く、その詩を作る時には、新奇を旨とし、海外の珍らしい物を摘み來つて材料となし、六つかしい韻を自由に使つて、大きな鯨を奮激せしめる様な勢腸胃の中には宇宙萬象を躡はしめ、精神の壯なることは、模様兵器を使ひ分け、蜀中詩人の雄として李杜が獨り羣を抜くが如く、雷車一たび轟けば、山岳をも震撼する力がある。かくて、意象壯大な名句は、造化を運旋するに足るべく、高尚なる言葉は、高い天空にも軋る位。加ふるに、極めて細い其先端に於ても、容易に寒熱を轉倒せしむべく、杯酒の間には、鬼神の扶助が自ら現はれ、大小の物、各、運行の勢に乗じて詩中に入り、水の緩急、雨つながら聲を騰ぐるが如く、一たび文字に上れば、

樽を發せざるものは無い。さういふ様にして出来上つたものを見ると、花を凌いで、粉薬までも食ふ様な想をなし、又絲を細くして、珠の如き小さな果實を繋ぎ通した様でもあり、綺語は、晴雪に洗はれたるが如く、嬌辭は、鸞鸞の囀るが如くであつた。それから、宴飲の有様を云へば、興方に酣なるときは、男女を雜へ、その費用の夥しきは、金玉を併せて流失せしめる位。席上に飾つた蓮の花は、江南古詞の詩意を寫し出し、青い花は、藍田の美玉を綴つた様である。そして、御馳走はといへば、鮑を膾にして、その肉の純白なるは、霜の如く、玉を欺く上米をといで、炊ぎ出し、ともに、その精美を盡して居る。そののみか、朝饌でさへも、品目數へ切れず、一年持ち越した春の酒は、名も機様で、千を以て數へる位。この筵に列するものは、瓢酒盡きむとする頃、渡る日影の傾くを惜み、清き聲に唱へ出す歌に餘照を駐め、酒に酔へば、魂魄すでに蕩ろけて、我を忘れ、しびれの切れる位。長く坐つて、目を見張つても、何も認める物もない程に、精神恍惚として、この世の歡樂に耽溺して居る。ここに來るのは、王公大人に限られて居るので、いくら引き上げむとしても、賤者の通路ならねば、餘人は入れず、同じく神仙の中にも、擇りに擇つて更代した者ばかりであるから、光彩發越するを疑ふ位。そこで、愚みとなるべき種種の巧藝を集め、競うて打興じて笑を取り、又肉の鮮なるを列べて、その中でも、若く柔かいのを擇り取る。とはいへ、富貴榮華は決して長く存せず、桑畑も、變じて蕪蔓を生じ、楠の名木も切られて、斧の音が丁丁として居る。丹霞と色を争ふ様な光輝とても、長し

へに残つては居らず、さしもの風標、誰か復た之を繼ぐべきぞ。さう云ふものは、すつかり跡方も無い様になつて仕舞つた。なせ此處には、さういふ様な人士繁華の習があつたかといふと、ここは都近くであつたからで、平郊一帶、謂はゆる王畿千里は、天子の直轄地で、瑰偉麗著、長安の盛は、言ふまでもない。時しも、清平の世で、目出たい氣色は、才藝に秀でた人人の上に被ひかかり、堅良の人士は、杉柁を挿んだ如く、自然草を抜いて居る。かういふ人が隠伏して民間に居る内にも、自然氣象多く、そして、出處進退、自然に位地の高下を示して居る。華山は、巨靈の爲に劈かれて、神靈愈々顯はれ、終南山は、京畿の南を環つて、地上の神祥を貯へて居る。聖上の洪謨は、終始を壯にすべく、輔弼の賢臣どもは、日日清げなる玉階に登つて入朝し、決して、政務の遲滞することも無い。秀氣積れば、山となつて填塞に任せ、靈異、吐き出さるれば、水となつて溜まり、且つ澄んで居る。抑も、唐室の盛なることは、漢魏を併せた様であるし、創業の固きは、周秦にも勝つて居る。光輝を積めば、明德の鏡に一ばいに映り、世に知れて家に一經を傳へることは、滿堂の金を遺すよりも、はるかに宜しい。名門右族の人人は、家に在つて、食事の際、鼎を列ね、又一族皆恩寵に與つて、門に弓旌を立てならべて居る。さういふことは、すべて大制に本づいて、天子より賜はるもので、中には、特別の御恩召で、規定よりも過ぎたものがある。それから、此等の人人の庭園の模様はといへば、池には、橋があつて、銀河に架せるかと疑はれ、屈曲した岸に立つて見れば、瀛洲の仙界も窺

ひ知ることが出来るかと思はれる。瀟湘の綠竹は、遠くより取り寄せ、太湖石の穴の明いて居るのは、態態人に持つて來さした位。葡萄首指は大漢より、楓や楡などの佳木は、南方の楚地より、いづれも搬び入れたものである。すべて、佳良なる庭木は、手入が善いので、枯れかかつたり、朽ちたりすることはなく、その木理純白にして、膏の如く、それが、どしどし大きくなる。長條を垂れては、翠色の紐の如く、曲つて旋つて居る葉は、玉を潰れた様である。池の中なる魚が口をあいて沫を吹くと、星が浮きつ沈みつするが如く、そこらを歩いて居る馬は、總身の毛に赤げ勝の斑紋を爲して、まるで錦の様である。ここには、四方の物を集めて風土を亂し、百種の草木は、栽培に因つて、自然にその特長を見せる。すべて榮養が十分であるから、花だの、芽だのは、相妬むが如く叢生し、葉は茂つて、晴日の中にのんびりと廣がつて居る。園中に飼養してある禽獸も亦た見事であつて、獸は類を以て招き集め、個個論議と形容すべき程の珍らしい物であり、鳥は羽を集めて、能く人に馴れて居る。それを高い處から眺めると、身は飛動せる禽獸に跨り、そして、天に上つて、高大なる虚空を躍む様な心持がする。春游の日には、新に萌え出でて風に靡く若草を踏み、そして、綺羅を著かされる女伴は麗たげなる若い婦人を促して歩いて行く。その跡には、遺ちた珠が的の隙として飄り、美しき顔には、何思ふともなき心が明かに讀める。柔しき聲で返事をするのは、眠が醒めて居るやうであるし、懶げに見ゆる意態は、酒に酔つて居る如くである。その衣帯には、鳳凰の羽を以て飾をなし、腰に佩

びた玉は、鵝の脂肪の如く純白である。文事盛なる折から、その心得あるものは、詞藻を以て互に照灼し、武臣にして戦勝を得たものは、上、彗星に應じた騷亂を切り鎮め、ともに、意よ用ひられて、美官高位にも上り、平生錦を著下ろして、その價を論せず、又雲に逼るやうな高大な建物を造り、園池には、魚貝の類が一ぱい居るし、耕された裏畑には、様様の野菜が作つてある。それから、孔雀翡翠の如き南方の珍禽を買ひ取り、愛養の極、これをして馴れしめ、芭蕉棕桐の如き熱帯の植物を苞にし、取り寄せては、植ゑ付ける。水欸冬は、雁の頭を並べた様に叢生し、見事な柑橘は、鵝の卵を集めた様である。又別に廣い土地を占有して居るものがあつて、何者かといへば、評判の有つた地方官の休職したもので、前時の規定に依つて、特に恩恵を蒙り、老後の扶持にも事を缺かず、仰仰しき旌節を天子侍衛の者に奉還したが、その在官の砌は、封疆を守つて、随分忠貞の行があつたといふこと。そこで、取服として飾れる鏡は脱ぎ棄てたが、なほ朝冠を戴いて、彩れる紐を纏し、前代の元老として、時たま参朝することがある。その一門の繁榮、すばらしく、爵祿位勳は、僮僕陪録までも、皆これを受け、その後裔は、櫛櫛の中から、簪笏を賜はるといふ次第。さすがに名門の事であるから、乳の下に居る赤子までが、蠶糞として、俊茂の姿に見え、たとへば、椒聊の實の蕃多なるが如く、子孫の幼いものは、嚙嚙として啼いて居る。これ等の人人は、まことに清げな形をして、鏡にうつせば、其匣にも溢れる位、暈の光の炯然として寒きは、刀の newly 削を發したる如くである。いづれも、家庭

教師として然るべき儒者を雇ひ入れて、歴史の知識を授けしめ、そして、親族を集め、孫や甥の末末に至るまでを一堂に會して、酒宴を催すことがある。その時は、鐘を相圖にして、食堂を開き、鼓を鳴らして、御馳走を搬び出し、膳は北の方なる臺所から持つて来るし、箱の様な食器に盛つた珍味は、東國様の料理法に據るとのこと。或は瓜の如く大きな卵を煮たり、菘の青きを細かく線の如く刻んで、一緒に煮てある。かういふものは、一寸他に類が無い。その他、山海の珍味は、ませこせになつて、口腹を満たし、席上に在つて周旋するものは、燕趙の美人である。かくの如き盛大な賑賑しい宴會であるから、たとひ、従前敵意を懐くものと雖も、ここに來れば、一笑して仇恨を棄て、そして、新に親密な交を結ぶやうにもなるし、又百金を贈つて、弟兄同様の友誼を爲すことも出来る。席上に在る物貨は、すべて外來品であつて、西方箱戎の交易場から至つたものであるし、又能く人言を爲す鸚鵡を飼養して置いて、人を呼び出させて居る。もとより素直な事をして其處に居るのであるから、たとひ高明の家であつたにしても、窮鬼の賑ふものなく、又暴横を抑へて非道なる事を爲せぬ故に、其筋から兎や角いはれることもなく、まことに結構な次第である。元來、城南は都に近いが、禽獸多く棲息し、まことに、狩獵の好適地であるといふので、その時候に近づくと、十分に遣つて見やうといふので、それぞれ用意を爲し、平原に一ばいに成る様に綱や繩を張りつめる。そして、愈よ其日になると、空を飛ぶ雉や鶉を苦もなく打落し、又路に血を流しつ、狐や鹿などが逃げ出して行く。その足

に劍を受けた野獸は、跋を引いて行くし、中には、その爲に却つて怒りを爲し、丁度魚が釣り上げられるとき、鱗を張るやうに、満身の毛を逆立てて、呻りつつ走るものもある。しかし、獵犬は勢よく跳りはねて、鷲鳥よりも早く走り、口を開いて飛び懸らうとして居る鷹は、飢ゑたる鷹よりも勇み立つて居る。そこで、討ち取つた獸類は、四つ足を一つに縛つてあつて、それに依つて、その頭數を算し、暴れて始末に終へぬものは、懸天に一つ食はして、はじめて之を捕獲する。やがて、猛獸が斃れると、牛馬まで喜んで樂むやうに見え、物に害を爲す妖鳥は、すべて殘害せられて、唯だ鼻などは、淋しくも獨り取り殘されて居る。ある者は、穴の中に逃げ込んだが、そこを攻め立てられ、愈よ九死一生の場合になると、目を瞞らして此方を視て居るが、箭が飛ぶと同時に、弦音に驚いて辟易し、無慘にも、打ち斃されて仕舞ふ。さて一日獵り暮らすと、車の箱に獲物を積むも一ばいに成る程澤山あり、動もすれば、あまり重くて、車が動かぬから、つまらぬものを棄てるが、それでも、残りは、中々大したものである。すべて野獸などは、喘ぐ様に走るが、全く向ふ見ずであるから、忽ち鋒刃を差し駢して居る處へ行き當つて喫驚し、又木の切り株に打ち付けたりして、全く盲目も同様である。愈よ獵が済むと、今までの施設してあつた物は、盡く掃ひ除けられ、その跡は、豁然として曠く、いくら馬を駆けらしても、一望の草原で、礙るものもない位。時としては、其場で其獸を料理することもあるが、いくら食ひ意地の張つたものでも、到底その肉は食ひ切れずして、うんざりする位。又いかも



の食ひの速中は、五侯の鯖の如く、色色の肉をませて、腥きを厭はず、どしどし箸をつける。狩獵の光景の勇壯なるは、先づ此通り。次に城南に於ては、天子が天を祭ることが、毎年の例となつて居て、律が黄鐘大呂に當ると、十一月は秋收冬藏の後で、丁度よい季節と定められてあつて、豫め六談童謡の如き古樂を練習せしめる。その當日には、この處に式場をしつらへ、日月を畫いた旗を翻し、テントの高峻堅固なるは、棟を具へ、臺を置きたる宮殿も同様。第一に大きな蒼壁を供へ、祭場には、匂ある眞菰の席を敷きつめ、殿中奥深く祀られたる神祇は、億兆の人民に幸福を下し賜ふこと疑なく、籩豆には、黒黍を山と盛り上げてある。かくの如く、厚く天地を敬せられるが故に、慶澤四に流れて、疫癘などは其跡を絶ち、帝威四方に及びて、戦具も今は全く無用である。夜になると、神前に焚く靈火は、高岡の上に輝き、天子の御車は、輪輦輜轔として、その朝、愈よ還幸される。抑も、郊祀は、最も盛大なる典禮で、水く之を用ひて、帝諡の宏遠なることを示し、徳澤は、自然と和氣を含んで、萬物の生殖を厚くし、垂恩廣きに互りて、足を切られたり、入墨をされたりする様な極刑の者も、遂に助けられるといふ次第である。前には、門第簪紱の家の有様を述べたが、この城南に宅地を持つて居る者は、いづれも、並並の百姓とは違つた名族であつて、田租を納める耕地の間には、勢力ある土著の郷民が多く住んで居る。その居宅には、米倉があつて、森森たる楡樹が之を蔽ひ、麥打場には、こぼれた穀粒が多いから、見なれぬ鳥までが翔つて来る。畑は、土質が肥沃であつて、蕪などが、よく

出來るし、處處に陶甕があつて、皿瓶の類を造るが、いづれも、堅固である。かういふ處で静養すると、あるが上にも健康になるし、又孝思に依つて、廟門の外で、嚴に先祖の祭を爲すものもあるが、さすがに、報本の義を忘れぬ處が頼母しい。夫に寺もあるが、雲を掘り開いて、山の峻しい處に其地を卜し、月を采らむとせば、水の溜まれる一泓の池に臨むべく、階砌の邊には、大きな石があつて、その面は平滑なること、鏡の如く、住持の坊さんは、朝早く鉦を敲いて御務めを爲した後に、初めて食に就くといふ位、極めて眞面目の清僧である。本尊の泥像は、相對して見れば、如何にも怪異であるし、鐵鐘は、ひとり鐘、鐘と時を報じて響いて居る。寺庭には、首に瘤ある鳩が集まつて騒がしく、蜈蚣や蜥蜴は、垣の間を蜿蜒として這つて行く。寺の周邊なる桑の實の黒く熟したる時、桑蟲も老いなむとし、麥の穂の黄色に成つた頃には、鶯の聲が長閑に聞こえる。城南の光景は、ざつと此の如くで、春の曙などは、最も善く、その勝負が待たれる位、肝合へる友達と打連れて、先行を戒め、相並んで静に歩を移すが、門より馳せ出でむとして、驟いて倒れることもあり、早く別荘に到着したいといつて、足音がけたたましく聞こえることもある。杏の花は、紅に咲き出で、細かにして鮮美であるし、田舎人の茶うけにする餡は、しつとりと凝り固まつて、碧色を爲して居る。女どもは、相集まつて、鞦韆の戲を爲し、又蘭草を試みやうといふので、美玉の色を爲せる若草を容赦なく摘み取る。その女どもの遊に耽つて居るときには、白粉に交れる汗が廣い額に濡ひ、首飾の玉の璀璨たるは、金星

が地に落ちた様であるし、あたりには脂粉の香高く吹き滿ちて、つんと鼻につく位。何分、老の目は霞んで居るので、無理に視つめて、しばらく時を移して居た。この時節には、喜色滿面といふ程、物とはなしに樂しげであるし、おまけに、この地方は、長安の都の内といつても善い位で、その風俗も、決して鄙びて居らぬ。もしかういふ事を書き立てたならば、魚子脍、蘭紙などを用ひ盡しても足らざるべく、出来るならば、これを歌曲に仕組んで、琴、箏の譜に合はせたいと思ふ位。城南の地、觀るに足るもの多く、詩料としても十分であるから、何も必ずして遠方に遊覽に出かけるにも及ばない。但し、われは、ゆくりなくも、釋僧の仲間入りをして、陽山江陵に遷讓せられ、萬里瘴癘の地であるから、この身を以て鶴、鳧、鴈と親み、そして、浮沈の跡は、鴨や鵝に似て居る。かくて、湘江の邊を過ぎた時には、臘味を供へて、古しへの屈原を弔ひ、又とても長生は六つかしいと思はれる處から、かの八百歳の天年を全うしたる彭祖を羨ましく思つた。もとより、炎熱甚しき土地であるから、蛇や蚯蚓が夥しく居て、これを見ては、魂の驚くを禁せず、蝦蟇だの蟹だのに遇ふと、一種の異臭に堪へられない。しかし幸にして、再び召し還されて、中和の氣を享くるを得、忝くも、天門を拂つて參朝することも出来、やがて、國子博士に任せられ、私事の爲に暫く休暇を乞ふことも出来た處から、馳驅して、夜明け頃に校門より出でて、この城南の地に來たのである。すると、上の如き景色に遇つて、類少き詩想は、蹶然として暢びやかになり、仍つて、ここに聯句を試み、字字玉の如く、光輝を

述べて輝くを覺えた。今しも、陶然として暖かく、燕子は風を逐うて歸り、蜻蜓は、目まぐるしい様に、晴空に舞つて居る。身は老に垂んとするも、足はまだ丈夫であるから、出かける處も多く、心に貪つて力を遣にするが故に、強いつと思ふ程の相手もない。今の境涯に在つては、名教を樂んで、我が分に安んずるが第一で、必ずしも、拘束に苦むには及ばない。そこで、詩趣の存するが儘に、之を眺めて日を暮らしたので、もとより、小睡を事として、誠古張つて居るにも及ばない。

【餘論】この詩は、凡そ十一段より成り、第一段は、起首竹影金瑣碎より吹簾飄飄精に至るまで、城南景物の盛を泛言し、或は養僦木盤簇の二句までも入れる説もあるが、ここには、朱竹垞が「細に養僦の二句を玩ぶに、墟墓間の事を詠するに似たり、宜しく截つて下節に屬すべし」といへるに従ふことにした。第二段は、養僦木盤簇より幽蠶落書棚に至るまで、郊墟宅壁の古廢を言ひ、第三段は、惟昔集嘉詠より風期誰復賽に至るまで、在昔詩人吟詠の工、人士繁華の習を追慕して、盛衰興廢の感を極めて居る。第四段は、阜區扶帝壘より呀靈滄溟澄に至るまで、幾句の形勝を紀し、第五段は、益大聯漢魂より鶴鵝鴈三瓊橙に至るまで、土地人物繁華の盛を言ひ、第六段は、鶯、廣雜、良牧より抑、橫免、官評に至るまで、門第簪紱の家を言ひ、第七段は、殺候肆、凌蕪より惡嘲博、壓結に至るまで、射獵の壯觀を言ひ、第八段は、歲律及、郊至より恩照完、刑刻に至るまで、郊祀の禮を言ひ、第九段は、宅土盡華族より麥黃韻、鴈鵝に至るまで、民居寺宇の美を言ひ、第十段は、韶曙運三勝

賞より紀盛播琴箏に至るまで、里人遊觀の樂を言ひ、第十一段は、美必事遠觀より焉能守三礎一に至るまで、公自ら竄讀して歸り、復た博士と爲つたことを言つたのである。かくの如く、段落を分ければ、その命意も、もとより明白である。但し内容の意義の遞變する處が、往往急轉して自然的でないので、前後語意重複するを免れず、又對句に無理のあること等は、たしかに缺點であるが、聯句その物の特質より觀れば、管に止むを得ざるのみならず、これ程まで融和したといふ處に於て、韓孟二人の才力を認める次第である。全體は、城南に見たところの一切の物を含殺したので、漢代の賦が其頃の新體詩として、都城の勝を記述したなどと全く其軌を一にして居る。蔚之翹は「城南聯句」、蓋し二公號うて、自ら奇語を爲さむことを務む。故に、錯陳碎細、乃ち爾り。然れども、瑣瑣惡、至實に非ざる靡し。宇宙間、亦た何ぞこの一種の文字なかるべしや」といひ、朱竹垞は「一陳排空生造、牽強湊泊の失なくんばあらず、然れども、僻搜巧鍊、人を驚かすの句、層出して竭きず、學、五車に富み、才、八斗を兼ぬるものに非ざれば、安んぞ能く此に幾からむや」といひ、「この詩、鋪敘結構、全く子虛兩都等の賦を模す、當に是れ商量して、篇法を定め、然る後、遞に句を聯ぬるのみ」といひ「柏梁は、人ごとに各一句を賦して、己の事を道ふは、姑らく論するなく、他の聯句は、只だ人ごとに各一聯。若し夫れ、一人句を唱へ、一人句を對し、更唱迭對するものは、韓孟より始まる」といつて居る。要するに、これだけの長篇が、一首の詩としてまとまり、篇章語句、殆んど間然す

るところなきは、その特徴といふべく、その宛ら一手に出でたるが如きは、韓孟二人才力相比敵するに非ざれば、到底出來ぬことで、これ即ち藝苑の一大壯觀たる所以であらう。愈焉が「聯句の詩、國手の奕に對して、著著相當るが如く、又知音合曲、聲聲相應するが如し。故に知る、孟韓相遇ふに非ざれば、この奇觀を得る能はざるなり」といつたのは、いかにも的確である。しかし、前賢中には、二人才力必ずしも相比敵せず、片片の人が直しに直して、はじめてかういふ様にまとまつたものだといふことを主張する人もあるので、劉貢父は「東野と退之と聯句す、宏壯辨博、一手に出でざるが若きに似たり。王深父云ふ、退之潤色することあるべきなり」といひ、呂氏童蒙訓には「徐師川、山谷に問うて曰く、人は言ふ、東野の聯句、大に平日作るところに非ず、恐らくは是れ、退之潤色するところあらむ、山谷曰く、退之、安んぞ能く東野を潤色せむ。若し、東野、退之を潤色すとせば、却つて此理あり」といひ、朱熹は「韓詩は、平易、孟郊は喫了して飯に飽き、思量して人の到らざる處に到る、聯句中、他に牽き得られて、亦た此の如きを著け做す」といひ、往往にして、韓の孟に若かざることを斷定して居る。これに就いては、趙鳳北の見解が極めて公平で「蓋し、昌黎本と好んで奇麗清皇を爲す、而して、東野は、盤空の硬語、妥帖排纂、趣尙略ば同じく、才力又相等し、一旦相遇うて、遂に膠の漆に投するを覺えず、相得て間なし、宜なり、その傾倒の至れるや、今、諸の聯句の詩を觀るに、凡そ昌黎、東野と聯句すれば、必ず字字勝を争うて、肯て稍や譲らず。他人と聯句すれば、平

昌黎の東野に於ける、實に資けて其れ相長するの功あるを。宋人疑ふ、聯句の詩、多くは韓の孟を改むるに係ると。黃山谷は、すなはち謂ふ、韓、何ぞ能く孟を改めむ、乃ち孟、韓を改むるのみと。この語、未だ過當を免れずと雖も、これを要するに、二人、工力悉く敵し、實に未だ優劣し易からず。昌黎、雙鳥詩を作り、己と東野と一鳴し、しかも萬物皆敢て聲を出さざるに喩ふ。東野の詩、亦た云ふ、詩骨聳、東野、詩濤湧、退之と。居然として、旗鼓相當り、復た謙讓せず、今に至るまで、果して韓孟並稱す。蓋し、二人各、自らこの才力の至るところを付つて、預め聲價を定むるのみといひ、「城南聯句に至りては、一千五六百字、古しへより、聯句、未だ此の如きの冗なるものあらず。城南を以て題と爲す、景物繁富、本と填寫し易し、すなはち、必ず逐段勾動、清楚方に眉目を醒ます、乃ち郊墟を遊覽し、園宅を憑弔し、都會の壯麗を侈り、人物の殷阜を寫し、林壑に入つては遊獵の娛を思ひ、郊壇を過ぎては廟祀の肅を述べ、層層鋪敘、段落分たざれば、更に千百字を増すと雖も、亦た難事に非ず、何ぞ必ずしも、多きを以て貴しと爲さむや。近時、朱竹垞、查初白、水碓及び觀造竹紙の聯句あり、層次清徹、しかも、體物の工、抒詞の雄、絲絲扣に入り、幾んど、一字の虛設なし、恐らくは、韓孟復た生くるも、亦た嘆じて以て及ばずと爲さむ」といひ、その必ずしも古人に盲從せざる處は、流石に、一段の識力を推すべきものである。

會合聯句

會合聯句

離別言無期、會合意彌重、離別、言、期なく、會合、意彌よ重し。  
 病添兒女戀、老喪丈夫勇、病んでは、兒女の戀を添へ、老いては、丈夫の勇を喪ふ。  
 劍心知未死、詩思猶孤聳、劍心知る未だ死せず、詩思猶ほ孤聳、の涌くが若し。  
 愁去劇箭飛、謹來若泉涌、愁去ること、箭の飛ぶよりも劇しく、謹の來ること、泉の析言多新貫、摭抱無昔壅、籍言を析ちて新貫多く、抱を摭べて昔壅なし。  
 念難須勤追、悔易勿輕踵、難きを念うて須らく勤めて追ふべく、易きを悔つて輕し、吟、巴山犖帶、說楚波堆壘、巴を吟すれば山犖帶、楚を說けば波堆壘。  
 馬辭虎豹怒、舟出蛟鼉恐、馬は虎豹の怒を辭し、舟は蛟鼉の恐を出づ。  
 狂鯨時孤軒、幽狄雜百種、狂鯨、時に孤軒、幽狄、百種を雜ふ。「く躡むこと勿れ、瘴衣常腥膩、蠻器多疏冗、籍瘴衣、常に腥膩、蠻器、疏冗多し。  
 剝苔弔斑林、角飯餌沈塚、苔を剝いで斑林を弔ひ、飯を角して沈塚に餌す。  
 忽爾銜遠命、歸歎舞新寵、忽爾として遠命を銜み、歸歎、新寵を舞ふ。

鬼窟脫幽妖。天居觀清拱。愈  
 京游步方振。謫夢意猶恂。藉  
 詩書誇舊知。酒食接新奉。愈  
 嘉言寫清越。瘵病失臄腫。郊  
 夏陰偶高庇。宵魄接虛擁。愈  
 雪絃寂寂聽。茗盃纖纖捧。郊  
 馳輝燭浮螢。幽響泄潛菴。愈  
 詩老獨何心。江疾有餘應。郊  
 我家本漚穀。有地介阜鞏。愈  
 休跡憶沈冥。峨冠慚關雎。愈  
 升朝高轡逸。振物羣聽悚。愈  
 徒言濯幽泌。誰與薤荒茸。籍  
 朝紳鬱青綠。馬飾曜珪瑛。

鬼窟、幽妖を脱れ、天居、清拱を觀る。  
 京游、歩方に振ひ、謫夢、意、猶は恂る。  
 詩書、舊知に誇り、酒食、新奉に接す。  
 嘉言、清越を寫し、瘵病、臄腫を失ふ。  
 夏陰、高庇に偶ひ、宵魄、虚擁に接す。  
 雪絃、寂寂として聽き、茗盃、纖纖として捧ぐ。  
 馳輝、浮螢を燭らし、幽響、潛菴を泄る。  
 詩老、獨り何の心、江疾、餘應あり。  
 我が家、本と漚穀、地あり、阜鞏に介る。  
 跡を休めて沈冥を憶ひ、冠を峨うして關雎を慚づ。  
 朝に升つて高轡逸し、物を振うて羣聽悚る。  
 徒に言ふ、幽泌に濯ぐと、誰と與にか荒茸を薤がむ。  
 朝紳、青綠鬱たり、馬飾、珪瑛曜く。

國讐未銷鑠。我志蕩叩隴。郊  
 君才誠偶儻。時論方洵浴。君  
 格言多彪蔚。懸解無桔萃。格  
 張生得淵源。寒色拔山冢。張  
 堅如撞羣金。眇若抽獨蛹。愈  
 伊余何所擬。跋鼈詎能踴。伊  
 塊然墮岳石。飄爾胃巢託。郊  
 龍旆垂天衛。雲韶凝禁甬。龍  
 君胡眠安然。朝鼓聲洵洵。愈

國讐、未だ銷鑠せず、我が志、叩隴を蕩す。  
 君が才、誠に偶儻、時論、方に洵浴。  
 格言多くは彪蔚、懸解、桔萃なし。  
 張生、淵源を得たり、寒色、山冢を抜く。  
 堅は羣金を撞くが如く、眇は獨蛹を抽くが若し。  
 伊れ、余、何の擬するところ、跋鼈、詎能く踴らむ。  
 塊然として岳石を墮し、飄爾として巢託に胃る。  
 龍旆、天衛に垂れ、雲韶、禁甬に凝る。  
 君、胡ぞ眠つて安然たる、朝鼓、聲洵洵たり。

【字解】【一】無期。何日が期限といふことが出来ない。【二】劍心。劍を愛する心。【三】孤聲。ひとり聲。【四】劇簡飛。矢の飛ぶより早い。【五】折言多新貫。言葉を解析すると新しい出處の事柄が多い、實は貫屬の貫の義。【六】據抱。據抱を行へる。【七】昔遊。前日の如く遊蕩する。【八】動迫。勉強して迫求する。【九】輕履。軽しく其跡を踏む。【一〇】巴。巴蜀の巴、蜀の東境。【一一】萃帶。山に土石多き貌。【一二】堆壘。堆くして土手の如く圍界して居る。【一三】孤軒。軒は軒、ひとりて氣勢を奮ふ。【一四】鬣。鬣は狼の鬣、尾長鬣ともいひ、黑鬣ともいふ。【一五】壞衣。壞は毒熱の氣、その氣を發つた衣服。【一六】鑿器。鑿人の使用する器具。【一七】破元。粗末にして役に立たぬもの。【一八】削昔市珪瑛。珪瑛は鹿竹の林、博物志に「制庭の山、

帝の二女、これに居る。漚下つて竹に擗へば、竹、垂く斑なり」とあり、魏道輔は「湘中の斑竹、生ずる時に方つて、點上ことに青斑あつて、これを封すること、蓋だ固し。草葉を以て之を洗ひ去れば、紫雲爛斑として愛すべし」といひ、胡中任は「斑竹、惟だ清湘の間のみ有り、未だ嘗て苦あらず、蕭蕭の間、別に一種の斑竹あり、間ま苦辭あつて之を封す」とある。【六】角飯、沈家、續寶體記に「扇原、五月五日、汨羅に投じて死す。楚人、これを哀み、この日に至る毎に、竹筒に米を貯へ、水に投じて之を祭る」とあり、風土記に「仲夏端五、菖葉を以て粘米を蒸みて角黍となす」とある、餌は食物を與へること、ここでは祭る。沈家は、投身の地。【七】遺命、遠地よりの致命。【八】舞龍、新に龍命を慶り喜んで舞ふ。【九】天居、帝居。【一〇】觀清棋、拱、或は拱に作る、即ち拱手、天子に拜謁する。【一一】歩方振、歩き振りさへ男ましげに見える。【一二】接新奉、新に到來する、買ひ受ける。【一三】瘡病、病氣が全癒する。【一四】試置、莊子の太宗師に、附贅離疣とあつて、疣、疣と相同じ。又遺遊遊に「その大本は捕鼠」とあつて、注に「強は盤都のこときなり」とある。二字ともしに類。【一五】偶高庇、偶はならぶ、比す。厚意を以て庇護する様に見える。【一六】背疎、禮記に「月は、三日すなはち魄を成す」とあつて、即ち月を指す。【一七】接成携、これを抱携せむとすること。【一八】雪杖、新らしく綺麗な杖、年をいふ。【一九】茗盤、茶の碗。【二〇】羅羅、文選の古詩十九首に羅羅出三素手とあつて、ここでは手の義。【二一】滯委、滯雅に「蟋蟀を妻といふ、今の促織なり」とある。【二二】江疾、江上の風土病。【二三】餘輝、詩經に既微且暉とあつて、毛傳に「隄足を暉」とある、足が展れるといふから、脚疾と見える。【二四】漚敷、漚は水名、河南穀城山より出づ。【二五】卓榮、史記の秦本紀に「韓、成阜、榮を獻す」とあつて、正確に捨地志を引いて「洛の汜水縣は、古しへの韓國、漢の成阜、榮は今の洛州鞏縣」とある。【二六】沈冥、揚子法言に蜀莊沈冥とあつて、その注に「侯芭曰く、殿君平、常に事に病む、沈冥して死す」とある。冥想に耽ること。【二七】爾爾、爾は事と通ず、漢書司馬遷傳に「爾事の中に在り」とあつて、爾師古の注に「爾事は猶然なり」とある。又楚辭の九歌に「爾既與爾事」とあつて、この注には「不肯なり」とある、ここでは賤官。蔣注に「退之の家は、洛陽に在り、かつて、陽山に講せられ、今は博士たり」とある。【二八】高特逸、手綱を引き緊めて馬を走らす。【二九】振物、物をととのへる。【三〇】軍懸、魯康侯の琴賦に練三飛懸、而懸神とある。【三一】曲、曲、周禮に「蕭氏以草を殺すことを掌る」と

あつて、蕭は草を除くこと。漢書の班固傳に「夷險死之」といへると同義。【三二】青絲、衣服の色をいふ。【三三】挂狹、蔣注に「書等の扇、挂狹以て飾と爲すを謂ふなり」とある。【三四】壽甲、二山の名、壽は壽星宮、その頃、劉勰が蜀中に於て虱を爲し、王師出でて征せしが故に云ふので、韓愈の本志は「早く虱を破つて兵威、甲冑二山を賞讃する様になりたい」といふ。【三五】側僞、漢書司馬相如傳に側僞僞倖とあつて、人なみ以上に僞れて居ること。【三六】洵、王榮の浮遊賦に「洵洵乎」とあつて、塵がしきこと。【三七】愚、事理明白なること。【三八】愚解、愚解の苦を解く。【三九】捨事、周禮に「上罪は捨事して極す」とあつて、首枷手枷を放めること。【四〇】募金、銅を求めて鑄造したもの、即ち鐘。【四一】抽獨、説文に「抽は獨鳥なり、置化して獨となり、獨化して獨となる」とある。ここでは蕭の義に用ふ。蕭の類をほごすと抽獨として重きない。【四二】鼓、荀子に鼓鼙千里とある。【四三】冒車、冒は網する。鼈は、鳥獸の細毛、香經に鳥獸細毛とある。果に備つて居る鳥を網で取らうとする。【四四】龍、天子車御の先頭に立てる旗。【四五】雲雷、大雷の樂と雷の樂。【四六】禁、蔣注に「蕭は鐘繁なり、周禮考工記に、鳥氏、鐘を爲つて上なし、これを蕭といふ。書法に蕭は天子の居、恐らくは非ならむ」とある。

【題義】蔣注に「公、召されて國子博士となり、張籍・張徹・孟郊と京師に會して、この詩あり。故に、郊に京遊歩方振、誦夢意尤恂等の語あり、徹に馬辭虎豹怒、丹出蛟龍恐の句あり、皆公の南還を敘するの意。而して、公、すなはち云ふ、念難須三勳追、悔易勿三輕腫」と、この義一なり」とある。すると、この聯句は、元和元年六月、江陵より召し還されて國子博士に任命した後の事で、張籍・張徹・孟郊の三人は、數ば前に見えて居た。

【詩意】別れて居ることは、何時が期限といふこともないのに、ゆくりなくも、此に相會したのは、まことに目出たいことと、心に染染と感ずる。都に居て、諸君に逢ふときは、左まででも無いが、病に

なると、兒女の如き情思を添へて、頻りに人が懐かしく、老いては、丈夫の勇氣を失ふので、まことに、女らしく、且つ意氣地の無いことである。しかし、劍を愛する様な雄心は、なほ未だ死せず、詩思は依然として獨り筆を抜いて居る。ここに、この會合に際し、愁の去ることは、矢の飛ぶよりも早く、喜の來ることは、泉の湧くが如く、話を篇と嗜み分けると、今まで知らなかつた様な珍聞が多く、そこで、懷抱を抒べて、むかし之を整理して居た不平は、跡も無い様になつた。つくづく思へば、從來自分の考が、まだ至らぬ處があつたので、すべて六つかしいと思へば、勉強して追求すべく、容易であると思つて、輕しく跡を踵む様なことがあつては成らぬ。近ごろ、南方から召還される途中、西望して三巴に吟すれば、蛟龍として、石山が聳えて居るし、楚地は、どこへ往つても、江湖ばかりで、波は、堆く限界を爲して居る。山には虎豹の患あるも、馬を馳せて其難を脱し、水には蛟龍の厄あるも、舟を行つて其禍を逃れた。江陵一帶の地たるや、水中には、狂鯨が時時暴れ廻り、狼は殊に種類多く、毒熱の氣に觸れると、衣類まで履くして油ぎり、蠻人の手細工に成つた器物は、粗末で役に立たず、日常の生活にも差し間へる位。竹の林に分ち入つては、昔を剝いて、その斑文を見つげ出し、古しへの娥皇女英の涙の跡をしのび、米を蕪の葉に裹んで、三角形を爲し、むかし屈原が死んだといふ汨羅の淵に投げ込んで、その亡魂を祭つたこともあるので、史上の遺跡さへも、すでに凄寥を極めて居る。自分は、かかる邊土に流竊されて、ひどく弱つて居た處が、料らざりき、一朝遠き都

より敕命を下されて召し還されむとは。もとより歸京すれば、新に恩寵を承けることが出来るので、覺えず起つて舞つた程の喜びであつた。そこで、幽靈妖魅の羣を離れて、鬼窟より脱し、やがて參朝して拜謁することが出来た。都の土を踏むと思へば、歩き振らさへも、自然と勇ましいが、過ぎにし讀書の夢の跡を尋ねれば、心、なほ惘々たるを免れない。流竊中は、詩を作つたり、字の稽古をして、聊か腕が上つたといつて、舊知に矜り、それから、知るべの方向から酒食を贈られた。祝賀の言葉は、清越に聞こえ、今までの病氣も、けろり直つて、痛まで跡も無いやうに成つた。夏の本陰は、厚意を以て我を庇護するが如く、宵の月は、抱擁することも出来さうに見える。愈よ夜になりて、心しづかに堂上に居ると、琴の調べは、寂寂として聞こえ、それから、女が織織たる手に茶の碗を捧げて來る。庭上には、螢が飛んで光を馳せ、階下に潜めるきりぎりすは、かすけき響を漉らして鳴いて居る。されば、詩老と稱すべき韓愈その人、獨り如何なる心であるか、江邊の風土病たる脚疾も、まだ全快せぬやうであるから、精精自愛して加餐することが第一である。わが家は洛陽で、瀋水・穀城山の邊に當り、古しへの成阜と輩との間に介在した處である。予は、歸休して跡を此間に寄せ、沈冥の中に餘生を送らむと欲し、峨冠を戴いて居ながら、生來の不肖を愧づるのみである。それから入朝する時には、手綱を引きしめて、馬を走らし、庶政を整へて、羣聽を悚動したいと思ふが、身、その官に在らざれば、おもふ存分の事も出来ず、ただ、世に願はれぬ裏面の弊害を洗滌するといふだけで、何人と

共に世の荒蕪を薙ぎ拂はうか。今や滿朝の公卿輩、袍色の青緑を披き、その乘馬には玉を以て銜や手綱を飾り、意氣揚揚、頗る自得して居るが、國家の仇敵は未だ滅びず、蜀中には劉關が亂を爲し、それを征伐する爲に、軍隊を派遣したといふが、わが願ふところは、これを平らげた後、皇威、功、二山の外にも及ぶやうにありたいといふのである。諸君の才は、誠に優れて居るが、時論方に洵溶として騒がしき折から、一層力を盡して貰ひたい。諸君の口にするところは、天晴格言、理義明白であつて、それが實際に施行されるれば、人民は倒懸の苦を解いて、首枷手枷を外された様な想を爲すであらう。中にも、張生は、學問の淵源を窮め、巍然たる高い山が、寒色、鮮に、多くの丘陵の上に抜き出でたるに比すべく、その堅きことは、鐘を撞くが如く、その微細に互ることは、繭の絲を繰り出す如くである。これに反して、予は、何物に比すべきかといへば、跛の態の様なもので、もとより勢よく踊ることも出来ず、そして、危い破目に陥ることは、塊然として、山の上から、ごろごろ石を轉ばしたるが如く、飄然として、巢の中の雛鳥が、人に取られむとするが如く、まことに頼りないことである。今しも、龍を畫いた大旗は、禁衛の軍營に翻り、雲韶の古樂は、宮中の雅樂部に於て練習せられ、世は漸く太平に向はむとし、まことに、目出たきことの極であるのに、如何なれば、君は、安然として眠つて居るか。今しも、入朝を促す鼓の聲は、洶洶として鳴り響いて居るから、早く入仕の用意をするが善からう。

【餘論】この聯句は、前のは異にして、一人で一聯もしくは數聯を作り、他人の句に對句を付けるといふ様な六つかしいことは爲ない。朱竹垞は「これは、仍ほ是れ各一聯或は數聯語を下して、多く新、句句醒眼、昔離今合、昔離今遠を道ひ、意は宏肆、詞は奇峭、略は生硬を嫌ふと雖も、然れども、聯句正に此を以て采を角す、正に是れ合作」といつて居る。

鬪雞聯句

鬪雞聯句

大雞昂然來。小雞竦而待。愈。大雞は昂然として來り、小雞は竦として待つ。  
 崢嶸顛盛氣。洗刷凝鮮彩。郊。崢嶸、盛氣顛つ、洗刷、鮮彩凝る。  
 高行若矜豪。側睨如同殆。愈。高行、豪を矜るが若く、側睨、殆きを伺ふが如し。  
 精光目相射。劍戟心獨在。郊。精光、目、相射り、劍戟、心、獨り在り。  
 既取冠爲胃。復以距爲斂。愈。すでに冠を取つて胃と爲し、復た距を以て斂と爲す。  
 天時得清寒。地利挾爽塏。愈。天時、清寒を得たり、地利、爽塏を挾む。  
 磔毛各噤痒。怒瘻爭硯磊。毛を磔して各、噤痒、瘻を怒つて争うて硯磊。



俄膺忽爾低、植立暫而改、郊  
俄に膺つて、忽爾として低く、植立、暫として改まる。  
 膺膊戰聲喧、續翻落羽讎、  
膺膊、戰聲、喧しく、續、紛として落羽讎す。  
 中休事未決、小挫勢益倍、愈  
中ごろ休んで事未だ決せず、小しく挫けて、勢益す倍す。  
 妬腸務生敵、賊性專相醜、  
妬腸、務めて敵を生じ、賊性、専ら相醜す。  
 裂血失鳴聲、啄股甚饑餒、郊  
血を裂いて鳴聲を失ひ、股を啄んで饑餒より甚し。  
 對起何急驚、隨旋誠巧給、  
對起して何ぞ急に驚く、隨つて旋つて誠に巧に給く。  
 毒手飽李陽、神植困朱亥、愈  
毒手、李陽に飽き、神植、朱亥に困めらる。  
 惻心我以仁、碎首爾何罪、  
心を惻ましめて、我以て仁なり、首を碎いて、爾何の罪  
 獨勝事有然、旁驚汗流洩、郊  
獨り勝つ、事然あり、旁驚いて、汗流れ洩る。看る。  
 知雄欣動顏、怯負愁看賄、  
雄を知つて欣んで顔を動かし、負るを怯れて愁へて賄を  
 爭觀雲墳道、助叫波翻海、愈  
争ひ觀て、雲、道に墳ち、助け叫んで、波、海に翻る。  
 事爪深難解、嗔晴時未怠、  
爪を事みて深く解け難く、晴を噴らして時に未だ怠らず。  
 一噴一醒然、再接再礪乃郊  
一たび噴いて一たび醒ること然り、再び接して再び礪く。

頭垂碎丹砂、翼掃拖錦綵、  
頭垂れて丹砂を碎き、翼掃けて錦綵を抱く。  
 連軒尙賈餘、清厲比歸凱、愈  
連軒、尙は餘るを買へといひ、清厲、歸凱に比す。  
 選俊感收毛、受恩慚始陔、  
俊を選んで毛を收むるを感じ、恩を受けて陔より始む  
 英心甘鬪死、義肉恥庖宰、  
英心、鬪死を甘んじ、義肉、庖宰を恥づ。るを想づ。  
 君看鬪雞篇、短韻有可採、郊  
君看よ鬪雞の篇、短韻、採るべきあらむ。

【字解】【一】昂然、意氣軒昂の貌。【二】雖爾待、身をすくめて恐れ入る。【三】睜睜、勢の壯なる貌。【四】順、かつ、禮記に「風氣順實攝休」とあつて、その注に「順、體んで順となす。攝、覆んで順となす。身の氣を盛にし、これをして開通したむること。風氣の物を休むるが如し」とある。【五】高行、塵揚にのそりそりと歩く。【六】勢、豪氣を誇る。【七】側、ふり向いて脱む。【八】何始、危きを窺ふ、弱者の隙間をつければ。【九】復以胆爲、胆は胆、石突、左傳昭公二十五年に「季孫の闘、季氏は其讎を介し、祁氏は之が金距を爲る」とあり、禮記の曲禮に「矛戟を進むるものは其鋒を前にす」とあつて、その注に「鋒は矛戟の柄尾なり、平底」とある。將注に「雞の闘ふを觀るに、亦た往往距を以て之に先んず、故に胆爲膽といふ、その用を取る、その形を取るに非ざるなり」とある。【十】得清寒、秋の末。【十一】爽塏、左傳昭公三年に「齊の景公、晏子の宅を更へむと欲す、曰く、請ふ、これを爽塏の者に更へむ」とあつて、杜預の注に「爽は明、塏は塏なり」とある。又文選西京賦に「處三甘泉之爽塏」とあつて、小高い岡。【十二】紫毛、毛を逆立てる。【十三】噴、噴は口を開けること、并は寒病、噴、これを并復といふ」とあり、皮日休の詩に「枕下聞、澎湃、肌上生、汗、復」といひ、韓偓の詩に「噴餘寒酒半醒」といつて居る。口をすくめて寒け立つ。【十四】蒸、蒸は【十五】噴、文選に「噴、蒸而相摩」とある、膨れ上る。【十六】肅、【十七】屏、【十八】扇、古詩に「扇屏離離初鳴」とあつて、羽ばたく。

こと。【八】傳 廣韻に「霜雪の白き狀」とある。【九】隨 鹽漬にする。【一〇】取 取は赤い、即ち血の色。【一一】巧 巧給  
 穀梁傳に「公子の給を逐む」とあり、列子に「予、むかし君を給く」とあつて、その注に「給は欺くなり」とある。【一二】李 李陽  
 晉書石勒傳に「はじめ、勅、李陽と鄰居す、歲ごとに、嘗て麻地を争ひ、遂に相毆辱す、ここに至りて、陽の臂を引いて曰く、孤、往  
 日卿の老拳に服き、卿、亦た孤の毒手に服く」とある。【一三】神 神注に「植、或は椎に作り、或は鐵に作る、或は云ふ、神植、  
 一に袖植に作り、史記の本文に於て合へりと爲す」とある。然れども、晉の風俗、もし神植あらば、必ず神植あらむの語あり。按するに、  
 上句毒手は、李陽本事中の語にして、神植の字は、朱亥の事中之になし、故に神を改めて植となし、以て本事に従はむと欲す。然れ  
 ども、又、屬對甚だ親切ならず、すなはち又多す劉伶の登拳を借り以て李陽に附し、祖納の神植を借り以て朱亥に附すれば、兩句皆  
 兩事を兼用すと爲して偏枯ならざるのみ」とあつて、一應尤もであるが、始らく神植となし、植は即ち椎として解釋することにす。  
 【一四】朱 朱亥。史記の信陵君傳に「魏の朱亥、侯嬴の爲に魏の公子に薦めらる。公子、行いて鄴に至るに及び、乃ち魏王の命を矯つて、  
 以て晉鄴に代らむとす。晉鄴、晉を合せて之を疑ふ。亥、四十斤の鐵椎を袖して、晉鄴を推殺す」とある。【一五】知 知地。勝つこと  
 を知る。老子に「雄を知り、雌を守る」とある。【一六】悉 悉看。購物を失はむことを恐れる。【一七】事 事爪。漢書劉通傳に「刃を公の  
 腹中に事む」とあり、周禮考工記に「首は、髮、戴の如く、泰山平原の人、物を樹立するを謂うて首としたので、轉意は蓋し全く此二字を用ひ  
 たるのである。なほ管子に「教を傳むこと十萬」といひ、又、善、以て術を事む」とあり」といつて居る。【一八】噴 噴注に「鬪、水を  
 用つて噴けば、神氣はじめて醒む」とある。【一九】再 再。接は接戰。【二〇】再 再。乃。謂は書經に「乃の鋒刃を噴く」とある。乃は  
 莊子に是其所三以乃」とあるに本づいたので、然ると讀むが、殆んど、意義が無い。【二一】擗 擗ける、飲める、文選陳琳檄に「頭を垂れ、  
 翼を擗めて、恚侍するところなし」とあつて、その注に「擗は飲むるなり」とある。【二二】連 連軒。打ちつづけて軒昂たること、勝ち、  
 翼を擗めて、恚侍するところなし」とあつて、その注に「擗は飲むるなり」とある。【二三】買 買。餘。左傳成公三年に「男を欲するものは、余の餘男を買へ」とあつて、杜預の注に「買は買なり、言ふは己の男、餘あり、  
 之を賣らむと欲す」とある。【二四】清 清風。りりしく、小氣味よき貌。【二五】歸 歸。凱旋に同じ。左傳僖公二十六年に「振旅、桓  
 ん

で以て晉に入る」とあつて、杜預注に「慢は柔むなり」とある。【二六】選 選。後感。毛。史記平原君傳に「趙、平原君をして楚に合従せ  
 しむ、毛遂といふものあり、前んで自ら平原君に贊し、本に毛遂と曾に従定む」とある。【二七】受 受。恩。始。韓。戰。國。策。に「郭隗、燕  
 の昭王に謂つて曰く、王、誠に士を致さむと欲すれば、先づ隗より始め、隗すら且つ事へらる、況んや隗より賢なるものをや」と  
 ある。【二八】義 義。義を守りて死んだものの肉。

【題義】これは、鬪雞を見たるに因つて、その事を詠じて聯句を試みたのである。鬪雞は、支那に古  
 くから有つたが、玄宗の時、大に行はれ、殊に賈昌といへる小兒の如きは、鬪雞の世話役が上手だと  
 いふので、非常に寵遇されたといふことである。無論、韓愈の頃にも、その餘習、なほ存して、世に  
 流行して居たものと見える。

【詩意】大雞は、意氣昂然然として、勢よく場に入り來り、小雞は、身をすくめて、おつかなびつく  
 りで、待つあるが如く、甚だ氣勢が揚がらない。その大雞は、輝耀たる盛氣に満ち、殊に洗ひ刷は  
 れて、羽毛の色彩も一きは鮮に見え、しつしづと鷹揚に歩く様は、さながら、その豪雄を矜るが如く、  
 あたりを睨め廻しては、弱者の隙を伺ふが如くである。互に見合はす目よりは、精光を放つて相射り、  
 心中には劍戟を藏して、殺機に満ちて居る。その肉冠は、冑の如く、獸爪は石突の様である。時しも  
 秋の頃で、清寒の氣、人の肌を侵し、そして、鬪雞の場所は、殊に地の利を探び、小高い岡を挾んで  
 設けられた。さて愈よ雞が兩方から其處に這入つて來ると、兩者ともに毛を逆立て、寒け立つて身

ぶるひをなし、力を込めると、痛が出来て塊まつて居る様に見え、俄に撃つて懸るかと思へば、忽ち又身を低くして摺り抜け、凝然として衝つ立つた儘、ちらりと見合つて、又改めて撃ちかかる。羽ばたきの音は、戦聲と共に喧しく、やがて、羽は繽紛として地上に落ち、霜雪の如く純白である。かくて、鬪が愈よ積くと、中ごろ、しばし休息して、勝敗未だ決せず、少しく挫けて、景氣が悪くなつた。かと思ふと、又盛りかへして、勢は益す壯になつた。相手の優勢の妬ましきにつけて、飽くまで、之に對して楯をつかひとし、本来、殘賊の性として、その敵を殺さぬ限りは、止めぬといふ決心である。その中に、肉を掻き裂かれて血が流れると、覺えず悲鳴を擧げる。そして、勝ちかかつた方は、その血を啄んで、飢えたものの食に於けるよりも甚しい様に見える。兎角する内に、又相對して起つたが、勝ちかかつた方が、急に驚いたのは、何事に因るか。今まで負けさうであつた方は、巧に敵を欺いて居たものと見え、随つて旋廻して、忽ち其勢を盛り返した。たとへば、石勒が飽くまで毒手を李陽に加へたるが如く、朱亥が鐵椎を揮つて、晉鄙を困めた様な工合、つまり、最後にならないと、本當の勝負は分らないが、何分にも慘酷であるから、苟くも仁心あるものは、自然心を憫むべく、負けて首を碎かれた雞にしても、何等の罪も無いのである。もとより、勝つといふのも、然るべき理由があつて、考へて見れば、驚くにも及ばないが、側に見て居ると、驚駭之餘、汗が流れて衣を汚す位。今しも、鬪雞には賭をするのが普通で、自分の雞の優勢なのを見ては、喜顔色に顯はれ、これと

反對に、負けかかると、心配さうな面つきをして、賭けた品物の方を眺めて居る。そして、見物の人人は、争つて此に集まること雲の如く、道も自然塞がる位であるし、かけ聲をして勢威を添へるときは、波濤が海を翻す如く、極めて騒がしい。雞は猶ほ戰をつづけ、戰爪を敵の體に衝き入ると、深くして抜け難く、眼睛を怒らして、少しも油断なく構へて居る。ある時は、水を噴きかけて、神氣はじめて醒め、それから再び接戦をさせると、爪を研いで、敵に肉薄する。やつと勝負が付いたかと思ふと、負けの方は地上に斃れ、頭を垂れた儘、肉冠は丹砂を碎きたるが如く、翼は散散に打盡がれて、一匹の彩段を曳いた様である。勝つた方は、相變らず、打續けて意氣軒昂、わが餘勇を買へといつた様な素振りをして、凜凜しく、還ましく、尤で凱旋の心持である。すべて、俊秀優絶の者を選ぶことは、平原君が毛遂の言を容れて、これを收用した如くなるを要し、恩を受けた爲に、奮激することは、郭隗が是非私から始めなさいといつて、燕の昭王に薦めて、その恩を受けたのを慙愧せしむる様に有りた。雞は、又英烈の心を以て、鬪つて死することを甘んじ、義の爲に死んだ其雞の肉は、料理人でも自ら心に恥ぢて、これを調理するに忍びない。ここに、鬪雞の篇を作つて、その始末を略記したが、聊か意を用ひた積りであるから、短くても、採るに足るものが有らうと、自慙ながら考へて居る。

【餘論】この聯句は、篇幅も丁度手頃で、十分洗練の餘裕の有るところから、極めて巧妙であつて、さながら一手に成つた様である。はじめに雞その物を出し、曲描細寫、ひとり其形を得たのみなら

す、兼ねて其神を得た處は、尤も面白い。愈よ鬪雞に入ると、相闘つて未だ相搏たざるより始め、中  
 休、小挫、對起、隨旋、鬪中皆節度あり、用筆變化、寫し得て飛動を極めて居る。側心我以仁の八句  
 は、酣戰後の歎息で、造語尤も奇、これを中間に挿んだ爲に、波瀾横生の妙がある。それから、一  
 度は引分となり、再び接戰させて、愈よ勝負が付き、勝者負者の雙方を寫し、選俊威收毛、以下  
 の六句を以て收結したのである。蔣之翹は「公と東野との聯句、詞意雄渾、その情態を極む、間ま  
 才を以て喻と爲す、兩つながら、皆傑作、眞に歐陽文忠の謂はゆる韓孟の文詞に於ける、兩雄力相  
 當るものなり」といひ、朱竹垞は「詠物小題、題外、一字を増さずして、豪快人を動かし、古今塔罕  
 なり、起一段、精神踴躍、讀者をして、即ち雞場に赴いて親ら角伎を観るが如くならしむ、陡爾醒  
 眼」といつて居る。

納涼聯句

納涼聯句

暹嘯取遙風。微微近秋朔。郊  
 金柔氣尙低。火老候愈濁。愈  
 照熙炎光流。竦竦高雲攬。愈

閃紅驚蚋虬。凝赤聳山嶽。  
 目林恐焚燒。耳井憶澆滷。  
 仰懼失交泰。非時結冰雹。  
 化鄧渴且多。奔河誠已怒。  
 喝道者誰子。叩商者何樂。  
 洗矣得滂沱。感然鳴鸞鶩。  
 嘉願苟未從。前心空緬邇。  
 清砌千廻坐。冷環再三握。  
 煩懷却星星。高意還卓卓。  
 龍沈劇煮鱗。牛喘甚焚角。  
 蟬煩鳴轉喝。鳥噪饑不啄。  
 晝蠅食案繁。宵蚋肌血渥。  
 單絺厭已褻。長菱倦還捉。

紅を閃かして、蚋虬に驚き、赤を凝らして、山嶽を聳かす。  
 林を以て焚燒せむを恐れ、井を耳いて澆滷たるを憶ふ。  
 仰いで懼る、交泰を失ひ、時に非ずして、冰雹を結ばむ。  
 鄧に化し、渴すること且つ多く、河に奔り、誠に已に怒し。  
 道に喝するものは誰が子ぞ、商を叩くものは何の樂ぞ。  
 洗として滂沱たるを得ば、感然として鸞鶩を鳴かさむ。  
 嘉願、苟くも未だ從はず、前心、空しく緬邇。  
 清砌、千廻坐し、冷環、再三握る。  
 煩懷却つて星星、高意還た卓卓。  
 龍は沈んで、鱗を煮るよりも劇しく、牛は喘いで角をし。  
 蟬は煩はしく鳴いて轉た喝し、鳥は噪いで饑えて啄まず。  
 晝蠅、食案繁く、宵蚋、肌血渥し。  
 單絺、厭うて已に褻く、長菱、倦んで還た捉る。

幸茲得佳朋。於此蔭華栢。  
 青炎文簾施。淡澱甘瓜濯。  
 大壁曠凝淨。古畫奇駁犖。  
 凄如狃寒門。皓若攢玉璞。  
 掃寬延鮮鷗。汲冷漬香穉。  
 篋實摘林珍。盤肴饋禽穀。  
 空堂喜淹留。貧饑羞齷齪。  
 殷勤相勸勉。左右加碧斲。  
 買勇發霜劂。爭前曜冰槩。  
 微然草根響。先被詩情覺。  
 感衰悲舊改。工異逞新貌。  
 誰言擯朋老。猶自將心學。  
 危簷不敢憑。朽机懼傾撲。

幸に茲に佳朋を得、此に華栢に蔭す。  
 青炎として、文簾施き、淡澱として、甘瓜濯ふ。  
 大壁曠うして凝淨、古畫奇にして駁犖。  
 凄として寒門に狃るが如く、皓として玉璞を攢るが若し。  
 寬を掃うて鮮鷗を延き、冷を汲んで香穉を漬す。  
 篋實、林珍を摘み、盤肴、禽穀を饋る。  
 空堂、淹留を喜び、貧饑、齷齪を羞づ。  
 殷勤相勸勉、左右、碧斲を加ふ。  
 勇を買うて霜劂を發し、前を争うて冰槩を曜かす。  
 微然として草根響き、先づ詩情に覺らる。  
 衰を感じて舊改を悲み、工を工にして新貌を逞うす。  
 誰か言ふ、朋に擯せられて老いたり、猶自ら心を將  
 危簷、敢て憑らず、朽机、傾撲を懼る。  
 「て學ぶ。」

青雲路難近。黃鶴足仍銳。  
 未能飲淵泉。立滯叫芳葯。  
 與子昔睽離。嗟余苦屯剝。  
 直道敗邪徑。拙謀傷巧詆。  
 炎胡度氛氲。熱石行拳碣。  
 瘠饑夏尤甚。瘡渴秋更數。  
 君顏不可覲。君手無由搦。  
 今來沐新恩。庶見返鴻朴。  
 儒庠恣游息。聖籍飽商推。  
 危行無低徊。正言免咍喔。  
 車馬獲同驅。酒醪欣共飲。  
 惟憂棄菅蒯。敢望侍帷幄。  
 此志且何如。希君爲追琢。愈

青雲、路、近づき難く、黃鶴、足、仍ほ鋭す。  
 未だ淵泉を飲む能はず、立滯して芳葯に叫ぶ。  
 子と昔睽離、嗟す子が苦だ屯剝なるを。  
 直道は邪徑に敗られ、拙謀は巧詆に傷らる。  
 炎胡、氛氲を度り、熱石、拳碣を行く。  
 瘠饑、夏、尤も甚しく、瘡渴、秋、更に數ばなり。  
 君の顔、覲るべからず、君の手、搦るに由なし。  
 今來つて新恩に沐す、庶はくは鴻朴に返るを見む。  
 儒庠、游息を恣にし、聖籍、商推に飽く。  
 危行、低徊なく、正言、咍喔を免る。  
 車馬、同じく驅るを獲、酒醪、共に飲ふことを欣ぶ。  
 惟憂ふ菅蒯を棄つるを、敢て望まむや帷幄に侍するを。  
 此の志、且つ何如、希はくは、君、爲に追琢せよ。

【字解】【一】**通船** 題は互に、かはるがはる。【二】**遠風** 遠くより吹き来る風、劉楨の大暑賦に披**襟**而長嘯、**雲**微風之萃思とある。【三】**秋朔** 陰曆七月朔日。【四】**金柔氣尚低** 金氣、即ち秋氣が、まだ柔かで、且つ高くない。つまり秋氣が十分でない。禮記の月令に「某日立秋、盛徳金に在り」と見ゆ、蔣注に「題、この句意を按ずるに、朔句は當に季夏に在るべし。蔣注に、七月に在りと云ふ、すなはち、秋朔すでに過ぎ、これ必ずしも微徴近と云はず、況んや、諸證を以て之を攷ふるに、又但だ夏の末、江陵を離れて京に赴き、某詩及び諸聯句あり、云云、故に七月はじめて東野と會して聯句ありと言はざるなり、故に詳に之を正す」とある。【五】**火老候意圖** 詩經に七月流火とあつて、毛傳に「火は大火なり」とあり、その疏に「火は大火心星なり、六月の昏を以て地の南方に加はり、秋に至つて、始めて下つて西に流る」とある。又左傳昭公三年に「譬へば火の如し、火、寒暑に中して乃ち退く」とあつて、杜預の注に「火は心星なり」とある。この句は、火星も次第に衰へ、氣候も愈々昏濁になり、夏も將に盡きむとして居るといふ意。【六】**炎光** 日光の透徹をいふ。【七】**閃紅雲動** 楚辭の情野に蒼龍動とあり、又文選上林賦に青龍動とあり、赤氣の聚まること山嶽の如しといふ意。【八】**目林** 目は見る。【九】**耳井** 耳は聞く。【一〇】**文選上林賦に遠雷實響とあつて、李善注に「遠雷は小水の聲なり」とある。【一一】失交泰** 陰陽兩氣の交渉が安泰でなくして變調を起すこと。【一二】**非時結** 氷雹、大業禮に「陽の氣を專にするを蔽となし、陰の氣を專にするを翳となす。盛陽の氣、雨水に在れば、温曖にして蔽となり、陰氣得まりて之を翳かして相入らざれば、搏つて翳となるなり」とある。【一三】**化節** 列子に「夸夫、日影を峒谷の際に逐ひ、湯して飲を得むと欲す、赴いて河渭に飲む、河渭足らず、將に北に走つて大澤に飲まむとす、未だ至らず、道に渴して死す、その杖を棄つ、尸の膏肉の浸すところ、化して鄧林となる」とある。【一四】**誠已** 誠は盡し。【一五】**鳴道者** 莊子の則陽に「鳴するものは、水を冷風に反す」とあり、帝王世紀に「武王、孟津より還り、周に及んで鳴人を見る。王、左より喚して、右より之を扇ぐ」とあり、杜市の詩に思賢道鳴黃梅雨とある。鳴は暑に傷らるること。【一六】**叩商** 列子に「師商、琴を彈す、春に當り、商柱を叩いて以て南呂を召べば、涼風忽ち至り、草木實を成す」とある。【一七】**洗矣** 洗は洒と通ず。史記范雎傳に「范雎の見ゆるを觀るもの、羣臣、酒然

として色を變じ容を易へざるなし」とある。【一八】**涉沔** 詩經に月離于畢、傳**涉沔**矣とある。【一九】**警靈** 風風、國語に「周の興るや、警靈岐山に鳴く」とある。元來、風風の風は驚、風は鳴、そして警靈は其聲、蔣注に「舊注に國語を引く、その説、すでに納涼の事と起えて相屬せず、或は云ふ、警靈は風の屬、涉沔を得ば感應運らむと。恐らくは亦た傳會ならむ。題、按ずるに、この題、上に涉沔として兩ふると云ふときは、その下、これに對するに風を以てすること疑なし。郭鐘生の述征記を考ふるに、長安の南に靈臺あり、高さ十仞、上に銅渾天儀あり、又樹風銅鳥あり、千里の風に過へば方ち動く。意ふに、公の指すところの警靈は、蓋し此のみ」とあつて、今之に従ふことにする。【二〇】**嘉願** 韓愈の他の詩に嘉願運中州とある。或は、この嘉を佳に作り、或は喜に作つてあるが、ともに字の訛である。【二一】**解題** 文選游岳の草婦賦に解題令長壽とある。【二二】**風星** 星は曜と通ず、一に曜曜に作つたのもある。劉夢得の詩に自產不**是**高陽侶、一夜星風騎馬回とある。【二三】**龍沈劇** 蘇軾、蔣注に「左氏龍を龍にする事を用ふ」とある。【二四】**牛喘甚焚角** 世説に「漢書曰く、臣、吳牛の月を見て喘ぐを見る」とあり、史記田單列傳に「城中を収めて千餘牛を得たり、兵刃を其角に束れ、而して、脂を灌いで、葦を尾に束れ、その燭を燒く。牛尾熱し、怒つて燕軍に奔り、觸るところ盡く死す」とある。【二五】**蟬鳴鳴鳴** 文選子虛賦に聲流鳴とあつて、郭璞は「悲鳴を言ふなり」といつて居る。又張正見の秋蟬鳴柳の詩に長輪流鳴靈とある。【二六】**車輪既已** 孔安國の尚書傳に「寫の精なるものを輪といふ」とある。車輪は、寫市の單衣。又易に終朝三たび之を續く」とあつて、續は紐とく。【二七】**長靈** 靈は關關、方言に「關よりして東、これを靈といひ、關よりして西、これを關といふ」とある。靈、文筆と通じ、文選に屏**靈**とある。【二八】**他遺捉** 捉は把る、手にする。【二九】**非柳** 蔣注に「柳は枝、寬段七要、華構煥而相照」とある。柳はたるき。【三〇】**淡澹** 甘瓜澹、文選枚乘の七發に淡澹手足とあつて、李善注に「猶ほ洗滌のことときなり」とある。又魏の文帝が吳質に與ふる書に「甘瓜を清泉に浮ぶ」とある。【三一】**駭卒** 蔣注に「駭は木と獸の名、馬の如くして自身黒尾、虎豹を食ふ。駭卒は、その奇怪の狀超絶、かくの如きを言ふ」とある。【三二】**虛如狐寒門** 文選甘泉賦に登轅轅而狐三天門とあつて、蘇林は「狐は至るなり」といつて居る。又淮南子に「北方北極の山は寒門」とあり、楚辭の遠遊に遠遊乎寒門とあつて、王逸の注に「寒門は北極の門なり」とある。蔣注に「但し史記の武帝紀に即ちゆる寒門は谷口なり、顔注、今の涪谷は甘泉を

去ること八十里、盛夏燃熱たりと。その説、正に納涼の意と合す、而して、朱子云ふ、谷日は既に超絶に非ず、又未だ極寒の地と爲さず、當に前説に従ふべし、今、しばらく之を録して以て考者を俟つ」とある。【四】玉環、環は玉の未だ琢磨せざるもの、但し、玉の輪にも用ふ。【五】掃蕩、ひろい處を掃除する。【六】鮮明、鮮は麗風、しかし単に風の輪にも用ふ、涼しい風。【七】汲冷冷水を汲む。【八】沈香、楚辭の招魂に稻糝糝とあつて、精良なる米、それを磨いで之を炊ぐ用意をする。【九】簾貫、簾中の果實。【十】林珍、林中の珍果。【十一】金殿、殿は前にも見ゆ、即ち苑。【十二】鹿懸、用意の容易に懸はざること。【十三】碧階、碧は磨くこと、漢書に碧階砥礪とある、磨に在つて色色世話をする。【十四】冰室、風俗題に「矛長き丈八なるもの、之を氷といふ」とある。【十五】草根、杜甫の詩に草根吟不埋とある。【十六】暮改、むかしの顔色の改まつて衰ふること。【十七】簾貫、一に免に作る、意義同じ。【十八】朽机、机は几に同じ、易に「渙として其机に奔る」とあり、左傳昭公五年に「机を設けて倚らす」とある。【十九】傾覆、傾いて顛倒し伏つて撲たれる。【二十】銀、玉篇に「銀は足を鎮るなり」とある。【二十一】立帶、立ちすくむ。【二十二】芳節、楚辭の九歌に辛夷積兮芳節とあつて、王逸注に「節は白芷なり」とある。【二十三】忠朝、忠朝命書がつて、ひといに通ふ。【二十四】邪徑、荀悅の漢成帝紀に「童謡に曰く、邪徑敗三良田、諷巧害三忠賢」とある。【二十五】拳路、石の聲、又石多き貌。【二十六】磨齒、周禮に「春時、磨首の疾あり」と見え、說文に「磨齒は頭痛なり」とあり、漢書司馬相如傳に「磨齒の疾あり」と記し、後漢書李通傳に「素より消疾あり」とあつて、即ち磨と同じ。すると、磨は、その爲に喉の乾くことであらう。【二十七】無由、漢書班固の敘傳に「無由磨とあつて、顧師古の注に「磨は接なり」とある、即ち磨る、磨る。【二十八】沐新屋、元和元年六月、召し還されて、國子博士となりし、と。【二十九】鴻朴、鴻は大、大朴といふに同じ、朴は朴素。純潔にして汚穢なきこと、ここでは朝廷の清班といふ意と見える。【三十】儒庠、學校、即ち國子學。【三十一】游息、禮記の學記に息游游とある。【三十二】聖壽、聖人の壽、即ち六經の文を指す。【三十三】商權、文選吳郡賦に商權高俗とあつて、李善注に「權は粗略なり、その粗略を商度するを言ふ」とある。【三十四】危行、高峻なる行。【三十五】

低徊、楚辭の九歌に心低徊兮願快とあつて、即願する、愚圖愚圖する。【六】正旨、道理に當る旨意。【六】呻吟、楚辭の卜居に「將嘯呻吟以事三婦人乎」とあつて、王逸注に「強ひて笑嘆するなり」とある、ここでは嘲笑。【七】共歎、文選風賦に「嗚嗚歌嘆」とあつて、歌は歎に同じ。又說文に「歎は嘆なり」とあり、廣韻に「口もて嘆ふなり」とある、ここでは、歎むこと。【八】棄膏、前にも見ゆ。左傳成公九年に「蘇麻ありと雖も、膏煎を棄つる無かれ」とある。【九】侍惟、漢書高帝紀に「侍惟帷帳の中に匿らす」とある。天子の謀議に參與する。【十】遺珠、詩經に遺珠其衣」とある。

【題義】蔣注に「公、元和元年六月、江陵掾より召されて入り、國子博士と爲り、東野と京師に會して聯句す。この詩、久誦せられ、新に召されて還り、學官と爲るの本末を敘すること、甚だ詳なり」とある。それから、聯句を見ると、未だ秋に成らぬ内で、矢張、六月であるから、この月召し還されると、直に途に上り、月の内に都に到着したといふことが分かる。

【詩意】君と我と交る嘘いて、遠く吹き來る風を迎へて涼を納れ、いささか心持が悪いが、その風は、かすかながらも、秋の初に近づいた様な気分がする。もとより、金氣は、柔にして、且つ低く、まだ十分ではないが、大火の心星は、大分低くなつて、夏といふ季節も、愈よ末に成つたことが分かる。しかし、日の光は、照照として透徹し、天上の高い處に見ゆる雲も、なほ奇峰の勢を爲した様な安排。電光の閃くは、蝸虻として龍の行くが如く、赤氣の凝るは山嶽の如く、まだ暑熱の甚しいことを免れず、林を見ては焚き拂はれはせぬかと心に恐れ、井の邊で水を使ふ聲を聞いては、流水の潺湲たるを弄したい様な氣がする。今は、季候の移り目、まことに大事な時であるので、陰陽の交泰を

失ひ、時ならぬに冠を降らす様な變事があつては成らぬと、天を仰いで恐懼して居る。その暑さの劇しいことは、むかし夸父が斃れて、その遺骸が鄧林に化したといふ様であつて、喉が乾いて堪えぬ處から、黄河に走り着かうとしても、それは、凡夫には六つかしいことである。道を歩いて暑に中てられ、弱り込んで居るのは、何人であるか。商絃を叩くのは、涼風を招く爲であらうが、その奏するところは何の樂か。今しも、行人が皆暑に病む程だから、古しへの師商の如く、入神の技を以て、秋涼を招き寄せたいものである。もし幸に、洗然として、一雨滂沱、俄に降つて來たならば、その後、遽に風が涼しくなつて、物見臺の上なる鳳凰も、之に感じて鳴くであらう。さはれ、この願は、まことに未だ遂げられず、そして、往日を追懐する念慮は、容易に盡きない。そこで、涼を求めて階砌の間を廻ること、千度にも及んで、然る後、はじめて座に就き、又玉環の冷かなるを愛で、せめてもの心遣りとして、これを握ること再三に及んだ。煩悩に堪へぬ我が思は、醒醒として、却つて明白であるし、高遠なる考は、卓卓として、一寸出て來さうにもない。龍の靈なるも、熱に遇へば、干ばしになつて、小魚の煮らるるよりも痛ましく、牛の喘ぐのは、その角を焚かるるよりも苦しげである。蟬も、惱んだ揚句に悲鳴し、鳥は、噪いで餌を啄まず、晝は、食物を載せた几案の間に蠅がうるさく聚まり、夜は、蚊が出て、肌の血を吸ふこと、甚しい。葛布の單衣も、今では堪へられなくなつて、脱ぎ棄てむとし、長い團扇は、一たび投げ遣つたのを又しても取り上げるといふ始末。幸なるかな、ここに良朋の

來り訪ふものありしにより、綺麗な襦の下の物かげに座を占め、そこには、青燐として、いかにも見ごとなる竹簾を敷き、水にひたした瓜を漉つて、これを剖かうとして居る。四邊の壁は、小ざつぱりとして、その上なる古畫は、世にも珍らしく、且つ奇怪である。そこに坐すると、愾然として、北極に在りと聞く寒門の山に至りしが如く、皚皚として、玉を引き連ねた様で、覺えず、ひいやりとする。そこで、廣い座敷を掃除して、涼しい風を入れ、冷水を汲み、精良なる米を磨がせて、飯を炊ぐ用意を致させ、箱には林中の珍果を摘んで入れ、皿には卵を料理して載せた。空室の中で、心のどかに淹留するは、喜ぶべきも、詰まらぬ馳走にも手の廻り兼ねるのは、聊か羞づべきである。仍つて、懇に相勸めて飲食を爲し、そして、左右の者は、色色と世話を焼いた。さういふ風に涼しい處で、物を食つたので、勇氣も十分にいで、さながら發硯の刀の如く、又たとへば先を争つて氷なす矛を抜き連ねたやうである。かすかに、草の根に風の音がするので、詩情は早くも之を覺つた位、やがて、自ら顧みて、わが形容、甚だ衰へざりし昔の、儼だに無くなつたことを悲み、又よくも、かう變つたものだと思はれる程も、新しい姿になつたことを甚だ不思議に考へた。朋友に擯斥されて、年愈よ老いたりと云ふのではなく、なほ自ら此心を主として、種種會得したことが有つた。家に居るにしても、危簷にも憑らぬが善く、朽ちた牀几は、動もすれば、顛倒して、體を撲つことがあると同じく、世路を度り、官途に立つ上に於ても、すべて危険の處には、一切近よらないのが善い。まして、青雲の棚び



く天上は、路遠くして、容易に近づき難く、雲井を度る黄鶴と雖も、足が絆されて、自由に飛べぬ様な場合は、いくらもある。されば、淵泉に就いて飲むこと能はざる間に、空しく立ちすくんで、芳菊が欲しいと言つて叫んだ處で、仕方がない。君と前ごろ遠く相離れた時、わが運命は、ひどく困んで居た。それといふのも、身に直道を行ふに因つて、邪徑に向ふ人から邪魔扱ひをされ、拙謀は、巧なる讒言に因つて傷られたので、つまり、自身は愚直の爲に罪を得て、遂に陽山に遷謫された次第。そこで、炎熱の下にはの暗く成つて居る洞庭湖を度り、又あつくなつた石のごつごつして居る組道の險しい處を踏んで、その地に到着した。陽山は、もとより瘴熱の僻地であつて、胃腸を害することは、夏に於て尤も甚しく、おこりを煩つて、渴に苦むことは、秋に入つても、數は見るところで、その地に居れば、乾度かういふ風土病に罹る。もとより、天涯遠く隔絶し、君の顔も見ることが出来ず、君の手も執るに由なく、ひとり孤獨を嘆息して居た。しかし、幸にも、今次愈よ召し還されて長安に來り、新に天恩に浴することとなり、前日の罪は、全く拭ひ去られて、どうやら、汚れなき昔の大朴に返ることも出来さうである。取り敢へず、國子學の教官となつて、心のどかに游息し、常に聖人の遺せる六經に就いて、その大意を考へ、それを弟子どもに教へるのが、わが職務である。ここに居れば、高尚なる行爲も、誰に憚るとしもなく、正言も他人に嘲笑されることは無くて済む。間暇の時には、一緒に車馬を驅つて遊び廻ることも出来るし、酒も共に飲んで、のんきに楽しむことが出来る。唯だ昔

は、もとより麻絲に及ばぬといふので、棄てられはせぬかと、唯だ其事のみを恐れるので、天子の帷幄に侍して、庶政の御相談に興るといふ様なことは、敢て望みもしない。わが刻下考へて居るところは、上述の如くであるが、琢磨を加へるやうに、幸に教示あらむことを君に希望する次第である。

【餘論】この聯句は、一聯乃至數聯づつ、交互に作つたのであるから、まとも方方も、自然善い。先づ熱を説かむと欲して、却つて嘯いて風を取るより筆を起したのは、極めて面白い。熙熙炎光流より長箋倦還捉に至る二十八句は、熱を形容し、景あり、節奏ありと稱すべきである。その下暑を驅るの一段中、碧鷲の字を借用したのは、甚だ新しく、これあるが爲に、霜碯冰梁等の字面が出て來るので、この邊は、流石に匠心の極めて細なるを覺える。微然草根響の二句は、故らに風の字を露はさず、はるかに首句に應じて居る。與子昔際離以下は、陽山遷謫の事より、今次召還されしことに及んだので、その深衷の苦を察することが出来る。

秋雨聯句

秋雨聯句

萬木聲號呼、百川氣交會、郊 萬木、聲、號呼し、百川、氣、交會す。

庭翻樹離合、牖變景明藹、愈 庭は翻つて樹離合し、牖は變じて景明藹たり。

聯句 秋雨聯句

溼瀉殊未終。飛浮亦云泰。郊  
 溼瀉、殊に未だ終らず、飛浮、亦た云に泰し。  
 牽懷到空山。屬聽邇驚瀾。愈  
 懷を牽いて、空山に到る、聽を屬して、驚瀾に通づく。  
 簷垂白練直。渠漲清湘大。郊  
 簷は白練を垂れて直く、渠は清湘を漲らして大なり。  
 甘津澤祥禾。伏潤肥荒艾。愈  
 甘津、祥禾を澤し、伏潤、荒艾を肥やす。  
 主人吟有歡。客子歌無奈。郊  
 主人、吟じて歡ぶあり、客子、歌うて奈むともするなし。  
 侵陽日沈玄。剝節風搜兌。愈  
 陽を侵して、日、玄に沈み、節を剝いで、風、兌より搜る。  
 塊北遊峽喧。鷓鴣臥江汰。郊  
 塊北、峽の喧しきに遊び、鷓鴣、江の汰に臥す。  
 微颿來枕前。高灑自天外。愈  
 微に颿つて枕前より來り、高く灑いで天外よりす。  
 蜚穴何迫迤。蟬枝掃鳴噓。郊  
 蜚穴、何ぞ迫迤せる、蟬枝、鳴噓を掃ふ。  
 援菊茂新芳。逕蘭銷晚鵲。愈  
 援菊、新芳茂く、逕蘭、晚鵲を銷す。  
 地鏡時昏曉。池星競漂沛。郊  
 地鏡、時に昏曉、池星、競うて漂沛。  
 謹收尋一聲。灌注咽羣籟。愈  
 謹收、一聲を尋ね、灌注、羣籟に咽ぶ。  
 儒宮煙火濕。市舍煎熬怵。郊  
 儒宮、煙火濕ひ、市舍、煎熬怵る。

臥冷空避門。衣寒屢循帶。愈  
 臥冷にして空しく門を避け、衣寒くして屢ば帶を循づ。  
 水怒已倒流。陰繁恐凝害。郊  
 水怒つて已に倒に流れ、陰繁くして恐くは害を凝さむ。  
 憂魚思舟楫。感禹勤吠滄。愈  
 魚を憂へて、舟楫を思ひ、禹の吠滄を勤むるを感ず。  
 懷襄信可畏。疏決須有賴。郊  
 懷襄、信に畏るべし、疏決、須らく賴るあるべし。  
 斂命或馮著。卜晴將問蔡。愈  
 命を斂して、或は著に馮り、晴を卜して、將に蔡に問  
 庭商忽驚舞。墟祭亦親酌。郊  
 庭商、忽ち舞ふに驚き、墟祭、亦た親ら酌る。  
 氣醜稍疏映。掌亂還擁蒼。愈  
 氣醜くして稍や疏映、掌亂れて還た擁蒼。はむとす。  
 陰旌時膠流。帝鼓鎮旬磕。愈  
 陰旌、時に膠流、帝鼓、鎮へに旬磕たり。  
 棗園落青瓊。瓜畦爛文具。愈  
 棗園、青瓊を落し、瓜畦、文具を爛かす。  
 貧薪不燭竈。富粟空填厝。愈  
 貧薪、竈を燭らさず、富粟、空しく填厝。  
 秦俗動言利。魯儒欲何丐。愈  
 秦俗、動もすれば利を言ふ、魯儒、何をか丐はむと欲する。  
 深路倒羸驂。弱途擁行軼。愈  
 深路、羸驂を倒し、弱途、行軼を擁す。  
 毛羽皆遭凍。離菴不態翻。愈  
 毛羽、皆凍に遭ひ、離菴して、翻ける態はず。

翻浪洗虚空。傾濤敗藏蓋。邓

翻浪、虚空を洗ひ、傾濤、藏蓋を敗る。

吾人猶在陳。僮僕誠自鄙。

吾人、猶ほ陳に在るがごとし、僮僕、誠に鄙よりす。

因思征蜀士。未免濕戎旆。

因つて思ふ、蜀を征するの士、未だ戎旆を濕すを免れず。

安得發商鷲。廓然吹宿霧。

安んぞ商鷲を發し、廓然として宿霧を吹くを得む。

白日懸大野。幽泥化輕塹。

白日、大野に懸り、幽泥、輕塹に化せよ。

戰場暫一乾。賊肉行可膾。愈

戰場暫く一たび乾かば、賊肉行く膾にすべし。

搜心思有效。抽策期稱最。

心を搜つて效あるを思ひ、策を抽いて最と稱するを期す。

豈惟慮收穫。亦以救顛沛。郊

豈に惟だ收穫を慮るのみならむや、亦以て顛沛を救はむ。

禽情初嘯。礎色微收霈。

禽情、初めて嘯を嘯き、礎色、微に霈を收む。「らむや。

庶幾諧我願。遂止無已太。愈

庶幾はくは、我が願を諧へて、遂に止めて已太しきなか

【字解】【一】交會 文選蜀都賦に「交會」とある。【二】庭前 庭上の模樣が變はる。【三】屬望 意からの眺めが變化する。【四】明瞭 雨は晴き貌、明瞭に同じ。【五】激瀉 說文に「小水、大水に入るを激といふ」とあり、詩經に「激瀉」とある。【六】飛浮 文選顧延年の製東京口の詩に「千翼泛飛浮」とある。但し、ここでは、水勢をいふ。【七】雲霧 雲霧に花し。

【八】風塵 塵は深くすること、ちつと間き塵まして居る。【九】驚濤 字說に「濤は急激なり」とある。【一〇】甘津 甘雨のうる

ほひ。【一】許禾 よく出抽つた稻。【二】伏潤 地に染み入つた潤澤。【三】茂艾 艾はよき、雜草。【四】伏陽 陽は南

方。【五】日沈支 太陽が黑雲の中に沈む。【六】糾節 規律あるものを糾き取る、不時に變化すること。【七】抱兒 兒は穴、

老子に「其兒を塞ぎ、其門を閉づ」とある。【八】埃北 將注に「按するに埃北に二編あり、賈誼の論賦に埃北無垠、應劭曰く、

其氣埃北、齊限あるに非ざるなり。郭璞の方言注に曰く、埃北は測られざるを云ふなり。左思の吳都賦、地勢埃北、劉楨林曰く、高

下不平の貌なり」とある。このは前者で、不測の義であらう。【九】驚濤 盧思道の納涼賦に動三驚濤於翠嶺とあつて、注に「高

風なり」とある。【一〇】江沈 沈は水沈、沈たつ。【一一】追逆 曉則に「急なり」とある。【一二】掃鳴 詩經に「掃鳴」とあ

つて、毛傳に「塵散なり」とある、叫ぶ。【一三】煎熟 煎たりいつたりする、食物を料理すること。【一四】伏 文選西京賦に心

侈體伏とあつて、伏は寄る。【一五】積帶 漢書李陵傳に「數敗自其刀環を積づ」とあり、又「自ら其髪を積づ」とあつて、顏師古

の注に「積とは、摩順するを謂ふなり」とある。梁の范曄の妻の詩に「積帶易緩愁難却、心之憂矣臣銷練」とある。帯を掛ける。

【一六】憂魚 魚と爲らむことを憂ふ。左傳昭公元年に「禹微かつせば、吾、其れ魚たらむか」とある。【一七】動吹 書經に「禹、

吹治を濬くし、川に距らしむ」とあつて、孔安國の傳に「一畝の間、廣さ尺、深さ尺なるを吹といひ、百里の間、廣さ二尋、深さ二

仞なるを濬といふ」とある。【一八】懷葉 書經に「蕩蕩として、山を懷れ、波に爽る」とあつて、孔安國の傳に「懷は包めるなり、

葉は上るなり」とある。【一九】疏決 水路を疏導して之を決注せしめる。この二字は、孟子に見えて居る。【二〇】筮命 これか

ら先の成り行き。【二一】憑書 書はめとき、本と草の名、今は筮竹といふ。【二二】將問 蔡は大龜、もと蔡の地より出でしが故

に名づく、即ち龜卜。【二三】庭商 鳥の名、家語に「齊に一足の鳥あり、飛んで殿前に下り、翅を舒べて跳る。孔子曰く、これは商

羊と名づく、むかし、兒童その一足を屬して誘ふより、曰く、天將大雨、商羊鼓舞、と。今齊に之あり、將に水災あらむとす」とあ

り、又張翥の雜詩に、商羊舞野庭とある。【二四】堆紫 周禮に「四に曰く紫祭、紫饋を爲り、幣を用ひて以て巫舞を祈る」とあ

る。【二五】秋雨 聯一句

聯句 秋雨 聯一句

聯句 秋雨 聯一句

聯句 秋雨 聯一句

り、左傳昭公元年に「山川の時は、水草の災、ここに于てか之を強る」とあり、三禮儀宗に「霖は、止雨の際、毎に城門に閉す、故に始祭七を水雩といふ」とある。【三】氣順、氣が薄くなる。【四】霽、雨霽に「天、氣下つて、地、塵ぜざるを霽といふ」とあつて、郭璞は「言ふは霽味なり」といつて居る。又詩經に「言令辭令とあつて、毛傳に「言與る貌」とある。【五】陰旋、雷氣、旋旋の如きを謂ふ。【六】摛流、漢書揚雄傳の反離聲に望見摛以摛流とあつて、顏師古の注に「摛流は猶ほ周流のごときなり」とある。【七】帝鼓、雷をいふ。【八】句讀、文選に句讀明謂とある。【九】薄青瑤、蔣注に「東、未だ熟せずして落つ、故に色青し、瑤は珠の圓ならざるもの」とある。【十】史記に「天子、使者を遣して、邪國の倉府を虚しうせしむ」とあり、漢書天文志に「胃を天倉となし、その南の衆星を倉府となす」とあつて、如淳の注に「芻蕘積んで府を爲すなり」とある。【十一】何可、巧は乞、句に同じ、求める。【十二】行歌、楚辭離騷に齊玉歌而鼓鐘とあつて、王逸注に「歌は轉なり」とあり、博雅に「輪なり」とある。【十三】隱從、古樂府に竹竿何爾爾、魚尾何離離とあつて、はれ上つて落ち付いて居らぬこと。【十四】關、飛ぶ聲、ここでは開ける。【十五】藏蓋、遠處して居る物。【十六】在陳、孔子が陳蔡の野に在つて糧を絶ちしことないふ。【十七】自舒、左傳襄公二十九年に「季札、周の樂を觀る。節より以下は讀るなし」とあつて、杜預注に「その微なるを以てなり」とある。この二句は、吾人は、猶ほ超塵の境界の如く、言ふに足るものなしといふ義。【十八】征蜀、時に、劉關、張飛を征せしが、未だ首を授けざるをいふ。【十九】戎旆、旆は大旗。【二十】商飈、秋風。【二十一】宿露、いつまでも散ぜざる露。【二十二】經風、文選四節賦に「吹三决風之混濁」とある。輕塵に同じ。【二十三】搜心、いるいるに考へる。【二十四】抽策、策略を抜き出す。【二十五】稱最、漢書音義に「功の上なるを最といひ、下なるを最といふ」とある。【二十六】噴衝、問題を呼んで鳴く、その喜ぶをいふ。【二十七】變色、散收節、淮南子に「山雲潤し、柱礎潤ふ」とある。礎は柱を負ふところの石、霽は濕氣。【二十八】無已太、詩經に無已大慶とあつて、毛傳に「已は甚しきなり」とある。

【題義】蔣注に「詩を按ずるに、云ふ、儒宮煙火濕と。これ、公、學官となつて、京師に在る時なり、

又云ふ、因思征蜀士と。蓋し、憲宗元和の初、高崇文に命じて劉闢を討すが故なり」とある。韓愈が江陵から召し還されて、著京したのは、前にも云へる通り、六月の内であるし、劉闢の滅亡したのは九月で、後に出て来る征蜀聯句は、その後につつたのであるから、この聯句は、同年七月より九月までの間で、授菊茂新芳の句より考ふれば、すでに九月に入つたのでは無いかと推測される。

【詩意】時しも、秋、連日風雨が甚しいから、あらゆる木木は、聲を發して號呼するが如く、百川の水氣は、互に交會して一緒になり、滿目濛濛として、深く立ちこめて居る。庭上の景色は、樹影の離合するに因つて移り行き、窓外の風物は、天色の明暗に随つて變化する。水の注ぐことは、殊に甚しくして、何時終るとも思はれず、勢凄まじく、物を飛ばして浮ばすことも、洵に甚しい。江湖の大水に塔へかねて、難を避けむが爲に、空山の中にも逃げ込んだ善からうとさへ考へる位、耳を澄ませば、早潮の響が間近く聞こえる。檐より落つる玉水は、白絹を真直に垂れた機であるし、溝渠は、一ばいに水が漲つて、湘水の浩渺たるを想ひ起さしめる。有り難い御しめりが、生長した稻を霜し、地に浸み込んだ濕氣が、枯れかかつた蓬を肥やすは、先づ善いとして、主人は、吟嘯して、しきりに喜んで居るが、座客は、その變の行く末甚しからむことを憂へて、どうにも仕方がないと云つて歌つて居る。陰溼の氣は南方をも侵して、太陽は、黒い晦雲の中に沈み、不時に、風の孔穴を探つて吹き入る。風景の變化測られざるは、峽中に遊んで、風水の聲喧しきを聞くが如く、颺颺

たる天つ風の吹き過ぐる時は、江上に臥して、水の波立つを見て居る様な趣がある。その内に、風は微に飄つて、枕前にさへ吹き來り、雨は高く瀟いで、天外から落ちて來る。きりぎりすの穴には、見る間に水が衝き入り、蟬の留まつて居た枝にも、今は何等の聲だに聞かず、欄干近く植ゑられた菊は、花が新に咲き出たが、徑邊の關は、すでに衰へて、香氣も消えて仕舞つた。地上の鏡たる池の水は、朝夕ほのかに見えが、夜になると、晴れ間ごとに、星が其中に映つて漂うて居る。こんな様に少しは晴れることもあるが、一聲叫ぶと思ふ程もあらず、雨はさながら灌注するが如く、その音が餘りひどいので、羣鴉爲に咽ぶばかり、自分は、國子學の官舎に居るが、煙火溼うて、炊事さへ意の如くならず、但し、市店では相變らず、盛に煮たきをして居る。それで、寝て居ると、どうも冷たくて堪まらぬ處から、成るべく入口を避け、衣は寒きが故に、數ば帯を撫でて締め直すことがある。兎角する内に、水は愈よ増し、その勢甚だ怒つて、時に逆流せむとし、陰雲愈よ繁くして、殘害を閉ざして居るかと思はれる位。この儘に居て、魚となつては大變だといふので、舟楫を用意して逃げ出さうかと思ひ、それにつけても、むかし、禹が溝渠を疏通する爲に、頻りに骨を折つたといふ其勤勞を感ずる。その水の山を懷ね陸に上らむとするは、まことに畏るべく、開鑿して之を切り落し、はじめて安心することが出來る。今後、どうなるかと占を爲さむとして、筮竹を取り、又いつ晴れるかと卜をする爲に、龜甲を灼かうと思つた。時しも、商羊と云へる一足の鳥が飛舞したから、晴れるとこ

ろか、まだ大雨が遣つて來るに相違ないと思はれ、城門に於て、止雨の祭を爲すならば、自分も出かけて往つて、酒を供へやうと思つた。濃氣が薄くなつて、どうやら透いて見える様なこともあるが、雲の脚は愈よ亂れて、又塊まつて聚まると云ふ工合。旗なす雲は、時に周流し、雷はをどろどろしく鳴り轟いて居る。そこで、種種の耕作物も、大抵腐つて仕舞ひ、棗畑には、玉の如き青い實が散らばつて居るし、畦の瓜は、うんで爛れて、文具の如く見える。貧者の薪は、濕つて居る竈の下で、碌碌燃えもせず、富人の穀物は、刈り入れたまま春くことが出來ずして、藁倉に一ぱい積み放してある。秦地の風俗として、動もすれば、利益の事のみ云ふが、連日の雨では、仕事も出來ず、魯儒は、もとより、食物に乏しく、何を求めむとするか。ぬかるみの泥の路には、瘦せ馬が倒れ易く、堅牢でない途には、車の輪が動かすに居る。禽鳥の毛羽は、皆凍に遭へるが如く、逆毛立つて、翔けることも出來ず。折から、一しきり降り來る雨は、浪を翻して、虚空を洗ふが如く、崩れかかる大濤は、肝心の掩ひ物をも打敗る程である。われ等、窮儒は、孔子が陳蔡の野に在つて糧を絶ちしが如く、僮僕などは、特に言ふに足らず、その困苦は、又一しほである。それにつけても、思ひ出さるるのは、蜀地の征伐に出かけて居る兵士どもで、軍門の大旆も、定めて雨に濡れて居るであらう。どうか、秋風を起して、からりと宿駕を吹き拂ひ、杲杲たる白日が大野に懸り、汚い泥も、輕塵に化する機にありたいものである。かくて、戰場の地が暫くでも乾いたならば、長驅して軍を進め、一舉して賊を討ち、其

肉を膾にする事も出来やう。心を搜つて、國家の爲に報效を爲さむとし、奇策を抜き出して、天晴、上功と稱せられむことを期して居る。かくの如くなれば、米の取れるか如何かといふことは、心配するにも及ばず、人民の顛沛して居るのを救済することも出来、やがて、世は、太平となるであらう。と見れば、烏は嬉しげに友を呼び、礎の色も、どうやら少しく濕氣を收めたいので、この分では、遠からず晴れわたり、幸に我が願を叶へるやうになり、今までの厭やな天気も、回復して、あまり甚しくなくて済むかも知れない。

【餘論】朱竹垞は、全篇を評して、「雨勢を摹寫すること、正に前の熱を道ふと同じ、亦た状態の妙を極むといふべし」といつた。その細評は、煩はしいから、しばらく此に略すことにする。

征蜀聯句

征蜀聯句

日王忿違傲有命事誅拔

ひかし、王、違傲を忿り、命あつて誅拔を事とす。

蜀險豁關防秦師縱橫猾愈

蜀險、關防を豁にして、秦師、橫猾を縱にする。

風旗匝地揚雷鼓轟天殺

風旗、地を匝つて揚がり、雷鼓、天に轟いて殺す。

竹兵彼皴脆鐵刃我鎗讎郊

竹兵、彼皴脆、鐵刃、我鎗讎。

刑神咤犖旄陰餒馳犀札

刑神、犖旄を咤き、陰餒、犀札を馳かす。

翻覓紛偃蹇塞野頽塊圮愈

覓を翻し、紛として偃蹇、野を塞ぎ、頽として塊圮。

生犇競掣跌癡突爭填軋

生犇、競うて掣跌、癡突、争うて填軋。

渴鬪信慄嗽噉姦何嗅哨郊

渴鬪、信に慄嗽、噉姦何ぞ嗅哨たる。

更呼相簸蕩交斫雙缺齧

更る呼んで相簸蕩し、交も斫つて雙に缺齧。

火發激銜腥血漂騰足滑愈

火發して激銜腥、血漂うて騰足滑かなり。

飛猱無整陣翩鶴有邪憂

飛猱、陣を整ふるなく、翩鶴、邪に憂つことあり。

江倒沸鯨鯨山搖潰狐糞郊

江は倒にして鯨鯨を沸き、山は搖いて狐糞を潰す。

中離分二三外變迷七八

中離れて二三に分かれ、外變して七八に迷ふ。

逆頸盡微索仇頭恣髡鬻

逆頸、盡く微索、仇頭、恣に髡鬻。

怒鬚猶擊擗斷臂仍瓢瓢愈

怒鬚、猶は擊擗、斷臂、仍は瓢瓢。

石潛設奇伏穴觀騁精察

石に潜れて奇伏を設け、穴に觀うて精察を騁す。

中矢類妖慘跳鋒狀驚納

矢に中つて妖慘に類し、鋒に跳つて驚納に狀る。

蹋蹴聚林嶺斗起成埃圻（埃圻、踏蹴の塵埃を成す） 邪  
 施亡多空杠軸折鮮聯轄（施亡、空杠、軸折、鮮聯、轄、塵埃を成す）  
 劉膚淡瘡痕敗面碎剝割（劉膚、淡瘡、痕敗、面碎、剝割、塵埃を成す）  
 渾奔肆狂動捷竄脫趨點（渾奔、肆狂、動捷、竄脫、趨點、塵埃を成す）  
 巖鈎踣狙猿水漉雜鱷蝟（巖鈎、踣狙、猿水、漉雜、鱷蝟、塵埃を成す）  
 投奔鬧陷墜填墮傾儲倍愈（投奔、鬧陷、墜填、墮傾、儲倍、愈、塵埃を成す）  
 強晴死不閉獲眼困逾眺（強晴、死不、閉獲、眼困、逾眺、塵埃を成す）  
 蕪堞燼歛燭扶門呀拗闔（蕪堞、燼歛、燭扶、門呀、拗闔、塵埃を成す）  
 天刀封未坼曾膽懾前握（天刀、封未、坼曾、膽懾、前握、塵埃を成す）  
 陸梁排郁縮圖竇揆窟窺（陸梁、排郁、縮圖、竇揆、窟窺、塵埃を成す）  
 迫脅聞雜驅咿呦叫窺跣（迫脅、聞雜、驅咿、呦叫、窺跣、塵埃を成す）  
 窮區指清夷兇部坐雕鍛（窮區、指清、夷兇、部坐、雕鍛、塵埃を成す）  
 邛文裁斐壘巴豔收婚納（邛文、裁斐、壘巴、豔收、婚納、塵埃を成す）

椎肥牛呼牟載實駝鳴圖（椎肥、牛呼、牟載、實駝、鳴圖、塵埃を成す）  
 聖靈閱頑鬪燕養均草藜（聖靈、閱頑、鬪燕、養均、草藜、塵埃を成す）  
 下書遏雄唬解罪弔擧瞎愈（下書、遏雄、唬解、罪弔、擧瞎、愈、塵埃を成す）  
 戰血時銷洗劍霜夜清刮（戰血、時銷、洗劍、霜夜、清刮、塵埃を成す）  
 漢棧罷露闐獠江息澎湃（漢棧、罷露、闐獠、江息、澎湃、塵埃を成す）  
 戍寒絕朝乘刀暗歇宵餐（戍寒、絕朝、乘刀、暗歇、宵餐、塵埃を成す）  
 始去杏飛蜂及歸柳嘶蜚（始去、杏飛、蜂及、歸柳、嘶蜚、塵埃を成す）  
 廟獻繁馘級樂聲洞控榻（廟獻、繁馘、級樂、聲洞、控榻、塵埃を成す）  
 臺圖煥丹玄郊告儼匏稽（臺圖、煥丹、玄郊、告儼、匏稽、塵埃を成す）  
 念齒慰微薰視傷悼癩疵（念齒、慰微、薰視、傷悼、癩疵、塵埃を成す）  
 休輪任訛寢報力厚麩栝（休輪、任訛、寢報、力厚、麩栝、塵埃を成す）  
 公歡鐘晨撞室宴絲曉拈（公歡、鐘晨、撞室、宴絲、曉拈、塵埃を成す）  
 杯孟酬酒醪箱篋饋巾帙（杯孟、酬酒、醪箱、篋饋、巾帙、塵埃を成す）

小臣味我經維用贊勳劬愈(二六四) 小臣、我經に味し、維れ用つて勳劬を贊す。

【字解】(一) 日、日ごろ、むかしと訓すべし。晋注に、「この語、左傳漢史に屢に見ゆ。左氏(文公七年)の如き、日、奮、諫ましからず、故に其地を取る。周語、日、君の楚に使するや。又曰く、蔡君、日、其れ此に通ぐるや、と。沿流して、遼國に至り、淮南厲王傳、日、上に帝せらるるを得て子ありと。かくの如きの語、一二もて考ふべからず、詩に入るは、與信より始まる、日余蓋推穀、民順始天從と是れなり」とある。(二) 遠懼、帝命に違ひ、且つ虚傲なること、即ち劉剛を指す。(三) 殊技、厥を殊し其管を抜く。(四) 驚懼、爾所を設けて防禦となし、その狀、驚然たること。(五) 構、左傳に「汝將を助くる無かれ」とあり、方言に「小兒許多き、これを被稱といふ」とある。わが儘にして被稱なること。(六) 轟天殺、轟は軍車の聲、殺は殺聲を爲す。(七) 竹兵、竹を削つて兵器と爲す。(八) 震、祝文に「細皮起るなり」とある、皮の腹れ上つて居ること。(九) 鉞、鉞は字書に見えぬか、齒の利きことだといふ説がある。(一〇) 刑、國語に「饒公、夢に神人あり、西阿に立つ、覺めて史籒を召して之を占す、對へて曰く、專取なり、天の刑神なり」とある。(一一) 咤、吐く。(一二) 驚、蔡邕の周斷に「龍は、犀牛の尾を以て之を爲る、斗の如し、或は龍頭に在り、或は衝に在り」とある。(一三) 陰、蝮の上に陰陰として餘が燃え上る。(一四) 剛、ゆるがす、うごかす。(一五) 犀札、札は甲、犀の皮を以て造る。周語に「夫差、水犀の甲を衣るもの三千人」とあり、左傳成公十六年に「甲を闢して之を射り、七札を徹す」とある。(一六) 觀、觀は紅、僂僂は延び廣がる、旌旗の動いて虹霓の如きを云ふ。(一七) 塞野、塞野は、塞は廣がりたる貌、埃北は前にも見えなかつたが、このは、涯岸なきこと。兵衆、野を塞いで、水の涯岸なきが如きを云ふ。(一八) 生障、障は擊、將注に「生きながら恐しき者の號うて相牽擊墜するを言ふなり」とある。(一九) 激、激は相擊つこと、又噴しき聲。(二〇) 激、激は食ふ、蓋は震當。(二一) 震、震は物、物を飲む聲。(二二) 震、震は震、震の震ること、亦た震の缺くるをいふ。(二三) 激、激はげしく衝き込む聲先。(二四) 震、震は震、震の震ること、亦た震の缺くるをいふ。(二五) 震、震は震、震の震ること、亦た震の缺くるをいふ。我が軍の神變を言ふ。(二六) 震、震は震、震の震ること、亦た震の缺くるをいふ。又「漢書は、龍虎に類す、爪ありて人を食ひ、迅く走る」とある。この二句は、蜀兵の敗亡を云ふ。(二七) 中、中から分離する。(二八) 外、外部から變化する、二二七八は蜀兵の敗れて分散するを指す。(二九) 逆、逆、逆の首。(三〇) 逆、逆、逆の首。(三一) 逆、逆、逆の首。(三二) 逆、逆、逆の首。(三三) 逆、逆、逆の首。(三四) 逆、逆、逆の首。(三五) 逆、逆、逆の首。(三六) 逆、逆、逆の首。(三七) 逆、逆、逆の首。(三八) 逆、逆、逆の首。(三九) 逆、逆、逆の首。(四〇) 逆、逆、逆の首。(四一) 逆、逆、逆の首。(四二) 逆、逆、逆の首。(四三) 逆、逆、逆の首。(四四) 逆、逆、逆の首。(四五) 逆、逆、逆の首。(四六) 逆、逆、逆の首。(四七) 逆、逆、逆の首。(四八) 逆、逆、逆の首。(四九) 逆、逆、逆の首。(五〇) 逆、逆、逆の首。(五一) 逆、逆、逆の首。(五二) 逆、逆、逆の首。(五三) 逆、逆、逆の首。(五四) 逆、逆、逆の首。(五五) 逆、逆、逆の首。(五六) 逆、逆、逆の首。(五七) 逆、逆、逆の首。(五八) 逆、逆、逆の首。(五九) 逆、逆、逆の首。(六〇) 逆、逆、逆の首。(六一) 逆、逆、逆の首。(六二) 逆、逆、逆の首。(六三) 逆、逆、逆の首。(六四) 逆、逆、逆の首。(六五) 逆、逆、逆の首。(六六) 逆、逆、逆の首。(六七) 逆、逆、逆の首。(六八) 逆、逆、逆の首。(六九) 逆、逆、逆の首。(七〇) 逆、逆、逆の首。(七一) 逆、逆、逆の首。(七二) 逆、逆、逆の首。(七三) 逆、逆、逆の首。(七四) 逆、逆、逆の首。(七五) 逆、逆、逆の首。(七六) 逆、逆、逆の首。(七七) 逆、逆、逆の首。(七八) 逆、逆、逆の首。(七九) 逆、逆、逆の首。(八〇) 逆、逆、逆の首。(八一) 逆、逆、逆の首。(八二) 逆、逆、逆の首。(八三) 逆、逆、逆の首。(八四) 逆、逆、逆の首。(八五) 逆、逆、逆の首。(八六) 逆、逆、逆の首。(八七) 逆、逆、逆の首。(八八) 逆、逆、逆の首。(八九) 逆、逆、逆の首。(九〇) 逆、逆、逆の首。(九一) 逆、逆、逆の首。(九二) 逆、逆、逆の首。(九三) 逆、逆、逆の首。(九四) 逆、逆、逆の首。(九五) 逆、逆、逆の首。(九六) 逆、逆、逆の首。(九七) 逆、逆、逆の首。(九八) 逆、逆、逆の首。(九九) 逆、逆、逆の首。(一〇〇) 逆、逆、逆の首。

とある。この二句は、蜀兵の敗亡を云ふ。(一) 中、中から分離する。(二) 外、外部から變化する、二二七八は蜀兵の敗れて分散するを指す。(三) 逆、逆、逆の首。(四) 逆、逆、逆の首。(五) 逆、逆、逆の首。(六) 逆、逆、逆の首。(七) 逆、逆、逆の首。(八) 逆、逆、逆の首。(九) 逆、逆、逆の首。(一〇) 逆、逆、逆の首。(一一) 逆、逆、逆の首。(一二) 逆、逆、逆の首。(一三) 逆、逆、逆の首。(一四) 逆、逆、逆の首。(一五) 逆、逆、逆の首。(一六) 逆、逆、逆の首。(一七) 逆、逆、逆の首。(一八) 逆、逆、逆の首。(一九) 逆、逆、逆の首。(二〇) 逆、逆、逆の首。(二一) 逆、逆、逆の首。(二二) 逆、逆、逆の首。(二三) 逆、逆、逆の首。(二四) 逆、逆、逆の首。(二五) 逆、逆、逆の首。(二六) 逆、逆、逆の首。(二七) 逆、逆、逆の首。(二八) 逆、逆、逆の首。(二九) 逆、逆、逆の首。(三〇) 逆、逆、逆の首。(三一) 逆、逆、逆の首。(三二) 逆、逆、逆の首。(三三) 逆、逆、逆の首。(三四) 逆、逆、逆の首。(三五) 逆、逆、逆の首。(三六) 逆、逆、逆の首。(三七) 逆、逆、逆の首。(三八) 逆、逆、逆の首。(三九) 逆、逆、逆の首。(四〇) 逆、逆、逆の首。(四一) 逆、逆、逆の首。(四二) 逆、逆、逆の首。(四三) 逆、逆、逆の首。(四四) 逆、逆、逆の首。(四五) 逆、逆、逆の首。(四六) 逆、逆、逆の首。(四七) 逆、逆、逆の首。(四八) 逆、逆、逆の首。(四九) 逆、逆、逆の首。(五〇) 逆、逆、逆の首。(五一) 逆、逆、逆の首。(五二) 逆、逆、逆の首。(五三) 逆、逆、逆の首。(五四) 逆、逆、逆の首。(五五) 逆、逆、逆の首。(五六) 逆、逆、逆の首。(五七) 逆、逆、逆の首。(五八) 逆、逆、逆の首。(五九) 逆、逆、逆の首。(六〇) 逆、逆、逆の首。(六一) 逆、逆、逆の首。(六二) 逆、逆、逆の首。(六三) 逆、逆、逆の首。(六四) 逆、逆、逆の首。(六五) 逆、逆、逆の首。(六六) 逆、逆、逆の首。(六七) 逆、逆、逆の首。(六八) 逆、逆、逆の首。(六九) 逆、逆、逆の首。(七〇) 逆、逆、逆の首。(七一) 逆、逆、逆の首。(七二) 逆、逆、逆の首。(七三) 逆、逆、逆の首。(七四) 逆、逆、逆の首。(七五) 逆、逆、逆の首。(七六) 逆、逆、逆の首。(七七) 逆、逆、逆の首。(七八) 逆、逆、逆の首。(七九) 逆、逆、逆の首。(八〇) 逆、逆、逆の首。(八一) 逆、逆、逆の首。(八二) 逆、逆、逆の首。(八三) 逆、逆、逆の首。(八四) 逆、逆、逆の首。(八五) 逆、逆、逆の首。(八六) 逆、逆、逆の首。(八七) 逆、逆、逆の首。(八八) 逆、逆、逆の首。(八九) 逆、逆、逆の首。(九〇) 逆、逆、逆の首。(九一) 逆、逆、逆の首。(九二) 逆、逆、逆の首。(九三) 逆、逆、逆の首。(九四) 逆、逆、逆の首。(九五) 逆、逆、逆の首。(九六) 逆、逆、逆の首。(九七) 逆、逆、逆の首。(九八) 逆、逆、逆の首。(九九) 逆、逆、逆の首。(一〇〇) 逆、逆、逆の首。



に見えず、坤蒼に蓋は平ならざるなり、吳都賦に「麗麗蓋、五臣曰く、積を排するなりと。墳隴の巔に於て亦た合す」とある。すると、積める泥土を推し倒すといふ義。【六五】 備借 蔣注に「能なる騎、又憚るなきなり」とある。【六六】 積 積は陣犬の貌。【六七】 駟 傳雅に「駟るなり、一曰く、馬しき駟」とある、惡視する。【六八】 糞 糞は城上の垣。【六九】 焮 火の熾なる貌。【七〇】 燄 既文に「燄は、炎なるなり」とある、火の熾えること。【七一】 扶門 左傳襄公十年に「晉、僂陽を伐つ、諸侯の士門す、無門發たり、則人斃、これを扶けて以て門者を出す」とある。扶はかかげる。【七二】 呀 口を開く貌。【七三】 樹 既文に「樹は門擊」とある。【七四】 天刀 天子より賜はりたる劍。【七五】 封未拆 前にした儘まだ抜かない。【七六】 前推 方言に「東齊海岱の間、拔を謂うて推となす」とある。【七七】 殿 殿は伏する。【七八】 都 都 都は穴中より見ること。【七九】 開寶 穴を仰ふ。【八〇】 現 蔣注に「方正ならざるなり」とある。【八一】 物 物 物は物の穴中に在ること、覆は穴中より見ること。【八二】 啣 啣しげに聲を出す。【八三】 吳 吳は明に同じ、即ち足を切る刑。【八四】 顯 文選買置の通義論に「鈞鼓長鞭より銜きに非ざるなり」とあり、漢書に「鍾鼓は長鞭に敵せず」とあつて、注に「矛なり」とある。【八五】 叩文 叩は蜀の地名、文は織の文あるもの、蓋し錦綺の類。【八六】 製 文字ある貌。【八七】 巴 巴も亦な蜀中の地、その地の美女。【八八】 嬪 嬪、小兒の肥えたる貌。【八九】 推 推は屠殺する、後漢書吳漢傳に「牛を推し、士を擊す」とある。【九〇】 牛呼牛 既文に「牛は、牛の鳴くなり」とあり、柳子厚の牛賦に「牛呼牛、黃鐘滿腹」とある。【九一】 獸 實は重きもの。【九二】 四 廣韻に「蹄蹄の鳴くなり」とある、王荆公の詩に「乘乘鈞機駟、節拂空郊虎視耽」とあるは、蓋し此を用ひたものであらう。【九三】 聖 天子の靈贖。【九四】 頭 左傳僖公二十四年に「心、總轡の經に附らざるを頭となし、口、忠信の言を道はざるを頭となす」とある。【九五】 草 草 玉簪に「翠は草華あり、魚を殺すに用ふ」とある。【九六】 過 過 詩經に「過三豎」は將帥として多殺すること無からしむといふ義。【九七】 擊 擊は轉られたもの、蹄は目の見えなくなつたもの、推磨磨。【九八】 覆 覆は高中の機道。【九九】 游 游は疾、二では詞を指す。【一〇〇】 游 文選南都賦に「功佩輕輶」とあつて、蔣注に「功は大聖なり」とある。【一〇一】 朝 朝 朝は守、樂業樂障の樂に同じ。【一〇二】 刀 刀 蔣注に「刀、本と音即、古書、刀斗の刀、刀劍の刀と蓋し一字、但だ音を以て之を別つのみ」と

ある。漢書李廣傳に「刀斗を擊たずして自ら奮る」とあつて、孟康の註に「刀斗は、劍を以て劍を作り、一斗を受け、蓋は飯を炊いで食ひ、夜は擊持して行く」とある。【一〇三】 宵 宵 宵は夜に同じ。夜、見廻りをする。【一〇四】 杏 杏 正月に脚を出せしが故に云ふ。【一〇五】 柳 柳 柳雅に「柳は似て小」とある、十月脚を息めしが故に云ふ。洪興祖は「時を記するの語、工なり、詩に云ふ、昔我往矣、楊柳依依、今我來思、雨雪霏霏、二句蓋し此意に本づく」とある。【一〇六】 廟 廟 廟は打ち取つた頭的首級を太廟に獻する、詩經に在、汭獻賦とあつて、鄭箋に「格するところの者の左耳を獻す」とある。級は首を致へる稱、漢書霍光傳に、三千一十七級とあつて、顏師古の注に「本と敵の一首を斬り、第一級を拜するを以て、故に一首を謂うて一級となし、因つて、惟天生靈と名づけ、一人を一級となすなり」とある。【一〇七】 兩 兩 兩は聲の遷ること、禮記に「聖人、統統禮儀を作爲す」とあつて、その注に「禮儀は祝敬なり」とある。【一〇八】 蕭 蕭 蕭は、赤黑煥然として明白なりとの義。後漢書に「顯宗、前世の功臣を追感し、併せて、二十八將を南宮の靈臺に圖畫す」とある。【一〇九】 郊 郊 郊祭して成功を天に告げるときは、輿を器とし、禮を席とし、その儀、頗る嚴なりとの義。禮記に「蕭蕭然」とあつて、その注に「蕭蕭を用ひて、神を祭る席と爲す」とあり、漢書郊祀志に「席は宜禮を用ふ」とあつて、應劭の注に「禮は蕭本なり、皮を去り、以て席と爲す、禮は獸と同じ」とある。【一一〇】 念 念 念 蔣注に「念は識なり、蕭は而黒きなり、その年の老いたるを念うて、顔色憔悴するものは之を慰安す、楚辭に「願微望以阻敗」とある。【一一一】 蔽 蔽 廣韻に「蔽は疇疾」とある。【一一二】 休 休 休は物を運搬すること止める。【一一三】 既 既 既經に「既は動くなり」とある、牛馬を野に放ち、或は臥し或は動いて居る。【一一四】 狀 狀 狀文に「狀は小夢の屑皮なり、結は髪を弄いて潰えさするなり」とあつて、牛馬に夢や粟のみすまを食はせる。【一一五】 結 結 結は琴瑟の知さ結を頰つた樂器、价は既文に「胡なり」とある。二では、撫でる、擊つ。【一一六】 箱 箱 箱は、詩經の註に「箱は帶なり」とある。箱に頭巾や帯を入れて贈る。【一一七】 戎 戎 戎は、即ち武裝、兵法の書。孫吳二子の類をいふ。【一一八】 勳 勳 書經に「女勳めて殷の獻臣を勉め」とあつて、その注に「勳は勳なり」とある、勳功勳勞。

【題義】 征蜀の事は、前に元和聖德詩の條下に詳述して置いた。蔣注に「憲宗の元和元年正月、

高崇文に詔して蜀を征せしむ、九月、劉闢を擒にして以て獻す。聯句は、嘗に是れ蜀平らいで後に作るなるべし。篇末の獻賊郊告等の語を観るに、元和聖德詩、殺するところと言異にして意同じ、二詩其れ相先後して作るか」とある。

【詩意】さき頃、天子は、劉闢が敵旨に違ひ、且つ驕傲を極め、叛形すでに成れるを怒り玉ひ、將士に命するに、賊を誅し城を抜くことを以てせられた。蜀地の入口は、名だたる棧道で、賊は廣い範圍に互りて、處處に關門防禦等を設けたが、秦中の王師は、そんな事に頓着なく、縱横詐術を縱にし、奇計を以て、程なく其地に討ち入つた。風に閃く軍旗は、地を匝つて揚がり、雷を欺く戰鼓は、天に轟いて殺聲を震はせた。賊は固より烏合の衆で、甲兵精良ならず、竹槍などは、へなへなで、何の役にも立たないが、これに反して、官軍の方は、鋼の利刀を持つて居て、まことに銳利である。聲施の指し物の先には、刑神が吐き出され、髣髴として其處に臨まれたやうであるし、犀の皮で造つた堅い鎧の上には、陰陰として、饑が燃え上がる様である。旗が延び廣がつて動くと、虹霓の如く、兵衆の野を塞いで浩浩たるは、さながら、水の涯岸なきが如くである。生まれながら悍惡なるものは、競うて牽き出されて跌き斃れ、廢弱にして突出せしものは、將棋倒しになり、強弱の別なく、賊は一樣に討ちのめされた。中には、渴するまで闕ふものもあつて、戰聲は喧しく、人を取つて食ふ姦黨は、物を啜り込む様な聲を出して、暴ばれ廻り、互に呼びかはして、盛り返さむとあせりにあせり、手當

り次第に切り捲くつて、劍の諸刃が皆缺ける位。はては、烈しく振り廻す切先から火を發して、自然に腥く、血は大地に漂うて、上げた足も滑る位。しかし、官軍は飛騨の如く、これを受け流して、巧者に立ち廻り、陣勢を整ふるまでもなく、又勢猛き熊鷹が斜に撃つてかかる様である。そこで、賊軍は、散散に敗亡し、その一なだれに崩れる有様は、江水が逆流して、鯨鯢の體が沸き上がるが如く、山が搖ぎ出して、竊竊の類が押し潰される様であつて、中から分離して二三となり、外より崩れて七八に變じ、散り散りばらばらに成つた奴をどしどしと打ち取り、その首を繩に繋いで仕舞つたが、頭の毛は掻きむしられ、怒れる鬚が残つて居り、切り落された臂が、びくびく動いて居る。又官軍の一隊は、巖石の間に身を潜まして伏兵となり、穴の中から覗いて、精細に偵察を爲し、如何なるものをも逃がすまいとした爲に、賊の逃竄せしものも、矢に中つては、妖慘の如く、鋒先で突かれて跳る様は、狸の如く、一たびは駆けり廻つて、林嶺の間に集まり、俄に一撃を加へられると、盡く塵埃と化して仕舞つた。賊の陣營を見ると、旗は無くなつて、大きな竿だけが残つて居るし、軸は折れ、輻は飛んで仕舞ひ、完全に残つて居る車は、一つもない。賊徒の死んだ有様はといふと、肌膚を刺されて、傷は體を衝き抜け、顔を痛めて、入れ墨面刺の酷刑に遇つた様である。その奔り去るものは、速しく狂ひ廻り、逃げ匿れて、極めて狡黠に振舞ひ、巖に鉤を投げ懸けて、攀ち登ること猿の如く、水に潜り込んで、鯉や蟹と一緒になつて、匿れて居たまでは善かつたが、官軍では、凄じき響と共に、

戰車を以て、大石を投げ飛ばし、見る間に、濠を埋めて、遠慮なく押し均したから、一齊に息も絶えはて、憎さげたる腫は、死んでも閉ぢず、瘡惡なる目は、苦しき儘、愈よ見はつて居る。それから、城上の垣を焼き拂つて、火勢極めて盛になり、門を押し開いて、ぎいと音をさせて、官軍は、城中になだれ込んだ。そこで、天子より賜はつた寶刀を抜く間もあらず、賊の大將は、膽を潰して前へのめり、梁の下に身を伏して慄へ戦ぎ、穴の中から、そつと容子を窺つて居たが、忽ち見つけ出して、捕縛したから、脅迫されて引き立てられ、悲しげな聲を發して、その罪に非ざることを管管しく叫び訴へたが、最早間に合はない。かくの如くして、邊僻の境土も、戰塵漸く斂まつて、清平に復すること目を指して待つべく、今まで凶虐を逞うしたる部民は、各々刑罰に處せられることに成つた。亂賊、すでに平らぎし後は、名だたる蜀國の錦綺は、彩あつて目さむるばかりなるを裁ち、巴地の美人は、豊肥なるを擇び、牟牟と鳴く牛は、肥えたるを屠殺し、園として弊する駱駝は、善く重きを運ぶを取り、さういふものを、どしどしと長安に持つて來ることが出來、天子は、その居民の頑冥無道なるを氣の毒に思召して、聖恩を垂れ、功罪善惡を同一視して、均しく壽養を遂げしめられたのは、まことに有り難い事である。そこで、詔書を將帥に下して、多殺を貪ることなからしめ、罪を赦して捕虜病傷の者を勞はり、戰血も、やがて消えて仕舞ひ、劍の霜も夜だけ清く光り、漢中に通ずる棧道に於ても、賊徒が聚まつて騒ぐことなく、一帶の狼江にも、波平にして、滄海の聲を止め、戍營は、がら空

になつて、早朝から警護する世話もなく、刁斗を暗中に敲いて夜を戒めることも無いやうに成つた。王師の初めて出征したのは、正月、杏の花に蜂の飛ぶ頃であつて、その凱旋したのは、十月、柳の小蟬の鳴く頃である。そこで、恭しく首級を宗廟に獻じて戰勝を告げ、祝鼓を拍つ樂聲は、遠く響徹し、まことに、莊嚴の趣を極めて居る。それから、臺上には功臣の像を畫き、朱墨煥然として輝き、郊にして天を祀るときは、砲を器となし、薬を席となし、その儀容は、まことに儼然たるものである。天子は、なほも恩恵を布かれ、年老いて顔色憔悴するものは、殊に之を慰安し、負傷せるものを見ては、創痕の残れるを痛痛しく思召され、牛馬は輸送を止めて、これを野に放ち、動くも、臥するも、その自由を任せ、且つ従來力を盡した功勞に報ゆる爲に、麥や粟のふすまを十分に宛てがふことになり、恩威、禽獸に及ぶといふ様な次第。長安の官民も、今次の戰勝を賀して、朝夕様様の催しがあり、或は公宴に於て鐘鼓を鳴らし、或は私宴に於て琴瑟を奏し、酒を酌んで盃を手にし、箱に満たして巾帨を送り、互に贈答して、御祝を致して居る。私は、固より、兵書に味く、戰爭の方略等に就いては、何も申すことが出來ないが、唯だ上記の句を聯ねて、上は天子、下は將士の功勳勳勞を讚美するのみである。

【餘論】この聯句は、上の數句に比して、文字も六つかしく、随分考へ抜いて作つたものに相違なく、これを見ても、韓孟二人、才力相敵することが分かる。朱竹垞は「只だ破賊の聲勢を形容す、語多く

韓昌黎集卷八  
は瑰奇、亦た多く險怪の字を用ひ、微に賦體に似たり」と云つて居る。

同宿聯句

同宿聯句

自從別君來遠出遭巧譎君に別れしより來、遠く出でて巧譎に遭ふ。  
斑斑落春淚浩浩浮秋浸斑斑として、春淚を落し、浩浩として、秋浸に浮ぶ。  
毛奇覩象犀羽怪見鷗鳩毛奇は象犀を覩、羽怪は鷗鳩を見る。  
朝行多危棧夜臥饒驚枕朝に行けば危棧多く、夜臥せば驚枕饒し。  
生榮今分踰死棄昔情任生榮、今、分踰えたり、死棄、昔、情任かす。  
鱗行參綺陌雞唱聞清禁鱗行、綺陌に參はり、雞唱、清禁に聞こゆ。  
山晴指高標槐密驚長蔭山は晴れて高標を指し、槐は密にして長蔭を驚す。  
直辭一以薦巧舌千皆舐直辭、一以て薦め、巧舌、千、皆舐む。  
匡鼎惟說詩桓譚不讀讖匡鼎、惟だ詩を説き、桓譚、讖を讀まず。  
逸韻何嘈嗽高名俟沽賃逸韻、何ぞ嘈嗽たる、高名、沽賃を俟つ。

紛葩歡屢填曠朗憂早滲紛葩、歡、屢は填ち、曠朗、憂、早く滲る。  
爲君開酒腸顛倒舞相飲君が爲に酒腸を開き、顛倒舞うて相飲む。  
曦光霽曙物景曜鏢宵衽曦光、曙物霽れ、景曜、宵衽を鏢す。  
儒門雖大啓姦首不敢闕儒門、大に啓きたりと雖も、姦首、敢て闕はず。  
義泉雖至近盜索不敢沁義泉、至つて近しと雖も、盜索、敢て沁まず。  
清琴試一揮白鶴叫相暗清琴、試に一揮、白鶴、叫んで相暗す。  
欲知心同樂雙繭抽作紙欲知心同じき樂を知らむと欲せば、雙繭抽いて紙と作す。

【字解】【一】遠出、陽山江説の語を指す。【二】秋浸、秋の洪水。【三】毛奇、珍らしい動物。【四】羽怪、怪誕なる禽鳥の能羅に吾全三羽爲、謀とあつて、その注に「鳩は羽毒、以て人を殺すべし」とある。二種ともに惡鳥。【五】鷗枕、枕を翳かすもの、鳥聲等をいふ。【六】鱗行、朝官の行列。【七】清禁、宮禁。【八】山晴、終南山をいふ。【九】高標、遠近の目標となるべき最高峰。【一〇】槐密、長安の大道には並木として槐樹が植ゑてある。【一一】說文に「牛舌の病なり」とある、舌を閉つ、物言はむこと。【一二】匡鼎惟說詩、漢書匡衡傳に「字は雅圭、學を好んで家貧、儲作して以て費用に供し、尤も精力人に過ぎたり。諸儒語つて曰く、無說詩、匡鼎來、匡說詩、解三人願ことあつて、須臾の法に「衡、少時、字は鼎長、乃ち牛の雅圭に易ふるなり」とある。【一三】桓譚不讀讖、後漢書桓譚傳に「帝、譚に問つて曰く、吾、讖もて之を決せむと欲す、何知、譚曰く、臣、讖を讀まず」とあつて、その注に「符讖は、皆將來の事を言ふ」とある。讖は即ち龜鏡、經書に對する緯書で、秦漢の間に傳出し、主として五行及び道

聯句 同宿聯句

家の旨に牽強し、又卜筮に對して、專ら將來の豫言を爲した。【一〇】晴歌、その響の大なるをいふ。【一〇】沽貨、値に應じて買ふ。【一〇】紛宿、紛然として鮮美なること。【一〇】晴歌、文選張協の七命に野曠朗而無塵とあり、潘岳の冀婦賦に題三空字兮曠朗とある。【一〇】憂早診、史記の封禪書に蓋沙參説とあつて、その注に「言ふは、その憂を忘るること、物の滲漏するが如きなり」とある。【一〇】晴歌、前後を忘却する、解ひ潰れる。【一〇】晴歌、晴天の物象。【一〇】景曜、太陽の光。【一〇】背殿、鄭玄の周禮注に「殿とは、陰陽の氣相侵漸して、以て災を成すを謂ふなり」とあり、文選謝希逸の宜賞紀誅に魏靈骨殿とある。夜中の昏氣。【一〇】森首、森賊の首魁。【一〇】聞、窺ふ。【一〇】沁、將注に「諸字書を按ずるに、沁は背水の名、上黨に出づ、これを外にして他の瀕なし。恐らくは、この沁の字、當に之を讀んで爾は波のごとくなるべし、北人、物を以て水を探るを沁といふ、又小飲なり」とある。【一〇】晴、説文に「宋齊、兒泣いて止まざるを謂うて晴となす」とある、又晴いて相應すること。【一〇】雙蘭地作、蘭記に「女は粧を續り、綳を續す」とあり、文選東都賦に女修三續粧とある。この二句は、將注に「言ふは、二人同心、相繼むこと、雙蘭の粧を作るが如きなり」とある。

【題義】將注に「この詩、公、召されて國子博士となり、後に東野と同宿して作る、故に南遷より召し還さるる始末を敘すること、甚だ詳なり」とある。

【詩意】君と別れてより、讒言に遭つた爲に、遠く陽山に貶謫されることになり、斑斑として、衣上に春の涙を落し、浩浩たる秋の大水を渡つて、その地に赴いた。地は熾熱の區であつて、見馴れぬものが多く、獸類の奇異なるものとしては、犀象が居るし、鳥類の怪詭なるものとしては、鵠だの、鳩だのがある。朝に出かけると、到る處、危き釣橋があるし、夜臥せば、枕を驚かす様な聲が聞こえる。かかる南方炎熱の地に居ること數年、幸にも召し還されて、生きて今再び榮えることは、まことに我が

が分に過ぎたことであるし、さきには、死して棄てられても、仕方がないと思つて、禱めて居た。そこで、朝官の行列に隨つて、都大路をしづしづと歩むと、鶏の鳴く聲が宮禁の中に聞こえ、愈よ早朝が始まる。兎角する内に、夜が明けると、終南山は晴れて、その絶頂は、手に取るばかり、大路の並木の槐は、こんもりとして、長い木蔭がつづいて居る。今の天子は、聖明におはしまし、直言を一たび薦むれば、巧舌の數多きも、皆口を閉づるといふ有様、但し、予は古しへの匡衡の如く、唯だ詩を説くを知るのみ、又桓譚の如く、讒緯の書は決して讀んだことがなく、まことに學問が窮屈で、融通が利かぬから仕方がない。詩を作れば、逸韻自ら晴歌として響き、徒に高名あつて、買ひ手があらば賣つても善いと思つて居る位、さはれ、君と此に同宿して、幸に賑はしきに因つて、喜數は滿ち、心中曠朗として、心配事は早く消え去つて仕舞ふ。君が爲に、酒腸を開き、酔ひ潰れて踊り出すまで痛飲する。時しも、四海方に虞なく、たとへば、太陽が曉の物象を照らし出し、輝いた光が夜中の昏氣を消散せしむるが如く、おもへば、起つて大に爲すべき時である。儒家の門は、明け放しであるから、姦人どもは、敢て何はす、義泉は、至つて近い處に在つても、盜賊が細を用意して汲みに來るといふことはなく、吾が道の次第に行はれることは、申すまでもない。ここに於て、試に清琴を一彈すれば、白鶴が天上に叫んで、さながら相和する如く聞こえる。爾我二人、同心の樂如何といへば、二つの蘭の絲を抽きほごし、それを一緒によつて紙絲と爲すが如く、始終離れざるは、言ふまでも無いことである。

【餘論】この聯句は、篇幅も短く、從つて、文字も洗練してあつて、よくまとまつて居る。朱竹垞は「造句多くは附、篇短きを以て、更に意の緊切なるを覺ゆ」と云つて居る。

莎柵聯句

莎柵聯句

水溪時咽絕。風樞方軒舉。愈 水溪、時に咽絶、風樞、方に軒舉。

此處不斷腸。定知無斷處。郊 この處、腸を断たざれば、定めて知る、断つ處なきを。

【字解】(一) 風樞、樞は木の名、くわぎ、とちの類。風樞とは風に吹かるる樞樹。(二) 軒舉、風樞に同じ。

【題義】莎柵は原注に「河南の谷の名」とあり、河南志に「莎柵谷は永寧縣西三十里に在り、莎柵より出で東流して昌谷に入る」とある。この詩は、韓愈が元和五年の頃、洛陽に居た時に作つたのであらう。

【詩意】溪谷は氷に閉ざされて、水聲咽んで絶え、樞樹は風に吹き靡いて、今しも飄揚と動いて居る。たださへ不遇の身の上、この荒寒の景色に對して断腸せざれば、この外に断腸すべき處もないと思ふばかりである。

【餘論】 蔣之翘は「断腸の意、必ず二公深く感ずるところあらむ、得て、詳にせず、謂はゆる銷魂は、正に多きに在らざるなり」といつた。無論孟郊は終生不遇であつたし、韓愈も、この頃は、都より出

され、河南縣令となり、ともに失意の境に居たので、これが即ち断腸する所以であらう。朱竹垞は、「好絶句、前二句は是れ比」といつたのが、これは、實際見たところの景色で、これに因つて感慨を起したのだから、即ち興といふべきでは無からうか。

雨中寄孟刑部幾道聯句

雨中に孟刑部幾道に寄する聯句

秋潦淹轍跡。高居限參拜。愈 秋潦、轍跡を淹り、高居、參拜を限る。

耿耿蓄良思。遙遙仰嘉話。郊 耿耿として良思を蓄へ、遙遙として嘉話を仰ぐ。

一晨長隔歲。百步遠殊界。愈 一晨は隔歲よりも長く、百歩は殊界よりも遠し。

商聽饒清聳。悶懷空抑噫。郊 商聽、清聳饒し、悶懷、空しく抑噫す。

美君知道腴。逸步謝天械。愈 美君、道腴を知り、逸歩、天械を謝す。

吟馨鏢紛雜。抱照瑩疑怪。郊 吟馨、紛雜を鏢し、抱照、疑怪を瑩にす。

撞宏聲不掉。輪邈瀾逾殺。愈 宏を撞けども、聲掉はず、邈に輪して瀾益す殺なり。

簷瀉碎江喧。街流淺溪邁。郊 簷瀉、碎江喧しく、街流、淺溪邁ぐ。

聯句 莎柵聯句 雨中寄孟刑部幾道聯句

念初相遭逢幸免因媒介  
 祛煩類決癰愜興劇爬疥  
 研文較幽玄呼博騁雄快  
 今君軺方馳伊我羽已鍛  
 溫存感深惠琢切奉明誠  
 迨茲更凝情暫阻若嬰瘵  
 欲知相從盡靈珀拾纖芥  
 欲知相益多神藥銷宿愆  
 德符仙山岸永立難欹壞  
 氣涵秋天河有朗無驚湃  
 郊祥鳳遺蒿鷄雲韶掩夷昧  
 爭名求鶴徒騰口甚蟬喝  
 未來聲已赫始鼓敵前敗

初めて相遭逢せしを念へば、幸に媒介に因るを免る。  
 煩を祛ふは癰を決るに類し、興に愜ふは疥を爬くよりも  
 文を研いて幽玄を較し、博を呼んで雄快を騁す。劇し。  
 今、君、軺方に馳せ、我、羽すでに鍛ぐ。  
 溫存、深惠を感じ、琢切、明誠を奉ず。  
 茲に迨びて更に情を凝らし、暫く阻んで瘵に嬰るが若し。  
 相従ふの盡すことを知らむと欲せば、靈珀、纖芥を拾ふ。  
 相益すの多きを知らむと欲せば、神藥、宿愆を銷す。  
 德は仙山の岸に符ひ、永く立つて欹壞し難し。  
 氣は秋天の河に涵し、朗あつて驚湃なし。  
 祥鳳、蒿鷄を遺れ、雲韶、夷昧を掩ふ。  
 名を争うて鶴を求むるの徒、口を騰げて蟬の喝くより  
 未だ來らず、聲已に赫たり、始めて鼓うつて敵前に敗る。

鬪場再鳴先退路一飛屑  
 東野繼奇躅修綸懸衆轄  
 穿空細丘垤照日陋菅蒯  
 小生何足道積愼如觸蠹  
 惰惰抱所諾翼翼自申戒  
 聖書空勸讀盜食敢求嘔  
 惟當騎款段豈望覲珪玠  
 弱操愧筠杉微芳比蕭薤  
 何以驗高明柔中有剛夫郊

鬪場、再び鳴くこと先、退路、一たび飛んで屑る。  
 東野、奇躅を繼ぎ、修綸、衆轄を懸く。  
 空を穿つて、丘垤を細とし、日に照らして、菅蒯を陋とす。  
 小生、何ぞ道ふに足らむ、積愼、蠹に觸るるが如し。  
 惰惰、諾するところを抱き、翼翼、自ら戒を申ふ。  
 聖書、空しく勸讀、盜食、敢て嘔すことを求めむや。  
 惟だ當に款段に騎すべし、豈に珪玠を覲るを望まむや。  
 弱操、筠杉に愧ぢ、微芳、蕭薤に比す。  
 何を以てか高明も驗せむ、柔中に剛夫あり。

【字解】(一) 秋涼、涼は行涼、にはたすみ。秋の雨水の潤まるをいふ。(二) 淹、とどむる、滯留する。(三) 繼、車輪の跡、文選「延年の時に周御窮繼跡」とある。(四) 限、參拜、飛脚館に「領稱曰く、臣の職、參拜せず、王、能く臣をして拜する無からしむれば可なり」とある。ここでは、參拜が出来ないといふ義。(五) 長兩歲、一歳を隔つるよりも長い。(六) 殊界、別の世界。(七) 商、秋聲を聽くを謂ふ。(八) 清聲、その聲清くして耳を聳てしむること。(九) 抑噫、抑へて且つ歎息する。(一〇) 美君、尊稱して云ふ。(一一) 道、祖傳の編纂に答ふる書に「子書、勸めて道の朕を味ふ」とあり、又漢書班固傳に「道の朕を味ふ」とあり、顔師古の注に「朕は朕なり」とある。(一二) 天機、朝廷の首がせといふ義で、爵位冠冕の屬を指す。(一三) 盤桓、疑はし

く奇怪と思ふことを照破して明かにする、文選江淹の韓體に同じ、表登所疑とある。【一】 撞宏、大きな鐘を撞く。【二】 不挿、挿はずに同じ。【三】 輪道、遠かなる處に流注する。【四】 題、すぐ。【五】 幸免、因縁介、孔叢子に「士、介なければ見えず、女、媒なければ嫁せず」とある、紹介によらずして知己になった。【六】 爬疥、爬は掻く、疥は疥癬。書法に「今の字書に爬蝨也、爬の音なし、然れども、文選、把髮無已、把蒲厄切といへば、知る、唐字今出でざるもの多きを」とある。【七】 呼博、博は博塞の戲、即ち博奕、雙六の類。【八】 輶、史記に「乃ち輶車に乗す」とあり、説文に「輶は小車なり」とある。【九】 第、そぐ、切る、顧延年の詩に「豐融有、時線とある。【一〇】 温存、やさしく労はる。【一一】 琢切、琢磨切磨。【一二】 明賦、書法に「説文、賦は放なり、戒は警なり」と。漢谷永傳、猶ほ嚴父の明賦のごとし。後漢西域傳、國を破め、土を滅する、經に明賦なりと。この語、當に賦の字を用ふべし、下文の仲誠に至りては、當に戒の字を用ふべし」とある。【一三】 嬰、詩經に無三自察焉とあつて、その注に「病なり」とある、病に類する。【一四】 聖珀拾遺芥、聖珀は琥珀、琥珀が塵埃を吸ふ。吳晉に「虞翻曰く、琥珀は腐芥を取らず、磁石は曲鐵を受けず、過つて存せざる、亦た宜ならずや」とあり、漢書夏侯勝の傳に「琥珀は腐芥を取らず」とあるを翻用したのであらう。【一五】 銷宿愆、曷に有疾瘳也とある、かかれての持病を全瘳させた。【一六】 符、かなふ。【一七】 有期、光彩の期然たるをいふ。【一八】 高麟、莊子の逍遙遊に「斥鴳は蓬蒿の間に翔翔す」とある、鸚は即ち鸚、みそささい。【一九】 雲龍、前に見え、大雲の樂と雷樂。【二〇】 夷、周禮に「饗饌氏、四夷の樂を掌る」とあつて、鄭玄の注に「東方を昧といひ、南方を任といひ、西方を侏侏といひ、北方を蒙といふ」とある。なほ文選東都賦に「惟休罪難とあつて、休は昧に同じ。【二一】 求、書法に「射の備に志すが如し」とある。【二二】 鳴、鳴く。【二三】 鳴先、左傳襄公二十一年「州綽曰く、平陸の役、二子に先つて鳴く」とあつて、杜預注に「自ら能に比し、周ひ勝つて先づ鳴く」とある。【二四】 修輪、長い釣輪。【二五】 懸、懸、莊子の外物に「任公子、大鈞五輪を爲り、五十輪以て餌と爲す」とあつて、司馬彪の注に「輪は楯なり」とある。【二六】 青、前に見ゆ。【二七】 蕪、さそり、詩經に「卷髮如蕪」とあつて、鄭玄に「蕪は蚊蟲なり」とある。又通雅文に「長尾を蕪と爲す」とある。【二八】 惜惜、左傳昭公十二年「新招之惜惜」とあつて、杜預の注に「安和の貌」とある。【二九】 驚異、詩經に「小心翼翼とあつて、鄭玄に「恭敬の貌なり」とある。【三〇】 嘖、嘖

記に「疾を嘖す母れ」とあつて、鄭注に「嘖は、一舉して臂を擡すを謂ふ」とあつて、食ひ嘖す。【三一】 歐、後漢書の馬援傳に「從弟少游曰く、士、生まれて下海軍に乗じ、歐段馬に騎し、擲馬、善人と稱すれば是れなり」とあつて、その注に「形段邊段なるを言ふなり」とある。【三二】 球、詩經に「維爾玆注とあり、爾雅に「球の大きき尺二寸、これを玆といふ」とある。【三三】 筠、竹と杉。【三四】 蕭、蕭、よもぎとにら。

【題義】 孟幾道は、原注に、孟簡とある。舊唐書本傳に據れば、孟簡、字は幾道、平昌の人、進士の第に擢んでられ、累官して倉部員外郎に至るとある。この人は、その性、佛を嗜み、内典に明かであつたところから、元和六年、敕して給事中劉伯芻、工部侍郎歸登、右補闕蕭儉などと醴泉佛寺に就いて、大乘、本生心地、觀經を翻譯したことがあつた。十四年、韓愈が佛骨表を上つた爲に、潮州に左遷されると、大順といふ坊さんと大へん懇意であつたので、大分、佛臭くなつたといふ風聞があつた。そこで、孟簡は書に移して、この事に就いて言ひ遣ると、韓愈は、袁州から直に返事を送つた。それは與孟尚書といふ可なり名高い文章で、文章軌範にも載せてあるから、讀者は、すでに御承知の事であらう。將注に「新舊傳を以て之を考ふるに、未だ嘗て刑部たらず、但倉部員外郎と爲り、王叔文に附かざるを以て他曹に徙る、これ豈に即ち刑部か」とある。従つて、これから推及して、この聯句は、元和元年の秋、前の秋雨聯句などと相先後したものだらうと云ふことである。

【詩意】 秋の雨、しきりに降り、行潦は街上に溢れ、車轍の跡も滯る位。従つて、尊宅へ罷り出るこ



とも出来ず、耿耿として、是非お尋ねしたいと思ひ、遙遙として、お話を承はりたいと念じて居るが、どうしても出られず、わづかに、一日でも年を隔つるより長く、わづか百歩でも、別世界より遠い様な氣がして居る。秋聲を聴いては、凜然として、數ば耳を聳て、煩悶に堪へぬ思を無理に抑へて居る。美德を備へたる君は、道の腴を知り、高踏潤歩、もとより爵位冠冕を以て重きを爲さず、吟へ出す詩句は、磬しくして、紛雜を消し去り、胸中の光明は、疑怪を照破するに足る位、もとより大鐘に比すべく、少し位、撞いた處で、聲振はず、大きな流が遠い處に向ふに因つて、波瀾は途々急速である。これに比すると、我輩などは、檐より注ぐ雨水の様なもので、聲のみは、江流を碎くが如く、器しく、又街上を流れる淺溪の如く、只だ一時過ぎ行くのみで、到底長くは續かない。おもへば、初めて御目にかつたときは、偶然意氣相投じたからで、格別、紹介を待つ様なこともなく、煩燥を拂ふことは、臚物を切開すると同じく、興に愜ふことは、疥癬を搔くと一般、極めて痛快であつた。次に、文章を研究して、幽玄を比較し、博塞の遊を爲しては、雄快の心を馳せ、日夕追隨して居た。然るに、君は、今小車を馳せて、他省に轉任せられ、われは、すでに羽をそがれて、甚だ板はぬ状態に在る。そこで、やさしかりし深恵を今更の如く感じ、切礎琢磨に就いての明誠を奉じて、一層修養に心がけやうと思つて居る。この頃に成つて、更に相思の切なる情を凝らし、又しばらくお目に懸らぬ處から、心惘然として、病氣に罹つた様な心持がする。いつでも、君に従うて盡さざることなきは、

琥珀を以て塵を吸ひ取るが如く、さまざまの教を受けて、相益することの多きは、神藥を以て、持病を根絶させると同じである。君の徳は、仙山の岸が、終古巍立して、少しも軟弱せぬが如く、氣は、秋の空の銀河の如く、朗然瑩徹して、逆巻く波だに立たぬ。目出たき鳳凰は、蓬蒿に止まる斥鴳などをば顧みもせず、雲韶などいふ結構な雅樂は、野蠻人の曲譜を壓倒すること、勿論である。しかも、名譽を争ひ求め、まぐれにでも的中でやうといふ様な者どもは、君を邪魔物あつかひし、口を勝げて、蟬の様に鳴き立てるが、びくともせず、君は曩に此に來らざりし時だに、聲名すでに赫赫として居たので、はじめて、鼓を鳴らして、兩軍對陣すれば、敵が第一に敗北し、鬪難の場で勝つた難は、毎毎先つて鳴き立てると同じく、君の意氣は昂然として揚がり、遠き雲井の果までも一飛びに飛び渡る程であつた。ここに、東野は、世の常ならぬ君の跡を繼ぎ、長い釣絲に多くの牛を餌として懸け、遠く去つて東海に釣を垂れやうといふ意氣込みで、空を穿つて攀ち上り、岡や蟻塚などを小さなものとし、日光に照らされては、蒼鷗の如き荒い織維で織つたものは、あまり立派にも見えないといつて、務めて遠大な處に著眼して居る。これに反して、かく申す韓愈は、御話にも成らぬもので、一度、選調に遭つて懲りたものだから、唯だ憤みに憤み、鰥にでも觸れる様な想を爲し、至極のんきに構へ、承諾して可なるもののみを抱いて、その他に及ばず、小心翼翼として、自ら戒を申べ、落度の無い様にと心がけ、日日聖人の書を校勘して讀誦し、俸祿を盜食して居るから、敢て之を食ひ盡さうとは

しない。願ふところは、款段の緩馬に乗つて、時たま出かける暇さへあれば善いので、何も廟堂の上  
に立つて見事な玉を握る様な身分に成りたいとは思はない。わが節操の薄弱なるは、竹や杉にだも及  
ばず、わづかに發する芳氣は、蓬や薤位なものに過ぎぬ。ここに、高明なるは、何を以て體驗とする  
かといへば、柔中に強味を存して、巧に世を渡ることであるが、不肖な身には、どうも出來さうにも  
無いことと思はれる。

【餘論】この聯句は、初に雨に阻まれて、近ごろ稍や疎濶なるを詫び、次に孟簡の人物に及び、従前  
交際の際に觀たことを寫し、次に東野、次に韓愈の身の上に及び、反照的に欽慕の敬意を表出したの  
である。朱竹垞は「大約、交情を敘し、雨を借つて興を起す」といひ「詩も亦た跌宕にして姿態あり、  
但だ奇附は諸篇に若かず」といつて居る。

遠遊聯句

遠遊聯句

別腸車輪轉、一日一萬周、郊

別腸、車輪轉ず、一日一萬周。

離思春冰泮、瀾漫不可收、愈

離思、春冰泮け、瀾漫として收むべからず。

馳光忽以迫、飛轡誰能留、愈

馳光、忽ち以て迫る、飛轡、誰か能く留めむ。

取之詎灼灼、此去信悠悠、朔

これを取ること、詎ぞ灼灼たる、此を去つて、信に悠

楚客宿江上、夜魂棲浪頭、

楚客、江上に宿せば、夜魂、浪頭に棲まむ。悠たり。

曉日生遠岸、水芳綴孤舟、

曉日、遠岸に生じ、水芳、孤舟を綴る。

村飲泊好木、野蔬拾新柔、

村飲、好木に泊し、野蔬、新柔を拾ふ。

獨含悽悽別、中結鬱鬱愁、

獨り悽悽の別を含んで、中に鬱鬱の愁を結ぶ。

人憶舊行樂、鳥吟新得儔、郊

人は舊行樂を憶ひ、鳥は新に儔を得たるを吟す。

靈瑟時宵宵、露猿夜啾啾、

靈瑟、時に宵宵たり、露猿、夜啾啾たり。

憤濤氣尚盛、恨竹淚空幽、

憤濤、氣、尚ほ盛に、恨竹、涙、空しく幽なり。

長懷絕無已、多感良自尤、

長懷、絶だ已むなく、多感、良に自ら尤む。

卽路涉獻歲、歸期眇涼秋、

路に卽いて獻歲を涉り、歸期、涼秋渺たり。

兩歡日牢落、孤悲坐綢繆、愈

兩歡、日に牢落、孤悲、坐ながら綢繆。

觀怪忽蕩漾、叩奇獨冥搜、

怪を觀て忽ち蕩漾、奇を叩いて獨り冥搜。

海鯨吞明月、浪島沒大漚、

海鯨、明月を呑み、浪島、大漚を沒す。

我有一寸鈎欲釣千丈流。  
 良知忽然遠壯志鬱無抽。郊  
 烟魅暫出沒蛟螭互蟠纏。  
 昌言拜舜禹舉颯凌斗牛。  
 懷糲賢屈乘桴追聖丘。  
 飄然天外步豈肯區中囚。愈  
 楚些待誰弔賈辭緘恨投。  
 騎明弗可曉祕魂安所求。  
 氣毒放逐域蓼雜芳菲疇。  
 當春忽淒涼不枯亦颯颯。  
 貉諸衆猥歛巴語相啾啾。  
 默誓去外俗嘉願還中州。  
 江生行既樂躬輦自相勸。

我に一寸の鈎あり、千丈の流に釣らむと欲す。  
 良に知る、忽然として遠きを、壯志鬱鬱として抽くなし。  
 烟魅、暫く出沒、蛟螭、互に蟠纏。  
 昌言、舜禹を拜し、舉颯、斗牛を凌ぐ。  
 精を懷いて賢屈に値り、桴に乗じて聖丘を追ふ。  
 飄然として天外に歩す、豈に肯て區中に囚はれむや。  
 楚些、誰の弔ふを待つ、賈辭、恨を緘みて投ず。  
 明を騁して曉すべからず、祕魂、安んぞ求むるところあ。  
 氣は放逐の域に毒し、蓼は芳菲の疇に雜はる。「らむ」  
 春に當つて忽ち淒涼、枯れずして亦た颯颯。  
 貉諸、衆く猥歛し、巴語、相啾啾す。  
 默誓、外俗を去り、嘉願、中州に還る。  
 江生、行く、既に樂む、輦を躬らして、自ら相勸はす。

飲醇趣明代。味腥謝荒陬。郊  
 馳深鼓利機趨險驚蜚輪。  
 擊石沈斬尙開弓射鵝毳。  
 路暗執屏翳波驚戮陽侯。  
 廣泛信縹眇高行恣浮游。  
 外患蕭蕭去中悒稍稍瘳。  
 振衣造雲闕跪坐陳清猷。  
 德風變讒巧仁氣銷戈矛。  
 名聲照四海淑問無時休。  
 歸哉孟夫子歸去無夷猶。愈

醇を飲んで、明代に趣き、腥を味うて、荒陬を謝す。  
 深きに馳せて、利機を鼓し、險に趨つて、蜚輪に驚く。  
 石を撃いで、斬尙を沈めむとし、弓を開いて鵝毳を射む」  
 路暗くして屏翳を執へ、波驚いて陽侯を戮す。「とす」  
 廣泛、信に縹眇、高行、恣に浮游。  
 外患、蕭蕭として去り、中悒、稍稍として瘳えむ。  
 衣を振つて雲闕に造り、跪坐して清猷を陳ぶ。  
 德風、讒巧を變じ、仁氣、戈矛を銷さむ。  
 名聲、四海を照らし、淑問、時に休むなし。  
 歸れや、孟夫子、歸り去つて、夷猶する無かれ。

【字解】(一) 別勝、別離の際に於ける心腸。(二) 春冰泮、春の水が解ける。(三) 湖漫、水の廣がる貌。(四) 馳光、龍照の  
 前に馳光「再中」とある、馳せ行く光、太陽をいふ。(五) 飛輪、陸機の詩に方駕振飛輪とある、手綱を飛ばす、馬を走らすこ  
 と。(六) 水芳、水草の花。(七) 擊、つづき、連る。(八) 村飲治好木、村店に飲まむとして舟を嘉木に繫ぐ、東野蘭居の詩に嘉  
 木偶良酌、芳陰庇清評といるへと同義。(九) 舊行樂、漢書楊惲傳、孫宗會に報する書中に人生行樂耳とある。(一〇) 獵瑟、湘靈

の器、楚辭の遠遊に「使湘靈鼓瑟兮」とある。【一】漢書 說文に「露は、雲、日を覆ふなり」とある。猿の雲間に在るをいふ、楚辭の山鬼に「猿啾啾兮秋夜鳴」とある。【二】慎微 吳越春秋に「伍子胥、劍に伏して死す、吳王、その尸を取つて之を江中に投ず、乃ち流に隨ひ、波を揚げ、瀉激して岸を刷す」とある。【三】恨竹 即ち舜の二妃の事、數ば前に見ゆ。【四】涉歎 楚辭の招魂に「獻歲發春兮」とあつて、その注に「歳の始めて来り進むを言ふなり」とある。【五】涼秋 文選李陵の蘇武に答ふる書に「涼秋八月」とある。【六】海鮪吞明月 廣州記に「鮪腹の目は即ち明月の珠」とある。【七】昌言 書經に「禹、昌言を拜す」とあつて、孔安國の傳に「昌言ると爲すを以て、故に之を拜受す」とある。舜は蒼梧に葬り、禹は會稽に葬り、その地、皆江南に在るが故に云ふ。【八】中牛 吳楚の分野。【九】懷舊鶴歸 楚辭の離騷に「懷椒糈而累之」とあつて、王逸の註に「糈は糯米、神を養ふる所以」とある。齊魯記に「屈原を祭る爲に竹筒に米を貯ふる事が見えて、前の會合聯句の條に引いて置いた。鶴は送る。賢屈は賢良なる屈原。【一〇】乘桴追御丘 論語に「道行はれず、桴に乘つて海に浮ばむ」とある。說文に「桴は、木を編んで以て渡す」とある。華丘の丘は孔子の名。【一一】楚熱替羅甲 說文に「楚は羅甲なり」とあり、沈存中の筆談に「湖湘の人、凡そ樂呪の句尾、皆楚と稱す、乃ち楚人の舊俗」とある。楚辭に「宋玉、その御屈原が脚なくして放逐せられたり、長沙王太傅となる。意、自得せず、湘水を渡るに及んで、賦を爲り、以て屈原を用ふ」とある。【一二】騶明 將法に「恩接するに、賈誼、屈原を引うて放逐す不可不懷といふ、知らず、原は宗臣にして去る義なし、蓋し自ら其明を辭ふ、更に何を以て前人を騶むや、公の意、これを指す」とある。【一三】騶芳菲 騶は茶茗、味辛し、それが芳草の如に雜つて居る。【一四】楚語 騶は夷族の人。楚辭の九章に「秋之結風」とあつて、王逸の注に「楚は楚なり」とあり、又方言に「楚は然なり、又揚子に始風方に六國に據して蔚牙歎す、王逸曰く、楚は曠なりと、方言に曰く、楚は然なり、南楚凡そ熱を言うて楚といふ。元次山に、歎乃曲あり、亦た骨鶴、黃昏直、歎乃を讀んで換鶴と爲すは誤れり、今或は寫して歎の字に作る、亦た誤れり、乃ち却つて嘗に骨鶴なるべきなり。又史記孟母曰く、歎、と。尸子に「禹、逆善の鼓あつて凱奏に備ふなり。韋孟の詩、凱奏賦生、亦た即ち此字、夫れ、歎と歎と、點畫本と同じからず、大約、曠と歎、曠と歎、曠と歎の如きのみ、併せて之を註す」とある。【一五】巴郡相摩 騶註には「字書を改ふるに曠の字なし、公、三學士に咨するに、曠の字を用ひ、征蜀聯句に曠の字を用ひ、これを改ふるに、當に曠を以て正と爲すべし」とあり、顧注には「曠と同じ、漢東方朔傳、伊靈亞とは辭未だ定らざるなり」とある。巴地の言語は、不定で分らない。【一六】刺室 自分で車を推す。【一七】騶 文選陸機の文賦に「非三餘力之所勦」とあり、說文に「勦は力を并すなり」とある。【一八】明代 聖明の御世。【一九】畫 畫は飛、輪は車。【二〇】新街 王逸の楚辭序に「屈原、楚の懷王に仕ふ、同列の大夫上官靳尚、その能を妬害し、ともに之を誣毀す」とある。【二一】騶吟 騶吟、騶吟、騶吟に「史記、騶吟は即ち騶兜の字。古文尙書、亦た騶兜を作つて、騶吟となす。楚、これを崇山に放つ」とあり、なほ「接するに、靳尙騶吟は、皆南方に在り、恐らくは、その鬼となり、樂を爲さむことを、故に之を沈射せむと欲するなり。此と下の二句と、公、ともに意託するところあり、當時騶兜の人を指すのみ」とある。【二二】屏 漢書司馬相如傳大人賦に「時若騶吟將混濁、令召屏辭、騶三風伯、利三雨師」とあつて、騶兜の注に「屏辭は、天神の使なり」とある。將法に「一に濁夷に作る。莊子に、濁夷、これを得て以て大川に游ぶ。楚辭の遠遊に令騶若騶。濁夷、濁亦た汚に作る、天間に清濁起雨、山海經、又水夷に作る、恩接するに、恐らくは、他職なし、大抵古字相通するもののみ」とある。【二三】陽侯 攝淮の反離塵に浸陽侯之素波とあつて、法に「陽侯は、古しへの陽侯、即あつて自ら江に投ず、その時、大波となる」とある。【二四】中他 心中の憂。【二五】仁氣 禮記に「これ天地の仁氣なり」とある。【二六】淑問 漢書匡衡傳に「淑問、詔外に揚ぐ」とある、よき評判。【二七】夷指 楚辭の九歌に「君不夷指」とあつて、王逸注に「騶廉なり」とある、又辭廉の詩に騶神子夷指とある。

【題義】遠遊とは、孟東野が、深陽尉に任せられて、江南に赴任すること、即ち元和三年の事である。かの鳴の字數十も使つたのを以て有名であつて、現に文章軌範にも引いてある送孟東野序は、

矢張、この時作つたので、その末段に「その存して下に在るものは孟郊東野、はじめて其詩を以て鳴る。その高きこと魏晉に出で、懈らずして、古に及ばむ。その他は、漢氏に浸淫す。吾に従つて遊ぶものは、李翱・張籍、その尤なり。三子者の鳴る、信に善く鳴るなり。抑も知らず、天、將た其聲を和らげて國家の盛を鳴らさしむるか。抑も將た其身を窮餓し、其心腸を思愁して、自ら其不平を鳴らさしむるか。三子者の命は、天に懸れり。その上に在るや、奚を以て喜ばむ。その下に在るや、奚を以て悲まむ。東野の江南に役せらるるや、釋然たらざるが若きあり、故に吾、その天に命せらるるものを道うて以て之を解く」とある。この頃、韓愈は、汴澠二州の幕僚を経て、都に召し還され、大分世慣れた結果として、自己の價値を認め、これから一番發しようと思つて、意氣大に揚がつた時であつたから、東野が赴任するのを面白くなく思つて居る様なのが、もどかしくて堪えられず、これを和めて、命を天に歸し、徐に他日を期すべき旨をいつたのである。但し、この詩は、當人の東野との聯句であつて、まさしく、その情思を盡し、結末に於ては、功名を以て、東野に期し、その北歸を冀うたのである。それから、この聯句は、凡そ四十韻、東野は二十、韓愈は十九、そして、李翱が唯だ一韻、李翱の詩句として世に傳はるものは、唯だ此だけで、大體詩は其長所では無かつたと、普通世に稱せられて居る。邵博の聞見後錄に「李習之、韓退之・孟東野と善し、習之の文に於ける、退之の敬するところなり。退之、東野と唱酬して、一時を傾く、習之、獨り詩なし、退之讓せざるなり」とある。

【詩意】別れを爲すに際し、わが腸は、車輪の如く廻轉し、一日に一萬回の多きに及ぶ位。離愁は、春氷の解けて水の渺漫たるが如く、決して、取りまとめることが出来ない。日影は頻りに馳せ、忽として暮れむとし、馬に乗り出すのを、誰も留める譯には行かぬ。ここに、別離を爲すことは、灼灼として明白であり、ここより去れば、千里の遠きを隔て、悠悠として盡きる時は無い。身は、楚地の客として、大江の邊に宿すれば、旅魂飄蕩として、夜、浪頭に住む様な想を爲すであらう。その内に、東雲の空晴れて、曉日は、遠岸より生じ、水草の花は、孤舟に連つて、さすがに風情がある。そこで、村店に就いて酒を飲まむが爲に、舟を嘉木に繋ぎ、又新しい野菜を摘んで、それを煮る。その時にも、獨り悽愴たる離別の愁を含み、心中には無限の憂愁を鬱結して、殆んど堪へられず、慨然として、昔日の行樂を思ひ、鳥が新に友を得て喜んで鳴くにも及ばぬといふことをつくづくと感ずるので、道中の有様は、大方、こんなものであらう。江南には、懐古の情を催すべき遺蹟が多いので、湘靈の彈する瑟は、かすかに響き、雲間の峽樹に棲む猿は、夜啾啾として鳴き、伍子胥の餘憤は、怒濤となつて、怨氣今なほ盛に、二妃の恨を留めた斑竹には、涙の痕が残つて居る。これ等の故事を懐へば、それからそれへと移つて、決して止む時なく、本來多感なる君は、まことに、自ら嘆き喟つ外はない。その道中に於て、新年に逢ひ、そして、歸期は、涼秋であらうが、何年先の事とも分からぬ。二人相遇うて歎を爲せしことは、日に日に牢落として、其跡淋しく、ひとり悲む心は、坐ながらに附きまとうて

居るであらう。江南は、隨處に珍らしい事物があるから、これを觀ては、心を濇深せしめ、そして、更に冥搜を費すのである。海中に居る長鯨の目は、きらきらとして明月を呑んだかと思はれ、波間に没する島は、泡の機である。われは、一寸もある大きい釣針を持つて居るから、千丈の深い流に墮んで釣を垂れやうと思ふ。しかし、この身、京を離れること、すでに遠く、さしもの壯心、空しく鬱結して、抽き出すことの出来ないのは、まことに残念である。わが居る處を環つて、烟媚魑魅の類は、數ば出沒し、蛟龍は互に巻きつき合つて居る。そこに舜禹の故跡があるにつけて、これ等の聖王が昌言を拜せしことを思ひ出で、自分で、一身を修めたいと思ひつつ、やがて、又、帆を擧げ、吳楚の地を過ぎて北歸することもあらうと、只だそれを頼みとする。それから、屈原の身を投げた處を過ぎては、竹筒に入れた米を水中に投じて之を弔ひ、又江海の渺茫たるを見ては、桴に乗つて、遠き昔の聖人の跡を追はうと思ふ。かくの如く、飄然として天外に歩するのは、聊か愉快であつて、いかで、區中の小人同様、狹い處に跼蹐して居るべきぞ。しかし、江南は、瘴癘の地で、決して永住すべき處ではなく、魂魄の離散するを誰が来て弔つて、楚些の歌を作るであらうか。さういふ人も先づ無いので、死後に於て、賈誼が屈原を弔つた様に、恨を減んで、文章を水中に投げ込んで呉れた處で、何の役にも立たない。われも亦た屈原の如く、自ら其明を掩うて仕舞へば、人を論ず處ではなく、魂が一たび幽暗の中に秘められたならば、それでお仕舞、その上、何を求めるといふことも出来ない。どうせ放逐され

た人の行く區域であるから、毒熱の氣が瀰漫して居て、蠻人の羣る中に、自分一人行くのは、夢が花畑の中に雜つて居る様に思はれて、無論、他人扱ひにされるに相違ない。その地は、氣候の劇變するのを常とし、春に當つて、忽ち凄涼の有様となり、滿眼の草木、未だ枯れざるに、風は麗麗の響をなし、籟族の歌は、何やら頻りに嘆き悲むが如く、巴人の言葉は、處處違つて居て、いづれが正しいとも分らない。自分は、默然として、心に誓ひ、かかる殊方の風俗に化せられることなく、さうして、必ず中國に還りたいと、只だ其事のみを願つて居る。その時しも、江中に春水が生じたならば、舟で行くのが樂しく、何も自分で車を推して苦むにも及ばない。何は兎もあれ、身には醇徳を食うて、聖明の御世に持て囃される様にし、かかる邊鄙の地に在つて、腥い臭のする蠻族の仲間になることは、どうか御免蒙りたいと、唯だ此事のみを心に念じて居る。水の深みを馳せ行くには、便利に出来た機を鼓する外はなく、路の險しい處に差しかかると、輕車でさへも辟易するので、何分にも、些の障害なく、萬事願の儘に有りたきものである。かの屈原を讒殺した新尙の如きは、古今稀に見るところの賊臣であるから、石を鏝りとして水中に沈め、驢兜は、舜の時に逆を爲したものであるから、弓を開いて之を射り、その鬼にして存ずるとも、惡虐を爲し得ぬやうにしたならば、定めて愉快であらう。又路の暗きを侵して、屏驛といつて、自ら天使と僞稱する惡者を取り押へ、波立ち騒ぐ間に入つて、陽侯といふ水神を殺して仕舞ひ、江南の僻處を旅するとき、晨夜水土に於て害を人に加へるものを根

絶する様に致したい。かくて、廣い水に泛んでも、煙波縹緲たるのみ、高い山に登つても、勝手に遊賞することが出来る。さういふ風に、外患が蕭蕭として無くなれば、中心の悵鬱も、段段に平瘳するであらう。その後、衣を振つて、朝廷に歸參し、玉階の前に跪いて、おのが嘉謀を奏上したならば、君の徳風を以て、讒巧を事とする末世の風俗を變じ、仁氣を以て邊境の兵戈を銷し、再び騷亂の起らぬやうにすることも出来やうし、君の名聲は、赫赫として四海を照らし、天子よりの存問も常に絶えぬであらう。さういふ様に成るときは、孟夫子よ、早速都に立ち歸つて猶豫せぬが善い。それにつけても、今日の赴任は、まことに厭でもあらうが、心得方一つで、後來立身の端緒とも成ることであるから、その積りで、一番しつかりと遣つて貰ひたい。

【餘論】この聯句に就いて、朱竹垞は「行客飄泊」「居人寂寥」「遠游景物」「孟、預め歸るを言ふ」、「これ蓋し喻を借つて時を刺る、奸を誅し、讒險を除くを謂ふのみ」、「韓孟の歸るを冀ふ」等の六段に分ち、上の解義も、大抵これに従つたのである。何義門は「この篇聯句、別に一格たり、逐段起止、大概、江南の景物典故を言ひ、しかも、離別の意を以て收住す、末二段は、結んで歸思に至るなり」といつて居る。なほ總評として、蔣之翘は「按するに、屈原、すでに放たれ、悲嘆之餘、宇宙を眇觀し、かつて遠游を作つて、以て憤懣を泄らす。可馬相如、これを祖として、大人賦を作る。自後、劉向の九嘆、曹植の樂府、亦た皆遠游篇あり。然れども、屈原相如は、四方上下を兼て之を言ふ。公、

この詩を聯ねて、以て東野を南に送る、序するところは、只だ江南の事、その間の情意、大抵昔人と相同じ。蓋し、亦た寓言するところ多しといふといひ、俞樾は「韓孟二人、意氣中に相合す、仍つて、緩急均調の妙あり。蓋し、東野の思沈鬱、故に時に危苦の音を見る。昌黎の興激昂、故に時に雄豪の氣を見る。これ同心の言、相濟うて相成る所以の者なり」といつて居る。なほ、李翺は、この聯句の中で、たつた二句一韻、即ち十字を作つただけであるので、これに就いて、葉夢得は「人の才力、信に自ら限あり、李翺、皇甫湜は、皆退之の高弟、而して、二人、獨り其詩を傳へず、韓集公安園池の詩の後に題するに云ふ、爾雅注、蟲魚、定非、福善人、又用將、濟、諸人、捨得業、孔顔とあり、意ふに、その徒に益なきを爲すを譏るが若きなり。翺は、遠遊聯句に見え、唯だ此二語、一たび出づるの後、遂に復た見えず、亦た知るべし。然れども、二人、工なるところに非ざるを以て作らず、愈、不能に于て、これを爲すを強ひず、善く其短を用ふと爲すべし」といひ、劉放は「唐の李習之、退之、東野と聯句す、殊に取るべきなし。鄭州、一石刻を掘る、刺史李翺の詩に云ふ、

縣君愛碑渠。遠水恣行游。鄙性樂山野。掘地得他溝。兩岸植芳草。中間添清流。所向既不同。碑斲名自修。從他後人見。景趣誰爲幽。

王深の文編、習之の集を次す、これ別に一李翺のみ、習之は、詩を能くせざるなり」といつて居る。しかし、全唐詩を見ると、李翺の詩は七首、皇甫湜の詩は三首残つて居て、就中、李翺の

練得身形似鶴形。千株松下兩函經。我來問道無餘說。雲在青霄水在瓶。  
の一首は、詩としてよりも、禪偈として著名である。胡混の二人に全く詩が無いといふのは、明代以前、然るべき書物が無かつたから、論者は大膽にも臆断を下したるに過ぎず。今では、前記の全唐詩などがあつて、すぐに調べる事が出来るから、まことに有り難い。但し、二人とも詩が無いでもないが、断じて、家を成すに足らぬことに就いては、我輩とても、もとより異論は無い。

晚秋郾城夜會聯句

晚秋郾城夜會の聯句

從軍古云樂、談笑青油幕。

從軍、古しへ、樂しと云ふ、談笑す青油の幕。

燈明夜觀棊、月暗秋城柝。

燈は明かなり夜觀の棊、月は暗し秋城の柝。

羈客方寂歷、驚鳥時落泊。

羈客方に寂歷、驚鳥時に落泊。

語闌壯氣衰、酒醒寒砧作。

語闌にして壯氣衰へ、酒醒めて寒砧作る。

遇主貴陳力、夷凶匪兼弱。

主に遇うて力を陳ふるを貴び、凶を夷ぐるは弱を兼ぬ。

百牢犒輿師、千戶購首惡。

百牢、輿師を犒ひ、千戸、首惡を購ふ。

平生恥論兵、未暮不輕諾。  
徒然感恩義、誰復論勳爵。  
多士被沾汚、小夷施毒蠱。  
何當鑄劍戟、相與歸臺閣。  
室婦歎鳴鶴、家人祝喜鵲。  
終朝考著龜、何日親蒸酌。  
間使斷津梁、潛軍索林薄。  
紅塵羽書靖、大水沙囊涸。  
銘山子所工、挿羽余何作。  
未足煩刀俎、祇應輸管鑰。  
靈矢逐天狼、電矛驅海若。  
靈誅固無縱、力戰誰敢卻。  
峨峨雲梯翔、赫赫火箭著。

平生、兵を論ずるを恥ぢ、未暮、輕しく諾せず。  
徒然として恩義を感ず、誰か復た勳爵を論ぜむ。  
多士、沾汚せられ、小夷、毒蠱を施す。  
何ぞ當に劍戟を鑄て、相與に臺閣に歸るべき。  
室婦は鳴鶴を歎じ、家人は喜鵲を祝す。  
終朝、著龜を考ふ、何の日か、蒸酌を親らせむ。  
間使、津梁を斷ち、潛軍、林薄を索る。  
紅塵、羽書靖に、大水、沙囊涸る。  
山に銘するは、子が工なるところ、羽を挿むは、余何ぞい  
未だ刀俎を煩はすに足らず、祇だ應に管鑰を輸るべし。  
雨矢、天狼を逐ひ、電矛、海若を驅る。  
靈誅固より縱すなく、力戰誰か敢て卻かむ。  
峨峨として雲梯翔けり、赫赫として火箭著く。

聯句 晚秋郾城夜會聯句



連空際雉堞照夜焚城郭愈 空に連つて雉堞を照り、夜を照らして城郭を焚く。

軍門宣一令廟算建三略愈 軍門に一令を宣べ、廟門に三略を建つ。

雷鼓揭千槍浮橋交萬笮封正 雷鼓、千槍を掲げ、浮橋、萬笮を交ふ。

蹂野馬雲騰映原旗火鑠愈 野を蹂りて、馬は雲騰し、原に映じて旗は火鑠す。

疲氓墜將拯殘虜狂可縛愈 疲氓墜ちて將に拯はむとし、殘虜、狂して縛すべし。

摧鋒若羆兕超乘如猱獍愈 鋒を摧いて羆兕の若く、超乘して猱獍の如し。

逢掖服翻慚漫胡纓可愕封正 逢掖、服、翻つて慚づ、漫胡、纓、愕くべし。

星殞聞雉雉師興隨唳鶴愈 星殞ちて、雉雉を聞き、師興つて、唳鶴に隨ふ。

虎豹貪犬羊鷹鷂憎鳥雀愈 虎豹、犬羊を貪り、鷹鷂、鳥雀を憎む。

燒陂除積聚灌壘失依託封正 陂を燒いて積聚を除き、壘に灌して依託を失ふ。

憑軾論昏迷執父征暴虐封正 軾に憑つて昏迷を論し、父を執つて暴虐を征す。

倉空戰卒饑月黑探兵錯愈 倉は空しくして戰卒饑、月は黒くして探兵錯まる。

兇徒更蹈藉逆族相啗嚼愈 兇徒更に蹈藉し、逆族相啗嚼す。

軸轆互淮泗旆旌連夏鄂愈 軸轆、淮泗に互り、旆旌、夏鄂に連る。

大野縱氏羌長河浴驪駱封正 大野、氏羌を縱にし、長河、驪駱を浴す。

東西競角逐遠近施增繳愈 東西競うて角逐し、遠近、增繳を施す。

人怨童聚謠天殃鬼行瘡愈 人怨、童、謠を聚め、天殃、鬼、瘡を行ふ。

漢刑支郡黜周制開田削愈 漢刑、支郡黜けられ、周制、開田削らる。

侯社退無功鬼薪懲不恪封正 侯社、無功を退け、鬼薪、不恪を懲らす。

余雖司斧鑕情本尙丘壑愈 余、斧鑕を司ると雖も、情、本と丘壑を尙ふ。

且待獻俘囚終當返耕穫愈 しばらく俘囚を獻するを待て、終に耕穫に返るべし。

藁街陳鈇鉞桃塞興錢罇愈 藁街、鈇鉞を陳ね、桃塞、錢罇を興す。

地理畫封疆天文掃寥廓封正 地理、封疆を畫し、天文、寥廓を拂ふ。

天子憫瘡痍將軍禁鹵掠愈 天子、瘡痍を憫み、將軍、鹵掠を禁す。

策勳封龍領歸獸獲麟脚愈 勳を策して龍領に封せられ、歸獸、麟脚を獲たり。

詰誅敬王怒給復哀人瘼愈 詰誅、王の怒を敬み、給復、人の瘼を哀む。

澤髮解兜牟。醜顏傾鑿落。封正  
 安存惟恐晚。洗雪不論昨。  
 暮鳥已安巢。春蠶看滿箔。愈  
 聲明動朝闕。光寵耀京洛。  
 旁午降絲綸。中堅擁鼓鐸。封正  
 密坐列珠翠。高門塗粉牒。  
 跋朝賀書飛。塞路歸鞍躍。愈  
 魏闕橫雲漢。秦關束巖嶠。  
 拜迎羅藥韃。問遺結囊橐。封正  
 江淮永清晏。宇宙重開拓。  
 是日號昇平。此年名作噩。愈  
 洪赦方下究。武廳亦旁魄。  
 南據定蠻貊。北攬空朔漠。封正

澤髮、兜牟を解き、醜顔、鑿落を傾く。  
 安存、惟だ晩からむことを恐れ、洗雪、昨を論せず。  
 暮鳥、すでに巢に安んじ、春蠶、箔に滿つるを見る。  
 聲明、朝闕を動かし、光寵、京洛に耀く。  
 旁午として絲綸を降し、中堅、鼓鐸を擁す。  
 密坐、珠翠を列ね、高門、粉牒を塗る。  
 朝を跋りて賀書飛び、路を塞いで歸鞍躍る。  
 魏闕、雲漢に横はり、秦關、巖嶠を束ぬ。  
 拜迎、藥韃を羅ね、問遺、囊橐を結ぶ。  
 江淮、永く清晏、宇宙、重ねて開拓。  
 この日、昇平と號し、この年、作噩と名づく。  
 洪赦、方に下究、武廳、亦た旁魄。  
 南に據つて蠻貊を定め、北に攬んで朔漠を空しうす。

儒生恆教化。武士猛刺斫。  
 吾相兩優游。他人雙落莫。愈  
 印從負鼎佩。門爲登壇鑿。  
 再入更顯嚴。九遷彌奢譎。封正  
 賓筵盡狐趙。導騎多衛霍。  
 國史擅芬芳。宮娃分綽約。愈  
 丹掖列鷓鴣。洪鑪衣狐貉。  
 攜文揮月毫。講劍淬霜鐔。封正  
 命衣備藻火。賜樂兼拊搏。  
 兩廂鋪繡毳。五鼎調勺藥。愈  
 帶垂蒼玉佩。轡盛黃金絡。  
 誘接謂登龍。趨馳狀傾葢。封正  
 青娥翳長袖。紅頰吹鳴籥。

儒生、教化に恆ひ、武士、刺斫を猛くす。  
 吾が相、兩つながら優游、他人、雙に落莫。  
 印は鼎を負ふに従つて佩び、門は壇に登るが爲に鑿る。  
 再び入つて更に顯嚴、九たび遷つて彌よ奢譎。  
 賓筵、盡く狐趙、導騎、多くは衛霍。  
 國史、芬芳を擅にし、宮娃、綽約を分つ。  
 丹掖、鷓鴣を列ね、洪鑪、狐貉を衣る。  
 文を携べて月毫を揮ひ、劍を講じて霜鐔を淬く。  
 命衣、藻火を備へ、賜樂、拊搏を兼ぬ。  
 兩廂、繡毳を鋪き、五鼎、勺藥を調ふ。  
 帶は蒼玉の佩を垂れ、轡は黄金の絡を盛む。  
 誘接、登龍と謂ひ、趨馳、傾葢に狀る。  
 青娥、長袖を翳し、紅頰、鳴籥を吹く。

聯句 晚秋即戎夜會聯句

儻不忍辛勤。何由恣歡諠。

儻し辛勤を忍びずんば、何に由つてか歡諠を恣にせむ。

惟當早貴富。豈得暫寂寞。

惟だ當に早く貴富なるべし、豈に暫くも寂寞なるを得。

但擲顧笑金。仍祈却老藥。

但だ顧笑の金を擲ち、仍は却老の藥を祈む。

歿廟配罇罍。生堂合鑿罇。

歿廟、罇罍に配し、生堂、鑿罇を合す。

安行庇松篁。高臥枕莞蒹。

安行、松篁に庇れ、高枕、莞蒹を枕にす。

洗沐恣蘭芷。割烹厭脾臄。

洗沐、蘭芷を恣にし、割烹、脾臄に厭く。

喜顏非忸怩。達志無隕穫。

顔を喜ばして忸怩に非ず、志を達して隕穫するなし。

談諧酒席展。慷慨戎裝著。

談諧、酒席を展べ、慷慨、戎裝を著く。

斬馬祭旄纛。無羔禮芒屨。

馬を斬つて旄纛を祭り、羔を無して芒屨を禮す。

山多離隱豹。野有求申媯。

山には隱を離るる豹多く、野には申ふるを求むるの。

推選閱羣材。薦延搜一鷲。

推選、羣材を閱し、薦延、一鷲を搜る。

左右供詔譽。親交獻談噉。

左右、詔譽を供し、親交、談噉を獻す。

名聲載掄揚。權勢實熏灼。

名聲、載ち掄揚、權勢、實に熏灼。

道舊生感激。當歌發酬酢。

舊を道うて感激を生じ、歌に當つて酬酢を發す。

羣孫輕綺紈。下客豐醴酪。

羣孫、綺紈を輕くし、下客、醴酪を豊にす。

窮天貢蹠異。匝海賜醕醢。

天を窮めて蹠異を賞し、海を匝つて醕醢を賜ふ。

作樂鼓還榷。從禽弓始彊。

樂を作して鼓還た榷ち、禽を從うて弓はじめて強る。

取歡移日飲。求勝通宵博。

歡を取り、日を移して飲み、勝を求めて、通宵博す。

五白氣爭呼。六奇心運度。

五白、氣、爭呼し、六奇、心、運度す。

恩澤誠布護。關頤已簪勺。

恩澤、誠に布護し、關頤、すでに簪勺。

告成上云亭。考古垂矩彙。

成を告げて云亭に上り、古しへを考へて矩彙に垂る。

前堂清夜吹。東第良晨酌。

前堂清夜の吹、東第良晨の酌。

池蓮折秋房。院竹翻夏籜。

池蓮、秋房を折り、院竹、夏籜を翻す。

五狩朝恒岱。三畋宿楊柞。

五狩、恒岱に朝し、三畋、楊柞に宿す。

農書乍討論。馬法長懸格。

農書、乍ち討論、馬法、長く懸格。

雪下收新息。陽生過京索。

雪、下つて新息を收め、陽、生じて京索を過ぎむ。

聯句 晚秋郡城夜會聯句

爾牛時寢訛。我僕或歌駟。正爾の牛、時に寢訛、我が僕、或は歌駟。  
帝載彌天地。臣辭劣螢燭。帝の載、天地に彌り、臣の辭、螢燭よりも劣し。  
爲詩安能詳。庶用存糟粕。愈詩を爲つて、安んぞ能く詳にせむ、庶はくは、用  
つて、糟粕を存せむ。

【字解】一、從軍古云樂。文選王樂、從軍者善樂、但問所從、雖とあり、樂の劉季儀の從軍行に何謂從軍樂とある。  
二、青油幕。宋の劉琦の顔峻に與ふる書に「朱修之は三代の叛兵、一朝、青油幕下に居り、謝宣明の面を作して人に向ふ」とあり、  
梁書宗室傳に「蕭韶、鄆州刺史となる、庾信、遠江夏を經るや、韶、接信甚だ薄く、信を青油幕下に坐せしむ」とある。青油幕は青幕、  
青油幕を以て之を爲るが故に云ふ。三、橋。拍子木、これを敲いて夜警をする。四、陳力。論語に見えたる字面。五、鼓。鼓、  
書經に鼓弱攻昧とある。六、百牢。左傳哀公七年に「公、吳に歸に會す、吳來つて百牢を殺す」とある。牢は牛羊の肉。七、與、  
師。左傳成公三年に「隸厥、齊侯に謂つて曰く、與師をして爾の地に入らしむる無かれ」とある。與は衆。八、千戶。將注  
に「侯なり」とある。九、首惡。穀梁傳に「諸侯は首惡たらず」とある。一〇、末毒。顧延年の詩に幼壯困孤介、末毒附三國良  
とあつて、その注に「晩年なり」とある。一一、小夷。吳元濟を指す。一二、毒。漢書に「魏の毒を致すに若かず」とあり、  
又「百姓新に毒を免る」とある。毒は殺すこと。一三、毒。漢書に「魏の毒を致すに若かず」とあり、  
記に「乾陽豫いて行人至る」とある。一四、燕。周禮大宗伯に「朝を以て燕享し、餼を以て夏享し、書を以て秋享し、羔を以て  
冬享す」とあり、禮記王制に「天子、諸侯、宗廟の祭、春には酌といひ、夏には膊といひ、秋には嘗といひ、冬には烝といふ」とあ  
る。一五、問使。漢書副通傳に「漢、ひとり問使を發して齊に下す」とあつて、顧師古の注に「問使とは、人をして問禮を伺うて  
舉行せしむ」とある。一六、罷軍。左傳隱公五年に「鄭人、奮を侵し、軍を前めて其後に軍す」とある。一七、密林。文選曹植  
の七啓に「密林、深薄窮阻とあり、王逸の楚辭注に「叢木を林といひ、草木交錯するを薄といふ」とある。一八、紅塵。李陵

の詩に紅塵蒼天地とある。一九、羽書。魏武奏事に「坐あらば、雜羽を以て木檄に挿む、これを羽檄と謂ふ」とあり、說文に「檄  
は、木簡を以て書を爲る、長さ尺二寸」とある。この句は、羽書稀少にして紅塵起らざるを云ふ。二〇、沙塵。漢書韓信傳に「楚  
の龍且、信と灌水を夾んで陣す。信、萬餘壘を爲つて、沙を盛り、以て上流を壘がしめ、兵を引いて且を擊ち、隔つて勝たず、還り走  
る、且、追うて水を渡る。信、壘を洗す。水、大に至る」とある。許彦周は、この句を實して「李正封、善く劍を揮す、大水沙塵  
の如き、便ち及ぶべからず」といつて居る。二一、銘山。後漢書賈逵傳に「賈、大に匈奴を破り、燕然山に登り、石に刻して功を勅  
し、班固をして銘を作らしむ」とある。二二、抑羽。即ち羽檄、李白の詩に抑羽破天驕とある。二三、刀組。史記の項羽本記に  
「樊噲曰く、人、方に刀組たり、我、魚肉たり」とある。二四、輪管。國語に「越王勾踐、大夫種をして成を吳に行はしめて曰く、  
請ふ、管鐘を委して國家に屬し、身を以て之に隨はむ」とある。二五、兩矢逐天狼。楚辭の九歌に「長矢兮射天狼」とあり、晉書  
天文志に「狼の一星、東井に在り、南を野將となし、怪掠を主る」とある。二六、電矛。ふるへば電の如く光る矛。二七、驅海若  
楚辭の遠遊に「令海若舞馬夷」とあつて、王逸注に「海若は海神の名なり」とある。二八、雲。文選陳琳が吳の將校部曲に徵せ  
し文に「江湖、以て雲霧を過るべし」とある。二九、雲梯。漢書霍去病傳に「力戰一日餘、士、敢て二心あらず」と  
ある。三〇、雲梯。管子に「公輸、雲梯を爲り、成るに垂んとして、大山、四に起る、謂はゆる善攻の具なり」とあり、杜市の時に  
雲梯七十城とある。三一、火箭。三國志に「諸葛亮、荊州を陳倉に攻むるや、雲梯衝車を以て城中に鳴む、照、火箭を以て之を射  
る」とある。三二、堆。公羊傳に「五楹にして堆、五楹にして堆」とある。三三、軍門。令。漢書周亞夫傳に「軍門都尉曰  
く、軍中、將軍の命を聞く、天子の詔を聞かず」とある。三四、三略。兵法の書に、黄石公の三略といふのがあつて、上中下に分か  
れて居る。三五、千槍。蒼頡篇に「木を刈つて兩頭銳なるものを槍と爲す」とある。三六、萬箭。說文に「符は契なり」とあり、  
元和郡國志に「翼州靈山縣に竿檣あり、竹葉を以て葉となし、北江水に架す」とあり、杜市の時に連竿動檣とある。三七、推鋒。  
梁の簡文帝の時に略地龜推鋒とある。三八、龍。龍は前の征蜀雜句に見ゆ。見は將注に「野牛なり、一角青色、重きこと千  
斤、或は云ふ、即ち犀の髣たるものなり」とある。三九、超。左傳僖公三十三年に「秦の師、周の北門を過ぐ、超、超するもの三

雜句 晚秋節候夜會雜句

百樂とあつて、杜預注に「趙樂とは、勇を示すなり」とある。【二】**獲**。將注に「獲は徐の屬、博物志、蜀山の南、高山の上に物あり、猿猴の如し、長七尺、人行能走、名づけて獲と云ふ」とある。又爾雅に「獲父善く顯る」とあつて、郭璞の注に「獲に似て大」とあり、杜市の詩に獲獲猗猗とある。【三】**遂報**。禮記の備行に「備に遂報の衣を衣ふことあり」といひ、鄭文注に「遂は猶ほ大のごときなり、大袂の衣」とある。【四】**漢胡**。莊子の說劍に「曼胡の縵を冠す」とあり、司馬彪の注に「曼縵にして文理なきを謂ふなり」とある。武士の冠の紐、魏都賦には曼を縵に作る。【五】**星眉間雄雉**。史記の封禪書に「秦の文公、石の若きものを陳倉の北阪城に墜て、之を祠る、その神、夜光輝、流星の若く、東南より來つて祠城に集まる。すなはち、雄雉の若く、その聲殿なり、云ふ、野雞花雉くと。一本を以て祠り、命じて陳寶といふ」とあり、晉書天文志に「景福元年、天狗、西南に墜つ、聖あり、雷の如し、野雉皆雉くとある。【六】**吟鶴**。晉書載記に「苻堅、百萬を以て入寇す、謝玄等、八萬を以て之を拒ぐ。堅、大に敗れ、衆奔る。風聖鶴吟を聞き、以て王師の至れりと爲す」とある。【七】**虎豹宜犬羊**。後漢書郡太傅に「虎兇を驅つて犬羊に赴く」とある。【八】**鷹鷂鳥雀**。左傳文公十八年に「鷹鷂の鳥雀を逐ふが如きなり」とある。【九】**狼狽**。波は隴防。【十】**灌**。散鹿を水攻にする。【十一】**盟**。左傳文公二十八年に「君、絀に盟つて之を盟る」とあり、又漢書鄧食其傳に「絀に盟つて齊の七十餘城を下す」とあつて、顧師古の注に「言ふは、但だ安衆、車に乗じて遊説し、兵衆を用ひず」とある。【十二】**執交**。詩經に伯也執交とあつて、その注に「交は長丈二、刃なし」とある。釋注に「晉人論すらく、正封の詩、頗る事實を摺類す。然れども、その執交を用ふるの句は、乃ち衛人、行役時を過ぎて反ちざるを刺つて作るもの、これ實に取用未だ精しからずと。趙以爲へらく、非なりと。按ずるに、詩に執交と稱するは、儀に兵を用ふるを主として言ひ、下に爲王前驅といふ、亦た是れ、詩人、大義の存するところを知る。正封、これを用ふる、本と稱すべきなし。誤らず、記者何ぞ拘泥して此に至る」といつて居る。【十三】**絀**。絀は隴防に同じ。漢書武帝紀に絀離千里とあつて、李斐の注に「絀は、始後、抱を持する處なり、絀は、儀を刺す處なり」とある。【十四】**灌**。二水の名、前に遂報漢書地理志の詩の條に見ゆ。【十五】**狼狽**。爾雅に「狼に類ぐを狼といふ」とあつて、郭璞の注に「狼、狼に類ぐ、亦たて、末、燕尾を爲すもの」とあり、又「狼首に注するを狼といふ」とあつて、郭璞の注に「狼を羊頭に擬す、今の狼の如きも、亦た

施なり」とある。【十六】**夏口と鄂州**。【十七】**兵光**。詩經に自彼氏羌、莫敢不來享とあつて、鄭箋に「兵光は夷狄の國西方に在るものなり」とある。【十八】**顯**。說文に「赤馬にして黑鬣なるを顯といひ、馬の黃白色にして黑鬣なるを顯といふ」とある。【十九】**角逐**。左傳宣公十二年に「晉人、これを逐ひ、左右これを角す」とあつて、杜預の注に「兩角を張り、旁より夾んで之を攻む」とある。【二十】**煇**。漢書張良傳に「煇ありと雖も、尙ほ安くにか施すところ」とあつて、顧師古の注に「煇は、射なり、その矢を煇と爲す」とある。【二十一】**支那**。漢書張良傳に「請ふ、諸侯の罪過は、その支那を削らむ」とあつて、顧師古の注に「支那は、國の四邊に在るものなり」とある。即ち楚王の東海を削られ、趙王の常山を削られたるの類。【二十二】**開田**。禮記の玉制に「諸侯の功あるものは、開田に取つて以て之を歸し、その削地あるものは、これを開田に歸す」とある。【二十三】**侯**。社は田。諸侯、各その地に於て田神を祭るもので、ここでは社土といふに同じ。【二十四】**鬼辭**。漢書刑法志に「罪人、歌すてに決す、定めて城且となし、春くこと三歳、鬼辭白樂となす」とある。又同書惠帝紀に「皆、鬼辭白樂と爲すに耐へたり」とあつて、應劭の注に「辭を取つて、宗廟に給するを鬼辭と爲す」とある。【二十五】**司斧**。公羊傳に「これに斧を以て罪人を刑すること、時に獄吏は行軍司馬となつて、罪を主りしが故に云ふ。【二十六】**前丘**。晉書顧愷之傳に「この子は、宜しく邱壘の中に置くべし」とあり、又謝靈運の詩に昔余遊京華、未嘗廢邱壘とある、即ち山水の遊を愛好すること。【二十七】**獻俘**。左傳昭公十七年に「俘を文宮に獻す」とあり、詩經に在泂獻囚とある。【二十八】**蕩**。漢書陳涉傳に「郭支の首及び名王以下を斬らば、宜しく、頭を蕩街豐東の區間に懸くべし」とあつて、顧師古の注に「蕩街は街の名、豐東の邱、この街に在るなり」とある。即ち外人の居留地。【二十九】**錢**。錢は至所刀、斧鉞に同じ。【三十】**桃塞**。文選西京賦に左有三峭幽重險桃林之塞と見ゆ。【三十一】**錢**。詩經に毋乃錢錢とあり、說文に「錢は古しへの田器」とあり、釋名に「錢は鉏の類なり」とある、鉏鉏の類。【三十二】**新**。後漢書王郎傳に「元元、新、すてに牛に過ぐ」とある。【三十三】**幽**。漢書高帝紀に「過ぐるところ、幽掠を得るなし」とあつて、應劭の注に「幽は幽と同じ」とある。【三十四】**龍領**。領は領と同じ。漢書昭帝紀に「武都の氏人反す、龍領侯增増を遣して之を擊たしむ」とあつて、崔浩は「今の河間龍領

聯句 晚秋郡城夜會聯句

村」といひ、又同書衛青傳に「韓說を討じて能領侯となす」とある。【七〇】 開張 狩獵。【七〇】 獲麟 文選子虛賦に射三獲麟とあり、韋昭は「脚とは其脚を持つを謂ふなり」といつて居る。又家語に「叔孫氏の車士を子鉏商といふ、麟を獲たり、その前の左足を折り、載せて以て歸る」とある。【七一】 結珠 禮記月令に「暑燥を結珠す」とある、即ち實めて之を珠する。【七二】 王怒 詩經に王赫斯怒とある。【七三】 給復 漢書高帝紀に「七大夫以下に非ざれば、皆その身を復す」とあり、應劭の注に「尸賦を輸せざるなり」とある。【七四】 澤髮 髮を梳つて光澤を生ずること。【七五】 兜牟 牟は鑿と通用す、亦た首冠、即ちかぶと。【七六】 隨順 楚辭の相璣に美人既醉朱顏能態とあり、醉つて赤くなつた顔。【七七】 懸杯 飲器、即ち杯、白樂天の詩にも、銀合懸杯盞、金屏照懸樽とある。【七八】 安存 後漢書馬融傳の贊に「生厚し、故に安存の慮深し」とある。【七九】 洗雪 後漢書段熲傳に「百年の遺負を洗雪す」とある、洗ひ清める。【八〇】 節 蔣注に「竹を以て節となす、雪を盛る所以なり」とある。【八一】 聖明 聖名と同義。【八二】 光寵 漢書司馬遷傳に「以爲へらく、宗族交游光寵」とある。【八三】 旁午 漢書霍光傳に「昌邑王、璽を受けて以來、二十七日、使者旁午」とあり、顔師古の注に「一盤一横を旁午と爲す」とある、引きも切らぬこと。【八四】 結綸 天子の詔。禮記に「王言は結の如く、その出づること綸の如し」とある。【八五】 中歷 後漢書光武紀に「その中歷を斷く」とあり、その注に「凡そ軍事、中軍の將、最も尊くして中に居り、歴を以て自ら輔く、故に中歷と曰ふなり」とある。我度が凱旋し、鼓鐸を擲して歸るをいふ。【八六】 珠翠 翠は翡翠、婦人の裝飾。【八七】 粉黛 香粉に「惟れ其れ丹雘を塗る」とあり、白赤兩色。【八八】 朝 華朝と云ふに同じ。【八九】 魏闕 周禮大宰に「正月の吉、乃ち治象の法を象魏に懸く」とあり、鄭注に「魏闕に象るなり」とあり、又莊子の讓王に「心は魏闕の下に存す」とある、魏は魏、宮闕の巔巔たるをいふ。前の魏闕脚の如き、ここの魏闕泰園の如きは、文字上の對偶で、即ち借對と稱する一種の對法である。【九〇】 密漢 詩經に惟彼密漢とあり、銀河、即ち天河。【六一】 秦關 長安は古しへの秦の地なる故に云ふ。【九二】 巖野 文選江淹の雜體の詩に巖野奇秀とあり、險阻の巖。【九三】 覆轍 左傳僖公二十三年に「晉の重耳曰く、右に覆轍を覆す」とあり、杜預の注に「覆は以て轍を承け、轍は以て弓を受く」とある、即ち軋と弓袋。【九四】 問遺 漢書袁敞傳に「歲時數ば問遺す」とあり、顔師古の注に「餽遺を謂ふなり」とある。【九五】 舊德

詩經に于嗟子裝とあり、說文に「座なきを裝といひ、底あるを蓋といふ」とある。【一〇〇】 開拓 漢書蘇建傳の甘泉賦に拓跡開統とあり、拓は廣むる。【一〇一】 是日 韓昇平 隋志に「昇平の日は上道を行き、太平の日は中道を行く」とある。【一〇二】 此年 名作置置に「太歲西に在るを作置といふ」とあり、現に元和二年の干支は丁酉であつた。【一〇三】 洪敷 大敷に同じ。【一〇四】 下究 葛洪子に「上情以下究せず」とあり、淮南子に「幾令、下究する能はず」とあり、漢書燕王旦傳に「王恩、下究するを得ず」とある。【一〇五】 武備 武威の颶風の如きをいふ。【一〇六】 勞績 漢書司馬相如傳に勞績四塞とあり、顔師古の注に「勞績は績なり」とある。【一〇七】 豐隆 文選魏都賦に豐隆夷落、蹕道而進とある。【一〇八】 朔漢 漢書班固の敘傳に「龍克朔暮、來庭せざるなし」とある、暮は漢と音通。【一〇九】 剗斫 晉書孫登傳に「孫登に布被を遺る、登、大呼して曰く、斗斗判斗」とある。【一一〇】 負鼎 史記の股本紀に「伊尹、湯を干さむと欲す、而して由なし、乃ち有莘氏の膠鬲となり、鼎を負ひ、湯を以て湯に就く」とある。【一一一】 門爲登壇 淮南子に「凡そ國に離あらば、君、宮中より將を召して之に詔し、因門を闔つて出づ」とあり、漢書高帝紀に漢王、黃帝して壇場を設け、尊信を拜して大將軍と爲す」とある。【一二二】 顯顯 呂氏春秋に「賞官顯顯、六者は意に停るものなり」とある。【一二三】 九選 文選任昉の表に「千秋の一日九選」とあり、李善注に「東觀漢記、馬援の揚廣に與ふる書に曰く、車丞相は高祖の國體、一月九選して丞相たるものは、武帝、衛太子を誅せしを恨むを知り、上書して之を誅ふ」とある。すると、日は月の體であらう。【一二四】 狐趙 左傳昭公二十三年「晉の公子重耳、狄に奔る、從者狐偃趙衰」とある。【一二五】 德靈 漢書霍去病の二人、杜甫の詩に靈在三衛靈室とある。【一二六】 芬芳 文選神女賦に吐芬芳、其若蘭とある。【一二七】 宮娃 風俗通に「楚人、美色を謂うて娃と爲す」とある、宮中の美人。【一二八】 分約 分は賜ふ、約は莊子の道途遊に「約として處子の如し」とある。【一二九】 洪爐 杜甫の詩に蓬蒿三洪爐とある。【一三〇】 命衣 禮記、周禮に「命衣、九たび衣服を命ず」とあり、晉書に「強火射米」とある。【一三一】 兩廂 兩廂、左傳襄公十一年に「晉の悼公、魏絳に女樂二八を賜ふ」とあり、晉書に「琴瑟を稱揚す」とある。【一三二】 兩廂 兩廂、史記周昌傳に「昌、耳を東廂に側して聽く」とあり、索隱に「正殿の東西堂、皆側して廂といふ。昌ふは、兩廂の形に似たるあり」とある。又風俗通に「續毛の髯、これを續毛と謂ふ」とあり、三輔黃圖に「武帝、未央殿を建て、地を視するに、兩廂の續毛を以てす」とある。東西兩廂に毛髯

を數き詰める。【二四】調与藥 蔣注に「与、一に与に作る、与藥の字、子虛賦及び文選に、凡そ四たび見ゆ、皆音酌略。姚令瑜曰く、後語に仍新御老藥とあり、これ當に體を異にすべし」とある。文選子虛賦に「与藥の和、具して後之を御す」とあつて、文選曰く、与藥は五味の和なり」とある。又枚乘の七妻と与藥之體とあつて「草昭曰く、与藥は、輔體を和養する美味なり」とある。【二五】董玉佩 前に朝歸の詩中に見ゆ。【二六】登置 後漢書李膺傳に「士、その容體を養ふものあれば、名づけて登置門といふ」とある。【二七】傾蓋 淮南子に「樊豐、心を傾けて日に向ふ」とあり、文選曹植の表に「樊豐の黨を太陽に傾くるが如し」とある。【二八】青娥 江淹の神女賦に青娥重疊とあつて、その注に「眉なり」とあり、又杜甫の詩に青娥皓齒在二樓船」とある。【二九】紅顏 李白の詩に昭君拂紅顏、上馬啼紅顏とある。【三〇】顧笑金 鮑照の白紵曲に千金履笑買三芳年とある。【三一】却老藥 漢書郊祀志に「李少君、阿羅穀道、却老の方を以て上に見ゆ」とある、即ち若がへり法。【三二】龍鱗 爾雅に「大鱗、これを龍といひ、大鱗、これを龍といふ」とあつて、郭璞の注に「亦た鱗と名づく」とある。【三三】庇 かくれる。【三四】榮華 顏延之の同聲歌に思爲三香扇席、在下蔽區林とある。蔣注に「榮は草、扇は蒲、席と褥す所以なり」とある。【三五】洗沐 志園正 楚辭の九歌に浴蘭湯、兮沐芳とある。【三六】神賦 詩經に嘉肴神賦とあり、祝文に「賦は口上なり、神符を取り、脚に實いて之を炙るを賦といふ」とある。【三七】性悅 香經に「願厚くして性悦たるあり」と見ゆ。性づる、はにかむ。【三八】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【三九】歌諧 漢書東方朔傳の贊に「朔の談諧進占射覆」とある。【四〇】祭地 禮記に「願厚くして性悦たるあり」と見ゆ。性づる、はにかむ。【四一】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【四二】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【四三】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【四四】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【四五】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【四六】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【四七】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【四八】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【四九】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【五〇】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【五一】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【五二】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【五三】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【五四】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【五五】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【五六】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【五七】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【五八】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【五九】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【六〇】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【六一】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【六二】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【六三】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【六四】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【六五】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【六六】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【六七】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【六八】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【六九】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【七〇】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【七一】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【七二】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【七三】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【七四】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【七五】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【七六】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【七七】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【七八】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【七九】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【八〇】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【八一】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【八二】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【八三】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【八四】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【八五】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【八六】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【八七】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【八八】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【八九】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【九〇】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【九一】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【九二】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【九三】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【九四】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【九五】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【九六】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【九七】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【九八】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【九九】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。【一〇〇】因後 祝記の儀行に「願、貴賤に限せざるあり」とあつて、鄭注に「願は困迫失志の貌」とある。

つて、毛傳に「蕭は灼なり」とある。又漢書谷永傳に「許班の異、四方に轟灼す」とあり、文選西征賦に雲三香風卷雲之任、勢也、方重約四方とある。【一九】遺書 漢書高帝紀に「遺書を遺つて笑樂を爲す」とある。【二〇】當歌 文選魏都賦に武帝の短歌行に對酒當歌とある。【二一】輕綺執 漢書班固の敘傳に出でて王許子弟と軍を爲す、綺綺執持の間に在るも、その好に非ざるなり」とあつて、顏師古の注に「執は素なり、綺は今の細綾なり」とある。【二二】際異 詩經に懷彼淮夷、來獻三其琛とあつて、その注に「琛は寶なり」とある。【二三】調應 漢書文帝紀に「調すること三日」とあつて、顏師古の注に「調の言たる、布なり、言ふは、總、天下に布いて、合衆飲食するか調といふ」とある。又禮記の禮器に「周禮は其れ編は編のごときか」とあつて、鄭注に「錢を合せて酒を飲むを調となす」とある。【二四】始願 淮南子に「疾きこと、怒を強るが如し」とあり、顏師古の漢書注に「弓の編を引くを強といふ」とある。【二五】移日 漢書夏侯嬰傳に「高祖と語る、未だ嘗て日を移さずんばあらざるなり」とあり、田贍傳に「丞相入つて事を奏し、語つて日を移す」とある。【二六】通背 北史に「李暹、學を好む、隆慶には背に書し、盛夏には背に書す」とある。【二七】五白氣爭呼 楚辭の招魂に、成皋而李呼三白とある。【二八】六奇 漢書陳平傳に「六たび奇計を出す」とある。【二九】布覆 文選上林賦に布覆園澤とあつて「郭璞曰く、布覆は猶ほ布露のごときなり」とある。又封禪儀に非惟知之、我有三覆之とある。【三〇】置頭 史記五帝本紀に「父頭に、母置」とある、意地悪く又頭冥なること。【三一】篇与 漢書禮樂志房中歌に篇与篇与とあつて「晉灼曰く、篇は舞の樂、与は周の樂、以て征伐を樂むを言ふなり」とあり、師古曰く、言ふは、新樂を制定し、教化流行すれば、道風の徒、盡く交歡するなり」とある。【三二】云亭 史記封禪書に「無懷、鹿鳴、神農、伏羲、神農、伏羲、湯は泰山に對じ、云云に禪し、黃帝は泰山に對じ、亭亭に禪す」とあつて、李奇は「云云山は樂父の東に在り」といひ、服虔は「亭亭山は幸陰に在り」といつて居る。【三三】短檠 淮南子に「短檠の周るところを知る」とあつて、その注に「檠は方なり、檠は度法なり」とある。又楚辭の離騷に求矩矱之所同とある。【三四】前堂 漢書田蚡傳に「前堂に鐘鼓を羅れ、曲府を立つ」とある。【三五】清夜吹 吹は管を吹くこと、即ち笛笙の類。【三六】良處 文選謝靈運の擬鄒中集詩序に良辰美景とある。【三七】池蓮折 沈約の實が熟して房が破れる、杜甫の詩に露冷池蓮房、聖粉紅とある。【三八】院竹翻夏錦 錦は竹皮、院落の若竹が皮を落した、謝靈運

の詩に初集五雜體」とある。【六九】五符初信。書經に「歲二月、東に遷守して岱宗に至る」とあり、又「十有一月朔、遷狩して北嶽に至る」とあり、孔安國の傳に「北岳は恆山」とある。岱宗の泰山たることは言ふまでも無い、なほ書經に「五穀一たび遷狩す」とある。【七〇】三敗宿柞。禮記に「天子事なれば、歲に三たび敗す、一は乾豆の爲にし、二は賓客の爲にし、三は君の處に充つるが爲にす」とある。漢書宣帝紀に「長楊五柞宮に往來す」とあり、顏師古の注に「長楊五柞の二宮は、並に盤屋に在り、曾樹を以て之に名づく」とある。【七一】農書。漢書藝文志に「農九家百一十四篇」とある。【七二】馬法。司馬法、即ち司馬法其の兵法、かの如く略して用ひた例は、揚雄の劇秦美新に在る。【七三】雪下。この年十月、李愬が蔡に克つて吳元濟を擒にした時、夜半大に雪が降つた。【七四】新息。唐書地理志に「新息縣、蔡州に屬す」とある。【七五】陽生。冬至、一陽來復の候。【七六】京索。漢書高帝紀に「楚と秦陽の南、京索の間に戰ふ」とあり、應劭の注に「京は縣名、今、大索小索あり」と見ゆ。【七七】臨肥。前にも見ゆ、詩經に爾牛來思、或疑或肥とある、肥は動く。【七八】歌琴。詩經に或歌或琴とあり、爾雅に「徒た鼓を擊つをいふ」とある。【七九】帝穀。書經に「能く嘗膺するあつて、帝の穀を無む」とある、穀は奉。【八〇】劣譽。文選曹植の求自試表に「榮耀の末、光輝を日月に増す」とある。燭は小火、螢火よりも拙い。【八一】糟粕。莊子の天道に「桓公、書を堂上に讀む、輪扁、輪を堂下に斲る。曰く、君の讀むところは、古人の糟粕のみ」とあり、司馬彪の注に「爛食を糟となす」とある、醜は粕に同じ。

【題義】舊唐書に「元和十二年七月、裴度を以て、守門下侍郎同平章事たらしめ、淮西宣慰處置使に充て、太子右庶子韓愈をして御史中丞を兼ねしめ、行軍司馬に充て、司勳員外郎李正封を以て、侍御史を兼ねて判官たらしめ、度に従つて出でて征せしめ、詔して、郾城を以て行蔡州治所と爲す」とある。つまり、郾城は、淮西征討の本營と成つた次第。その地は何處かといふと、唐書地理志に「郾城縣は、河南道許州潁川郡に屬す」とあり、蔣注には「郾城は、古しへの郾子國、漢の縣、今、河南開封府に屬す」とある。そこで、この聯句は、郾城縣の本營に居た時、韓愈と李正封とが、ある夜、會合して作つたのである。李正封の傳記は、詳かでないが、後に監察御史に陞任した。この聯句の手ぎはを見ると、一かどの作家らしいが、全唐詩には、その作唯だ五首を存するだけであるから、本當の伎倆は、遺憾ながら、分らない。蔣注に「この篇、公、正封と郾城を作る。凡そ百餘韻。東野の死後、公の與に聯句するところのもの、惟だ此を見るべきのみ。本注に、正封、中丞に上る、中丞は即ち退之。愈、院長に奉ず、院長は即ち正封。その王盧と稱するものは、謬れり」とある。それから、この聯句は、蔡州の陥る前か、陥つた後か、つまり往きがけに郾城に次した時か、返りがけに郾城に宿した時か、いづれとも分らない。題には晩秋とあり、九月であるが、蔡州の陥つたのは十月、全軍の凱旋したのは十一月で、聯句中、これに道及した處があるから、斷定が六つかしいので、或は一皮で作り上げたのではなく、郾城往返の間に互つたものでは無いかとも思はれる。これに就いて、劉石船は「題は是れ郾城晩秋、而して、中間敘するところ、平賊、歸朝、策勳、賜誦等の事多し。末に又云ふ、雪下收新息、陽生過京索」と。或は、此詩の始まるは郾城に在り、而して、詩の成るは、公、歸朝の後に在るも、未だ知るべからざるなり。若し魏が云ふ如く、未だ蔡を平げざるの時に作らば、豈に酉陽雜俎載するところ、太白、祿山の反を聞き、胡無人の詩を作つて、太白入月敵可摧といひ、祿山死するるとき、果して太白の月に入るを見たるが如く、公の此詩、雪下の語も遂に入蔡の先兆たる



か」といつて居る。しかし、韓愈が偶然に豫言を爲して、それが見事に的中したといふのも、あまり變であるから、ここでは、兎に角、事件の終了と共に聯句も終了し、すべて事實を述べたものとして解釋することにする。

【詩意】古しへ、從軍は、随分楽しいものだといつたが、成程、青油繖の幕中に在つて、勝手に談笑し、明かなる燈火の下で、棋を觀つつ、秋城の柝聲につれて、月色暗くなるに至るをも忘れたのは、いかにも、のんき至極の事である。しかし、家を離れた釋客として、ひとり物淋しく、物に驚く鳥が夜騒ぎ立て、人と話として居ても、最早終に成りかかつた壯氣は、自然に衰へ、おまけに酒醒めて、砧うつ聲寒げに聞こゆるに至つては、決して、從軍の樂しみを誇るべきではあるまい。さはいへ、主に事ふる身は、おのが力のある限り盡すべく、兎徒を平定するを旨とし、必ずしも弱者を兼并するのではない。到る處の人民は、百牢を以て王師を迎へ、そして、元兎の首を邑千戸に購ひ、今しも、大に軍事に盡すべき時である。吾は、平生、道義を講じて兵を論ずるを恥ぢ、殊に晩年世なれたる上は、輕諾を爲さず、一たび、うんと云へば、必ず成し遂げる覺悟である。しかし、ゆくりなくも恩義に感じた上は、あくまで心力を盡す積りで、勳爵などには頓著しない。多くの士民どもは、賊に汚され、吳元濟は小夷でありながら、毒蟲の人を蝕すが如く、ひどく害毒を流して居る。されば、劍戟を鑄て、それで賊徒を誅夷し、相率ひて凱旋し、やがて臺閣に歸著したいものである。夫の不在を守る家の妻は、

鶴の鳴く聲に驚き、僮僕輩は、喜鵲を聞いて、その主人の恙もなく歸ることを祈つて居るのであらう。終日、篋竹を握り、龜甲を灼いて、何日賊を平らげて清平の世に立ちかへり、そして夏杓秋黍の例祭を爲すことが出来るかと、絶えず心に念じて居る人もあらう。つまり、この賊を早く鎮定することとは、天下萬民の希望である。そこで、偵察に出たものは、舟などを引き上げて、津梁を斷ち、賊軍が河を渡つて來ぬやうにし、ひそかに派遣した搜索隊は、頻りに、林や藪などを探つて、賊の伏兵でも居れば、引ッ捕へる手筈である。幸にして、羽書稀少なれば、紅塵も起らざるべく、大水が出切つて仕舞へば、沙囊も不用になつて、その乾くに任せる。功成りし後、石に刻する爲に銘を作るは、君の得意とするところであるし、警報急に至つて、羽を挿んであつた處で、吾は格別驚きもしない。元來、吳元濟の如き謀叛人は、刀俎を煩はすに足らず、天兵、境に臨まば、直に管鑰を差し出して降伏すれば善い筈である。もとより、王師は、軍氣壯にして、雨と降る矢は、天狼の星に應じて、侵掠を事とする暴賊をも容易に追ひ拂ふし、その光電の如き矛は、海若をさへ驅り退けることが出来る。神靈の誅罰は、決して赦すことなく、賊の運命も、もとより定まつたものであるし、王師は、たとひ危きに臨んだ處で、力戦して、決して退却することはない。雲梯は、蟻賊として、空中に翔り、火箭は、赫赫として、どこにでも燃え著き、その雲梯を以てすれば、空に連る様な高い城壁でも、難なく打破れるし、その火箭を以てすれば、如何に堅固なる城郭でも、しまひに焼き拂はれて仕舞ふ。軍門に於ては、將

軍が絶對の權力を持つて居て、唯だ一令を宣ふるのみであるが、廟堂に於て、豫め算を爲し、上中下の三計を建てて、その用意は極めて周到である。雷鼓、一たび鳴れば、千槍、竝に揚がり、もし浮橋を架せむとせば、多くの竹索を交へて、見る間に出来上る。曠野を蹂躪する馬は、沙煙を塵ぐることに雲の如く、平原に映する旗さし物は、火の如く耀いて居る。賊の爲に散散な目に逢つて居る良民どもは、一たびは苦むも、やがて救済せらるべく、これに反して、殘虐を事とする醜虜は、如何に狂ひ廻はるとも、いつかは縛り上げてやは。わが軍の壯なることは、虎や犀の如く、賊鋒も之を侵し難く、その勢ひ込んで飛び越えることは、さながら、山猿のやうである。ここに至れば、大きな袖の衣服を着て居る儒者輩は、自ら顧みて、その無能を恥づべく、曼胡の纒を結んで威張つて居る壯士どもも、とても及ばぬものとして、驚き入るであらう。やがて、大星天より落ちて、野雉しきりに鳴き、愈も賊の亡ぶる吉兆として知られ、負けたものは、鶴の鳴く聲にさへ驚くといふのに、王師は、その後に従つて、追追に乗り込んで来る。その勢に乗じて、賊を追撃するは、虎豹の犬羊羣中に入るが如く、鷹が鳥雀を憎んで、之を逐ひ立てるやうである。又隄防を燒き拂つて、賊の貯へて置いた輜重を奪ひ、城壘を水攻めにして、その依るところを失はしめる。しかし、唯だ殺戮を事とするばかりでなく、辯士をして、横木に倚り懸つて、車上に坐つた儘、心昏迷して賊に味方した者どもを論し、それでも、命を聞かぬ暴虐の者は、仕方が無いから、大きな矛を揮つて遣つつける。賊の方では、倉庫も空にな

つて、兵糧も盡きはてた爲に、戰卒皆飢ゑに迫り、月の黒き夜、物見に出たところで、さまざまの失態を仕出かす位のもの、はては、兇徒逆族同士が互に踏み合ひ、噛み合ひ、同士撃をして、愈も王師に便宜を興へるといふ始末。この間、王師は、専ら漕運に依り、舳艫相銜んで淮西二水に滿ち、旌旗は、遠く夏口鄂州にも連る位。大野には、西方氏羌の雇兵を放つて、その自在なる活動を許し、長河に於ては見事な駁馬を浴せしめ、賊の走るを追うて、東西に角逐し、遠近に網や射ぐるみを布設して、すこしも逃さぬ様に準備がしてある。賊に虐げられた無辜の人民は、怨嗟して、童謠も隨處に行はれた位だから、その賊に對しては、天より殃を下し、鬼より瘡病を流行らせ、内外から攻め立てて、決して之を赦さない。諸侯罪あるとき、漢の刑法では、その四邊の地を削り、周の制度では、開田を取り上げるといふことであるし、諸侯の廟社に於ては、無功の人を退け、王命に逆ひしものは、三年間、宗廟付屬の薪拾ひをするといふことであるが、今、吳元濟以下一味の者は、罪惡貫盈、首を刎ねても、追つ付かぬ位で、なかなか、そんな生やさしいことでは済まされぬから仕方がない。予は、行軍司馬に任じて、賊徒の處罰を司るものであるが、本来の性情は、深山に遊ぶことを好むものであるから、やがて、捕虜を朝廷に引き渡した後は、官を辭して、躬耕に従事したいと思ふ。その跡始末として、長安の居留地たる藁街には、斧鉞を陳列して聲威を示し、桃林の塞には、田器を備へて、開墾の用意を爲し、地理上、天子の直轄地と藩鎮との境界を劃し、天文に於ては、大空を掃うて、妖氣を消

滅さす様に致したい。今の天子は聖明におはす故に、蒼生の瘡痍に憐むを哀憫せられ、將軍は令を下して、奪掠を禁じ、功勳あるものを策して、諸侯に封じ、蠶を爲さば、麒麟を得るに相違なく、世は追追と太平に復歸するであらう。その暴慢を詰責して、誅罰するに當りては、王の前日の怒りを敬して、妄りに之を赦さず、しかし、人民の病めるものに對しては、同情を表して、租税を免じ、且つ之を使役せぬやうにしたい。將士の凱旋に當りては、重苦しい兜を脱ぎ棄てて、梳る髪には澤を生じ、酔うて顔を赤くしつづつ、盃を傾ける。厚生の道に依つて、人民を安存せしむることは、手落なく速に行ふべく、すでに罪科を洗ひ雪め、翻然として正に復歸したものに對しては、昔日の事を論じない方が宜しい。かくの如くすれば、暮鳥の巢に安んずるが如く、鎗銘落ち付く處を得、春になれば、蠶を飼つて箔上に滿ち、次第に殖産の發展を圖ることも出来る。從軍の將士は、今度大功を立てたるに因つて、赫赫たる聲名は、朝闕を動かし、光輝寵榮は、京洛に耀くばかり、天子よりも、打續けに詔敕を下して、其入京を促され、仍つて、行列を整へ、中軍には鼓鑼を擁し、しづしづと練り出して、都に歸つて来る。その都なる邸宅に於ては、妻妾どもが密坐して珠玉翡翠を列ね、高門は赤や白で塗り直して、何時歸著しても善いやうに成つて居る。この間、舉朝の人人は、争つて慶賀の書を送り、一行の歸轍は、路を塞ぐ程で、勢よく遣つて来る。眺めやれば、九重の城闕は、高く雲漢に横はり、溱地の關門は、險阻に倚つて、さすがに形勝の固めである。さて愈よ全軍が都に近づくと、これを拜

迎する武人どもは、箠や弓囊を列し、これを慰勞して、物品を贈るものは、囊に入れて、堅く其口を結んである。吳元濟、すでに平らぎしに因り、江淮の間は、これより、清平無事であつて、宇宙が再び開かれた様な觀がある。今しも、世は昇平であり、おまけに今年は酉に當つて居る。大赦の詔は、下下にまで届き、武威は、颯風の如く、四海の隅隅にまで行き互つて居る。そこで、南に根據地を定めて、蠻族を平定し、北は地を略して、沙漠を空しうする。儒生は、其身にふさはしく、教化を務め、武士は、刺撃斫殺に猛く、儼然として扣へて居る以上は、何等の心配もない。吾が知を辱うせる宰相の妻公などは、優游して、國家の至治を樂み、その餘の小人輩は、全く落莫として、段段に朝廷から退けられて仕舞つた。裴公は、古しへの伊尹が鼎俎を負うて、湯に用ひられたのと同じく、今の天子に拔擢されて、印綬を佩び、又漢の高祖が壇を設けて、韓信を大將に拜せしが如く、特に壇に登るが爲に、門をさへ開かれた位。かくて再び朝に入つて、愈よ顯嚴の位に上り、一月に九たび官を遷されたといふ様に、しばらくの間に昇進し、そして、顯嚴の節、謬謬の言を以て、朝廷の風氣を一新せられた。そこで、凱旋の賓筵に列するものは、狐假超衰に比すべき名臣輩であるし、案内をして先導する騎兵は、衛青・霍去病の様な堂堂たる武臣である。國史は、裴公の功業を記して、その芳芬を千古に擅にすべく、入朝の際は、綽約たる宮娃に導かれて、奥御殿まで參入することを許される。そこで、内廷の丹掖に於ては、羣臣が觸豐の列を整へ、折からの寒さに際し、大きな爐の邊には、狐貉

を著たる貴臣どもが並んで居る。その間、文を作つては、月中の兔の毛で作つたといふ様な筆を揮つて之を書し、劍法の話をしては、霜鬚を磨いたのが目の前に見える様な氣がする。天子より授けられた朝衣には、藻火粉米の模様が見え、又特に賜はつた樂は、琴瑟の類をも併せてある。その私宅の東西兩廂には、立派な毛氈を敷きつらね、五鼎を連ねて調理するときには、芍藥の根を以て、其味を調和する。一家に在るときは、帯に蒼玉の佩を垂れ、外に出るときには、手綱に黄金をより込んだのを用ひる。されば、裴公の誘掖召接を得たものは、龍門に登つたと同じ様な名譽であるし、ここに參越して馳驅するものは、芙蓉が自づと太陽の方に傾くといふ様な忠君の誠心を懐いて居るものに限る。その閒暇なる時に當りては青い眉の女どもが、長袖を翳して舞を爲し、頬の紅なる伎人が、笛を吹いて興を助ける。裴公は、今まで隨分辛苦勤勞を爲された結果として、かくの如く、歡樂遊戯を極められて居るので、もとより、偶然ではなく、實を言へば、もつと早く富貴なるべく、しばしなりとも、寂寞なる不得意の境に居られるべき筈ではなかつた。されば、笑を買ふの金を擲つて、若かへりの藥を求むべく、かういふ偉らい御方は、いつまでも、達者で居て貰ひたいものである。先祖の廟には、酒器を配して備へ、老親の居られる堂上に於ては、鐘磬を鳴らして樂を奏し、のどかに散步をする時には、松竹の蔭に憩ひ、らくらくと高臥する時には、薄べりの上に枕される。湯あみをしたり、髪を洗つたりするときには、蘭芷の香料を加へ、劑涼は、腸づめに飽きる位。喜ばしき顔をさ

れた處で、もと其功勳に因つて至當の事であるから、決して愧ぢ入ることもなく、すでに志を達した上は、決して、困迫されることはない。その酒席に於けるや、談諧を弄し、戎装を著けては、慷慨の氣象が凜凜しい。さきに出陣の際には、馬を斬つて旄纛を祭つたが、今や都に凱旋し、羊の肉を包み焼にして、蓑履を穿いて居る様な窮士をも禮せらる。今の世には、羣賢盡く朝に在るも、なほ遺賢なきにしもあらずで、山には、隠れて居た露の中から離れて、文彩すでに成りし豹も多く、野には、今まで屈して居たが、これから大に伸びむとする尺蠖もある。草野の賢良、すでに少からざる上は、その羣材を検閲して、多くの鷲鳥の中から一羽の鷲を捜り出すと同じく、然るべきものを推選して、薦延せねばならぬ。左右の侍者は、御氣に入る様な事をいつて、相公の才徳を褒めそやし、親交の輩は、諛言を呈して笑を獻するが、それは、その場合に限るので、國家の大事に至つては、かかる手合を相手にせず、別に相談されるべき人が、幾らもあらう。今や、相公の名聲は、愈よ揚がり、權勢は、あらゆる物を薰灼せむばかり。予は、幸に久しい前から、知遇を辱うするに因つて、有りし昔の事を言ひ出して、感激を生じ、歌に代へて、酒の獻酬をして居る。相公の羣孫は、軽くして精巧なる絹物を召され、賓客中の最下なものでも、酒などを十分に頂戴して居るし、天下を窮めて珍らしき品物を獻上し、海を環つて集めたる珍珠を以て響應をされる。その時しも、樂を爲して鼓を拍ち、鳥を射むとして弓を張り、歡樂を求めて、夜飲に日の移るを忘れ、勝を求めて、徹宵、博塞の遊を爲すこと

もある。博塞に於ける賽の目の五白は、氣合で轉がし出すのであるし、又陳平の如く、六たびまでも奇計を爲して毫も窮せざるは、心を以て運度するからである。今や、天子の恩澤は、布き渡らぬ限もなく、留頓にして教化し難き賊徒も、追追に馴れ親んで、篇句の樂を聴くやうに成つた。されば、成功を告げ、封禪の儀を行つて、云亭二山に登ることもあるべく、古しへの興亡盛衰を考へて、法度を天下後世に垂れる様に致したい。吾とても、又その通りで、前堂に於ては、清夜に管を吹き、東第に於ては、良辰に酒を酌み、朝夕優游して居るが、池の運は、秋、實が熟して房を破り、中庭の若竹は、夏、すんすん伸びて、皮が刺がれる位、歳月は、遠慮なく推し移つて行く。願ふところは、天子の五載一たび巡狩せらるるに陪して、恆嶽泰山に朝し、一年に三度の狩獵に従つて、長楊五柞、兩故宮の間に宿したいといふことである。亂賊、すでに平らいで、世は清平になつたから、農家の古書を討論し、司馬法などの兵書は、今後全く不用に成つて仕舞つた。おもへば、雪の降る時に、蔡州を陥れて、吳元済を擒にし、一陽來復の冬至の時に凱旋して、京索地方を通過した。汝の牛も、さきには微發されて、輜重を運搬して居たが、今後放し飼にされて、寝るも、動くも、勝手次第。わが僕も、曩には戦地に從行して、随分苦勞したが、これからは、歌つたり、鼓を撃つたりして、十分に休息することが出来る。天子の事業は、天地の間に彌つて、洪大無邊なるに反して、臣の言辭は、螢火の如く、甚だ拙劣なものである。ここに聯句を爲して、詩を作り、淮西征伐の本末は、到底詳述するこ

とが出来ないに相違ないが、糟粕、なほ餘味を存するものとして、どうか、世に遺して置きたいものである。

【餘論】 蔣之翘は「郾城聯句の詩、激昂慷慨、中夜起舞するの意あり、正封、亦た頗る其典雅の處を揣摩す、自ら是れ敵手」といひ、朱竹垞は「鋪張宏麗、鍊句亦た精巧、才力自ら是れ餘あり、但だ兩人に係るを以て、篇法微に參錯の處あり」といひ、俞琨は「昌黎、東野と聯句す、多く奇峻を以て高きを争ふ、而して、この篇、ひとり典贖和平、まことに各人に因つて之に應ずるなり、亦た公の才大なるの處を見るべし」といつて居る。なほ、竹垞は、大體の趣旨を處處に注記し、大分參考に成ることもあるが、あまり煩はしいから、ここには、すべて節略し、これで聯句を畢つたことにする。

309  
65

卷之二

此の書は、先づ、その名に示す如く、

一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、

以上、

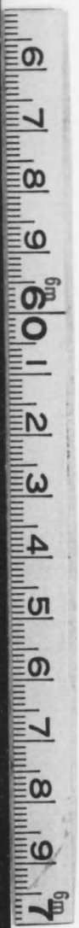
終

續國譯漢文大成

文學部 三十一

309  
65

候  
入



始





續國譯漢文大成

文學部第三十一冊(第八帙の三)

韓退之詩集 下の三

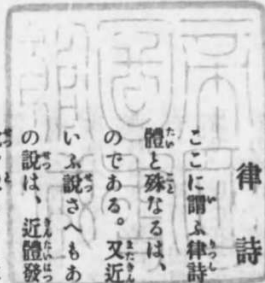
吉田待郎氏 寄贈本



韓昌黎集卷九

律詩

ここに謂ふ律詩は、五七音律ではなくて、律絶を并せた、即ち近體の意味である。抑も、近體の古體と殊なるは、毎句に一定の平仄式があつて、即ち規律ある處から、かくの如く或は律詩といつたのである。又近體といふ中にも、五七律が第一で、絶句も、實は律を截斷したるに因つて出来たといふ説さへもあつて、この方から、近體を總稱して律詩といつたとも見られるが、五七律中心主義の説は、近體發展の史的考察を間却したもので、三家村裏學究の所説に過ぎぬから、ここでは、前説を取ることにする。



題楚昭王廟

楚の昭王の廟に題す

丘墳滿目衣冠盡

丘墳滿目衣冠盡き、

律詩 題楚昭王廟

【字解】

丘墳 丘は土饅頭、

城闕連雲草樹荒

城闕雲に連つて草樹荒る。

猶有國人懷舊德

猶ほ國人の舊徳を懐ふあり、

一間茅屋祭昭王

一間の茅屋、昭王を祭る。

墳は墓。【三】城闕、宣城の城門。

【題義】史記の楚世家に「平王卒して、乃ち太子珍を立つ、これを昭王と爲す、在位二十一年」とある。平王は、伍子胥の父伍奢を殺した爲に、子胥は呉に走り、呉王闔閭に用ひられ、昭王の時、楚に攻め入つて大に之を敗り、遂に平王の墓を發して、その屍を鞭つこと三百。この時、昭王は、遠く逃れ去り、楚は一時亡びかかつたが、幸に、申包胥が秦に赴き、その援兵を連れて来て、呉兵を追ひ、やつと破國を回復することが出来た。しかし、昭王は、呉を畏れて、都を櫛に遷した。都は、即ち宣城で、唐に在つては襄州、後には襄陽府に屬して居た。そこで、宣城の地に、昭王の廟があつたので、その事は、韓文外集に載する記宣城驛といふ文中に見えて居る。曰く、この驛は、古しへの宣城内に在り。驛の東北に井あり、傳ふ是れ、昭王の井、靈異あり、今に至つて汲むなしと。井の東北數十歩に楚の昭王の廟あり、舊時の高木萬株あり、多く其名を得ず、歷代敢て剪伐するなし、尤も古松大竹多し。舊の廟屋は、極めて宏盛、今は唯だ艸屋一間のみ。然れども、左側の人に問へば、尙ほ云ふ、毎歲十月、民、相率る聚まつて、その前廟を祭ると。後の小城は、蓋し王の居なり。その内處、偏高

して、廣員八九十畝、殿城と號す、これ王の朝内の所なり。概多くして書硯となすべし」と。この文は、その末に見ゆる通り、元和十四年二月二日、潮州に左遷されて、長安より其地に赴く途中に作つたので、詩も亦た同時に成つたものに相違なく、即ち瀧吏の五古の直前に在るのであらう。

【詩意】見わたすかぎり、土饅頭や墓ばかりで、衣冠の人は、とゞくの昔に死んで仕舞ひ、城門のみは、高く雲に連れるも、あたりは、草樹荒れはてて、凄凉の景、人をして銷魂せしむるばかり。ここが古しへの王都とは、どうしても思はれぬ位。しかし、楚國の人は、かの昭王が破國を回復した其舊徳を忘れず、ささやかながらも、一間の茅屋があつて、その廟と稱し、王の靈は、千秋の後までも、依然として血食して居る。

【餘論】前半二句は、略ぼ對偶をなして居る。その意味は、衣冠盡きたから丘墳があり、草樹荒れて城門が猶ほ残つて居るといふのであるが、わざと、かくの如く云つた爲に、一段の精彩がある。何義門は「二語、顛倒して得て妙、亦た迴響舞鳳格といつた。次に、全篇の評として、劉辰翁は「人、公の曲江にして樂天に寄するの絶句を評して、白の全集に勝れりといふ、これ獨り倡酬の可なるを謂ふのみ、公の絶句の如きは、正に昭王廟の一首に在り、盡く晚唐を歴す」といつて居るが、曲江にして樂天に寄せた絶句とは、後にも見え、同三水部張員外、曲江春遊、寄白二十二舍人」と題して、

漠漠輕陰晚自開。青天白日映樓臺。曲江水滿花千樹。有底忙時不背來。

といふので、いづれ其處で詳論することにする。次に楊慎は「宋人、これを取つて、唐人萬首の冠と爲す、今、その詩を觀れば、只だ平平たるのみ」といつて居るが、平平といふのは、あまりに苛酷で、故らに異を立てて自らはとした嫌がある。朱竹垞は「草草たるが如く、然かも、却つて風致あり、全く一間茅屋の四字の上に在り」といひ、何義門は「意味深長、昌黎絶句中の第一」といひ、近體は、公の得意の處に非ず、これを要するに、自らは雅音」といひ、又「昭王、孔子を用ひむと欲す、而して、子西に沮まる、公の意を託する、或は此に在るか」といつて、いづれも肯綮に中つて居るが、最後の一條は、稍や穿鑿に失して居るので、評者の意は、昭王は、孔子を用ひむと欲して、遂に果さなかつた位、格別賢王ともいへないのに、わざと舊徳を懐ふといつたのは、民俗往往にして失當の事が多いといふ積りかとも思はれるが、韓愈は、唯だ昭王血食の事實に就いて言ひ、舊徳は、即ち王が破國を回復した其功績を特に稱揚したので、その他に及ばぬものとして見るのが、穩當であらうと思ふ。

宿龍宮灘

龍宮灘に宿す

浩浩復湯湯 灘聲抑更揚

浩浩復た湯湯、灘聲、抑へて更に揚がる。

奔流疑激電、驚浪似浮霜。

奔流、激電と疑ひ、驚浪、浮霜に似たり。

夢覺燈生暈、宵殘雨送涼。

夢覺めて燈に暈を生じ、宵殘して、雨、涼を送る。

如何連曉語、一半是思鄉。

如何ぞ連曉の語、一半は是れ郷を思ふ。

【字解】(一)浩浩、水の廣きをいふ。(二)湯湯、水の流るるをいふ。(三)似浮霜、その色の白きん形容して云ふ。(四)暈、暗き影。(五)宵、夜は盡くる。(六)連曉、夜明けに續く。

【題義】陽山縣志に「龍宮灘は、縣西十五里に在り」と記してあつて、その詩は、其處に舟を泊した時に作つたのである。篇中に雨送、涼とあるを見れば、貞元二十一年夏秋の交、赦に遇うて陽山を去る時に作つたのであらう。

【詩意】眺めやれば、江水は浩浩として廣く、湯湯として勢よく流れ、早潮の音は、一時抑へたかと思ふと、更に揚がつて凄しく聞こえる。奔流は、劇しき電光の如く、驚浪は、一白、さながら大地に浮べる霜に似て居る。身は舟中に宿し、ふと夢が醒めると、殘燈に暗影を生じ、夜は盡きなむとして、折からの雨は、涼氣を吹き送つて居る。もう察られぬ儘に、曉に及ぶまで、話をして居て、その一半は、故郷を思ふことであつた。

【餘論】西清詩話に黃魯直の言を引いて「退之、水を聴くの句を裁す、尤も工を見る、謂はゆる浩浩

湯湯、抑更揚といふもの、客裏夜臥、飽くまで、この聲を聞くものに非ざれば、安んぞ能く周旋し、妙處かくの如くならむや」とある。次に朱竹垞は「平穩」といひ「幽意勝れり」といひ、何義門は第二句を賞して「佳は此句に在り」といひ、又「下半首、竟に上半首と照應せず、然れども、思郷の語を以てす、正に意到るも筆到らずといふなり」といつて居るが、これも、たしかに「と理窟ある様に覺える。

又魚招張功曹

魚を又して張功曹を招く

又魚春岸闌此興在中宵

魚を又して春岸闌し、この興、中宵に在り。

大炬然如晝長船縛似橋

大炬は然えて晝の如く、長船は縛して橋に似たり。

深窺沙可數靜撈水無搖

深く窺うて沙數ふべく、靜に撈さして水搖くなし。

刃下那能脫波間或自跳

刃下那ぞ能く脱せむ、波間或は自ら跳る。「を訝る。」

中鱗憐錦碎當目訝珠銷

鱗に中つて錦の碎くるを憐み、目に當つて珠の銷ゆる

星火逃翻近驚人去暫遙

火に逃ひ逃れて翻つて近き、人に驚き、去つて暫く遙なり。

競多心轉細得雋語時置

多きを競うて心轉た細、雋を得て語時に置し。「きを覺ゆ。」

潭罄知存寡舫平覺獲饒

潭罄きて存することの寡きを知り、舫平かにして獲の饒

交頭疑湊餌駢首類同條

頭を交へて何に湊るか疑ひ、首を駢べて條を同しくす

濡沫情雖密登門事已遠

沫に濡うて情密なりと雖も、門に登れば事すでに遠なり。

盈車欺故事飼犬驗今朝

車に盈ちて故事を欺き、犬に飼うて今朝を驗す。

血浪凝猶沸腥風遠更飄

血浪凝つて猶ほ沸き、腥風遠くして更に飄る。

蓋江煙霧羈拂棹影寥寥

江を蓋うて煙霧羈、棹を拂うて影寥寥。「るに類す。」

懶去愁無食龍移懼見燒

懶去つて食なきを愁ひ、龍移つて燒かれむことを懼る。

如業名既誤釣渭日徒消

業に如いて名すでに誤り、渭に釣つて日徒に消す。

文客驚先賦篙工喜盡謠

文客驚いて先づ賦し、篙工喜んで盡く謠ふ。

膾成思我友觀樂憶吾儔

膾成つて我が友を思ひ、觀樂くして吾が儔を憶ふ。

自可捐憂累何須強問鴉

自ら憂累を捐つべし、何ぞ須ひて強ひて鴉に問はむ。

【字解】「一」涉、相さす。「二」得、所、その最も大なるもの。「三」獲、獲物が多い。「四」同、一す。「五」灑、灑

律詩 又魚招張功曹

子の太宗師に「泉涸れ、魚相與に陸に處り、相啗するに漚を以てし、相濡すに沫を以てす」とある。【一】登門 辛氏三泰記に「河津、一に龍門と名づく、水險にして過ぜず、魚、能く上るなし、江海の大魚、龍門の下に海集する數千、上るを得ず、上れば、龍と爲るなり」とある。【二】登車 孔叢子に「衛人、魚を河に釣つて魚を得たり、その大、車に載つ」とある。【三】劍犬 鹽鐵論に「江陵の人、魚を以て犬に飼ふ」とあり、杜甫の黃魚の時に脂背劍犬とある。【四】如棠 左傳隱公五年に「公、將に棠に如いて魚者を觀むとす」とある。【五】釣渭 史記齊太公世家に「呂尚、年老いて漁釣す、周の西伯、出でて獵し、渭の陽に遇ふ」とある。【六】當工 文選吳都賦に當工構師、蓋自三閩與とある。【七】觀樂憶晉僚 蔣注に「杜詩、有獵打魚に云ふ、晉徒胡爲縱此樂、豈豈天物、聖所哀と。公の謂はゆる觀樂憶晉僚と異なり」とある。【八】問題 文選賈誼の鴈鳥賦の序に「鴈は、鴈に似て、不詳の鳥なり」とあり、その賦に請問三子鴈、兮余去何之とある。

【題義】周禮に「時を以て名を籍す」とあつて、鄭注に「校を以て泥中に刺して之を取る」とある、校は即ち叉で、突き刺して魚を取ること、専ら夜に於て行ふのである。蔣注に「張功曹は署なり、ともに御史より出でて、南方の縣を爲む、公は連州の陽山、署は郴州の臨武、順宗の即位を以て赦され、ともに従つて江陵に掾たり、公は法曹、署は功曹、公、ここに於て、嶺を出でて郴に至り、署と共に新命を檄に埃つて作る。當に是れ、貞元二十年なるべし。後、公、江陵に在り、李郴州を祭つて云ふあり、投又魚之短韻、愧三船環而舉秀、埃新命於衡陽、費薪芻於館候」と。これを指す。按ずるに、一統志に又魚亭を載せて云ふ、公、張署と魚を叉する處なりと。郴州城の西北湖中に在り、後、名を景韓と改む、今韓公亭と名づく」とあつて、その時、この詩を李郴州に見せたこともあるらしい。な



は、李郴州の事は、次首に見えて居る。

【詩意】春の水、ひたひたと湛へて、岸も開いて濁く見える江上に於ては、魚を刺し取るけれども、その面白いのは、夜中である。大きな炬火は燃えて、その明かるきこと、晝の如く、長い船を縛つて繋ぎ合せて、丁度橋の如く見える。深く窺へば、水が澄んで居て、底なる小石も數ふべく、靜に舟を棹すから、水は決して動揺しない。一たび鯢はれると、又の下で脱れることが出來ず、波間に於て、或は自ら跳つて居るものもある。この叉で刺すとき、鱗に中ると、鱗の碎くるが如く、目玉に當れば、珠が消えたやうである。炬火の光に迷うて、一たびは逃れても、まごついて、却つて、此方に近づいて來ることもあるし、人に驚いて逃げ去り、暫時遠い處に居るが、その内に又這つて來る。多く取らうとするには、細心の注意を要し、大きなものを得ると、時時騒がしく罵り合つて居る。深潭が盡きて、水が淺くなると、魚の存するもの少く、魃が平かにして、水と並ぶ様に成ると、獲物が多い。そこで、捕獲された魚を見ると、頭を一つ處に交へて、餌に聚まるかと疑はれ、首を並べて居ると、一すちの者に似て居る。互に沫を以て相濡すは、さすがに友情の密なるを見るべきも、かくの如く捕へられた上は、龍門に登ることは、到底及び難きことである。中には、その大さ、車に盈つる位なものもあつて、語りつく故事を服倒し、犬に食はせて、今朝まだ腐敗して居らぬか如何かを試す。犬に魚を刺した其場所を顧みると、血潮の浪は、凝り固りながら、なほ下より沸き、腥い風は、遠くより、

更に勢を爲して吹いて来る。江上を蓋ふ煙は、幕幕として、切れ目なく、棹を拂うて歸り行く人の影は、寥寥として、淋しげである。河朔は、今後食なきが爲に、其處を去り、龍は、炬火で焼かれては困まるといつて、其柄を移して仕舞つた。魚を取るのには、又で刺すのが手取り早く、且つ獲物が多いから、むかし、魯の隱公が棠に往つたのは、網打であらうか、それを觀魚といつたのは、仰仰しくして、名實相副はぬ感があるし、太公望は、渭水に釣を垂れたといふが、もとより、魚も取れず、徒に日を消したことであらう。文客は、又魚の快なるを見るや、一鷺を喫して詩を賦し、篙工は、その捕獲の多きを喜んで、齊しく聲を張り上げて歌つて居る。やがて、その魚を膾にして箸を下すとき、わが友と共に餐せむことを思ひ、奇觀の樂しきにつけて、吾が同僚を思ひ出すので、君にも是非一度来て貰ひたい。この又魚を觀て居る間は、如何にも愉快であつて、平生の憂慮を捐つべく、おのが運命の非なることを嘆き詫びて、鵬鳥に問ふにも及ばない。

【餘論】初の八句は、又魚の用意として舟を出すこと、次の八句は又魚、次の六句は又して捕つた魚、次の六句は又魚の後に於ける江上の景、次の四句は又魚の快、次の四句は即ち友を憶ふことに及んで、張功曹を招くのは、自然その中に見られて居る。この詩は排律で、對仗確當、随分細かに立ち廻つて居るが、往往にして、瑣屑に失する嫌があるので、朱竹垞が「儘ま色澤あり、但し稍や未だ雅に入らず」といつたのも、その爲めであらう。

李員外寄紙筆

李員外、紙筆を寄す

題是臨池後、分從起草餘。題することは是れ臨池の後、分つことは起草の餘よりす。

兎尖針莫竝、蘭淨雪難如。兎の尖なるは、針竝ぶなく、蘭の淨きは、雪も如き難し。

莫怪殷勤謝、虞卿正著書。怪む莫かれ、殷勤に謝するを、虞卿正に書を著す。

【字解】【一】臨池、張彦遠の法書要錄に「張芝、草書を善くす、池に臨んで書を學ぶ、池水盡く思し」とある。習字をいふ。

【二】起草、漢官儀に「尚書郎は、主として文書の起草を作す」とある。【三】兎尖、西京雜記に「天子の筆は鑽寶を以て削となし、毛は皆秋兔の毫」とある。【四】蘭淨、世説に「蘭之、蘭亭の序を書するに蘭紙を用ふ」とあり、又書法に「蘭之、蘭亭を製し、蘭紙を用ひて之を書す。又建中の初、日本の使者興能、方物を獻す、興能、書を善くす、その紙、蘭に似て淨あり、人、能く繕るなし」とある。蘭紙は、即ち蘭を材料として製いた紙。【五】殷勤、蘭に、丁寧に。【六】虞卿、史記の本傳に「虞卿、意を得ず、乃ち書を著して虞氏春秋といふ」とあり、その論贊に「虞卿、窮愁に非ざれば、亦た書を著すこと能はず」とある。

【題義】李員外、名は伯康、貞元十九年に郴州刺史となつたので、韓愈が郴州待命中、その世話に成つたこともあると見え、この詩は、即ち前首と同時頃の作である。伯康の墓志は、權徳輿の集に見え、又韓愈には祭文があつて、その中に獲紙筆之雙寶とあるは、即ち此事を云つたのである。

【詩意】この紙に、この筆で書くことは、十分習字をした後に於てすべく、これを常用される君の能書も、思ひやられる。そして、この紙筆を他人に分つことは、禁中に在つて、文書の起草を掌つた

後、即ちその使ひ残しと見えて、まことに結構の品品である。筆は、兔毛で出来て居て、その先の尖つて居ることは、針にも勝つて居るし、紙は、繭から造つたので、その純白なることは、雪も及ばぬ位。これを頂戴して、懇懇に御禮を申し上げるのは、他の故あるに非ず、われは、古しへの處卿の如く、窮愁に在つて、今しも著書に心がけて居るからで、何よりの物を賜はつたのは、まことに有り難いことである。

【餘論】 僅僅六句、即ち三韻の律詩、後世の謂はゆる半律であるが、李邕の贈與の由來、紙筆の價值及び謝意を残りなく述べ、あつさりして居る割に、氣が利いて居る。朱竹垞は「語多からざるも、道ひ來つて、却つて好し、自ら親切、味あるを覺ゆ」といひ、顧嗣立は「著書の句、上に應じて力あり、味乃ち長し」といつて居る。

次同冠峽

同冠峽に次す

今日是何朝天晴物色饒 今日是何の朝ぞ、天は晴れて物色饒し。

落英千尺墮遊絲百丈飄 落英千尺墮ち、遊絲百丈飄る。

泄乳交巖脈懸流揭浪標 泄乳、巖脈に交はり、懸流、浪標を掲ぐ。

無心思嶺北猿鳥莫相撩 嶺北を思ふに心なし、猿鳥、相撩ること莫れ。

【字解】 ① 何朝 何の日といふに同じ。 ② 物色饒 佳景の多きをいふ。 ③ 遊絲 かげろふ。 ④ 泄乳 石灰質の液体であらう、その狀、乳に似たるが故に云ふ。 ⑤ 浪標 浪の高い處、即ち浪がしら。 ⑥ 相撩 撩は亂る。

【題義】 同冠峽に就いては、五古一篇が前に見えて居たので、この詩と合せて二首、ともに陽山に赴く時の作である。胡渭の解に「今の廣州府陽山縣の西北七十里に同官峽あり、連州の界に接す、疑ふらくは、この同冠峽ならむ」とある。

【詩意】 今日は如何なる日であるか、天は晴れて佳景が頗る多い。落花は、千尺の崖頂より落ち、かげろふは、百丈も高い處で、ちらちらして見える。乳の如き石灰質の溶液は、巖の脈から浸み出し、早潮の勢早くして、浪がしらを揚げて居る。かばかり景色が好きとも、われは、この嶺北を善い處と思ふ心は聊かも無いので、羈官の身の上、もとより止むを得ぬ次第であるから、猿鳥どもは、それを怨んで來り亂すことの無いやうにして呉れる。

【餘論】 朱竹垞は「結句、張曲江の詠詩より化出す」といつて居る。張曲江は即ち張九齡、そこで試みに至唐詩に就いて、その集を検したが、どうも、それらしいものが見當らぬので、或は竹垞が請記の失では無からうかと思はれる。



答張十一功曹 張十一功曹に答ふ

山淨江空水見沙。山は淨く、江は空しく、水に沙を見る。

哀猿啼處兩三家。哀猿啼く處、兩三家。

貧簪競長織織筍。貧簪競うて長ず、織織の筍。

躑躅開開豔豔花。躑躅開に開く、豔豔の花。

未報恩波知死所。未だ恩波に報えず、死所を知る。

莫令炎瘴送生涯。炎瘴をして、生涯を送らしむる莫れ。

吟君詩罷看雙鬢。君の詩を吟じ罷んで、雙鬢を看れば、

斗覺霜毛一半加。斗に覺ゆ、霜毛一半加はるを。

【字解】(一)江空 江流空闊にして、舟など少しも居らぬをいふ。

(二)貧簪 竹の一種、異物志に簪は水邊に生ず、長さ數丈、圍一尺五六寸、崖壁の界に之ありとある。

(三)躑躅 つつじ。(四)知死所 左傳文公二年、狼噬の語「吾、未だ死所を獲ず」といへるに本づく。

(五)炎瘴 炎暑毒熱の氣。(六)吟 送生涯 杜甫の詩に「須臾美酒送生涯」とあるに本づく。(七)斗覺 斗は俄にの意。

【題義】張十一は、名を署といひ、前にも數ば見えて居た。蔣本には題下に注して「蔣本に、張署が公に寄するの詩ありといひ、しかも、この詩を擧げず、顧本も之に據つて居る處から、何義門は「按するに、張詩を載せず、并せて古人編次の體を失ふ」とある。そこで、試に全唐詩を検すると、張署の詩は、唯だ一首、題を贈韓退之といひ、その全篇は、

九疑峰畔二江前。戀闕思鄉日抵年。白簡趨朝曾竄命。蒼梧左宦一聯翩。鰲人遠泛漁舟水。鵬鳥閒飛露裏天。洩汗幾時流率土。扁舟西下共歸田。

といふので、てつきり、これであらう。しかし、この詩は、格別の名作でも無く、殊に漁舟水、露裏天の如きは、對仗甚だ精當を缺いて居る。韓愈は、この詩を見たるに因つて、乃ち答詩を作つたのである。

【詩意】時しも春の末、山色極めて淨く、江流空闊、水は澄み切つて、底の沙まで見える。このあたりは、まことに寂しく、猿が悲しげに啼く林樹の下に、兩三の人家があるばかり。貧簪の竹は、争うて織織たる筍を長じ、躑躅は、開に豔豔たる花を開いて居る。身は、聖主の恩波に報ゆるを得ず、この邊地に流涕せらるれば、ここを死に場所と定める外はないが、炎暑毒熱の氣に中てられて、この生涯を斷送するやうなことは無い様にした。君から贈られた詩を吟じ畢り、北歸の日、いつとも知られぬことを啣ちつつ、顧みて雙鬢を見ると、絶えざる愁思の爲に、白髪が頭の半にも及んだことを俄に覺つた。

【餘論】任子淵は「斗覺は、詩中の他語なり、前輩多く退之の詩に此句あるを使ふ。東坡の詩、黃昏斗覺羅裳薄、後山の詩、斗覺文字生清新」といつて居るので、成程、この字は、韓愈の創製に係るのかも知れない。なほ、全篇に就いて、朱竹垞は「四句、景を點じて靜味あり」といひ、何義門は「五

六、すでに屈子の雅意に如かず、結、仍は答詩を借り、以て其憔悴を見はす、怨んで亂れずといふべし」といつて居る。

郴州祈雨

郴州に雨を祈る

乞雨女郎魂、魚羞潔且繁、雨を乞ふ女郎の魂、魚羞潔にして且つ繁し。

廟開鼯鼠叫、神降越巫言、廟開いて鼯鼠叫び、神降つて越巫言ふ。

早氣期銷蕩、陰官想駿奔、早氣、銷蕩せむことを期し、陰官、駿奔を想ふ。

行看五馬入、蕭颯已隨軒、行く、看る五馬の入るを、蕭颯すでに軒に隨ふ。

【字解】(一) 女郎魂、女郎は誰を指したか分からぬ、いづれ孝女か何かを祭つて、靈驗あらたかな祠廟が有つたものと見える。(二) 魚羞、魚は肉を包み焼にしたるもの、産は神前の供儀。(三) 鼯鼠、鼯鼠は、狀、鼯鼠の如く、飛んで且つ孔す、亦た飛生と名づく」とある。(四) 越巫、史記封禪書に「漢の武帝、越巫をして越の祝詞を立てしむ」とある。越巫は、越國の巫。(五) 早氣、ひでりの氣。(六) 銷蕩、消えて無くなる。(七) 陰官、陰府の官人。(八) 駿奔、書經に「駿く奔走して豆蓬を執る」とある、疾く走る。(九) 五馬、太守の稱、書注に「魏按するに、五馬の事、書に見えず。詩を以て之を言へば、天子子馬、在二駿之都、素絲組之、良馬五之、周禮の注に、州長は旗を建つ、太守、これに親ぶ、法、五馬を御す、或は云ふ、古しへ、騎馬の車に乗す、太守は一馬を加ふ、漢官儀の注に云ふ」とあり、唐詩話には「魏、天子は六馬、左右騎、三公九卿は騎馬、左騎、漢制、九卿は二千石、右騎を以てす、太守は騎馬のみ、その加秩中二千石は、乃ち右騎、故に五馬を以て太守の美稱と爲す」とあり、蓬齋閑覽に「漢時、朝臣、出でて使して太守となれば、一馬を増す、故に五馬と爲す」とある。(一〇) 隨軒、謝承の後漢書に「鄭宏、淮南太守となり、政、煩苛ならず、天旱、春を行れば、車に隨つて雨を致す」とある。軒は車、隨軒は即ち隨車。

【題義】唐書地理志に「郴州は、桂陽郡に屬して、江南道に屬す」とあつて、後には州として、湖廣に屬して居た。韓愈は、赦に遇うて陽山を離れ、そして、江陵府の法曹參軍となるまで、凡そ三個月の間、待命中、郴州に居たので、この詩は、その間、雨を或る祠廟に祈るのを見て作つたのである。

【詩意】なにがしといふ女を祭つた祠廟に雨を祈るといふので、肉を焼いて供饌となし、清潔を旨とし、且つ其量も豊富である。廟門を開くと、滅多に中に這入ることも無いから、中に居たむさびが、驚いて叫び、やがて、神さまが乗り移つたといふので、越國の巫女は、何やら頻りに喋り立てる。願ふところは、早氣が早く消えて無くなれば善いので、陰官も、かく祭られては黙つて居れず、大急ぎで奔走して居るだらう。兎角する内、太守は五馬の車を驅つて、ここに這入つて來たが、平生善政を行つて居る位だから、この人が一たび祈れば、屹度靈驗があるので、現に蕭颯たる風雨の聲は、太守の車に隨つて遠くから催して來た。

【餘論】郴州の太守、即ち刺史は、前にも見えて、紙筆を贈つた李伯康といふ人で、實際、可なり善政があつた。この詩の結句は、單なる挨拶的形式的の諛辭ではなく、蓋し、其時の實況であらう。

湘中酬張十一功曹 湘中にて張十一功曹に酬ゆ

休垂絕微千行淚 總微千行の涙を垂るるを休めよ、

共泛清湘一葉舟 共に清湘一葉の舟を泛べむ。

今日嶺猿兼越鳥 今日、嶺猿と越鳥と、

可憐同聽不知愁 憐むべし、同じく聽いて愁を知らず。

水至つて清さが故に清湘と云ふ。柳宗元の詩に嶺猿三清湘、越鳥五嶺とある。【一】嶺猿、嶺は五嶺。

【題義】湘中は即ち郴州、この詩は、郴州の待命三月に互り、愈よ、北の方、江陵に遷されて法曹參軍に任せられた時、例の張署が詩を似したのに酬いたのである。但し、張署の詩は、前に引いた七律一首の外、今日傳はつて居るものは絶無である。

【詩意】君よ、最早絶境の遷謫を嘆き詫ぶる千行の涙を垂れずもあれ、いでや、これより、共に一葉の舟を水清き湘江に泛べて、そろそろ北行の支度を致さうでは無いか。五嶺の猿聲、越地の鳥語は、從來しきりに恨を牽いたが、今日、北歸の恩詔に接したからは、君と同じく聴けども、決して愁を催すことなく、その本来の特性を失はしめたのは、却つて、氣の毒に思ふ位である。

【餘論】蔣之翘は「これ、同じく聽いて、情を同じうせざるを謂ふなり。須らく、かくの如く、首二

句を結んで方に振ひ得て起すべし」といつた。同じく聴くとは、張署と共に聞くこと。情を同じうせずとは、猿鳥と愁情を同じうせざることである。次に朱竹垞は「退之、胸襟瀟々、自ら別に一種の興趣あり、これ猿鳥の意を反用す、亦た唐人未だ有らざるところ」といつて居る。

郴口又贈二首 郴口又贈る 二首

山作劍攢江寫鏡 山は劍攢を作し、江は鏡を寫す、

扁舟斗轉疾於飛 扁舟斗轉、飛ぶよりも疾し。

回頭笑向張公子 頭を回らして、笑つて向ふ張公子、

終日思歸此日歸 終日歸るを思うて、この日歸る。

【字解】【一】劍攢、劍の攢集。【二】寫鏡、鏡を寫し出す。【三】斗轉、俄に轉する。【四】張公子、漢書五行志に張公子、時相見とあり、杜市の詩に天上張公子、好去張公子等の句がある。もと貴人の稱であるが、ここでは、張署を指す。

【題義】郴口は郴州の江口で、江は即ち湘口である。ここから、舟に乗つて北に向ふので、この時、重ねて賦して、同行の張署に贈つたのである。

【詩意】山は、劍戟として峙ち、さながら劍の攢集したるが如く、江は、一碧澄泓、恰も鏡を寫し出した如くである。扁舟一たび轉すれば、その疾きこと、飛ぶが如く、まことに愉快である。そこで、

ふり向ひて、張公子に語り、これまでは、終日、北に歸りたい歸りたいと念じて居たが、やつと、願が届いて、今しも北に歸るので、こんな喜ばしいことは無いといつた。

【餘論】朱竹垞は「興味天然、雕飾を假るに非ず」といつて居る。

雪颺霜翻看不分。雪は颺き、霜は翻つて、看れども分たず、

雷驚電激語難聞。雷は驚き、電は激して、語、聞き難し。

沿涯宛轉到深處。涯に沿うて、宛轉、深處に到る、

何限青天無片雲。何限の青天、片雲なし。

【字解】(一) 雪颺霜翻。江水の飛沫を形容して云ふ。(二) 雷驚電激。江勢の壯なるを形容して云ふ。

(三) 宛轉。舟の上下して漂ふ貌。

(四) 何限。無限に同じ。

【詩意】一たび舟を江中に乗り出すと、波は舷頭に碎け、飛沫四に散じ、雪の颺ぐが如く、霜の翻るが如く、いづれとも判然見分け難き位、江勢は、雷の驚き電の激するが如く、水聲亦た喧しく、人語さへ聞き取れぬ程である。やがて、舟は、崖に沿うて上下しつつ、水の深い處へ乗り出した。仰ぎ見れば、無限の青天に一片の雲だになくて、まことによく晴れ、風波の虞なきは、まことに喜ぶべきことである。

【餘論】轉結二句は、承接の工合、稍や不十分の感があるが、如何。

題木居士二首 木居士に題す 二首

火透波穿不計春。火は透り、波は穿つて、春を計らず、

根如頭面輪如身。根は頭面の如く、輪は身の如し。

偶然題作木居士。偶然題して木居士と作す、

便有無窮求福人。便ち無窮福を求むるの人あり。

【字解】(一) 火透波穿。木が元と水道に在つて、ある時は、野火に焼かれ、ある時は、波に洗はれるといふ意。

【題義】木居士は、老木が自然に人の形を爲して居るので、それを寺に安置してあつたものと見える。張芸叟の木居士詩序に「未開縣北、流に沿ふこと二三十里、龍口寺、即ち退之題すところの木居士在り。元豐の初、旱を禱るも、應あらざるを以て、邑令に祈いて薪とせらる。今存するものは、僧道符の刻するところ」とある。

【詩意】野火に焼かれ、江波に洗はること、幾年とも知らず、はては、自然に雕刻されて、根は人の頭面の如く、幹は人の體軀の如くである。それを偶然とも木居士と稱して、崇め奉つて居る處から、これに禱つて福を求める人も、限りなく澤山であるが、考へて見れば、まことに笑ふべきことである。

【餘論】後半二句、世俗の迷夢を覺破したので、朱竹垞は「醒快」といひ、乾隆御批には「世情を道

破す」とある。

爲神詎比溝中斷。神となつて、詎ぞ溝中の斷に比せむや、  
遇賞還同爨下餘。賞に遇うて還た爨下の餘に同じ。

朽蠹不勝刀鋸力。朽蠹して刀鋸の力に勝へず、

匠人雖巧欲何如。匠人巧と雖も、何如せむと欲す。

【字解】【一】溝中斷 莊子に、「百年の木、破つて蟻と爲し、曾黃にして之を文る、その斷、溝中に在り、蟻を溝中の斷に比すれば、美惡間あり、その性を失ふに於ては一なり」とある。溝中に蟻がつて居る斷片。【二】爨下餘 後漢書蔡邕傳に「吳に在り、人、朝を焼いて以て爨するものあり、愚、火煎の聲を聞き、その良木たるを知り、因つて請うて、裁して琴と爲す、果して美音あり、しかも、その尾、竈に焦げたり時人名づけて焦尾琴といふ」とある。【三】朽蠹 朽つて蟲が食ふ。【四】匠人 工匠、細工人。

【詩意】すでに、神として齋き祀られた上は、溝中に棄ててある斷片とは比べ物にも成らず、人に賞鑒されることは、竈の下の燃えさしを取り出して造つた琴と同じ程で、まことに結構なことである。しかし、もとはと云へば、すでに朽ちて蟲などに食はれ、小刀も鋸も施すに由なく、匠人は、いくら巧者であつても、これを如何ともし難く、その儘、棄てて置いたので、それが却つて、かくの如く大切にされるといふのは、不思議である。

【餘論】朱竹垞は「二意尤も妙、含味窮まりなし」と云つて居る。

晚泊江口

晩れて江口に泊す

郡城朝解纜 江岸暮依村 郡城、朝に纜を解き、江岸、暮に村に依る。

二女竹上淚 孤臣水底魂 二女竹上の淚、孤臣水底の魂。

雙雙歸顰燕 一一叫羣猿 雙雙として顰燕を歸し、一一羣猿を叫ぶ。

迴首那聞語 空看別袖翻 首を廻らして那ぞ語を聞かむ、空しく看る別袖の翻るを。

【字解】【一】郡城 郴州を指す。【二】江岸 湘江の岸。【三】二女 娥皇女英、舜の女、舜の死を聞いて、ここまで追ひ至り、涙下りて竹を簫し、その痕、斑となり、依つて斑竹と稱すること、前に數べ見ゆ。【四】孤臣 屈原をいふ、楚より放逐されし後、この邊に來て行吟し、遂に汨羅に投じて死んだ。汨羅は、湘江の瀾である。【五】顰燕 晉書鄧粲傳に「顰、顰を晉國の澤山に遊げ、野鼠顰燕を類つて之を食ふ」とあり、顰之類は「顰、少時、その詩を讀み、深く退之が顰燕を用ふるを以て顰となす、謂へらく、燕、本と飛鳥、宜しく顰燕の字を下すべからざるなり」と。家大人に従つて湘中に遊ぶに及んで、飛燕の累累として俱に土岸の小穴に投するを見、居人に問うて、各顰することを知る、方に此に於て顰然たり」とある。

【題義】江口は、湘水と沅水との會流點であらう。韓愈は、前に見えた郴州から舟で湘水を下り、ここまで來て、夜泊を爲したのである。その詩意及び篇次を考へると、無論、陽山から還つて湘中を過

きた時の作である。

【詩意】朝に鏡を解いて、郴州の郡城を發し、湘江を下ること一日、晩に村里近き江岸に舟を泊した。湘中一帶、故蹟少からず、娥皇女英は、涙の痕を留めて、斑竹なほ存し、屈原の魂は、鬢髯として、水底に住まつて居る。時しも、秋の末、雙雙として飛ぶ燕は、これより、土穴に盤すべく、林樹の間に於て羣狼の叫ぶのは、一聲一聲、はつきりとして居る。おもへば、今朝、埠頭に於て見送りの人人と別れたとき、舟、方に發すれば、首を廻らすも、人語すでに聞こえず、空しく、その人人の袖の翻るを見るばかりで、物とはなしに詫しい想を爲した。

【餘論】兩聯は眼前の景物で、その中、一種の感想が籠つて居る。起結照應して、通體極めて緊健、朱竹垞は「格淨く、氣味自ら同じからず」といつた。

湘中

湘中

猿愁魚踊水翻波、

猿は愁へ、魚は踊つて、水は波を翻す、

自古流傳是汨羅、

古しへより、流傳するは是れ汨羅。

蘋藻滿盤無處奠、

蘋藻滿盤、奠するに處なし、

【字解】「汨羅」漢書賈誼傳に「賦を爲り、以て屈原を弔ふ、曰く、側聞屈原兮自漭汨羅」とあつて、

顧師古の注に「汨は水名、長沙の羅

空聞漁父扣舷歌

空しく聞く、漁父の舷を扣いて歌ふを。

羅に在り」とある。今では長沙の湘

除縣。【二】漁父 楚辭の漁父に「漁父莞爾として歌ひ、棹を鼓して去り、前復の歌を爲る」とあつて、王逸の注に「棹を鼓すとは船舷を叩くなり」とある。

【題義】湘中は即ち湘江流域の平原を汎稱するので、この詩は、汨羅に臨んで、屈原を弔つたのである。

【詩意】猿は愁ひ、魚は躍り、湘江の水は波を翻して、まことに物すごき景色。ここは、古しへより屈原が死んだ處として、世間に知らるる汨羅の故蹟である。そこで、その魂を祭るが爲に、蘋藻を盤に載せたが、さて何處に向つて差めたら善いか分からず、屈原が逢つた其人かと思はれる様な漁父が、相變らず、舷を扣いて、何やら歌つて居る。

【餘論】今でこそ懐古の常套であるが、韓愈の時代に於ては、鬼に角、耳新しいものであつたらう。朱竹垞は「氣勁くして勢あり」といつて居る。

別盈上人

盈上人に別る

山僧愛山出無期、

山僧、山を愛して出づるに期なし、

【字解】「出無期」山を出る

律詩 湘中 別盈上人

俗士牽俗來何時。俗士俗に牽かれて来るは何の時ぞ。

祝融峰下一廻首。祝融峰下、一たび首を廻らす、

即是此生長別離。即ち是れ此生長く別離。

【題義】柳子厚集に「誠益あり、衡山の中院に住す」とあつて、ここに云ふ盈上人は、大抵、その人であらうといふこと。この詩は、韓愈が陽山より江陵に赴く時、衡山に立ち寄つて、上人に逢ひ、別れる時に賦して示したので、前に在つた衡嶽廟と同時の作である。

【詩意】上人は、山僧を以て自ら居り、生來、山を愛して、この衡山にこもり、山を出るのは、何時とも分らない。われは、もとより俗士で、平生世事に牽き付けられて居るから、再びこの衡山に来るのは、又何時とも分らない。されば、今日、ここに手を別つことは、生涯の別離となるかも知れないので、祝融峰下に立つて、又ぞろ首を廻らして顧望し、去りがてにして踟躕する次第である。

【餘論】格別の雕飾もなく、尋常口頭の語を詩にして、割合に拈ぬけがして居るところは、洗石に面白。朱竹垞は「古質喜ぶべし」といひ、極めて、肯綮に中つて居る。

のは何時とも分らない。【二】牽俗、俗事に牽籠される。【三】祝融峰、衡山の最高峰。

喜雪獻裴尙書

雪を喜ぶ、裴尙書に獻す

宿雲寒不卷。春雪墮如篔。

宿雲寒くして卷かず、春雪墮ちて篔が如し。

騎巧先投隙。潛光半入池。

巧を騎せて先づ隙に投じ、光を潜めて半ば池に入る。

喜深將策試。驚密仰簷窺。

深きを喜び策を將て試み、密なるに驚き簷を仰いで窺ふ。

自下何曾汗。增高未覺危。

自ら下る何ぞ曾て汗れむ、増す高くす未だ危きを覺えず。

比心明可燭。拂面愛還吹。

心に比するに、明かにして燭すべく、面を拂うて、愛して

妬舞時飄袖。欺梅併壓枝。

舞を妬んで、時に袖に飄り、梅を欺いて、併せて枝を壓す。

地空迷界限。砌滿接高卑。

地は空しうして、界限に迷ひ、砌は滿ちて高卑に接す。

浩蕩乾坤合。霏微物象移。

浩蕩として乾坤合し、霏微として物象移る。

爲祥矜大熟。布澤荷平施。

祥を爲して大熟に矜り、澤を布いて平施を荷ふ。

已分年華晚。猶憐曙色隨。

すでに年華の晩きを分とし、猶ほ曙色の隨ふを憐む。

氣嚴當酒換。灑急聽臆知。

氣嚴にして酒に當つて換り、灑ぐこと急にして臆に聽い

照曜臨初日。玲瓏滴晚澌。

照曜して初日に臨み、玲瓏として晚澌を滴る。

聚庭看嶽聳。掃路見雲披。

庭に聚つて嶽の聳ゆるを看、路を掃うて雲の披くを見る。

陣勢魚麗遠 書文鳥篆奇  
 縱歡羅豔黠 列賀擁熊鷹  
 履弊行偏冷 門扁臥更羸  
 悲嘶聞病馬 浪走信嬌兒  
 竈靜愁煙絕 絲繁念鬢衰  
 擬鹽吟舊句 投簡慕前規  
 捧贈同燕石 多慙失所宜

【字解】(一) 如從 徑は竹筴、物を下すもの、即ちふるひ、ふるひで振ふ。(二) 漚念羅羅知 羅羅とは、窓に耳を倚せてちつと聞くこと、郭伯温の問見録に「荆公、かつて、力去陳言詩、未俗、可憐無補、費三精神、を以て退之を薄んず。然れども、その雪を鉄するにば、すなはち云ふ、借問火城詩、策試、何如雪屋、窓知と。普退之の句を用ふるなり。古人の陳言を去る、以て非となし、古人の陳言を用ひ、乃ち是と爲すか」といつて居る。(三) 晚澗 澗は雪解の水。晚、一に曉に作り、その方が切實である。(四) 魚麗 左傳桓公五年に「鄭人、魚麗の陣を爲り、偏を先にし、任を後にす」とあつて、杜預の注に「司馬法、車戰は二十五乘を偏となし、車を以て前に居り、任を以て之に次ぐ、これを蓋し、魚麗の陣法」とある。(五) 書文鳥篆奇 尙書の疏に「書を造ることは、鳥跡を觀、因つて遂に益くするときは、これを字といふ」とあり、班固の書論に「蒼頡、俯して龜文鳥跡の篆を察し、合して字と爲す、これを古文となす」とあり、衛恒の四體書勢に「黃帝の史、沮邕、蒼頡、彼の鳥跡を跡め、はじめて書契を作るとある。(六) 羅豔黠 美女を指す、黠は必ずしも悪い意味ではなく、媚を呈するより云ふ。(七) 熊鷹 魯士を指す。(八) 履弊行偏冷 史記に

「東郭先生、雪中を行く、履に上あつて下なし、足、遠く地を履む」とある。(九) 門扁臥更羸 故南先賢傳に「時に大雪、地に積むこと丈餘、洛陽の令、宣安の門に至る、行路あるなし。安、すでに死せりと謂ひ、人をして雪を除かしめ、門に入つて見れば、僅れ臥するを見る」とある。(一〇) 擬鹽 晉書謝道韞傳に「かつて寒集す、俄にして雪驟かに下る、謝安曰く、白雪紛紛何所似、兄の子即曰く、撒鹽空中可擬」とある。この下に道韞の未如柳絮、風起といふ句があつて、三句ともに押韻し、偶然ながら、擬句の形式に成つて居る。(一一) 投簡慕前規 文選雪賦に「梁王、兔園に遊ぶ、俄にして雪下る、王、酒ち簡を司馬大夫に授けて曰く、色を俾うし、稱を稱り、寡人の爲に之を賦せよ」とある。(一二) 燕石 關子に「宋の愚人、燕石を得て之を蓋し、以て大寶となす。周客、聞いて觀る、笑つて曰く、これ特だ燕石なり、其れ瓦礫と殊ならず」とある。

【題義】 喜雪とは、雪が豊年の兆などいはれる故に、その降つたのを慶賀したのである。唐書に、「表均、字は君齊、荆南節度使に累遷し、檢校吏部尙書を加ふ」とある。すると、この詩は、元和元年の春、韓愈が法曹參軍となつて江陵に居たとき、同地駐節の表均に獻する爲に作つたのである。

【詩意】 夜來疊合せる雲は、寒げに見えながら、未だ卷き收めず、春の雪は、ちらちらと降つて來て、丸でふるひで窺ふ様である。雪の飛ぶとき、或は技巧を馳せて、第一に物の隙間を目がけて其中に投じ、或は己が光を潜めて、池に落ち込むこともある。大分積つた處で、その深さを喜び、杖を以て試みに之を測り、又密に重なり合つたのに驚き、檐を仰いで、下から之を窺ふこともあつた。雪は、勝手に地に降つても、決して汚れることはなく、だんだんに高く積つて、危いことを覺えない。その皎潔は、わが心と相比すべく、明かにして燭火に代用することも出来るし、その清冷なるは、面を拂うて、



ひいやりするのも、心持が善い。又舞を妬むが如くして、ある時は女の袖に飄り、梅を壓倒して、その枝をも押へつけることがある。地上に平に鋪けば、空淵にして界限なきが如く、階に滿ちて、高い處と卑い處と相接して、唯だふわりとして居る。天地は、浩蕩として相合し、物象は、霽微して移り變る。雪は、豊年の祥瑞として、今年の大熟も豫想せられ、又地に潤ひを加へて、平等に布き施して居る。雪が降つて見れば、春ながら、年の暮の様な氣がするし、又曙の景色の如く、ほんのりと明るいは、殊に面白い。さすがに寒氣厳しいけれども、酒の御かげで機嫌が變り、降り來ると、愈よ急にして、窓に耳を倚せると、明かに、それと知られる。愈よ夜あけになると、光り輝いて朝日に臨み、玲瓏たる中に、早くも雪解の水が滴れる。庭に聚まれるは、山嶽の聳えたるが如く、路に當れるを掃へば、一すち空になつて、雲が中から披いた様である。打ち見たる處、遠きに互つて、魚麗の陣を布いた様な具合で、その上なる足跡などは、丁度太古に出來立ての鳥窠などいふ字體に酷似して居る。その時しも、朝官富貴の家では、酒を縦にして歡を爲し、側には美女を侍らせ、又祝辭を述べに來る者どもは、衛士に引き立てられて、ぞろぞろと階下に聚まつて來て、まことに物物しく、賑かな有様。これに引きかへて、陋巷貧賤の者どもは、履が破れて、底なき履、歩けば足の裏がつめたく、又門を閉ちた儘、屋底に臥して居て、人には死んだかと思はれる位、まことに、見じめに氣の毒な状態である。悲しげに嘶くは、病馬たるを知るべく、勝手に走りめぐるのは、そんなじよそこ

らの臍白小僧どもであらう。ここに、予は、窳靜にして、飯を炊かぬから、朝げの煙も上らず、白髮は絲の如くそそけて、兩鬢の衰へたるを念ふばかり。そこで、鹽に喩へたといふ舊句を吟じ、紙を與へて何か作れと命せられた其先例を慕つて、この詩を作つた。さて之を得意らしく其下の前に奉贈するのは、さながら、宋の愚人が燕石を大さうな者の様に誤信したと同じく、その宜しきところを失つて、全く見るに足らず、こんな物で御目を汗すのは、まことに慙愧に堪へぬ次第である。

【餘論】自下何曾汗より以下十句は、雪の降る有様を描き出したのであるが、朱竹垞は「退之、物を狀する、毎に極似を欲す、これを以て、反つて稍や粘滯す」といつて居るが、まさしく、その病に中つて居る。それから、履弊行偏冷の二句、窳靜愁煙絶の二句は、貧寒の状態で、竹垞が「數語亦た工なり、但だ喜意に於て稍や背く」といつた通りである。そこで、題意に副ふ様にするには、爲「祥麟大熟」の二句以外、今少し事こまかに述べて貰ひたかつたので、太平の世には雪が條を封せぬとか、蝗の卵が土中で死ぬとか、少し詮索すれば、決して材料の窮乏を告げぬ筈である。

春雪

春雪

看雪乘清旦、無人坐獨牀。

雪を看て清旦に乗じ、人なくして坐して獨り牀よ。

拂花輕尙起。落地暖初銷。  
 已訝陵歌扇。還來伴舞腰。  
 灑篁留密節。著柳送長條。  
 入鏡鸞窺沼。行天馬度橋。  
 徧塔憐可掬。滿樹戲成搖。  
 江浪迎濤日。風毛縱獵朝。  
 弄閒時細轉。爭急忽驚飄。  
 城險疑懸布。砧寒未擣綃。  
 莫愁陰景促。夜色自相饒。

花を拂うて軽くして尙起り、地に落ちて暖にして初めて、  
 已に訝る、歌扇を陵ぐかと、還た來つて舞腰に伴ふ。「銷ゆ。  
 篁に灑いで密節に留まり、柳に著いて長條を送る。  
 鏡に入つて、鸞、沼を窺ひ、天を行いて、馬、橋を度る。  
 塔に徧くして掬すべきを憐み、樹に滿ちて戲に搖くこと」  
 江浪濤を迎ふるの日、風毛獵を縱にするの朝。「を成す。  
 閒を弄して、時に細に轉じ、急を争うて、忽ち驚いて飄る。  
 城は險にして、布を懸くるかと疑ひ、砧は寒くして、未だ」  
 愁ふる莫れ陰景の促すを、夜色自ら相饒す。「綃を擣かず。

【字解】(一) 清且 清且と同じ、清清しき朝。(二) 入鏡鸞窺沼 この二句は、倒挿法で、即ち鸞沼鸞入鏡、度橋馬行天といふ意である。沈括の筆談に「杜子美の詩、紅粉嬌啼嬌粉、碧梧樓老風風枝、語相反して意新なり、退之の入鏡鸞窺沼、行天馬度橋、蓋し、この體に就ふ、然れども、稍や牽強にして、前人の渾成に若かざるなり」とある。(三) 江浪 浪の字は水と同じ程に軽く見るが善い。(四) 風毛 文選西都賦に風毛雨血とある。(五) 懸布 左傳襄公十年に「晉の荀偃十句、偏陽を伐つ、主人布を懸く、重受、これに登る、墜に及んで之を起つ」とある。

【題義】これは、春雪を詠じたので、矢張、前首と略ぼ同時の作であらう。

【詩意】朝の清清しきに乗じて、雪の降る景色を眺め、外に人なく、ひとり坐して語つて居る。その片片は、花を拂ふが如く軽くして、尙ほ飛び起たむとするが、地に落ちると、春氣すでに暖いから、やがて消えて仕舞ふ。その徐に飄る様は、歌扇を陵ぐかと疑はれ、又來つて舞腰に伴ふ氣色がある。竹に降りかかつては、細かい節の處に留まり、柳に著いては、長い枝を吹き動かす。沼を窺ふ鸞は、鏡中に入るかと怪まれ、橋を度る馬は、天上を行くが如くである。階に積つては、手でも掬へるし、樹に滿ちては、戲に搖かすことが出来る。江水は大濤を迎へて逆巻くが如く、風に亂るる羽毛は、獵を縱にすることを推測せしめる。閒を弄しては、時時細かに轉じ、急を争うては、忽ち驚いて飄り、その頻りに變化する處が面白い。城は險にして、白布を懸けたるが如く、砧は寒くして未だ綃を打ち始めない。終日降り通して、追追日暮に成りかかつたが、陰暗の景の促すは、間はずもあれ、夜の景色は、又一しほであらう。

【餘論】朱竹垞、何義門二家の説を併せて批評を試みると、この詩の發端は、深妙にして、いかにも春雪らしい、拂花、著地の一聯も好いとして、歌扇、舞腰は、稍や率易に失して居る、江浪迎濤日以下は、少しも春意を見ず、城險の一聯、語は頗る工なれども、何も春雪に限つた譯ではなく、從つて、切實を缺いて居るし、莫愁陰景促の二句は、清且に應じて結び、夜色の二字は、相對して關鎖

を作し、色の字は、看の字と呼應して居るので、この邊は、流石に縝密に出来て居る。

聞梨花發贈劉師命 梨花の發けるを聞き、劉師命に贈る

桃蹊惆悵不能過 桃蹊、惆悵、過ぐること能はず、

紅豔紛紛落地多 紅豔紛紛、地に落つること多し。

聞道郭西千樹雪 聞くならく、郭西千樹の雪、

欲將君去醉如何 君を將て去らむと欲す、醉ふこと如何。

【字解】(一)桃蹊 桃香李廣傳

實に「桃李言はず、下、自ら蹊を成す」とあつて、關師古の注に「蹊は徑道を謂ふなり」とある。(二)惆悵 殘念に思ふ。(三)紅豔 桃の花片をいふ。(四)千樹雪 梨花の落開をいふ。

【題義】説明に及ばぬ。蔣注に「この詩と後の梨花下の詩とは、皆貞元二十一年正月、陽山に在つて作る。後詩に、今日相逢漳海頭といふは、是れなり。公の古詩にも、亦た劉生詩あり」と見ゆ。【詩意】前日桃の花の盛りの時に、その下の徑を逍遙して、吟賞することの出来なかつたのは、いかにも殘念な事で、兎角する内に、紅の花片は紛紛として、駉しく地上に散り布いて仕舞つた。聞けば、城西の梨が眞盛りで、千樹ながら雪の如く、今が丁度見頃であるといふことで、君と一緒に掛けて、花下で一醉したいと思ふが、尊意如何、御返事を待つて居る。

【餘論】格別、奇拔な趣向でもないが、桃蹊を借ひ來つて、陪襯とした處に、多少の風情があるので、朱竹垞は「逸興飄然」といつて居る。

春雪間早梅

春雪、早梅に關る

梅將雪共春 彩豔不相因 梅は雪と春を共にし、彩豔相因らず。

逐吹能爭密 排枝巧妬新 吹を逐うて能く密を爭ひ、枝を排して巧に新を妬む。

誰令香滿座 獨使淨無塵 誰か香をして座に滿たしめ、ひとり淨くして塵なからしむ。

芳意饒呈瑞 寒光助照人 芳意饒く瑞を呈し、寒光助けて人を照らす。

玲瓏開已遍 點綴坐來頻 玲瓏として開いて已に遍く、點綴して坐來に頻りなり。

那是俱疑似 須知兩逼真 那ぞ是れ俱に疑似する、須らく知るべし兩つながら眞に

熒煌初亂眼 浩蕩忽迷神 熒煌 初めて眼を亂し、浩蕩、忽ち神を迷はす。

未許瓊華比 從將玉樹親 未だ許さず、瓊華に比することを、玉樹と親しむに従かす。

先期迎獻歲 更伴占茲辰 先づ期す獻歲を迎へむことを、更に伴うて茲辰を占む。

律詩 聞梨花發贈劉師命 春雪間早梅

願得長輝映。輕微敢自珍。願はくは、長く輝映するを得む、輕微敢て自ら珍とせむや。

【字解】(一)梅將雪。詩は與と同韻。(二)彩。光彩と麗美。(三)逐吹。吹は風。(四)瓊華。詩經に尙之以瓊華。平而、つくり花。(五)從。まかす。(六)玉樹。文選什卓賦に翠玉樹之青樹とある。(七)獻歲。新年。

【題義】春雪が梅花に雜つて見える其景色を詠じたので、即ち詠物の體である。これも、前の春雪二首と同時の作であらう。

【詩意】今しも、梅と雪とは、春を共にして居るが、その光彩麗美は、互に關係がない。雪は、風の方向に従つて厚く積り、梅は枝を排置して、その目新しさ妬ましげに見える。幽香をして座に滿たしむるは梅であるし、淨絶にして塵なからしむるは雪である。梅の芳意は、十分に雪をして瑞色を呈せしめ、雪の寒光は、又梅を助けて人を照らさしめる、梅花は玲瓏として、すでに遍ねく開き、雪は點綴を作さむが爲に、見る間に降りしきる。梅と雪と、その純白は見まがふ程類似して居るが、兩つながら、その真に逼る處を辨別せねばならぬ。梅花は焚燈として、見る人の目もあやなるばかり、積れる雪は、浩蕩として、忽ち我が心神を迷はしめる。梅花は、未だ瓊花に比することを許されざれども、雪を帯びたものは、玉樹の如く見える。さきには、梅花と共に新年を迎へむことを期して居たが、今や、相伴うて、この雪の朝の絶景を占めるのも面白い。梅と雪とは、いつまでも相輝映して居て貰ひたいので、雪は、もとより輕微の者で、敢て自ら珍として、心から誇つて居る譯でもない。

【餘論】梅と雪とを交互に詠出して、題意を遺憾なく言ひをほせむとした處に、一段の苦心を見るので、朱竹垞は「鑿空撰出、清意人を襲ふ、寫生の神手と謂ふべし」といつて、大さう持ち上げたが、これと反對に、紀曉嵐は「昌黎の古體、一代を横絶す、律詩は長するところに非ず、試帖刻畫、更に長するところに非ず。この詩、刻意才を斂め、法に就き、反つて淺俗を成す、佳作と爲さず」といつた。篇と考ふれば、兩者とも、あまり積極的で、極端に失した感がある。なほ、この詩は、瀛奎律髓にも抄出してあつて、方虛谷の細評がある。これとても、勿論一家の私見で、必ずしも公論では無いが、参考の爲に、下に引抄することにする。曰く、汗血千里の馬、必ず能く蟻封を折旋す。昌黎は大才なり、文、六經と相表裏し、史漢肩を並べて驅るもの、その大篇の詩を爲る、險韻長句、一筆百千字、而して賦するところの一小著題の詩、雪の如き、笋の如き、牡丹・櫻桃・榴花・蒲萄の如き、一句一字、輕輕しく下さず、この題、必ず當時同じく賦するものあらむ。春雪早梅の中、一間の字を著く、只だ彩豔不三相因の一句五字、すでに佳なり。彩は、雪の豔なるを言ふ。梅、本と相資せずして、此美を成すと云ふ、句は是れ相爲し得るの意に非ず。芳意饒呈瑞、以て梅の芳、又饒くするに、雪の祥瑞を以てするを言ひ、寒光助照人、以て雪の光、梅の映照を助くるに足るを言ふ。錯綜工を用ふ、亦た密なりと謂ふ。學者詩を作る、思はずして得、嗚咄叫怒、即ち章を成すべしと謂ふ、吾、信せざるなり。唯だ更伴占益辰の一句、恐らくは、誤あらむ。大才を小詩の間に束ぬ、惟だ五言律、最も難

しと爲す。昌黎の此詩、賦して十韻に至る、元微之の春雪映早梅に較ぶれば、四韻多し、題すでに甚だ難し、少しく春容を放つに非ざれば、不可なり。柳子厚に早梅の詩、古體仄韻あり。

早梅發高樹。迥映楚天碧。朔吹飄夜香。繁英滋曉日。欲爲萬里贈。杳杳山水隔。寒英生銷落。何用慰遠客。

單に早梅を賦して律と爲さず、鍛練し易きなり。たとへば、雪の詩、

千山鳥飛絕。萬徑人蹤滅。孤舟蓑笠翁。獨釣寒江雪。

の如き、古體と爲さば、天下の奇を極むべし、律體と爲さば不可なり。昌黎、將策試、聽窓知の六字を得て、荆公に引用せらる。亦た是れ若干の思索を費す、律體尤も難し、古體差や易きが故なりと。しかし、紀曉嵐は、之を駁して「この説、確ならず」といひ「この一段、全く肯に中らず、古體易くして律體難しといふを視るに、豈に詩を知る者の論ならむや、平生の底蘊、畢く此に露はる」といつて居る。元來、方虛谷は、その人物、すでに猥瑣、その詩學上の造詣も知られたのであるのに、兎角偉らく見せかけやうとする處から、僻論が甚だ多い。ここでは、唯だ話柄に資する爲に、その一條を引いたのである。なほ前の春雪なども、瀟灑律體に引いてあるが、特に取り立てる程の議論も述べてないから、すべて、引抄せすに置いた。

早春雪中聞鶯

早春雪中に鶯を聞く

朝鶯雪裏新。雪樹眼前春。

朝鶯、雪裏に新なり、雪樹、眼前の春。くことの類なるを。

帶遶先迎氣。侵寒已報人。

遶を帯びて先づ氣を迎へ、寒を侵して已に人に報す。

共矜初聽早。誰貴後聞頻。

共に矜る、初めて聴くことの早きを、誰か貴ばむ、後に聞

暫轉那成曲。孤鳴豈及辰。

暫く轉るも、那ぞ曲を成さむ、孤鳴、豈に辰に及ばむや。

風霜徒自保。桃李詎相親。

風霜、徒に自ら保つ、桃李、詎ぞ相親まむ。

寄謝幽棲友。辛勤不爲身。

寄謝す幽棲の友、辛勤、身の爲にするならず。

【字解】(一)帶遶 聲未だ聞ならず、聊か兼ぶる。(二)迎氣 春の氣を迎へる。(三)豈及辰 辰は時、春の盛の時に及ばない。

【題義】説明に及ばぬ。蔣注に「諸本、或は入關詠馬の後に在り、北地春曉、方に鶯を聞く、この詩は、蓋し南遷の時の作なり」といつて居る。韓集は、手あたり次第に集めたので、順序などは、更に無いから、諸本に、どうあらうとも、決して、あてには成らぬ。察するところ、矢張、江陵に在つた時に作つたので、前の春雪の數首と同じ頃であらう。

【詩意】白皚皚の裏に朝鳴く鶯の聲が聞こえ、雪を帯びた木木は、花かと疑はれ、まさしく、眼前の

春を爲してある。但し、その聲は、聊か溢つて居ながら、春氣を迎へ、寒を侵して、人に時節の推移を報ずる處が嬉しい。早くも、初めて之を聴いたのは、まことに矜るべきことであつて、この後、いくら明いたとしても、貴ぶに足らぬ。つまり、初耳といふ處が、第一に面白い。無論、しばらく嗜つて居たが、曲調をも成さず、ここで、獨り鳴いて居て、世は豔陽の春になつても、知らずに居るであらう。風霜の寒い處に、徒に自ら其身を保つは善いが、折角の桃李と縁故が無いやうに成つては、まことに詰まらない。ここに、幽棲して居る吾が友に寄語するが、何でも、然るべき處に出て居らぬと、萬事に閉却されて仕舞ふので、今わが世に立つて、辛苦勤勞するも、決して一身の爲めではなく、やがて、然るべき機會に乗じて、大に濟世の大事業をも遣らうといふ其準備である。

【餘論】朱竹垞は「稍や前首に通る、然れども、句句是れ早聞、亦た流快人を動かす」といひ、何義門は、清切といつて居る。

梨花下贈劉師命 梨花の下劉師命に贈る

洛陽城外清明節 洛陽城外清明の節、

百花寥落梨花發 百花は寥落、梨花は發す。

【字解】(一)清明、二十四氣の一、春分の次、照朝樂事に「清明の役二日を寒食といふ」とあつて、寒

今日相逢瘴海頭 今日相逢瘴海の頭

共驚爛漫開正月 共に驚く爛漫正月に開くを。

【一】瘴海、毒熱の氣の滿つる海洋、即ち南海。

食は冬至の後百五日であるから、清明は百三日、即ち晩春の候である。

【題義】前に開、梨花發、贈劉師命といふ七絶があつて、花見に誘引する意を述べてあつた。すると、この詩は、愈も同行して、陽山の郭外に梨花を賞した時に作つたのであらう。

【詩意】洛陽では、晩春清明、百花散り盡して淋しい頃に、城外に於て、はじめて梨花が咲くのであるが、今日、南海の濱なる此地に於て梨花を見たが、まだ正月といふのに、真盛りで、風土の異なるが、まことに驚くべき程である。

【餘論】蔣注に「或は云ふ、當に古詩中に録すべし」とある。この詩は、結句以外の三句は、矢張律句であるが、全體として絶句の平仄式に協はず、おまけに、仄韻を用ひて居るから、論者の云ふ通り、七古四句の古詩と見るのが正當であるが、絶句の變體とする人もあるから、ここに入れた處で、全然間違つて居るといふ譯ではない。朱竹垞は之を評して「粗豪自ら肆にす」といつて居る。

和歸工部送僧約 歸工部の僧約を送るに和す

早知皆是自拘囚 早く知る、皆是れ自ら拘囚することを、  
不學因循到白頭 學ばずして、因循、白頭に到る。  
汝既出家還擾擾 汝、すでに出家して還た擾擾、  
何人更得死前休 何人か更に死前に休するを得む。

【字解】(一) 拘囚、拘留されて囚人となる。(二) 因循、のんきなること、愚固愚固して居る。(三) 擾擾、騒いで落ち付かぬ暇。

【題義】題下の自注に「工部歸登なり」とあつて、舊唐書の本傳には「歸登、字は沖之、孝廉に擧げられ、復た賢良科に登り、工部尚書に累遷して卒す」とある。約は、荊州の人、詳に劉夢得集に見えて居るといふが、本名等は分からの様である。約といふ坊さんが旅するに就いて、工部尚書の歸登が送行の詩を作つて贈つた、それを韓愈が見て和して作つたのである。

【詩意】人が常に安處せずして、多事に苦むのは、すべて自分で其身を拘留し、囚人同様にしたからで、なま中、學問などをすると、却つて宜しくない。不學なれば、至極のんきで、白頭になるまでも、無事であるといふことを、予は早くより知つて居る。汝は、出家して、世間との繋累を絶ち、もとより、閒散であるべき筈であるのに、擾擾として落ちつかず、今回も又旅に出かけるといふのは、まことに御苦勞千萬、汝にして、すでに此の如き上は、死ぬ前に心のどかに休息して居るといふ様なものは絶無であらう。

【餘論】これは、僧約の多事を嘲笑したので、朱竹垞は「豪氣を以て驅遣す、磊落痛快」といひ、乾隆御批には「威を振うて一喝、三日耳聾」とある。

入關詠馬 關に入りて馬を詠す

歳老豈能充上駟 歳老いて豈に能く上駟に充てられむや、  
力微當自慎前程 力微にして當に自ら前程を慎むべし。  
不知何故翻驥首 知らず、何が故に翻つて首を驥ぐ、  
牽過關門妄一鳴 牽いて關門を過ぐれば、妄りに一鳴す。

【字解】(一) 上駟、史記孫子列傳に「今君の下駟を以て彼の上駟と與にし、君の上駟を取つて彼の中駟と與にす」とある。驥は、馬車を牽かす四頭立の馬で、その材質に従つて、上中下に區別して、然るべき位置に置ける。(二) 前程、將來。

【題義】 蔣注に「元和元年の夏、江陵に入り、召されて、國子博士に拜せらるるとき、藍關に入つて作る」とある。

【詩意】 この馬は、もと材質が美で、十分役に立つたかも知れぬが、最早、年を取つた上は、到底上駟に充用することは出来ず、力も微弱に成つたことであるから、自分で注意して、行末、過失の無い

やうにするのが善い。然るに、何故か知らぬが、却つて、首を驥けて、頻りに勇み立ち、ここ藍關を過ぎるとき、妄りに一聲高く嘶いた。馬の本志では、猛氣依然として存し、今一度功名手柄を願はしたと思つて居るのであらう。

【餘論】朱竹垞が「是れ自ら道ふ」といへる通り、韓愈は、見る者に依つて興を起し、分明、老馬を以て自ら任じ、なほ其用ふるに堪へたることをほめかし、わざと自ら嘲笑した様に言つたのである。

木芙蓉

木芙蓉

新開寒露叢、遠比水間紅。

新に開く寒露の叢、遠く水間の紅に比す。

豔色寧相妬、嘉名偶自同。

豔色、寧ろ相妬まむや、嘉名、偶ま自ら同じ。

採江官渡晚、寒木古祠空。

江に採れば、官渡晚れ、木に寒れば、古祠空し。

願得勤來看、無令便逐風。

願はくは勤めて來り看るを得む、便ち風を逐はしむる無れ。

【字解】(一)水間紅 水中に在つて赤い花を咲く馬。(二)嘉名偶自同 蓮の一名を芙蓉と稱するより云ふ。(三)採江 文選の古詩に「採江採芙蓉」とある。(四)官渡 公渡の渡船場。(五)寒木 楚辭の九歌に「寒木末」とある。(六)古祠 九歌は元と神を祭る爲に作つたから、いづれも祠がある、そこで、かく云つたのである。

【題義】木芙蓉は、我が邦で普通に唯だ芙蓉といつて居る。本草綱目に「木芙蓉、條を挿せば即ち生ず。小木なり。その幹は叢生して荆の如し。高きものは丈許、その葉、大梧桐の如し、五尖及び七尖の者あり、冬凋み、夏茂り、秋半はじめて花を著く。花は牡丹芍薬に類し、紅きもの、白きもの、千葉のものあり、最も寒に耐へて落ちず、實を結ばず、その皮を取つて索となす」とあり、和漢三才圖會には更に詳しく「木芙蓉は、その樹葉花實、皆木槿に似て大きく、豔美なり。七月に花を開く、桃紅色、或は純白、或は紅白相半す、單瓣あり、千葉あり、皆朝に開いて暮に萎む。毎枝數朵、更る更る開き、日を逐うて盛なり。その花落ちて實を結ぶ、亦た木槿の如し。輕虚、薄皮あつて、細子を裏む、桃紅色、能く生じ、枝を挿むも亦た活き易し。然れども、本草に謂はゆる、花、寒に耐へて落ちず、實を結ばずの文は、未だ審ならず」とある。この詩は、木芙蓉を詠じたので、即ち詠物の體である。

【詩意】木芙蓉は、新に咲き出でて叢を爲し、それに露のかかつて居るのは、まことに風情があつて、處を隔てて、水中に赤く咲きたる蓮の花と相比することが出来る。木芙蓉と蓮と、各、豔なる姿をして居るが、相妬むにも及ばず、蓮を一に芙蓉といつて、その名も偶然に同じである。江に臨んで蓮の花を採れば、渡頭の日暮、傷心し易く、木芙蓉を折り取つて、何處に薦めむとするか、そこらには、古い祠も見つからない。唯だ願はくは、數ば此に來て、その花を賞したいと思ふので、風を逐うて徒に



散つて仕舞ふことの無い様にしたものである。

【餘論】朱子は「この詩、落花と木芙蓉と、生きて處を同じうせず、しかも、色皆美に、名又同じきを言ふ、故に探江、拳木の二事を以て相對し、その生處を言ふ、而して、九歌は祭神の辭、故に古祠といふなり」といひ、朱竹垞は「工にして新なり」といつて居る。

題張十一旅舍三詠 張十一の旅舍に題す、三詠

榴花 榴花

五月榴花照眼明。五月、榴花、眼を照らして明かなり、枝間時見子初成。枝間時に見る、子、はじめて成るを。

可憐此地無車馬。憐むべし、この地、車馬なし、

顛倒青苔落絳英。青苔に顛倒して絳英を落とす。

【題義】蔣注に「公、陽山より、張十一と従つて、江陵に據たり、潭州に道して作る。その井を詠するに、賈誼宅中今始見と云ふを以て之を知る」とある。張十一は、前にも數は見えて居た。即ち張翥、この詩は、潭州に於ける張の客舎に就いて、三題を選んで吟詠を試みたので、第一首は、石榴を詠じたのである。

【字解】(一)子初成 實が初めて出来た。

(二)無車馬 見に来る人が無い。

(三)顛倒 ころがる。

(四)絳英 赤い花。

【詩意】今しも五月、石榴の花が咲き出で、紅豔豔として、わが眼を照らして明かであるし、枝の間には、早くも實が出来て居る。折角珍らしい花であるのに、この地は、僻境にして、車馬で遊覧見に来る人も無い處から、やがて、赤い花は地に落ちて、青苔の上に轉がつて、まことに傷はしき有様を爲すであらう。

【餘論】後半、その處を得ざれば、折角の美も、人の觀賞を得ず、やがて埋没して仕舞ふといふので、多少の諷意がある。朱竹垞は、これと後半とを合せて「兩詩、意調ともに新に、俱に鋒に偏す」といつて居る。

井 井

賈誼宅中今始見。賈誼の宅中、今はじめて見る、

葛洪山下昔曾窺。葛洪山下、むかし曾て窺ふ。

寒泉百尺空看影。寒泉百尺、空しく影を見る、

正是行人渴死時。正に是れ行人渴死の時。

【字解】(一)賈誼宅中 水經注に「長沙縣の西、陶侃の廟、傳ふ是れ賈誼の宅、中に一井あり、實に飯の穿つところ」とあり、湘州記に、「湘州南寺の東に賈誼の宅あり、宅の中に井あり、井旁に石あり、局あ

り、脚林一人を坐せしむべし、形制甚だ古、皆傳へて曰く、脚ち血の坐するところ」とあり、杜甫の詩に、長甕買得井飲酪とある。  
【三】葛洪山下 晋書葛洪傳に「字は稚川、羅浮山に止まつて丹を煉る」とり、羅浮山記に「葛稚川、羅浮に入つて丹を煉り、弟子、これに従ふもの五百餘人、觀を四所に置く、今、丹を煉る」とあり、晋書には「葛洪、字は稚川、丹井は所在之あり、公の指すと云るもの、疑ふらくは邾州に在らむ」といつて居る。丹井は、丹を煉る處で、もとより、水を汲む井戸ではないが、字面の上から此に猜ひ來つたのである。【三】湯死 晏熱の爲め、湯に墜へ兼ねて死ぬること。

【題義】この首は、旅舎の井を詠じたので、その井は、むかし賈誼が掘つたのだといふこと。すると、旅舎は、謂はゆる陶侃廟の處に在るのであらう。

【詩意】むかし賈誼の宅に在つたといふ此井は、今はじめて見たが、さきには、邾州の山邊に於て、葛洪丹井の址を見たことがあつた。この井は、寒泉深さ百尺、人が側へ行けば影がうつる位で、水も極めて清い。今しも、暑熱に際し、行人が頻りに渴死するといふのに、ここに來て、この水を汲んで渴を醫するものなきは、如何なる故か。折角の井も、場處が悪いから、役に立たないのであらう。  
【餘論】後半は、實際の事實であるが、又例の如く、多少の諷意がある様にも見られる。

蒲萄

蒲萄

新莖未徧半猶枯

新莖、未だ徧ぬからず、半は猶ほ枯る。

【字解】【一】未徧 十分に伸びない。【二】高架 高い棚。

高架支離倒復扶

高架支離、倒れて復た扶く。

若欲滿盤堆馬乳

若し滿盤馬乳を堆せむと欲せば、  
【とを】

莫辭添竹引龍鬚

辭する莫れ、竹を添へて龍鬚を引くこと

【三】支離 こはれかかつて居る。  
【四】馬乳 本草に「蒲萄の子に紫白二色あり、又馬乳に似たるものあり」とある、今の甲州蒲萄の類と見える。【五】龍鬚 蒲萄の莖。

【題義】この首は、旅舎庭前の蒲萄を詠じたのである。

【詩意】蒲萄の莖は、折角伸びかかつて居るが、まだ十分でないのに、其半は枯れた様である。高い棚は、壞れかかつて倒れむとするのを、復た支へて、やつと持たせてある。蒲萄を培養するのに、こんな事では、とても仕方が無いので、もし澤山に實をならせ、馬乳を盤に滿つる位も摘まうと思ふならば、面倒がらずに、竹を添へ、その莖を引いて、十分に伸ばして遣らねばならぬ。

【餘論】前首と同じく、後半諷意ありとも見られるので、如何に材質の美ありとも、適當な境涯に置かねば、決して十分の効果を実現することが出来ないといふことを述べたのであらう。

硤石西泉

硤石の西泉

居然鱗介不能容

居然、鱗介は容るる能はず、

石眼環環水一鍾

石眼環環、水一鍾。

【字解】【一】鱗介 魚鱗と貝類。  
【二】石眼 水の湧き出る石の孔。  
【三】一鍾 鐘は鉢。

聞說早時求得雨、聞くならく、早時求むれば雨を得と、

祇疑科斗是蛟龍、祇だ疑ふ科斗は是れ蛟龍。

【註】科斗、即ちぼうふら。

【題義】舊注に「硤、諸本皆山に从ふ、是に非ず。西、一に塞に作る。泉は今河南陝州西門外に在り、泉、石眼より流れ出づ、内に科斗あり、雨を觸れば即ち應ず、一名は蝦蟇泉」とある。

【詩意】何分にも狭い處で、魚介の類は、到底住むことが出来ない。水の湧き出る石眼は、くるくると丸く、そして、一杯程溜まつて居るに過ぎぬ。聞けば、早の時分、ここに來て雨を祈ると、きつと靈驗があるとのことで、して見ると、この中に棲んで居る科斗は、即ち蛟龍の變身では無からうかと思はれる。

【餘論】この詩は、唯だ事實を述べたに過ぎぬ。後半、例の寓意ある様に解釋されぬでも無いが、さうまでには言はずともであらう。

梁國惠康公主挽歌二首 梁國惠康公主の挽歌 二首

定諡芳聲遠、移封大國新、諡を定めて芳聲遠く、封を移して大國新なり。

異宮尊長女、台室屬良人、異宮、長女を尊び、台室、良人に屬す。

河漢重泉夜、梧桐半樹春、河漢重泉の夜、梧桐半樹の春。

龍輜非厭翟、還輶禁城塵、龍輜、厭翟に非ず、還た禁城の塵に輶る。

【字解】【一】梁宮、易に「異を長女と爲す」とある。【二】台室、三台、即ち宰相の家、公主の母、季友の父、相たりしが故に云ふ。【三】河漢重泉夜、河漢は銀河、莊子の逍遙遊に「吾、その言、猶ほ河漢のごとくして極なきに驚怖せり」とある。重泉は、黃泉、即ち地下、公主すでに薨じて黃泉に歸せし後は、夜夜これを思へども、相及ばず、きながら河漢の如く極なし」といふ意。【四】梧桐半樹春、舊注に「これは、公主死して、その夫、季友ひとり存す、故に半樹春といふ」とある。それで何故に梧桐を借ひ來つたかといふと、齊梁の古樂府に、吾子の普通で梧子を用ひたことなどがあるから、それに因んだのであらう。【五】龍輜、文選帝舟意婦賦に龍輜、其尾彫、分とあり、說文に「輜は輿車なり」とある、宮廷から出た輿車。【六】厭翟、周禮に「王后の五輿重翟は、面に飾り、朱纒、厭翟は面に飾り、續纒」とあつて、厭翟は、平時乗用の車、翟は帷尾を以て車を飾ること。詩の小序に據ると「王后、諸侯に下嫁す、車服、その夫に擬らず、王后より下ること一等」とあるから、公主は、降嫁の後と雖も、無論、王后より下る一等なる服翟を常用されたのである。

【題義】唐書に「梁國惠康公主は、憲宗の長女、特に之を愛し、下つて于季友に嫁す、元和中に薨す」とあつて、この詩は、その時に作つて哀悼の意を表したのである。但し、羊士諤集にも、同題の梁國惠康公主挽歌詞二首があつて、その自注に「時に詔して、百官をして、詩を進めしむ」とあるから、韓愈の此詩も、無論應制の作である。次に梁國の法訓に「挽歌とは、高帝、田横を召せしに、尸郷に至つて自殺す、從者、敢て哭せず、しかも哀に勝へず、故に此歌を爲つて以て哀音を寄す」とある。

【詩意】公主薨後、結構な諡を定められて、生前の美譽、逾よ遠く、又梁に移封せられて、新に大國を賜はつた。公主は、今上の長女として、巽宮に居まし、その良人たるものは、二台の名門であつた。さはれ、幽明、一たび隔つれば、黃泉萬里、河漢の極め難きが如く、夜は思念愈よ堪へられず、あとに残つた駙馬の君は、恰も梧桐半樹の春を剩して居るやうなものである。今日引き出す喪車は、平生乗用せる厭翟に非ず、それが禁城の中の塵に横つて、徐に練り行くさまは、覽者をして、まことに心を傷ましめる。

秦地吹簫女。湘波鼓瑟妃。

秦地簫を吹くの女、湘波瑟を鼓するの妃。

佩蘭初應夢。奔月竟淪輝。

蘭を佩びて、初めて夢に應じ、月に奔つて竟に輝を淪む。

夫族迎魂去。宮官會葬歸。

夫族、魂を迎へて去り、宮官、葬に會して歸る。

從今沁園草。無復更芳菲。

今より沁園の草、復た更に芳菲なし。

【字解】【一】秦地吹簫女、秦の穆公の女弄玉の事、鍾氏子の條に見ゆ。【二】湘波鼓瑟妃、娥皇女英、堯の二女、舜の妃、楚辭の遺聲に見え、遺遊騷句の條に引いてある。【三】佩蘭、左傳宣公三年に「鄆の文公、賤受あり、蕭姑といふ、夢に天使己に蘭を與へて曰く、これを以て、而の子と爲さむと。才でにして、文公、これに蘭を與へて之を御し、穆公を生み、これを名づけて蘭といふ」とある。【四】奔月、淮南子、姮娥の事を用ふ、月蝕の詩の條に見ゆ。【五】沁園、後漢書曹憲傳に「沁水公主の園田を奪ふ」とあり、その注に「沁園公主は明帝の女」とある。

【詩意】惠康公主は、その門地の貴きをいへば、秦地に簫を吹き、やがて其夫蕭史に従つて昇天せし弄玉に比すべく、又湘水の邊に死んで、今でも時たま瑟を鼓する聲がするといふ娥皇女英にも較ぶべきやうである。公主は、蘭を佩ぶるを夢に見て、初めて分統したと同じく、子供が有つたに拘はらず、先つて逝き、當年の姮娥を學んで、月中に奔つて、光輝を淪めて仕舞つた。薨後、夫の家族は、靈魂を引き取つて家に歸り、宮官は、盡く會葬し、その儀も、又格別莊重であつた。今より後、公主の所有に係る沁園の草も、再び芳菲を發せず、一に荒涼に任せられたことであらう。

【餘論】二首、ともに故事を用ひて切實なるは、さすがに其蘊蓄と手腕とを見るべきであるが、設題の性質上、格別のものではない。朱竹垞は「兩結、ともに脫灑致あり」といひ、何義門は、後首に注して「三四を觀れば、公主、子に乳するを以て死するに似たり」といひ、至極尤もであるから、今これに従ふことにした。なほ、参考の爲め、前に一寸述べて置いた羊士諤の問題の作を左に附記して置かう。

湯沐成陳跡。山林遂寂寥。鶴飛應織素。鳳起獨吹簫。玉殿中參罷。雲駟上漢遙。皇情非不極。空輟未央朝。

授册榮三天使。陳詩感聖恩。山河啓梁國。綺素及千門。泉向金扈咽。露來玉樹繁。都人聽  
哀挽。淚盡望寒原。

和崔舍人詠月二十韻

崔舍人の月を詠するに和す、二十韻

三秋端正月。今夜出東溟。  
對日猶分勢。騰天漸吐靈。  
未高蒸遠氣。半上霽孤形。  
赫奕當躑次。虛徐度杳冥。  
長河晴散霧。列宿曙分螢。  
浩蕩英華溢。瀟疏物象冷。  
池邊臨倒照。簷際送橫經。  
花樹參差見。阜禽斷續聆。  
隔光窺寂寞。砧影伴娉婷。

三秋端正の月、今夜東溟より出づ。  
日に對して、猶ほ勢を分ち、天に騰つて、漸く靈を吐く。  
未だ高からざるに、遠氣を蒸し、半ば上つて、孤形を露る。  
赫奕として、躑次に當り、虛徐として、杳冥を度る。  
長河晴れて霧を散じ、列宿曙けて螢を分つ。  
浩蕩として英華溢れ、瀟疏として物象冷し。  
池邊臨んで倒に照らし、簷際送つて横に經たり。  
花樹參差として見はれ、阜禽斷續して聆く。  
隔光寂寞たるを窺ひ、砧影娉婷に伴ふ。

幽坐看侵戶。閒吟愛滿庭。  
輝斜通壁練。彩碎射沙星。  
清潔雲間路。空涼水上亭。  
淨堪分顧兔。細得數飄萍。  
山翠相凝綠。林煙共羃青。  
過隅驚桂側。當午覺輪停。  
屬思攜霞錦。追歡罄縹餅。  
郡樓何處望。隴笛此時聽。  
右掖連台座。重門限禁扃。  
風臺觀滉漾。冰砌步青荧。  
獨有虞庠客。無由落莫。

幽坐、戸を侵すを見、閒吟、庭に滿つるを愛す。  
輝斜にして壁練を通じ、彩碎けて沙星を射る。  
清潔たり雲間の路、空涼たり水上の亭。  
淨は顧兔を分つに堪へたり、細は飄萍を數ふるを得たり。  
山翠、綠を相凝らし、林煙、共に青を羃む。  
隅を過ぎて、桂側つを驚き、午に當つて、輪停るを覺ゆ。  
思を屬して、霞錦を攜べ、歡を追うて、縹餅を罄す。  
郡樓何の處にか望まむ、隴笛この時聽く。  
右掖、台座に連り、重門、禁扃を限る。  
風臺、滉漾を觀、冰砌、青荧に歩す。  
獨り虞庠の客あり、落莫を拾ふに由なし。

【字解】(一)端正月、形の正しく圓きをいふ。(二)躑次、その運行する軌道。(三)杳冥、大空。(四)長河、銀河。(五)列宿、多くの星。(六)英華、光彩。(七)雲蒸、高低ならざる貌。(八)阜禽、文選謝莊の月賦に輪三阜高之夕圓とあつて、そ

の注に「詩に鶴鳴三子九事」とある。阜は澤地、聆は聞く、聞は仰。【一】 鶴影、鶴を打撃ふ影。【二】 壁、壁に掛けた薄絹。【三】 沙星、沙が光つて星の如く見えること。【四】 題、楚辭の天曲に厥利維何而顯現在版とある。【五】 題、鑑める。【六】 當年、丁度その前に當る。【七】 題、青白色を爲せる磁製の酒瓶。【八】 題、誰何處望、晉書に「庾亮、武昌に在り。諸佐吏、秋月に乘じて、夜、ともに南樓に登る。俄にして、亮至る、諸佐吏、これを避く。亮曰く、しばらく住まれ、老子、ここに於て、興復た遠からずと。遂に譚詠を共にす」とある。【九】 題、前曲中に關山月あり、故に云ふ。【一〇】 青炎、文選に眩燿青炎とあつて、青く輝くこと。【一一】 題、庾亮、晉の時代の學校。この時、韓愈は職方員外郎を以て四門博士に下遷されしが故に云ふ。【一二】 落葉、答、張敬の條に見え、帝王世紀に「堯、時に天子たり、箕、時に天子たり、箕、時に天子たり、帝の爲に歴を成す」とある。

【題義】 崔舍人は、名を羣といひ、舊唐書の本傳に「元和の初、召されて翰林學士となり、中書舍人を歴たり」とある。蔣注に「公、元和七年、職方員外郎を以て國子博士に下遷す。この詩は、その年八月作るところ、故に落葉に云ふ、獨有三虞庠客、無由拾落葉」と。意謂ふ、職、虞庠に在つて、堯階を去ること遠し」とある。この詩は、崔羣の詠月の詩を見たるに因つて、これに和して作つたのである。

【詩意】 三個月に互る秋の中で、最も端正なる月は、中秋に限られ、今夜、はるかに東海よりさし出るのである。まだ日暮に成らぬ前に、早く上り、太陽に對して、東西各、その勢を分かち、やがて、天頂に騰つて、次第に靈異を吐くのである。まだ餘り高くない間は、遠氣を蒸すが如く、ぼんやりして居るが、半ば天に上つた時、孤形は霽れて明かに見える。その内に、光赫奕として軌道に當り、動く

こと虚徐として、大空を度つて行く。時しも、銀河は晴れて、微茫、さながら霧を散したるが如く、羣星は、やつと光り出して、螢火を分つた様である。乾坤の間、浩蕩として、星月の光彩が溢れ、風露の氣は、瀟疏にして、あらゆる物象は、涼しげに見える。池邊に臨むとき、倒に照らし、軒端から送り出せば、横に通る過ぎる。園中の花木は、參差として見え、天上の鳴鶴は、斷續して聞こえる。窓の隙間よりさし込む光は、寂寥たる處を窺ふが如く、砧を打ち揮ふ影は、娉婷たる少女を伴うて居る。この時、予は、幽坐して、月の戸を侵すを眺め、閑吟しつつ、その光の庭に満つるを心地よげに見て居た。やがて、月は斜に壁に懸けてある薄絹を透し、その光碎けては、きらきらと輝くところの庭上の沙を射つて居る。雲間の仙路は、清潔にして塵なく、水上の閒亭は、がらりとして涼しげに見える。その光の淨きことは、月中の顯現も、はつきりと見えさうであるし、細かいことは、水に浮ぶ萍をも一數へられさうである。山の木木は緑を凝らし、林の煙は青を罩めて、夜目ながら色さへ見える。月が庭の隅を過ぐるとき、月中に在りと聞くと同じ様な桂の木が立つて居るので、不思議の感に堪へず、兎角する内、眞ッ正面に来ると、車輪が停まつたやうに覺える。この間、頻りに想を練つて、霞とまがふ錦を展べた様な妍麗な佳句を得たいとあせり、興に乗じては、いつしか、酒壺を空にして仕舞つた。かの庾亮が下役の者と共に、譚詠したといふ郡樓は、何處とも分からねが、隔上

される台座に連接し、九重の城闕は、皇居の門扇を爲して居る。風涼しき臺榭の上からは、月色の混濁たるを觀るべく、氷の如く淨潔なる階砌に於ては、青燐たる光の中に歩む天上の高寒は、もとより人間と異にして、君の詩の殊に秀絶清絶なるも、もとより怪むに足らない。これに反して、予は、國子博士として、學校には出勤して居るが、玉階の前を過ぎて、冀爽を拾ふことの叶はぬ身分で、われながら、不遇を啣つ外はない。

【餘論】日没前から始めて、月が次第に上つて追迫明るくなる様を寫し、庭上から屋内、それから遠望に及び、唱酬の事を以て收束したので、秩序整然として紊れず、随分骨を折つたに相違ないが、要するに、技巧を勞するに過ぎて、一氣流注の趣に乏しく、朱竹垞が「著意雕刻、稍や痕跡あり、且つ語に拙滯多く、佳と爲さず」と云つたのも、成程と頷かれる。

詠雪贈張籍

雪を詠じて張籍に贈る

只見縱橫落寧知遠近來  
飄飄還自弄歷亂竟誰催  
座暖銷那怪池清失可猜

只だ見る縱横に落つるを、寧ろ知らむや遠近より來るを。  
飄飄として還た自ら弄し、歷亂竟に誰か催す。「猜むべし。  
座暖にして銷ゆること那ぞ怪まむ、池清くして失ふこと」

坳中初蓋底埤處遂成堆  
慢有先居後輕多去却廻  
度前鋪瓦隴發本積牆隈  
穿細時雙透乘危忽半摧  
舞深逢坎井集卑值層臺  
砧練終宜擣階紈未暇裁  
城寒裝睥睨樹凍裹莓苔  
片片勻如翦紛紛碎若接  
定非鸞鶴驚眞是屑瓊瑰  
緯繡觀朝萼冥茫矚晚埃  
當臆恆凜凜出戶卽皚皚  
壓野榮芝菌傾都委貨財  
娥嬉華蕩滌胥怒浪崔嵬

坳中初めて底を蓋ひ、埤處遂に堆を成す。[こと多し。  
漫にして先の後に居るあり、輕くして去つて却つて廻る]  
前を度つて瓦隴に鋪き、本より發して牆隈に積む。  
細を穿つて、時に雙び透り、危きに乗じて、忽ち半ば摧く。  
舞ふこと深く坎井に逢ひ、集まること卑く層臺に値ふ。  
砧練、終に擣つに宜しく、階紈、未だ裁するに暇あらず。  
城は寒くして睥睨を裝ひ、樹凍つて莓苔を裹む。  
片片、勻しうして翦るが如く、紛紛、碎いて接つが若し。  
定めて鸞鶴を驚するに非ず、眞に是れ瓊瑰を屑にするなり。  
緯繡として朝萼を觀、冥茫として晚埃を矚る。  
臆に當つて恆に凜凜、戸を出でて卽ち皚皚。  
野を壓して芝菌を榮えしめ、都を傾けて貨財を委つ。  
娥は嬉れて華蕩滌、胥は怒つて浪崔嵬。

磧迴疑浮地、雲平想輾雷、  
 隨車翻縞帶、逐馬散銀盃、  
 萬屋漫汗合、千株照曜開、  
 松篁遭挫抑、糞壤獲饒培、  
 隔絕門庭遠、擠排階級纒、  
 豈堪神嶽鎮、強欲效鹽梅、  
 隱匿瑕疵盡、包羅委瑣該、  
 誤雞宵呢嘔、驚雀暗徘徊、  
 浩浩過三暮、悠悠匝九垓、  
 鯨鯢陸死骨、玉石火炎灰、  
 厚慮填溟壑、高愁撥斗魁、  
 日輪埋欲側、坤軸壓將頽、  
 岸類長蛇攪、陵猶巨象懸、

磧迴にして地に浮ぶかと疑ひ、雲平かにして雷を輾る」  
 車に随つて縞帯を翻し、馬を逐うて銀盃を散す。」を想ふ。  
 萬屋漫汗として合し、千株照曜して開く。  
 松篁、挫抑に遭ひ、糞壤、饒培を獲たり。  
 門庭を隔絶すること遠、階級を擠排すること纒なり。  
 豈に嶽鎮を神くるに堪へむや、強ひて鹽梅に效はむと欲す。  
 瑕疵を隠匿して盡し、委瑣を包羅して該ぬ。  
 誤雞、宵に呢嘔、驚雀、暗に徘徊。  
 浩浩として三暮を過ぎ、悠悠として九垓を匝る。  
 鯨鯢陸死の骨、玉石火炎の灰。  
 厚きは溝壑に填てることを慮り、高きは斗魁を撥へ」  
 日輪埋れて側たむと欲し、坤軸壓せられて將に頽れむとす。  
 岸は長蛇の攪くに類し、陵は猶ほ巨象の懸ぶかごとし。

水官夸傑黠、木氣怙胚胎、  
 著地無由卷、連天不易推、  
 龍魚冷螫苦、虎豹餓號哀、  
 巧借奢豪便、專繩困約災、  
 威貪陵布被、光肯離金疊、  
 賞玩捐他事、歌謠放我才、  
 狂教詩碑硯、興與酒陪鯁、  
 惟子能諳耳、諸人得語哉、  
 助留風作黨、勸坐火爲媒、  
 雕刻文刀利、搜求智網恢、  
 莫煩相屬和、傳示及提孩、

水官傑黠に誇り、木氣胚胎を怙づ。  
 地に著いて卷くに由なく、天に連つて推し易からず。  
 龍魚、冷にして螫苦し、虎豹、餓えて號哀す。  
 巧に奢豪の便を借り、専ら困約の災を繩す。  
 威、貪つて布被を陵ぎ、光、肯て金疊を離れむや。  
 賞玩、他事を捐て、歌謠、我が才を放にす。  
 狂は詩をして碑硯たらしめ、興は酒と陪鯁たり。  
 唯だ子能く諳んせむのみ、諸人には語るを得むや。  
 留まるを助けて、風、黨を作し、坐を勸めて、火、媒を爲す。  
 雕刻、文刀利に、搜求、智網恢なり。  
 煩はす莫れ相屬和し、傳示して提孩に及ぼすことを。

【字解】(一) 塼中、塼は塼み。莊子の逍遙遊に「杯水爲塼堂の上に覆せば」とある。(二) 柱處、詩經に「維嶠于子柱」とあつて、柱は小高き處、劉賈女の言に「歐陽永叔、江都幾」と此詩を論じ、隨車縞帶、逐馬散銀盃を以て工ならずと爲し、しかも、塼中初臺、





當つては、井戸にも落ちこみ、積むこと早ければ、やがて層臺に届かうとする。雪の純白なるは、白綾を砧で十分に擣つたやうであるし、階上に敷く薄絹の未だ裁ち切らざるが如くである。城壁は、突元として、睥睨の覗穴は、はつきりと見え、樹身は凍つて、莓苔に裏まれたのが、明かに知られる。雪の一片が、略ぼ揃つて居るのは、さながら、翦つたやうであるし、紛紛として碎けるのは、揉んだものとも見える。これは、定めて、鶴だの鶯だのいふ白い鳥を燐でた譯ではなく、全く玉を粉末にしたものと思はれるし、もつれ合つて居る様は、朝の花を見るが如く、暗くほんやりして居るのは、日暮の塵埃を眺める様な氣がする。窓に當つては、凜凜として寒さ堪へられず、戸を出づれば、皚皚として一白である。積つて野を壓すれば、その後、藪の類が夥しく生えるといふが、翻つて、都の中では、大に財貨を損失することであらう。月中の姮娥が喜び戯れて、蕩漾たる光を投げた様であるし、江上の雲霄が怒つて、逆巻く浪を打ち上げたかと疑はれる。沙磧遙かなる處では、大地を浮べ上げたやうであるし、雲が平に天空を罩めて、雷が響りはせぬかと思ふ位。車が通ると、轍の跡は白い帯を翻したやうになるし、馬が歩くと、蹄の痕は、銀盃を散じたやうである。萬戸の家屋は、汗漫として、際涯なく、重り合ひ、千株の花木は、照耀して、光り輝いて見える。但し、松や竹などは、むごくも挫折せられ、糞壤は、却つて保護せられて、植物を培ふことが出来る。だんだん積ると、門庭を隔絶して、遽に閉口するし、陞級を押し退けて、わづかに通路が明いて居る位。しかし、雪だけならば、いくら積つて

も、到底五嶽などいふ一方の鎮となつて山を助け補ふことは出来ないし、色が純白だからといって、何の味もないものであるから、到底、鹽梅に效はふと思つたところで駄目である。ただ瑕疵あるものを隠匿して見えぬやうにし、つまらぬ物を包羅して集めるのには、頗る有効である。まごついて時を間違つた雞は、宵の中に鳴き立て、驚いて早く起きた雀は、暗い内から徘徊して居る。浩浩として三暮を過ぐれば、白帝の徳、全く成つて、雪は乾坤に滿ち、悠悠として、九域を匝れば、來年の豊熟も思ひやられる。雪の地に鋪いた様を見ると、鯨鯢が陸上に死んで、その骨が碎けて山を成すが如く、崑岡の火に、玉石ともに焚けて、唯だ灰を残したかと思はれる。その積ること厚ければ、海をも埋むるかと思はれ、高ければ、北斗にまで到達しさうである。やがて、日輪も埋もれて仄つべく、地軸も壓し潰されて仕舞ふであらう。河岸に在つては、長蛇が攪き亂したやうに痕を留め、阿陵に在りては、巨象の戦ふが如くである。どうせ、寒いものであるから、水神は、おのが傑詣に誇つて、少しも恐れる氣色もなく、木の元氣は、ひどく影響を受けて、折角芽ぐみかかつたのが、いちぢて仕舞ふ。地に密著しては、巻くことも出来ず、天に連つては、推し轉ばすことが六つかしい。水底の魚龍は、冷にして、蟄居するに苦み、山中の虎豹は、餓えて、叫ぶ聲が、さも悲しげである。出来ることならば、奢豪を事とする手合から便宜を得て、困約の禍に逢へるものどもを正して救つて遣りたい。勢威あるものは貪つて、夜具ふとんにも勝つた消寒の工夫があつて、光つて居るのは、黄金の杯に限つて居

る。われ等は、これと異にして、ただ雪の景色に見とれ、他事を棄てて顧みず、歌を唱へて、大に我が才を放たうとして居る。そこで、狂悻は、詩をして確証たらしめ、逸興は、酒の爲に愈よ引き立つて居る。これまで述べたことは、貴公、もとより御承知のことであるが、諸人には語り聞かすことも出来ない。そこで、風が仲間になつて、もろともに貴公を引き留め、ゆつくり坐り給へといつて勸める時には、火が媒を爲すのである。この詩を作るに際し、彫刻は、文刀の鋭利なるに因つて、どうやら出来るし、いろいろ典故を捜し求めるには、智慧の網が恢恢から、みんな一緒に引ッかかつて仕舞ふ。さて詩は愈よ出来たが、格別のものでもないから、わざわざ和作を煩はすにも及ばず、唯だ小兒輩に傳へ示したいと思ふばかりである。

【餘論】松篁以下は、なる程、諷意があると見れば、さうも取れるので、つまり、宰相輩が君子を邪魔扱にし、同類の小人輩を援引するといふことに成り、日輪埋欲側等は、君の聰明を蔽ふことに成る。但し、かかる詮議立ては、格別必要でなく、唯だ雪を形容刻劃したものとして、文字上の技工を賞玩すれば善い。大抵、前半に於ては、雪の飄るをいひ、後半に於ては、雪の積ることを述べた。朱竹垞は、坳中初蓋、底より以下に就いて「只だ鑿空して形容し、更に套語を用ひず、眞に是れ妙手」といひ、松篁遺、挫抑以下に就いては、「以下益す縦横、自ら肆にす、前に比すれば、更に渾脱」といつて居る。

酬王二十舍人雪中見寄 王二十舍人の雪中寄せらるるに酬ゆ

三日柴門擁不開 三日柴門擁して開かず、

階平庭滿白皚皚 階に平かに、庭に滿ちて白皚皚たり。

今朝蹋作瓊瑤跡 今朝踏んで瓊瑤の跡を作す、

爲有詩從鳳沼來 詩の鳳沼より來るあるが爲なり。

る、或は之を買するものあり、曰く、我が鳳凰池を奪ふ、諸君、我を買するか」といつて居る。

【題義】王二十舍人は王涯、舊唐書の本傳に「涯、字は廣津、太原の人、進士の第に擢んでられ、宏辭科に登る、貞元二年、召して翰林學士に充てられ、右拾遺左補闕起居舍人に拜せらる」とある。起居舍人は、即ち古しへの中書監、もしくは、令、舍人と同じで、天子の詔敕起草することを掌つて居る。

【詩意】大雪が三日も降り續いたから、柴門を閉ちて開かず、やがて、階と平になる位庭に滿ちて、見わたす限り、白皚皚である。今朝、わが門巷を音づれて、瓊瑤を踏み開いて足跡を残したのは、鳳凰池上の人たる貴下の詩を持参した御使であつた。

【餘論】唯だ眼前の即興を敍したので、その性質上、もとより格別の物ではない。

【字解】(一)皚皚、前首にも見

えて居た。この句法は杜甫の屋梁

夜白皚皚といふのに本づいたのであ

らう。(二)鳳沼、鳳凰池と同じ、

中書の請めて居る役所を指す。晉書

荀勗傳に「鳳、中書監より徵書令とな

送侯喜

侯喜を送る

已作龍鍾後時者。すでに龍鍾時に後るものと作り、

懶於街裏蹋塵埃。街裏に塵埃を蹋むより懶し。

如今便別長官去。今の如き、便ち長官に別れて去る、

直到新年衙日來。直に新年の衙日に到つて來れ。

【字解】(一)龍鍾。衰老の貌。  
(二)後時者。時勢に後れて取り残されたもの。(三)長官。この時、侯喜は國子主簿で、韓愈は國子祭酒たりしが故に、自ら長官と稱したのである。(四)衙日。役所の始まる日。

【題義】前に喜侯喜至寄張籍張徹の五古があつて、侯喜の事は、そこで述べて置く通り、もと韓愈の門弟である。それから、後卷に雨中寄張博士籍侯主簿喜といふ詩があつて、それは、長慶元年の作に係り、その時、韓愈は、祭酒、即ち侯喜の長官に當るので、この詩と全く符合するから、矢張、同じ頃の作であらうといふこと。序に云ふが、國子祭酒は大學總長、國子博士は大學教授、國子主簿は大學書記官といった様なもので、いづれも閒職である。この詩は、侯喜が賜暇を願つて、歲末どこかへ出かけるに就いて、これに餞したのである。

【詩意】君は、衰老の餘、時勢に後れて仕舞ひ、全く落伍者となつて仕舞つたから、都大路の車馬絡繹たる間を、塵埃を蹋みつつ、ひとりとはと歩むよりも、一しは懶く、まことに詰まらぬ想がするであらう。それも尤も千萬、今日賜暇を乞うて、長官たる子に別れて、何處かへ往くといふか、

心氣轉換の策としては大に宜しい。しかし、正月、一般に役所の始まる頃までには、是非歸つて貰はねばならぬから、その積りで居て欲しい。

【餘論】多少慰安の意味もあるが、後半は、あまりに官僚的である。朱竹垞は「質朴喜ぶべきも、微に戲に近し」といつて居る。

學諸進士作精衛銜石填海

諸進士の作、精衛石を銜みて海を填むるに學ぶ

鳥有償冤者。終年抱寸誠。鳥に冤を償ふものあり、終年寸誠を抱く。

口銜山石細。心望海波平。口に山石の細なるを銜んで、心に海波の平かなるを望む。

渺渺功難見。區區命已輕。渺渺として功見え難く、區區として命すでに輕し。

人皆譏造次。我獨賞專精。人皆造次なるを譏れども、我は獨り專精を賞す。

豈計休無日。惟應盡此生。豈に休むこと日なきを計らむや、惟だ應に此生を盡すべし。

何慙刺客傳。不著報讎名。何ぞ慙ちむや刺客傳、報讎の名を著さざるを。

【字解】(一) 恨、冤、恨を償ふ、あだをかへす。(二) 寸誠、寸心の誠意。(三) 遺次、常に間断なきこと。(四) 專精、專心に精進する。(五) 刺客傳、史記に載す、曹沫、專諸、豫讓、荊軻の事を記してある。

【題義】任防の述異記に「むかし、炎帝の女、東海中に溺死し、化して精衛となり、その名を自ら呼ぶ毎に、西山の木石を銜んで東海を填む、一名冤禽、俗に帝女雀と呼ぶ」とある。題の意は、ある年の考試に、精衛銜石填海といふ題が出て、多くの進士どもが、之を作つたから、自分も、その真似をして、作つて見たといふのである。

【詩意】鳥に精衛といふ者があつて、生前の冤恨を償はむが爲に、終年、寸心の誠意を抱き、口に西山の木石の細かいのを銜へて、それで、東海を填めて、平に陸地と爲さうとするのである。何分にも、海は渺渺として潤きが故に、その功程は、目に見えず、區區の命は、もとより軽くして、程なく又死んで仕舞ふ。世人は、この鳥が少しも間断なく、せつせと遣つて居るのは、まことに御苦勞だといつて嘲笑して居るけれども、われは、この鳥が専心精進して、毫も屈撓せざるを愛する。いつ休息することもないが、そんな事は、毛頭考へもせず、唯だ此事を以て一生を送り盡さうとして居るのは、まことに感心な事である。たとひ、司馬遷の刺客傳に、仇を報じたものとして其名を書かれずとも、少しも慙づるに及ばず、その心意氣は、全く古しへの刺客と同じである。

【餘論】精衛の寸誠を買つて遣つたので、その功の成否は、もとより問ふところではなく、まさしく、世人に對する頂門の一針である。朱竹垞は「拘拘として事を貼せず、只だ空語を以て意を挑す、最も味あり」と云つて居る。

奉酬振武胡十二丈大夫

振武胡十二丈大夫に酬い奉る

傾朝共羨龍光類、朝を傾けて共に羨む龍光の類なるを。

半歲遷騰作虎臣、半歲遷騰して、虎臣となる。

戎旆暫停辭社樹、戎旆暫く停まつて社樹を辭し、

里門先下敬鄉人、里門先づ下つて郷人を敬す。

橫飛玉蓋家山曉、横に玉蓋を飛ばす家山の曉、

遠蹀金珂塞草春、遠く金珂を蹀む塞草の春。

自笑平生誇膽氣、自ら笑ふ、平生、膽氣を誇り、

不離文字鬢毛新、文字を離れずして鬢毛新なるを。

し弩矢の語を用ふれば、胡公、豫祥を敬するの語に非ず」といつて居る。(三) 社樹、社は土地の神、ここでは、胡証の郷里の社廟の樹。(四) 里門先下、鹿野石君傳に「石室、徒つて故里に居る、子慶、醉うて歸り、外門に入つて車を下らず。嘗、これを誦め

律詩 奉酬振武胡十二丈大夫

【字解】(一) 傾朝、朝廷を傾けて、朝臣を羨らす。(二) 龍光、皇龍光榮。(三) 類、類類とつづけて至る。(四) 遷騰、榮耀。(五) 虎臣、武臣。(六) 戎旆暫停、諸本に弩矢前驅胡縣令とある。趙驍の因話錄に「胡証、節を建てて振武に赴かむとし、河中を過ぐ、時に、趙宗、備帥たり。証、剣を持して、百姓と稱し、入つて謁し、詩を獻じて曰く、

詩書入三京國、旌節過三鄉國とある。そこで、舊之題は脱をなし「これ若

て曰く、内史は賈人、閭里に入らば、里中の長老皆走り匿る、而して、内史、車中に坐すること自如、もとより當れりと。後、慶及び諸子、里門に入るや、走つて家に遁る」とある。「(一)金珂、馬の飾。「(二)蓋草、蓋の草。

【題義】原注に「胡証なり」とあつて、舊唐書に「胡証、字は啓中、河東の人。元和九年、黨項、邊に寇するや、証が安邊の才略あるを以て、陳議大夫より選ばれて、振武軍節度使を授けらる」とある。十二は排行、丈は長老の尊稱、大夫は五品以上の人を稱す。この詩は、胡証が振武に赴任するに就いて、留別の詩を似したから、それに酬いたのである。

【詩意】君は、陳議大夫に就任し、半歲の中に榮轉して、堂堂たる武臣となり、振武軍に赴任されるといふので、在廷の人を舉げて、その恩寵、光榮の引續いて至ることを羨んで居る。君は、途すがら、故郷に立ち寄り、しばらく、戎行の旌旗を停めて、社廟に告別し、又里門に車を下り、すこしも、儀式ばらずして、郷人に敬意を表せられた。やがて、出立の朝には、横に玉蓋を飛ばして、故老輩と獻酬し、愈よ金珂を飾れる馬を驅つて、春草萌え出づる邊塞に向つて行かれる。君は、平生、膽氣の豪なるを誇つて居られるのに、もと文臣で、文字を離れざる爲に、鬢の白髮が新に生じたのは、まことに詰まらぬことであつたといつて笑ひつつ、これから邊塞に往つて、一かどの功名を立てる積りで居られる。

【餘論】朱竹垞は全篇を評して「壯偉にして勁氣あり」といひ、前聯に就いては「暫停の二字妙、謙

退の處に於て尊崇を見る」といひ、後聯を賞して「工麗」といひ、結二句に就いては「文人、武なきを甘んぜず、毎に此の如し」といひ、何義門は「通首一氣流轉、最も法とすべし」といつて居る。

奉和庫部盧四兄曹長元日朝廻

庫部盧四兄曹長の元日朝より廻るに和し奉る

天仗宵嚴建羽旄、天仗、宵嚴にして、羽旄を建つ。

春雲送色曉雞號、春雲、色を送つて、曉雞號ぶ。

金爐香動螭頭暗、金爐香動いて螭頭暗く、

玉佩聲來雉尾高、玉佩聲來つて雉尾高し。

戎服上趨承北極、戎服上趨して北極を承け、

儒冠列侍映東曹、儒冠列侍して東曹に映す。

太平時節難身遇、太平の時節、身遇ひ難し、

郎署何須歎二毛、郎署何ぞ二毛を歎ずるを須ひむ。

律詩 奉和庫部盧四兄曹長元日朝廻

【字解】(一)天仗、唐書儀衛志に「凡そ朝會の仗、三衛上に番し、分つて五仗と爲す、一に曰く供奉仗、二に曰く親仗、三に曰く勳仗、四に曰く副仗、五に曰く散手仗。毎月、四十六人を以て内殿閣外に立つ、號して内仗といふ。左右金吾將軍を以て上に當らしめ、中郎將一人、これを押す。天子、將に出でむとするや、前二日、大樂令、宮懸の樂を庭に設く、畫欄の上の五刻に笳鼓す、發するより前七刻に一鼓を擊つを一鼓と

なし、前五刻に二鼓を撃つを再鼓となし、前一刻に三鼓するを三鼓となし、各、その隊を誓し、次を以て陣に入る。朝罷む。皇帝少して東序門に入り、然る後、仗を放つ」とある。元日の朝會は、大儀式であるから、前の晩から衛仗を列し、そして、一殿より三殿までの鼓を打つて用意を爲さしめる。【二】羽旄、詩經に建三旒旄、美とある、先朝に毛の飾ある旒。【三】金鑪、唐書儀衛志に「朝日、殿上には鑪風扇所を設け、爐を香案に薫す」とある。【四】鑾頭、唐會要に「漢の柏梁殿、災あり。鑾頭を以て、海中に魚あり、此尾、鰲に似たり、鰲を激すれば雨を降らす」と。遂に像を屋に作り、以て火災を厭す、亦た鑾の字を作す」とあつて、それは、鑾頭は屋上に在る像であるが、このは、さうではない。唐書百官志に「起居郎舍人、左右に分侍し、香案を夾んで立ち、第二鑾首に直り、墨に和し、筆を濡す、即ち場處なり、時に鑾頭と號す」とあり、雍錄に「鑾頭は、蓋し玉指扶闈の上、壓頭の横石に刺して鑾頭の状態を爲すなり。横石突元、蓋頭ならざるを以て、故に鑾を刺して之を文る」とあり、漢書には最も簡單に「殿階欄檻、鑾を刺して飾と爲す、故に丹雘上の階を鑾頭といふ」とある。鑾、龍の屬にして角なきもの。【五】玉佩、腰につける玉の飾り。【六】雉尾、即ち雉尾扇、雉の尾で造つた大きな羽扇、天子の儀から兼し扇すのである。古今注に據ると、これは股の高宗に始まつたといふこと。唐書儀衛志に「唐の制、人君の舉動、必ず扇を以てす、故に大製扇の儀、物には曲直華蓋・六寶香・殿・大徽・雉尾障扇・雉尾扇・方雉尾扇・花蓋小雉尾扇・朱畫扇、俾倪の屬あり」といひ、又唐會要に「開元中、蕭嵩奏すらく、毎月朔望、皇帝朝を宣政殿に受く、先づ侍衛及び文武四品以下を庭に列せしめ、然る後、帝、西序門より歩し、出でて御座に昇り、朝畢るや、又少して東序門に入る。然れども、宸儀は、禮儀を主とす、至享の升降俯仰は、宜しく衆人をして之を觀ることを得せしむべからず、因つて請ふ、羽扇を殿の兩廂上に備へ、出入毎に之を以て遮障せしむべし」とあつて、それから恒例となつたのである。【七】戎服、武臣をいふ。【八】承北極、北列するが故に云ふ。【九】東曹、文官は東列し、翰林これに次ぐが故に映といふので、ここには、盧曹長も列するのである。【一〇】郎署、郎中の居る役所、漢武故事に「上、郎署の舍に至る、一老郎、扇扇皓白なるを見る、問ふ、何時、之と爲る。對へて曰く、臣、姓は郎、名は郎、文帝の時、郎となる。帝、文を好んで、臣は武を好む。景帝、美を好んで、臣の佩飾。陛下、少を好んで、臣、すてに老いたり。これを以て三黨不遇なり」と。帝その言を聞き、擯んで會稽都尉となす」とある。

【二】二毛、左傳僖公二十二年に「二毛を掩にせず」とあつて、杜預注に「頭白くして二毛あり」といひ、文選歌賦賦の序に「余、春秋三十有二、はじめて二毛を見る、太尉掾を以て虎賁中郎將を兼ね、散騎の省に寓直す」とある。

【題義】盧四は、前に在つた盧汀、庫部は庫部員外郎の略、唐書百官志に據れば「庫部郎中員外郎各一人、戎器衛備仗を掌る」とある。それから國史補に「兩省、相呼んで閣老となし、尙書丞郎、相呼んで曹長となし、郎中員外御史遺補、相呼んで院長と爲す。上は下を兼ぬべし、下は上を兼ぬべからず、唯だ御史は相呼んで總公となす」とある。元和九年、韓愈は比部郎中であり、盧四は員外郎であるから、院長と呼ぶのが至當であるのに、一つ尊んで曹長といつて居る。そこで、蔣注に「退之、盧庫部を呼んで曹長となし、張功曹を院長となす、すなはち、上下亦た通稱するなり」とある。この詩は、庫部員外郎盧汀が元日朝參して歸り、その詩を見せたから、それに和して作つたのである。【詩意】前夜から、天子の衛仗を用意し、鼓聲厳しく鳴り、羽旄を建て、元日の朝會は、まことに素張らしく仰々しい。やがて、新春の雲色づく頃、曉雞一たび叫べば、その儀式が始まるのである。殿上の金爐には、香の煙が漸く立ち上るけれども、殿欄の鸞頭は、猶ほ暗くして、天色未だ全くは明けず、その内に、玉佩の響、鑾鑼として、百官各、その座に就き、やがて、雉尾扇が高く擧げられて、天子も出御になる。殿上に於て、武官は戎服を著け、上り趨りて北に列し、文官は、儒冠を戴き、列を爲して東側に侍坐する。そこで、拜禮すれば、式が済む。抑も太平の時節には、なかなか遇はれぬ

ものであるのに、今幸に明時に際したのには、まことに有り難いことで、たとひ、郎署の下僚に居て、頭の毛に白髪が交る様に成つたとても、嘆き悲むには及ばぬことである。

【餘論】蔣之翘は「詩、もと雍容雅麗、その杜韓と並び稱すべきものは、庶幾はくは此作」といひ、朱竹垞は「蒼古宏壯、子美摩詰に彷彿たり、微に渾化を缺くのみ」と云ひ、沈德潛は「賈岑唱和作中に入るも、以て伯仲すべし」と云つて居る。

寒食直歸遇雨

寒食、直ちに歸りて雨に遇ふ

寒食時看度、春遊事已違。

寒食時に看る、一度る、春遊、事すでに違ふ。

風光連日直、陰雨半朝歸。

風光連日直し、陰雨半朝に歸る。

不見紅毬上、那論綵索飛。

紅毬の上るを見ず、那ぞ綵索の飛ぶを論せむ。

惟將新賜火、向曙著朝衣。

惟だ新賜の火を將て、曙に向つて朝衣を著く。

【字解】(一)寒食、前に寒食日出遊の條に詳説してある。(二)直、猶直する。(三)半朝、午前の中、八九時頃。(四)紅毬、劉向別錄に「關雉は黃帝の造るところ、兵勢に本づくなく、或は云ふ戰國の時に起る」とあつて、蔣之翘は「鞠は毬と同じ、紅毬は紅布を以て之を爲る」といつて居る。すると、紅毬は、蹴鞠を云つたものと見えるが、朱竹垞は「紅毬は日を指す」といつて、その方は前切脚當であるから、これに従ふことにする。(五)綵索、古今燕衛圖に「北方の山戎、寒食の日、蹴鞠を用ひて戲と爲し、以て

輕毬を習はすもの、或は曰く、齊の桓公、北、山戎を伐ちしより、この戲、はじめて中國に傳ふ」とある。綵索は、即ち蹴鞠。

【題義】この詩は、寒食の日、當直を濟ませて歸宅せむとし、折あしく雨に遇つたから作つたので、

元和十年、韓愈が考功郎中知制誥たりし時の事である。

【詩意】今日は、寒食だといふが、なる程、看る看る、それらしい景色に出遇つた。しかし、天氣が面白くないので、折角遊びに出かけやうと思つて居たことも、あてが外れて仕舞つた。この晩春の風光に際して、連日當直し、そして、今日曇つた揚句、雨の降るとき、朝の間に歸宅する。太陽が上らぬ位だから、綵索を掛けて蹴鞠の遊を試みることも出来ず、まことに詰まらない。唯だ新に賜はつた榆柳の火を持つて歸り、明朝は、その火の光で、朝衣を著けることであらう。

【餘論】前聯は第一句より、後聯は第二句より出で、結二句は、更に一步を拓開して居るので、五律の正格を以て目すべきものである。唯だ取材が庸近なる爲め、さしたる見榮なきは、聊か遺憾である。

送李六協律歸荆南

李六協律の荆南に歸るを送る

早日驕遊所、春風送客歸。

早日驕遊の所、春風客を送つて歸らしむ。

柳花還漠漠、江燕正飛飛。

柳花還た漠漠、江燕正に飛飛。

律詩 寒食直歸遇雨 送李六協律歸荆南



歌舞知誰在。賓僚逐使非。歌舞、知る誰かある、賓僚、使を逐うて非なり。

宋亭池水綠、莫忘蹋芳菲。宋亭池水綠に、芳菲を踏むを忘るる莫れ。

【字解】(一) 早日、前年に同じ。(二) 舞、舞客となつて遊ぶ。(三) 踏、李白の詩に「風吹三柳花、滿店香」とある。(四) 江、燕正飛、杜市の詩に「清秋燕子故飛飛」とある。(五) 逐、使は節度使であらう。(六) 宋亭、宋玉の故址の亭子、杜市の詩に「曾聞宋玉宅、每欲到三浦州」とあり、韓愈の寒食日出遊にも「宋玉庭邊不見人」とある。

【題義】李六協律は即ち協律郎李翺。唐書地理志に「江陵府江陵郡、本と荊州南郡、山南道に屬す」とあつて、荆南は即ち江陵である。この詩は、李翺が江陵の屬官たる時、何か公用の爲に上京し、これから歸任するに就いて、その行を餞したので、江陵は、韓愈が陽山令より其地の法曹參軍に轉任して、しばらく居つたことがあるから、専ら前遊を追想して、趣向を設けたのである。

【詩意】江陵は、我が前年轉官として避寓した處で、今次君は春風に送られて、その地に歸任することである。時しも、彌生の末、柳花は漠漠として散り亂れ、江上の燕子は、飛飛として、翻る折から、旅も面白く、やがて恙なく歸着するであらう。わが其地に在りしとき、歌舞を爲せしものどもは、今誰が残つて居るか。それから、幕中の賓僚なども、節度使の更迭と共に、みんな變つて仕舞つたことと思はれる。只だ宋玉の宅址のみは、依然として存し、今しも池水正に綠なる頃、君が歸つたならば、その地に芳菲を踏んで、必ず遊賞を忘れてはならぬ。

【餘論】この詩は、前聯と殊にして、前聯は第二句を受け、後聯は第一句を受け、そして、結末二句に送別の正意を述べたので、矢張、五律の正格の一である。要するに、首二句を以て、兩聯を引き出すのは、最も普通で、且つ緊健なる章法である處から、古人の五律は、大抵さう成つて居る。朱竹垞は、この詩の前半を賞し、且つ後聯の相如かざるに及び「前四句は、興趣飄然、ともに羈遊に根ざして來る。還の字、正の字、甚だ味あり。頸聯は草率、亦た宜しく歌舞に道及すべからず」と云つて居る。

題百葉桃花

百葉桃花に題す

百葉雙桃晚更紅。百葉の雙桃、晚、更に紅なり、  
窺臆映竹見玲瓏。臆を窺ひ、竹に映じて、玲瓏を見る。  
應知侍史歸天上。應に知るべし、侍史の天上に歸るを、  
故伴仙郎宿禁中。故らに、仙郎を伴うて禁中に宿す。

題を深くし、香盤を執つて燒香し、以て從つて齋中に入り、給使して衣服を懸するなり」とある。(一) 仙郎、白帖に「諸曹郎、稱して仙郎となす」とあり、白樂天の詩に「仙郎」は、考功郎中知制誥を以て禁掖に當直せしが故に云ふ。(二) 仙郎、白帖に「諸曹郎、稱して仙郎となす」とあり、白樂天の詩に「仙郎」は、考功郎中知制誥を以て禁掖に當直せしが故に云ふ。(三) 仙郎、白帖に「諸曹郎、稱して仙郎となす」とあり、白樂天の詩に「仙郎」は、考功郎中知制誥を以て禁掖に當直せしが故に云ふ。(四) 天上、内廷、この頃、韓愈

律詩 題百葉桃花

郎靜散禁間とある。

【題義】百葉桃花は、桃の一種で、葉が出て、それから花が咲くものと見える。この詩は、韓愈が知制誥たりし時に作つたので、宿直部屋の近くに在る百葉桃花の風情、甚だ愛すべきに因つて、それに題したのである。

【詩意】百葉桃花は、兩株並び立ち、日暮になると、花の色は、一しほ赤く、窓を窺ひ、竹に映じ、玲瓏として、いとも清げに見える。侍史どもは、予を送つて来て、やがて内廷に歸つて仕舞ひ、まことに淋しい處から、この桃花は、郎官の職に居る予の相手をして、のどかに禁中の當直を爲さしめるので、花も流石に心ありげなる處が、しほらしい。

【餘論】後半は聊か諷意を帯びて、却つて風情がある。何義門は「首句、晩の字、即ち下を呼び起して連らしめ、第二愈よ淡、愈よ豔、晩更紅を透出す」といつて居る。

春雪

春雪

新年都未有芳華。新年、すべて未だ芳華あらず、

二月初驚見草芽。二月、初めて驚く草芽を見たるを。

【字解】(一) 芳華、春景色。

白雪却嫌春色晚。白雪、却つて春色の晚きを嫌ひ、  
故穿庭樹作飛花。故に庭樹を穿つて飛花と作す。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】新年になつても、餘寒猶は嚴しく、何處でも、まだ春景色らしいものもなく、それで二月になると、俄に暖になつて、草が一齊に芽を出したのに驚かされる。しかし、雪は、春色の到ること未だ遲きを嫌うたものと見え、わざと、庭の木木の間に穿つて、落花と作つて飛んで居る。

【餘論】雪は落花の如しといふに過ぎぬが、側面から寫し出して、多少の風致がある。朱竹垞は「常套の語、然れども、調は却つて流快」といつて、極めて善く中つて居る。しかし、かういふ構想は、兎角、物察理窟に流れて、詩情を害ふもので、その弊は、宋人に於て每每見るところである。

戲題牡丹

戲れに牡丹に題す

幸自同開俱隱約。幸に自ら同じく開いて、俱に隱約、

何須相倚鬪輕盈。何ぞ須ひむ、相倚つて輕盈と鬪はすを。

陵晨併作新妝面。晨を陵いで、併せて新妝の面を作し、

【字解】(一) 隱約、看て分明ならざる貌。

(二) 輕盈、輕薄にして盈豐なること。

律詩 春雪 戲題牡丹

對客偏含不語情。客に對して、偏に語らざるの情を含む。

雙燕無機還拂掠。雙燕機なく、還た拂掠。

游蜂多思正經營。游蜂思多く、正に經營。

長年是事皆拋盡。長年この事、皆拋ち盡す。

今日欄邊暫眼明。今日欄邊、暫く眼明かなり。

〔一〕拂掠 拂ひかすめる。

〔二〕經營 せつせと業を吸ひとる。

〔三〕長年 老年に同じ。

【題義】

戯れに牡丹を詠じたのである。段成式の酉陽雜俎に「前史に牡丹を説くものなし、惟だ謝康樂集に言ふ、竹間水際多牡丹」と。成式、隋朝の種植法を検するに、初めより、牡丹を説かず、すなはち、隋朝花叢中の無きところなるを知るなり。開元の末、裴士淹、使を奉じ、回つて汾州に至り、白牡丹一窠を得て、長興私第に植う。至徳中、馬僕射、太原を領し、各紅紫二色の者を得て、城中に移す。元和の初、猶ほ少し。以後、便ち戎莖と多少を角すしとある。玄宗が楊貴妃と共に、沈香亭北に於て牡丹を賞したのは、その珍らしい爲めであつたが、丁度、韓愈の此詩を作る頃は、流行の極點に達したので、同時の白居易は、秦中吟に買花、新樂府に牡丹芳の一首を著けて、その事を歌ひ、殊に後者に於ては、石竹金錢何細碎、芙蓉芍藥苦尋常、遂使王公與卿相、遊花冠蓋日相望、庫車驛驛貴公主、香衫細馬豪家郎、衛公宅諍開東院、西明寺深開北廊、戲蝶雙舞看人久、殘鶯一聲春日長、

共愁日照芳難駐、仍張帳幕垂陰涼、花開花落二十日、一城之人皆若狂、三代以還文勝質、人心重華不重質、重華直到牡丹芳、其來有漸非今日。とさへいつて居る。

【詩意】一叢の牡丹、花花幸に同時に開き、隱約して見て分明ならざれども、相倚つて、輕盈を顯はし、これ見よがしに人に矜るにも及ばぬ。曉早くには、併せて新妝を凝らした様な顔色を爲し、客に對して物いはぬ處に、無限の情思を含んで居る。雙雙たる燕子は、然るべき機會も無いが、それでも、時あつて之を拂ひ掠め、游蜂は、情思多く、せつせと花の蜜を吸ひ取つて居る。牡丹は、派手に賑かな花であるが、老年になると、そんな事には格別意を留めず、すべて拋棄してあつたが、今日欄邊に此花を見ると、暫時眼がはつきりする様な氣がした。

【餘論】前聯は、極めて風趣があるが、後聯の雙燕游蜂は、聊か切實を缺いた感がある。朱竹垞は、これを賞して「中唐の佳調」といひ、何義門は「結句、牡丹に非ざれば稱はず、飛卿の希逸近來成懶病、不能容易向春風は、偷意に巧なるものなり」といつた。飛卿は即ち溫庭筠、この詩は、夜看牡丹と題した七絶で、その全篇は、

高低深淺一闌紅。把火放動繞露叢。希逸近來成懶病。不能容易向春風。と云ふのである。希逸は謝莊の字であるが、如何なる本事があるか、不詳である。

盆池五首

盆池 五首

老翁眞箇似童兒。

老翁、眞個に童兒に似たり、

汲水埋盆作小池。

水を汲み、盆を埋めて小池を作る。

一夜青蛙鳴到曉。

一夜、青蛙、鳴いて曉に到る、

恰如方口釣魚時。

恰も方口魚を釣る時の如し。

【詩意】老翁は、詰まらぬ事をして喜んで居る處が、まるで童兒のやうであるので、盆を地に埋め、水を汲んで、此に盈して小さい池を作つた。すると、一夜、青蛙が其處に来て曉まで鳴きあかし、丁度、方口の地に魚を釣りに出かけた其時のやうであつた。

【餘論】朱竹垞の評に「俚語俚調、直に胸臆を寫す、頗る少陵の漫興尋花諸絶に似たり」とある。

【字解】(一)老翁、韓愈自ら謂ふ。(二)汲水埋盆、順序から云へば、埋盆汲水とすべき處であるが、平仄の都合上止むを得ず、かく顛倒したのであらう。(三)方口、地名、前に見えた澄心堂谷子の詩に、平沙

【詩意】老翁は、詰まらぬ事をして喜んで居る處が、まるで童兒のやうであるので、盆を地に埋め、水を汲んで、此に盈して小さい池を作つた。すると、一夜、青蛙が其處に来て曉まで鳴きあかし、丁度、方口の地に魚を釣りに出かけた其時のやうであつた。

【餘論】朱竹垞の評に「俚語俚調、直に胸臆を寫す、頗る少陵の漫興尋花諸絶に似たり」とある。

【字解】(一)老翁、韓愈自ら謂ふ。(二)汲水埋盆、順序から云へば、埋盆汲水とすべき處であるが、平仄の都合上止むを得ず、かく顛倒したのであらう。(三)方口、地名、前に見えた澄心堂谷子の詩に、平沙

莫道盆池作不成。

道ふ莫れ、盆池作りても成らずと、

藕梢初種已齊生。

藕梢、はじめて種ゑて已に齊しく生ず。

【字解】(一)作不成、折角作つたが、うまくは出来ぬ。

(二)藕梢、蓮の莖。

從今有兩君須記。

今より兩あらば、君、須らく記すべし、

來聽蕭蕭打葉聲。

來り聽け、蕭蕭葉を打つの聲を。

【詩意】折角、盆池を作つたが、うまく出来なかつたと云つて呉れるな。これ位ならば、先づ好いとして、その中に、蓮を種ゑた處が、やがて、芽が一齊に生じた。今より雨が降つたならば、君よ、どうか忘れずに、訪ひ來つて、蕭蕭として、その葉を打つ音を聴き玉へ、又一段の風情があつて、面白いことであらう。

【餘論】朱竹垞の評に「幽澗莽莽、亦た風致あり、然れども、濃腕は尙ほ杜に及ばず」とある。

瓦沼晨朝水自清。

瓦沼、晨朝、水、自ら清し、

小蟲無數不知名。

小蟲無數、名を知らず。

忽然分散無蹤影。

忽然分散して、蹤影なく、

惟有魚兒作隊行。

惟だ魚兒の隊を作して行くのみあり。

【字解】(一)瓦沼、瓦盆を埋めて出来た池。(二)小蟲、定めて子どもの類であらう。(三)蹤影、蹤跡

影響。(四)魚兒、杜甫の詩に細雨魚兒出とある。

【詩意】瓦盆の池は、朝になると、水が澄んで、甚だ綺麗であるが、その中には、名も知らぬ小蟲が數かぎりなく、潭山棲んで居る。それが忽然分散し、どこへ往つたか跡方もなく成つたと思ふと、魚

【餘論】朱竹垞の評に「幽澗莽莽、亦た風致あり、然れども、濃腕は尙ほ杜に及ばず」とある。

【字解】(一)瓦沼、瓦盆を埋めて出来た池。(二)小蟲、定めて子どもの類であらう。(三)蹤影、蹤跡

影響。(四)魚兒、杜甫の詩に細雨魚兒出とある。

兒が隊をなし、整整として過ぎ行くので、大方、小蟲は、魚を避けて、どこぞの隅へ匿れて仕舞つたのであらう。

【餘論】朱竹垞の評に、「この調、法却つて新なり」とあり、又「この詩、體物微に入る」とある。

泥盆淺小詎成池、泥盆淺小、詎ぞ池を成さむ、

夜半青蛙聖得知、夜半、青蛙、聖にして知るを得たり、

一聽暗來將伴侶、一に聽す、暗に來り伴侶を將ゆることを、

不煩鳴喚鬪雄雌、鳴喚して、雄雌を鬪はすを煩はさず。

【字解】「泥盆」即ち瓦盆。

「聖得知」まこと知る。

「一聽」聽は許す。

「將」率ゆる。

【詩意】瓦盆に水を滿たした處で、極めて淺く、池といふことも出來ぬ位であるが、青蛙は、まこと此處を知つて、早くも遣つて來た。その青蛙が、こつそりと同類を率ひて此に來るのは、差支ないが、矢鱈に鳴き立てて、雄雌を鬪はす様な事を爲すには及ばぬ。

【餘論】聖得知は、この後、宋人の好んで用ふる語である。この詩は、詰まらぬ事を大仰に言つて、それで詩となつて居るが、連作中では、下位に居ることを免れぬものである。

池光天影共青青、池光天影、共に青青、

拍岸纔添水數餅、岸を拍つて纔に添ふ水數餅。

且待夜深明月去、且つ、夜深明月を待つて去り、

試看涵泳幾多星、試に看む、幾多の星を涵泳するかを。

【字解】「池光」池水の色。

「拍岸」拍岸纔添水數餅、數餅の水を添へたら、池が溢れて波が岸を拍つたといふ意であるが、例の平仄上から、止むを得ず、顛倒したのであらう。

【詩意】池の水の色も、そこに映れる天の影も、ともに青青として、わづかに數餅の水を加へると、池が溢れて、波が岸を拍つ位、もとより、ささやかなものである。夜深き頃、明月の上るを待ち、この中に幾個の星を涵すか、試にそれを見たいと思つて居る。

【餘論】もとより瑣小な物であるが、星月を倩ひ來つて、大に趣を添へた。なほ、此數首の總評として、劉賈父は「退之の古詩高卓、律詩に至りては、善と稱すべしと雖も、要するに工ならざるものあり、老翁真箇似童兒、これ真に諧語戲となすのみ」といひ、又或人の言に「盆池の詩、天工あり、拍岸纔添水數餅、一夜青蛙鳴到曉の如き、意到るに非ざれば作る能はざるなり」とある。

芍藥

芍藥

浩態狂香昔未逢、浩態狂香、むかし未だ逢はず、

【字解】「浩態」その姿容の

紅燈燦燦綠盤籠 紅燈、燦燦として、綠盤籠む。

覺來獨對情驚恐 覺め來つて、獨り對し、情驚き恐る、

身在仙宮第幾重 身は在り仙宮第幾重。

【題義】この詩は、芍藥を詠じたのである。詩の鄭風溱洧に贈之以勺藥とあり、その疏に「芍藥は香草、三月花を開く、芳香愛すべし」とある。これは、元和十年、韓愈が知制誥たりしとき、禁中に寓直して作つたのである。

【詩意】芍藥の花の姿容優絶、香氣芳烈なるは、従前未だ曾て逢はざるところで、燦燦たる紅燈の下で、青磁の鉢に植えたのを見ると、一しほに感ずる。半夜夢覺めしとき、ひとり、此花に對すると、この身は、仙宮第幾重の遙けく高い處に在るかと思はれて、心意自ら驚き恐るばかりである。

【餘論】芍藥は、人間の種ならずして、天上の仙宮に在るべきものだといふに過ぎざれども、その聊か曲折した處が面白い。但し、この詩は淺薄庸近で、蔣之魁が「詩、取るに足るなし、但だ狂香の字、特に奇なり」といつたのも、なる程と頷かれる。

脩絶ないふ。「二」狂香、その香の甚だ盛なるないふ。

【三】綠盤、青磁の植木鉢であらう。

奉和魏州劉給事使君三堂新題二十一詠

魏州劉給事使君の三堂新題二十一詠に和し奉る。

魏州刺史宅連水池竹林往往爲亭臺島渚目其處爲三堂劉兄自給事中出刺此州在任逾歲職修人治州中稱無事頗復增飾從子弟而遊其間又作二十一詩以詠其事流行京師文士爭和之余與劉善故亦同作。

【訓讀】魏州刺史の宅、水池竹林に連り、往往亭臺島渚を爲り、その處を目して三堂となす。劉兄、給事中より出でて、この州に刺たり。任に在ること、歳を逾え、職修まり、人治まり、州中無事と稱す。頗る復た増飾し、子弟を從へて、その間に遊び、又二十一詩を作つて、以て其事を詠じ、京師に流行し、文士争つて之に和す。余、劉と善し、故に亦た同じく作る。

【題義】この序文の意味は——魏州刺史の官宅は、水池竹林に連つて居る處から、自然の景致に因つて庭園をしつらへ、處處に亭臺を設け、島嶼洲渚を作り、その處を三堂と名づけた。ここに、劉君は、給事中から轉任し、都を出でて、魏州の刺史となり、著任後、一年餘を過ぎ、職務も滞りなく、治下の人民も善く治まり、州中無事と稱する位。そこで、三堂に手を入れて、餘程増修して粧飾を加へ、暇ある折ふしは、子弟輩を從へて、その間に遊び暮らし、又小詩二十一首を作つて、三堂の事を詠じ

た處が、その詩は、長安まで流行し、文士輩が争つて之に和した。余は、素より劉君と親密であるから、亦た同じく和作を試みた——方崧卿の説に「劉伯芻は、元和八年を以て出でて魏州に刺とし、白樂天、制詞あり」といひ、舊唐書には「劉伯芻、字は秦之、洛州廣平の人、進士の第に登り、考功郎中集賢院學士に累遷し、給事中に轉じ、出でて魏州刺史となる」とある。又呂溫の作れる魏州三堂記には「開元の初、天子、二南の風を思ひ、竝に宗英を選び、共に理柄を持す。魏は、大にして近く、親に匪ざれば居らず、時に惟だ五王出入して相授承し、平易理逸、政暇多し、考へて惟の勝を卜して、三堂を作爲す。三とは、臣子三に在るの節を明かにし、堂とは宗室克く構ふるの義を勵ます」とある。以下、不用であると思ふから、ここに限つて各首題義の説明を省略することにす。

新亭

新亭

湖上新亭好。公來日出初。

湖上新亭好し、公來る、日出づるの初。

水文浮枕簟。瓦影蔭龜魚。

水文、枕簟に浮び、瓦影、龜魚を蔭す。

【字解】「二」水文、文、一に紋に作る、宜讀同し。

【詩意】池の邊に新亭を造つたが、まことに、結構で、劉刺史は、朝早く來られることがある。する

と、水中の波紋には、亭なる枕簟の影を浮べ、又亭の屋瓦の影は、龜や魚を保護して日光を遮つて居る。

【餘論】顧嗣立の評に「後二句は、是れ水中に偶ま見たる景、日出に根ざし來る、亦た工なり」とある。

流水

流水

汨汨幾時休。從春復到秋。

汨汨として幾時か休まじ、春より復た秋に到る。

只言池未滿。池滿強交流。

只だ言ふ、池未だ滿たすと、池滿つれば、強ひて交も流れむ。

【字解】「二」汨汨、ちよろちよろ流れる貌。

【詩意】水は、ちよろちよろと流れて、何時休むとも見えず、春より秋に至り、年中流れて居る。その流れる所以は、池が一ばいに成らぬからだといふので、もし、池が一ばいにならば、池の水と共に勝手な方向に交も流れるであらう。

竹洞

竹洞

竹洞何年有。公初斫竹開。

竹洞、何の年か有る、公、初めて竹を斫つて開く。

洞門無鎖鑰。俗客不曾來。

洞門に鎖鑰なきも、俗客、かつて來らず。

【詩意】この竹洞は、何年から出来たかといへば、劉刺史が、初めて竹を斫つて、この洞を開いたのである。もとより、竹林の洞を爲せる處で、鎖鑰なく、入口は常に明け放しであるが、處から、俗客は、決して這入つて來ない。

【餘論】朱竹垞は「すこしく趣あり」と云つて居る。

月臺

月臺

南館城陰闊。東湖水氣多。

南館城陰闊く、東湖、水氣多し。

直須臺上看。始奈月明何。

直に須らく臺上より看るべし、はじめて、月明を奈何。

【字解】(一)南館、即ち館南で、館とは前の新亭であらう。(二)東湖、亦た湖東に同じ。

【詩意】新亭の南は、魏州城壁の陰になり、且つ池の東に當つて、水氣が多く立ちこめ、ここでは月も能く見えぬ。但し、名にしおふ月臺に上れば、この月明を奈何といひたい位。十分に清光を領することが出来る。

渚亭

渚亭

自有入知處。那無步往蹤。

自ら人の處を知るあり、那ぞ歩いて往くの蹤なからむや。

莫教安四壁。面面相芙蓉。

四壁を安んせしむる莫れ、面面に芙蓉を見む。

【詩意】渚亭は、その名の如く、池の渚に在つて、一寸物かげになつて居るが、人は、自然に其處を知つて居ると見えて、歩いて此を尋ねた蹤さへある。この亭の眺めは、何方でも善く、四壁を嚴重に塗り立てないが善いので、さうすれば、どちらへ向いても、池中の芙蓉を看賞することが出来る。

竹溪

竹溪

藹藹溪流慢。梢梢岸篠長。

藹藹として溪流慢に、梢梢として岸篠長し、

穿沙碧簾淨。落水紫苞香。

沙を穿つて碧簾淨く、水に落ちて紫苞香し。

【字解】(一)藹藹、水の平に鋪いて流るる貌。(二)梢梢、直立して聳ゆる貌。(三)碧簾、竹の幹の碧色をいふ。(四)紫苞、竹の皮の紫色なるをいふ。(五)香、鮮新の貌。

【詩意】平に鋪いた溪流は、緩緩として流れ、岸上の篠竹は、矗立して丈が長い。沙を穿つて抽き



出でたる若竹の碧色の幹は、いと淨く、水に落ちた紫の竹の皮は、極めて鮮新である。  
 【餘論】蔣注に「少陵の竹の詩、雨洗娟淨、風吹細細香とあり。前輩、かつて云ふ。竹、未だ嘗て香ならず、而して、少陵、香を以て之を言ふと。豈に知らむや、公も亦た落水紫苞の語あるをや」とあるが、韓愈が言つたからとて、それで正しいといふ譯には行かぬ。蓋し、この香の字は、何も香氣あることではなく、鮮新にして匂ありげに見える様を言つたので、香の字に、かくの如き一種の用法があるといへば、それで淨山である。

北湖

北湖

聞説遊湖棹、尋常到此廻。聞くならく、湖に遊ぶの棹、尋常此に到つて廻ると。

應留醒心處、準擬醉時來。應に心を醒ますの處に留まるべく、醉時に來らむこと。

【字解】(一)尋常、普通には。(二)準擬、用意する。

「を準擬す。」

【詩意】聞くところによれば、池に棹さす遊山船は、普通に、この北湖の入口まで來て、そこから漕ぎもどすといふが、北湖の内部には、心を醒ますに足る様な、極めて幽邃な處があつて、そこに留まるが宜しい。われは、豫め用意して置いて、醉時に、そこへ往つて見たいと思つて居る。

花島

花島

蜂蝶去紛紛、香風隔岸聞。蜂蝶去つて紛紛たり、香風岸を隔てて聞こゆ。

欲知花島處、水上覓紅雲。花島の處を知らむと欲すれば、水上に紅雲を覓めよ。

【詩意】蜂や、蝶や、紛紛として飛び來り、香風は、對岸にまで匂つて來る。名にしおふ花島は、何處かといへば、水上に紅雲の棚引く處を尋ねれば善いので、その紅雲は、取りも直さず、花どもの簇つて居るのである。

【餘論】後半は、遠望の景である。

柳溪

柳溪

柳樹誰人種、行行夾岸高。柳樹、誰人が種るたる、行行、岸を夾んで高し。

莫將條繫纜、著處有蟬號。條を將つて、纜を繫ぐ莫れ、著く處、蟬の號ぶあらむ。

【字解】(一)行行、行は行列の行。(二)將條、條は柳の枝。

【詩意】名にしおふ柳溪の柳は、元と誰が種るたのか知らぬが、幾行にもなつて、兩岸に列植し、す

でに年を経て、木の丈も高くなつて居る。その柳の枝を把つて、舟の艫を繋ぐことは爲さずもあれ、丁度、その枝の本には、蟬が今しも鳴いて居て、やがて驚いて飛び起つであらう。

西山

西山

新月迎宵挂。晴雲到晚留。新月は宵を迎へて挂り、晴雲は晩に到つて留まる。爲遮西望眼。終是懶廻頭。西望の眼を遮るが爲に、終に是れ頭を廻らすに懶し。

【詩意】三日月の細きは、夜を迎へて、早く西山の上に挂り、晴天の雲は、日暮になると、西山の上に残まつて居る。西山は、もとより景色よきも、連岡一帯、西望する我が目を遮るが故に、結局、頭を廻らして其方を眺むるに懶く、いつとなく閒却して仕舞ふのである。

【餘論】何義門は「下二句、的的是れ魏州の詩」といつて居るが、實際の地理に吻合して居るからであらう。

竹逕

竹逕

無塵從不掃。有鳥莫令彈。塵なくして掃はざるに従す、鳥あるも彈せしむる莫れ。

若要添風月。應除數百竿。もし風月を添ふるを要すれば、應に數百竿を除くべし。

【詩意】もし塵なければ、掃除などはせずとも善い。又鳥が來ても、彈を以て打ち落さぬやうにして貰ひたい。しかし、何分、竹が茂り過ぎて居るから、もし風月の眺めを添へたいと思はば、その數百本を斫り倒して仕舞はねばならぬ。

荷池

荷池

風雨秋池上。高荷蓋水繁。風雨秋池の上、高荷、水を蓋うて繁し。「たるに似かひや。」

未諳鳴撼撼。那似卷翻翻。未だ鳴いて撼撼たるを諳んせざれども、那ぞ卷いて翻翻し。

【字解】【一】高荷、丈長き蓮の葉。【二】撼撼、文選に撼撼芳葉等とある。

【詩意】秋池の上に風雨降りそそいで來り、高く延びた蓮の葉は、水を蓋うて茂つて居る。その蓮の枯れ葉が風雨に打たれて、撼撼と鳴ることは、未だ諳んじ知らざれども、夏の初、蓮の卷葉の翻翻として風雨に揺めく方が、はるかに風情あつて面白いことと思ふ。

稻畦

稻畦

分れて、水、尋ねるなし。

野布畦堪數枝分水莫尋  
魚肥知己秀鶴沒覺初深

野のごとく布いて、畦、數ふるに堪へたり。枝のごとく  
魚肥えて已に秀でたるを知り、鶴沒して初めて深きを覺ゆ。

【字解】「野布」桓譚の新論に「邊隅を守り、越つて罪を作すは、自ら小地に生ずるを以てなり」とあり、文選章安嗣の傳奕論に「勝むるところは、方界の間に過ぎず」とあり、朱子は「罪は基局上の方目なり」といつて居る。

【題義】これは園亭に在る稻畦である。

【詩意】稻畦は、碁盤の目の如く切り盛られて、一一數ふるに堪ふべく、これに灌溉する水は、枝の如く分かれて、その源流は何處か、尋ねることも出来ない。やがて、魚の肥えたるに因つて、稻の已に秀でしを知り、そこに降りた鶴が見えなくなりしに因つて、稻が茂つて初めて深きことを覺つた。

柳巷

柳巷

柳巷還飛絮春餘幾許時  
吏人休報事公作送春詩

柳巷、還た飛絮、春は幾許の時をか餘す。  
吏人、事を報するを休めよ、公は送春の詩を作る。

【詩意】柳巷の柳の花は、頻りに散つて、さながら絮を飛ばすが如く、春は已に盡きなむとして、幾許の時を剩して居るか。吏人どもは、忙はしく、事務を報告することを差控へよ、劉刺史は、今しも送春の詩を作つて居られるから、その出来上るまで、暫時待つて居るが善からう。

花源

花源

源上花初發公應日日来  
丁寧紅與紫慎莫一時開

源上、花、初めて發す、公は、應に日日来るべし。  
丁寧にせよ、紅と紫と、慎んで、一時に開くこと莫れ。

【詩意】春になると、名にしおふ花源に於て、花が咲き初めたから、これから、刺史公は、毎日、ここに來られるであらう。唯だ紅と紫との花は、さう急がずに、緩々とするが善いので、注意して、一時に開かぬ様にして欲しい。一時に開けば、賑かであるが、従つて、盛りが短いからである。

北樓

北樓

郡樓乘曉上盡日不能廻  
晚色將秋至長風送月來

郡樓、曉に乗じて上り、盡日、廻る能はず。  
晚色、秋と至り、長風、月を送つて來る。

律詩 奉和魏州劉給事使君三堂新題二十一詠 稻畦・柳巷・花源・北樓

【字解】(一)郡樓、役所の高樓と見える。(二)當日、終日に同じ。

【詩意】朝早く郡樓に上り、四邊の風景を賞して、終日歸ることが出来ない。兎角する内に、日暮の景色は、秋を帯びて遠くより至り、同時に、長風が月を送つて來り、更に一段の趣を添へた。

【餘論】蔣之翘は「晩色將秋至は、情雅、下句、俗を免れず」といつたが、長風送月來の五字とても、いささか陳套ではあるが、寫景壯闊、決して、俗だといつて斥くべきものではない。

鏡潭

鏡潭

非鑄復非鎔、泓澄忽此逢。鑄るに非ず、復た鎔かしたるに非ず、泓澄、忽ち此に逢ふ。魚蝦不用避、只是照蛟龍。魚蝦は避くるを用ひず、只だ是れ蛟龍を照らす。

【詩意】名を鏡潭といふが、鑄たのでもなければ、鎔かしたのでもなく、ただ水が澄み満へて、鏡の如く成つたに過ぎぬ。水中の魚蝦どもは、相避くるに及ばぬが、唯だ此鏡で蛟龍を照らし出し、愈よ鏡に似つかはしい様にしたといふのである。

【餘論】鏡の背面には、多く蛟龍が刻してあるから、結局を引き出したので、愈よ鏡たる其實を擧げたいといふのである。

孤嶼

孤嶼

朝遊孤嶼南、暮戲孤嶼北。朝に孤嶼の南に遊び、暮に孤嶼の北に戯る。所以孤嶼鳥、與公盡相識。所以に孤嶼の鳥、公と盡く相識る。

【字解】(一)孤嶼、一つ島で、例の池中に在るものと見える。

【詩意】刺史公は、朝に孤嶼の南に遊び、暮に孤嶼の北に戯れ、朝暮ここに來て遊賞されて居る。されば、孤嶼に栖む鳥どもは、すべて、公と相識つて、よく舞れ合つて居る。

【餘論】蔣之翘の説に「この詩は、崔顥の長干行」

家臨九江水。來去九江側。同是長干人。生小不相識。

より出づ、意致皆すでに古に近し、但し、崔の詩は、只だ相問の語を寫して、その情、自ら見はれ、韓の詩は、自ら注脚を下す、大に眞を認むるに近し」とある。

方橋

方橋

非閣復非船、可居兼可過。閣に非ず、復た船に非ず、居るべく、兼ねて過ぐべし。

律詩 奉和嶺州劉給事使君三堂題題二十一 欽・鏡潭・孤嶼・方橋

君欲問方橋。方橋如此作。

君、方橋を問はむと欲す、方橋かくの如くして作る。

【題義】方橋は、如何なるものか、この詩だけでは、はつきり分からぬが、舟に閣をしつらへたのを橋に代用したのであらう。

【詩意】方橋の物たるや、問でもなければ、橋でもなく、そこに留まつて居ることも出来るし、そこを過ぎて池を渡ることも出来る。君、方橋は如何なるものかと問はれるが、それに對して、方橋は唯だ此の如く作つたものだと言へる外はない。

【餘論】作の字に自注を施して「音佐」とある、それに就いて、蔣之題は「白樂天・皮日休の詩、作の字、皆自注して音佐といふ。今、廣韻を按ずるに、作は造なり、將祚の切と、而して、荀子、肉腐出蟲、魚枯生蠹、貪利忘身、禍幾乃作、及び廉范五袴の論（廉叔度、來何暮、不不禁火、民安作）皆以て此音となす、然れども、讀んで佐の如きは、又將祚の切の訛にして、世俗用ふところは人に从ひ、故に从ふ、而して、切して將祚と爲すものは、又字の俗體なり」とある。なほ朱竹垞は、この篇を評して、潮調、古樂府に似たり」といつた。

梯橋

梯橋

乍似上青冥。初疑躡菌菴。

乍も青冥の上るに似たり、初めは菌菴を躡むかと疑ふ。

自無飛仙骨。欲度何由敢。

自ら飛仙の骨なく、度らむと欲するも何に由つて敢てせむ。

【字解】(一) 青冥。大空。(二) 菌菴。何處門の說に「菌菴は蓮華峰を指すに似たり」とあつて、蓮華峰といへば、華嚴の最高峰である。しかし、唯だ蓮の葉としても解釋の出來ぬことは無い。(三) 飛仙。飛行自在なる仙人。

【題義】梯橋は、如何なるものか分からぬが、繫ぎ橋の類かと思はれる。

【詩意】梯橋を渡ると、忽ち大空に上つた様な想をなし、初めは、蓮の葉を踏んで行くかと思つた。しかし、この身には、飛行自在なる仙人の骨なく、なほ凡俗を脱せざるが故に、大空に上ることも、蓮の葉を躡むことも、何に由つて敢てすべきか、それは、とても、出來ぬ相談である。

月池

月池

寒池月下明。新月池邊曲。

寒池は月下に明かに、新月は池邊に曲る。

若不妬清妍。却成相映燭。

清妍を妬まざるが若く、却つて相映燭することを成す。

【詩意】寒池は、月下に明かであるし、新月は、池邊に曲つて見える。寒池と新月と、兩つながら、

清妍であるが、絶えて相妬まざるが如く、却つて、互に照らし合つて、一層の美を成せるは、極めて面白い。

【餘論】二十一首の總評として、王元美は「絶句、もとより自ら難く、五言尤も難し。首を離るれば即ち尾、尾を離るれば即ち首、而して、要腹も亦た自ら少くべからず。妙は愈よ小にして大、愈よ促して純なるに在り。この法を得たるものは、わづかに太白一人、王摩詰も、亦た體を具へて微なり。この退之三堂二十一詠、蓋し亦た摩詰の輞川雜詩を歩武して、未だ逮ばざるもの、すでに宋人の口吻に落つるを免かれず」といひ、朱竹垞は「一首首新意を出し、王裴輞川諸絶と頗る相似たり。音調、却つて彼の高雅に及ばず」といひ、この詩が王摩詰に及ばぬは、もとより公論である。但し情風聲牙、盤空の硬語を以て其勝を擅にする韓愈にして、この別調あるは一奇となすべく、その集中に在つて、まさしく、異彩を放つものである。

遊城南十六首

城南に遊ぶ 十六首

【題義】城南は、韓愈の別墅の在つた處で、數ば其地に遊んで作つた詩を、此に「まとめにしてから、かく題したのであらう。方崧卿は「十六詩、一日の作に非ず、編者、これを類次す」といつて居る。

賽神

賽神

白布長衫紫領巾、白布長衫紫領巾、

差科未動是閒人、差科未だ動かす、是れ閒人。

麥苗含穢桑生葦、麥苗は穢を含み、桑は葦を生ず、

共向田頭樂社神、共に田頭に向つて、社神を樂ましむ。

ある、臨時の賦役と見える。【一】穢、穢に同じ。【二】葦、桑の實。【三】社神、社は土地の神。

【詩意】白い布で造つた長い上衣を著流し、紫の襟卷をして居るのは、臨時の賦役にも關係なき閒人である。今しも、麥の苗は生長して、穗を含み、桑は實を生じ、農事も一寸ひまである處から、この閒人も一緒になつて、田頭なる鎮守の祠に参詣し、笙鼓を以て神を樂ませ、田舎の事として、まことに長閑な有様である。

【餘論】朱竹垞の評に「村野の意を得たり」とある。

題于賓客莊

于賓客の莊に題す

榆莢車前蓋地皮、榆莢車前、地皮を蓋ふ、

【字解】【一】榆莢、爾雅の榲桲

律詩 遊城南十六首・賽神・題于賓客莊

薔薇藤水笱穿籬。薔薇は水に蘸して、笱は籬を穿つ。

馬蹄無入朱門跡。馬蹄、朱門に入るの跡なし、「べけむや」

縱使春歸可得知。縱ひ春をして歸らしむるも、知るを得

車前草は、大鸞長脚、好んで道邊に生ず、江東、呼んで蝦蟇衣となす」とある、和名おほばこ。

【題義】于賓客、名は頗、舊唐書に、于頗、字は允元、河南の人、憲宗即位、冊して司空平章事に拜せられ、元和八年十月、改めて太子の賓客を授けらる」とある。この詩は、城南に在る于頗の別荘に題したのである。

【詩意】楡の莢やおほばこは、大地の表面を掩ひ、薔薇は影を水に蘸し、笱は籬を穿つて抜き出でて居る。馬蹄の跡は、朱門には入らず、ここだけに限られて居る。殊に片田舎の事で、花は、いつでもあるから、たとひ、春が歸り去つたにしても、ここに馬を乗り入れると、さうとは知らずに、いつでも春の様な想がする。

【餘論】通首、田舎の長閑けきは、朱門の春盡き易きに比すべくもあらぬといふことを述べたに過ぎぬが、紆餘曲折して居る處に、一種の趣がある。

晩春

晩春

草樹知春不久歸。草樹は、春の久しく歸らざるを知り、

百般紅紫鬪芳菲。百般の紅紫、芳菲を鬪はしむ。

楊花榆莢無才思。楊花榆莢、才思なし、

惟解漫天作雪飛。惟だ漫天雪と作つて飛ぶを解す。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】あらゆる草や木は、春の久しうして歸らざるを知り、やつと用意が出来たといった様に、紅紫さまざまに咲き亂れて、芳菲を鬪はし、見る目もあやなるばかり。ここに、柳の花と楡の莢とは、まことに智慧の無いうつけ者で、唯だ天にはびこつて、雪の様に飛ぶことだけを知つて居る。

【餘論】朱竹垞は、「この意、何の解を爲すか、然れども、情景却つて是れ此の如し」といつた。つまり、楊花榆莢の眞意は如何に解釋すべきか、どうも、分からないといふのであらう。

落花

落花

已分將身著地飛。已に身を將て地に著いて飛ぶを分とす、【字解】「分」分限とする。

那差踐蹋損光暉。那差羞ぢひ、踐蹋して光暉を損するを。

【三】踐蹋 踏まれる。

無端又被春風誤。無端、又春風に誤られ、

【三】無端 ゆくりなくも、おもひがけずも。

吹落西家不得歸。西家に吹き落されて歸るを得ず。

【題義】 説明に及ばぬ。

【詩意】 落花は、その身を以て、大地に密著して飛ぶを分とし、人に踏まれて、本来の光暉を損することなどは、羞とも思はぬ。しかるに、ゆくりなくも、春風に誤られ、忽ち西鄰の家に吹き落されて、再び歸つて來ることの出来なく成つたのは、残念である。

【餘論】 人にしても、落膽の餘、死んで仕舞ふのは、おもひ切りが善いが、生やさしい情義に絆されて、心にもなき、所業をなし、處處飄泊するのは、まことに厭ふべきことであるといふ意を譬喩的に詠出したものであらう。朱竹垞は「婉曲致あり、純ら是れ比の意」と云つて居る。

楸樹二首

楸樹二首

幾歲生成爲大樹。幾歲生成して大樹となる、

【字解】 〔一〕生成 生長し成育

一朝纏繞困長藤。一朝纏繞、長藤に困めらる。

【三】纏繞 まき付く。【三】與爲に。【四】青羅帳 青い薄絹の外衣、即ち前の長藤を云ふ。

誰人與脫青羅帳。誰人が與に青羅の帳を脱し、

看吐高花萬萬層。高花萬萬層を吐くを看む。

【題義】 楸はひさぎ、又きささげといひ、實はささげの如き莢を爲して居る。支那では、松と共に墓地に植ゑる處から、松楸といひ、又その材は木理が緻密で堅いから、棊盤などに造るので、楸枰といふ。この詩は、楸樹が藤に纏はれたのを見て、感興を寄せたのである。

【詩意】 楸が幾年かを経て、生長成育して、大きな立派な木になつたが、一朝にして、長い藤蔓に絡み付かれて、非常に弱つて居る。誰か、この青羅の外衣の様な藤蔓を脱し去らしめ、楸が梢の先の又先なる高い處に萬萬層をなして、花を吐かせるであらうか、世には、さういふ篤志な人は無いものか。

【餘論】 長藤を除けば、楸は元氣を回復し、高梢にも花を着けることが出来るので、障害を除くことは、他人の力に待つことが多いのに、世にさういふ人の少いのは、遺憾至極だといふので、これも、亦た比の意である。朱竹垞は「用意亦た佳、但だ遺句は稍や力を費す」といつて居る。



幸自枝條能樹立。幸さいはひに自ら枝條えだじょうにして、能く樹立じゆりつするも、

可煩蘿蔓作交加。蘿蔓らまんを煩わづらはして、交加かうかを作すべけひや。

傍人不解尋根本。傍人ぼうじんは解せず、根本こんぽんを尋ぬるを、

却道新花勝舊花。却かえつて道みちふ、新花しんかは舊花きうかに勝まされり。

【詩意】幸に楸樹の枝が能く樹立して、元氣よく生きて居るにしても、蘿の蔓をして、からみ合ひを爲さぬ様にして欲しい。傍人は、すべて事物の根本を研究することを知らず、蘿の花を相變らすの楸の花と誤想し、この頃咲く花は、ひかし咲いた花よりも餘程宜しいなどといふが、まことに笑ふべきことである。

【餘論】世人の短見を諷つたので、朱竹垞は「前首に比して稍や醒快」といつて居る。

風折花枝 風、花枝を折る

浮豔侵天難就看。浮豔、天を侵して、就いて看難く、

清香撲地只遙聞。清香、地を撲つて、只だ遙に聞く。

春風也是多情思。春風、也た是れ情思多し、

故揀繁枝折贈君。故こゝろらに繁枝はんしを揀せんんで、折やつて君きみに贈たまへる。〔三〕揀、擇ぶ。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】浮び出でたらむ如き豔色は、高い處に在つて天に接し、とても其側に立ち寄つて見ること出来ぬが、清香は、地を撲つて、遙に匂つて来る。春の風は、なかなか情思あるもので、枝の疎な處を避け、わざと繁く立ちこんだ處を探ひ、その一枝を吹き折つて君に贈つた。

【餘論】前半は、高處繁處の形容に過ぎぬが、後半を得て、はじめて一種の姿趣を成すのである。朱竹垞は「出意新、上二句、下を喚ぶ、意亦佳」と云つて居る。

贈同遊 同遊に贈る

喚起隄全曙。催歸日未西。喚まび起して、隄たか、全く曙あけけ、歸かへるを催もよほして、日ひ、未だ西にしならず。

無心花裏鳥。更與盡情啼。無心むしん花裏はなの鳥とり、更さらに與ともに情じやうを盡つくして啼なく。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】朝、一緒に出かける爲に、君を喚び起したが、窓の全く明け離れた頃で、支度に手間取りなとして、家を出たのも、かなり遅かつた。そこで、善い加減遊んで、日は未だ西ならざれども、今か

律詩、遊城南十六首、風折花枝、贈同遊

四三五

ら歸らねば、暮れて仕舞ふといふので、歸りを促き立てた。遅く出でて早く歸るのは、まことに呆ッ  
氣ない。そこで、花裏に住む無心の鳥は、情を盡して啼き、ひたすらに、われ等を引き留めるが如く  
であるから、さらば、今少し居やうかと思ふ。

【餘論】黃庭堅の言に「吾、兒たりしとき、毎に此詩を嘖して、了に其意を解せず、峽を出でて來つて  
より、吾が年五十八、春曉、偶ま此詩を憶うて、方に之を悟る。喚起催歸は、二禽の名なり。古人、  
小詩に於て、意を用ふるの精深なること、かくの如し。催歸は子規なり、喚起は、聲、人の絲を絡  
が如し、圓轉清亮、偏に春曉に於て鳴く、江南の人、これを春喚といふ」といひ、復齋漫錄には「予、  
かつて、唐の顧渚山茶記を讀む、曰く、顧渚山中に鳥あり、鶯の如くして色蒼し、正二月に至る毎  
に、聲を作して、春起と曰ふなり、三四月には、春去と云ふなり。採茶の人、呼んで喚春鳥といふ。然  
らば、喚起の名は、唐人の説なり、豫章、擧げて證と爲さざるは何ぞや」とある。かくの如く、喚起  
催歸を鳥の名とすると、解釋が稍や違つて來るので——名にしおふ喚起の鳥に起された時は、窓が全  
く白み、それから、一日出あるくと、又催歸の鳥に夕暮ともならぬ内に、せき立てられて歸つて來る。  
喚起といひ、催歸といひ、無心の鳥ではあるが、ともに花裏に栖んで、人の爲に情を盡して啼くの  
は、まことにしほらしい——といふ様に説明する外はない。朱竹垞も亦た之を贊し「暗に二鳥の名を  
藏して内に在り、只だ喚催を泛説する者の若し、然れども、下句乃ち鳥の字を透出して相應じ、其だ

興味あり、この體、前後有ること罕なり、果して是れ精深」といつて居る。なる程、喚起の鳥が人を  
呼び起すのは、情を盡すのであるが、催歸の鳥が歸るを催すのは、むしろ、無情であつて、聊か矛盾  
を免れぬ感がある。そこで、蔣之題は説を爲して「題、按ずるに、この詩題、同遊に贈るといふ。喚  
起、催歸、ともに同遊者に就いて説く。蓋し言ふ、晏く出で、早く歸り、遊ぶこと幾時ならず。而し  
て、枝頭の小鳥、本と心なきも、出遊者、尙ほ留連せむと欲して情を盡す。我と若と、正に未だ歸る  
べからざるなり。大意爾爾たるに過ぎず。宋人、強ひて二鳥の名を入れ、而して、下に又花裏鳥を  
云ひ、遂に韓詩をして幾んど理を成さざらしむ、恨むべし」といつて居るが、予は、此説に左袒して、  
上の如く解釋したのである。喚起催歸の二語、鳥の名であつてもかまはぬが、現に角、文字の通りに  
使用し、そして、花裏の鳥は、何か分からぬが、別に有るのである。

贈張十八助教

張十八助教に贈る

喜君眸子重清朗、喜ぶ君が眸子重ねて清明、

攜手城南歷舊遊、手を攜へて、城南、舊遊を經たり。

忽見孟生題竹處、忽も見る、孟生竹に題する處

律詩 遊城南十六首、前十八助教

四三七

【字解】「一」眸子、ひとみ、瞳  
子。

【二】歷舊遊、舊遊の跡を經過する。

【三】孟生、孟郊、韓愈と城南に遊ん

相看淚落不能收。相看淚落愁更愁。收得能收不。

【題義】この詩は、張籍に贈つたのである。

【詩意】君は、久しく眼を病んで居たが、瞳が再び清明となつて、全愈したのは、最も喜ぶべきこと  
で、今日、手を攜へて城南に向ひ、舊遊の跡を經過した。すると、孟郊が篋に竹に詩を題した處を見、  
彼が既に仙し去りしを思ひ、君と相見て、惆悵禁せず、涙は留めどなく流れるばかりである。

【餘論】朱竹垞の評に、「真情直に吐く、前二句、何等の樂、後二句、何等の痛」とあつて、一首中、  
悲喜相對して、無限の情思がある。

題章氏莊

章氏莊に題す

昔者誰能比。今來事不同。

むかし、誰か能く比せむ、今來、事同じからず。

寂寥青草曲。散漫白榆風。

寂寥たり、青草の曲、散漫たり白榆の風。

架倒藤全落。籬崩竹半空。

架は倒れて藤全く落ち、籬崩れて竹半ば空し。

寧須惆悵立。翻覆本無窮。

むしろ惆悵して、立つを須ひむや、翻覆本と窮まりなし。

【字解】【一】青草曲、青草の生えて居る曲隈、青草を歌つた曲では有るまい。【二】架、籬也。【三】竹半空、竹が半ば無くなつた。【四】翻覆、人生の有爲無常、常ならざるを云ふ。

【題義】雍錄に「呂園に、章曲は明德門外に在り、章后の家、ここに在り、蓋し、皇子陵の西、謂はゆる城南の章社」とあり、鄭樵の通志に「章曲は樊川に在り、唐の章安石の別業」とある。それから、蔣注には「城南の章曲、唐に在つては、最も名を盛にし、杜陵と相埒し、當時、これが爲に語つて曰く、章曲去天尺五と。杜子美の章賛善に贈る時に、謂はゆる時論同歸尺五天なり。この時、莊、すでに衰ふ、故に詩意云ふあり」とある。すると、城南の某處には、章氏一族の別邸が多く、因つて、章曲と稱せられた位であつたが、章氏漸く衰へ、莊、亦た廢せしに因り、轉愈は、これを弔うて、この詩を作つたのである。

【詩意】むかし、章氏の盛であつて、ここに、別邸の多く聚まつて居る時分は、誰も相比することが出来なかつた位であるが、今來て見ると、全然世事が變化して仕舞つた。青草の生えた曲隈は、寂寥として人もなく、白榆の風は、散漫として收まらず、棚は倒れて、藤蔓は全くづるけ落ち、籬は崩れて、竹も半ば無いやうに成つた。この景を撫し、惆悵して立つて居た處で、仕方がないので、人生の有爲轉變は、もとより窮まりなく、かういふことは有り勝ちで、格別驚くにも及ばぬ。

【餘論】兩聯、ともに景を述べ、その前後に於て、感懷を寓したので、亦た一種の作法である。

晚雨

晚雨

廉纖晚雨不能晴。廉纖たる晚雨、晴るる能はず、

池岸草間蚯蚓鳴。池岸の草間に蚯蚓鳴く。

投竿跨馬歸歸路。竿を投じ、馬に跨つて、歸路を歸む、

繞到城門打鼓聲。わづかに城門に到れば、鼓を打つの聲。

【題義】これは、城南の池に往つて釣をした處が、雨に遇つた爲に、急いで城中に歸つたものと見える。

【詩意】日暮に、細かな雨が降つて来て、なかなか晴れる模様もなく、わが釣を垂れて居た池の岸の青草の茂る間には、蚯蚓が悲しい細い聲をして鳴き出した。そこで、仕方が無いから、邪魔になる釣竿を投げ棄て、馬に跨つて、とぼとぼ歸路に向ひ、やつと城門に近づくと、何の制限か知らぬが、夜を報する鼓聲が聲として聞こえた。

出城

城を出づ

暫出城門踢青草。暫く城門を出でて、青草を踢み、

【字解】(一) 城門、無鎖、城の

遠於林下見春山。遠く林下に於て春山を見る。

應須韋杜家家到。應に須らく韋杜の家家に到るべし、

祇有今朝一日閒。祇だ今朝一日の閒あるのみ。

【三】今朝、今日と同じ、なほ終日を終朝といふが如し。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】しばらく、馬を驅つて城の南門を出で、青草の生えた路をとぼとぼと歩かせ、眺めやれば、遠かなる林下に於て、一帶の春山が霞を帯びて見え、まことに好い景色で、城市の耳目を一新する。韋曲杜曲には、知人の別荘が幾らもあるから、戸戸に訪問するも面白かるべく、今日だけは暇であるから、緩つくりと、この間に遊び暮らさうと思ふのである。

【餘論】朱竹垞の評に「脱漣の趣あり、後兩句、是れ逆調、一日閒、是れ詩骨」とある。即ち一日閒の三字が全篇の基礎となつて、その上に構想されて居るのである。

把酒

酒を把る

擾擾馳名者、誰能一日閒。擾擾として名を馳するもの、誰か能く一日閒なる。

律詩 遊城南十六首・晚雨・出城・把酒

我來無伴侶、把酒對南山。我來つて伴侶なし、酒を把つて南山に對す。

【字解】(一) 把酒、いそがしげに酒を飲みかけり。 (二) 伴侶、同遊の友。 (三) 南山、終南山。

【題義】酒を把つて飲む間の感慨を述べたのである。

【詩意】擾擾として忙しげに立ち廻り、今の世に名を馳せて居る手合は、一日の間をだに得ることは出来ない。われ、今、ここに來りて、同遊の人だになく、酒を把つて終南山の景色に對し、心のどかに杯を傾けて居るので、これは、名を馳せるもの、夢にだも視る能はざるところである。

【餘論】朱竹垞は「後兩句、正に是れ閑」といひ、何義門は「他人未だ嘗て閑ならずんばあらず、公の意中、自ら對なきのみ」といつて居る。

嘲少年

少年を嘲る

直把春債酒、都將命乞花。直に春を把つて酒を飲み、すべて命を將て花を乞ふ。

祇知閒信馬、不覺誤隨車。祇だ知る閒に馬に信すを、覺えず誤つて車に隨ふを。

【字解】(一) 乞花、唐注に「廣韻、乞は人に物を與ふるなり。漢書に、暴卒に餅を乞ふ、公の嘲三國語の詩に云ふ、乞食賣漿、亦たこの乞の字と同じ」とある。

【題義】少年は、游侠の輩で、この詩は、その豪氣を負ふを嘲つたのである。

【詩意】郭外の春景色を我が物顔に占斷し、それを以て酒を償うて痛飲し、又命せられる儘に、どしどし花を折つて人に與へる。かうなると、人の物は我が物、尤で見さかひもない。やがて、閒に馬に信かせて歸つて往つたが、いつしか、誤つて大官貴客の車に隨つて、意よ得意らしく見える。

【餘論】顧嗣立の評に「少年の情を曲盡す、大に腴味あり」といつて居る。

楸樹

楸樹

青幢紫蓋立童童、青幢紫蓋、立つて童童、

細雨浮煙作綵籠、細雨浮煙、綵籠を作す。

不得畫師來貌取、畫師の來つて貌取するを得ずんば、

定知難見一生中、定めて知る、一生の中に見難きを。

【字解】(一) 青幢紫蓋、幢は旗、蓋は天蓋。楸葉が繁茂して青紫色を爲し、幢の如く、蓋の如く見ゆるを言つたのであらう。(二) 童童、童の貌、蜀志に「劉備の令の東南角に桑樹あり、童童として小童の如し」とある。(三) 綵籠、彩色せる籠。(四) 貌取、似せて寫し取る、杜市の詩に貌を得山僧與童子」といひ、畫工如工、不問とある、其貌の字に同じ。

【題義】楸樹は、前にも二首あつたが、矢張、その木を指したのが、おもふに、城南は、邊僻の處で

あるから、古木も多く、これは、唯だ楸樹を詠じたので、前と同じか如何かは、深く究めるに及ばぬことと思ふ。

【詩意】楸樹の枝葉、密に繁茂し、青幢の如く、紫蓋の如く、童童として高く立ち、雨のそぼふる時、煙が立ちこめて彩りたる籠の様である。この楸樹は、たしかに、畫中の物であつて、一寸他に類が無  
いから、もし畫師が來て之を巧に寫し取らなければ、誰にしても、一生の中、見ることが出來ずして終るであらう。

【餘論】楸樹の他に比類なく、且つ畫に入るに堪へたる趣を述べたのである。

遺興

興を遣る

斷送一生惟有酒。一生を斷送するは惟だ酒あり、

尋思百計不如閒。百計を尋思するに閒に如かず。

莫憂世事兼身事。憂ふる莫れ、世事と身事とを、

須著人間比夢間。須らく人間をして夢間に比せしむべし。

【題義】遺興を遣る爲に之を作つたのである。

【字解】【一】斷送、送り盡す。

【二】衆、衆と同じに用ふ。

【三】著、使と同じに用ふ。

【詩意】この一生を送り盡すは、唯だ酒のみで、醉中に生涯を済ますのは、さして厭ふべきことではない。百計を尋思するに、その目的とするところは、さまざま有らうが、自分は、唯だ閒を得れば、それで善いとして居る。世上の事と身邊の事と、自分の關係して居ることは、色々あるが、この世は、畢竟、夢中と同じであつて、その爲に、心力を勞するのは、まことに愚の極である。

【餘論】閱世の語、自ら曠達の趣があるが、今日こんな事を言へば、無論、陳套を免れない。願圖立の評に、「これ閱世の語、理、未だ然らずと雖も、道ひ來つて意快、遂に口實と爲る」といつて居る。

韓昌黎集卷十

律詩

送李尙書赴襄陽八韻

李尙書の襄陽に赴くを送る、八韻

帝憂南國切（一）改命付忠良（二）

帝、南國を憂ふること切、命を改めて忠良に付す。

壞畫星搖動（三）旗分獸簸揚（四）

壞は畫して、星、搖動し、旗は分つて、獸、簸揚す。

五營兵轉肅（五）千里地還方（六）

五營、兵轉に肅、千里、地還た方。

控帶荆門遠（七）飄浮漢水長（八）

控帶して荆門遠く、飄浮して漢水長し。

賜書寬屬郡（九）戰馬隔鄰疆（十）

賜書、屬郡を寬にし、戰馬、鄰疆を隔つ。

縱獵雷霆迅（十一）觀碁玉石忙（十二）

獵を縱にして、雷霆迅く、碁を觀て玉石忙し。

風流峴首客（十三）花豔大堤倡（十四）

風流峴首の客、花豔大堤の倡。

富貴由身致（十五）誰教不自強（十六）

富貴、身の致すに由る、誰か自ら強めざらしめむ。

律詩 送李尙書赴襄陽八韻

【字解】(一) 南園 蘇唐書に「これより先、山南東道節度使兼統、吳元濟を討つ、功なし、驅めて太子少保となる、乃ち邇を以て節度となす」とある。(二) 改命 改めて救命を下す。(三) 鹽池 その地の塩池を割す。(四) 風搖動 杜市の詩に三峽星河影翻搖とある。(五) 五營 禁掖をいふ、後漢書張奐傳に「五營の士を率ゐて寶武を圍む」とある。(六) 千里地運方 その地は方千里なりといふ。(七) 控帶 控へ帶ぶ、荆門は山名。その地は、遠く荆門を控へて、つまり其處にまで及んで居る。盛弘之の荆州記に「鄂西奔ること六十里、南岸に山あり、荆門といふ」とあり、水經注に「荆山は南に在り、上合して下開き、狀、門に似たり」とある。(八) 漢水 左傳僖公四年に「楚國は、漢水以て池と爲す」とあつて、杜預注に「漢水は、武都に出で、江夏に至り、南、江に入る」とある。又書注に「漢江は、漢西の礪家山に出で、均州の光化を経て、襄陽城北に至る」とある。(九) 峴首 峴首、香香羊駝傳に「峴、山水を架み、風景」とに、必ず峴山に造り、酒を置いて言談す。顧みて、都漢に謂つて曰く、宇宙あつてより、便ち此山あり、由來實地の勝士、ここに登つて遠望する、我と卿との加きもの多し。竹海瀟して聞こゆるなく、人をして、悲傷せしむ」とある。(一〇) 大堤 古今類編に「襄陽城は、宋の南王隠の作るところなり。隠、襄陽都となり、夜、諸女の歌謡を聞き、因つて之を作る、その曲に云ふ、初發襄陽城、暮至大堤宿、大堤諸女兒、花鬘三郎日」とある。大堤は地名で、襄陽に在る。

【題義】韓愈の自注に「長字を得たり、李逵なり」とある。すると、李尚書は名を逵といひ、送別の席上、韻を分かち、韓愈は長の字を得たとのことである。襄陽は、秦漢の際、南郡に屬し、唐には襄州といひ、後には府となつて、湖廣に屬した。舊唐書憲宗紀に「元和十年十月、はじめて、山南東道を析して兩節度使となし、戸部侍郎李逵を以て襄州刺史となし、襄復部均房節度使に充て、右羽林將軍高霞寓を以て唐州刺史となし、唐兩節度使に充つ」とある。蔣注には「逵の襄陽に赴くや、廷臣送るもの三十餘人、韻を分かちて詩を賦し、太常卿許孟容、これが序を作る」とある。それから、舊唐書の

本傳には「逵、字は友道、進士の第に登り、戸部侍郎に累遷し、元和十年、襄州刺史に拜せられ、山南東道節度觀察等使となる」とある。そこで、蔣之翹は説をなして「按ずるに、襄州石本に名銜を題して云ふ、檢校工部尚書李逵と。時に、逵、蓋し尚書よりして出で、史、これを略す」とある。

【詩意】天子は南國の重要なことを思はれ、然るべき人を長官に任命せむとて、頻りに憂慮せられ、改めて忠良を以て聞こえて居る李逵その人に救命を下された。そこで、李逵は、愈よ赴任することになり、地域は嚴に區畫されて、その分野に應ずる天上の星は搖動し、旗は翻つて、その上に畫いてある猛獸が簸揚する様に見える。護衛の爲に引き具して行く五營の兵士は、靜肅であるし、その管轄するところの地は、方千里の廣きに及んで居る。遠くは、荆門の險を控へ、漢水は、長流千里、飄浮して西北から來り、天然の要害は、まことに堅固である。李公一たび此に臨むの後、告諭して屬郡を寛大に取扱ひ、そして、郷疆には戰馬が簇つて居るが、その治下は、極めて清平である。そこで、閒に乗じて狩獵を爲さば、雷霆の迅かなるが如く、棋を觀ては、交互に亂れ合ふ玉石の忙はしきを眺めて居られる。李公の風流は、峴首に碑を留めたる古しへの羊祜の如く、むかしの儘なる大隄の倡婦は、花鬘を競うて、塵興を添へるに十分である。出世して富貴になるといふのは、その一身の致すことであつて、それにつけても、自ら勉強せぬ譯には行かぬことである。

【餘論】朱竹垞が「只だ是れ尋常應酬の詩」といつた通り、一應無難には出來て居るが、格別新しい律詩、送李尚書赴襄陽八韻



處もなく、その存否、もとより相關せざる底のものである。

和席八十二韻

席八に和す、十二韻

絳闕銀河曙、東風右掖春。

絳闕、銀河の曙、東風、右掖の春。

官隨名共美、花與思俱新。

官は名に隨つて共に美に、花と思と俱に新なり。

綺陌朝遊間、綾衾夜直頻。

綺陌、朝遊間し、綾衾、夜直頻りなり。

橫門開日月、高閣切星辰。

橫門、日月を開き、高閣、星辰を切る。

庭變寒前草、天銷霽後塵。

庭は變ず寒前の草、天は銷す霽後の塵。

溝聲通苑急、柳色壓城勻。

溝聲、苑に通じて急、柳色、城を壓して勻し。

綸綵謀猷盛、丹青步武親。

綸綵、謀猷盛に、丹青、步武親し。

芳菲含斧藻、光景暢形神。

芳菲、斧藻を含み、光景、形神を暢ぶ。

傍砌看紅藥、巡池詠白蘋。

砌に傍うて紅藥を看、池を巡つて白蘋を詠す。

多情懷酒伴、餘事作詩人。

多情、酒伴を懷ひ、餘事、詩人と作る。

倚玉難藏拙、吹竽久混真。

玉に倚つて拙を藏し難く、竽を吹いて久しく真を混す。

坐慙空自老、江海未還身。

坐に慙づ空しく自ら老ゆることを、江海未だ還らざるの身。

【字解】(一) 綸、綵は赤、紫の色であらう。闕は門。(二) 銀河、文選附注の時に秋河曙歌取とある。(三) 右掖、廊下の漢官儀に「中書を右曹となし、又西掖と稱す」とあり、洛陽故宮館に「洛陽宮に東掖門、西掖門あり」といひ、漢書の注に「掖門は兩旁に在り、人の臂掖の如し」とある。(四) 絳、漢官典職儀に「尚書郎、入つて直するときは、青絳、白絳の被を給す」とある。(五) 綺、切星辰、切は接觸する。(六) 綾、禮記に「王宮綸の如く、その出づること絳の如し」とある。絳は大紫。(七) 步武、唐書注に「謀、一に謀に作る、これを周書に考ふるに、謀に作るを是と爲す。但し、漢の古字、垂に作る、李塔の列談に曰く、垂と嘉謀に作る、今、嘉謀に作る、猶ほ沈浮の二音通するがごときなり」とある。(八) 銷、揚子法言に「吾、未だ其德を斧藻にすること、その菜を斧藻するが若きものを見ず」とある、斧は鑿に同じ、禮服に紫く模倣。(九) 光景、謝朓の直中書省の詩に、紅藥當階翻、蒼苔依砌上とある。紅藥は、即ち芍藥。(一〇) 丹青、謝朓が吳興の太守たりしとき、江南曲を作り、その起首に、汀洲采白蘋、日落江南春とある。白居易の白蘋洲五亭記に「湖州城の東南二百步、晉溪に抵る、汀洲に連る、一名白蘋、梁の吳興の守柳惲、ここに于て詩を賦して云ふ、汀洲採白蘋」と、因つて以て名と爲すなり」とある。(一一) 世説に「魏の明帝、后弟毛曾をして夏侯玄と共に坐せしむ、時人、藥菹、玉樹に倚るといふ」とある。(一二) 吹竽、韓非子に「齊の宣王、竽を好み、竽を吹くもの三百人、皆竽を食む。南郭先生、竽を知らず、置りに竽を三百人中に食む。宣王薨す、後王、これを吹かしめむと欲す、南郭、乃ち遁る」とある。【題義】原注に「席、蔣注に「席八、或以爲へらく、席謙と。是に非ず、當に是れ席八なるべし、諱行錄を按ずるに、席八は行人、貞元十年の進士」とあるのは、この原注を見ずして言つた様である。なほ、白居易の詩に、去夏微之席、今春席八祖とあつて、大方その人だらうといふこと

である。

【詩意】天上の銀河、曙色を帯びたる頃に、終闕に朝し、東風の暖かなる朝、中書省に出仕する。官は其名に随つて共に美しく、花は思と共に新に、席八その人、今は得意の境涯に在る。美しき都大路に遊行することも時たまあるし、綾衾をかついで、夜、當直することも頻繁である。その出仕する役所の有様を云へば、横門は日月を迎へ入れ、高閣は星辰に觸れむとし、寒の來る前に庭草は色を變じ、雨霽れし後、天は塵を消して、いと清らかである。溝を流るる遺り水は、御苑の方流れ、柳が芽ぐめば、城壁を壓せむばかり。君の職務として、詔勅を草し、聖明の謀猷、いつもながら、盛であるし、さながら、丹青を以て繪き出した様な風姿は、歩に随つて親しげに見える。朝衣には、黼藻の模様、匂ふばかりにして、宮中の光景は、心身を暢べしめる。砌に傍うて、芍藥の咲き出でたるを見、池を巡つて白蘋の漾へるを眺め、毎毎詩を詠じ、その佳作は、世に傳はつて居る。その上、君は、客を好み、多情にして酒伴を懐ひ、公務の餘事、詩人と稱して居る。これに反して、予は兼葭の質を以て、安りに玉に倚るも、生來の拙を藏し難く、全く能も無いのに、古しへの南郭の如く、篁を吹く仲間交つて、その眞を亂して居る。加之、次第に年が寄つても、なほ俸祿を戀ひ、未だ江海に歸らざるは、まことに慙づべきの至であるが、唯だ君の御引立を待つばかりである。

【餘論】朱竹垞は「起二韻、大意を拈し、次の四韻、景を敘し、又四韻、席を贊し、末の二韻、和を遣ふ、意格最も平穩」といつて居る。何義門は「紅藥の句、席を指し、白蘋の句、自ら謂ふ、是れ上を承けて下を起す」といつて居るが、これは、二句ともに席を贊したものと見なければ、主意が透徹せぬ様に考へられる。

和武相公早春聞鶯

武相公の早春鶯を聞くに和す

早晚飛來入錦城。早晚飛び來つて錦城に入る、

誰人教解百般鳴。誰人が百般の鳴を解せしめむ。

春風紅樹驚眠處。春風紅樹、眠を驚かす處、

似妬歌童作豔聲。歌童が豔聲を作すを妬むに似たり。

とある。すると、成都に在つたのであるが、後には成都の別稱として居る。【一】紅樹、普通に歌もみぢした木を指すが、ここでは、春、花さいた木を稱したのである。

【題義】武相公は即ち武元衡。元衡は、元和八年三月を以て、西川節度使より相に拜せられた。この篇と前に見えた孔雀の詩とは、元衡が相に拜せられた後、その鎮蜀中の作に追和したのである。

【詩意】鶯は、何時飛び來つて、この錦城に入つたのであるか、しかし、まだ雛鶯であつて、喉

を弄することに巧ならず、さまざまの鳴聲を爲すことは、出来ぬ様である。やがて、春風吹き滿ちて、紅樹花匂ふ春が盛りになると、曉早く人の眼を驚かし、その聲の宛轉たる、さながら、歌童の艶聲を作すを妬む様であらう。

【餘論】一應無難には出来て居て、後半多少の趣があるが、もとより、大したものではない。

### 太安池 闕

【題義】蔣注に「唐の長安、太安宮太安亭あり、而して、太安池は、未だ嘗て載見せず、豈に安樂公主鑿つところの定見池か。景龍中、主、昆明池を請ふ。中宗、與へず。主、怒つて、自ら定見池を穿つ、延袤數里」とあるが、これは、全然誤つて居るので、何善門の説に「太安池は、是れ郭曖の家、羊士諤、詩あり、注、誤れり」とある方が正しい。その羊士諤の詩といふのは、遊郭驛馬太安山池と題して、

馬嘶芳草自淹留。別館何人屬細侯。仙杏破顏逢醉客。綵鸞飛去避行舟。洞簫日暖移賓榻。垂柳風多掩妓樓。坐閱清暉不知暮。煙橫北渚水悠悠。

といふのである。もしかすると、韓愈の此作も、同時であつたらうかと思はれるが、題のみ存して、肝腎の詩が傳はらず、今から考覈することは出来ない。

### 遊太平公主山莊

太平公主の山莊に遊ぶ

公主當年欲占春。公主、當年、春を占めむと欲す、

故將臺榭押城闌。故らに、臺榭を將て城闌を押す。

欲知前面花多少。前面、花の多少を知らむと欲せば、

直到南山不屬人。直に南山に到るまで人に屬せず。

【字解】(一)臺榭。榭は臺の榭

あるもの。

(二)押城闌。城壁を壓へつける。

(三)南山。終南山。

【題義】唐書に「太平公主は、則天武后の生むところ、はじめ薛紹に尙し、更に武攸暨に嫁す。先天二年、主、常元楷・李慈・浮屠慧範と太子を廢せむことを謀り、事敗る。主、亡げて南山に入り、三日乃ち出づ、死を第に賜ふ。主、觀池を樂遊原に作り、以て盛集を爲す。すでに敗るるや、寧申岐薛の四王に賜ひ、都人、歳ごとに其地に祀禊す」とある。この詩は、樂遊原なる太平公主山莊の跡を過ぎて作つたのである。

【詩意】世に在りし時、太平公主は、その權勢に誇つて、天下の春を獨占せむとし、わざと臺榭を幾つも造つて、長安の城壁をも壓迫せむばかり。その山莊の前面の花がどれほどかを知らうとすれば、

見わたす限り、終南山の麓に至るまで、人に屬せず、すべて公主の宅地であるといふことを思へば善いので、もとより測り知られるものではない。

【餘論】朱竹垞は「頤、刺を含む」といひ、何義門は「末句、占の字に透る」といつて居る。

晩春

晩春

誰收春色將歸去。誰か春色を收めて將に歸り去らむとす、

慢綠妖紅半不存。慢綠妖紅、半は存せず。

榆莢祇能隨柳絮。榆莢、祇だ能く柳絮に隨ひ、

等閒櫟亂走空園。等閒に櫟亂して空園を走る。

【字解】【一】慢、草木の初め

て芽ぐみしを云ふ。

【二】妖紅、花の色を指す。

【三】榆莢、數ば前に見ゆ。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】誰か賑はしき春色を收めて歸り去らうとするか、草木のなよやかなる緑、うるはしき紅、ともに半は既に存せず、皆無くなつて仕舞つた。ここに榆莢のみは、地に落ちて柳絮に隨ひ、等閒に撥亂しつづ、がさがたと音を立てて空園の中を走つて行く。

【餘論】蔣之翘の評に「走の字、榆莢に屬す、亦た奇」とある。つまり、榆莢を擬人化して、走の字を使つたのが面白いといふのであらう。

大行皇太后挽歌詞三首

一紀尊名正三時孝養榮。一紀、尊名正しく、三時、孝養榮ゆ。

高居朝聖主。厚德載羣生。高居、聖主を朝せしめ、厚德、羣生を載す。

武帳虛中禁。玄堂掩太平。武帳、中禁、虛しく、玄堂、太平に掩ふ。

秋天笳鼓歇。松柏徧山鳴。秋天、笳鼓歇み、松柏、山に徧ねく鳴る。

【字解】【一】一紀、十二年、后は永貞元年を以て尊ばれて皇太后となり、元和十一年に崩じ、十一年になるから、大數を取つて一紀と云つたのである。【二】三時、禮記に「文王の世子たるや、玉季に朝すること日に三たび」とある。【三】武帳、漢書霍光傳に「太后、珠襦盛服を被りて、武帳中に坐す」とある。【四】中禁、禁中と同じ。【五】玄堂、文選附勝の齊敬皇后哀册文に「翠帟舒阜、玄堂啓闕」とあつて、即ち棺を入れる玄堂を云ふ。

【題義】風俗通に「天子、新に崩じて、未だ諡號あらず、故に其名を總べて大行皇帝といふなり」とあつて、章昭は「大行とは、反らざるの辭」とある。されば、大行の字は、天子のみならず、皇后、皇太后にも通用することが出来ると思える。舊唐書に「順宗の莊憲皇后、王氏は瑯琊の人、大歷十三年、

憲宗皇帝を生む。永貞内禪、冊せられて太上皇后となり、元和元年、尊ばれて皇太后となり、元和十一年三月、南内の威事殿に崩す、諡して莊獻皇后といふ」とある。これは、當代の皇太后、即ち先帝順宗の皇后、王氏の崩御を悼んで作つたのである。

【詩意】皇太后は、その尊名を正されること十二年の久しきに及び、その間、今の天子は、特に孝養を盡されて、一日に三度宛も起居を候せられた。かくて高居には聖主を朝せしめ、坤柔の厚德は、羣生を載せて餘ある位。しかるに、一朝崩御になつた故に、禁中に於ては武帳に坐する人もなく、この太平の世に際して、玄室を掩ひ、御喪儀を行ふのは、まことに悲しいことである。笳鼓の聲の秋天に響いたのが、寂然として收まり、愈々埋葬も済むと、満山の松柏が颯として哀鳴するのみで、覺えず、臣子輩をして傷心せしめる。

【餘論】朱竹垞は「典雅、風致あり」といひ、又「經を按じ、禮に據り、その大なるものを擧げて頌と爲す、最も體を得たり」といつて居る。

威儀備吉凶、文物雜軍容、配地行新祭、因山託故封。

威儀、吉凶を備へ、文物、軍容を雜ふ。地に配して新祭を行ひ、山に因つて故封に託す。

鳳飛終不返、劍化會相從、無復臨長樂、空聞報曉鐘。

鳳は飛んで終に返らず、劍は化して會す相從ふ。復た長樂に臨むなし、空しく聞く曉を報ずるの鐘。

【字解】(一)威儀、禮儀の名稱をいふ。(二)文物、禮服の故等々をいふ。(三)配地、後漢書光武紀に「中元元年、高廟に告廟して曰く、薄太后、母嫡皇后、孝文皇帝、賢明國に臨み、子孫福に頼り、延解今に至る、其れ薄太后に尊號を上つて高皇后といひ、地祇に配食せむ」とある。(四)因山託故封、漢書文帝紀に「後七年夏六月己亥、帝崩す、遺詔して曰く、霸陵の山川、その故に因つて改むるところあるなし」とあり、文帝皇后崩す、霸陵に合葬す」とある。はじめ、文帝を霸陵に葬るとき、山に因るのみで、墳を起さず、皇后をも其處に合葬したから、故封といつたのである。故封の封は、土を盛り上げた處。(五)鳳飛、秦の穆公の女弄玉、蕭を吹き、鳳凰に隨つて飛び去りしこと、前に數ば見えて居た。(六)劍化會相從、これは、張華の劍が、延平津に於て龍に化せしこと。晉書の張華傳に「雷煥、鄆城の雙劍を得、一を遺つて華に與へ、一を留めて自ら佩ぶ、曰く、靈異の物、終に當に化し去るべしと。華、劍を得、これを賣受して曰く、天、神物を生ず、終に當に合すべきのみと。華、誅せられて、劍の所在を失ふ。煥卒す、子華、劍を持し、行いて延平津を經たり。劍、忽ち腰間に於て躍り出で、水に墮つ、人をして、水に没して之を求めしむ。但だ見る、兩龍各、長き數丈、矯強して文章あるを。沒者懼れて反り、ここに于て劍を失ふ」とある。唐書に「王介甫曰く、これ雷臣の宜しく言ふべきところにあらず、龍に近ければなりと。然れども、劍、これを唐史に考ふるに、莊嚴は順宗に後れて崩す、公故に爾か云ふ、何れか龍に有らむ」といつて居る。(七)長樂、漢書叔孫通傳に「惠帝、爲に、東、長樂宮に朝す」とあり、顏師古の注に「太后に長樂宮に朝す」とある。すると、長樂は漢代皇太后の居た宮名である。(八)報曉鐘、三輔黃圖に「鐘室は、長樂の中に在り」と記し、長樂宮中に於て、時の鐘を鳴らしたのである。

【詩意】鹵簿の莊嚴、吉凶兩つながら異ならず、殊に喪儀に際しては、禮服の模様など、軍隊の者を混

用して、一しは森肅に見える。太后は、功德高かりしが故に、地祇に配食して、新に祭儀を行ひ、又山に因れる儘なる先帝の山陵に合葬された。太后が今次崩御されたのは、かの弄玉が鳳に跨り、その鳳が飛んで後、返り去らざりしが如く、又張華の得た寶劍が兩つながら相合し、一龍に化した様に、天上に行かれては、先帝の靈と必ず相會することであらう。しかし、今後は、長樂宮中に在ます人なれば、唯だ曉を報ずる鐘が聞こえるだけで、再び天子の臨御されることも無い様に成らう。

【餘論】朱竹垞は「摘字工なり」といひ、又「調和、態あり、正に是れ詩人の風韻」と云つて居る。

追攀萬國來、警衛百神陪。

追攀、萬國來り。警衛、百神陪す。

畫翬登秋殿、容衣入夜臺。

畫翬、秋殿に登り、容衣、夜臺に入る。

雲隨仙馭遠、風助聖情哀。

雲は仙馭に隨つて遠く、風は聖情を助けて哀し。

只有朝陵日、妝奩一暫開。

ただ陵に朝するの日あり、妝奩一たび暫く開く。

【字解】(一)追攀、その遺徳を慕ふ。(二)畫翬、葬儀の時に用ふる羽扇也、禮記の喪大記に「畫翬二」とあり、鄭玄の注に「喪禮、畫は木を以て做となし、廣さ三尺、高さ二尺四寸、方にして兩角高く、衣するに白布を以てす」とある。(三)容衣、棺にかける衣、禮記の喪大記に「棺を飾る、君は龍帷三池扱容」といひ、鄭玄の注に「青質五色、これを絞緇に畫いて之を垂れ、以て扱容

と爲す」とある。容衣は即ち此を謂ふ。(四)夜臺、阮瑀の時に、冥冥九泉室、漫漫長夜臺とある、夜臺は墓。(五)仙馭、仙人の行列。(六)只有朝陵日、後漢書陰皇后紀に「明帝、平陵に崩し、席前より御牀に伏し、太后鏡奩中の物を見て感動悲涕す」とあつて、その注に「奩は籠匣なり」とある。

【詩意】太后の遺徳を慕ひ、お悔みを述べる爲に、萬國の使臣が來朝し、御葬儀の際には、天神地祇どもが、警衛として陪從した。急よ埋葬が濟むと、葬列に供へた畫翬は、拜殿の上に飾られて、秋に淋しく、棺にかけた容衣は、御遺骸と一緒に御墓の中に埋められて仕舞つた。御魂は、天上に向はれるので、雲は仙人の行列に隨つて遠く棚引き、風は冷いやりとして、嗣皇の御心の悲哀を増すばかりである。天子が新陵に御參詣の際、御遺物たる妝奩の類を暫時開いて見られたならば、又一しきり感動して、悲泣されるであらう。

【餘論】三首、ともに、巧に典故を以て充填し、莊重典雅の趣を失はず、しかも、その中、一片の真情が籠つて居る。勿論、いくら形式的の處はあるが、この種の題に於ては、先づ佳作と稱すべきものであらう。

廣宣上人頻見過 廣宣上人、頻りに過ぎらる

三百六旬長擾擾、三百六旬、長しへに擾擾たり、

【字解】(一)三百六旬、三百と

律詩 廣宣上人頻見過

不衝風雨即塵埃 風雨を衝かざれば、即ち塵埃。

久慙朝士無裨補 久しく慙づ、朝士の裨補なきを、

空愧高僧數往來 空しく愧づ、高僧の數ば往來するを。

學道窮年何所得 道を學んで年を窮め、何の得るところ、

吟詩竟日未能廻 詩を吟じ日を竟へて未だ廻る能はず。

天寒古寺遊人少 天寒くして古寺遊人少し、

紅葉廳前有幾堆 紅葉廳前、幾堆かある。

六十日、即ち一個年の日數、書經に  
春三百有六旬とある。しかし、三十  
六旬といふのと同じで、まされ易い。  
【一】 慙 ことごとくして忙しい。  
【二】 裨補 時政を助け補ふ。  
【三】 窮年 年中息らずに居る。  
【四】 幾堆 堆を爲して居るのが幾個處ある  
か、堆は即ち堆。

【題義】 蔣注に「廣宣は蜀僧、元和中、長安の安國寺に在り、寺に紅樓あり、宣、詩名あり、紅樓集と號す」とある。その廣宣が頃々頻繁に來訪せしに因り、この詩を賦して示したのである。

【詩意】 一年三百六十日の間、いつでも、ことごとく忙して忙しい。然るに、廣宣上人は、風雨を衝かざれば塵埃を衝き、頻頻として、弊屋を尋ねられる。われは朝臣として官職を辱うしつづ、格別時政を裨補するところなきは、久しく慙づるところで、又高僧が數ば往來して、われを以て一塵の人物と思はれて居るのも、まことに、恐れ入る次第である。われは、儒家の道を學び、年中息らず勉強はして

居るが、格別得るところもなく、上人は、我が宅を音づれ、終日詩を吟じて、なかなか歸られない。上人の居られる寺も、この頃の寒さに成つては、參詣者も少く、窓前の紅葉も、幾個處に堆を爲して殘つて居るが、いづれ、荒涼の岑寂に堪へぬ處から、特に來訪せられることと思はれる。

【餘論】 何義門は「窮年擾擾、竟に未だ功を立て事を立てず、稍や閒暇を偷んで、又これを費す、一談一詠、能く、葉、長年に落つるの悲を増さざるか。この詩は、即ち公の謂はゆる、聰明は日に前時より減じ、道徳は初心に負くあるもの、結句、妙に廣宣を借りて點出し、更に説き盡さずといひ、「宣、すでに僧たり、亦た本分當行の事あり、奈何ぞ末藝を持し、朝士と微逐し、春秋の迅速を懼れざるか、言外亦た以て之を警覺するなり」と云つて居る。

閒遊二首

閒遊 二首

雨後來更好 繞池徧青青

雨後來る更に好し、池を繞つて徧く青青。

柳花閒度竹 菱葉故穿萍

柳花閒に竹を度り、菱葉故らに萍を穿つ。

獨坐殊未厭 孤斟詎能醒

獨坐殊に未だ厭かず、孤斟詎ぞ能く醒めむ。

持竿至日暮 幽詠欲誰聽

竿を持して日暮に至る、幽詠、誰の聽くを欲する。

【字解】「一」福膏膏、これは春草を云つたのであらう。「二」故、方崧卿の說に「少陵の詩、曹魏故起曹、江上燕子故來頻、皆この字を用ふ」とある。「三」孤斟、ひとり酒を酌む。「四」四味、小聲に詩を朗吟する。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】雨あがりの水邊に來ると、又格別の景色で、池を繞つて、春草が徧く青青として居る。柳花は、頻りに飛んで、靜に竹の間を度り、菱の葉は、わざと萍を分けて開いて居る。ひとり此に坐すること久しくして、未だ厭かず、相手なしに酒を酌み、覺えずよと參つて、なかなか醒めもしない。竿を持つて此に釣を垂れた儘、日暮に成り、小聲に詩を朗吟するが、誰に聞いて貰ふ積りでもなく、唯だ心遣りにするのみである。

【餘論】朱竹垞は「風致最も勝る」といひ「突然として起つて奇、青青は定めて是れ草、點出せざるは、更に妙、柳、竹を度り、菱、萍を穿つ、新なり」といつて居る。

茲遊苦不數、再到途經句、  
茲遊數ばならざるに苦む、再び到れば、遂に句を経たり。

萍蓋汗池淨、藤籠老樹新、  
萍は汗池を蓋うて淨く、藤は老樹を籠めて新なり。

林鳥鳴訝客、岸竹長遮鄰、  
林鳥、鳴いて客を訝り、岸竹、長く鄰を遮る。

子雲祇自守、奚事九衢塵、  
子雲、祇だ自ら守る、奚ぞ九衢の塵を事とせむ。

【字解】「一」汗池、きたない池。「二」子雲、漢書揚雄傳に「安帝の時、丁傅、重寶、事を用ふ。雄、方に太玄を草し、以て自ら守ることあつて泊如たり」とある。「三」九衢、爾雅に「四通を衢といふ」とある。

【詩意】ここに遊ぶことの頻繁ならざるは、まことに遺憾で、再び來たが、その間、十日を隔てて居る。その間に、萍は生長して、泥深い穢い沼を蓋うて、水も淨く見え、藤は老樹を籠めて、枝葉ともに新である。林の鳥は、見馴れぬ人を訝るが如く、しきりに鳴き、岸の竹は、伸びて鄰家の通路を遮つて居る。われは、古しへの揚子雲の如く、自ら守ること泊如、都大路の塵に奔走するを屑しとせず、かういふ閒游は、殊に大好であるが、さて其時の得難いのは、どうにも仕方がない。

【餘論】朱竹垞は「中四句は、俱に是れ再到の意、語、亦た工なり」といひ、いかにも肯綮に中つて居る。子雲、すでに九衢の塵を事とせず、しかも、茲遊數ばならざるに苦むは、日夕力學して居るからで、作者の面目は、個中に躍如として居る。

酬馬侍郎寄酒

馬侍郎の酒を寄するに酬ゆ

一壺情所寄、四句意能多、  
一壺、情寄するところ、四句、意能く多し。



秋到無詩酒其如月色何

秋到つて、詩酒なくむば、其れ月色を如何。

【題義】馬侍郎は、自注に馬總とあつて、舊唐書の本傳に「馬總、字は會元、扶風の人、元和八年、桂州刺史、桂管、經略、觀察使より入つて、刑部侍郎となる。裴度、淮西に宣慰たる時、奏して制置副使となす。吳元濟、誅せらる、度、留めて蔡州を總べ、彰義軍留後に知たらしむ。尋いで、檢校工部尚書、蔡州刺史となり、淮西節度使に充てらる」とある。すると、馬總は、この時、刑部侍郎であつたので、元和八年より十年に至るまでの間、長安に居たのである。その間、ある年の秋、馬總は酒を韓愈に贈り、そして、四句の詩を添へたから、韓愈は、これに酬いて、この詩を作つたので、和作が五絶であるから、原作も矢張五絶であつたらうと思はれる。

【詩意】一壺の酒は、君の御厚情の寄するところ、それに添へられた四句の詩も、意味が多く、御志の程、有り難く拜受いたします。今しも、秋になつたのに、詩酒なければ、折角の明月も、何等の興を添へず、まことに詰まらなく、打過ぐべきに、君が詩酒を寄せられたので、大に逸興に感じた次第であります。

【餘論】尋常應酬の語ではあるが、後半二句は、さすがに餘情がある。

和侯協律詠笋

侯協律の笋を詠するに和す

竹亭人不到。新笋滿前軒。  
乍出眞堪賞。初多未覺煩。  
成行齊婢僕。環立比兒孫。  
驗長常攜尺。愁乾屢側盆。  
對吟忘膳飲。偶坐變朝昏。  
滯雨膏腴溼。驕陽氣候溫。  
得時方張王。挾勢欲騰騫。  
見角牛羊沒。看皮虎豹存。  
攢生猶有隙。散布忽無垠。  
詎可持籌算。誰能以理言。  
縱橫公占地。羅列暗連根。  
狂劇時穿壁。羣強幾觸藩。

律詩 和侯協律詠笋

竹亭人不到、新笋、前軒に滿つ。「煩はしきを覺えず。乍ち出でて眞に賞するに堪へたり、初めて多くして未だ」行を成して婢僕に齊しく、環立して兒孫に比す。長するを驗して常に尺を攜へ、乾くを愁ひて屢ば盆を側つ。對吟して膳飲を忘れ、偶坐して朝昏を變す。滯雨、膏腴溼ひ、驕陽、氣候温なり。時を得て方に張王し、勢を挾んで騰騫せむと欲す。角を見はして牛羊沒し、皮を看れば虎豹存す。攢生して猶ほ隙あり、散布して忽ち垠なし。詎ぞ籌を持して算すべき、誰か能く理を以て言はむ。縱横、公に地を占め、羅列して暗に根を連ぬ。狂劇、時に壁を穿ち、羣強、幾たびか藩に觸る。

深潛如避逐。遠去若追奔。  
 始訝妨人路。還驚入藥園。  
 萌芽防寢大。覆載莫偏恩。  
 已復侵危砌。非徒出短垣。  
 身寧虞瓦礫。計擬掄蘭蓀。  
 且歎高無數。庸知上幾番。  
 短長終不校。先後竟誰論。  
 外恨苞藏密。中仍節目繁。  
 暫須迴步履。要取助盤飧。  
 穰穰疑翻地。森森競塞門。  
 戈矛頭戢戢。蛇虺首掀掀。  
 婦儒咨料揀。兒癡調盡髡。  
 侯生來慰我。詩句讀驚魂。

深く潜み逐ふを避くるが如く、遠く去り奔るを追ふが若し。  
 始は訝る、人の路を妨ぐるかと、還た驚く、藥園に入るかと。  
 萌芽、嬰や大ならむことを防ぎ、覆載、恩を偏する莫れ。  
 すでに復た危砌を侵す、徒に短垣に出づるに非ず。  
 身は寧ろ瓦礫を虞らむや、計は蘭蓀を掄はむと擬す。  
 且つ歎す、高くして數なきを、庸ぞ知らむ、上ること幾番。  
 短長終に校べず、先後竟に誰か論せむ。  
 外は苞藏の密なるを恨み、中は節目の繁きに仍る。  
 暫く須らく步履を廻すべし、取つて盤飧を助くるを要す。  
 穰穰、地を翻すかと疑ひ、森森、競うて門を塞ぐ。  
 戈矛、頭戢戢たり、蛇虺、首掀掀たり。〔せむことを開ふ。  
 婦儒にして、料り揀ばむことを否ひ、兒癡にして、盡く髡  
 侯生、來つて我を慰め、詩句、讀んで魂を驚かす。〕

屬和才將竭。呻吟至日噉。

屬和、才將に竭きむとす、呻吟して、日の噉するに至る。

【字解】(一) 屬和、その伸びるのを試す。(二) 竭、盆に在る水を漉ぎかける。(三) 呻吟、方遯卿の説に「莊子に謂はゆる王三長其間、是れなり、益に去聲に讀む、公と劉夢得との蘭蓀の詩、曾孫王の字を用ふ」とある。蘭は氣勢の顯ること、王は旺に通じて氣力の盛なること。(四) 呻吟、聲は數取り。(五) 蘭蓀、ともに芳草の名、蓀はあやめ。(六) 苞藏密、竹の皮で嚴密に包んである。(七) 節目、竹の節、體記に「その易きものを先にし、その節目を後にす」とある。(八) 盤飧、左傳に「盤飧、饗を寓く」とある。(九) 揀、揃つて出づる貌。(十) 敷、持ち上げる貌。(十一) 料揀、料は量る、頭流の列子序に「且つ料に世、希に有るところの者を料簡せむと欲す」とある。(十二) 日噉、日出でて明かなる貌、しかし、楚辭の九歌に日噉暉其西合とあるから、日の入ることも言へるのであらう。

【題義】侯協律は、原注に「侯喜」とあつて、その人は、前にも見えて居た。この詩は、侯喜が笥を詠じた詩を見せたから、それに和して作つたのである。蔣之翘の説に「舊注、この詩、公の意、専ら以て時相を譏る。得、時方張王より蛇虺首掀掀に至るまで、大抵、その勢を挾み、黨を植て、姦惡を包藏するの狀、かくの如きを言ふ。この時、表度、蔡を討たむと欲し、李逢吉、その黨令狐楚・蕭俛等を引いて之を阻み、公、亦た宰相の意に忤ふに坐して、中書舍人より右庶子に降さる。恐らくは、その説亦た極めて影響なりと。敢て遽に信せず。これを致ふるを俟つ」とある。何でも、詩は議論の意味を以て成り立つて居るといふのは、彼士の説詩家及び註釋家の惡癖であつて、この言は、大に題とすべきものである。ここでは、單に笥を詠じたものとして解釋することにす。

【詩意】名にしおふ竹亭には人至らず、鬼角する内に、新に筍が簇簇と出て、軒前に満ちた。筍の思ひがけず出たのは、真に愛賞すべく、初めは多くても、珍らしいから、さのみ煩はしいとも思はない。やがて、行列を成せば、婢僕に齊しく、竹の本根を環つて羣立する状は、さながら兒孫に比すべきである。その伸びるのを試す爲に、常に尺を攜へて、その丈を量り、又その邊の土の乾くのを氣にして、數ば水を盆に入れて灌ぎかける。その筍に對して吟詠すれば、飲食を忘れ、偶然來り坐せば、朝夕、その様子が違つて居る。雨久しきに互れば、膏腴の土も溼氣を帯び、驕陽に照らされると、氣候が温かで、晴雨につけて、愈よ生長して行くのである。筍は、今しも、時を得て、氣力が旺盛であつて、勢を挾んで天にも騰りさうである。その形は、角に似て居るが、牛羊の本體は、隠れて見えざれば、皮の模様は、虎豹そっくりである。集合して生じて、なほ隙地があるし、園中に散布しては、殆んど隙限もない位。どうして、數取りを以て之を算へやうか、又誰が其發生の理に就いて詳しく述べる事が出来やうか。かくて、公然として縦横に其地を占め、勝手に羅列して居ながら、地下に於て、ひそかに根を連ねて居る。まかり間違へば、土壁をば穿つて、あらゆる方に這ひ出るし、勢の強いのが羣がると、藩籬に觸れて之を打破ることさへある。その深く地中に潜めるは、遂はれるのを避くるが如く、本根から遠く隔つるは、奔るを追はれたやうである。はしめは、何故に人の通行する路を妨げるかと疑つたが、元來、物に頓著せぬからで、藪園の中にまで入り込んだのは、驚くべき程であ

る。筍は、もと竹の萌芽であるが、次第に大きくなると、邪魔になるから、注意して、これを防ぐべく、天地覆載の思も、決して偏頗な譯ではない。すでに頽れかかつた附砌に侵し入り、ひとり短垣から出る位なことではない。たとひ、瓦礫が路に當つたとしても、格別用心せず、はては、蘭蓀の如き芳草をも押し被せる程の勢である。だんだん伸びると、その高さの測られざるは驚くべく、上の方に幾段になるとも分らない。はては、短長を比較することも出来なくなるし、どちらが先に生えたか、どちらが後か、そんな事は論ずる必要なく、すべてが同じ位の丈に伸び揃つて仕舞ふ。表面には、竹の皮が嚴密に包んであるのが、邪魔になるが、中には、節が繁く揃つて居る。しばらく步履を廻して、なるべく踏まぬ様にし、その嫩いのを取つて飯の菜にすることが出来る。その勢よく出て來る時には、地を翻すかと疑はれ、やがて森森として、競うて門を塞ぐ様になる。たとへば、戈矛が頭を揃へて、すらりと列んで居るやうでもあるし、蛇などが羣がつて首を擡げたるが如くでもある。女どもは、臆病であつて、どれを揀んで取り除けるかといつて相談に來るし、小兒どもは、前後の考へもなく、盡く取り去つて、すべてを禿にしやうなどといふ。侯生が偶來つて、我を慰め、筍の詩を示されたが、その詩句の奇崛なる、一讀して、わが魂を驚かさばかり、そこで、和作を試みむとして、いろいろ考へたが、わが才、將に竭きむとし、呻吟して日暮に至り、ヤツと、こんな詰まらぬものが出来上つた。

【餘論】朱竹垞は「これは是れ時相門下の人を識る、細に味へば、自ら見はる。情狀を描寫して、儘ま深致あり、但だ稍や力を盡し、雪を詠するの馳騁自如たるに如かず」といひ、何義門は「諷刺、太だ露はるるに苦む、亦た自然ならず」といつて居る。諷諭の旨は、兎に角、單に菊を詠するものとして、随分細かに立ち廻はつて、略ぼ遺憾なきは、韓愈の得意の筆墨といふべく、措辭も比較的に平淺で、人事に入り易い。ただ結句四句は、全く挨拶で、聊か振はざるの感がある。

過鴻溝

鴻溝を過ぐ

龍疲虎困割川原。龍は疲れ、虎は困んで、川原を割く、

億萬蒼生性命存。億萬の蒼生、性命存す。

誰勸君王回馬首。誰か君王に勸めて、馬首を回し、

眞成一擲賭乾坤。眞成一擲乾坤を賭す。

【字解】(一)龍疲虎困。項羽と漢の高祖と久しく相戦ひ、ともに備み疲れしなれいふ。(二)川原。平地であるが、ここでは土壇封原の義。

(三)回馬首。一旦歸りかけたのに、又馬の頭を本の方に向けて戰場に乗り出す。(四)一擲。博奕の際、賽を振り出すことに譬へて云ふ。

【題義】漢書高帝紀に「鴻溝以西を割いて漢と爲し、東を以て楚と爲す」とあり、應劭の注に「滎陽

の東南二十里に在り」と見ゆ。即ち今の河南開封府河陰縣である。この時は、元和十二年八月、蔡州に向ふ途次、汴に入つて鴻溝の故址を過ぎた時に作つたのである。なほ、これより以下は、すべて表度に随つて蔡を伐つ時、即ち從軍中の作である。

【詩意】項羽と高祖と、戰爭すでに久しきに亙つて、ともに倦み、たとへば龍疲れ虎困むが如く、そこで、鴻溝を界とし、中原の要地を分割して和を結び、億萬の蒼生も性命を全うして、やれ安心といふことに成つた。この時しも、高祖に勸め、不意に馬首を回らして、再び戰場に立ち還らしめ、今度こそ、本當に、乾坤一擲の壯圖を爲し、勝負を賭せしめたものは誰であるか。好機、まことに失ふべからず、かくて後にこそ、高祖は、はじめて天下を一統することが出来たのである。

【餘論】これは、李白の天地賭一擲、未能忘戰爭に本づき、筆勢甚だ雄渾、一灑して人意に可なるを覺えるが、朱竹垞は「亦た是れ大論、然れども未だ雅に入らず」といひ、その淺露に近きを惜んだものと見える。

送張侍郎

張侍郎を送る

司徒東鎮馳書謁。司徒は、東に鎮し、書を馳せて謁し、

【字解】(一)司徒。唐書に、

「元和十年正月、宣武節度使韓安を

丞相西來走馬迎。丞相は、西より來り、馬を走らして迎ふ。

兩府元臣今轉密。兩府元臣、今轉た密、

一方遁寇不難平。一方の遁寇、平らげ難からず。

【詩意】君は、曩に司徒韓弘が東方の鎮たるに際し、前以て照會して置いて之に謁し、又丞相裴度が、西長安から出陣される時にも、馬を走らして之を迎へ、東西の中間に立つて、頻りに斡旋された。今しも、藩鎮幕府の兩元老たる韓裴二公は、交際愈よ親密であつて、謀略毫も齟齬せず、著著として成功するから、吳元濟の如き、區區として一方に據れる遁寇は、平定すること困難ならず、いづれ遠からずして太平の世に復歸するであらう。それにつけても、君が倍舊の盡力を希望する次第である。

【題義】張侍郎は張買で、その頃、兵部侍郎から出でて華州刺史となつたので、この詩は、その赴任を送つたのである。

【詩意】君は、曩に司徒韓弘が東方の鎮たるに際し、前以て照會して置いて之に謁し、又丞相裴度が、西長安から出陣される時にも、馬を走らして之を迎へ、東西の中間に立つて、頻りに斡旋された。今しも、藩鎮幕府の兩元老たる韓裴二公は、交際愈よ親密であつて、謀略毫も齟齬せず、著著として成功するから、吳元濟の如き、區區として一方に據れる遁寇は、平定すること困難ならず、いづれ遠からずして太平の世に復歸するであらう。それにつけても、君が倍舊の盡力を希望する次第である。

【餘論】朱竹垞の評に、「この下の諸絶は、皆裴公の幕府に在つて、一時事に感じて作るところ、未だ盡く工ならずと雖も、然れども、能く道ひ得て出し、彼の時の光景を想見し、宛然賊破るる且夕に在るの意、これを讀めば、人をして意快ならしめ、亦た自ら磊落にして概あり」といつて居る。

贈刑部馬侍郎 刑部馬侍郎に贈る

紅旗照海壓南荒。紅旗海を照らして南荒を壓し、

徵入中臺作侍郎。徵されて、中臺に入つて侍郎となる。

暫從相公平小寇。暫く相公に従つて小寇を平らげ、

便歸天闕致時康。便ち天闕に歸つて時康を致す。

【字解】(一)南荒、南方未開の地。(二)中臺、即ち内閣、中央政府。(三)相公、裴度を指す。(四)天闕、皇城。(五)時康、一時の昇平。

【題義】原注に「馬總、時に晉公に副として東征す」とある。馬總は、前に酒を寄せた馬侍郎で、その處で履歷を略説して置いた。この詩は、馬總の從軍東征を送つて作つたのである。

【詩意】君は、久しく桂管經略觀察使として、紅旗、南海を照らし、未開の蠻境を鎮壓されて居たが、曩に徵し出されて、中央政府に入り、刑部侍郎に榮轉せられた。今次は、裴相公に従つて、かの小寇吳元濟を征伐に出かけられるが、天晴大功を建て、やがて凱旋して、皇城に入朝し、一時の昇

平を致す様にありたいものである。

【餘論】 意象には何の特異な處もないが、唯だ聲調の高亮たるは、聊か人に可なる處であらう。

奉和裴相公東征途經女几山下作

裴相公東征の途、女几山下を經つて作るに和し奉る

旗穿曉日雲霞雜。 旗は曉日を穿つて雲霞雜はり、

山倚秋空劍戟明。 山は秋空に倚つて劍戟明かなり。

敢請相公平賊後。 敢て請ふ、相公賊を平らぐるの後、

暫搆諸吏上崢嶸。 暫く諸吏を搆へて崢嶸に上れ。

【題義】 蔣注に「女几山は、今の河南府宜陽縣に在り、神女白蘭香、上升して几を此に遺す、故に名づく。白樂天曰く、晉公、出でて淮西を征するとき、女几山下を過ぎて詩を題して云ふ、待平賊壘、報天子、莫指仙山示武夫」と。而して、公の此詩和して云ふ」とある。そして、裴度の此詩は、ここに引いただけ残つて居るので、遺憾ながら、全首は傳はつて居ない。

【字解】 【一】 穿曉日 朝日の光の中に穿ち入る。 【二】 請定 上下の從官。 【三】 崢嶸 山の險しきをいふ。

【詩意】 裴相公の東征に就いて、旗さし物目ざましく、朝日の光の中に穿ち入つては、さながら、雲霞を雜へたるが如く、當面なる女几山は、秋空に倚りかかり、その亂立せる崢嶸は、劍戟の如く明かである。わが望むところは、相公、蔡州に至りて、賊を平定せし後、歸途、再び此に立ち寄り、多くの從官と共に崢嶸を攀ちて、この山の勝景を賞せられることである。

【餘論】 洪興祖は「我の旗を以て彼の雲霞を況し、彼の山を以て我が劍戟を況す、詩家、迴響風格といふ」といひ、蔡寬夫は「退之、裴晉公淮西を征する時、女几山を過ぐる詩に和して云云、而して晉公の詩は見るなし、惟だ白樂天集に其一聯を載せて云ふ、待平賊壘報天子、莫指仙山示武夫」と。時に方つて、意氣自ら信じ、疑はざること、かくの如し、豈に令狐楚輩の沮撓を容れむや」といひ、朱竹垞は「句法新に亦た鍛鍊して工なり」といひ、何義門は「壯麗精工」といひ、從軍諸作の中では、有数の佳作である。

郾城晚飲奉贈副使馬侍郎及馮李二員外

郾城晚飲 副使馬侍郎及び馮李二員外に贈り奉る

城上赤雲呈勝氣。 城上の赤雲、勝氣を呈し、

【字解】 【一】 赤雲 晴雲長盛

律詩 奉和裴相公東征途經女几山下作 郾城晚飲奉贈副使馬侍郎及馮李二員外

眉間黄色見歸期。眉間の黄色、歸期を見る。

幕中無事惟須飲。幕中無事、惟だ須らく飲むべし。

即是連鑑向闕時。即ち是れ連鑑闕に向ふの時。

名づけ、その下の國、必ず且つ破亡す、何故を滅せむと欲する、正に今日に在り」とあり、又唐書吳武陵傳に「元濟未だ破れざる數月、武陵鉄石より東南を望むに、氣、旛鼓矛楯の如く、皆期倒覆斜、しばらくして、黃白の氣、西北に出て、雙輪相交はる。轉愈に告げて曰く、今西北は王師の在るところ、氣の黃白は喜の象たり、敗氣は賊たり、賊、必ず亡びむ」とある。【二】黄色 玉管照神書に「黄色は喜の徵」とあり、相書に「喜色は紅黃」とある。【三】連鑑 鑑は馬術、くつわを並べる。

【題義】 郟城は、前に晚秋郟城夜會聯句の條に見え、行蔡州治所の所在地である。馬侍郎は、前に見えた刑部馬侍郎馬總。馮李に就いては、原注に「馮宿、時に都官を以て、李宗閔、時に禮部を以て、竝に從征す」とある。又舊唐書裴度傳に「度、詔を奉じて淮西宣慰招討處置使となる、仍つて、奏して刑部侍郎馬總を宣慰副使となし、都官員外郎馮宿、禮部員外郎李宗閔等を兩使判官書記となし、皆これに從ふ」とある。この詩は、郟城の治所に於て、ある日の暮に宴飲を催せしとき、賦して、馬總竝に馮宿・李宗閔の三人に贈つたのである。

【詩意】 蔡州の城上には、赤い雲が深く立ちそめ、味方の戦勝の兆候として知られ、諸君の眉宇の間には、黄色が動き初めて、凱旋の期の遠からざることを示して居る、行營の内、格別の事務もないから、惟だゆつくりと酒を飲めば善いので、やがて、くつわを並べて、長安に向ふ様になるであらう。【餘論】 前半には赤雲と黄色とを出して、戦勝凱旋を豫期し、それから、無事須飲と連鑑向闕とが出て来たので、出語、自ら次序あつて、率作ながら、唐突の弊がない。

酬別留後侍郎 留後侍郎に別るるに酬ゆ

爲文無出相如右。文を爲るは、相如の右に出づるなく、

謀帥難居卻殺先。帥を謀るは、卻殺の先に居り難し。

歸去雪銷溲洧動。歸り去るとき、雪銷えて溲洧動く、

西來旌旆拂晴天。西來、旌旆、晴天を拂ふ。

を召して草を覆せしむ」とある。【三】謀帥 左傳僖公二十七年に「晉の文公、三軍を作り、元帥を謀る、趙衰曰く、卻殺可なり」とある。【四】溲洧 詩經の毛傳に「溲洧は、鄭の雨水の名」とあり、孫奕の孟子疏に「地理志、溲洧の水は河南に在り」とあり、唐書裴度傳に「度、蔡州より入朝せむとし、副使馬總を留めて彰義軍留後たらしむ」とある。この詩は、裴度の一行が凱旋するに際し、賦して彰義軍留後たる刑部侍郎馬總に酬いて、留別の意を表したのである。

律詩 酬別留後侍郎

四七九

【字解】 【一】無出相如右 漢書田叔傳に「上、召して與に語る、漢廷の臣、能く其右に出づるものなし」とあり、文選雲賦に「相知、末に至り、右の右に居る」とある。右は上位。又唐書に「司馬相如、漢の武帝、擢んで左右に居らしめ、常に相如

【詩意】文を爲ることは、司馬相如が第一であつて、その上位に出づるものなく、三軍の元帥として事を謀るは、郗叡の前に居ることが難い。今、君の才は相如に類し、郗叡に似て居て、天晴、文武兩道に達して居られるから、留後としては好適任で、十分その職を盡されるに相違ない。勿論、滯任の期も長くはないので、來春、雪が銷えて涇渭の水が漲る頃には、長安に歸ることになり、旌旆西に向つて、晴天を拂ひつつ、威儀堂堂として凱旋されるであらう。

【餘論】前半は、馬總の人物を推稱し、後半は、來春の西歸を豫想したのである。

同李二十八夜次襄城 李二十八と同じく、夜、襄城に次す

周楚仍連接、川原乍屈盤 周楚、仍は連接し、川原、乍ち屈盤

雲垂天不暖、塵漲雪猶乾 雲は垂れて天暖かならず、塵は漲つて雪猶ほ乾く。

印綬歸台室、旌旗別將壇 印綬、台室に歸り、旌旗、將壇に別る、

欲知迎候盛、騎火萬星攢 迎候の盛を知らむと欲すれば、騎火、萬星攢まる。

【字解】(一)周楚、周は長安附近、楚は淮南、即ち吳元濟の據せし地。(二)屈盤、うれり曲る。(三)台室、三台の室、即ち宰相の府所。(四)迎候、歡迎。

【題義】李二十八は、原注に「李正封なり」とあつて、前に郾城聯句を爲した其人である。全唐詩話に「李正封、字は中諱、監察御史に終る」とある。襄城は、唐地理志に「襄城縣、汝州臨汝郡に屬す」とあり、蔣注には「襄城は、春秋の時の杞の地、周の襄王、出でて此に居る、漢の襄城、唐の汝州、今縣となつて、開封府に屬す」とある。

【詩意】古しへの周の地たる長安より、楚の故疆たる淮西まで、地勢連接し、一帶の平原がうねり曲がつて見える。今しも、冬十月、凍雲低く垂れて、天暖かならず、北風塵を漲らして、前日の雪は、乾いた儘、残つて居る。君は、今次凱旋せられるに就いて、印綬は台室に返納さるべく、旌旗は將壇に別れ、これより、文臣として清平の世に居ることになるであらう。路すがら、歡迎は極めて盛であつて、騎馬の兵士の揮り騎す炬火は、さながら、萬點の星の聚まるが如く見える。

【餘論】前聯十字は、彼景稍や工にして、全篇中の精彩である。

同李二十八員外從裴相公野宿西界

李二十八員外と同じく裴相公に從ひて西界に野宿す

四面星辰著地明、四面の星辰、地に著いて明かなり、

散燒煙火宿天兵、煙火を散燒して、天兵を宿す。

律詩 同李二十八夜次襄城 同李二十八員外從裴相公野宿西界

【字解】(一)散燒、處處で焚火をす。(二)地、追ふ、間に合ふ體に合く。



不關破賊須歸奏。賊を破るに關せざれども、須らく歸り奏すべし。

自趁新年賀太平。自ら新年を趁うて太平を賀せむ。

【題義】李二十八員外は、前時に見えた李正封。西界は、何處だか、古來誰も注釋を施してない。この詩は、李正封と共に表度に従ひ、一夕、西界に野宿をした時に作つたのである。

【詩意】見わたすかぎり、平野は渺茫として、四面の星辰は大地に著かむばかり、その野で處處に焚火をして、天兵が此に露營を結んだ。表公は、今度、蔡州の賊を平定して、大功を立てられた。必ずしも、その大功に關せざれども、歸朝して、出征の經過を奏上すること然るべく、今しも、十一月であるから、新年に間に合ふ様にして、慶賀を申し述べられる様に有りたいことである。

【餘論】起七字は曠野の實景。後半は著京の早からむことを表度に囑望したのである。

過襄城

襄城を過ぐ

郟城辭罷過襄城。郟城、辭し罷んで、襄城を過ぐ、

潁水嵩山刮眼明。潁水嵩山、眼を刮りて明かなり。

已去蔡州三百里。すでに蔡州を去ること三百里、

【字解】(一) 潁水嵩山 とともに

洛陽の附近に在る。(二) 刮眼、目をこする。(三) 三百里、日本の里

數で、六十里程で、五六日の旅程で

家人不用遠來迎。家人遠く來り迎ふるを用ひず。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】すでに、郟城を立ち去つて、襄城にさしかかった。途すがら、潁川、流清く、嵩山は翠濃かに、これを見る目さへ、拭はれて、はつきりとした様な心持がする。すでに蔡州から三百里も來て、賊の舊地を通過し畢り、この先、何等の心配もないから、わが家人も、態態遠く出迎に來るには及ばない。

【餘論】朱竹垞の評に「無意を用ひ、道ひ來つて好し、甚だ情を得たり」とあるのは、即ち後半に就いて云つたのであらう。

宿神龜招李二十八馮十七

神龜に宿して、李二十八・馮十七を招く

荒山野水照斜暉。荒山野水、斜暉に照らさる、

啄雪寒鴉趁始飛。雪を啄むの寒鴉、趁うて始めて飛ぶ。

夜宿驛亭愁不睡。夜、驛亭に宿して、愁へて睡らず、

幸來相就蓋征衣。幸に來つて相就いて征衣を蓋へ。

律詩 過襄城 宿神龜招李二十八馮十七

【題義】 蔣注に「汝州に神龜驛臺あり、今の鄭縣に在り、九域志に謂ふ、開皇の初建つと。神龜を此に得たり。故に名づく」とあり、現に鄭城驛中にも見えて居る。李二十八は例の李正封、馮十七は馮宿。この詩は、神龜驛に宿した時、李正封、馮宿の二人を招く爲に賦して贈つたのである。

【詩意】 冬ざれの荒れはてた山水は、夕日に照らされ、地上には、殘雪堆をなし、寒鴉は、餌をあるつても得られぬ儘に、雪を啄んで居て、人が走り出せば、はじめて飛び起つ。滿目荒寒、かくの如く、今夜驛亭に宿した處で、とても寒くて寝られまいから、諸君と共に一酌催したいと思ふ。何卒、ここに御出であつて、征衣の袖を蓋ひ合せ、寒さを凌ぎつつ、杯を手に致したい。

【餘論】 前半は、嚴冬陰寒の景を描き出して、極めて新警であるが、後半は、聊か之に副はず、結七字の如きは、いかにも粗笨である。

次 硤石

硤石に次す

數日方離雪、今朝又出山。數日方に雪を離れ、今朝又山を出づ。

試憑高處望、隱約見潼關。試みに高處に憑つて望めば、隱約として潼關を見る。

【字解】 〔一〕 隱約、それがあらぬが、有無の間。看て未だ分明ならざるの貌。〔二〕 潼關、前に見ゆ。

【題義】 説明に及ばぬ。

【詩意】 數日の間、打ちつづけて雪の中を歩いたが、やつと雪を離れ、同時に、今日山峽を出でて、平地に差しかかつた。そこで、試に小高い處に憑つて前程を望むと、隱約の間に潼關が見える。

【餘論】 一氣呵成、極めて警策を推す處が、五絶の特徴である。

和李司勳過連昌宮

夾道疏槐出老根。道を夾むの疏槐、老根を出し、

高薨巨桷壓山原。高薨巨桷、山原を壓す。

宮前遺老來相問。宮前の遺老、來つて相問ふ、

今是開元幾葉孫。今は是れ開元幾葉の孫。

【字解】 〔一〕 疏槐、枝の疎なる槐樹。〔二〕 高薨巨桷、屋根又は高く、たる木は太い、つまり宮殿建りの大建築。〔三〕 開元、玄宗の時の年號。〔四〕 幾葉、葉は世に同じ。

【題義】 一本には、李の字の下に二十八の三字がある。これは、前に見えた李正封で、その本官は司勳員外郎であつた。連昌宮は、唐書地理志に「壽安縣の西二十九里に連昌宮あり、顯慶三年に置く」とあるが、樊汝霖は説を爲して「連昌宮、按ずるに、高宗顯慶三年置く、然れども、詩の落句云云、

疑ふらくは、明皇の作るところたり、而して、元徽之の連昌宮辭、大概亦た明皇帝を諷す」とある。すると、その初、高宗の時に建てたか知れぬが、もとは規模狭小、道ふに足らぬものであつたのを、玄宗に至つて、大に増廣したのであらう。この詩は、李正封が連昌宮を過ぐる詩を示したから、これに和して作つたのである。

【詩意】 枝葉扶疏たる並木の槐樹は、古りたる根を地上に露出し、そこらあたり、人通りの少いことは言ふまでもない。高い甍、巨い構の大建築は、平原を壓するばかり、さすがに、連昌宮の遺址と頷かれる。その門前の遺老どもは、時世の推移を知らず、今の天子は、玄宗皇帝から幾代の子孫でおはしますかといつて問うた。

【餘論】 朱竹垞は「白頭宮女在、閒坐説玄宗、昔人すでに妙と謂ふ、これは、乃ち今帝に因つて問を致す、尤も婉致なり」といつて居る。白頭云々は、元稹の行宮と題する五絶で、その全篇は、左の通りである。

寥落古行宮。宮花寂寞紅。白頭宮女在。閒坐説玄宗。

次潼關先寄張十二闕老使君

潼關に次し、先づ張十二闕老使君に寄す

荆山已去華山來。荆山、すでに去つて、華山來る、

日出潼關四扇開。日出でて潼關四扇開く。

刺史莫辭迎候遠。刺史辭する莫れ、迎候の遠きを、

相公親破蔡州廻。相公、親ら蔡州を破つて廻る。

陰に在る、前に古意の詩の條に見ゆ。【一】四扇、關門の扉をいふ、四枚折りに成つて居る。【二】迎候、出迎。【三】相公、鹽度

【字解】 【一】荆山、晉書の禹貢に荆岐既旅とあり、又漢書地理志に「黃帝、鼎を荆山の下に鑄る」とあり。同地理志に「荆山は、漢の海陽縣懷德縣に在り」と見ゆ、今の陝西富平縣。【二】華山、即ち太華、華

【題義】 潼關は、前にも在つたが、通典に「潼關は本名衝關、河流の衝くところを言ふなり」とあり、雍錄に「潼關は、華州華陰縣東北三十九里に在り、關西一里、流水あり、因つて以て名と爲す」とある。張十二闕老は、原注に張賈とあつて、前に張侍郎として見え、即ち華州刺史である。闕老に就いては、元日朝廻の題注に述べて置いた。この詩は、蔡州より凱旋の途中、潼關に暫時止息せしとき、賦して華州刺史張賈に示したのである。

【詩意】 荆山は、すでに後に後になり、華山が突兀として前面に見え初めて來た。今しも、朝日は、高く差し上り、潼關の四枚の大扉も開かれて、凱旋の軍士は、そろそろと其中に這入る。刺史たる君が、出迎の爲に遠く來ることを辭せられざるは、まことに宜しい。表相公は、今次、蔡州を平定して廻ら

れたので、この絶代の功勳に對しても、ここまで出迎へる位は、もとより至當の事である。

【餘論】沈德潛は「沒石飲羽の技、必ずしも尋常絶句の法を以て之を求めず」と云つて居る。

次潼關上都統相公

潼關に次し、都統相公に上る

暫辭堂印執兵權、しばらく、堂印を辭して、兵權を執る、

盡管諸軍破賊年、盡く諸軍を管す、賊を破るの年。

冠蓋相望催入相、冠蓋相望んで、入つて相たるを催す、

待將功德格皇天、功德を將て皇天に格らむことを待つ。

【字解】(一)堂印、廟堂宰相の印。(二)冠蓋、冠と車蓋、使者をいふ。(三)格皇天、天上にまで到達する。

【題義】舊注に「都統は、韓弘を謂ふなり」とあつて、舊唐書に「韓弘は、潁川の人、憲宗即位、司徒同平章事淮西諸軍行營都統を授かる」とある。しかし、何義門は、これを駁して「題注、都統は韓宏を謂ふなり」と按ずるに、暫辭堂印の句は、都統、即ち晉公を指す、李商隱の詩、亦た云ふ、腰懸相印一作都統」といつて居て、極めて切實であるから、今これに従ふことになる。すると、この都統は、必ずしも官名でなく、全軍總管といふ様な意味に用ひたのであらう。この詩は、潼關に次せし

とき、裴晉公に上つたので、即ち前首と同時の作である。

【詩意】裴相公は、しばらく宰相の印を返納して、兵權を握り、淮西の諸軍を統率して、今次、大功を建てられた。天子は、今まで相公の功德、皇天に到達せむことを待つて居られたので、愈よ凱旋となると、しきりに、使者を遣して、冠蓋相望み、早く歸朝し、再び入つて宰相とならむことを催促されて居る。相公、聲望の隆なるは、まことに大したものである。

【餘論】裴度が淮西を平らげたのは、當時罕に見るところの大功で、韓愈がかく言ふのも、決して阿諛ではない。

桃林夜賀晉公

桃林夜賀晉公を賀す

西來騎火照山紅、西來、騎火、山を照らして紅なり、

夜宿桃林臘月中、夜、桃林に宿す臘月中。

手把命珪兼相印、手に命珪と相印とを把り、

一時重疊賞元功、一時重疊元功を賞す。

【題義】唐書憲宗紀に「元和十二年十二月壬戌、裴度を以て本官に守とし、上柱國晉國公を賜ふ、丙

【字解】(一)臘月、十二月。(二)命珪、册命の證據に賜ふところの玉、裴度が晉國公に封ぜられたことをいふ。(三)重疊、晉國公に封ぜられたこと、宰相に任ぜられたこと、二つことが重なり來りしをいふ。(四)元功、第一の功勳。

子、右庶子韓愈を以て刑部侍郎となす」とあつて、蔣注に「その年を考ふるに、十二月は丙辰の朔、壬戌は其月七日、度、その月十六日を以て蔡より至る、すなはち前に除命す。蓋し、公、未だ入朝せざるの前に在り、故に公の詩、夜、晉公を桃林に賀す」といつて居る。桃林は、書經に「牛を桃林の野に放つ」といひ、孔傳に「桃林は華山の東に在り」といひ、杜預の左傳注に「桃林の塞は、今宏農華陰縣潼關是れなり」とある。すると、この詩は、前首に次いで、夜、潼關附近に宿せしとき、裴度の陞任の報を得たるに因り、これを賀して作つたのである。

【詩意】西に向つて進む騎士の炬火は、山を照らして赤く、折から臘月の寒さにも拘はらず、今宵は、ここ桃林に一宿した。裴相公は、今次、晉國公を賜はり、併せて、宰相に任せられ、命珪と相印と、兩つながら之を手にするは、まことに目出たいことで、朝廷に於ては、早速論功行賞を爲し、一時に二つの賜命を重ね合せて、今次第一の功勳たる相公に賜はつたのである。

【餘論】唯だ眼前の事實を述べたのであるが、その中自然に慶賀の意味が籠つて居るので、短章の中に多少の含蓄がある。

送李員外院長分司東都

李員外院長の東都に分司たるに送る

去年秋露下、羈旅逐東征。  
今歲春光動、驅馳別上京。  
飲中相顧色、送後獨歸情。  
兩地無千里、因風數寄聲。

【字解】(一) 逐東征 裴度に従つて蔡州征伐に出かけしことを云ふ。(二) 上京 長安を指す。(三) 無千里 千里も遠くは思つて居ない。

【題義】李員外は例の李正封、院長の解は前に見えて居た。分司は留守、東都は洛陽。この詩は李正封が洛陽の留守となつて赴任するのを送つたので、詩に因つて見ると、元和十三年の春の作である。

【詩意】去年の秋、白露の下りる頃、君は羈旅の身となつて、裴相公の東征に従つて出かけたが、今年、春景色の動き初めた頃、王事に驅逐し、新に洛陽の留守となり、この長安に別れて赴任することに成つた。そこで、別筵に於て酒を飲む間は、互に相顧みて、離愁自ら顔色に見はれ、君を送りし後、獨り歸らむとすれば、愈よ情に堪へぬ。洛陽と長安とは、相隔つとも、千里も遠くはないから、時時風の便に言つてをして、近況を知らせて貰ひたい。

【餘論】この詩は、五律ではあるが、前半が普通とは聊か異なつて居るので、蔣之題は「これ隔句對

なり、古詩に、昨夜越溪難、含悲赴上園、今朝險嶺易、抱笑入長安とあり、退之、特に其體に效ふといひ、何義門は「格別なり、太白集中に之あり」といつて居る。要するに、その機套を出した處が面白いので、その爲に、一種の奇調を爲し、朱竹垞は「甚だ流快喜ぶべし」といつて居る。

晉公破賊回重拜台司以詩示幕中賓客愈奉和

晉公賊を破つて回り、重ねて台司を拜し、詩を以て幕中賓客に示さる、愈奉和す

南伐旋師太華東、南伐師を旋す太華の東

天書夜到册元功、天書夜到つて元功を册す。

將軍舊歷三司貴、將軍、舊と三司の貴きを歴し、

相國新兼五等崇、相國、新に五等の崇を兼ぬ。

鷓鴣欲歸仙仗裏、鷓鴣、仙仗の裏に歸らむと欲す、

熊羆還入禁營中、熊羆、還た禁營の中に入る。

長慙典午非材職、長く慙づ、典午の材職に非ざるを、

【字解】(一)南伐、蔡州に吳元

濟を征伐せしこと。(二)旋師、軍

隊と共に凱旋する。(三)太華、即

ち華山。(四)天書、敕書。(五)

三司貴、東觀漢記に「鄧騭、元平元

年、拜せられて車騎將軍、同三司と

なる、開府の號あり」とある。(六)

五等崇、初學記に「晉祿五等」とあ

る、即ち公侯伯子男、樂度は晉國公

得就閒官即至公、閒官に就くを得ば即ち至公。

【題義】舊唐書裴度傳に「度、八月二十七日、郾城に至つて諸軍を巡撫し、上旨を宣達す。士、皆勇を買うて出でて戰ひ、皆捷つ。十月十一日、唐鄆節度使李愬、襲うて懸瓠城を破り、吳元濟を擒にす。十一月二十八日、度、蔡州より入朝す。十二月、詔して、度に金紫光祿大夫宏文館大學士を加へ、勳、上柱國を賜ひ、晉國公に封せられ、食邑三千戸」とある。又蔣注に「天文志に、三台六星、兩兩にして居り、文昌より起り、列して太微に至る、これ三公の位なり。人に在つては三公といひ、天に在つては三台といふ、これ、晉、本官を以て上柱國晉國公に進む、故に台司と名づく」とある。題の意味は、裴晉公が蔡州の賊を破つて回り、再び宰相となつたに就いて、詩を作つて幕中の賓客に示されたから、予も之に和して此詩を作つたといふのである。一本には、晉公自蔡州入觀、途中重拜台司、以詩示幕中賓客、愈因和之とあつて、文句は聊か違ふが、意義は全く同じである。なほ裴度の原作は、散佚して今傳はつて居ない。

【詩意】裴相公は、南、蔡州を征し、今次、凱旋して華山の東に差しかかると、敕書が夜到着し、第

一の戦功を賞せられて、陞任の御沙汰があつた。裴相公は、曩に將軍として、開府儀同三司の貴きをも歴し、今次相國となつては、五等爵の最上に列せられた。かくて、幕中の僚佐は、矚矚の行列を整へて朝廷なる仙仗の中に歸著せむとし、引き具したる熊羆の勇士どもは、やがて、元の禁營に入るであらう。非才、子の如きは、一時、行軍司馬に任せられたが、もと此身に稱つた官職でもなく従つて、些の功績なかりしは、まことに慙愧すべく、幸に何か開官に轉任されたならば、至極公平の御沙汰である。つまり、裴相國の榮進を賀するにつけて、驥尾に付する自己の無能が、愈々愧かしく思はれる。

【餘論】葉夢得の石林詩話に「七言は、氣象雄渾、句中力あつて、軒餘、言外の意を失はざるに難し。老杜の錦江春色來天地、玉壘浮雲變古今、五更鼓角聲悲壯、三峽星河影動搖等の句より後、常に復た繼ぐものなきを恨む。韓退之、筆力最も傑出と爲す、然れども、毎に意と語と俱に盡くるに苦む。裴晉公、蔡州を破つて、回るに和する詩、謂はゆる將軍奮壓三司貴、相國新兼五等崇、壯ならざるに非ざるなり、然れども、意亦た此に盡く。劉禹錫の晉公の東都に留守たるを賀して、天子旌旗分一半、八方風雨會中州と云ひ、語遠くして體大なるに若かざるなり」といつて居るが、これは、必ずしも、公平なる批判ではない。朱竹垞は「莊重體あり、領袖敍官精妥」といひ、何義門は「後四句、只だ幕中の賓客を敍し、即至公の三字、便ち已に晉公の相業に帶轉し、上下俱に關鎖あり、筆力最も高し」といひ、沈德潛は「莊重體を得たり」といひ、乾隆御批には「嚴重蒼渾、直に杜陵に逼る」とあり、この詩が韓集七律の中で、有數の傑作たることは、誰にしても、異論の無い處である。

獨釣四首

獨釣四首

侯家林館勝、偶入得垂竿。

侯家林館の勝、偶ま入つて竿を垂るを得たり。

曲樹行藤角、平池散芡盤。

曲樹、藤角に行なり、平池、芡盤を散す。

羽沈知食駛、緝細覺牽難。

羽、沈んで食の駛きを知り、緝、細くして牽くことの難。

聊取夸兒女、榆條繫從鞍。

聊か兒女に夸るを取る、榆條、從鞍を繫ぐ。

【字解】【一】侯家、誰か貴顯の別館であらう、蔣注には「疑ふらくは即ち侯喜ならむ」とある。【二】藤角、藤の切り株。【三】芡盤、蔣注に「留雅に、鮑は芡、葉の大きな荷の如し、盤様、これを葉といひ、葉裏、これを葉といふ、亦た茹と爲すに堪へたり」とある。夾は、和名クボキ、葉大にして荷の如く、葉上に散多く、實は芒ありて、その中に米の如きものがある。芡盤は、即ち芡葉であらう。【四】羽沈、羽は浮木の代用になると見える。【五】從鞍、從騎の馬。

【題義】説明に及ばぬ。蔣注に「これ刑部侍郎たりしときに作る、坐厭親刑柄の一句を觀て見るべし」とある。そして釣をした場所は、侯家の林館とあるだけで、詳しいことは分からぬ。

【詩意】侯家の別亭は、林池の勝があつて面白く、偶然ここに入つて釣を垂れた。岸邊に蟻曲せる老樹は、藤の切り株に連り、池中には一ぱい水歎冬の大な葉が散布して居る。兎角する内に、浮木が沈むので、魚の餌に就くこと早きを知るも、釣絲が餘り細くて切れさうだから、引き上げることは一寸六つかしい。何でも、澤山釣り上げて、兒女どもに威張つて見せやうといふので、從騎の馬まで、楡の枝に繫がせ、緩ッくり落ち付いて釣をすることにした。

【餘論】朱竹垞は、前聯を評して「工巧」といひ、後聯に就いては「羽沈・紺細は穩切」と云つて居る。

一逕向池斜 池塘野草花 一逕、池に向つて斜なり、池塘、野草花さく。  
 雨多添柳耳 水長減蒲芽 雨多くして柳耳を添へ、水長じて蒲芽を減す。  
 坐厭親刑柄 偷來傍釣車 坐して刑柄に親むを厭ひ、偷に來つて釣車に傍ふ。  
 太平公事少 吏隱詎相除 太平、公事少く、吏隱、詎ぞ相除ならむ。

【字解】【一】向池斜、池の方へ斜に通じて居る。【二】柳耳、耳は齒の類。【三】水長、水嵩が増える。【四】坐厭、辭注に「坐厭、一に厭坐に作る。云ふ、厭と坐とは一體たり。坐厭、刑柄、蒲芽、釣車」と一説たり。非なり。然れども、坐厭と偷來と、對を爲して、亦た自ら親切。又況んや、坐厭は乃ち常套の語なるをや。食蘇州曰く、坐厭淮南守と。この類、極めて多し。何ぞ必ずしも、更に曲說を爲さむ、詭意の拙益を知らざるなり」とある。【五】親刑柄、この時、韓愈は刑部侍郎、今ていへば司法大臣で、專ら刑罰の事を掌りしが故に云ふ。【六】釣車、釣をする人の乗つて來た車。【七】吏隱、吏なれども、その職間にして隱逸に等しきといふ。

【詩意】侯家の林館に這入つて見ると、一徑斜に池に向つて通じ、隄塘の上には、野草が花を開いて居る。頃ろ、兎角雨がちなるに因つて、柳の樹には齒を長じ、又水嵩が著しく殖えた爲に、蒲の芽は水中に没して、大へん減つた様に見える。身は刑部に奉職して、刑罰の權柄を握つて居るが、心甚だ之を好まず、閒を偷んで此に來り、釣人の乗り棄てた車に傍うて、矢張釣を垂れて居る。刻下太平の世で、公事甚だ少く、さながら吏隱といつても善い位、その境涯は、さして隔つて居らぬ。

【餘論】雨多水長の十字は、刻劃の餘に出で、しかも、篇中の精彩たるを失はぬ佳句である。

獨往南塘上 秋晨景氣醒 獨り往く南塘の上、秋晨景氣醒む。  
 露排四岸草 風約半池萍 露は排す四岸の草、風は約す半池の萍。  
 鳥下見人寂 魚來聞餌響 鳥は下つて人の寂たるを見、魚は來つて餌の響しきを聞く。  
 所嗟無可召 不得倒吾餅 嗟する所は、召すべきなくして、吾が餅を倒すを得ざるを。



【字解】【一】南。池の南なる土手。【二】景。晴れたつて、風景が恰も醒めた如きないよ。【三】辨。押さへる。【四】岸。滿岸に同じ。【五】約。束れる、つかれる。【六】無可。招くべき人がない。

【詩意】ひとり池の南なる土手の上に住つて見ると、折しも秋の朝で、氣象すがすがしく、遠近がはつきりして、風景は、さながら醒めたやうである。露は夥しく下つて、滿岸の草を押さへ付け、風は半池の浮草を一つ處に束ねて、今しも吹き罷んだから、鳥は空より下りて、あたりに人の氣はひなきを喜び、魚は何の匂を嗅ぎつけて、追追に集まつて来る。ただ此に招き寄せて、折角用意して来た酒瓶を空にするまで、一緒に飲み倒す人の無いのは、まことに、残念なことである。

【餘論】何義門は「魚鳥の一聯、極めて老杜に似たり」と云つて、激賞して居るが、鄙見を以てすれば、前聯十字の自然なるに及ばぬやうである。

秋半百物變、溪魚去不來。

秋半にして百物變じ、溪魚去つて來らず。

風能坼茨背、露亦染梨頰。

風は能く茨背を坼き、露も亦た梨頰を染む。

遠岫重疊出、寒花散亂開。

遠岫、重疊として出で、寒花、散亂として開く。

所期終莫至、日暮與誰廻。

期すところ終に至らなし、日暮、誰と廻らむ。

【字解】【一】秋半。陰曆八月ないよ。【二】坼。茨背。水敷冬の葉の先端を折る。【三】梨頰。梨の實の表皮。【四】遠岫。岫は兩山の間、即ち谷。【五】所期。待つところの人。

【詩意】秋も半ばになつて、百物次第に變じて凋落に赴き、溪魚も何處かに匿れて、一たび去りしものは再び此に來ない。西風颯颯として、水敷冬の葉の先端を吹き折り、露は溼うて、梨の實の表皮を亦く染めた。眺めやれば、遠山の重疊錯出するのが、くつきりと見え、寒花は散亂して、處處に開いて居る。待つところの人は、とうとう來なかつたから、日暮になつて、誰と一緒に歸らうか、まことに心淋しいことである。

【餘論】朱竹垞は「景句ともに工なり」といひ、明かに兩聯を賞したのである。なほ以上四首の總評として、竹垞は「四首、ともに幽致あり」といひ、何義門は「四首新致多し」と云つて居る。そして、その所長の主として敘景に在ることは、各首に就いて見る通りである。

枯樹

枯樹

老樹無枝葉、風霜不復侵。

老樹、枝葉なく、風霜、復た侵さず。

腹穿人可過、皮剝蟻還尋。

腹は穿つて人過ぐべく、皮は剝けて蟻還た尋ぬ。

律詩 枯樹

四九九

寄託惟朝菌、依投絕暮禽。寄託、惟だ朝菌、依投、暮禽を絶つ。

猶堪持改火、未肯但空心。猶は持して火を改むるに堪へたり、未だ肯て但だ空心。

【字解】 ① 鼠穿、横ッ腹に穴が明いて居る。② 朝菌、莊子の逍遙遊に「朝菌は晦朔を知らず」とある。③ 改火、游注に「周書の令に改火の文あり、春は榆柳の火を取り、夏は桑柘の火を取り、手夏は桑柘の火を取り、秋は梓楓の火を取り、冬は檀槐の火を取る。一年の中火を續ること、各々木を異にす、故に火を改むといふなり」とある。④ 空心、心が空になつて居る。

【題義】 説明に及ばぬ。

【詩意】 老樹は枯れはてて、枝もなく、葉もなく、従つて風霜も復た來り侵すことがない。横ッ腹には、大きな穴が明いて居て、人が通れるし、皮は剥けて仕舞ひ、蟻が巢でも造つたと見えて、頻りに其中に尋ね入る様である。これに生を寄託するのは、朝菌だけであつて、最早や、夕に歸る鳥も此に棲むことはない。しかし、これを持して火を改めるに用ふることは出來るので、何も中心まで空虚で、全く役に立たぬといふでもない。

【餘論】 看方に依つては、自ら諷したのもと思はれるが、單に枯樹その物を詠じたものとしても、何等の差支は無い。

元日酬蔡州馬十二尙書去年蔡州元日見寄之什

元日、蔡州馬十二尙書の去年蔡州元日に寄せられし什に酬ゆ

元日新詩已去年、元日の新詩、すでに去年、

蔡州遙寄荷相憐、蔡州より遙に寄せて相憐を荷ふ。

今朝縱有誰人領、今朝、たとひ有りともし誰人か領せむ、

自是三峰不敢眠、自らは三峰敢て眠らず。

昔蔡州を經由すと言はず、その賦、すでに掘るところなし。又三峰不敢眠、亦た文理なし。今、當に之を聞いて、以て知者を俟つべし」とある。但し、一本には、三峰を三冬に作つてある處から、朱竹垞は「還た三冬に作るを近しと爲す」といひ、その方が順當であるから、之に従ふことにする。

【題義】 馬十二は例の馬總で、蔡州平定の後、その地に留守して居た。元和十二年元日、一時を韓愈に寄せた處が、その儘棄てツばかりして置き、十三年の元日に、これを作つて酬答としたのである。

【詩意】 君が元日の新詩を示されたのは、去年の今日の事で、はるばる蔡州より投寄されたのは、平生御心にかけてさせられたからで、私に取つては、まことに有り難い仕合せであると同時に、今まで御挨拶を怠つて居た私の怠慢は、慙愧至極の事でありませぬ。しかし、あの詩が、去年でなく、今日新に到着したものとしてみても、誰も其意を領して、廣酬を試むるものは無かるべく、舊冬の忙がしさに碌碌もせず、ここに、元旦に遇つて、ヤツと心が延延したばかりだからである。

律詩 元日酬蔡州馬十二尙書去年蔡州元日見寄之什

【字解】 ① 三峰、唐之題の解に「舊注、華岳に三峰あり、唐人華に守たるもの、皆これを三峰の守といふ。蓋し、今、西歸經從の路、馬詩必ず序述するところあらむ。故に云ふ。今、按するに、この詩、並に題、

【餘論】上の如く解釋する外は無いと思ふが、それにしても、この詩は、晦澁を免れぬので、要するに、駄作に過ぎぬものである。

詠燈花同侯十一

燈花を詠ず、侯十一と同じく

今夕知何夕。花然錦帳中。

今夕知る何の夕ぞ、花は然り錦帳の中。

自能當雪暖。那肯待春紅。

自ら能く雪に當つて暖に、那ぞ肯て春を待つて紅ならむ。

黃裏排金粟。釵頭綴玉蟲。

黃裏、金粟を排し、釵頭、玉蟲を綴る。

更煩將喜事。來報主人公。

更に煩はす、喜事を將て、來つて主人公に報せよ。

【字解】

【一】黃裏排金粟 方輿勝覽に「何遜の詩、金粟裏振頭、蜀人史彦升曰く、黃裏排金とは、額間の花細を謂ふなり」とあり。蔣注には「或は、漢制、樂與翠蓋黃屋を引く、この詩と文意同じからず、疑ふらくは、誤ならむ」とある。但し、ここでは、方輿に從つて解釋することにする。【二】喜事 西京雜記に「燈火花すれば錢財を得」とある。【三】主人公 公、一に翁に作る。史記范滂傳に「主人翁、これを習ひ知る」とある。單に主人といふに同じ。

【題義】

燈花は、燈火に丁子の出來たことであるが、又普通には燈火と同じに用ひて居る。侯十一は、例の侯喜、この詩は、燈火を詠じ、侯喜と共に作つたのである。

【詩意】今夜は如何なる夕であるか、燈火は花の如く、錦帳の中に燃えて居て、折から、雪に當つても、依然として暖かであるし、春をも待たずして、紅に咲き出でた。側に侍坐する女どもは、額に花細を施して、その黄色の中には、金粟を排するかと疑はれ、釵の先には、玉蟲を綴つて飾として居る。燈火の夜を照らして、花やかに賑はしきは、固よりの事で、更に望むところは、何か目出たい事のある表驗に、丁子を結びて、主人に報する様にして欲しいといふことである。

【餘論】一應無難であるが、後聯は、侍坐の婢女の形容に過ぎざるが故に、大に切實を缺いて居る。それとも、他に然るべき解釋があるのかも知れない。雪浪齋日記には「この詩、極めて少陵に似たり」といひ、蔣之翘は「昔人、この詩の極めて少陵に似たるを論ず、然れども俱に常語のみ、その詠物、固より工なり難し、若し少陵の手に至つては、工ならざるものも、亦た自然に大家の氣あり」といつて、聊か之に反抗して居るが、朱竹垞は「運意沈細、詠物の趣を得たり」といつて、又大に褒めて居る。

祖席□前字

祖席□前字

祖席洛橋邊。親交共黯然。

祖席、洛陽の邊、親交、ともに黯然。

律詩 詠燈花同侯十一 祖席□前字

野晴山簇簇。霜曉菊鮮鮮。

野は晴れて山簇簇、霜曉けて菊鮮鮮。

書寄相思處。盃銜欲別前。

書は相思の處に寄せ、盃は別れむと欲するの前に銜む。

淮陽知不薄。終願早廻船。

淮陽知る薄からず、終に願はくは早く船を廻せ。

【字解】 祖席、祖儀の條に見ゆ。洛橋、洛水に架した橋で、洛陽に在る。關、文選江淹の別賦に「關然銷魂者別而已」とある。【註】 知不薄、漢書段熲傳に「召され拜して、淮陽守となる。關、伏謝して印綬を受けず、上曰く、君、淮南を辱しとするか」とあり、文選謝康樂の詩に「淮陽取關守」とある。

【題義】 或本には、前の字の上に得の字があつて、從前の例に據るも、その方が善いので、これは、一字脱落したものと見える。次首も、同じく、秋の字の上に得の字の有るべき筈である。原注に「王涯、袁州刺史に徙さるるを以て作る」とある。祖席は、即ち送別の筵。漢書疏廣傳に「祖道を設け、東都門外に供帳す」とあり、同書景十三王傳に「江陵北門に祖す」とあつて、顏師古の注に「祖は送行の祭、因つて饗飲するなり。むかし、黃帝の子累祖、遠遊を好みて、道に死す。故に後人以て行神と爲すなり」とある。すると、祖席とは、元と旅行の神様たる累祖を祭り、因つて、宴筵を催すことである。新唐書王涯傳に「涯の甥、皇甫湜、賢良方正、對策異等を以て、宰相に忤ふ、涯、避嫌せらるるに坐して、學士を罷められ、再び虢州司馬に貶せられ、徙されて袁州刺史となる」とある。王涯は白居易を陥れたりして、後に甘露の變に際して殺された人で、むしろ小人であるが、韓愈とは同年の進士でもあり、又弟子皇甫湜の伯父である處から、韓愈も、平生これと交はり、そこで、かういふ送行の詩も出來たのであらう。なほ、王涯が袁州刺史になつたのは、元和三年四月、その時、韓愈は東都に分司として、即ち洛陽に居たのである。しかし、詩中に「菊鮮」とあり、後首にも「秋景」を詠じてあるを見れば、まさしく秋末であつて、四月といふ方が誤つて居るに相違ない。袁州は、後に韓愈が潮州から量移された地であるが、十年後に、自分も亦た其州の刺史にならうとは、もとより豫想だもせぬことであらう。

【詩意】 洛橋の邊に祖道の席を設け、今日君の遠行を送るにつけて、平生親交を辱うするものは、歸然として、まことに情に堪へられぬ。眺めやれば、野は遠く晴れ、山は簇簇として、君の行く手を遮り、霜は曉に淨く、菊の花は、一しほ鮮かに見える。これから、次第に寒くなる折柄、千里の旅をするのは、その苦さこそと思はれる。別後相思の念の起る時には、互に書信を寄すべく、それよりも、今や別れむとする前に杯を銜へて、この行の恙なきを祈るのである。君が、今次、袁州の刺史となつたのは、かの汲黯が淮陽の太守に拜せられたと同じく、聖主の恩、必ずしも薄い譯ではないが、成るべく、早く船を廻して、帝京に歸著せられむことを願ふ次第である。

【餘論】 朱竹垞は「唐人別詩甚だ多し、この詩、彼景述情、猶ほ稍や新意を出せるを覺ゆ。その架構の妙、亦た只だ幾希の間に在り」といつて居る。要するに、兩聯、一は景、一は情、自然配合の妙

があつて、結構亦た緊健を極めて居る。

秋字

秋字

淮南悲木落而我亦傷秋。

淮南、木の落つるを悲み、而して、我亦た秋を傷む。

況與故人別那堪羈宦愁。

況んや、故人と別れ、那ぞ羈宦の愁に堪へむや。

榮華今異路風雨苦同憂。

榮華、今路を異にし、風雨、苦だ憂を同じうす。

莫以宜春遠江山多勝遊。

宜春を以て遠しとする莫れ、江山勝遊多し。

【字解】(一)木落、木の葉の落つること。淮南子に「木落ちて長年悲む」とある。(二)羈宦、健意、自ら東都に分司たることないふ。(三)宜春、即ち袁州。その評は、後に袁州量移の詩の下に述べる。

【題義】これは、前首と同時に、秋の字をも得たから、別に一首作つたのである。

【詩意】これより君の行く淮南に於ては、木の葉が、はらはらと風に落ちることであらうし、我も亦た此處洛陽に在つて、秋を傷んで居る。まして、友人と別れ、ひとり取り残されると、愈よ以て羈宦の愁に堪へられない。君も、我も、今しも榮華と路を異にして、均しく不遇の境涯に居ることであるから、風雨の物淋しきにつけて、同じく憂患に堪へぬことである。しかし、君の行かれる袁州は、古

しへの宜春の地で、勝遊を値する江山が多いから、遠いからと云つて、格別苦にするにも及ばぬことである。

【餘論】韓愈は、自ら此二詩の後に題して「兩詩何の處が好き、就中何の處が佳、何の處か悪」といつたさうで、聊か得意であつたと見える。何義門は、この首を評して「清空一氣、話の如く、絶えて、少陵の氣格あり」といつて居るが、専ら情思を述べ、且つ前聯が流水の對法で出來て居る處が面白く、兩首ともに、詩品、伯仲の間に在りと云ふべきであらう。

送鄭尙書赴南海

鄭尙書の南海に赴くを送る

番禺軍府盛欲說暫停盃。

番禺、軍府盛なり、説かむと欲して暫く盃を停む。

蓋海旂幢出連天觀閣開。

海を蓋うて旂幢出で、天に連つて觀閣開く。

衙時龍戶集上日馬人來。

衙時、龍戶集まり、上日、馬人來る。

風靜鷄鷓去官廉蚌蛤廻。

風靜にして鷄鷓去り、官廉にして蚌蛤廻る。

貨通師子國樂奏武王臺。

貨は師子國に通じ、樂は武王臺に奏す。

事事皆殊異無嫌屈大才。

事事、皆殊異、嫌ふ無かれ大才を屈するを。

律詩 秋字 送鄭尙書赴南海

【字解】(一)番禺 番禺縣は、即ち漢の番禺縣なり、地は香山禺山を以て名づく」とある。今の廣東廣州府。(二)軍府 節度使の官廳。(三)旂幟 節度使の旗。(四)羈閼 樓觀亭閣。(五)衙時 役所で執務する時刻。(六)曹月 舊法に「南部新書、長安に置戸あり、水色を見ては觀あるを知る、或は引き出せば但だ鯨魚のみ」を引いてあるが、舊法に「今按するに、これは南海を言ふ、長安に非ざるなり、蓋し置戸は、本と探珠戸なり、南海亦た之を置戸といふ」とあつて、今、これに従ふことにする。(七)上日 元日。(八)馬人 唐書南蠻傳に「瑣王に五銅柱あり、馬投植つるところ。投還るや、留まつて去らざるもの、わづかに十戸、隋末率衍して三百に至り、皆馬を姓とす、俗、その宮を以て、故に馬留人と號す」とあり、舊法にも「後漢の馬投、尋邑蠻を討ち、還る能はざるもの數十人を象林南界歸るところの銅柱の下に留む。南蠻、呼んで馬留人とす」とある。(九)樓閣 國語に「海島を鵝島といふ、昔の東門外に止まる。風高日く、海其れ災ならむか。夫れ廣川の鳥獸は、常に風を知つて、其災を避くるなり」と。この論や、海に大風多し」とある。鵝島は鵝。(一〇)官廳 軒殿。後漢書孟嘗傳に「合浦の太守に還る、郡縣、珠を出し、交趾と常に商販を還す。先時の宰守、多く貪、珠、漸く交趾の郡界に徙る。嘗、官に到る、未だ歳を餘えざるに、去珠復た還る」とある。(一一)師子國 唐書西域傳に「師子國は、西南海中に在り、奇寶多く、寶を以て沙上に置けば、商舶直を償うて觀ち取り去る。能く獅子を馴養す。因つて、以て國に名づく」とあり、舊法に「師子國は、南海中に在り、斜委二千餘里、その國の船、最も大なり、梯して上下すること數丈、皆寶貨を積む」とある。いづれ今のマレイ半島あたりだらうと思ふが、よくは分からぬ。(一二)武王 漢書南越王傳に「趙佗自立して、自ら南越の武王と稱す」とあり、一統志に「舊は廣州府城內越秀山に在り」と見ゆ。(一三)瘴氣 普通見るところと違つて居る。

【題義】鄭尙書、名は權、唐書の本傳に「鄭權は、汴州開封の人、進士の第に躍んで居る。穆宗立つて、工部尙書に累遷す。權幸に結びて、鎮守を求む、ここに於て、檢校右僕射嶺南節度使となる」とあり、同書地理志に「廣州南海郡」とある。この詩と同時に、韓愈は、送序一篇を作り、その中に、

南海の風土を記しては、嶺の南、その州七十、その二十二は嶺南節度府に隸す、その四十餘は四府に分ち、府ごとに各帥を置く。然れども、獨り嶺南節度府を大府となす(中略)府に隸するの州、府を離れて遠きものは三千里に至り、懸かに山海を隔て、使、必ず數月にして後に至る。蠻夷悍輕、怨んで以て變じ易し、その南州は、皆大海に岸して洲島多し、颶風一日踏ること數千里、漫漶として蹤跡を見ず、控御宜しきを失へば、險阻に依り、黨仇を結び、毒矢を擲して、以て將吏を待ち、撞撞呼號し、以て相和應し、蜂屯蟻雜、爬梳すべからず、好すれば人、怒れば獸、故に、常に其征入を薄くし、節を簡にして目を疎にし、時に遺漏するところあるも、これを究切せず、長養するに兒子を以てし、粉として治むべからざるに至れば、乃ち草薙して、之を禽獵し、根株を盡し、痛斃して乃ち止む。その海外雜國、耽浮罷、琉求・毛人・夷賈の州、林邑・扶南・真臘・于陀利の屬の如き、東南、天地に際する、萬を以て數ふ。或は時に風潮を候して朝貢し、蠻胡の賈人は交海中に舶す」といひ、鄭尙書の官歴を敘しては「長慶三年四月、工部尙書鄭公を以て、刑部尙書兼御史大夫と爲し、往いて其任を踐ましむ。鄭公、かつて節を以て襄陽に鎮し、又滄景德棣に帥たり、河南尹華州刺史を歴、皆功德の稱道すべきあり、入朝して金吾將軍散騎常侍工部侍郎尙書となる。家屬百人、數畝の宅なく、屋を僦して以て居る。貴にして能く貧、仁を爲す者、富まざるの效と謂ふべきなり」といひ、これで尙書の人物も分かるし、その赴任に就いて、韓愈が詩文を贈つたのは、長慶三年の四月で、即ちその

卒去に先つこと一年であることも知られた。なほ序の末に「この命に及びて、朝廷、悦ばざるなし。將に行かむとするや、公卿大夫士、苟くも詩を能くするもの、成な相率ひ、詩を爲つて以て朝政を美し、以て公の南行の思を慰む、韻、必ず來の字を以てするは、公政を成して來り歸るの疾からむことを祝する所以なり」とあつて、この詩は、つまり限韻であつたのである。

【詩意】番禺の節度使府は、管轄する地域も廣く、その勢威極めて盛である。そこで、其地の風土を説かむとして、暫く杯を停めて、やがて語り出さう。尙書が今度赴任せられる途すがら、旗さし物は、海を蓋うて高く掲げ出し、やがて、南海に近くなれば、樓觀亭閣の天に接して聞くのが見える。もとより、蠻荒の地であるから、役所の執務時間には、采珠を業とする蠻戸の者どもが來り聚まり、元日には、參賀の爲に、馬留人と稱する部落の者どもが遣つて來る。尙書、一たび其地に臨んで治を爲せば、清平にして災變も起らず、風も静であるから、鳴なども、陸から去つて海に浮び、又官として清廉なることは、古しへの孟嘗の如く、一度、ここを去つた眞珠貝なども、又ぞ元の處へ戻つて來るであらう。常に獅子國と交通して、彼士の物貨を輸入し、古しへ趙佗の故蹟たる武王臺に於て、樂を奏して、官民ともに心のどかに落ち付くことも出來るであらう。南海は、事事物物、中土と違つて居るが、右の次第で、施政に張り合があるから、折角の大才を屈することを以て嫌となさず、精精力を盡して、朝旨に稱ふやうにされたらば善からう。

【餘論】これは五排で、尙書赴任以後に於ける南海至治の狀を想像して言を爲し、つまり、かくあらむことを囑望したのである。朱竹垞は「體を得たり」といひ、何義門は「風力亦た何ぞ少陵に減せむや」といひ、ともに之を推稱して居る。

答道士寄樹雞 道士の樹雞に寄するに答ふ

軟濕青黃狀可猜 軟濕青黃、狀、猜すべし、

欲烹還喚木盤廻 烹むと欲して、還た木盤を喚んで廻る。

煩君自入華陽洞 君を煩はす、自ら華陽の洞に入り、

直割乖龍左耳來 直ちに乖龍の左耳を割いて來る。

【字解】(一)木盤 木製の盆、

それに樹雞が載せてあつた。(二)

華陽洞 茅君傳に「支史の洞六十三

所、第八句曲の洞を金壇華陽の天と

いふ」とある。すると、華陽洞は句曲

山に在る仙洞である。(三)乖龍左

耳 柳宗元の龍城鐘に「茅山の道士吳綽、藥を華陽洞に採る、一小兒を見る、手に三珠を把つて松下に戯る。綽、これに従へば、奔つて洞中に入り、化して龍と作り、三珠を以て左耳中に填す。綽、藥斧を以て之を斷せば、左耳を落す、而して、三珠すでに在ると、ろを失ふ」とあり、洞警の靈仙錄に「天、乖龍を罰す、必ず其耳を割く」とある。乖龍は、脚を犯せし龍。龍城鐘は、柳宗元の筆に係るといふが、當するに足らず、又もし然りとすると、鐘意が之を引く筈もないが、かくの如き傳説は、古くから有つて、鐘意も、應聞の鐘、これを詩中に入れたのであらう。

【題義】原注に「樹雞は、木耳の大なるもの」とあつて、つまり、菌の一種、東坡の和陶詩にも黄

崧養<sup>三</sup>土羔<sup>一</sup>老楮生<sup>二</sup>樹雞<sup>一</sup>とある。この詩は、ある道士が珍しい木耳を贈つたから、これに謝せむが爲に、賦して贈つたのである。

【詩意】木耳の狀たるや、軟かに濕つて居て、その色は青黄を交へ、何とも驗へ様もなく、心に疑ひ感ふばかりである。烹れば食へるといふので、厨人に渡したが、食ふのも惜しいので、再び木の盆に載せた儘なるを喚び取つて、又ぞろ、座邊に置いて眺めた。これは、如何にも奇妙なもので、道士たる君を煩はして、華陽の洞に入り、そこに居る華龍の左の耳を切り取つて來たのでは無いかと思ふばかりである。

【餘論】後半の比擬は、極めて新警であつて、朱竹垞は、これを評して「豪氣、人を駭かす」といつた。

左遷至藍關示姪孫湘 左遷されて藍關に至り、姪孫湘に示す

一封朝奏九重天。一封朝に奏す、九重の天、

夕貶潮州路八千。夕に潮州に貶せらる路八千。

欲爲聖明除弊事。聖明の爲に弊事を除かむと欲す、

【字解】「一封朝奏」これは韓愈が佛骨を迎ふるを諫止したこと

で、舊唐書憲宗紀に「元和十四年春正月丁亥、鳳翔法門寺の佛骨を迎へて

肯將衰朽惜殘年。肯て衰朽を將て殘年を惜まむや。

雲橫秦嶺家何在。雲は秦嶺に横はつて、家、何にか在る、

雪擁藍關馬不前。雪は、藍關を擁して、馬、前まず。

知汝遠來應有意。知る汝が遠く來る應に意あるなるべし、

好收吾骨瘴江邊。好し吾が骨を瘴江の邊に收めよ。

京師に至り、禁中に留むること三日、乃ち請寺に遷る。刑部侍郎韓愈、上疏して其弊を極陳す。癸巳、愈を貶して潮州刺史となす」とある。なほ其詳は傳説中に述べて置いたから参照して貰ひたい。

【三】秦嶺、佛骨奉迎の事をいふ。【四】秦嶺、終南一帯の山を指す。【五】藍關、即ち藍田關、前に數ば見ゆ。唐書地理志に「藍田縣、藍田關あり、故の饒關軍谷あり、谷に關あり」とある。【六】收吾骨、左傳僖公三十二年に「秦叔曰く、余、爾の骨を取めむ」とある。【七】瘴江、毒熱の氣の立ち籠むる南邊の江水。

【題義】左遷とは、官秩を貶せられることで、顏師古の漢書注に「漢時、上古の法に依り、朝列は右を以て尊となす。故に降秩を謂うて左遷となす」とある。藍關は、字解の中に見ゆ。姪孫湘、これも數ば前に見えて居たので、老成の子、韓愈の姪孫。韓愈が潮州に赴く時、この人は後から來て、藍關に於て追及したから、韓愈は、乃ち此詩を作つて之に示したのである。

【詩意】今回佛骨奉迎の一件に就いて、その非を極論し、一封の書を朝に九重に上つた處が、その夕に嚴詔を蒙り、潮州刺史に左遷せられて、これから八千里の道程を経て、その地に赴任せねばならぬ。



元來わが本志は、聖治の御世の爲に、後世に議を貽す様な弊事を除き去りたいといふに在るので、衰朽の此身を以て、遠地に貶謫せられ、餘生幾もないといふ様な事は、毛頭考へないので、たとひ、其地で死んだ處で、何とも思はない。昨日、長安を去つて、今日、ここに來かかり、首を回らして眺めれば、終南一帶の山山には、形雲横はつて、わが家は何處とも知られず、折から、降りしきる雪は、藍關を擁して、乗つて居る馬さへ進み兼ねる位。その時、汝が遠くから跡を追ひかけて來たのは、その厚情、感謝の至に堪へない。願はくは、これから吾に伴うて南荒に赴き、もし乃公が死んだならば、毒熱の氣立ちこむる江岸に於て、吾が骨を收め、すつかり、跡始末をして貰ひたい。

【餘論】李光地は「佛骨の一表、千古に孤映す。而して、この詩、これに配す。尤も妙なるは、許大の題目にして、除弊事の三事を以て了却するに在り」といひ、何義門は「沈鬱頓挫」といひ「結局は、即ち是れ肯て自ら其道を毀つて以て邪に從はざるの意、愆黜に非ず、亦た悲傷に非ざるなり」とある。それから、この詩に就いて極めて珍らしい異聞があるので、青瑣高議に「湘字は清夫、公の姪なり、落魄不羈、公、これを勉めて學ばしむ。乃ち笑つて詩を作り、能開頃刻花の句あり。公曰く、汝、能く造化を奪うて花を開かすかと。湘、遂に土を聚め、盆を覆うて、良久しうして曰く、花すすでに發せりと。盆を擧ぐれば、乃ち碧花二朵、葉間に小金字あり、乃ち詩の一聯、云ふ、雲横秦嶺一家何在、雪擁藍關一馬不前と。公、未だ詩意を曉らず、湘曰く、事久しうして驗すべしと。公、後、湘陽に貶

せらる。途に一人あり、雪を冒して來る。乃ち湘なり。湘曰く、公、花上の句を憶ふや、乃ち今日の事なりと。公、地名を詢へば、即ち藍關、再三嗟嘆して曰く、吾汝の爲に此詩を爲らむ」云云とあり。又百陽雜俎にも見え、湘の名は書いてないが、事實は、略ぼ同じである。その他、唐宋人の謂はゆる小説類にも、この事を轉載したものが、頻りに出で、明清の間には、韓湘子と題する可なり大きな小説さへ出來、見事に韓湘を以て仙家の徒弟として仕舞つた。そこで、蔣之翘は第一に之を論じ、翹、かつて之を考ふるに、公の従子老成、子を生む二、曰く湘、曰く滂。湘は、進士の第に登つて、大理丞となり、滂は、未だ仕へずして死す。はじめ、公が南谿の時、湘は年二十七、滂年十九、皆公に從つて以て行く。公、曾口に宿して湘に示すの詩（前に見ゆ）及び袁州に在つて作れる滂の墓志を觀て、見るべし。而して、この詩、末句、遠來と爲すところのものは、蓋し、公、すでに在りて、湘、はじめて此に追及す。而して、深く有意とするの言も、亦た感歎の意に過ぎざるのみ。竊に意ふに、或は是言に因り、又世に傳ふるところの仙人に韓湘子といふものあるを見、遂に傳會して此説を爲すか。抑も、異教を主とするもの、陰に公の正論を破らむと欲して、故らに此を爲し、以て其事を張大するか。況んや、公の貶は憲宗元和己亥に在り、又四年にして穆宗長慶癸卯たり。湘、はじめて登第す、豈に湘すでに仙を學んで、又出でて仕ふるか、その事、怪妄不經、史傳載するなし、而して、舊の公の詩を注するもの、乃ち之が爲に取る、鄙陋甚し」といひ、その言極めて精當である。なる程、潮州に

出かける時は、朝命を畏み、韓愈ひとり先に發し、韓湘は、跡片付をして、それから藍關に於て追及したので、第七句に知汝遠來應有意といふのも、格別深い意味ではない。又韓愈は、儒教を振興する爲に、専ら道釋二教を攻撃した處から、これ等の異教等が、韓湘といふ人物を造り上げ、韓愈の教を馬鹿にし、韓愈も、しめしが付かぬに閉口して居たといふ事實を捏造したものに相違ない。但し、他に韓湘といふ人が實在して居たか如何は、なほ研究を要することである。それから、上記の諸書には、韓湘が此詩を袖にして泣く泣く歸つて仕舞つたといふが、それも事實に反して居て、韓湘は、これより潮州まで同行し、それから韓愈が袁州に量移されたときも、從つて移居したことは、前にも一寸擧げてあつた韓滂墓誌銘に明かである。その文中「滂、清明遜憐、以て敏、書を讀んで倍す文、功、力人を兼ぬ。文詞を爲る、一旦奇偉驟に長じ、舊常に類せず（中略）吾、退いて大に喜び、その兄湘に謂つて曰く、云云と。すでにして、數月、疾を得て以て死す。年十九（中略）宜春郭南一里に葬る。嗚呼、其れ惜むべきのみ」とある。それから、後に見ゆる徐州贈族姪の五古に自云有奇術、探妙知三工、といふ句があつて、實際韓湘に仙術があつたとしても、或は、この族姪を韓湘に當てる人もあるが、韓湘は族姪の子で、即ち姪孫といふべく、さうかといつて、別に其人があらうとは思はれない。又この奇術でふ語は何を指すか、これだけでは、本當の事は分からず、元來これは、逸詩であるから、或は後人の偽作かも知れないので、直に之を取り上げて腫左に當てることは出来ない。それから、朱

竹兜も「雪雲の一聯、世傳へて、以て湘、先兆を示すと爲す。附會に出づるに似たり。何となれば、秦嶺、藍關は、畿内の近地、險遠と爲さず、退之の謫出に在つて、途中雪に遇ふ。以て自ら道へば、可なるのみ。湘をして奇を示さしむれば、何ぞ海氣昏水拍天と云はざるか」といつて居る。要するに、韓湘仙人説は、荒唐不稽、取るに足らぬ俗説である。次に、此詩は、日本にも行はれて、これに關する著明なる史實が二つあるから、下に引抄する。その第一は、太平記卷一無禮講附玄慈文談事の條である。

ここに美濃國の住人士岐伯耆十郎頼貞、多治見四郎次郎國長といふものあり、ともに、清和源氏の後胤として、武勇の聞こえありければ、資朝卿、様様の縁を尋ねて、昵び近づかれ、朋友の交、すでに淺からざりけれども、これ程の一大事を左右なく知らせむ事如何があるべからむと思はれければ、なほも能く能く其心を窺ひ見む爲に、無禮講といふ事をぞ始められける。その人數には、尹大納言師賢、四條中納言隆實、洞院左衛門督實世、藏人右少辨俊基、伊達三位房游雅、聖護院廳の法眼玄基、足助次郎重成、多治見四郎次郎國長等なり、その交會游宴の禮、見聞耳目を驚かせり。獻盃の次第、上下を言はず、男は、烏帽子を脱いで盃を放ち、法師は衣を著すして白衣になり。年十七八なる女の見形優に、膚殊に滑らかなるを二十餘人、すすし單衣ばかりを著せて、酌を取らせければ、雪の膚すき通りて、太液の芙蓉、新に水を出でたるに異ならず、山海の珍物を盡し、旨酒泉の如

く湛へて、遊び戯れ、舞ひ、歌ふ。その間には、只だ東夷を滅すべき企の外は、他事なし。その事となく、常に會交すれば、人の思ひ登むることもやあらむとて、事を文談に寄せむが爲に、その比、才覺無比の聞こえありける玄慧法印といふ文者を請じて、昌黎文集の談義をそ行はせける。かの法印、謀叛の企とは夢にも知らず、會合の日ごとに席に臨んで玄を談じ、理を析く、かの文集の中に、昌黎潮州に赴くといふ長篇あり、この處に至りて、談義を聞く人人、これ皆、不吉の書なりけり。吳子、孫子、六韜三略などこそ、然るべき常用の文なれとて、昌黎文集の談義を止めてけり。この韓昌黎と申すは、晚唐の季に出で、文才優長の人なりけり。詩は杜子美、李太白に肩を雙べ、文章は漢魏晉宋の間に傑出せり。昌黎が猶子韓湘と云ふものあり、これは、文字にも嗜まず、詩篇にも撰はらず、只だ道士の術を學びて、無爲を業とし、無事を事とす。ある時、昌黎韓湘に向つて申しけるは、汝、天地の中に化生して、仁義の外に逍遙す。これ君子の恥づるところ、小人の專とするところなり。われ常に汝の爲に之を悲むこと切なりと教訓しければ、韓湘大にあざ笑うて、仁義は大道の廢れたる處に出で、學教は大偽の起る時に盛なり。われ無爲の境に優遊して、是非の外に自得す、されば、真宰の臂を擧して、壺中に天地を藏し、造化の工を奪うて、橘裏に山川を峙つ、却つて悲むらくは、公の只だ古人の精粕を甘なつて、空しく一生を區區の中に誤ることをと答へければ、昌黎重ねて曰く、汝が言ふところ、われ未だ信せず、今すなはち造化の工を奪ふことを得てむ

やと問ふに、韓湘答ふることなくして、前に置きたる瑠璃の盆を打覆せて、やがて又引き仰向けたるを見れば、忽ちに碧玉の牡丹の花の輝媚たる一枝あり、昌黎驚いて之を見るに、花の中に金字に書ける一聯の句あり、雲橫秦嶺家何在、雪擁藍關馬不前云云。昌黎不思議の思をなして、これを讀んで一唱三歎するに、句の優美遠長なる體製のみありて、その趣向、落着するところを知り難く、手に取つて、これを見むとすれば、忽然として消え失せぬ。これよりしてこそ、韓湘、仙術の道を得たりとは、天下の人に知られられ。その後、昌黎、佛法を破つて儒教を貴ぶべき由、奏狀を奉りける答に依つて、潮州へ流さる。日暮れ、馬泥んで、前途程遠し、はるかに故郷の方を願れば、秦嶺に雲橫はつて、來つらむ方も覺えず、悼んで萬仞の嶮に登らむとすれば、藍關に雪滿ちて、行くべき末の路もなし、進退歩を失うて、頭を回らす處に、何より來れるともなく、韓湘、勃然として傍に在り、昌黎悦れて馬より下り、韓湘が袖を引いて、涙の中に申しけるは、先年碧玉の花の中に見えたりし一聯の句は、汝、われに豫め左遷の愁を告げ知らせるなり、今、又汝ここに來れり、料り知んぬ、われ遂に謫居に愁死して歸ることを得じと、再會期なうして、遠別今に在り、豈に悲に堪へむやとて、前の一聯に句を續いで八句一首と成して韓湘に與ふ。

一封朝奏九重天。夕貶潮州路八千。欲爲聖明除弊事。豈將衰朽惜殘年。雲橫秦嶺家何在。雪擁藍關馬不前。知汝遠來須有意。好收吾骨瘴江邊。

律詩 左遷至藍關示韓湘

韓湘、この詩を袖に入れて泣く泣く東在に別れにけり。誠なるかな、痴人面前に夢を説かずといふことを、この談義を聞きける人人の忘み思ひけるこそ愚なれ。

この一條に依つて、後醍醐天皇の時分に、昌黎文集が我が國に多少持て囃されて居たことや、朝鮮の或者は、この文集の講義を聞く位の素養のあつたことや、韓湘仙人説が佛者の間などに行はれ居たことなどが推測される。この中、韓愈を以て晩唐の季となし、韓湘を以て韓愈の猶子となせるは、一時檢點の未だ足らざりし筆者の誤であらう。次は、湯淺元祿の常山紀談附録雨夜燈の中なる「稻葉一徹、文學に依つて死を免されし事」の一條で、その全文は、左の通りである。

稻葉伊豫守一徹、織田信長に従ひけれども、信長心解けず、數寄屋にて茶を賜はり、その席にて刺し殺すべしとの巧みなり。一徹、數寄屋に入る時、相伴の三人、挨拶に掛物の繪の讀み給へといふ。これは、韓退之の詩にて、雲横秦嶺家何在、雪擁藍關馬不前といふ句あり。一徹、少し學問ありて、これを讀みけるに、相伴その心を問ふ。一徹、あらあら仔細を咄しければ、信長、壁越しに之を聞き、つと走り出で、一徹には荒勝負ばかりする勇士と思ひしに、今聞くとく、文學にも達せり、奇特の事、感ずる餘りに、實を語るべし、今日のもてなしは、茶の湯に非ず、其方を刺し殺さむとせし巧みなり、相伴の三人、皆懷劍を差したり、今日より永く我に従ひて、謀を致されよ、ゆめゆめ害心を止めたりと云はれければ、三人の相伴、懷より小脇差を取り出す。一徹

平伏して、死罪を御免され候事、忝く候、私も、内内、今日殺さるべきにて候はひと察し申し候へば、詮方なく、是非一人相手を取り申すべしと存じ、用意仕り候とて、これも懷劍を取り出して信長に見え申しければ、信長、いよいよ、その心がけを譽められけり。

この一條は、大槻磐溪の筆で漢譯せられ、近古史談の卷一にも載せてあつて、その方が、より多く人に知られて居るやうである。信長は、一徹の文學にも達して居るのを感じたといふが、實は、一徹が韓愈の忠諫を説いた其事に感じ、一徹の誠意を酌み取つて、その死を赦したのであらう。何は兎もあれ、韓愈の此詩が、日本に傳はつて、かくの如く、面白い事實を二つまでも構成したのは、まことに不思議な事である。

武關西逢配流吐蕃

嗟爾戎人莫慘然、嗟、爾、戎人、慘然たること莫れ、

湖南地近保生全、湖南地は近く生を保つて全からむ。

我今罪重無歸望、我今罪重くして歸る望なし、

直去長安路八千、直に長安を去る路八千。

律詩 武關西逢配流吐蕃

【字解】(一)戎人、戎は西夷、吐蕃は即ち今の西藏、西邊に在るが故に云ふ。(二)慘然、いたまし氣に見える。(三)湖南、今の湖南省一帶の地。(四)歸望、長安に召し歸される望望。

【題義】一統志に「武關は、西安府商州に在り」といひ、唐書地理志には「商州商洛縣東に五關あり」といつて居る。秦嶺山脈の東端に在る關所、唐書吐蕃傳に「吐蕃は、元と西羌の屬、百有五十種、河湟江岷の間に散處す」とある。吐蕃、即ち今の西蔵は、唐代、頻りに入寇したことがあつて、その交渉が頻繁であつた。この詩は、韓愈が潮州に赴く途次、藍田より商洛に出でひとし、武關に差しかかつた時、罪を得て配流せらるる西蔵人に遇ひ、同病相憐むの情に堪へず、仍つて賦して示したのである。

【詩意】ああ、汝、西蔵人よ、汝の配流せらるるは湖南で、その地も近く、命に別條は有るまいから、さう慘然として歎き悲むにも及ばぬ。われは、罪科重くして、長安を去ること八千里の彼方、潮州に流されるので、到底召し歸される希望だに無い位、これに比べて、少しは、自ら慰めるが善からう。

【餘論】朱竹垞の評に「苦を借つて苦を説く」とある、まことに簡切にして且つ奇警である。

次鄧州界

鄧州の界に次す

潮陽南去倍長沙。潮陽、南に去つて、長沙に倍す、  
戀關那堪又憶家。關を戀ふ、那ぞ堪へむ、又家を憶ふ。

【字解】(一)長沙、むかし賈誼の配流された處、蓋は前に見ゆ。  
(二)戀關、關城を戀ふ、即ち君を思ふ。  
(三)那堪、目が覆むこと。

心訝愁來惟貯火。心は訝り、愁來つて惟だ火を貯ふるを、  
眼知別後自添花。眼は知る、別後自ら花を添ふるを。

【註】商顏、商山をいふ、漢書地理志に「嵩より洛水を引いて商顏の下に至ることあつて、顏師古の注に商顏は商山の顛なり、これを顏といふは、顛は人の顛倒のことなり」とある。

商顏暮雪逢人少。商顏の暮雪、人に逢ふこと少く、  
鄧鄙春泥見驛踪。鄧鄙の春泥、驛を見ること賒なり。

【註】鄧鄙、左傳昭公九年に見ゆ、鄧州は邊鄙なるが故に、鄙の字か添へたのである。(二)早晚、何時の時に同じ。

早晚王師收海嶽。早晚、王師、海嶽を收め、  
普將雷雨發萌芽。普ねく、雷雨を將て萌芽を發せむ。

【題義】唐書地理志に「鄧州南陽郡、山南道に屬す」とある。この詩は、武關を過ぎし後、行き行きて鄧州の境に暫時止息せし時に作つたのである。

【詩意】潮州は、ここより南に當つて、その遠きことは、古しへ賈誼が貶謫された長沙の倍もある位。身は旅中に在つて、絶えず君を思ひ、又家を思ひ、まことに堪へられない。されば、愁來る時、この心ひたすら熱して、火を貯ふるかと疑はれ、目は、散散泣き明かしたから、別後愈よ霞んで仕舞つた。商山には、暮雪白く降り積つて、春なほ寒ければ、旅客極めて少く、鄧州は邊僻の地、新泥深く、ぬかるみ勝ちであつて、宿場は中遠い様に感ずる。今しも、藩鎮、なほ王命に服せざるものがあるが、何時、王師は、盡く之を平定し、海山を收めて一に歸し、そして、雷雨一たび到りて、草木が普

ねく芽を出すか、どうか、さういふ出たい時に早くめぐり合ひたいものである。  
【餘論】前聯は、稍や刻刻に過ぎて居るが、愁人の所懐を寫し出して、復た餘蘊なき様である。朱竹垞は「潮に示すの作に比すれば、運思細に入り、態、較や濃かなり、然れども、彼の渾然たるに若かず」と云つて居る。

題臨瀧寺

臨瀧寺に題す

不覺離家已五千、  
仍將衰病入瀧船。  
潮陽未到吾能說、  
海氣昏昏水拍天。

【字解】「五千」五千里の略、詩注に「漢書高帝紀、三尺を掲げて天下を取る、及び韓安國傳、本と朝の字なし、古しへ、固より此の如く造語するものあり、公、離家已五千といふときは、その里たるを知るなり、或は歌後を以て之を指するは非なり」とある。  
【題義】詩注に「臨瀧は、韶州の縣名。唐の武德四年に置き、貞觀八年に廢す、今、その地、曲江縣に屬す。公、六卷に瀧吏の詩あり、具さに其詳を述ぶ」とある。しかし、その詩中には、寺の事は見え、外に地誌の類にも、とんと書いて無いが、矢張、臨瀧に在つたから、土地の名を寺に負はしたも

のと思はれるが、その後、廢絶に歸して仕舞つたのであらう。この詩は、韓愈が韶州を過ぐるとき、臨瀧寺に題したのである。

【詩意】長安を離れて、知らぬ間に、すでに、五千里の遠きに及び、前程は猶は遠たるが故に、衰病の身を扶けて、早潮を下る船に乗り込んだ。潮州は、如何なる處か、自分は、まだ其地に到らぬけれども、その風土は能く説くことが出来るので、見たす限り、海氣昏昏として立ちこめ、逆巻く水は、空を拍つばかり、まことに物すごく恐ろしき處である。  
【餘論】朱竹垞は「妙處、全く吾能說、三字の上在り」と云つて居る。

晚次宣溪辱韶州張端公使君惠書敘別酬以絕句二章

晚に宣溪に次し、韶州の張端公使君、書を惠し別を敘するを辱うし、酬ゆるに絶句二章を以てす

韶州南去接宣溪、  
雲水蒼茫日向西。  
客淚數行元自落、  
客淚數行、元と自ら落つ、

律詩 題臨瀧寺 晚次宣溪辱韶州張端公使君惠書敘別酬以絕句二章

【字解】「南去」南に向へば。  
【一】「雲水」雲と見まがふ水。  
【二】「客淚」南方曠地特産の鳥で、形、鶇鶇に似て、胸背綠といふ聲を出し

鷓鴣休傍耳邊啼

鷓鴣、耳邊に傍うて啼くを休めよ。

て鳴き、霜露を長れて、秋をになれば、早曉啼に出で、時あつて夜飛ぶ

も、樹葉を以て背よを覆ふといふことである。李白は、宮女如「花猶」春殿、只今惟有「鷓鴣飛」といひ、賈島は、日暮東風香草軟、鷓鴣飛上越王臺といひ、ともに、南方の風土に關したものである。

【題義】蔣注に「按するに、韶州は潮州を去ること、尙ほ遠し。これ當に元和十四年の夏に在つて作るなるべし。宣溪は、今の韶州府城の南八十里に在り、源、螺坑に出づ」とある。又唐書地理志に「韶州始興郡は嶺南道に屬す」とある。次に、端公は、國史補に「御史相呼んで端公となす」とある。使君は、刺史の尊稱、張、名は曙、御史中丞、今、韶州の刺史たる人と見える。この詩は、晩に宣溪に宿りし時、韶州駐在の張御史から、御丁寧にも、手紙を贈つて、餞別の意を述べられたから、これに酬ゆる爲に、絶句二首を作つたといふことである。

【詩意】韶州から南に向へば、地は宣溪に接して居るが、折から、雲と見まがふ水も、蒼茫として、日は西に向つて、將に暮れむとして居る。相去ること八十里、ここに御出になるのも、容易でないからといふので、態態、手紙を下さつたのは、感謝に堪へぬ次第である。但し、予は、さらでだに、客涙數行、自然に落つる程であるから、鷓鴣が耳に近く啼かうものなら、愈よ堪へられぬから、しばらく鳴くなといつて依頼しつゝある程である。

【餘論】朱竹垞の評に「如何此時恨、嗷嗷夜猿鳴、鄉心正欲絕、何處持寒衣、皆是此意。これ、但だ元自、休傍の四字を加へて、境遂に別然、終に稍や意を著くるを覺ゆ」とあり。

兼金那足比清文

兼金も那ぞ清文を比するに足らむ、

【字解】(一)兼金、一以て他の數倍を兼れるといふので、金の最も精純なるもの。(二)清文、無垢にして文彩あること。(三)嶺南巡管内、嶺南節度使の管轄區域内。

百首相隨愧使君

百首相隨つて、使君に愧づ。

俱是嶺南巡管内

俱に是れ、嶺南巡管の内、

莫欺荒僻斷知聞

荒僻に欺かれて、知聞を斷つこと莫れ。

兼は堅固される意、荒僻の爲に堅固される。【五】知聞、李沛の詩に「桂林豪客夜知聞」とあつて、音づれる、存問する。

【詩意】張使君は、さながら兼金の如く、その人物は、純粹にして、且つ文彩に富んで居られる。予は、毎百首位の近作を身に隨へて居るが、愧かしながら、とても使君にも及ばない。しかし、潮州も、韶州も、均しく嶺南節度使の管轄區域内で、さう隔つて居る譯でもないから、荒僻の爲に欺かれ、非常に遠い様に思つて、今後、存問を絶つ様な事の無い様に願ひたい。

【餘論】筆墨閒錄に「潮州以後の詩、最も哀深、宣溪絶句等の詩、絶だ味あり」と云ひ、唐宋詩醇にも、二首ながら連載してあるが、朱竹垞は「微に俚に近し」といつて、後首の方を斥けて居る。

題秀禪師房

秀禪師の房に題す

橋夾水松行百步。橋は水松に夾まつて、行くこと百歩、

竹牀莞席到僧家。竹牀莞席、僧家に到る。

暫拳一手支頭臥。暫く一手を拳にして頭を支へて臥し、

還把魚竿下釣沙。還た魚竿を把つて釣沙に下る。

【字解】【一】水松。水邊の松。

【二】竹牀。竹で造つた臥牀。

【三】莞席。蘭で織つた席。

【四】拳。一手。一方の手を拳にする、即ち脇枕。

【五】釣沙。釣に通したる沙岸。

【題義】秀禪師は、如何なる人か分からぬが、この排列の順序から云ふと、宣溪附近に房を構へて居て、韓愈が之を訪問したものらしく、その時、房壁に題する爲に、この詩を作つたのである。

【詩意】兩岸には松が生ひ茂り、その間に橋が懸つて居て、その長さは百歩ばかり。これを渡り盡すと、秀禪師の僧房で、竹牀莞席が用意してある。そこで、暫時脇枕をして、寝をべつて居たが、やがて起きて、今度は、魚竿を手にして釣れさうな沙岸に下りて往つた。

【餘論】朱竹垞は「四句四事、清迥絕俗」といひ、四句全く別殊の事であるが、遞次的に關係の有る處が面白い。

將至韶州先寄張端公使君借圖經

將に韶州に至らむとし、先づ張端公使君に寄せて圖經を借る

曲江山水聞來久。曲江の山水、聞き來ること久し、

恐不知名訪倍難。恐らくは、名を知らず、訪ふこと倍す難からむことを。

願借圖經將入界。願はくは、圖經を借りて、將に界に入らむとす、

每逢佳處便開看。佳處に逢ふ毎に便に開いて看む。

【字解】【一】曲江。唐書地理志に「韶州に曲江縣あり、武德四年、昭顯・良化の二縣を置きしが、貞觀八年省く」とある。【二】圖經。地圖の總稱。

【題義】韶州に至らむとするに際し、先づ刺史の張署に寄せて、地圖を借らむが爲に、此詩を作つた。順序の上から云ふと、この詩は晩次「宣溪」の前に在るべきもので、韓愈は地圖を借りて韶州に入つたが、宣溪に宿し、驛路は韶州の治所にかからぬ處から、張刺史にも逢はず、仍つて、刺史から書を寄せて、別意を表したのである。

【詩意】曲江の山水の觀るに足ることは、久しい前から耳にして居るが、前以て、名を覚えて居らぬと、尋ねることが一層六つかしいといふ心配がある。そこで、君から地圖を拜借し、それを持つて、

律詩 題秀禪師房 將至韶州先寄張端公使君借圖經



韶州の界に入らうと思ふ。途すがら、風光佳絶の處に逢つた其度ごとに、その地を開きさへすれば、すぐに名も知れて、折角の名所も見落さずに済むであらう。

【餘論】朱竹垞の評に「人皆この意あり、かくの如く寫し來つて自ら妙」とある。大抵、かういふ詩は、遺憾なく言ひ終せてあれば、平淺も亦た佳なりで、それには、自然の根柢を要する。なほ舊注には「この詩、及び下、韶州留別の詩に至るまでは、皆潮より袁に移る道中の作」とあるが、顧嗣立等の説に従へば、この首及び次の始興江口も、矢張、潮州に向ふ途中で、袁州に移る道中の作は、その次の韶州留別以下である。

過始興江口感懷

始興江口を過ぐ感懷

憶作兒童隨伯氏。感ふ、兒童と作つて伯氏に隨ひしを、

南來今只一身存。南來、今只だ一身存す。

目前百口還相逐。目前の百口、還た相逐ふ、

舊事無人可共論。舊事人の共に論すべきなし。

は、その後七年を経、即ち十歳の時である。舊注には「大曆十四年四月、公の兄、起居舍人韓會、罪を以て韶州刺史に貶せられ、公、會に隨つて遷る、時に年十歳とあるが、年十歳は善いととして、大曆十四年四月は誤りで、十二年三月、元載、罪を以て葬せられ、五

【字解】(一) 題伯氏、伯氏は長兄、即ち韓會。新唐書の本傳に「會

生まれて三歳にして孤、伯兄會の養に託せざるに隨ふ」とあつて、三歳で孤となると同時に、南方に移つた。韓に隨つて遷るが、南方に移つたのは、

月、韓會は元載に坐して官を貶せられたのである。(二) 南來、今次韶州に左遷せられしに就いて南方に來りしこと。(三) 百口、百人、家族の多きをいふ。(四) 相逐、一緒に旅行するをいふ。

【題義】水經注に「江水西して始興縣南を徑す」とある。江口は、即ち上に見えた宜溪の下流で、始興縣を過ぎて始興江と稱するものと見える。この詩は、その江口を過ぎる時、舊事を追懷して作つたのである。

【詩意】おもひ出せば、むかし、兒童たりし時、長兄の貶謫に伴はれて、この地を経過したことがあつた。四十年後の今日、左遷の厄に遭つて、又しても、南方に來ると、只だ吾が一身の存するのみである。眼前には、百名の家族どもを隨へて居るが、昔その時に居合はさぬもので、むかしの事を共に話すべき人も無い。

【餘論】蔣之翘は「一結、無限の悲憤、人を動かす」といひ、朱竹垞は「道ひ得て真切、鍊り得て簡妙」といつて居る。

韶州留別張端公使君

韶州、張端公使君と留別す

來往再逢梅柳新。來往、再び梅柳の新なるに逢ふ、

【字解】(一) 再逢梅柳新、韓愈

律詩 過始興江口感懷 韶州留別張端公使君

別離一醉綺羅春。別離、一たび綺羅の春に酔ふ。

久欽江總文才妙。久しく欽す、江總文才の妙なるを、

自歎虞翻骨相屯。自ら歎す虞翻骨相の屯なることを。

鳴笛急吹爭落日。鳴笛、急に吹いて、落日を争ひ、

清歌緩送欵行人。清歌緩く送つて行人を欵む。

已知奏課當微拜。すでに知る、奏課の當に微拜すべきを、

那復淹留詠白蘋。那ぞ復た淹留して白蘋を詠む。

子詹事と爲さむと欲す、樊曰く、江總は文華の人、太子何ぞ總に贈らむ」とある。何遜門は又就を爲して「南史、劉之造、かつて總に詩を贈い、深く相欵抱す、蓬城陥り、難を會稽に遷くるや、總の弟遜物、廣州に據る、會稽より往いて依る。嶺南に流寓して歳を積み、陳の天嘉四年、中書侍郎を以て徵し還さる。この句、斷草、嶺外の事を用ひ、第七の奏課微拜と呼應す」といつて居る。【三】虞翻骨相屯、吳志虞翻傳に「字は仲翔。朝、すでに孫峻に歸し、命ぜられて功曹となり、出でて富春の長となる。後、鄧都尉となり、數に顔を犯して謙辭す。孫權悅ばず、坐して丹陽の溧陽に徙され、後又交州に徙さる」とあり。吳志の注なる別傳に「謂、南方に放棄せられ、云々自ら恨む、破節骨體弱ならず、上を犯して罪を獲、當に長く海隅に没すべし」とある。骨相屯の屯は屯聚、即ち不運なること。【四】欵行人、欵は留むと訓す、蔣注に「請本、欵を感に作る。云ふ、むかし、二宋、この詩を評し、小宋は感の字の誤なるを疑ひ、大宋は、初め以て然りと爲さず。後に善本を得て、はじめて信す」とある。【五】奏課、功課を天子に奏し上る。【六】詠、白蘋、前に和武帝八の詩中に見えて居る。柳惲の詩、汀洲採白蘋、を指して云ふ。

は元和十四年正月、佛骨を論ずるを以て潮州に貶せられ、三月、潮州に至り、十月、袁州に量移し、十五年正月、袁州に遷つて、その往來して韶州を上下する、皆梅柳新なるの時に於てしたから、特に再遊といつたのである。【二】久欽江總文才妙、陳書江總傳に「總、字は總持、能く文を屬し、後主に幸せられ、多く御篇あり、好事相傳へて風靡す」とあり、同書孔奐傳に「後主、江總を以て、太子詹事と爲さむと欲す、樊曰く、江總は文華の人、太子何ぞ總に贈らむ」とある。何遜門は又就を爲して「南史、劉之造、かつて總に詩を贈い、深く相欵抱す、蓬城陥り、難を會稽に遷くるや、總の弟遜物、廣州に據る、會稽より往いて依る。嶺南に流寓して歳を積み、陳の天嘉四年、中書侍郎を以て徵し還さる。この句、斷草、嶺外の事を用ひ、第七の奏課微拜と呼應す」といつて居る。【三】虞翻骨相屯、吳志虞翻傳に「字は仲翔。朝、すでに孫峻に歸し、命ぜられて功曹となり、出でて富春の長となる。後、鄧都尉となり、數に顔を犯して謙辭す。孫權悅ばず、坐して丹陽の溧陽に徙され、後又交州に徙さる」とあり。吳志の注なる別傳に「謂、南方に放棄せられ、云々自ら恨む、破節骨體弱ならず、上を犯して罪を獲、當に長く海隅に没すべし」とある。骨相屯の屯は屯聚、即ち不運なること。【四】欵行人、欵は留むと訓す、蔣注に「請本、欵を感に作る。云ふ、むかし、二宋、この詩を評し、小宋は感の字の誤なるを疑ひ、大宋は、初め以て然りと爲さず。後に善本を得て、はじめて信す」とある。【五】奏課、功課を天子に奏し上る。【六】詠、白蘋、前に和武帝八の詩中に見えて居る。柳惲の詩、汀洲採白蘋、を指して云ふ。

【題義】この詩は、韓愈が潮州より袁州に量移されしに因つて途に上り、復た韶州を過ぎ、今度は刺史張昭に面會し、その去る時、留別の爲に作つて示したのである。

【詩意】去年も、今年も、この韶州を通過し、兩度ともに梅柳はじめて新なる春の頃であり、殊に、今回は、別離に際し、綺羅の筵に於て一醉するを得、君の御厚意は、まことに感謝に堪へぬ次第である。君の文才は、古しへの江總の如く、久しく欽慕して居たが、予は、虞翻と同じく、骨相からして、すでに不運に逢ふものと決まつて居るから、致し方もない。今しも、離筵興酣なるとき、笛の音は急に鳴いて、落日を争ひ、清歌の聲は、緩く送つて、旅ゆく人を留めむとして居る。しかし、予は功課を奏上され、やがて、都に召し還されることもあらうから、ここに淹留して白蘋を詠じて居る譯には行かぬ。

【餘論】楊慎は説をなし、「退之の張昭に贈るに云ふ、久欽江總文才妙、自歎虞翻骨相屯、忠直を以て自ら比し、しかも、奸佞を以て人を待つ、豈に聖賢己を謙し人を怒するの意ならむや。昭の人と爲りを考ふるに、亦た奸佞江總に似たるものなし、もし文才を以て論ずといはば、何ぞ鮑照、何遜を用ひずして、必ず江總といはむや、これ韓公平生の病處にして、宋人乃ち之を學んで地步を占むと爲すなり、噫」といつて、ひどく攻撃して居るが、これに就いては、何遜門の説が一番善い。つまり、韓愈は、劉之造を以て自ら居り、その引合として江總を出したので、謂はゆる斷草である。これが、鮑照、何遜ならば、南方と何等の關係なく、虚泛殊に甚しいものになるので、楊慎の提説は、折角ながら、取るに足らぬ。そ

れから、朱竹垞は「格平かに、調穩かに、情を寫し、景を點して、皆合拍、これを讀んで味あり」といひ、何義門は「起句再の字、末句淹留の字と反對」といひ、「欺行人」欺の字、諸本感に作る、按ずるに、感に作らば、便ち緩の字と情なし」といひ、その用字の工夫自ら細なることを賞して居る。

量移袁州張韶州端公以詩相賀因酬之

袁州に量移さる、張韶州端公、詩を以て相賀す、因つて之に酬ゆ

明時遠逐事何如

明時遠逐、事何如、

遇赦移官罪未除

赦に遇ひ、官を移されて、罪未だ除かず。

北望詎令隨塞鴈

北望、詎ぞ塞鴈に隨はしめむ、

南遷纔免葬江魚

南遷、纔に江魚に葬るを免る。「むとす。

將經貴郡煩留客

將に貴郡を経て、客を留むるを煩はさし

先惠高文謝起予

先づ高文を惠んで、予を起すを謝す。

暫欲繫船韶石下

しばらく、船を韶石の下に繋ぎ、

上賓虞舜整冠裾

虞舜に上賓して、冠裾を整へむと欲す。

【字解】(一)明時、聖明の世。

(二)遠逐、遠地に放逐せられる。

(三)塞鴈、塞上に向つて歸る鴈。

(四)韶石、水鏡注に「韶石は、舜あり、兩石對峙して雙圓に似たり」といひ、袁州郡志に「韶石は、舜、かつて此に登つて樂を奏す、今廟の在るあり」と見ゆ。韶は舜の創めた樂であるから、名づけたのであらう。

(五)上賓、ここでは、舜の廟に參詣すること。

【題義】唐書地理志に「袁州宜春郡、江南道に屬す」とある。量移とは、善地に移されること。この題は、一に「袁州に量移す、張韶州が先づ詩を寄せて賀するに酬ゆ」に作り、或は「袁州に量移す、張韶州、先づ詩もて賀せらる、因つて之に酬ゆ」に作つてあるが、究極は同一で、袁州に量移されたに就いて、韶州刺史張曙が慶賀の詩を寄越したから、これに酬ゆる爲に作つたといふので、順序からいへば、前の韶州留別の先に在るべきものである。つまり、この詩は、まだ潮州に居る時に作り、それから、愈よ出發し、韶州に於て張曙に會し、仍つて前詩を作つたのである。

【詩意】この聖明の世に際して、遠地に左遷されたのは、よくよくの事で、今日赦に遇うて袁州に量移されたものの、當日の罪科が全く除き去られたといふ譯でもない。北望して、長安の方に向へば、塞上に歸る鴈に隨つて、一緒に行きたいと思ふが、まださうもならず、稍や南方に遷されたが、袁州は善土で、わづかに江魚の腹中に葬られることだけは免れた始末。やがて發程すれば、乾度、貴郡を通過し、隨分、お世話に成ることであらうし、第一に佳作を惠まれて、予を起されたのは、感謝に勝へぬ次第である。貴地には、韶石といふ處があるさうだが、しばらく舟を其下に繋ぎ、名だたる虞舜の廟に參詣する爲に、衣冠を整へて上陸することであらうから、その時は、どこか御案内をして戴きたいものである。

【餘論】李光地は「末句、これを離騷の謂はゆる麗敷、祗以陳辭に取る、難を蒙り、志を正しうする

の氣象あり」といひ、朱竹垞は「罪未除、最も是れ痛心、北風雨魚、對工にして意切、但だ、頸聯、指事翻つて煩絮、味少きを覺ゆ。點景二句を入るるの善と爲すに若かず」といつて居る。

次石頭驛寄江西王十中丞閣老

石頭驛に次し、江西王十中丞閣老に寄す

憑高試迴首、一望豫章城。高きに憑つて試に首を廻らし、一たび望む豫章城。

人由戀德泣、馬亦別羣鳴。人は德を戀ふに由つて泣き、馬亦た羣に別れて鳴く。

寒日夕始照、風江遠漸平。寒日、夕はじめて照らし、風江、遠くして漸く平かなり。

默然都不語、應識此時情。默然として、すべて語らず、應に此時の情を識るなるべし。

【字解】(一)豫章城、唐書地理志に「洪州豫章郡」とあり、水經注に「漢の高祖六年、灌嬰に命じて、以て豫章郡となし、ここに治す、即ち灌嬰の築くところなり」とあり、歷代の說に「豫章郡、樹、庭中に生ず、故に名づく」とある。(二)風江、風の吹き渡る江水。

【題義】水經注に「贛水の西岸に盤石あり、これを石頭といふ、津歩の處なり」とあり、蔣注に「豫章郡の北に在り、今江西贛州に屬す」とある、王十中丞閣老は、自注に仲舒とあつて、舊唐書の本傳

には「仲舒、字は宏中、太原の人、穆宗即位、召して中書舍人と爲す、出されて洪州刺史御史中丞江西南道觀察使となす」とある。この詩は、元和十五年(秋)韓愈が袁州より召し還された時、石頭驛に次して、王仲舒に贈つたので、仲舒は、この年間正月、はじめて著任したばかりである。

【詩意】高い處に登り、試に首を廻らして豫章郡城を望むと、心緒濶涼として、まことに堪へられない。われは、君の德を慕ひ、しかも、今次、お目にかかることが出来ず、すると、馬も亦た其羣に別れたことを傷むが如く、悲しい聲を出して嘶いて居る。終日空は曇つて居たが、夕暮になつて、寒日はじめて照らし、風吹き渡る江水も、遠い處は、波も次第に穩かになりかけて來た。默然として、すべて語らざれども、君も亦た此時の我が思を推察して下さるであらう。

【餘論】朱竹垞は第六句を賞し、その評に「五六工、風江の字佳、もし江風ならば、常語のみ、且つ漸平は正に江を指して言ふ」とある。何義門は、又第三句に懷らず「句邊直」といつて居る。

遊西林寺題蕭二兄郎中舊堂

西林寺に遊び、蕭二兄郎中の舊堂に題す

中郎有女能傳業、中郎、女の能く業を傳ふるあり、

【字解】(一)中郎有女、後漢書

律詩 次石頭驛寄江西王十中丞閣老 遊西林寺題蕭二兄郎中舊堂

伯道無兒可保家。伯道、兒の家を保つべきなし。

偶到匡山曾住處。偶、匡山曾住の處に到れば、

幾行衰淚落煙霞。幾行の衰淚、煙霞に落つ。

列女傳に「蔡邕の女、名は瑛、字は文姬。與平中、天下喪亂、胡騎に獲らる。曹操、邕の剛なきを痛み、金甌を以て之を贖ひ、重れて董祀に嫁せしむ。因つて問うて曰く、聞く、夫人

の家、先に墳墓多しと、驚は能く憤懣するや否や。文姬曰く、むかし、亡父、遺書四千許卷を賜ふ、流離塗炭、存するものあるなし、今節愷するところ、わづかに四十餘篇と。ここに于て、繕書して之を送る、文に遺蹟なし」とある。(一)伯道無兒、晉書鄭啟傳に「啟、字は伯道、河東太守たり。永嘉の末、石勒に殺す。啟、その兒及び其弟の子姪を擔うて逃る。兩つながら全うする能はざるを度り、乃ち曰く、吾が弟、早く亡ふ、唯だ一息あるのみ、理、絶すべからず、應に自ら我が兒を養ふべきのみ。幸にして存するを得ば、我、後、當に子あるべしと。乃ち其子を養つ。江東に至り、向者左僕射に至つて卒す。卒に以て嗣なし。時人、これが語を爲して曰く、天道無知、鄭伯道をして兒なからしむ」とある。(二)匡山、即ち廬山、廬山記に「匡俗は周の成王の時に出生、生まれて神靈、隱居豫章、この山に處す、故に、山、號を取るとある。(三)煙霞、山中の景色をいふ。

【題義】西林寺は即ち廬山寺で、その山傍に、故の郎中蕭存の書居の址があつたから、これを弔うて作つたのである。題下の自注に「蕭兒、女あり、出家す」とある。唐書に「蕭存、字は伯誠、建中の初、殿中侍御史に遷り、四たび比部郎中に遷り、表延齡の姦を疾みて官を去り、風痺にて卒す。韓愈、少にして存に知らる、袁州より還るとき、廬山の故居を過存す。而して、諸子前に死し、唯だ一女在り、爲に其家を經紀す」とあり、因話錄には「蕭存は穎士の子、金部員外となり、檢校倉部郎中に終る。

三子を生む、皆早世、文公、少時、かつて金部の知賞を受く。袁州より入つて國子祭酒となるに及び、途、江州を經、因つて廬山に遊び、金部の山居を過ぎ、諸子の淵謝を訪知し、惟だ二女あるのみ。因つて、詩を賦して云云、百練を留めて以て之を捨ふ」とある。唐書には一女、因話錄には二女とあるが、孰れが正しいか分からぬ。それから、蕭存の父蕭穎士は、李華等と共に、古文家として知られた人で、蕭存も、亦た梁蕭と親善であつたと云へば、必ず其の家業を承けて、古文を善くしたのであらう。その外、韓會とも交が殊に親しかつたといふので、韓愈は、會の弟なる處から、早くより蕭存に知られ、その眷顧を受けたので、死後その遺族を賑恤したのも、如何さま、尤も至極の事である。それから、方崧卿は、官を棄てて廬山に歸る、廬山、今、猶は蕭存・魏宏・李渤、同じく大林に遊ぶの題名あり」と云つて居る。

【詩意】蕭君歿すること、すでに久しく、能く傳家の業を傳ふるに足る才女あるは、さながら、蔡中郎の様であるが、家を相續して行く男子なきは、恰も鄭伯道の如く、まことに、傷ましいことである。今、偶然、廬山なる君が舊居の址を尋ねると、物在つて人なく、ここに昔日知遇の恩を想ひ出でて、追慕自ら禁せず、われとても、老衰の身、幾行の涙が煙霞に降り注ぐのみである。

【餘論】この詩は、因話錄にも見えて居るが、いささか文字の異同があつて、左の如くである。中郎有二女能傳業。伯道無兒可保家。今日匡山過舊隱。空將衰淚對煙霞。

格別の事でも無いが、矢張、前に掲げた方が、文字が整うて居るので、もしかすると、因話録の方が初作で、これは、後から改竄したのかも知れない。前半、中郎・伯道、ともに其人に切、斷じて移易すべからず、後半は悽惋無比。韓集中には、一寸他に比類なきものであるのに、後人、これを翻造するもの少きは、何の故か、いささか怪訝に堪へぬことである。

自袁州還京行次安陸先寄隨州周員外

袁州より京に還り、行いて安陸に次し、先づ隨州周員外に寄す

行行指漢東。暫喜笑言同。行行漢東を指す、暫く喜ぶ笑言同じきを。

雨雪離江上。兼葭出夢中。雨雪、江上を離れ、兼葭、夢中を出づ。

面猶含瘴色。眼已見華風。面、猶ほ瘴色を含み、眼、已に華風を見る。

歲暮難相值。酣歌未可終。歲暮相値ひ難し、酣歌未だ終るべからず。

【字解】(一)漢東、左傳桓公六年に「漢東の國、隨を大と爲す」とある。漢水の東。(二)笑言、言笑・笑語に同じ。(三)夢中、夢の中ではない、留夢澤中の時。(四)瘴色、瘴は、前に數ば見えた通り、瘴熱の氣。(五)華風、中原の華美な手ぶり。

【題義】蔣注に「唐本に自貶所蒙恩、袁州除官還京に作り、凡そ六字多し、亦た顛倒重複して曉

るべからず、疑ふらくは、袁州の字、當に貶の字の上に在り、或は注して所の字の下に在るべし。一本に袁州の下、除官の二字あり、亦た通す。隨、一に循に作る。經由の道里を以て之を考ふるに、是非ず。又復に作る。蓋し循の字に由つて誤る。他の説に非ざるなり」とある。すると、矢張、ここに掲げたのが、文義が一番順である。唐書地理志に「安州安陸郡は、中都督府、淮南道に屬す、隨州は漢東郡山南道に屬す」とある。後世は、兩處とも、湖廣德安府に屬して居た。方崧卿の説に據ると「周員外は周君巢なり、時に隨州刺史たり」とある。この首は、袁州より召されて、將に京に還らむとし、行いて安陸に宿りし時、豫め隨州刺史周君巢に寄せたのである。

【詩意】都に上る途すがら、行き行きて漢東を指し、お目にかかつて一緒に談笑することが出来るだらうと、その事を喜んであてにして居た。冬の最中、雨雪寒く降り注ぐ頃、江上の路を離れ、それから、兼葭の枯れ残れる中を通つて、やつと雲夢澤を出ぬけたから、これから先は、路は平で、葦も大分樂になる。南方より歸るのであるから、わが顔は、なほ瘴癘の色を含めども、眼前に中原の華美なる手ぶりを見るのは、まことに嬉しい。今しも、歲末に近き頃、君も定めて御多用で、ひよつと相逢ふことは出来ぬかも知れぬと思へば、今しも、酒酣なるに乗じて、自ら歌ひ出したが、せめてもの心遣りであるから、容易に止めもせず、やがて、この詩を作つて、君に呈する次第である。

【餘論】朱竹垞は「虛虛景を道ひ、情を言ひ、却つて雅味あり」といつて居る。しかし、この詩の起

結を見ると、すでに逢つたのだが、歳暮に際して再び逢ふことも出来ぬから、酣歌して十分に歡を盡さうといふ意味に取れる。但し、題に「安陸に次して、先づ寄す」とあるから、これから逢はうといふので、上の如く解釋したのであるが、何分にも、語字聊か足らず、爲に晦澁を來たした様な傾向あるは、稍や遺憾である。

題廣昌館

廣昌館に題す

白水龍飛已幾春。白水龍飛んで已に幾春

偶逢遺跡問耕人。偶ま遺跡に逢うて耕人に問ふ。

丘墳發掘當官路。丘墳發掘して、官路に當る、

何處南陽有近親。何れの處か南陽に近親ある。

【字解】(一) 白水 文選東京賦

に我世祖盤之、乃龍飛白水とあつて、薛綜の注に世祖は光武を謂ふ、白水は南陽を謂ふ、白水龍は世祖起るところの處なりとある。(二) 當官路 發掘した物を官道に投げ出

してある。(三) 南陽有近親 後漢書劉隆傳に「時に天下無田、多く實を以てせず、帝、陳留の東廩上書を見るに、云ふ、颍川安縣は問ふべし、河南南陽は問ふべからずと。帝、吏に由を詰る。吏服せず。時に、顯宗、東海谷たり、年十二、曰く、河南は帝城、近臣多し。南陽は、帝郷、近親多し。田宅、制に踰ゆるは、準と爲すべからずと。帝、吏を詰問す。吏、乃ち服すること、顯宗の對の如し」とある。つまり、南陽は、皇家の近親が多く居るといふので、吏も十分に之を檢問せず、田宅、その制に踰ゆるも、大抵見過がして置いたといふこと。

【題義】 蔣注に「一統志に、廣昌館は東陽縣北に在りと。按ずるに、東陽は、唐、隨州に屬し、今、襄陽府に屬す。本と漢の南陽郡、蔡陽縣の地、江周廣昌郡を置く。隋、廢して、襄陽縣と改む。漢の世祖光武、實に此に産し、その故宅、尙ほ存す」とある。この詩は、廣昌館を過ぎ、漢代の遺跡の破滅せらるる現況を傷んで作つたのである。

【詩意】 後漢の光武帝が白水の地より龍飛し、炎運中興の大業を爲してから、幾年になるか、今しも、偶然その遺跡たる廣昌館を通りかかり、取り敢へず、畑を耕す農人を呼びかけて、色々問ひ試みたる。ふと見れば、このあたりに在つた墳墓などは、近ごろ發掘されて、さまざまの物が官道に散らばつて居る。むかし、南陽には、皇室の近親が多く居るからといつて、特別の取扱を受けて居たといふが、千年後の今日、近親も何も有つたものではないので、この有様は、まことに慘澹たるものである。

【餘論】 蔣之翹は「これは、楚の昭王之廟に題すると、情事俱に感慨極まりなし」といひ、朱竹垞は「即ち張孟陽七哀の詩、しかも、四語を以て遺ひ盡す。何等の朗快」といつて居る。張孟陽は即ち晉の張載で、七哀の詩は、左の通りである。

秋風吐商氣。蕭瑟掃前林。陽鳥收和響。寒蟬無餘音。白露中夜結。木落柯條森。朱光馳北陸。淖景忽西沈。願望無所見。唯觀松柏陰。肅肅高桐枝。翩翩棲孤禽。仰聽離鴻鳴。俯聽蜻蛉吟。

律詩 題廣昌館

五四三

哀人易感傷。觸物增悲心。邱隴日已遠。纏綿思彌深。憂來令髮白。誰云愁可任。裴徊向長風。淚下沾衣襟。

寄隨州周員外

隨州周員外に寄す

陸孟丘楊久作塵。陸孟丘楊、久しく塵と作る、  
同時存者更誰人。同時に存するもの、更に誰人。  
金丹別後知傳得。金丹別後、知る傳へ得たるを、  
乞取刀圭救病身。刀圭を乞取して病身を救ふ。

【字解】 陸孟丘楊、方岳解

の解に「公、陸長源、孟叔度、丘頤、楊凝及、周君巢と同じく、董晉の幕客たりしが故なり」とある。【二】久作塵、死没して、すでに久しきないふ。【三】金丹、唐注に「周、金丹

服師の術を好む、柳子厚集中、周君巢に答へて「師藥久壽を論する書あり、是れなり」とある。なほ、この事は、餘論の項に於て附説することにしやう。【四】刀圭、本草に「凡そ散藥には刀圭と云ふものあり、方寸の七を十分するの一準、梧桐子の大きの如きなり。方寸の七とは、七を作るに、正方一寸、抄散取つて落ちざるを度となす」とある。すると、刀圭は、散藥を割合する時、標準として用ふる七であつて、轉じて、割合方を云ふのである。

【題義】 隨州周員外は、前にも見えた隨州刺史周君巢。この詩は、途中から其人に寄せたので、どうやら、逢はずに仕舞つたものと見える。

【詩意】 お互に一緒に董晉の幕客として、毎に徵逐して居た陸長源・孟叔度・邱頤・楊凝等の諸人は、いづれも、久しい前に死んで、黃塵に化して仕舞ひ、今日生き残つて居るものは、外に誰があるか。君は、平生、金丹を服餌することを好まれるが、別後、定めて、その割合方を傳授して貰ひ、そして、病身を救つて、御達者で在らせられるものと見える。

【餘論】 朱竹垞の評に「起二句、道ひ得て率直、無限の感慨」とあるが、韓愈の本旨は、後半に在るので、即ち裏面から金丹を服餌することを嘲つたのである。柳宗元の答周君巢書は、月日だけで、何年とも書いて無いから、よくは分からぬが、その文中「宗元、罪の大なるを以て、擯廢せられて小州に在り」と書いてあるから、永州に居た時分、即ち元和元年より十年まで、永州に居る間に作つたもので、無論、韓愈の此詩よりも先であつて、周君巢が早くより金丹を服餌して居たことが分かる。柳宗元は、佛教に對しては、多少の信仰を持つて居たが、道家の説を好まず、殊に仙術などは大嫌ひであつたから、その書中に於て、手きびしく周君巢を攻撃して居る。試に其後半を引抄すると「又曰く、藥を餌すれば、以て久壽たるべく、將に分つて以て與へられむとすと。もとより、小子の得るを欲せざるところなり。かつて以へらく、君子の道、處るときは、外愚にして内益す智、外訥にして内益す辯、外柔にして内益す剛、出づるときは、外内一の若く、しかも、時に動いて、以てその宜しく當るを取る。而して、生人の性、以て安んずるを得、聖人の道、以て光るを得、これを獲て中すれば、耆老に至らずと雖も、その道、壽なり。今夫れ、山澤の隴、我に於て有するなし。世の亂を視るも、



理まるが若く、人の害を視るも、利の若く、道の悻を視るも、義の若し。我、毒にして生き、彼、天にして死す。もとより、能く其肺肝を動かすなし。味味として趨り、屯屯として居り、浩然として餘あるが若く、草を掘り、石を煮、以て其筋骨を私して、日に以て益す愚、他人を利するなくして、己獨り以て愉、かくの若き者は、愈よ千百年を滋すも、謂はゆる天なり、又何を以て高明の爲に圖らむや（中略）苟くも、先聖の道を守り、大中に由つて以て出す。萬、擯棄を受くと雖も、其内を更めず、大都、往時京城の西にして丈人を言ふものに類す。愚改むる能はず、亦た丈人往時執るところを固くし推し、之を大にして、方士に惑はされざらむことを欲す。仕、未だ達せずと雖も、生人の患を忘るるなくむば、聖人の道幸甚。其れ必ず陳ぶるあらむ」といふので、その言、稍や倨なれども、世俗の謬見を打破して、極めて痛快である。韓愈とても、矢張、同じ見解を持つて居たに相違ないが、ここでは、いささか揶揄する氣味で、金丹の效能を賞美したのである。

酒中留上襄陽李相公

酒中留めて襄陽の李相公に上る

濁水汙泥清路塵

濁水汙泥、清路の塵、

還曾同制掌絲綸

還た曾て制を同じくして絲綸を掌る。

【字解】(一)濁水汙泥清路塵、文選曹植の詩に君若三清路塵、妾若三濁水泥とある。(二)同制、同職

眼穿長訝雙魚斷

眼穿つて、長く訝る、雙魚の斷ゆるを、

耳熱何辭數爵頻

耳熱して、何ぞ辭せむ、數爵の頻なるを。

銀燭未銷臆送曙

銀燭未だ銷えずして、臆、曙を送り、

金釵半醉座添春

金釵半は酔うて、座に春を添ふ。

知公不久歸釣軸

知る公が久しからずして釣軸に歸るを、

應許閒官寄病身

應に閒官に病身を寄するを許さるべし。

穿ち入るまでも目を掘みて見つめる。【註】雙魚、書簡、文選の古詩に客從三遠方來、遺我雙魚、呼我三鱗魚、中有三尺素書」とあるに本づく。【二】耳熱、漢書揚惲傳に「酒後耳熱し、天を仰ぎ、仙を拊つて嗚嗚と呼ぶ」とある。【三】數爵、即ち酒。【四】金釵、釵、或は髮に作り、何義門の説に「第六句は、前有二釵耳、後有三釵、の意を用ふ、注に依つて釵に作るを是となす」とあつて、その方が文義が順であるから、今これに従ふことにする。前有二釵耳は、史記滑稽傳、淳于棼の條に見えて居るので「若し夫れ、州閭の會、男女雜坐、酒を行らして稽留し、六博投壺、相引いて曹を爲し、手を擲つて罰なく、目始して禁ぜず、前に懸耳あり、後には酒替あり、髻鬢に此を環む、飲むこと八年ばかりにして、醉ふこと二壺」とある。【五】釣軸、地軸と同じ、ここでは朝廷の中心たる宰相を指す。

【題義】李相公は、原注に「逢吉を謂ふなり」とある。逢吉は前にも見えたが、舊唐書の本傳には、「憲宗、逢吉の政事を罷め、出して劍南西川節度使となす。穆宗即位、襄州刺史山南東道節度使に移

る」とある。この詩は、韓愈が襄陽を通るとき、舊知の李逢吉が其地の刺史たるに依りて會飲し、酒間に賦して贈つたのである。

【詩意】 われは濁水の汙泥の如く、君は清路の塵の如く、その出處進退は、九で比較に成らぬが、かつて同じく拜命して中書省に居たこともあるので、舊知の間柄なればこそ、今夜ここに會飲して、逸興を恣にする次第である。わが南遷中、眼穿つまでも眺め入つて、書簡の來ぬことを訝かしく思つて居た位であるから、この籠上、大分酔つて耳が熱したとて、決して、さされた盃を辭せず、飽くまで痛飲したいと思つて居る。兎角する内、銀燭未だ銷えざるに、窓は白んで曙色を送り、侍坐する女の金釵は、半ば墜ちむとして、滿座の春を添へ、つまり、心おきなく、愉快に飲んで居ると、夜の明けるを知らぬ位である。君は、いづれ遠からずして、朝廷に召し還され、再び相位に列することであらうから、その時は、わが病める身に相應した閒職を與へて貰ひたいので、何分御引立の程を今から頼んで置く。

【餘論】 朱竹垞は「頌聯、鍛鍊工なりと雖も、却つて未だ渾化せず、頸聯、興趣自ら佳なり」といつたが、銀燭金釵の一聯は、いかにも明麗新婉で、韓愈に於ては、稀に見るところである。許彦周は殊に第六句を賞し、「退之の此語及び酩酊馬上知爲誰、殊にその人と爲りに類せず。乃ち知る、梅花を賦するは、獨り宋廣平のみならざるを」といつて居る。しかし、前にも云へる通り、李逢吉は、徹底的の小人で、韓愈とは肌の合はぬ筈であるのに、かくまで親密にし、且つ將來の援助を囑望したる如き、たとひ南遷を赦されて歸る途中であるとはいへ、聊か怪訝に堪へぬことであつて、願副立が「李、最も退之と合はず、この詩、乃ち是の若く歡洽するは何ぞや」と云つたのも、尤も千萬である。

去歲自刑部侍郎以罪貶潮州刺史乘驛赴任。

其後家亦遣逐小女道死殯之層峰驛旁山下。

蒙恩還朝過其墓留題驛梁

去歲、刑部侍郎より罪を以て潮州刺史に貶せられ、驛に乗じて赴任す、其後家も亦た遣逐されて小女道に死し、之を層峰驛旁の山下に殯す。恩を蒙つて朝に還らむとし、其墓を過りて驛梁に留題す

數條藤束木皮棺 數條の藤は東の木皮の棺

草殯荒山白骨寒 荒山に草殯して白骨寒し

驚恐入心身已病 驚恐、心に入つて、身すでに病み、

扶昇沿路衆知難 扶昇、路に沿うて、衆、難さを知る。

律詩 題層峰驛梁

五四九

【字解】 ① 木皮棺 まさか木の皮ではあるまいが、皮つきの儘の材で造つた棺。② 草殯 假りに埋葬する。③ 扶昇 輿輦に乗せて昇いで行く。④ 衆三回 禮記に「孟夏の季子、長子死して羸博の

繞墳不暇號三匝。墳を繞つて、號んで三匝するに暇あらず、

設祭惟聞飯一聲。祭を設けて、惟だ聞く飯一聲。

致汝無辜由我罪。汝の辜なきを致すは、我が罪に由る、

百年慙痛淚闌干。百年慙痛涙闌干。

る。闌干は、絶えざる貌。

間に號る、すでに對じて左廻し、右に其封を還し且つ號ぶもの三たび」とある。【三】飯一聲。刑免後時記、介子推を祭る文に「飯一聲」とある。【四】無辜。罪なくして死す。【五】淚闌干。社市の時に相親涙闌干とあり。

【題義】この題の意味は——去歲、即ち元和十四年正月、予は佛骨の事を論せしに因り、刑部侍郎から、罪を以て潮州刺史に左遷せられ、ひとり、宿つぎの馬に乗つて赴任した。その後、家族どもも、都に留まつて居てはならぬといふことで、追ひ立てられ、相繼いで程に上つたが、小女一人、途中で病死し、層峰驛の傍なる山の下に假埋葬をして置いた。然るに、今次天恩を蒙つて、長安に召し還され、その墓の在るところを通つたから、この詩を驛亭の梁上に題した——といふのである。なほ、この小女に就いては、韓集中に女孿瑋銘といふ一文があつて、その後、河陽なる先塋に歸葬したとある。その文には「女孿は、韓愈退之の第四女なり。惠にして早く死す。愈の少秋官たるや、佛は夷鬼、その法治を亂るを言ふ。天子、その言を不祥なりといひ、これを潮州、漢の南海揭陽の地に斥く。愈、すでに行く、有司、罪人の家、京師に留まるべからざるを以て、追つて之を遣る。女孿年十二、病んで

席に在り、既に驚痛して、その父と訣れ、又輿致して道を走り、城頓して食飲の節を失ひ、商南の層峰驛に死す、即ち道南の山下に瘞む。五年にして、愈京兆となり、はじめて、子弟と其婦とをして、棺を易へて女孿の骨を河南の河陽韓氏の墓に歸して、これを葬らしむ。女孿の死、元和十四年二月二日に當る。その發して歸るは、長慶三年十月の四日に在り、その葬は十一月の十一日に在り」と記してある。層峰驛は、商南といふから、商山の少し先で、武關の西、長安からは、わづか數日の行程である。何にしろ、病氣の處を雪後の寒天に擔ぎ出されたから、直に重態に成つて、また花の苔の身が、あへなく路傍の雪と共に消えたので、まことに傷心の極である。韓愈は、長安を去る時に、訣別したのが最後となつたものと見える。されば、今次、はじめて、その墓をも祭つた譯で、恨恨の極、自然に此詩を爲したのである。

【詩意】汝の死せし時は、旅中の事とて、跡始末も満足には出來ず、皮つきの儘の材で棺を造り、數條の藤臺で之を縛つて、商山の麓に假埋葬をしたと云ふが、棺中の白骨は、定めて、その寒さに堪へぬことであつたらう。その初、われに別れる時、驚恐の念、心に入つて、身の病、愈よ重くなつたのに、無理に駕籠に乗せ、これを昇がせて道中を走らせたので、その六つかしいことは、誰でも知つて居た位。その時、自分は、先つて急行して居たから、葬事にも會せず、無論、墓を繞つて號哭しつゝ三匝することも出來ず、祭をするにも、一盤の飯だけを供へただけで、まことに情ない様な次第であ

つたといふことを聞いて居る。本来、辜なき汝をして、かくの如き慘澹たる最期を爲さしめたのは、汝の父たる子が大罪を犯したからで、懸痛の思は、終生消えもやらず、今、ここに來て、涙は闌干として絶えず流れる。

【餘論】もとより眞情眞詩で、巧拙を論ずべきものではなく、朱竹垞は「用事親切、味あり」といつて居る。但し、第五句の佳なるに反して「下句切ならず、且つ何の爲に惟聞の二字を用ひしかを知らず」といひ、この二字の甚だ泛に失することを攻撃して居る。

賀張十八秘書得裴司空馬

司空遠寄養初成、司空遠く寄せて、養うて初めて成る、毛色桃花眼鏡明、毛色は桃花、眼は鏡のごとく明かなり。落日已曾交轡語、落日、すでに曾て轡を交へて語る、春風還擬竝鞍行、春風還た擬す、鞍を竝べて行かむと。長令奴僕知饑渴、長く奴僕をして饑渴を知らしむ、須著賢良待性情、須らく賢良をもて性情を待たしむべし。

【字解】(一) 司空 唐書裴慶度傳に「穆宗即位、位を檢校司空に遷め、兼れて押北山諸蕃使に充てらる」とある。(二) 遠寄 遠方から贈る。唐書に「裴司空馬」とある。(三) 眼鏡明 眼は鏡の如く明かである。文選清白馬賦に「雙瞳青」

旦夕公歸伸拜謝、旦夕、公、歸つて拜謝を伸ぶれば、免勞騎去逐雙旌、騎し去り雙旌を逐ふを勞するを免れむ。

續とある。(四) 交轡 手綱を交へる。(五) 旦夕 いづれ其内。(六) 公歸 裴司空が任地から都に歸る。

【題義】張十八秘書は即ち張籍、舊唐書の本傳に「籍、太常寺太祝より國子助教秘書郎に轉ず」とある。はじめ、裴度が北地に赴任して良馬を得たから、はるばる都に上せて、張籍に贈ると、籍は、謝

裴司馬寄馬の七律を賦した。驂耳新駒駿得名、司空遠自寄書生。乍離華廐移蹄迹、初到貧家舉眼驚。每被閒人來借問、多尋古寺獨騎行。長思歲旦沙堤上、得從鳴珂傍火城。

すると、裴度は、その挨拶として、酬張秘書、因寄馬贈の七律を賦した。滿城馳逐皆求馬、古寺閒行獨與君。代步本慙非逸足、緣情何幸枉高文。若逢佳麗從將換、莫共鶻鶻一角出羣。飛控著鞭能顧我、當時王粲亦從軍。

韓愈は、二人の唱和を讀んで、興を催し、仍つて、これを賦して、張籍に贈つたのである。【詩意】裴司空から、はるばる馬を贈られたさうで、それを飼養し、この頃は、大分よく成つて來た。毛の色は、鮮麗なること、桃花の如く、兩目は、兎兎として、明かなること鏡のやうである。夕日

の西に斜なる頃、予は、嘗て手綱を竝べて君と語りつつ、乗り廻はしたこともあるが、やがて、春風緩く吹く頃にもならば、鞍を竝べて、どこぞへ遠乗りでも致して見やう。もとより名馬の事であるから、毎毎飢渴を奴僕に知らしめることも出来るので、矢張、賢良なるものとして、その性情を見、そして、厚く之を待遇せねばならぬ。裴公は、今、外に居られるが、いづれ遠からず歸京されるだらうから、その馬に乗りつつ、雙旌を追ひかけて、態態、御禮を言ひに出かける必要もないことと思ふ。

【餘論】朱竹垞は「三四興趣佳、最も友人の馬を賀するの意を得たり」といつて居る。次に何義門は「賢者志を得ずして、戎に従ふに至る、時知るべし。元勳大老、亦た以て久しく外に棄つべからざるなり。一馬の微に因つて、否の泰に還るに惚惚たり。公の意、ここに於て遠し」といひ、この詩の結末、裴公の歸京、一日も早からむことを望む意は、もとより明白であるが、かくまで、深い意味に取らずとも善からうと思ふ。

杏園送張徹侍御歸使

杏園 張徹侍御の使に歸るを送る

東風花樹下、送爾出京城。  
久抱傷春意、新添惜別情。

東風花樹の下、爾が京城を出づるを送る。  
久しく春を傷むの意を抱き、新に別を惜むの情を添ふ。

歸來身已病、相見眼還明。

歸り來つて、身、すでに病み、相見て、眼、還た明かなり。

更遣將詩酒、誰家逐後生。

更に詩酒を將て、誰が家にか後生を逐はしめむ。

【字解】 (一) 花樹 無論杏花であらう。

【題義】杏園は、前に杏花の七古の中で、曲江蒲園不可到の句の下に注して置いたが、康駢の劇談錄に「曲江は、開元中、疏鑿して、勝境となす、その西に杏園・慈恩寺あり、花卉環周、煙水明媚」とあつて、慈恩寺附近の花園である。この題に就いて、方崧卿は「徹、時に幽州判官を以て朝に趨らむとし、半道にして、詔あつて之を還し、仍つて、侍御史に遷る。張宏靖の詩に従ふなり。その實、徹、すでに京に抵り、但だ未だ朝見せざりしのみ。舊傳に云ふ、續いて、張徹、遠使より歸ると、是れなり」といつて居る。すると、張徹が今次侍御史となり、引きかへして、すぐに幽州に赴くを杏園に送り、その席上賦して示したのである。歸使の使は遠使で、即ち幽州節度使の處へ歸るといふ意味であらう。

【詩意】東風、徐に吹き度る杏花の下に祖道の席を設けて、君が長安を出で、引きかへして幽州に赴くのを送るのである。予は、頃ろ春の名残を惜むの意を抱いて居たのに、ここに又惜別の情を添へたから、愈よ以て堪へられない。君は、今次、一寸都に歸つて來られたが、身、すでに病み、むかしの俤も無いやうである。しかし、ここに相見ると、流石に嬉しく、われも亦た目がはつきりした様な心持

がした。この儘別れるのは、いかにも残念であつて、どこかの家から後進の子弟を狩り出し、詩酒一  
夕、大に馳を爲し、とても事に、君の行を壯にしたいと思ふ。

【餘論】朱竹垞の評に「亦た是れ虚虚意を遣ふ。第六句、最も醒快、通首の精神を振起す」とあつて、  
この句が一篇の警策でもあり、且つ中心となつて居るのである。

雨中寄張博士籍侯主簿喜

放朝還不報、半路蹋泥歸。放朝、還つて報せず、半路、泥を踏んで歸る。

雨慣曾無節、雷頻自失威。雨慣れて、曾て節なく、雷頻りにして、自ら威を失ふ。

見牆生菌遍、憂麥作蛾飛。牆に菌を生ずる遍きを見、麥の蛾と作つて飛ぶを憂ふ。

歲晚偏蕭索、誰當救晉饑。歲晚偏に蕭索、誰か當に晉の饑を救ふべき。

【字解】(一) 放朝、朝廷の執務を止めて休にする。(二) 半路、泥を踏んで歸る。今、按ずるに、朝より  
歸つて夜半に至るに因なし。半路と作すも、亦た通すべからず。驢ふらくは、雨を以て放朝し、しかも、有司聞報に失し、行いて、  
半路に至り、乃ち報を得て歸るならむ。張籍の公に開ゆる詩に云ふ、晨溼惟泥、泥深未放朝」とある。すると、雨の爲に、今  
日は朝儀が休みに成つたけれども、その報知が到達せられし故に、例の如く出勤し、途中で其事を聞き、雨中の泥を踏んで家に歸つ

たといふことである。(三) 無節、節制なく失節に降りつづける。(四) 蕭索、途窮に「晉の太康中、夢、化して飛蝶となる」と  
ある。(五) 救晉饑、左傳僖公十三年の條に「冬、晉存りに饑り、糶を秦に乞はしむ」とある。

【題義】張籍・侯喜二人は、前に數ば見えて居た。この詩は、雨中無聊なる儘、賦して二人に寄せた  
ので、韓愈が國子博士たりし時、即ち元和十五年、秋冬の間の作である。

【詩意】今日は雨天で、朝儀も無いとの事であつたのに、報知が到着せざりし故に、例の如く出勤し、  
その途中で、これを聞き、雨中の泥のぬかるみを踏んで、とはとぼと我が家に歸つて來た。この頃は、  
雨が降り通して慣れツ子に成つて仕舞ひ、その間、絶えて節制なく、雷も續けて鳴るものだから、威  
を失つて、あまり、こはくも無いやうに成つた。しかし、雨の多い爲に、牆の根本には、名も知らぬ菌  
が矢鱈に生えるが、それは先づ善いとして、この分では、麥が蛾に化して飛び、碌に收穫が無いかも  
知れぬので、聊か憂慮に堪へぬ。今しも、歲末に際して、かかる物さびしく不景氣な天候であるから、  
やがて、四民饑に苦むべく、古しへの晉國に比すべき此厄を誰か救ふであらうか。差し向き、さうい  
ふ人も見當らないので、唯だ饑饉など無い様にと祈るばかりである。

【餘論】朱竹垞は、前聯を賞して「雨雷は常事、しかも語を下すこと新、慣の字、人亦た用ふる罕な  
り」といひ、何義門は後聯を評して「句法別なり」といつた。次に、これに和した張籍の詩は、酬韓  
祭酒中見寄と題して、即ち左の通りである。

雨中愁不出。陰黑盡連青。屋溼唯添漏。泥深未放朝。無鴛憐馬瘦。少食信兒嬌。問道韓夫子。還同此寂寥。

奉和兵部張侍郎酬鄆州馬尙書祇召途中見寄開緘之日馬帥已再領鄆州之作

兵部張侍郎鄆州馬尙書祇召途中寄せられしに酬い、緘を開くの日、馬帥已に再び鄆州を領するの作に和し奉る

來朝當路日。承詔改轅時。來朝して路に當るの日、詔を受けて轅を改むるの時。  
再領須句國。仍遷少昊司。再び領す須句の國、仍つて遷す少昊の司。

暖風抽宿麥。清雨卷歸旗。暖風、宿麥に抽き、清雨、歸旗を卷く。

賴寄新珠玉。長吟慰我思。賴に新珠玉を寄す、長吟、我が思を慰む。

【字解】(一) 來朝當路 馬總が召されて上京せむとし、その途中に在ることをいふ。(二) 承詔改轅 詔を受け、再び鄆州に歸任せしをいふ。(三) 須句國 左傳僖公二十一年に「鄭人、須句を滅す」とあつて、杜預注に「須句は鄆の東平須昌縣の西北に在り」といひ、書注には「今の山東樂平縣に須城あり」と記してある。(四) 少昊司 月令に「秋の三月、その帝は少昊」とあり、董

し秋は刑を主る。そして、馬總は、今次檢校刑部尙書を加へられしが故に云ふ。(五) 宿麥 去年種きた麥。(六) 賴寄新珠玉 賴は幸に、新珠玉は張買の新作の詩。

【題義】 原注に「張は張買を謂ふ」とある。兵部尙書たることは、ここに見えて居るが、その閱歷は詳でない。馬尙書は馬總、前にも見えて居たし、舊唐書の本傳に「元和十四年、檢校刑部尙書鄆州刺史天平軍節度使鄆曹濮等州觀察等使に遷り、就いて、檢校尙書左僕射を加へらる」とある。この詩は、いづれ、韓愈が袁州から長安に召し還された後、即ち長慶元年の作である。馬總が今次救命に依つて長安に召されたに就いて、その途に上り、途中から兵部侍郎張買に詩を寄せたから、張買は直に之を酬いて詩を贈つた。すると、馬總は、著京せぬ内に、詔に依つて再び鄆州に歸任することになり、張買から寄越した手紙の封を開く日に、愈々踵を廻らして發程した。その事を韓愈が聞き傳へて、張買に和して、この詩を作つたのである。

【詩意】 馬尙書は、折角、長安に來朝せむとして、その途中に在つた處が、俄に詔を受け、轅を回して再び歸任することに成り、都には上らずに仕舞つた。かくて、馬尙書は、古しへの須句國たる鄆州に歸向し、さきに官を遷して、少昊の官司たる刑部尙書を加へられ、何にしても、勞威赫赫として、素張らしいことである。今しも春の半、暖き東風は、去年種きた麥の苗を抽いて長せしめ、すがすがしき春の雨は、行列の先頭に建てた旗を卷き、旅路も長閑で面白いであらう。馬尙書が來京せずし

て歸任せられ、その爲に、拜晤を得ざるは、まことに遺憾なれども、張侍郎の贈られた名作があるから、これを吟じて、わが相思の情を慰めるのは、せめてもの心遣りである。

【餘論】石林詩話に「蔡天啓言ふ、かつて、張文潛と韓柳五字の警句を論ず、文潛、退之の暖風抽宿麥、清雨卷歸旗、子厚の壁空殘月曙、門掩候蟲秋を擧ぐ。皆集中第一」とある。朱竹垞は、これを承けて「この聯、文潛以て第一となす、豈に天然の成句、鍊の淨にして、その跡を混ぼすを謂ふか」といつた。なほ前聯に就いて、何義門は「魯の地は、少皞の墟たり、すでに秋官に切、仍ほ鄒帥に雙闕す」といひ、亦た以て、その匠心の細を見るべきである。

早春與張十八博士籍遊楊尙書林亭寄第三

閣老兼呈白馮二閣老

早春、張十八博士籍と楊尙書の林亭に遊び、第三閣老に寄せ、兼ねて白馮二閣老に呈す

牆下春渠入禁溝

牆下の春渠、禁溝に入る、

渠氷初破滿渠浮

渠氷、初めて破れて、渠に滿ちて浮ぶ。

【字解】「春渠、渠は溝水、禁溝、皇居の周圍なる溝。

鳳池近日長先暖、風池日に近く、長く先づ暖かなり、

流到池時更不流、流れて池に到る時、更に流れず。

鳳池、中書省を云ふ、前に數ば見ゆ。魏晉以來、中書監令は詔敕を掌つて、極めて權近の地に居り、多く君寵を承けしが故に、その位を榮として、鳳風池といつたので、何も、さういふ名の池が有るのではない。晉の荀勗が中書監より尙書令に轉ぜし時も「我が鳳風池を奪ふ」といつた。

【題義】蔣注に「白馮は、白居易・馮宿を謂ふなり、第三閣老は、楊於陵の子嗣復なり、乃ち嗣復の家の林亭なり、故に特に時を以て之に寄せ、而して、併せて白馮に呈するなり。閣老の字、楊綽傳を按ずるに、故事、中書舍人、年久しきものを閣老となすと云ふ」とある。又同注に「第三、一に之を第一に作る、然れども、王沂公の言行錄に記す、楊大年、沂公を呼んで第四廳舍人と爲す、疑ふらくは、前世の遺俗、自ら此等の稱呼ならむ。第三に作るを是となす」とある。それから、舊唐書には、各一本傳あつて、楊嗣復には「字は繼之僕射於陵の子なり、進士の第に擢んでられ、長慶元年十月、庫部郎中知制誥を以て、正に中書舍人に拜す」とあり、馮宿には「東陽の人、元和十二年、裴度に従つて東征し、彰義軍判官となり、淮西平らぐや、比部郎中に拜し、長慶二年、中書舍人に拜せらる」とあり、白居易には「一字は樂天、太原の人、文辭富麗、尤も詩律に精し。長慶元年十月、中書舍人に轉す」とある。この詩は、長慶二年正月、韓愈が兵部侍郎に在職し、王廷湊の軍に使用する少し前、張籍と共に、尙書楊於陵の別邸に遊び、其子中書舍人嗣復に寄せ、且つ其同役たる白居易・馮宿の二人に呈す



したのである。

【詩意】楊尙書の別邸なる牆下の溝水は、流れて宮城の濠に入るが、今しも春の初、渠中の水は、暖氣の爲に盡く碎けて、渠中に一ぱい浮んで居る。中書省は、鳳凰池の稱があつて、もし實際池があつたならば、この頃、真先に水が暖くなつて居るに相違なく、この渠水が、やがて其池に注ぎ込めば、そこに滯蓄して最早流れぬであらう。

【餘論】全篇が賦の體で、前半は實況、後半は楊嗣復・白居易・馮宿の三人、同時に中書舍人に官し、まことに適任であるから、その儘、いつまでも留まつて居て貰ひたいといふ意を述べたものと考へられる。この詩は、平淺にして他の奇なきも、その時と處とより見れば、多少の巧譽を推すべきものである。これに對しては、白居易の和作があるので、和韓侍郎題楊舍人林池見寄と題し、即ち左の如くである。

渠水暗流春凍解、風吹日炙不成凝。鳳池冷暖君猶在。二月因何更有氷。

詩意は、今しも、氷は解けて渠水は再び凍ることもない、君も、かつて中書舍人に官したことがあつて、鳳池の冷暖は知つて居られるが、二月初、氷などあらう筈なく、まことに結構な處であるから、自分も刻下満足して居るといふので、即ち應酬の體を爲して居る。韓愈が中書舍人に官したのは、元和十一年正月で、考功郎中知制誥より榮轉したが、その五月には、太子右庶子に降され、明年、即ち十二年には、御史中丞を兼ね、行軍司馬として、淮西征討に従軍することに成つた。

ち十二年には、御史中丞を兼ね、行軍司馬として、淮西征討に従軍することに成つた。

奉使常山早次太原呈副使吳郎中

使を常山に奉じて、早に太原に次し、副使吳郎中に呈す

朗朗聞街鼓。晨起似朝時。朗朗として街鼓を聞く、晨起、朝時に似たり。

翻翻走驛馬。春盡是歸期。翻翻として驛馬を走らす、春盡、是れ歸期。

地失嘉禾處。風存蟋蟀辭。地は嘉禾の處を失ひ、風は蟋蟀の辭を存す。

暮齒良多感。無事涕垂頤。暮齒、長に感多し、無事にして涕頤に垂る。

【字解】(一) 朝時、入朝の時。(二) 嘉禾處、書の序に「唐叔、禾を得たり、畝を異にして穎を同じす、これを天子に獻ず。王、唐叔に命じ、周公に東作に歸り、禾を贈る。周公、すでに命禾を得、天子の命を蒙り、嘉禾を作る」とあり、漢書地理志に「太原は晉陽縣、故の時の唐國、晉水の出づる、東して汾に入る」とある。(三) 風存、風は同風。(四) 蟋蟀辭、詩の毛傳に「蟋蟀は、晉の宣公を刺るなり、これ晉なり、而して、これを唐と謂ふ、その風俗、蓋深く、思遠く、儉にして禮を用ひ、乃ち堯の遺風あるに本づく」とある。(五) 暮齒、暮年、晩年に同じ。

【題義】舊唐書穆宗紀に「長慶元年七月、鎮州軍亂る、節度使田宏正、害に遇ひ、衛將王廷湊を推

律詩 奉使常山早次太原呈副使吳郎中

して留後となす。二年二月、詔して、王廷湊に雪ぎ、仍つて兵部侍郎韓愈をして、彼に往いて宣諭せしむ」とある。その事は、前に總説の中に述べて置いたから、ここでは省略する。この時、魏都郎中吳丹といふものが、副使となつて隨行した。唐書地理志に「鎮州は、常山郡、大都督府、本と恆州、恆山郡、元和十五年、穆宗の諱を避けて名を更ふ、河北道に屬す」とあつて、後の北直隸眞定府。又同志に「太原府は太原郡、本と并州、開元十一年、府となし、河東道に屬す」とあり、蔣注には「春秋の晉陽の地、唐には北京といひ、今は府となして山西に屬す」とある。この詩は、韓愈が詔を奉じて鎮州常山の王廷湊を招撫しに出かけた時、太原に宿して早起し、仍つて、賦して同行の副使魏都郎中吳丹に示したのである。

【詩意】 朝朝たる街鼓の聲に夢を破られて、曉早く起き出で、さながら入朝の時に似て居る。しかし、これから翻翻として驛馬を走らせ、遠く常山まで行かねばならぬので、その事が、うまく遣れた處が、歸るのは、いづれ春盡くる三月の末であらう。今しも、嘉禾を生じたといふ晉陽の地は、すでに失はれて、賊の有に歸し、國風として、唯だ蟋蟀の辭を存するのみ。何時、この土を回復して、天子の直轄地と爲すことが出来やうぞ。人も暮年になると、まことに多感になつて來て、無事の時に、涙は頤に垂れる位、これから、張梁せる藩鎮に向ふに於ては、なほ更の事である。

【餘論】 前半は隔句對の形式に循ひ、前の送李員外院長分司東都と同格であつて、一に之を肩對

と稱する。朱竹垞は之を賞して「亦た流動、態あり」といつて居る。それから鎮州出使は、李逢吉の中傷に出たといふ説が普通行はれて居るので、これに就いて、蔣之翹は「かつて按ずるに、唐子西曰く、公孫洪、董仲舒を以て膠西に相たらしめ、梁冀、張綱を以て廣陵に守たらしめ、李逢吉、韓愈を以て鎮州に使せしめ、盧杞、顔魯公を以て李希烈に使せしむ。その意を用ふる、正に相類す。然れども、これを史に考ふるに、公、出でて鎮に使用するは、二月に在り、而して、逢吉は、三月、はじめて召されて兵部尙書となり、六月、はじめて裴度に代つて相となる。子西、爾か云ふは何ぞや、抑も豈に逢吉の險邪、遂に公の此行を以て、その中つるところと爲すか、天下の惡者歸すとは、此謂なり」といつて居る。

夕次壽陽驛題吳郎中詩後 夕に壽陽驛に次し、吳郎中の詩後に題す

風光欲動別長安。風光動かむと欲して長安に別る、

春半邊城特地寒。春半、邊城、特地に寒し。

不見園花兼巷柳。園花と巷柳とを見ず、

馬頭惟有月團團。馬頭惟だ月の團團たるのみあり。

律詩 夕次壽陽驛題吳郎中詩後

【字解】 (一) 風光欲動 春景色の立ち初むるをいふ。(二) 特地 地は助語、唯だ特にといふに同じ。

【題義】 吳郎中は隨行の吳丹、その人の詩の後に題したといふが、原作は、傳はつて居らぬし、一本には、題を壽陽驛題絶句としてあるとのことで、吳丹の詩とは格別の關係も無い様である。唐書地理志に「壽陽驛は、太原府太原郡に屬す」とある。この詩は、夜、壽陽驛に宿つた時に作つたので、無論、前首の次に在るべきものである。

【詩意】 春も稍や景色だつ頃、長安を出立し、詔を奉じて、鎮州を招撫する爲に、だんだん北向したが、邊塞のあたりは、この二月の頃に際し、特に寒氣の甚しきを覺える位。園中の花、巷頭の柳ともに未だ之を見ず、夜に入つて急ぐ馬首の前には、團圓たる月が高く照らすばかり、まことに、荒涼凄寂の有様である。

【餘論】 この絶句は、一氣呵成、しかも風韻を失はず、韓集中に於ては、その類の少いものである。

鎮州初歸

鎮州初歸

別來楊柳街頭樹

別來、楊柳街頭の樹、

擺弄春風只欲飛

春風に擺弄して、只だ飛ばむと欲す。

還有小園桃李在

還た小園桃李の在るあり、

【字解】 (一) 楊柳街頭、街頭の楊柳樹といふので、鎮州に在るものを指す。(二) 擺弄、ふるひ弄はれる。(三) 小園、自宅の庭園。

留花不發待郎歸。花を留めて發せず、郎の歸るを待つ。

【題義】 この詩は、韓愈が王廷湊を叱して屈服せしめ、幸に帝命を辱めず、やがて目出たく歸京するに就いて、鎮州を出發する時に作つたのである。

【詩意】 ここに鎮州を去るに就いて、街頭の楊柳に別れたが、その柳も、流石に心ありげに、春風にふるひ弄ばれて、わが方に靡いて飛ぼうとして居る。汝の情思多きは、さることながら、わが自宅の園中には、桃李の樹があつて、春の儘で未だ花を開かず、わが歸るを待ち受けて、一齊に綻び出でむとして居るので、自然歸りも急がれ、心ならずも、汝を振り切つて急がねばならぬ。

【餘論】 結句に待郎歸の三字を著けた爲に、非常に多情の様に聞こえ、朱竹垞は「比擬殊に妙、風致筆端より溢れ出づ」といひ、つまり桃李を有情の佳人に比擬した處が、面白いといふものと思はれる。然るに、桃李は、その侍妾を指したのだといふ説が、古くからあつて、唐語林に「退之の二侍妾、柳枝・絳桃と名づく。初め王廷湊に使用するとき、壽陽驛に至り、絶句に云云」といつて、前詩を引き、つまり園花巷柳は、絳桃柳枝の變名だといひ、邵子聞見録も、亦た同じ様な軼事を傳へ「孫子陽、余が爲に言ふ、近時、壽陽驛、地を發して二詩石を得たり、唐人の跋に云ふ、退之に情桃風柳の二妓あり、歸途、風柳すでに去りしを聞き、故に云云。後、張籍の祭退之の詩に云ふ、乃出二侍女」と。

この二人に非ざるか」といつて居る。しかし、蔣之想は、之を辯駁し、退之は固より是れ偉人、歸來豈に別に念ふところなくして、獨り婢妾に殷殷たらむや。たとひ、之を思ふも、亦た懷人の常語を作すに過ぎざるのみ。更に何ぞ必ずしも名を切にし、意を致すこと、此の若くならむや。況んや、云ふところの地を發して詩石を得たるは、當時必ず韓公自ら立てしならむ、他人豈に去妾を以て言を爲さむや。これ韓公の意、蓋し故國の景色に感慨すること、詩の東山、有敦瓜苦、蒸在栗薪、自我不見、于今三年と旨を同じうす、その説、宜しく攻めずして破るべきなり」と云つて居る。

同水部張員外曲江春遊寄白二十二舍人

水部張員外と同じく曲江に春遊し、白二十二舍人に寄す

漠漠輕陰晚自開。漠漠たる輕陰、晚に自ら開く、

青天白日映樓臺。青天白日、樓臺に映す。

曲江水滿花千樹。曲江水滿つ花千樹、

有底忙時不肯來。底の忙しき時あつて肯て來らざる。

【字解】(一) 漠漠、輕陰、花ぐも

りて天色漠漠たりしなむ。(二) 花千樹、曲江は杏花を以て知られて居る。

【題義】舊唐書張籍傳に「累りに國子博士水部員外郎を授けられ、水部郎中に轉じて卒す。世、これ

を張水部といふ」とある。曲江は、前に杏花の五古にも見え、杏園の五律にも注して置いた。この詩は、張籍と共に春日曲江に遊びて杏花を賞し、仍つて、中書舍人の白居易に寄せたのである。

【詩意】一天漠漠たりし花ぐもりも、晚方になつて、はじめて晴れわたり、青天白日が樓臺に映じ、又一しほの眺めを増した。今しも、曲江の池水は、溶溶として滿ち、千樹の杏花は眞盛りで、最も遊賞に宜しく、われ等二人、ここに興を縦にして居るのが、君は、どんな忙しい事があつて、ここに來られぬのか、まことに遺憾の至である。

【餘論】楊慎の評に「城中車馬應無數、能解閒行有幾人、亦た是れ此意」とある。それから、蔣注に「按するに、居易の和篇、白集に見ゆ。後世傳ふ、韓白往來の詩なしと、非なり」とある。その白居易の和作は、翻韓侍郎張博士雨後游曲江見寄と題し、左の如くである。

小園新種紅櫻樹。開繞花行便當遊。何必更隨鞍馬隊。衝泥蹋雨曲池頭。

詩意は、わが庭園には、近ごろ紅櫻樹を種ゑ、今が見ごろである處から、花下を繞つて歩行し、それで出遊の代りにして居る。今日は雨後、鞍馬の後に従ひ、泥濘の路をこねて、曲江池へ出かけるのも億劫だから、つい無精をしましたといふのである。なほ白集を検すると、同韓侍郎遊鄭家池吟詩小飲と題して、

野艇客三人。晚池流浣浣。悠然依欄坐。水思如江海。宿雨洗沙塵。晴風灑煙靄。殘陽上竹樹。

律詩 同水部張員外曲江春遊寄白二十二舍人

枝葉生光彩。我本偶然來。景物如相待。白鷗驚不起。綠茨行堪采。齒髮雖已衰。性靈未云改。逢詩遇杯酒。尙有心情在。

とあるが、これは、對應すべき韓愈の作が現存せざるに因つて、その詳は分からぬ。次に、和韓侍郎苦雨と題して、

酒氣凝柱礎。繁聲注瓦溝。閒留窓不曉。涼引簾先秋。葉溼靈應病。泥穠燕亦愁。仍開放朝夜。喚出到街頭。

といふのは、前の雨中寄張博士籍侯主簿喜の五律に和したものと思はれる。その證據には、彼此の作、ともに放朝の字が見えて居るからである。但し、韓愈には歲晚偏蕭索とあつて、どうも多らしいが、白居易には涼引簾先秋とあつて、どうも秋冬の間ではなく、殊に後聯を見ると、春らしいから、これは、翌年の春になつて追和したものであらうか。それから、久不見韓侍郎、戲題四韻以寄之と題して、

近來韓閣老。疏我我心知。戸大嫌甜酒。才高笑小詩。靜吟乘月夜。閒醉曠花時。還有愁同處。春風滿鬢絲。

といふのがある。韓の題、白の平易、韓の雄大、白の纖麗、全く其趣を異にして居るが、二人は、相當の交際があつたので、もとより、白、韓を喜ばず、韓、亦た白を喜ばなかつた譯ではない。唯だ

中年以後、二人同時に長安に居たことは、極めて少く、韓愈が兵部侍郎、白居易が中書舍人たりし時は、二人とも、粗ぼ得意の境涯に在つて、しかも、同じ都の内に居たから、かくの如く屢ば唱和を試みたのである。古來の注釋者が、今少し詳しく白集を檢點したら、定めて獲るところがあつたらうと思ふが、予は、ここに聊か其闕を補つたに過ぎぬ。なほ二人の中間に立つたのは張籍で、雙方に親善なりしに因り、頻りに輪旋の勞を執つたものと思はれる。

和水部張員外宣政衛賜百官櫻桃詩

水部張員外の宣政衛に百官櫻桃を賜ふの詩に和す

漢家舊種明光殿。

漢家、舊と明光殿に種う、

炎帝還書本草經。

炎帝、還た本草經に書す。

豈似滿朝承雨露。

豈に似むや、滿朝雨露を承くるに、

共看傳賜出青冥。

共に看る、傳賜の青冥を出づるに。

香隨翠籠擎初到。

香は翠籠に隨つて、擎げて初めて到り、

色映銀盤寫未停。

色は銀盤に映じて、寫して未だ停まらず。

律詩 和水部張員外宣政衛賜百官櫻桃詩

【字解】【一】漢家、漢の帝室。

【二】明光殿、洛陽宮殿簿に「漢に明光殿、殿音殿あり」といひ、又、關陽殿前櫻桃六株、殿音殿前、乾元殿前此に三株」とある。【三】炎帝、還書本草經、炎帝は神農氏、補經を以て本草經、炎帝は神農氏、補經を以て本草經を創し、本草經は、その書と稱せられ、その中に「櫻桃は味甘く、

食罷自知無所報。食し罷んで自ら知る、報ずる所なきを、  
空然慙汗仰皇扇。空然慙汗、皇扇を仰ぐ。

脾胃を益す」と書いてある。  
出典 皇扇を天上に擲へて青雲と  
いつたので、宮殿から退出する。

【題義】 本草に「櫻桃樹は、甚だ高からず、春初、白花を開き、繁英雪の如く、葉圓にして、尖及び細齒あり、子を結ぶこと一枝數十顆、三月熟す」とあり、一名を鶯桃、又は含桃といひ、鶯鳥が好んで食ふとのことである。日本の今のさくらんぼうといふのが、普通であるか、どうか、ゆすらうめの様にも思はれる。それから、支那では、むかしから、ひどく之を珍重したので、爾雅翼に「果熟する、最も先、故に含桃を以て先づ薦む」とあり、禮記の月令にも「仲夏の月、天子羞むるに含桃を以てし、先づ寝廟に薦む」とあつて、それは、周代から起つたことである。漢の惠帝が離宮に出游された時、叔孫通は「古しへ、春に當つて果を嘗むる事あり、今や櫻桃熟せり、願はくは、陛下、これを取り、以て宗廟に獻せよ」といひ、帝は之を許された。周漢の時、すでに此の如く、唐になつても、

【題義】 本草に「櫻桃樹は、甚だ高からず、春初、白花を開き、繁英雪の如く、葉圓にして、尖及び細齒あり、子を結ぶこと一枝數十顆、三月熟す」とあり、一名を鶯桃、又は含桃といひ、鶯鳥が好んで食ふとのことである。日本の今のさくらんぼうといふのが、普通であるか、どうか、ゆすらうめの様にも思はれる。それから、支那では、むかしから、ひどく之を珍重したので、爾雅翼に「果熟する、最も先、故に含桃を以て先づ薦む」とあり、禮記の月令にも「仲夏の月、天子羞むるに含桃を以てし、先づ寝廟に薦む」とあつて、それは、周代から起つたことである。漢の惠帝が離宮に出游された時、叔孫通は「古しへ、春に當つて果を嘗むる事あり、今や櫻桃熟せり、願はくは、陛下、これを取り、以て宗廟に獻せよ」といひ、帝は之を許された。周漢の時、すでに此の如く、唐になつても、

矢張、前例に従つたものと見え、李緯の歲時記に「四月一日、内園より櫻桃を寝廟に進む、薦め訖つて、百官に頒賜すること、各差あり」とある。されば、唐に在つては、獨り薦廟の典たるのみならず、同時に百官に班賜するを例とし、景龍文館記に「上、侍臣と樹下に櫻桃を摘み、その食を恣にし、末後、大に宴を陳して、宮樂を奏し、暝に至つて、人ごとに朱櫻兩籠を賜ふ」とある。この詩は、水部員外郎張籍が宣政殿の控所に於て、百官に櫻桃を賜はりしに因り、自分も頂戴し、仍つて、詩を一首作つたから、韓愈が、それに和して作つたといふので、張籍の原作は、朝日敕賜百官櫻桃」と題して、即ち左の如く、ここに朝日といふは、參朝の日といふことである。

仙果人間都未<sub>レ</sub>有。今朝忽見下<sub>二</sub>天門<sub>一</sub>。捧盤小吏初宣<sub>レ</sub>敕。當殿羣臣共拜<sub>レ</sub>恩。日色遙分<sub>二</sub>西門下座<sub>一</sub>。露香才出<sub>二</sub>禁中園<sub>一</sub>。每年重此先偏侍。願得<sub>二</sub>三千春<sub>一</sub>奉<sub>二</sub>至尊<sub>一</sub>。

【詩意】 櫻桃の珍重されるのは、随分古いことで、漢の帝室では、これを明光殿の前に種ゑ、その前、炎帝は本草經を著し、その中に、ちやんと書き込まれた。今や滿朝の臣僚が同じく雨露の御惠を承くるは、まことに譬へむやうなく、かくて賜を拜して宮中から退朝する。その櫻桃の實は、緑の竹籠に盛つてあつて、擎げて持ち出して來たときは、えならぬ匂がするし、やがて、これを銀盤に入れるときは、その色が相映じて、まことに見事で、なかなか移し切れない。さて之を食し罷んでから、熱ら思へば、さしもの天恩報ゆるに由なく、つくねんとして慙汗を流し、續然たる宮闕をのみ仰いで居る

のは、われながら、まことに附甲斐なきことである。

【餘論】 蔣之翘は「詞も亦た雅麗、張の作に較ぶれば、特に勝れり」といひ、又胡元任の言を引いて「退之が櫻桃を賜はりし詩、王摩詰と五六頌る相似たり、然れども、摩詰の詩は渾然として、退之に勝れり」といひ、後に顧嗣立も「彷彿として摩詰の作に效ふ」といつて居る。その王摩詰の作といふのは、敕賜百官櫻桃と題して、即ち左の如くである。

芙蓉闕下會千官。紫禁朱櫻出上蘭。纔是寢園春薦後。非關御苑鳥銜殘。歸鞍競帶青絲籠。中使頻傾赤玉盤。飽食不須愁內熱。大官還有蔗漿寒。

さすがは、盛唐の大家だけに、步趨堂堂として、又一段の見ばえがある。次に朱竹垞は「この詩、却つて中唐に落ちず」といひ、何義門は「穆宗昏荒、復た以て爲すあるべからず、公、朝に立つと雖も、徒に俯仰歎するのみ。自知無所報といふは、正に報せむと欲して、路なきを憐むなり。公、崔立之に寄するの詩、無能食國惠、豈異哀癯罷、其れ即ち懸汗二字の注脚か」といつて居る。

早春呈水部張十八員外二首 早春、水部張十八員外に呈す、二首  
天街小雨潤如酥。天街の小雨、潤うて酥の如し、

【字解】 (一) 天街 都大路。

草色遙看近却無。草色遙に看るも、近づけば却つて無し。

最是 一年春好處。最是れ一年春好きの處。

絶勝煙柳滿皇都。絶えて勝る煙柳の皇都に滿つる。

【二】 潤如酥。酥は牛酪、即ちバター、潤うて豊饒して居ることが牛酪の像である。【三】 最是 一年春好處。一年中で春景色の一番好い時。【四】

【題義】 説明に及ばぬ。この詩は、多分、長慶三年の正月に作つたのであらう。

【詩意】 都大路には、春の小雨がしとしと降り、あらゆる物は、潤うて豐饒しく、さながら、牛酪の如くである。草は初めて芽ぐみ、遠くからは青く見えるが、近よると何も無い。今しも、一年中、春景色の一番好い時で、萬樹の柳が緑に煙つて、長安に滿つる時にも優つて居る。

【餘論】 第二句は、人人の言はむと欲するところで、逸早く拈出したのは、作者の手柄である。結句は、見方に依つては、寓意隱然、つまり、小人の跋扈に比した物と思はれる。朱竹垞は「景絶妙、寫し得て亦た絶妙」と云つて居る。

莫道官忙身老大。道ふ莫れ、官忙しく身老大、  
即無年少逐春心。即ち年少春を逐ふの心なしと。

【字解】 (一) 老大 年が寄つた。  
(二) 逐春 春景色を尋れ廻る。(三) 如今 只今。

憑君先到江頭看。君に憑つて、先づ江頭に到つて看む、  
柳色如今深未深。柳色如今深きか、未だ深からざるかを。

【詩意】何も官職が忙はしく、おまけに、年も寄つて老いさらばひ、そこで、むかし少年の時の如く、どこまでも春を追ひ廻はす様な願狂の心が無いといふ譯でもなく、幾分は、依然として、舊態を存して居る積り。そこで、君に御依頼するが、先づ江頭に到り、今しも、柳の緑は、すでに深く成つたか、未だしか、どうか、篤と見て来て知らせて呉れろ。もし柳が緑に成つた様ならば、この老夫も浮かれ出し、病餘の身を扶けて、ぼつぼつ歩いて見たいと思ふのである。

【餘論】春の深きを聞知して後、はじめて出游しやうといふのは、たとひ、春を逐ふの心は變せずとするも、身の老大なることは、遂に免れることが出来ない。朱竹垞は「粗鹵中、却つて韻致あり」と云つて居る。

送桂州嚴大夫

桂州の嚴大夫を送る

蒼蒼森八桂。茲地在湘南。蒼蒼として八桂森たり、この地、湘南に在り。  
江作青羅帶。山如碧玉簪。江は青羅帶を作し、山は碧玉簪の如し。

戶多輪翠羽。家自種黃甘。戸多くは翠羽を輪し、家自ら黃甘を種う。

遠勝登仙去。飛鸞不假驂。遠く勝る登仙し去り、飛鸞驂するに假あらざるに。

【字解】(一) 八桂。山海經に「桂林の八樹は、實鳥の東に在り」と記して、郭璞の注に「樹、林を成す、その大なるを言ふなり、實鳥は香鳥」とある。楚辭に「嘉南州之夷德、兮原桂林之冬榮」とあり、文選天台山賦に「八桂森挺以凌霜」とあるのも、ともに此樹である。(二) 湘南。湘水の南、蔣注に「湘水は、桂林の全州に在り、柳川の記に、分水嶺は即ち湘水、東、海陽より此に至り、北して湘水となり、南して羅水となる」とある。(三) 江作青羅帶。東坡の言に「退之の詩、江作青羅帶、子厚の詩、海上羣山似劍鋒、予、これが對を爲して曰く、翠羽、翡翠の羽、禽經に「背に彩羽あるを翡翠といふ」とあつて、その注に「狀は鸞鷟の如くして、色は正碧、多臨、翼斜とある。(四) 翠羽。翡翠の羽、禽經に「背に彩羽あるを翡翠といふ」とあつて、その注に「狀は鸞鷟の如くして、色は正碧、鮮丹愛すべし。沮洳淵の側に飲啄し、尤も其羽を惜み、日に水中に濯ふ。今、王公の家、以て婦人の首飾と爲す」とある。(五) 黃甘。甘は即ち柑、上林賦に「黃甘橙橘」とあつて、その注に「黃甘は橘の屬にして味精、嶺南及び江南に生ず」とある。(六) 不假驂。何遜門の説に「假、或は假に作る。按するに、假の字、勝仙と相應せず」とある。

【題義】唐書地理志に「桂州、始安郡、中都督府」とあり、嚴大夫は、原注に「嚴謨なり」とあるが、その人の閱歴等は、さつぱり分からぬ。この詩は、嚴謨が桂州都督となつて赴任するのを送つたので、自注に「同じく、南字を用ふ」とあるを見れば、嚴謨と同じ韻を限つて作つたものと見える。

【詩意】君の今次赴任せられる桂州は、湘江の南に在つて、音に聞く八株の桂樹が森森として茂つて居る處である。湘江は其地を繞つて、青羅の帯を抱くが如く、四境の羣山は、翠色濃にして、碧玉



の簪を挿し鬢した様である。桂州は、南土の暖地であるから、戸ごとに翡翠の羽を上納し、又家ごとに黄柑を栽培して、その風土は、中国と大分違つて居る。君が其地に赴きし後は、かかる風物を留賞せられるので、仙人となつて、天上に登り、飛鸞に馳する暇もない程。自ら駆け廻るに比して、はるかに勝つて居ることであらう。

【餘論】朱竹垞は「これ淺調、屬對却つて工、頗る初唐に類す」といつて、聊か月聯を賞して居る。同時に張籍の作があつて、送嚴大夫之桂州と題して、その全首は左の如くである。

旌旆過湘潭。幽奇得偏探。莎城百越北。行路九疑南。有地多生桂。無時不養蠶。聽歌疑似曲。風俗自相諳。

矢張、南の字を韻として用ひて居るから、愈々限韻の作たることが分かるし、その作法も、全く韓愈と同じである。

奉酬天平馬十二僕射暇日言懷見寄之作

天平馬十二僕射の暇日懷を言うて寄せらるるの作に酬い奉る

天平篇什外。政事亦無雙。天平篇什の外、政事亦た無雙。

威令加徐土。儒風被魯邦。威令、徐土に加はり、儒風、魯邦に被る。

清爲公論重。寬得士心降。清は公論の爲に重く、寬は士心を得て降る。

歲晏偏相憶。長謠坐北牕。歲晏くして偏に相憶ふ、長謠、北牕に坐す。

【字解】(一) 篇什 詩賦に同じ。(二) 徐土 劉禹錫の天平軍節度使題記に「惟れ鄭、春秋に在つては須句の國なり。胡を宣べて上に在り。春は文宿たり。野を宣して下に在り、魯は魯邦たり。孤賈に、海岱及び淮までは惟れ徐州とあり、前漢、徐を以て臨淮に隸するときは、徐も亦た魯なり」とあり、又詩經の常武に魯、此徐土とあり、同宮に魯邦是魯とある。(三) 長謠 文選劉毅の詩に引、領長謠とある。

【題義】前に奉和兵部張侍郎酬鄆州馬尙書云の詩にも見えたが、ここの馬僕射は即ち馬尙書、舊唐書の本傳に「元和十四年、馬總を以て鄆曹濮等州觀察使となし、十五年、その軍を名づけて天平軍となし、就いて、檢校尙書左僕射を加ふ」とあるから、どちらを呼んでも差支ないのである。この詩は、その馬總が暇日懷を抒べて詩を寄せられたるに因り、これに酬いむが爲に作つたのである。

【詩意】君は、今、天平軍を統轄し、詞章の外、本職の政事にかけても、天下無雙と稱せられ、その威令は、古しへの徐州に加はつて、誰も違背するものなく、儒風は魯邦に被及し、さながら、周公孔子の昔に復歸したやうである。その心操の清きことは、公論の重きを爲し、駕御の寬なることは、士心をして歸服せしめる。今しも、歳の將に暮れむとするに際して、偏に相思ふの情に堪へず、仍つて

北窓に坐して、聊か長語を爲したのである。

【餘論】朱竹垞は「兩語、實者に非ざれば、能く當るなし、もとより是れ善頌」と云つた。つまり、兩語は、馬總その人の功績と人物とを稱揚したのである。

奉使鎮州行次承天行營奉酬裴司空

使を鎮州に奉じ、行いて承天行營に次し、裴司空に酬い奉る。

竄逐三年海上歸、竄逐三年海上より歸り、

逢公復此著征衣、公に逢うて、復た此に征衣を着く。

旋吟佳句還鞭馬、旋ち佳句を吟じて、還た馬を鞭つ、

恨不身先去鳥飛、恨むらくは、身去鳥に先つて飛ばざるを。

【字解】竄逐三年、潮州に左遷され、それから、袁州に量移されしことを云ふ。元和十四年の春、長安を出で、十五年の冬、還つたら、滿二年であるが、ここでは、平仄の都合で、三年といつたのである。

【題義】この詩は、前に立ちもどつて、王廷湊を招撫すべき使命を奉じて鎮州に行く途中、承天行營に宿りし時、東都に留守たる司空裴度から、詩を寄せられたから、それに酬むが爲に作つたのである。

【詩意】佛骨の一表、ゆくりなくも罪を獲、南荒に竄逐されたこと、三年の久しきに及び、やがて、袁州から歸京し、今次詔を奉じて出かけ、又貴方に御目にかかつて、此に征衣を着けて發程した。然るに料らずも、寄懐の佳作を贈られた故に、これを高吟しつ、激勵の意味に感動し、早く彼地に到着したくて堪まらぬ處から、馬に鞭つて出かけたが、この身、去鳥に先つて、鎮州まで唯だ一刻に飛んで行かれる術なきことが、まことに残念である。

【餘論】今次の鎮州行は、詔を奉じて、王廷湊を諭す爲であつて、裴度には、全然、關係が無いのに、第二句に逢公復此著征衣といつたのは、まさしく尊題法である。新唐書に「愈の鎮州を宣撫するや、衆、皆これを危む。元稹、穆宗に謂つて曰く、韓愈、惜むべしと。上、亦た悔い、詔令を馳せ、事を度り、宜しきに從つて、必ずしも入ることなからしむ。愈曰く、安んぞ、君命を受け、しかも滞留して自ら顧るものあらむやと。遂に疾驅して入り、賊營に至り、その衆を麾いて之を責む。庭湊、命を聽いて、牛元翼を出す」とあつて、後に東坡の作つた潮州韓文公廟碑に「勇は三軍の帥を奪ふ」といふのは、即ち此事である。つまり、穆宗は、いたく後悔せられ、滞留して居てもかまはぬといはれたが、韓愈は、自ら急いで賊地に入り込んだのであるし、裴度の寄詩も、亦た激勵の意味を述べたものに相違ない。乾隆御批に「詔して逗留を許す、しかも奮迅、かくの如し、仁者の勇、庶はくは愧づるなし」とあつて、こころは、洗石に韓愈の偉い處である。

鎮州路上謹酬裴司空相公重見寄

鎮州路上、謹んで裴司空相公の重ねて寄せらるるに酬ゆ

衛命山東撫亂師、命を衛んで、山東に亂師を撫す、

日馳三百自嫌遲、日に三百を馳せて、自ら遅きを嫌ふ。

風霜滿面無人識、風霜滿面、人の識るなし、

何處如今更有詩、何の處にか、如今、更に詩ある。

しても五十里もあるで、たとひ行き得るにしても、腹分大急ぎの行程である。

【題義】この詩は、鎮州に赴く途上、裴度が重ねて東都から詩を寄せたから、それに酬いて作つたのである。

【詩意】われは、今次、救命を受け、山東の鎮州に赴いて、藩鎮の騷擾を鎮撫しやうといふので、日ごとに馳すること三百里、出来るだけ急いで居るが、それでも、もどかしくて堪まらぬ位、北地春淺くして、寒なほ劇しく、風霜面に滿ち、忽ちの内に憔悴して、識別する人も無いと思ふ位。されば、今日どこへ往つたとて、この外に詩など有らう筈がない。つまり、刻下は、早く賊地に乗り込みたいといふ一心だけで、詩どころの騒ぎではない。

【餘論】究極の處は、前首と同じであるが、言ひ廻はしが異なつて居るから、蛇足を妨げず、又汁粉を食つた跡でお萩といふやうな感じも起らずに済むのである。

奉和僕射裴相公感恩言志

文武成功後、居爲百辟師、文武功を成すの後、居ながら百辟の師となる。

林園窮勝事、鐘鼓樂清時、林園、勝事を窮め、鐘鼓、清時を樂む。

擺落遺高論、雕鏤出小詩、擺落して、高論を遺れ、雕鏤して、小詩を出す。

自然無不可、范蠡爾其誰、自然に不可なるなし、范蠡、爾、其れ誰ぞ。

【字解】(一) 文武成功、裴度が内に在りては宰相として治を致し、外に在りては淮西の吳元濟を討平せしをいふ。(二) 百辟百官に同じ。(三) 窮勝事、面白い遊を盡にする。(四) 鐘鼓、音樂。(五) 清時、濟平の時、太平の世。(六) 擺落、ふるひ落す。(七) 范蠡、春秋、魯の極めて精細なるをいふ。(八) 范蠡、史記越王勾踐世家に「范蠡、越王に事へ、吳を滅して會稽の恥に報ゆ。以爲へらく、大名の下、以て久しく居り離しと。乃ち其輕貨を賣ひ、舟に乘じ、海に浮んで以て行き、終に反らず」とある。

【題義】この詩は、裴度が恩に感じて述べた其詩に和したといふので、多分、長慶二年六月、右僕射に成つた時であらうと思ふ。但し、裴度の詩は、今存するもの、二十首に滿たず、この首も、傳

律詩 鎮州路上謹酬裴司空相公重見寄 奉和僕射裴相公感恩言志

はつて居ないのは、まことに遺憾の至である。

【詩意】 裴相公は、文武兩つながら功を成せし後、居ながらにして百官の師表となり、その聲望は、まことに素張らしいものである。しかし、優游として閒地に就き、林園に在りて、おもふ存分、愉快なる遊を繼にし、常に鐘鼓の樂を奏して居られる。そこで、世事を擱ひ落して、高尚なる議論を口にせず、折角、修辭の工夫を凝らして小詩を作られる。古しへから、大名の下には久しく居り難いと云ふが、裴相公の如くすれば、自然、不可なることはなく、かの范蠡などは、まるで話に成らぬものである。

【餘論】 朱竹垞は「二詩（後首を云ふ）能く大賢功成りし後の心事を道ひ出し、高からず、卑からず、世と推移す、而して主張自ら有り、細に玩べば、深く腴味あり」といひ、何義門は「次聯是れ恩に感ず、故に味あり」といつて居る。なほ詩話總龜に「慶曆中、西師、未だ解けず、晏元獻、樞密使たり。大雪に會し、酒を西園に置く。歐陽永叔、詩を賦して云ふ、須憐鐵甲冷徹骨、四十餘萬屯邊兵と。晏曰く、むかし、韓愈、亦た能く言語を作す、裴度の會に赴く、但だ林園窮勝事、鐘鼓樂清時」と云ふのみ。かつて、此の如く閑を作さず」とあつて、乾隆御批に之を引いて「夫れ裴度の綠野に優游する、乃ち已むを得ずして、世と浮沈す。故に愈の詩云、晏殊は、處るところ同じからず、永叔の颯風を聞けば、正に容を改めて之を謝すべし、顧るに、猶ほ中に怫然たるか」といつて、流石に善く事理を盡して居る。

和僕射相公朝廻見寄

僕射相公の朝より廻つて寄せらるるに和す

盡<sup>レ</sup>瘁<sup>レ</sup>年將久。公今始暫閒。盡瘁、年將に久しからむとす、公、今はじめて暫く閒なり。

事隨憂共滅。詩與酒俱還。事は憂に隨つて共に滅じ、詩は酒と共に還る。

放意機衡外。收身矢石間。意を放つ機衡の外、身を收む矢石の間。

秋臺風日迴。正好看前山。秋臺、風日廻かなり、正に前山を見るに好し。

【字解】 〔一〕盡瘁、王事の爲に心力を盡して疲せ衰へる。〔二〕詩與酒俱還、詩酒の閒地に立ち歸つたといふこと。〔三〕機衡、樞機權衡、朝政を處置する大方針。

【題義】 この詩は、裴度が參朝して歸宅し、その感懷を述べて寄せたから、それに和して作つたので、矢張、前詩と同じ頃である。そして、その原作は、亦た傳はつて居らぬ。

【詩意】 裴相公は、國家の爲に盡瘁すること、年、すでに久しからむとし、今しも、やつと、閒地に就かれた。かくて、世事は憂に隨つて共に滅し、再び詩酒の風流に立ち歸られたのは、まことに、喜ぶ

べきことで、ここに、心意を朝政の外に放ち、身を矢石の間より收められた。今しも秋、臺に登れば、風日朝かに晴れ、前面なる終南一帶の山が、くつきりと見えるのは、まことに、心地よきことである。

【餘論】 庚溪詩話に「蘇子瞻、陶詩に和して云ふ、前山正好數、後騎且莫驅と。この語と同じからずと雖も、しかも情を物外に寄す、夷曠優游の意は、すなはち一とある。次に、乾隆御批は、これと前首と合せ評して「退之、中立（裴度の字）と雅契、同じく艱危を涉り、功業を樹つ、その當時、朝局元老の苦心に於ける、これを知る最も深きものあり、二詩能く之を曲傳す、諷詠殊に餘味あり」と云つて居る。

奉和李相公題蕭家林亭 李相公の蕭家林亭に題し和し奉る

山公自是林園主 山公自ら是れ林園の主、

歎惜前賢造作時 歎惜す前賢造作の時。

巖洞幽深門盡鎖 巖洞幽深、門盡く鎖づ、

不因丞相幾人知 丞相に因らずむば、幾人か知らむ。

作、歌うて曰く、山公出三何許往至高陽池、日夕倒載歸、船中無所知」とある。【一】前賢、蕭氏の前代の人人をいふ。【二】造

【字解】

【一】山公、即ち山前、晉書の本傳に「襄陽に鎮するとき、諸習氏は荆土の豪族、佳園池あり、前出でて遊嬉する毎に、多く池上に之を、酒を置いて輒ち酌ふ、これを名づけて高陽池といふ。時に兒童あり、蕭氏の前代の人人をいふ。【二】造

作、經傳に同じ。【一】丞相、李相公を指す。

【題義】 李相公は、原注に達吉とある。李達吉は、徹底の小人であるが、かくも數ば韓愈が詩を唐和した處を見ると、同年の進士たる關係ばかりでなく、その人、亦た聊か取るべきところが有つたのであらう。蕭家の林亭に就いて、樊汝霖は「蕭氏は、唐に在つて最も盛なり、珣、嵩、華、復、僊、眞、傲、遇、凡そ八葉宰相、嵩の第は城南布政坊に在り、眞の第は城南永樂坊に在り、長安志に見ゆ」とある。ここのは、何處の第か分からぬが、林亭といふからには、郭外に在る別荘かと思はれる。この詩は、李達吉が蕭氏の林亭に遊んで、詩を題せしに因り、それに和して作つたのである。

【詩意】 君が蕭氏の林園に於けるは、さながら、當年の山簡が習家の池に於けると同じく、われこそ、その林園の主人といはぬばかりで、随意に幽賞せられ、そして、蕭氏の前代の人人が之を經營した時を追想して、感慨に堪へられなかつた。今しも、その林園は、巖洞幽深にして、門扉盡く鎖ぢ、丞相みづから、此に遊んで、詩を作られたから、人も成程と思つたが、さうでなければ、その存在を知つて居るものは、幾人も無かつたであらう。

【餘論】 名家の末が兎角振はず、その林園の荒蕪に歸するは、毎毎見るところで、詩は平凡であるがさすがに感想盡さざる底の趣がある。

奉和杜相公太清宮紀事陳誠上李相公十六韻

杜相公が太清宮事を紀し誠を陳べ、李相公に上る十六韻に和し奉る

未相興<sup>二</sup>姬國<sup>一</sup>、輜<sup>二</sup>樓<sup>一</sup>建夏家。未相、姬國を興し、輜樓、夏家を建つ。

在功誠可尙<sup>二</sup>、於道詎爲華。功に在つては誠に尙ふべく、道に於ては詎ぞ華と爲さむ。

象帝威容大<sup>二</sup>、仙宗寶曆除。象帝、威容大に、仙宗、寶曆除かなり。

衛門羅戟槩<sup>二</sup>、圖壁雜龍蛇。門を衛つて戟槩を羅ね、壁に圖して龍蛇を雜ふ。

禮樂追尊盛<sup>二</sup>、乾坤降福遐。禮樂、追尊盛に、乾坤、福を降すこと遐かなり。

四眞皆齒列<sup>二</sup>、二聖亦肩差。四眞皆齒列し、二聖亦た肩差す。

陽月時之首<sup>二</sup>、陰泉氣未<sup>一</sup>牙。陽月時の首、陰泉氣未だ牙さず。

殿階鋪水碧<sup>二</sup>、庭炬<sup>一</sup>金葩。殿階、水碧を鋪き、庭炬、金葩を炬く。

紫極觀忘倦<sup>二</sup>、青詞奏不<sup>一</sup>譁。紫極、觀て倦むを忘れ、青詞、奏して譁ならず。

嘈<sup>二</sup>吹宮夜闌<sup>一</sup>、嘈<sup>二</sup>吹鼓晨樾<sup>一</sup>。嘈吹として、宮、夜に闌き、嘈吹として、鼓、晨に樾つ。

襲<sup>二</sup>味陳奚取<sup>一</sup>、名香薦孔嘉。襲味陳ねて奚ぞ取らむ、名香薦めて孔だ嘉し。

垂<sup>二</sup>祥紛可錄<sup>一</sup>、俾<sup>二</sup>壽浩無涯<sup>一</sup>。祥を垂れて、紛として錄すべし、壽をして、浩として涯

貴<sup>二</sup>相山瞻峻<sup>一</sup>、清<sup>二</sup>文玉絕瑕<sup>一</sup>。貴相、山、峻きを瞻、清文、玉、瑕を絶つ。一なからしめん。

代<sup>二</sup>工聲問遠<sup>一</sup>、攝<sup>二</sup>事敬恭加<sup>一</sup>。工に代つて聲問遠く、事を攝して敬恭加はる。

皎<sup>二</sup>潔當天月<sup>一</sup>、歲<sup>二</sup>蕤捧日霞<sup>一</sup>。皎潔たり天に當るの月、歲蕤たり日を捧ぐるの霞。

唱<sup>二</sup>妍酬亦麗<sup>一</sup>、俛<sup>二</sup>仰但稱嗟<sup>一</sup>。唱妍にして酬亦た麗、俛仰して但だ稱嗟。

【字解】(一) 未相興姬國、史記周本紀に「周の後復、名は未、夷舉げて異師となし、部に對じ、號して后復といふ、別姓姬氏」とある。未相は歸州等の異名。(二) 輜樓建夏家、書經に「禹曰く、予四載に樂す」とあつて、孔安國の傳に「水には舟に乘り、陸には車に乘り、泥には輜に乘り、山には樓に乘る」とある。又史記夏本紀に「泥行には輜に乘る」とある。輜は輜、樓は樓。史記の注に「孟康曰く、輜は、形、箕の如く、泥上を通行す」とあり、「如淳曰く、輜車は、輜ふ輜を以て推頭の如くし、長さ半寸、これを履下に施し、以て山に上つて墮跌せざるなり」とある。輜、即ち輜はそり、輜、即ち輜はがんじき。禹は、輜やがんじきに乘つて、天下を歴遊し、洪水を平らげて夏國を建設した。(三) 象帝、決して花らしいことではなく、極めて地味な仕事である。(四) 象帝、老子が帝號を追贈されしことをいふ。(五) 仙宗、仙道の宗祖。(六) 寶曆除、長生不死をいふ。(七) 戟槩、とにも矛。(八) 四眞、舊唐書玄宗紀に「天寶元年、親ら玄宗皇帝を新廟に享し、莊子を以て南華真人となし、文子を通玄真人となし、列子を冲虛真人となし、庚桑子を開虛真人となし、四子著はすとこの書、改めて眞經と爲す」とある。(九) 齒列、その中に還入つて列する。(一〇) 二聖、玄宗、肅宗、二帝の像を云ふ。雅錄に「初め太清宮成るや、工に命じ、太白山に於て白石を採り、玄宗の眞像、袁冕の服を爲り、當殿南面、玄宗、肅宗は左右に侍立し、皆朱衣朝服」とある。(一一) 陽月、爾雅に「十月を陽となす」とある。

律詩 奉和杜相公太清宮紀事陳誠上李相公十六韻

【一三】木牙 牙は牙に同じきささね。【一四】水碧 寒水石の碧色なるをいふ。【一五】拆金葩 黄金色の花が開いた如くである。  
 【一六】紫極 舊唐書玄宗紀に「天寶二年三月、天下諸郡の玄宗廟を改めて紫極となす」とある。【一七】青調 神に奏する調、即ちのりと、舞注に「宋の景靈宮天興殿、祝するに青調を以てし、薦むるに酒果を以てす、唐制を用ふるなり、今に及びて前之を用ふ」とある。【一八】増吹 門扉の開く音の高きをいふ。文選長門賦に「聲增吹而似鐘」とある。【一九】嘯 鼓聲の高きを云ふ、文選東京賦に「奏鼓之嘯嘯」とある。【二〇】晨極 極は敵くこと、鏡志に「兩衛、流陽拂掃を爲し、蹙蹙して前む」とある。【二一】嚙味 嚙味ならぬ物、禮記の郊特牲に「敢て羹味を用ひて多品を賁ばす」とある。【二二】貴相 杜相公の風貌、自ら貴きをいふ。【二三】代工 書經に「天工人、其れ之に代る」とある、其字面を用ふ。【二四】聖明 御機嫌を奉伺する。【二五】攝事 論語に「官事は攝せず」とある、其字面を用ふ。【二六】當天月 下の排日假と同義、天日は以て君に喻へ、月假は以て臣に喻へ、即ち杜元穎を指す。【二七】紫苑 蔚然として茂る貌。【二八】鳴銜 亦麗 李杜二相公の唱和をいふ。【二九】稱嘯 感歎に勝へむこと。

【題義】 一本に題を杜相公太清宮十六韻記事陳誠上李相因和に作つてある、又原注に「杜は元穎を謂ふなり」とある。舊唐書杜元穎傳に「貞元の末、進士に登第し、穆宗即位、戸部侍郎承旨に拜せられ、長慶元年、本官を以て同平章たり」とある。太清宮は、老子の廟、當時道教の總本山であつて、朝廷からも随分尊崇された。舊唐書の玄宗紀に「天寶元年、陳王府の參軍田同秀上言す、玄宗皇帝、丹鳳門の通衢に見はれ、靈符を錫うて尹喜の故宅に在りと告ぐと。上、使を遣はし、函谷關尹喜臺西に就いて之を發し得たり、乃ち玄宗廟を大事坊に置き、親ら新廟に享し、九月、改めて太上玄元皇帝宮となし、二年、改めて太清宮と爲す」とある。唐は、元と李姓であるが、先祖に格別の人もな

く、帝室としての威嚴を缺く處から、老子の本名を李耳といふを幸に、即ち自分の先祖といふことにし、因つて、かういふ事もあつたので、多分いささか智慮あるものが捏造したことであらう。李相公は、例の李逢吉。この詩は、杜元穎が致命に依つて、太清宮の祭祀を奉仕し、その事畢りし後、事を紀し、誠意を陳べて、十六韻の五古を作り、宰相の上席に居る李逢吉に上つたから、これに和して作つたのである。

【詩意】 むかし、后稷は、致敏を手にし、専ら農事を務めて、周家を興し、禹は楫に乗り、かんじきを穿いて、天下を巡り、勤苦の餘に洪水を治めて、夏の基を建てた。后稷といひ、禹といひ、その功績の上から云へば、まことに尊ぶべきものであるが、道の上から見れば、地味で花花しくもない。ここに、わが老子は、帝位を追贈されただけに、威容洪大、その上、仙家の宗祖として、長生不死を得られ、寶曆遙にして算へることも出来ない位。太清宮は、即ち老子の廟であつて、門には警護の兵卒が居て、矛を並べ、四壁には龍蛇を畫いて、いかにも神しく、且つ嚴かである。すでに禮樂大に行はるる清時の方つて、追尊の盛儀を行はれ、その神靈は乾坤に行き互つて、隨處に福を降し、莊文列庚の四人も、真人を贈られて、これに陪列し、玄宗・肅宗二帝の像は、肩を並べて左右に侍立して居る。十月は、時の初といふが、地下に於ては、陽氣が未だ兆さず、従つて、寒冷を覺える位。殿階には、碧色の寒水石を敷き詰め、庭上の炬火は、黄金色の花が咲くかと思はれる位。名さへ紫極といふ位

で、その森遠なるは、觀ても、倦むことなく、境前に讀み上げる青詞は、聲高らかにあるが、決して、諱しくはない。夜なほ暗きに、宮門の扉は、噌吰として、鼓の音が嘈囂として打ち出せば、やがて、朝になつた。清淨ならぬ物は、もとより供へぬことにあるし、名香は、薫むるに尤も善いとしてある。かくの如く、祭祀が行き届いて居るから、神靈も、自然感應し、祥瑞を垂ることは、紛として餘ありと爲すべく、又民人の壽命をして無窮ならしめるであらう。今次、祭事を奉仕した杜相公は、相貌堂堂として、山の峻なるを仰ぐが如く、自ら其事を紀述された詩章は、瑩明透徹、玉の如く、一點の瑕だにない。杜相公は、天子に代り、老子の神靈に向つて御機嫌伺ひをなし、祭事を攝行して、恭敬愈よ加はり、たとへば、天に當る月の皎潔なるが如く、日を捧ぐる霞の蔚蒼たるが如く、天子の御代拜として、物ごとに、聖意を奉體し、愈よ見事に遣つて退けられたのは、まことに恐れ入つた次第。そこで、李相公との唱酬を拜見すると、いづれも妍麗であつて、文彩爛斑、目もあやなるばかり、かく申す某は、俯仰の餘り、唯だあつと云つて感ずるのみである。

【餘論】この篇は、すべて三段より成り、起首より二聖亦肩差に至るまでの十二句は、太清宮の莊嚴なることを紀し、陽月時之首より俾壽浩無涯に至るまでの十二句は、今次の祭祀を紀し、以下八句は、杜相公の詩を作つたことを紀し、層層遞下して、段落も分明である。蔣之翘は「これ老杜、洛城關、玄宗皇帝廟」の詩と竝んで、壯麗を具ふ、しかも、その典雅に如かずといつて居る。参考の爲

に、その杜甫の詩を下に舉げることにする。

配極玄都闕。憑虛禁籟長。守祕嚴具禮。掌節鎮非常。碧瓦初寒外。金莖一氣傍。山河挾繡戶。日月近彫梁。仙李盤根大。猗蘭奕葉光。世家遺舊史。道德付今王。畫手看前輩。吳生遠擅場。森羅移地軸。妙絕動宮牆。五聖聯龍套。千官列雁行。冕旒俱秀發。旌旆盡飛揚。翠柏深留景。紅梨迥得霜。風箏吹玉柱。露井凍銀牀。身退卑周室。經傳拱漢皇。谷神如不死。養拙更何鄉。

朱竹垞も「宏麗精密。絶だ少陵に似たり」と云つて居る。





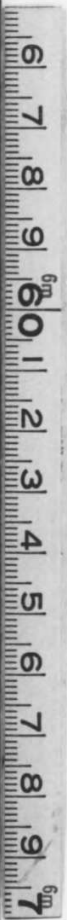
終

續國譯漢文大成

文學部 三十二

309  
65

裝  
入



始



續國譯漢文大成

文學部第三十二册(第八帙の四)

韓退之詩集 下の四

吉田待郎氏 寄贈本

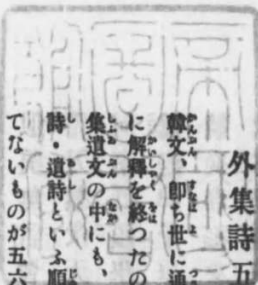


蘇園精苑文大宛

韓昌黎集補遺

外集詩五首

韓文、即ち世に通行せる韓愈の全集は、計四十卷、その初に、詩十卷が載せてあつて、その詩は既に解釋を終つたのである。なほ右四十卷の外に、外集があり、順宗實錄があり、遺文があつて、外集遺文の中にも、少數ながら詩が交つて居るから、願注本の如き、詩集だけ抜いたものには、外集詩・遺詩といふ順序で、これを附載してある。その外文集の中に序と一纏に成つて居て、詩集に入れないものが五六首あつて、これを最後に附載してある。願注本には、卷十一としてあるが、ここでは、特に改めて補遺として置いた。



芍薬歌

芍薬の歌

夫人庭中開好花

夫人庭中、好花開く、

芍薬歌

【字解】

〔一〕夫人 年長者の尊稱。

〔二〕凡木 普通の花木桃李の類を

更無凡木爭春華。更に凡木の春華を争ふなし。  
 翠莖紅藥天力與。翠莖紅藥、天力與ふ、  
 此恩不屬黃鍾家。この恩、黃鍾の家に屬せず。  
 溫馨熟美鮮香起。溫馨は熟美に、鮮香は起る、  
 似笑無言習君子。笑ふに似て言なく、君子に習へり。  
 霜刀翦汝天女勞。霜刀、汝を翦つて、天女勞す、  
 何事低頭學桃李。何事ぞ頭を低れて、桃李を學ぶ。  
 嬌癡婢子無靈性。嬌癡の婢子、靈性なし、  
 競挽春衫來比竝。競うて春衫を挽いて、來つて比竝す。  
 欲將雙頰一晞紅。雙頰を將て、一たび紅を晞かさむと欲す。  
 綠窻磨徧青銅鏡。綠窻磨いて徧ねし青銅鏡。  
 一罇春酒甘若飴。一罇の春酒、甘きこと飴の若し、  
 丈人此樂無人知。丈人の此樂、人の知るなし、

いふ。  
 黃鍾家。黃鍾は音律の名、つまり細えず音階などを奏して居る富貴の家。  
 溫馨熟美。芍藥の花の薫りの高きを形容して云ふ。  
 霜刀。その機刃の色霜の如き小刀。  
 嬌癡。たなやかにして癡態を帶ぶ。  
 比竝。比較する。  
 楚狂。楚狂は接輿、孔子の門を過ぎて風兮を歌ひしこと、論語、莊子に見ゆ。  
 小子。論語に吾黨小子とある。

花前醉倒歌者誰。花前醉倒、歌ふものは誰ぞ。  
 楚狂小子韓退之。楚狂小子韓退之。

【題義】蔣注に「或本には刪り去る。今恐らくは、公の少作に似たり、しばらく之を存す。一本に芍の字の上に王司馬紅の四字あり、王司馬は誰なるかを詳にせず、貞元中、公亦た芍藥の一絶あり、乃ち元和十年知制誥たりし時の作、これは、その作の時日を知ること能はず」とある。貞元中に芍藥の一絶があつて、元和十年の作といふのは、譯が分からない、蓋し貞元中とは、正集中の誤であらう。  
 【詩意】王司馬の庭中に於て、一種の好花が開いて居るが、外に平凡の木の花の春華を争ふものなく、全くこの芍藥の獨占に任かせてある。芍藥の花たるや、翠莖紅藥、色彩の配合は、極めて見事で、取りも直さず造化の力を以て付與したものと見えるが、天は決して富貴の家に私して、この名花を屬せしむることなく、風流にして花を愛する丈人なればこそ、特に之を屬さしめたのである。その芍藥の新鮮なる香は、温かく馨ばしく、そして成熟し切つて、まことに甘美であるし、その花の姿を見ると、笑ふが如くして、しかも言葉なく、全く君子を真似て居る様である。天女は、霜刀を以て汝を翦り、やがて、上界に攜へ歸らうと思つて居るのに、如何なれば、汝は、首をうなだれて、桃李と同じ様に、羞らふ様な身ぶりをして居るか。なまめかしくして癡態を帯びたる侍婢どもは、もとより、一點の靈

性もなく、依然として人間ばなれをせぬ處から、競うて紅の春衣を挽いて、花の色に比較し、はては花に類ずりをして、露にぬれたといつて、その紅の痕を乾かさむとし、つと縁窓の中に駈け入れば、そこには、青銅の鏡が磨き立てられて、光明澄朗として居る。一罇の春酒、甘きことは飴の如く、留賞して日を送るのは、まことに愉快極まることであるが、丈人の此樂を善く知つて居る人はない。ここに、花前に醉倒して、歌を作つて、聊か丈人の爲に氣焰を揚げるのは、誰かといへば、かの楚狂接輿に似たる小豎子の韓退之、即ちかく申す某である。

【餘論】これより以下の詩に就いて、蔣注には、評語を著くこと極めて稀であるし、顧注には、朱竹垞・何義門の二家、ともに、更に一辭を著けず、又唐宋詩醇にも、少しも抄録しないから、前人の見解は、全く窺ふことが出来ず、私見を以て、さかしらを加へるの外なきを遺憾とする。この詩は、なる程、韓愈の少作に相違なからうと思はれ、詞筆稍や嫩にして、極めて平易、そして、苦心刻劃の痕が無い。嬌癡婢子無靈性の一解は、極めて巧麗で、作者に於ては、稀に見るところといふべく、結末も、亦た聊か振つて居る。しかし、趙臨北は「昌黎の詩、亦た晦澁俚俗、法と爲すべからざるものあり、芍藥歌に云ふ、翠莖紅葉天力與、此思不屬黃鍾家、謂はゆる黃鍾家は、果して何を指すか」と云つて、その造語の稍や無理なことを非難して居る。

海水

海水

海水非不廣 鄧林豈無枝

海水、廣からざるに非ず、鄧林、豈に枝なからむや。

風波一蕩薄 魚鳥不可依

風波、一に蕩薄、魚鳥、依るべからず。

海水饒大波 鄧林多驚風

海水には大波饒く、鄧林には驚風多し。

豈無魚與鳥 巨細各不同

豈に魚と鳥となからむや、巨細各、同じからず。

海有吞舟鯨 鄧有垂天鵬

海には吞舟の鯨あり、鄧には垂天の鵬あり。

苟非鱗羽大 蕩薄不可能

苟くも鱗羽の大なるに非ざれば、蕩薄能くすべからず。

我鱗不盈寸 我羽不盈尺

我が鱗は寸に盈たず、我が羽は尺に盈たず。

一木有餘陰 一泉有餘澤

一木、餘陰あり、一泉、餘澤あり、

我將辭海水 濯鱗清冷池

我、將に海水を辭し、鱗を清冷の池に濯はむとす。

我將辭鄧林 刷羽蒙籠枝

我、將に鄧林を辭し、羽を蒙籠の枝に刷せむとす。

海水非愛廣 鄧林非愛枝

海水は廣きを愛むに非ず、鄧林は枝を愛むに非ず。

風波亦常事 鱗羽自不宜

風波、亦た常事、鱗羽、自ら宜しからず。

我鱗日已大。我羽日已修。我が鱗、日すでに大、我が羽、日すでに修し。  
風波無所苦。還作鯨鵬遊。風波、苦むところなく、還た鯨鵬の遊を作す。

【字解】(一) 郭枝 前に納涼聯句に見ゆ。列子に「夸父、日影を窮谷の際に逐ひ、渴して飲を欲し、赴いて河渭に飲む、河渭、足らず。將に北に走つて大澤に飲まむとす、未だ至らず。道に渴して死す。その杖を棄つ。尸の青肉、浸すとこる、化して郭林となる」とある。(二) 蕩海 動き迫る。(三) 驚風 雷いた様に俄に吹く風。(四) 吞舟鯨 文選吳都賦に長鯨吞舟とある。(五) 垂天鵬 莊子の逍遙游に鵬を記して「その翼、垂天の雲の如し」とある。(六) 靈竈 靈の再生して居る枝。

【題義】 蔣注に「水の下、或は詩の字あり、詩意を観るに、謂ふ、當時足を託するの地なく、還歸の異なしと。豈に貞元及第の後、江南に歸る時作れるか」とある。韓愈が進士に及第したのは、貞元八年で、その後、三たび博學宏詞の試に應じたけれども、成功しなかつた。そして、河陽に歸省したのは十年、その翌十一年は、歸省の後、轉じて洛陽に往つて仕舞つた。蔣注に「江南に歸る」とあるは誤で、河陽と訂正せねばならぬ。

【詩意】 海水は廣くないでもなく、郭林には枝の無い譯でもないが、海には波あり、林には風あり、一たび蕩海すれば、魚鳥は其處に依つて安んずることが出来ない。それも、普通の風波ならば未だしも、海水には大波多く、郭林には驚風多く、もとより、其處に栖んで安んじて居る魚鳥もあるが、尋常の者とは、眞然として小大相異なつて居る。げにや、海には、一口に舟を呑むといふ様な長鯨が居るし、郭

林には、その翼、垂天の雲の如しといはれる様な大鵬が休んで居る。苟くも、鯨鵬の如き鱗羽の極めて大なるものに非ざれば、とても、自分から、風波を蕩海することが出来ない。然るに、魚鳥として我を視ると、極めて瑣細なもので、我が鱗は一寸に盈たず、我が羽は一尺に盈たず、一樹の陰に休んでも、その陰が餘ある位、一泉に飲んでも、その澤が餘る位。されば、もつと小さい處に住んで居る方が善いので、我は將に海水を辭して、鱗を清冷の水を湛へたる池に濯はむとし、將に郭林を辭して、羽をこんもりと葉の茂つて居る枝に刷はうと思つて居る。海水とても、もとより我に向つて、その廣きを惜む譯でもなく、郭林とても、もとより我に向つて、その枝を惜む筈がないが、風あり波あるは、普通の事で、我我の様な小さい鱗羽を持つて居るものには適當しないから、我が方から、遠慮して、他處に移らうといふのである。しかし、我が鱗は、日日に大くなり、我が羽は、日日に長くなり、いつまでも、この儘でも居ないから、やがて、風波に苦まぬやうになれば、又ぞろ、ここに来て、鯨や鵬と同じ様に遊んで居たいと思ふので、マア暫らくの間、御別をする次第である。

【餘論】 題を海水としたのは、例の如く、唯だ起首の二字を取つたのである。篇中、海水と郭林、これに對して、風波・魚鳥・鱗羽・鯨鵬を情ひ來り、すべて對偶をなして、層層遞下して居るのは、一種の章法である。抑も中央政府は、まことに結構であるが、微才予の如きものでは、とても動まり切らないから、今の處、地方藩鎮に出かけて、仕事を見習ひ、やがて追追成熟し、練習したならば、是非、



中央政府へ還つて来て、今の世に時めく公卿搢紳と一緒に周旋したいといふのが、全篇の寓意で、現に韓愈は、追追この言を實行したのである。

贈崔立之

崔立之に贈る

昔者十日雨、子桑苦寒饑。ひかし十日の雨、子桑、寒饑に苦しむ。

夜歌坐空屋、不怨但自悲。夜、歌うて空屋に坐し、怨まず但自ら悲む。

其友名子輿、忽然憂且思。その友、名は子輿、忽然として憂へ且つ思ふ。

裘裳觸泥水、裹飯往食之。裘を裹けて泥水に觸れ、飯を裹んで往いて之に食はしむ。

入門相對語、天命良不疑。門に入つて相對して語る、天命良に疑はず。

好事漆園吏、書之存雄辭。好事漆園の吏、これを書して雄辭を存す。

千年事已遠、二子情可推。千年、事、すでに遠く、二子情推すべし。

我讀此篇日、正當雨雪時。我、この篇を讀むの日、正に雨雪の時に當る。

吾身固已困、吾友復何爲。吾が身、もとより已に困む、吾が友、復た何をか爲す。

薄粥不足裹、深泥諒難馳。

薄粥、裹むに足らず、深泥、諒に馳せ難し。

曾無子輿事、空賦子桑詩。かつて、子輿の事なく、空しく、子桑の詩を賦す。

【字解】(一)昔者十日雨、この十句の事は、莊子の大宗師に出て居る「子輿、子桑と友たり、而して、霖雨十日、子輿曰く、子桑殆んど病みたるむ、と。飯を裹んで往いて食せしめむとす。子桑の門に至れば、歌ふが若く、笑するが若し。琴を鼓して曰く、父か母か、天か人か、と。その聲に任へずして、趨つて、其詩を聽ぐるあり、子輿入つて曰く、子の詩を歌ふ、何の故に是の如くなる。曰く、吾、かの我をして此極に至らしむるものかと思つて得ざるなり、父母豈に吾が貧を欲せむや。天は私に覆ふなく、地は私に載するなし。天地、豈に我を貸しうせむや。その之を爲すものを求めて得ざるなり。然り而して、この極に至るものは命なるかな」とある。(二)裘裳、裳は下衣、それを捲くり上げる。(三)裹飯、飯を包む。(四)好事、物數寄。(五)漆園吏、史記老莊申韓列傳に「莊子は蒙人なり、名は周、周、かつて蒙の漆園の吏となる」とあつて、正義に「括地志に云ふ、漆園の故城は、曹州冤句縣北十二里に在りと。ここに、莊周、漆園の吏たりと云ふは、即ち此、按ずるに、この城、古しへ蒙縣に屬す」とある。(六)書之、莊子が大宗師の篇中に書き込んだといふこと。

【題義】この詩は、崔立之に贈つたので、何時といふことはつきり分からぬが、二人とも、まだ就職せぬ時分であらうと思はれる。蔣注に「公の集、立之と唱和最も多し。贈崔立之評事あり、酬崔二十六少府あり、寄崔二十六立之あり、雪後寄崔二十六丞公あり、而して、この詩は、乃ち外集に見ゆ。又酬藍田崔丞詠雪之作あり、世傳へて、以て集後に附すと云ふ」とある。なほ、この篇は、文苑英華から此に轉載したのである。



【詩意】 むかし、十日も雨が打つづけて降つた時、子桑は、寒くして衣なく、饑えて食なくに苦み、悲しげな聲で歌ひつつ、ひとり空屋の中に坐つて居たが、その心、誰を怨むともなく、唯だ自ら我を貧しくした其運命を悲んで居た。ここに、子桑の友の子輿といふものは、忽然として子桑の事を思ひ出して、心配に堪へず、やがて、裳を捲くり上げて、泥水に觸るるを顧みず、又飯を包んで、持つて往つて之に食はしめむとし、門に入つて、相對して語り、何事も天命に任かせる外は無いつて、更に疑ふところが無かつた。すると、物數寄な莊子といふ人があつて、この事を其著の中に書き込んだが、その立派な文章は、今までも残つて居る。この事たるや、すでに千年を隔てて、はるかの昔に成つて仕舞つたが、子桑・子輿、二人の情義は、今からでも推知することが出来る。われ、偶ま莊子の書を読んだが、その折しも、みぞれが降つて来て、書中の事實と極めて相似て居る。それで、吾が身さへも、すでに弱り切つて居るが、吾が友はどうして居るか、是非尋ねて見たいと思ふが、薄い粥は包んで持つて行くことも出来ず、道路は泥深くして、なかなか馳せて行くことが出来ない。されば、裳を褰げ、飯を褰んだといふ子輿の事は、全く之なく、唯だ子桑が歌つた様な悲しげな詩を賦して、君に贈る次第である。

【餘論】 前半十二句は、莊子に見えた事實。後半十句は、二人の境涯が恰も相似て居るが、往つて尋ねることが出来ないから、詩を贈るといふ意を述べたのである。語意ともに眞摯なれども、詩として

は、甚だ平淺凡近である。蔣之翘は「山谷の詩に次、福楊明叔見錢あり、云ふ、桑與金石交、云云、事意曾公の此詩と同じ」とある。これは、同題十首の中の第五首で、その全篇は、左の通りである。桑與金石交。既別十日雨。子輿裹飯來。一笑相告語。楊子困簞瓢。諸公不能舉。倘可從我歸。沙頭駐鳴榔。

贈河陽李大夫

河陽の李大夫に贈る

四海失巢穴。兩都困塵埃。 四海、巢穴を失ひ、兩都、塵埃に困む。  
 感恩由未報。惆悵空一來。 恩に感ずるも、なほ未だ報いず、惆悵、空しく一たび來る。  
 裘破氣不暖。馬羸鳴且哀。 裘は破れて氣暖かならず、馬は羸れて、鳴いて且つ哀し。  
 主人情更重。空使劍鋒摧。 主人情更に重し、空しく劍鋒をして摧けしむ。

【字解】 (一) 巢穴、鳥に巢あり、獸に穴あるが如く、おのが住家。(二) 兩都、長安と洛陽。(三) 由、古しへ爾と相通ず。  
 (四) 馬羸、馬が瘦れる。

【題義】 この李大夫は、李瓦といふ人だらうといふことで、舊唐書の本傳に「李瓦、字は茂初、趙郡南河陽李大夫」

の人、德宗位を嗣ぎ、檢校太常少卿兼御史中丞河陽三城鎮遏使を加へ、一年を間て、檢校左庶子河陽三城懷州節度使を加へらるゝとある。それから、蔣注に「凡は、德宗の初、河陽節度使たり、公年十二、大曆十四年に當り、伯兄會に隨つて嶺表に遷る、會卒し、鄭嫂に從つて、歸つて河陽に葬る、時に李希烈・李惟岳・田悅・梁崇義・朱滔の徒、相繼いで變を煽し、中原騷然たり。故に祭鄭嫂文に云ふ、既克反葬、遭三時艱難」と。而して、この詩にも、亦た四海失巢穴の句あり、時に年十四五。公、かつて自ら言ふ、十三にして文を能くすと。恐らくは、或は然らむ」とある。すると、この詩は、建中二三年の頃、韓愈が嫂鄭氏と共に河陽に歸葬した時、賦して河陽の節度使李凡に贈つたのである。

【詩意】われは、兄の貶謫に從つて、嶺南に至り、兄が死んでから、ここに歸葬したので、四海の内、定住すべき住家もなく、おまけに、長安洛陽、ともに戰塵の地を捲いて起るに苦み、今しも、兵戈騷擾の世の中である。われは、亡兄が鞠育の恩に感ずるものから、未だ之を報い得ず、ここに其喪を護し、惆悵して、やつと此までたどり着いた始末。久しい旅をする間に、裘は破れて、肌に觸るる氣は暖かならず、馬は疲れて、悲しげに嘶いて居る。さて今後どうしたものかと思ひ煩ふ折から、李公の御厚情は、まことに感謝すべく、どうやら、ここに落ち付くことが出来たので、その情の重きに對しては、劍鋒を摧くとも厭はないとさへ思つて居る。

【餘論】蔣之勉は「結處、悲中却つて自ら壯氣あり」と云つて居る。この詩は、半古半律の一體で、空の字の二つあるのは、まことに目につくが、十四五歳の少年の作としては、流石に偉いものである。

苦寒歌

苦寒の歌

黄昏苦寒歌

黄昏寒に苦んで歌ひ、

夜半不能休

夜半休む能はず。

豈不有陽春

豈に陽春あらざらむや、

節歲聿其周

節歲聿に其れ周らむ。

君何愛

君何ぞ愛む、

重裘兼味養大賢

重裘兼味、大賢を養へ、

氷食葛製神所憐

氷食葛製、神の憐むところ。

填窻塞戶慎勿出

窻を填め戸を塞いで、慎んで出づる勿れ、

喧風暖景明年日

喧風暖景、明年の日。

【字解】

【一】陽春 春は陽氣盛なるが故に云ふ。【二】聿其周 終には循環して来る。【三】君何愛 この下に脱語があるので、もしかすると、五言二句、即ち十字あつたのが、この三字だけ残つたのかと思はれる。今、しばらく之を圖つて解釋する。【四】兼味 種類多くして粘糯なる御馳走。【五】葛製 葛の類雜で織つた衣といふので、その清潔なのが特徴であらう。【六】神所憐 神靈の御氣に入る。【七】慎勿出 注意して外出をするな。

【題義】苦寒歌は、讀んで字の如く、どうやら窮士の爲に氣焔を吐いたものと思はれるが、何分、脱落があつて、意義が十分に疏通しない。

【詩意】寒威の劇しきに苦み、黄昏の頃より、ひとり放歌し、感慨愴然、夜半に成つても、止めることが出来ない。もとより、陽春が無い譯でもなく、やがて節物歳月は循環して、その時に廻り逢ふから、さう寒さに背けて閉口せずとも宜しい。氷食葛製は、食つても甘くはなく、唯だ清淨潔白を旨として神様の御氣には入るが、大賢にして、飢寒に苦むものに對しては、重裘兼味を以て賑恤するのが至當である。君にして、かういふ人を引き立てれば、もう何事を爲すとも善いので、意を填め、戸を塞いで、少しも外出せぬ様にし、やがて來年になれば、風ぬるく、景色暖かく、世は自然に春めて來て、君も亦た樂しく遊び暮らすことが出来る。何にしても、大賢を飢寒より救ひ出すといふことは、自他の兩爲になるので、どうか、この點に就いて、少しく考へて貰ひたい。

贈同遊者 已見正集 同遊者に贈る すでに正集に見ゆ

外集の初出本には、この題の詩があつたが、すでに、正集に出て居るから、削つて仕舞つたといふので、即ち卷九、遊城南十六首の中の贈同遊の一首であらう。

遺詩 十六首

韓昌黎集、即ち韓文の終に附載した遺文の一卷には、詩の前に聯句があるが、ここでは、顧注本に従つて、詩の方を前に置くことにする。

同寶牟韋執中尋劉尊師不遇

寶牟・韋執中と同じく劉尊師を尋ねたれども遇はず

秦客何年駐仙源此地深。秦客、何の年にか駐まる、仙源、この地深し。  
還隨蹶蹶騎來訪。還た蹶を蹶むの騎に隨つて、來つて風を馭するの襟を訪ふ。  
院閉青霞入松高老鶴尋。院閉ちて青霞入り、松高くして老鶴尋ぬ。  
猶疑隱形坐敢起竊桃心。猶ほ形を隠して坐するかと疑ふ、敢て桃を竊むの心を起す。

【字解】(一)秦客何年駐、この二句は、兼人が武陵桃源に世を避けたといふ故事を用ひたので、その評は卷三桃源圖の條に見えて居る。(二)蹶蹶騎、後漢書王喬傳に「蹶の命となる、入朝すること數ばなり。帝、太史をして候望せしむるに、言ふ、蹶蹶あつて飛び來ると、乃ち蹶を擧げて之を誦り、但だ蹶蹶を得たり。すなはち、尙書官屬に屬ふところの履なり」とある。これは、寶牟、

贈同遊者 同寶牟韋執中尋劉尊師不遇

韋執中の二人、ともに顯合なるが故に、縣令に顯する故事を用ひたので、その註用せずして、最も切實なるをば顯るべきである。

【三】賦風聲。莊子の逍遙傳に「列子の風に御して行く、冷然として善きなり、旬有五日にして反る」とある。韓は韓康、韓懷。【四】癡決心。東方朔が桃を偷んだ事で、卷七讀東方朔雜事の條に見ゆ。

【題義】題下の自注に「尋の字を得たり」とあり、蔣注に「この詩、五寶聯珠集に得たり、公、時に都官員外郎に任じ、洛陽の令寶牟・河南の令韋執中と同じく、以て之を訪ふ、元和五年なり。詩、同尋師を以て韻となし、人ごとに各一首、洪氏の年譜にも、亦た見えたり」とある。劉尊師は、いづれ高德の道士であらうが、その傳記等は分からない。

【詩意】ここは、何年からか、秦人が亂を避けて駐まつて居る處の如く見え、殊に幽邃を極めて、宛然たる桃花源である。われは、雙兔を躡むといふ彼の王喬の如き二縣令に伴はれ、ここに來りて、風に御する列子の襟袖を備へたる劉尊師を尋ねた處が、生憎不在であつたのは、まことに遺憾である。と見れば、小院堅く閉ざしたれども、青霞は自然と流れ入り、松は高くして、老鶴が來り尋ね、物外の風光、まことに尊師の居たるにふさはしい。尊師は、不在だといふが、もしかすると、隱形の術を使つて、そこらに居るのかも知れないので、われは、桃を偷んだ東方朔の如き野心を起さずに、ひたすら謹んで居た。

【餘論】蔣之題の評に「この詩、退之の所作たること、確として證あるに似たり。但し、氣格、正集

の諸詩と絶だ相肖す、更に之を詳にするを俟つ」とあるが、後聯十字は、明盛にして太だ愛すべきを覺える。寶牟が同時の作は、陪韓院長、韋河南、同尋劉師不遇と題し、題下の自注に以同尋師三字分韻、牟得同字とあつて、その全篇は、左の如くである。

仙客誠難訪。吾人豈易同。獨遊應駐景。相顧且吟風。藥碗瓊枝秀。齋軒粉壁空。不題三五字。何以達壺公。

韋執中の作は、陪韓退之、寶貽周、同尋劉尊師不遇、得師字と題して、左の如く、そして、この人の作は、唯だ此一首が残つて居るだけである。

早尚逍遙境。常懷汗漫期。星郎同訪道。羽客杳何之。物外求仙侶。人間失我師。不知柯爛者。何處看圖基。

以上は、全唐詩から檢出したのであつて、同書の略傳を見ると、寶牟には「牟、字は貽周、貞元進士の第に擧げられ、従事に歴佐し、後、留守判官檢校尚書都官郎中となり、出でて潭州刺史となり、國子司業に改められて卒す、集十卷あり、今詩二十一首を存す」とあり、韋執中には「執中は京兆の人、河南縣令泉州刺史を歴たり、詩一首」とある。そして、この二家の作に對照して見ると、韓愈の詩が其自作なることは、もとより疑なき様である。

春雪

春雪

片片驅鴻急，紛紛逐吹斜。

片片、鴻を驅つて急に、紛紛、吹を逐うて斜なり。

到江還作水，著樹漸成花。

江に到つて還た水と作り、樹に著いて漸く花と成る。

越喜飛排瘴，胡愁厚蓋砂。

越は喜ぶ、飛んで瘴を排するを、胡は愁ふ、厚うして沙を

兼雲封洞口，助月照天涯。

雲と洞口を封じ、月を助けて天涯を照らす。

嗅見迷巢鳥，朝逢失轍車。

嗅には巢に迷ふの鳥を見、朝には轍を失ふの車に逢ふ。

呈豐盡相賀，寧止力耕家。

豊を呈して盡く相賀す、寧ろ止だ力耕の家のみならむや。

【字解】(一) 驅、鴻が飛んで行く様で、勢が非常に急である。(二) 逐、風を逐ふ。(三) 排、瘴の氣を排除する。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】春雪の降るや、片片として鴻が飛び行く様に早く、紛紛として風を逐うて斜に亂れて居る。

その江中に落ちたものは、溶けて水となり、樹に著けば、次第に花の如く見える。南なる越國では、

飛んで毒熱の氣を排除するを喜び、反對に北なる胡地では、厚く積んで平沙を蓋ふことを愁へて居る。雲と一緒にたつては、洞口を塞ぎ、月の光を助けては、天涯までも照らし、日暮には巢に迷ふ鳥

があるし、朝早くには、曳き棄てた車を認める。豊年の兆としては、誰でも慶賀せぬものなく、もとより力耕を以て活を爲す農家のみではない。

【餘論】蔣注に「以上、竝に方本載するところ、諸本無きところのもの、今悉く之を存す。諸本更に遺文一卷あり。方ひとり贈族姪、嘲軒睡三篇を取つて、餘は竝に録せず。今、竝に後に附見し、その疑ふべきものは、亦た但だ其目を存して其文を載せすと云ふ」とある。それから方崧卿は「この詩、文苑英華に得たり、その後、即ち正集中春雪の首句に云ふ、新年都未有三芳華」と云ふものを以て之に系く、疑ふらくは、亦た公の作ならむ」といひ、蔣之翹は前の方は、之と全く同文で「之を系く」の下に於て「公の作に疑似すと云ふと雖も、その詞、特に淺俗不倫」といつて、全然方説に反對して、ひどく之を斥けて居る。この詩は、春雪と題するものから、矢張、普通の雪の詩で、特に春雪らしい氣分なきは、まことに遺憾で、蔣説も亦た一理あることと思ふ。

贈族姪

族姪に贈る

我年十八九，壯氣起胸中。

我年十八九、壯氣、胸中に起る。

作書獻雲闕，辭家逐秋蓬。

書を作つて雲闕に獻じ、家を辭して秋蓬を逐ふ。

歲時易遷次。身命多厄窮。

歲時、遷次し易く、身命、厄窮多し。

一名雖云就片祿不足充。

一名、云に就くと雖も、片祿、充つるに足らず。

今者復何事。卑棲寄徐戎。

今は復た何事ぞ、卑棲、徐戎に寄す。

蕭條費用盡。瀟落門巷空。

蕭條として、費用盡き、瀟落として門巷空し。

朝眠未能起。遠懷方鬱悵。

朝眠未だ起つ能はず、遠懷方に鬱悵たり。

擊門者誰子。問言乃吾宗。

門を撃つものは誰が子ぞ、問へば言ふ、乃ち吾が宗と。

自云有奇術。探妙知天工。

自ら云ふ、奇術あり、妙を探つて天工を知ると。

既往恨何及。將來喜還通。

既往は恨むとも何ぞ及ばむ、將來は還た通するを喜ぶ。

期吾語非佞。當爲佐時雍。

期す吾が語の佞に非ざるを、當に爲に時雍を佐くべし。

【字解】【一】雲間。雲に登ゆる御門、即ち皇居を指す。【二】秋蓬。蓬の穂が秋になると風れて飛び散る。【三】一名。進士に登第せしこと。【四】片祿。少しばかりの俸祿。【五】卑棲。賤しき住居。【六】實用。物質。【七】瀟落。さびしき貌。【八】鬱悵。悵もやもやとして心に不愉快なること。【九】非佞。佞は、媚び諂ふ。【一〇】時雍。時の清平。

【題義】贈族姪の上に、或は徐州の二字があるとのことで、すると、貞元十五年より十六年にかけて、韓愈、徐州張建封の幕中に在りしとき、族姪の老成、即ち十二郎の來訪を受けて、これに贈つたのである。しかし、祭十二郎一文には「又二年、吾、董丞相に汴州に佐たり、汝、來つて吾を省し、止まること一歲、歸つて其孳を取らむことを請ふ。明年、丞相薨して、吾、汴州を去る、汝、來るを果さず。この年、吾、戎に徐州に佐たり。汝を取らしむるもの、はじめて行くと、吾、又罷め去り、汝、又來るを果さず」とあつて、十二郎は、汴州には來たが、徐州に來なかつたので、詩中に言ふところは、他に確證がない。十二郎の兄に百川といふ人があつたが、これは早く死んだと見え、祭十二郎一文に「吾、上に三兄あり、皆不幸にして早世、先人の後を承くるもの、孫に在つては惟だ汝、子に在つては惟だ吾」とある位で、外に族姪なるものは一人もない。すると、族姪は誰を指すか全く分らないことになる。又、自云有奇術、探妙知天工の句に因つて、韓湘だらうといふが、それならば、宜しく、族孫、もしくは姪孫といふべく、且つ韓愈が左遷された元和十四年に、湘は二十七歳であつたといふから、貞元十五年、徐州に居た時に、湘は七歳になる勘定、事態は、愈よ分からなくなる。しかし、この上、探究することも出來ぬから、この詩は、甚だ怪しいものだといふことに止めて、ただ一通り解釋して置くことにする。

【詩意】われ年十八九、丁度、試験を受ける爲に、初めて長安に上京した時分は、壯氣、胸中に起り、功名手に唾して取るべしと思つて居た。そこで、上書して、九重に獻じたが、もとより、志を達せ

す、それから、家を辭して處處に飄流し、さながら、秋蓬を逐ふが如くであつた。顧みれば、歲月は  
 還り易く、身命は窮厄多く、折角進士に登第することは出来たが、わづかばかりの俸祿では、何の足  
 しにもならない。刻下、何事をして居るかといへば、古しへの徐戎の地に來つて、賤しき住居を寄せ、  
 身計蕭條として、物資すでに盡き、門巷には來訪する人もなく、まことに寂寥の極である。そこで、  
 朝寢をして、なかなか起きず、さまざまの事を思ひ出し、心もやもやとして面白からず、ふさぎ切つ  
 て居る。その時、門を敲くものがあつて、誰ぞと問へば、わが同宗の族姪であつて、やがて迎へ入れ  
 て、いろいろ話をした揚句には、奇術を覚え込み、宇宙の玄妙なる道理を探つて、天工を究め知ると  
 いふことで、もし本當ならば、大したことである。汝の一身、既往の事は痛めども及ばず、さういふ  
 事なら、將來は、どうやら此世を渡つて行くことも出来やう。願はくは、吾が語をして、一片の御世  
 辭たるに止まらざらしめ、その奇術を以て、時の清平を助け、大に世の爲に成る様の一つ働いて貰ひ  
 たい。

【餘論】 妙を探つて天工を知るといふ觸れ出しは、まことに素張らしいが、これだけでは、如何なる  
 奇術か分からず、従つて、それが果して時雍を助くべきや否や、まことに覺束ない。この詩は、半以  
 上、自分の閱歷を述べて置いて、一轉して奇術になると、自分の事は、全くそつち退けに成り、ま  
 まりが付かぬ處は、甚だ面白くないと思はれる。

嘲軒睡二首

軒睡を嘲る 二首

澹師晝睡時、聲氣一何猥。

澹師晝睡る時、聲氣一に何ぞ猥なる。

頑颯吹肥脂、坑谷相鬼磊。

頑颯、肥脂を吹き、坑谷、相鬼磊たり。

雄哮乍咽絶、每發壯益倍。

雄哮、乍ち咽絶、發する毎に壯にして益々倍す。

有如阿鼻尸、長喚忍衆罪。

阿鼻尸の如きあり、長く喚んで衆罪を忍ぶ。

馬牛驚不食、百鬼聚相待。

馬牛驚いて食はず、百鬼聚まつて相待つ。

木枕十字裂、鏡面生疥癩。

木枕十字裂け、鏡面に癩癬を生ず。

鐵佛聞皺眉、石人戰搖腿。

鐵佛、聞いて眉を皺め、石人、戦いて腿を揺かす。

孰云天地仁、吾欲責眞宰。

孰か云ふ、天地仁なりと、吾、眞宰を責めむと欲す。

幽尋虱搜耳、猛作濤翻海。

幽尋、虱、耳を搜り、猛作、濤、海に翻る。

太陽不忍明、飛御皆情怠。

太陽明かなるに忍びず、飛御皆情怠す。

乍如彭與黥、呼冤受菹醢。

乍ち彭と黥と、冤を呼んで菹醢を受くるが如し。

又如圈中虎、號瘡兼吼餒。

又圈中の虎、瘡に號び兼ねて餓に吼ゆるが如し。





に攻められて、殆んど死んだも同じであるから、どこの山にか仙藥が有るならば、願はくば、それを探つて来て、この病を治療して遣りたいものである。

【餘論】初めは、唯だ其叫喚の甚しいのを述べたが、後には、一步を進めて、これを天地の不仁に歸し、韻苦に、魂爽れ、到底これを救ふに由なきことを傷んだのである。

澹公坐臥時、長睡無不穩、  
澹帥、坐臥するの時、長睡、穩ならざるなし。

吾嘗聞其聲、深慮五藏損、  
吾、かつて其聲を聞くに、深慮、五藏損す。

黃河弄瀆瀑、梗澀連拙鉞、  
黃河、瀆瀑を弄し、梗澀、拙鉞を連ぬ。

南帝初奮槌、鑿洩混沌、  
南帝、初めて槌を奮ひ、鑿を鑿つて、混沌を洩らす。

迴然忽長引、萬丈不可付、  
迴然として忽ち長く引き、萬丈、付るべからず。

謂言絶於斯、繼出方袞袞、  
言ここに絶ゆと謂へば、繼いで出でて方に袞袞たり。

幽幽寸喉中、草木森莽蒼、  
幽幽たり寸喉の中、草木森として莽蒼。

盜賊雖狡獪、亡魂敢窺闔、  
盜賊は狡獪と雖も、亡魂敢て闔を窺はむや。

鴻蒙總合雜、詭譎駢戾狼、  
鴻蒙、すべて合雜、詭譎、戾狼を駢す。

乍如鬪啾啾、忽若怨懇懇、  
乍ち鬪つて啾啾たるが如く、忽ち怨んで懇懇たるが若し。

賦形苦不同、無路尋根本、  
形を賦する、苦だ同じからず、根本を尋ぬるに路なし。

何能埋其源、惟有土一畚、  
何ぞ能く其源を埋がむ、惟だ土一畚あるのみ。

【字解】【一】坐臥、坐つた儘、體を伏せる。【二】五藏、肺・胃・心・脾・腎。【三】治瀑、萬さ下る勢の劇しきいふ。【四】澹帥、洪水が一つ處に塞がれて居て疏通せぬこと。【五】連拙鉞、鉞は鉞、即ち堯の臣、禹の父、洪水を治めたが、何の效もなかつた。拙劣なる師の如きものが萬人打撃いて治水を爲すも、唯だ連濁するのみといふ意。帝業に「顯項、五世にして鉞を生む、堯、これを以て洪水を治めしむ。功なし。羽山に殛す」とある。【六】南帝初奮槌、莊子の應帝王に「南海の帝儀、北海の帝微、中央の帝鴻、相與に其だ善し。備と怨と、混沌の體に報いむことを謀る。曰く、人皆七竅あり、以て視聽食息す、これ獨り有るなし、嘗試に之を闔たむと。日に一竅を塞ち、七日にして混沌死す」とある。【七】衰衰、引き續く貌。【八】莽蒼、草木の叢生する貌。【九】幽、幽、しきり。【一〇】鴻蒙、宇宙の元氣。【一一】戾狼、勝手に意地悪きこと。【一二】啾啾、口やがましく罵り合ふ。【一三】懇懇、懇、懇がましく、くどくどと述べ立てる。【一四】土一畚、將注に「畚は土を盛る器、莖葉を以て之を爲る、箕の屬なり、左傳に、畚を畚に置くとある。即ちもつこの類。

【詩意】澹師が坐わつた儘、伏し倒れると、ゆつくりと睡りに入つて、さも安穩らしく見えるが、吾、かつて、その鼾聲の劇しき聞き、これは餘り色色の事を深く考へ込んだ爲に、五藏を損じたのであると断定した。五藏を損じたとすれば、その療治は、なかなか六つかしく、うツかりすると、黃河の

水、方に漲り、瀧津瀬の勢を爲して下る時に當り、鯀の如きものが、幾人打續いて出た處で、治水には何の效もなく、却つて、洪水を梗溢せしめるばかり。又南海の帝儲が、徳に報ゆる爲に、日ごとに一窟を鑿ち、七日にして混沌が死んだといふ様に、折角の苦心も、無になつて、反對の結果を生ずる様なこともあつて、五藏の治療は、殆んど望が無い位。そこで、濃師の軒をかく状態を寫と觀察すると、週然として息を吸ひ入れ、萬丈にも及ぶかと思はれ、到底測るべからざる位。やがて、聲音が此に絶えたかと思ふと、繼いで吐き出す息は、袞袞として絶えず、寸餘ばかりの狭い咽喉の處には、草木が森として茂つて居るが如く、何だか大さうな物が悶えて居て、これで軒をかくものと推察された。盜賊は、狡獪な者で、どんな處へでも、ソツと這入つて行くが、亡魂は、その作用に制限があつて、限界を越えて働くことは出来ず、宇宙の元氣は、すべての物を混同拉雜し、その變化の工合は、詭譎にして、時には、意地悪くひねくれた様な事をするので、五藏の損じたのは、いつまでも直らず、忽ち喧嘩をして、口ざたなく罵るが如く、忽ち怨みがましくどくどく訴ふるが如く、軒聲は愈よ盛になる。本来人の形を賦する、各異なつて居て、病の根本を尋ねる路もないが、どうか、脊に一ばいの土を以て其源を堰ぐが如く、五藏の損じて居るのを根治して、軒をも止めさせたいものである。

【餘論】前首は、軒をかく原因として、天地の不仁を擧げたが、今度は、一層現實的に、五藏の損じたことに及び、その状態を述べ、どうか治療をして遣りたいといつたのである。大體の構想は、面白

くないでもないが、詩趣稍や闕如した様な感がある。それを掩飾する爲に、仰仰しき形容を爲し、一寸人目を驚かすが、再讀三讀、却つて、その淺近を覺えることを免れない。なほ、この兩首に就いて、洪興祖は「李希聲の家に退之の遺詩數十篇あり、希聲云ふ、皆非なり、ひとり朝軒の二篇、稍や似たり、末に錄す」といひ、周紫芝の竹坡詩話には「世傳ふるところ退之の遺文、その中、嘲軒睡の二詩を載す、語極めて怪譎。退之、平日未だ嘗て佛家の語を用ひて詩を作らず。今、有<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>阿毘戸<sub>一</sub>、長喚忍<sub>二</sub>兼罪<sub>一</sub>と云ふ、その退之の作に非ざること決せり。俄佛開<sub>レ</sub>皺眉、石人戰<sub>レ</sub>搖腿の句の如き、太だ鄙陋に似たり。退之、何ぞ當に是語を作すべき。小兒輩、眞を亂ること、此の如きもの、正に兼し。鳥んぞ辨せざるべけむや」といひ、ともに之を指斥して居るが、ひとり何孟春は「退之の嘲<sub>二</sub>軒睡<sub>一</sub>の二詩、周少隱の語に、その怪譎、意義なし、退之の作に非ずといふ。春以爲へらく、然らず、これ張籍の謂はゆる駁雜の詞なり。退之、特に用つて、戲となすのみ」といつて、大に之を辯護して居る。但し、これを韓愈の作としても、決して、上乘の物に非ざること、もとより云ふまでもない。

晝月

晝月

玉盃不磨著泥土。玉盃磨かす、泥土を著け、

【字解】〔一〕玉盃、玉で造つた

青天孔出白石補

青天孔出でて白石補ふ。

兔入白藏蛙縮肚

兔は白に入つて藏し、蛙は肚を縮む、

桂樹枯株女閉戸

桂樹、株を枯らして、女、戸を閉づ。

陰爲陽羞固自古

陰陽の爲に羞づるは、固より古よりす。

嗟汝下民或敢侮

嗟、汝下民、敢て侮るあらむや。

戲嘲盜視汝目瞽

戲嘲盜視せば、汝の目瞽せむ。

閉戸。蟾蜍が月中に走つて其處に留まつて居る。以上、曾參五教玉川詩月蝕詩の注に見ゆ。【七】 汝目瞽。汝の目が潰れて仕舞ふ。

【題義】 説明に及ばぬが、一寸珍らしい題である。

【詩意】 月の晝の空にはの白く懸れるを見ると、丁度、玉の盃が磨かれず、泥土を著けて汚れて居る様であるし、青天に孔が出来て、仕方がないから、白石を以て繕つた様に見える。無論、晝の事で、光も薄いから、月中の模様も、はつきりとは見えす、藥を擽いて居る兔も、白の中に遁入つて隠れて仕舞ひ、蝦蟇も亦た腹を縮めて小さくなり、例の桂樹も、幹が枯れて勢衰へ、そして嫦娥も、戸を閉ぢて引ッ込んだといふ様な安排である。今しも晝で、太陽が高く中天に沖して居る。そこで、陰精た

る月が太陽に壓倒せられて、小さく薄く、さながら羞づるが如き態度を爲して居るので、さういふ事は、むかしから、毎毎見るところである。しかし、月は、もとより神聖なもので、やがて夜になれば、再び蘇つて、清光を放ち、天地を我が物顔に支配するに相違ないから、汝下民ども、晝の月を見て、これを侮るやうなことがあつては成らぬ。かりそめにも戲嘲して、そつと盗み視たならば、いつしか、罰が當つて、汝の目は潰れて仕舞はうぞ。

【餘論】 多少の諷刺あるものとして見られるが、何分にも、淺薄の謂を免れぬもので、蔣之翘が「鄙俚にして幾んど句を成さず、その僞撰するもの、尙ほ月蝕の詩意を剽竊して之を爲せるならむ」といつたのは、如何にも尤もと頷かれる。

贈張徐州莫辭酒

張徐州に贈る、酒を辭する莫れ

莫辭酒

酒を辭する莫れ、

此會固難同

この會、もとより同じうし難し。

請看工女機上帛

請ふ看よ、工女機上の帛、

半作軍人旗上紅

半は軍人旗上の紅となる。

贈張徐州莫辭酒

【字解】 【一】 難同。同席する、とが六つかしい。  
【二】 機上帛。機の上で織りかけて居る絹地。

莫辭酒

酒を辭する莫れ、

誰爲君王之爪牙。

誰か君王の爪牙となる。

春雷三月不作響。

春雷三月響を作さず、

戰士豈得來還家。

戰士豈に來つて家に歸るを得むや。

【題義】張徐州は即ち節度使として徐州に居る張建封。莫辭酒は、起首の三字を取つたのである。【詩意】酒を辭する勿れ、かかる會合には滅多に同席することが出来ぬから、今夕だけは、十分に痛飲しやうではないか。試に見られよ、工女が機の上で今しも織りかけて居る絹地は、やがて赤く染められて、軍旗となるので、何時戦争が始まるとも知れぬ。酒を辭する勿れ、天下、騷亂に苦む折から、誰が君王の爪牙となつて、撥亂反正の功を爲すべきぞ。是非とも、さういふ人が出て來なくては成らぬ。三月には、春雷が轟いて、今まで蟄伏して居たものが一齊に勢を盛り返す時であるが、もし雷が響かなければ、折角征伐に出かけた戰士も、凱歌を擧げて家に還ることが出来ない。今しも、丁度その時であるから、討賊の事に専にして、早く清平の世に復する様に致したく、それで、元氣を付ける爲に、この酒を十分に飲んで貰ひたい。

【餘論】蔣之翘の評に「當時、四方警多く、朝廷、賊を討つ意なし、而して、諸將、亦た命を用ひ

す、故に退之、春雷の二語、意調するところあるが若きなり」とあつて、いかさま、この一首は、韓愈の手筆だらうと思はれる。

辭唱歌

唱歌を辭す

抑逼教唱歌。不解看豔詞。

抑逼して唱歌せしむ、豔詞を看るを解せず。

坐中把酒人。豈有歡樂姿。

坐中、酒を把るの人、豈に歡樂の姿あらむや。

幸有伶者婦。腰身如柳枝。

幸に伶者の婦あり、腰身は柳枝の如し。

但令送君酒。如醉如愁癡。

但だ君に酒を送らしむ、醉ふが如く、愁癡の如し。

聲自肉中出。使人能透隨。

聲は肉中より出で、人をして能く透隨せしむ。

復遣慳悵者。贈金不皺眉。

復た慳悵の者をして、金を贈つて眉を皺めざらしむ。

豈有長直夫。喉中聲雌雄。

豈に長直の夫、喉中聲雌雄たるあらむや。

君心豈無恥。君豈是女兒。

君が心、豈に恥なからむや、君、豈に是れ女兒ならむや。

君教發直言。大聲無休時。

君、直言を發せしむ、大聲、休む時なし。

君教哭古恨、不肯復吞悲。君、古恨を哭せしむれば、肯て復た悲を吞まず。  
乍可阻君意、豔歌難可爲。乍も君が意を阻つべし、豔歌は爲すべき難し。

【字解】(一) 抑遏、無理に強ひる。(二) 伶者、婦、伶人の婦といふのではなく、伶者たる婦、即ち歌妓の意であらう。(三) 慾、なまめかしき眼。(四) 憑隨、心が自然に其後に隨ふ、つまり感心すること。(五) 慳、二字ともに惜む。吝、吝。(六) 長直、夫、身の丈高き個強なる大丈夫。(七) 雌雄、細い聲と太い聲とを使ひ分ける。(八) 可阻君意、お氣に障つても仕方がない。

【題義】酒宴の席上、何か一つ歌へといはれた時、これを辭する爲に作つたのである。

【詩意】席上、酒の稍や巡りし頃、この無骨者を無理に強ひて、何か歌つて見よとの仰せであるが、平生豔詞を看るを解せざるを以て、歌などは一向知らぬから、歌ひやうもない。それでは、誰かに代つて遣つて貰はうと思つても、坐中酒を把る人は、まだ十分に酔はず、相變らず鹿爪らしく構へて居て、歡樂の姿を爲すものが無いから、これも仕方がない。すると、幸にも、座を取り持つ歌妓があつて、その曼娜なる腰は、柳の枝の如く、君に酒を送らしむれば、その態度の媚かしく、すでに酔へるが如く、慳癡なるが如く、まことに、しほらしくて風情があるが、その女が、それでは私が一つ始めますと云つて歌ひ出した。その聲は、喉の肉の間より湧き出で、人をして感心せしむるばかり、それのみか、平生吝嗇を以て聞こえたる者をして、眉を皺めず、金を贈らしめ、まことに、御座なりの上手なこと、この上なしで、どうやら、この無骨者が歌はずに済んだのは、まことに喜ばしい。われは、

身の丈高き一廉の大丈夫であつて、喉の中で細い聲と太い聲を使ひ分けることなどは出来ない。かく申す、某を歌妓視する君は、まさか心に恥なきことはあるまい、君は、まさか女ではあるまい。もし君が我に命じて、直言を發せしめたならば、おもふ存分、言つて退け、大聲を發して休む時も無いであらう。もし君が我に命じて、昔の恨事を哭せしめたならば、敢て悲を吞まず、心ゆくばかり慟哭して、お目にかける。ひよつと御氣に障るかも知れぬが、豔歌だけは、私に出来ないから仕方がない。【餘論】蔣注に、「この歌、諸本、皆、恐らくは退之の作るところに非ずと注す。朱子、乃ち姑らく之を存す、豈に或は辭に賞するところあらむ」とある。大體に於ては、極めて巧者に、極めて氣概ある様に言ひ終せてあるが、格を取ることに高からず、措辭も亦た十分に洗練せず、聊か取るべきものは有るとしても、韓愈の手筆としては、聊か首を傾かしめる。

知音者誠希

音を知るものは誠に希なり

知音者誠希、念子不能別。音を知るものは誠に希なり、子を念うて別れる能はず。

行行天未曉、攜手踏明月。行行、天、未だ曉ならず、手を攜へて明月を踏む。

【字解】(一) 知音、おのれの心を善く知れる人。列子の扁間に「伯牙善琴、鍾子期善聽、鍾子期善く聞く。伯牙琴を鼓するに、意、

高山に在り、鍾子期曰く、善いかな、峽峽として泰山の若しと。志、澗水に在り、鍾子期曰く、善いかな、洋洋として江河の若しと。伯牙の念ふところは、鍾子期必ず之を得」とあり、呂氏春秋に「鍾子期死す、伯牙琴を破り、絃を絶ち、終身復た琴を鼓せず、以爲へらく、世に知音なし」とある。それから揚雄の解嘲に「師曠の鐘を測する、知音の者の後に在るを換てばなり」とある、文選の古詩に「不悉歌者苦、但傷知音希」とある。

【題義】この詩は、起首の一句を取つて題に代へたので、實は送別の詩である。

【詩意】世に知音の者は、まことに希であつて、君の如く我が心の底まで知り抜いて居る人は、他に全く無いから、君を念うて、ここに別を爲すことが出来ない。そこで、まだ夜あけには成らぬ頃、君の早行を送らむとし、手を攜へて明月の光を踏みつつ、行き行きて止まるところを知らぬ程である。

【餘論】二十字、一氣呵成、色あり、情あり、まさしく神品を以て稱すべきものと思ふ。

酬藍田崔丞立之詠雪見寄

藍田の崔丞立之の雪を詠じて寄せらるるに酬ゆ

京城數尺雪、寒氣倍常年。京城數尺の雪、寒氣、常年に倍す。

浪浪都無地、茫茫豈是天。浪浪として、都て地なく、茫茫として豈に是れ天ならむ。

崩奔驚亂射、揮霍訝相纏。崩奔して、亂射するに驚き、揮霍して、相纏ふかと訝る。

不覺侵堂陛、方應折屋椽。不覺す堂陛を侵すを、方に屋椽を折るなるべし。

出門愁落道、上馬恐平鞦。門を出でては道に落つるを愁へ、馬上上つては鞦に平か

朝鼓矜凌起、山齋醑酌眠。朝鼓矜凌として起ち、山齋醑酌して眠る。「ならむを恐る。

吾方嗟此役、君乃詠其妍。吾、方に此役を嗟し、君、乃ち其妍を詠す。

氷玉清顏隔、波濤盛句傳。氷玉、清顏隔たり、波濤、盛句傳ふ。「せむことを憶ふ。

朝飧思共飯、夜宿憶同氈。朝飧には飯を共にせむことを思ひ、夜宿には氈を同じう

舉目無非白、雄文乃獨玄。目を舉ぐれば、白に非ざるはなし、雄の文、乃ち獨り玄

【字解】(一)京城、長安城中。(二)浪浪、埋もれる貌。(三)茫茫、邊際なき貌。(四)揮霍、振つて飛びかかる。(五)堂陛、家の階段。(六)屋椽、屋脊のたるき。(七)平鞦、下鞍と平均する。(八)矜凌、瘦て我慢をする。(九)此役、公務の爲に出動する。(一〇)氷玉清顏隔、この二句は崔丞立之の詩句から轉じて出たものに相違なく、氷玉に感じては、君の清顏見るに由なきを興じ、波濤に就いては、君の名句を感吟するといふ意。(一一)雄文乃獨玄、漢の揚雄が易に擬して太玄經を作り、時人、玄の前後白きを笑つたから、解嘲の一文を草したといふことがあつて、ここでは、それを反用したのである。

【題義】崔丞立之は、前にも數ば見えて居たが、元和十年頃には、藍田縣丞であつた。この詩は、立之が雪を詠するの作を寄せたから、それに酬いて作つたので、本集に在つた雪後これに寄せたのと同じ

頃だらうと思ふ。

【詩意】長安城中では、數尺の雪が降り積り、寒氣は、例年に倍して、甚だ嚴しい。雪に埋れては、浪浪として地らしいものも見えず、しかし、茫茫一白、これは、天ではない。その雪が崩れ奔るときは、亂射の勢、すさまじきこと、驚くべきばかり、振りかかつて飛びつく様は、さながら付き纏ふかと訝る程である。その内に、いつしか、家の階を侵す位にもなり、やがて、屋根棟のたる木を折つて仕舞ふのであらう。門を出でては、雪のひらひらと道路に落ちるのが苦になるし、馬に乗ると、下鞍と平均する程も高く積ることを恐れる。それから、朝の街鼓を聞き、瘦せ我慢をして起きては見たものの、どうも寒くて堪まらぬ處から、小齋の内で、酒に酔つて睡るより外、手段はない。しかし、自分は役所務めがあるから、勝手に休むことも出来ず、君は乃ち雪の妍なる様を賦詠されたのは、餘程のん氣である。その氷玉の詠を見ては、清顔遠く相隔れるを嘆じ、波濤の吟を誦しては、名句の世に傳はるを羨ましく思ふ。出来得べくんば、平時ともに起臥し、朝夕膳に向ふ時は、飯を共にし、寝ぬる時は、氈を同じうしたいと思ふ。ここに目を擧ぐれば、乾坤白からざる處なく、ひとり、われのみは、古しへの揚雄と同じく、太玄の名にしおふ通り玄く、即ち世俗と趨合を異にして居る。

【餘論】五言排律として、對仗には多少の心を用ひたものと見えるが、刻劃洗練、未だ足らず、本集中、同題の諸作に數語を輸することを免れない。蔣注に「正集七卷、すでに雪後寄崔二十六丞公あり、然れども、この作淺鄙、殊に其言に類せず、一結に至つては、又大に稱氣に近し」と云つて居るが、いかにも尤も千萬である。

潭州泊船呈諸公

潭州にて船に泊し、諸公に呈す

夜寒眠半覺、鼓笛鬧嘈嘈、夜、寒くして、眠、半ば覺む、鼓笛鬧しくして嘈嘈。

聞浪春樓堞、驚風破竹篙、聞浪、樓堞に春き、驚風、竹篙を破る。

主人看使範、客子讀離騷、主人、使範を看、客子、離騷を讀む。

聞道松醪賤、何須恡錯刀、聞くならく、松醪賤しと、何ぞ錯刀を恡むを須む。

【字解】【一】嘈嘈、騒がしき貌。【二】樓堞、城樓の牆、即ち女牆。【三】竹篙、つき立てて舟を繋いである棒。【四】主人、來訪者の中の重なる人を指す、大方その地の刺史であらう。【五】使範、蔣注に「未だ詳かならず、或は云ふ、羅ふらくは亦た書名、聘遊記、遣使録の類の如くならむ。然らずんば、主人、客の模範を仰ぐを謂ふならむ」とある。これを書名としたのは、下の離騷に對して云つたのであらうが、何等の據り處もない。そこで、しばらく、後段に從ひ、師表となすに足るべき風範といふことにし、且つ之を主人に屬せしめやうと思ふ。つまり、主人に對して敬意を表したものである。【六】離騷、言ふまでもなく、屈原の作。潭州は即ち湘州で、屈原が水に投じて死んだ處であるから、特に之を擧ぎ出したので、決して、唐突ではない。【七】松醪、松の花を和へて醸造した酒、杜甫の詩に「松醪酒熟勞君醉」とある。【八】錯刀、金錯刀の略。古しへの貨幣、仍つて錢の體に用ふ。韻會に「玉葉、契刀を造る。その形、大錢の如く、身形、刀の如し。文に曰く、契刀五百と。錯刀は黄金を以て錯す、その文に曰く、一刀直五千」とある。



【題義】唐書地理志に「潭州長沙郡、江南西道に屬す」とあり、元和郡國志に「隋、陳を平らげ、湘州を改めて潭州といひ、昭潭を取つて名と爲す」とある。すると、この詩は、永貞元年の春、陽山を離れて郴州に遷る時の旅中の作であらう。

【詩意】春なほ淺く、殊に水邊は夜寒くして、折角眠つたが、やがて半ば覺めかかつた。すると、岸上には鼓笛の響嘈嘈として聞がしく、まさしく大官の御來駕と察せられる。時しも、暗き浪は、城樓の女牆に春き、けたたましき風は、舟を繋いである竹杵を折りさうである。やがて、諸公が御出でになつたが、主人たる刺史は、流石に師表とすべき風範を備へて、打ち見るからに、慕はしき人物である。われは、從來放逐の客子である處から、離騷を誦して、感慨に堪へられない。聞けば、この地では、松花で釀した酒が名物で、價も廉いさうだから、錢を吝まず、しこたま買ひ入れて、諸公と今夕痛飲をしやうではないか。

【餘論】この詩も五律の定格を備へて居る。第一句より前聯を、第二句より後聯を各引き出し、そして、七八兩句は、更に一步を拓開して居る。前に掲げた本文は、官版の韓文に據つたのであるが、蔣注本では、前聯が閑浪春樓堞、驚風破竹篙となつて居る。春と春とは、字形が背て居る處から、いづつか、かくの如く誤つたのに相違なく、春の字、破の字、ともに謂はゆる字眼である處が面白いので、もし春樓の堞、破竹の篙とすると、殆んど無意味の者に成るやうに思はれる。

飲城南道邊古墓上逢中丞過贈禮部衛員外少室張道士

城南道邊の古墓上に飲し、中丞が贈禮部衛員外少室の張道士を過ぐるに逢ふ

偶上城南土骨堆、偶ま上る城南土骨の堆、

共傾春酒三五杯、共に春酒を傾く三五杯。

爲逢桃樹相料理、桃樹に逢ふが爲に相料理す、

不覺中丞喝道來、覺えず中丞喝道の來るを。

【字解】(一) 土骨堆 黄土と白骨とが纏つて堆つて居る處。

(二) 料理 晉書王徽之傳に「粗冲厨つて曰く、卿、府に在るもの日久し、此る當に相料理すべし」とあり、杜甫の詩に「未須料理白頭人」とある。

すると周旋といふ様な意味である。【二】喝道 下に居る、下に居よ、といつて、先拂ひをして大官の過ること。

【題義】自注に「中丞は裴度を謂ふなり」とある。裴度が御史中丞となつたのは元和九年頃で、その時、韓愈は考功郎中知制誥であつた。少室は嵩山の一峰。張道士は其處に住んで居たのであるが、生きて居る人に贈禮部衛員外といふのも變てこで、これは、韓愈が後年補書したか、或は編輯者が付け加へたのであらう。裴度は、何の爲に態態張道士を尋ねたか、もしかすると、度は元と河東の人であるから、所用の爲に歸省でもして、その序に、張道士を尋ねたのであらうか。いづれにしても、詩意には關係がない。この張道士は、後に送張道士の詩の序に「嵩高の隱者」とあるから、大方その人であらうと思はれるが、なほ其詩の條に於て述べることにする。この詩は、韓愈が例の城南に遊び、處

處游覽の末、道の邊なる古墓の上で、瓢酒を開いて飲んで居ると、偶ま斐度が少室の張道士に逢つて來た歸りだといつて、そこを通りかかつたから、即坐に賦して示したのである。

【詩意】偶ま城南に行くと、黄土と白骨とまざつて堆くなつて居る處があつて、休息するに善いから、そこに坐を占め、瓢酒を取り出し、同行の者と一緒に四五杯を傾けて居た。そは桃の花が咲き出でて、あたりの景色面白く、仍つて相周旋して時を移したからであつて、中丞が威儀堂、喝道の聲いかめしく、ここを通過されることも、つい知らずに居た。

【餘論】この詩は、平淺にして他の奇なく、取り出でて彼此云ふ程の者でもない。又たとひ桃樹に逢うて相周旋した爲めとはいへ、墓地に坐わり込んで酒を飲むといふのも、聊か奇怪である。

池上絮

池上の絮

池上無風有落暉。池上風なくして落暉あり、

楊花暗後自飛飛。楊花は暗くして後自ら飛飛たり。

爲將纖質凌清鏡。纖質を將て清鏡を凌ぐが爲に、

濕却無窮不得歸。濕却窮まりなくして歸るを得ず。

【字解】(一)落暉。落日と同じ、夕日、入日。(二)暗後。天が暗くなつてから。(三)纖質。楊花の質の軟弱なるをいふ。(四)清鏡。池面の澄んで鏡の如きをいふ。

【題義】絮は河柳の花で、支那では、春の末、亂れ飛ぶこと雪の如く、外では決して見られない。この詩は、池邊の柳絮を詠じたのである。

【詩意】池の邊に、折しも風なくして、夕日が落ちかかり、やがて空が暗くなると、柳の花が、自然に、ひらひら飛び出した。但し、もとより軟弱の質でありながら、鏡とまがふ水面を凌いで飛ぶのであるから、見る間に水に落ちて溼ひ、その儘、飛べなくなつて仕舞つた。

【餘論】不得歸の歸は、軽く見て、矢張飛ぶといふことにせねば、意味が透徹しない。つまり、漢の武帝の秋風辭に草木黃落兮雁南歸とある、その歸と同じ様である。大體の旨意は、楊花が水に落ちて飛べなくなつたといふに過ぎぬが、その曲折餘韻の間に多少の趣があるのである。

聯句

ここに聯句が三首があるが、方崧卿の説に據ると、孟東野の集から抜いて附載したといふことで、斷じて偽作ではない。

有所思聯句

思ふ所あり、聯句

相思繞我心。日夕千萬重。

相思、我が心を繞り、日夕千萬重。

池上絮 有所思聯句

年光坐婉晚。春淚銷顏容。郊年光、婉晚に坐し、春淚、顏容を銷す。

臺鏡晦舊暉。庭草滋新茸。臺鏡、舊暉暗く、庭草、新茸滋し。

望天山。上石別劍水中龍。愈天山の上の石を望み、劍水中の龍に別る。

【字解】【一】千萬重、千重萬重に重なる。【二】年光、過ぎ行く歲月。【三】婉晚、盛りを過ぐること。【四】銷、銷滅する。【五】銷顏容、銷滅する。【六】臺鏡、即ち鏡臺。【七】舊暉、もとの光輝。【八】新茸、新らしき茂み。【九】天山、後漢書班超傳の注に「西域に天山あり、冬夏雪あり、旬故、これを天山といひ、これを過ぐれば曾馬を下つて拜す」とある。【一〇】劍水中龍、卷二、利劍の條にも見えて居たが、晉書班超傳に雷煥、鄯城の雙劍を得、一を以て鞘に與へ、一を以て自ら佩ぶ。雖跌せられ、劍の在るところを失ふ。煥卒す、その子、持して延年津を過ぐ、忽ち崖間に於て墮り出でて、水に墮つ、兩龍の靈變するを見る、ここに於て、劍を失ふ」とある。

【題義】有所思といふ題は、主として美人を思ふ情を敘したのであるが、謂はゆる美人は、詩經や楚辭に見ゆると同じく、その君、もしくは友を指すことが普通で、ここは後者である。

【詩意】相思の一念、わが心を繞り、日夕愈々増して、千重萬重に及び、到底、これを消遣することが出来ない。今しも、一年中の最も好い時節たる春も暮れかかり、そして、絶えず泣いてばかり居る爲に、顔色が衰へて來た。鏡臺に向つて妝を理むことも稀であるから、もとは明皎皎として居たのが、今はほの暗くなり、庭の草は、夏に入つて、新に茂つて來た。ここに至りて、悵、悵自ら勝へず、たとへば天山の上の石を望むが如く、劍が化したといふ水中の龍に別るが如く、再び逢ふ由なきを嘆き詫ぶるばかりである。

【餘論】起首二句の外は、一寸對偶の形式を爲して居るが、平仄に關せず、例の半律半古の一體である。蔣之翘は「末二句、自らは是れ退之本色の句法」と云つて居る。

遺興聯句

遺興聯句

我心隨月光。寫君庭中央。郊我が心、月光に隨ひ、君が庭の中央に寫す。

月光有時晦。我心安所忘。愈月光、時ありて晦く、我が心、安んぞ忘るるところ。

常恐金石契。斷爲相思腸。郊常に恐る、金石の契、斷えて相思の腸とならむことを。

平生無百歲。歧路有四方。愈平生、百歳なく、歧路、四方あり。

四方各異俗。適異非所將。郊四方、各、俗を異にす、適に異なるは將にする所に非ず。

驚蹄顧挫秣。逸翮遺稻粱。愈驚蹄は挫秣を顧み、逸翮は稻粱を遺る。

時危抱獨沈。道泰懷同翔。郊時危うして獨沈を抱き、道泰にして同翔を憶ふ。

獨居久寂默、相顧聊慨慷。愈獨居久しく寂默、相顧みて聊か慨慷。

慨慷丈夫志、可以耀鋒鏑。郊慨慷、丈夫の志、以て鋒鏑を耀かすべし。

遺寧知卷舒、孔顔識行藏。愈遺寧は卷舒を知り、孔顔は行藏を識る。

朗鑒諒不遠、佩蘭永芬芳。郊朗鑒、諒に遠からず、佩蘭、永く芬芳。

苟無夫子聽、誰使知音揚。愈苟くも、夫子の聴くなくんば、誰か知音をして揚がら

【字解】【一】寫君庭中央。君の庭の中央に我が心の影を寫すといふので、心が君の庭に馳せ行くといふ意味を一層現實的に詩化して云つたのである。【二】金石契。交情の堅きをいふ。【三】平生。生涯に同じ。【四】歧路。わかれ路。【五】遺興。まさに異なる、明かに違つて居る。【六】非所將。將は共にといふ意。【七】驚睡。即ち驚馬、やくざ馬。【八】控秣。踏まれたりして汚れた秣。【九】遺糧。羣を抜いた糧食。【一〇】遺稻粟。穀物は決して食はぬ、即ち塵は飢点でも糠を啄ばますといふ謙の意。【一一】獨沈。ひとり河に投じて死ぬといふ節義。申徒狄といふ人が世亂を厭ひ、やがて水に投じて死せしこと、劉向新序に見ゆ。【一二】遺葬。蓬伯玉と韓武子。論語に「君子なるかな蓬伯玉、邦に道あれば仕へ、邦に道なければ卷いて之を懷にすべし」とあり、又「韓武子、邦に道あれば知、邦に道なければ愚、その知は及ぶべきなり、その愚は及ぶべからざるなり」とある。【一三】卷舒。その才を卷いて藏し、又之を舒べひろげる。【一四】孔顔。孔子と顔回。【一五】行藏。論語に「子、顔回に問つて曰く、これを用ふれば行ひ、これを舍げば藏す、惟だ我と爾と是あるかな」とある。【一六】朗鑒。明かに観る。【一七】佩蘭。楚辭に「朝飲蘭以爲佩」とある。【一八】知音。前に見ゆ。

【題義】遺興は、興を遺る、興に乗ずるといふことで、格別の意味もない。

【詩意】わが心は、月の光に随ひ、はるかに君の庭の中央に馳せて、その影を寫して居る。月光は、時あつて晦きことあるも、わが心は、決して、君を忘れることはない。常に恐るるところは、金石の如く堅いところの交情を抱きながら、千里遠く別れて、相思の餘、斷腸の想に堪へぬやうになるといふ其事のみである。この生涯は、到底百歳を保ち難く、この世は、歧路が四方に派出して、まことに迷ひ易い。されば、四方各々その習俗を異にして居て、全く相異なるものは、決して共にすることが出来ない。やくざ馬は、汗れた秣をさへ欲しがつて居るが、その羣を逸出した猛禽は、決して、穂を啄まない。人にしても、矢張、その通りで、全く其操守を異にしたものがある。又時危ければ、獨り水に沈んで死ぬといふ奇節を抱き、道泰ければ、人と一緒に翔翔することも出来るので、時勢の如何に因つて、この身の振り方も違つて来る。今しも、われは獨居して、久しく寂黙に居り、世上の有様を顧みて、聊か慷慨して居る。かくの如く、丈夫の志を負うて、毎に慷慨して居る位だから、一朝機會たにあらば、鋒鏑を耀かすことも出来る。蓬伯玉・韓武子は、邦の道あり道なきにつけて、その才を舒べもするし卷きもするし、孔子・顔回の如きは、その用舍如何に因つて行藏をなし、つまるところは、禍に罹らずして、功を成すことを理想として居る。幸にして、君の鑒裁、まことに遠からず、われとても、祿祿として生死するものではなく、秋闈を佩として、永く芬芳を留めたいと思つて居る。ここに於て、歌を作つて自ら朗唱したのであるが、苟くも、夫子にして之を聴かなければ、外に何人が

知音となつて稱揚して呉れやうぞ、是非とも、この歌は、君に聞いて戴きたいと思つて居る。  
【餘論】 蔣之翘は「全篇古致あり、起處の若き、更に能く變化し、益す以て莊雅、便ち晋宋の間に駁駁たり」と云つて居る。通首、知己を思ふの情の極めて殷なるを寫し、左搖右曳、しかも、その根本の趣旨を失はず、結構緊密なるは、まさしく聯句の妙を推すべく、その小じんまりして整つた處は、他に多く其類を見ざるものである。

贈劍客李園聯句

劍客李園に贈る、聯句

天地有靈術得之者唯君 郊 天地、靈術あり、これを得たるものは唯だ君のみ。  
築爐地區外積火燒氣氤 愈 爐を築く地區の外、積火燒いて氣氤たり。  
照海鏤幽怪滿空敵異氛 郊 海を照らして幽怪を鏤し、空に滿ちて異氛敵し。  
山磨電奕奕水淬龍蠅蠅 愈 山に磨いて電奕奕、水に淬して龍蠅蠅。「ならむや」  
太一裝以寶列仙篆其文 郊 太一、裝ふに寶を以てし、列仙、その文を篆にす。  
可用懾百神豈惟壯三軍 愈 用て百神を懾れしむべく、豈に惟だ三軍に壯たるのみ。  
有時幽匣吟忽似深潭聞 郊 時あつて幽匣に吟す、忽ち深潭に聞くに似たり。

風胡久已死此劍將誰分 愈 風胡、久しく已に死し、この劍、將た誰にか分たむ。  
行當獻天子然後致殊勳 郊 行いて當に天子に獻すべく、然る後に殊勳を致さむ。  
豈如豐城下空有斗間雲 愈 豈に豐城の下、空しく斗間の雲あるが如くならむ。

【字解】 一、靈術、不思議の術、即ち擊劍の技。二、地區外、普通の宅地の外。三、積火燒氣氤、劍を鍛へる爲に盛に火を起し、そこから立ち騰る氣が陽炎の如くちらちらする。郭元振の古劍歌に君不見昆吾鐵冶煎炎煙紅光紫氣俱赫赫とある。四、鏤、鏤削す。幽怪の怪物を燒きとるかして仕舞ふ。五、敵異氛、一種特異の氣が蒸しあつく上る。六、山磨、雷煥別傳に「煥、豐城の合たりしとき、賦地を掘つて石函を得たり、中に雙劍あり、文采未だ甚だ明かならず、南昌西山の黃白土を取つて、これを磨けば、光焰照輝す」とある。七、水淬、漢書の注に「風泉宮西平の界、その水、用つて劍を淬くべく、特に堅利」とある。八、龍蠅蠅、さういふ様にして磨いた劍は、龍の鱗まる様に見える。九、太一、吳越春秋に「秦客薛燭、善く劍を相す、曰く、眞の山破れて劍を出し、若邪の窟割れて劍を出し、蛟龍鱗を捧げ、天帝炭を裝ひ、太一降り觀る、ここに於て、區治子、この劍を流爲す」とある。太一は神の名。一〇、篆其文、西京雜記に「昭帝の時、茂陵の人、寶劍を獻す、上に銘して曰く、直千金、壽萬歲」とある。一一、儀百神、多くの神神を畏れしめる。一二、壯三軍、列子に「儒の孔周、その祖殷帝の寶劍を得たり、童子、これを服して、三軍の衆を却く」とある。一三、風胡、越絶書に「風胡子、吳に之いて干將を見、越にして區治子を見、劍三枝を作る。一に曰く龍淵、一に曰く太阿、一に曰く工市。楚王、これを問ふ。風胡子、對へて曰く、龍淵を知らむと欲すれば、狀、高山に登り、深淵に臨むが如し。太阿を知らむと欲すれば、その劍を觀よ、嶺巖巖として、流水の波の如し。工市を知らむと欲すれば、劍文同より起り、晋に至つて止まり、珠の如くして枉ぐべからず、文流るるが若くして絶えず」とある。一四、豐城下、雷煥の事、山磨の注に見ゆ。なほ前にも數ば見えて、晉書の張華傳をも引いて置いた。一五、斗間雲、北斗の間に立ち升る氣、自然に雲の如きいふ。

【題義】劍客は、即ち劍侠の類であらう。劍侠といふは、劍を以て人を刺す術を善くし、且つ隱形の法に通じ、百發百中、過たず人を殺すものである。當時、藩鎮互に權を恣にし、暗殺などが盛に行はれたから、劍侠は、多くの場合に役に立つた。しかし、劍侠は元と俠を重んじ、決して非義の事を爲さないものとして知られ、その後、支那に於ては、その餘風を傳へるものが絶えず、又往往にして女流の劍侠さへあつた。この劍客の李園といふのは、如何なる人か分からぬが、いづれ、劍侠であつて、かなり其術に秀でて居たものであらう。

【詩意】天地の間には、靈妙の術があるもので、劍客として知らるる君は、これを體得して居られるし、君の持つて居る劍は、まことに、大したものである。はじめ、大きな爐を宅地の外に造り、そこで熾に火を起すと、もたらちらとして陽炎の如きものが燃え上り、その光焰が海を照らせば、幽怪をも鏗かし去るべく、空に滿つれば、一種怪異の氣を蒸し出す様である。この爐中に於て劍を打ち出し、それを名だたる山の土で磨くと、電光奕奕として輝きわたり、又特殊の水に涵すと、龍が媼媼として蟠まつて居る様である。それで、やつと磨き畢ると、太一の神が態態天より下つて、その裝飾の世話を爲し、仙人どもが相談して、篆字で銘を刻みつけて呉れた。そこで、意よ佩用することが出来ると、これを用ひて百神を畏れ服せしむべく、三軍の氣を壯にする位の事は、言はずもがな。それから、佩用せぬ時など、これを匣の中に入れて置くと、自然と聲を出し、忽ちにして、深潭の底に於て龍の長

吟するを聞く様である。むかしは、鍛刀の名人で鑒定にも長じた風胡子といふ人があつたが、その人、死して、すでに久しく、折角の此劍をも、分別して、その價値を認めて呉れる人もない。そこで行く行くは、天子に獻するが善いので、さうすれば、天晴の功勳を立つべく、かの豊城の獄底に名劍が埋もれて、北斗の間に雲の如き氣が棚引いて居たといふ様な事もなくなり、逸早く世に知られる方が善いと思はれる。

【餘論】李園は劍客だといふのに、ここでは、その技術の事は一切言はず、唯だその持つて居る劍だけを褒めて居るのは、大に嫌らぬ様であるが、つまり、劍に託して、李園、その人が聖主の知を得て殊勳を致さむことを囑望したので、劍は即ち人、人は即ち劍、その構想も決して偶然ではない。

新添詩七首

顧注の昌黎詩集注には、この項を設けて、文集に其文と共に載せた詩を拾ひ集めて、ここに五首附載した。しかし、送陸欽州、送李愿歸盤谷の如き、その性質上、ここに擧ぐべきものと考へられる處から、同じく掲出し、仍つて七首となつた。その他、平淮西碑の末に付けた韻語の如き、柳宗元の平淮西雅と比較されるものであるが、もと銘であつて、普通に詩の中に入れぬから、ここには一切載せない。上記の七章、詩だけでは、意味も十分に分ならず、必ず其序と相待つべきものであるから、こ

ここでは、卷首に見えた元和聖德詩と同じく、その序をも併せて載録し、唯だ主眼とするところでないから、その解釋は、あつさりと遺ることにした。

鄆州谿堂詩 并序

鄆州谿堂の詩 并に序

憲宗之十四年始定東平三分其地以華州刺史禮部尚書兼御史大夫扶風馬公爲鄆曹濮節度觀察等使鎮其地既一年褒其軍號曰天平軍上卽位之二年召公入且將用之以其人之安公也復歸之鎮上之三年公爲政於鄆曹濮也適四年矣治成制定衆志大固惡絕於心仁形於色溥心一力以供國家之職于時沂密始分而殘其帥其後幽鎮魏不悅於政相扇繼變復歸於舊徐亦乘勢逐帥自置同於三方惟鄆也截然中居四鄰望之若防之制水恃以無恐然而皆曰鄆爲虜巢且六十年將彊卒武曹濮於鄆州大而近軍所根柢皆驕以易怨而公承死亡之後撥拾之餘剝膚椎髓公私掃地赤立新舊不相保持萬目

睽睽公於此時能安以治之其功爲大若幽鎮魏徐之亂不扇而變此功反小何也公之始至衆未熟化以武則忿以憾以恩則橫而肆一以爲赤子一以爲龍蛇憊心罷精磨以歲月然後致之難也及教之行衆皆戴公爲親父母夫叛父母從仇讐非入之情故曰易於是天子以公爲尙書右僕射封扶風縣開國伯以褒嘉之公亦樂衆之和知人之悅而侈上之賜也於是爲堂於其居之西北隅號曰谿堂以饗士大夫通上下之志既饗其從事陳曾謂其衆言公之畜此邦其勤不亦至乎此邦之人曩公之化惟所令之不亦順乎上勤下順遂濟登茲不亦休乎昔者人謂斯何今者人謂斯何雖然斯堂之作意其有謂而暗無詩歌是不考引公德而接邦人於道也乃使來請其詩曰

【訓讀】憲宗の十四年、はじめて東平を定めてその地を三分し、華州刺史禮部尙書兼御史大夫扶風馬公を以て、鄆曹濮節度觀察等の使となし、その地を鎮せしむ。すでに一年、その軍を褒し、號して天平軍といふ。上、卽位の二年、公を召して入らしめ、且つ將に之を用ひむとす。その人の公に安んずるを以

てや、復た之を鎮に歸す。上の三年、公、政を鄆曹濮に爲すや、適に四年、治成り、制定まり、衆志大に固く、惡、心に絶え、仁、色に形はれ、心を導にし、力を一にし、以て國家の職に供ふ。時に沂密はじめて分れて、その帥を殘ふ。その後、幽鎮魏、政を悦ばず、相扇つて、繼いで變じて奮に復歸し、徐も亦た勢に乗じ、帥を透うて自ら置くこと、三方に同じ。惟だ鄆のみは、毅然として中に居り、四鄰、これを望むこと、防の水を制する若く、恃んで以て恐るるなし。然り而して、皆曰く、鄆、虜巢たること、且に六十年ならむとし、將、強く卒武、曹濮の鄆に於ける、州大にして近く、軍の根柢とするところ、皆驕つて以て怨み易し。しかも、公、死亡の後、振拾の餘を承け、膚を剝ぎ、髓を推ち、公私地を掃うて赤立し、新舊相保持せず、萬目睽睽たり。公、この時に於て、能く安んじて以て之を治む、その功大なりと爲す。若し幽鎮魏徐の亂、扇いで變せずむば、この功、反つて小ならむ。何となれば、公の始めて至るとき、衆未だ化に熟せず、武を以てすれば、忿つて以て憾み、思を以てすれば、横にして肆、一は以て赤子となし、一は以て龍蛇となし、心を慮らし、精を罷らし、磨するに歲月を以てす、然る後に之を致すこと難きなり。救の行はるるに及び、衆皆公を戴いて親父母と爲す、夫れ父母に叛いて仇讐に従ふは、人の情に非ず、故に易しといふ。ここに於て、天子、公を以て尙書右僕射となし、扶風縣開國伯に封じ、以て之を褒嘉す。公も亦た衆の和を樂み、人の悦を知つて、上の期を修なりとするなり。ここに於て、堂を其居の西北隅に爲り、號して樂堂といひ、以

て士大夫を饗し、上下の志を通す、すでに饗し、その從事陳曾、その衆に謂うて言ふ、公の此邦を奮ふ、その勤、亦た至らずや。此邦の人、公の化に榮りて、惟だ之を令するところ、亦た順ならずや。上勤め、下順に、遂に茲に登ることを濟す、亦た休からずや。昔者、人、斯を何とか謂ふ、今者、人、斯を何とか謂ふ。然りと雖も、斯堂の作る、意ふに其れ謂あらむ、しかも、暗して詩歌なくむば、これ公の徳を考引して、邦人を道に接せざるなり、乃ち來り請はしむ。その詩に曰く、

帝奠九壤。有葉有年。

帝九壤を奠め、葉あり、年あり。

有荒不條。河岱之間。

荒あり、條めず、河岱の間。

及我憲考。一收正之。

我が憲考に及び、一たび之を收正す。

視邦選侯。以公來尸。

邦を視、侯を選び、公を以て來り尸らしむ。

公來尸之。人始未信。

公來つて之を尸る、人、はじめは未だ信せず。

公不飲食。以訓以徇。

公飲食せず、以て訓へ、以て徇ふ。

孰饑無食。孰呻孰歎。

孰れか饑えて食なき、孰れか呻き、孰れか歎する。





説は負柔の覺めて頤くが如し」とある。なほ押韻に就いて、蔣注に「この詩十一章、令を以て強に叶へ、駭を以て水に叶ふ、皆古音なり。令に平聲の讀あり、公の韻孤及嘉志、亦た准南子に見ゆ。勿謂勿駭、萬物皆自理、勿捨勿獲、萬物皆自濟、駭は古音自ら理と叶ふなり、吳才老の補音、補韻の二書、その説甚だ詳かなり」とある。【一】實校 實客と辭校。【二】考考 詩經に子有維鼓、弗鼓弗考とあつて、その注に「考は擊なり」とある。【三】實實 實客として參贊する人人。【四】實律 駭は訪ふ。【五】不差 差はす。【六】實風 實は平、風は巖胡、即ち東の一種、周禮に「風は風に宜し」とある。【七】歌遺 駭ひ棄てる。【八】麻 覆ふ。

【題義】蔣注に「鄆州は、秦に薛郡たり、漢に東平國たり。春秋、齊人來つて鄆を歸すとは、即ち此、今鄆城縣となつて、山東兗州府に屬す」とある。次に韓集箋正に據ると、この詩は、長慶二年、即ち韓愈の死に先つこと二年の作で、「この年、夏秋の間に作る、淺有蒲蓮、深有兼葦」等の語を以て之を見るに、十月に至つて乃ち石に勸す」とある。もと其地の鎮將たる鄆曹漢節度使馬總の爲に作つたので、その由來等は、序文中に詳しく記してあるから、今ざつと下之を解釋する——憲宗皇帝の元和十四年、東平、即ち平廬の地を平定し、これを分つて道となし、鄆曹漢を一道となし、淄青齊登萊を一道となし、兗海沂密を一道となし、そして、華州刺史禮部尚書兼御史大夫扶風の馬總といふ人を以て鄆曹漢節度使となし、その中の一道を管轄して其地に駐在せしめた。その翌年、その軍を褒賞して、天平軍といふ號を賜はつた。今上（即ち穆宗）即位の二年に、馬總を中央政府に召し返して、これを任用しやうとされたが、その地方の人が馬總に安んじて深く信頼して居るとのことであつたから、都

に留めずして、再び鎮に歸らしめた。今上の三年、即ち長慶二年には、馬總が鄆曹漢を支配すること丁度四年になり、治法成り、制度定まり、衆志大に固く、そして、心に惡を懷くものなく、仁は色に顯はれ、心を專にし、力を一にして、國家の職に供し、上下一同、王事に盡瘁しやうと決心して居た。これより先、沂密地方では王弁といふものが觀察使王遂を殺し、自立して留後と稱し、その後、幽州なる盧龍軍都知兵馬朱克融、鎮州なる成德軍の王廷湊、魏州の魏博、兵馬使史憲誠といふものは、現在の政治を悦ばず、互に煽動して、亂を爲し、各々の節度使を殺して、又ぞろ昔の狀態に逆戻りをなし、徐州の武寧節度副使王智興も亦た勢に乗じ、節度使を遂うて自ら留後と稱すること、前三處に同じく、この地方一帯は、大分騒がしく成つて來た。しかし、鄆州のみは、截然として、その中央に居りながら、至つて平穩無事で、四鄰これを望むこと、恰も隄防が洪水を制するが如く、これを恃みとして恐れることはなかつた。しかし、一般に言ふところに據れば、鄆州も、もと賊の巢窟たりしこと六十年、將は強く、士卒は武勇である。加之、曹漢二州は、鄆州に比して、面積も廣く且つ接近して居て、その藩鎮の根據地である處から、將士どもは皆心驕つて、つまらぬことでも怨を生じ易い。それなのに、馬公は、前節度使死亡の後を受け、一旦崩れたのを僅に拾ひ集めて再興したのを引き繼いだので、その時は、膚を剥ぎ骨の髓を打ち、公私ともに地を掃うて、全然無一物、新舊の將吏は、互に保全することも出來ず、萬目睽睽として睨み合つて居るといふ状態であつた。馬公は、この難局

を慮し、能く安んじて之を治めたから、その功績は、洪大なものである。もし幽鏡魏徐の諸鎮が互に煽動して、變を爲すことが無かつたならば、この功績は、却つて、目に立たぬ様な小さなものに成つたであらう。何となれば、馬公の始めて就任した時、一般の民衆は、未だ治化に慣れず、武を以て之を御すれば忿つて憾み、思を以て之に臨めば、横暴にして且つ專肆であつた。そこで、一たびは無知の赤子と看做し、一たびは兎角變化し易い龍蛇と看做し、心を徳らし、精を盡くし、長い年月の間に、これを磨き上げ、やつと此の如きを致したので、随分困難なことであつたが、教化一たび行はるれば、衆皆馬公を奉戴して、親身の父母と思つて居る位。元來父母に叛いて仇讐に従ふは、人情でないから、すでに馬公の治に服したものは、もとより叛くことは無いので、かうなれば、容易であるといつても宜しい。馬公の功績、かくの如く、ここに於て、天子は、馬公を以て尙書右僕射となし、扶風縣開國伯に封じ、これを褒賞して嘉せられた。馬公も亦た民衆の平和を樂み、人の悦んで居ることを知り、そして、天子の賜を大なりとして感謝し、その記念として、一堂を其住宅の西北隅に造つて、鑑堂と號し、其處で士大夫を響應して、上下の意志を疏通された。その響宴が畢ると、従事の陳會といふものが、來會者に向つて云ふには、馬公が此邦の人民を撫育された、その御骨折は大したものではないか、この鄂州の人民が馬公の治化に繫りて、惟だ令せられる通りにするは、亦た從順ではないか。上は勤め、下に順に、遂に此の如き治績を爲したのは、まことに、結構な事ではないか。むかしの人は之を如何思ふか、今の人は之を如何思ふか。しかし、この鑑堂を造られたのは、キツと趣意の有ることであらう。それなのに、黙つて居て、詩歌さへ無くむば、これ即ち馬公の徳を宣傳して邦人を道に迎へる所以では無いといふので、そこで、使を韓愈の處に寄越して、何か作つて呉れろといつたら、韓愈は、これを諾して次の一章を作つた——といふので、次に其詩が載せてある。

【詩意】天子が九州の土を治められしより、ここに何代を經、何年を過ぎたか。然るに、黃河泰山の間、荒蕩の地があつて、兎角治まらぬ。先帝憲宗の御宇に、一たび之を收めて始末をつけ、邦土を區劃し、節度たるべき人を選び、遂に馬公を任命されたから、馬公は、救命を畏み、やがて來つて、その地を治められた處が、その地の人民は、はじめ馬公を信頼しなかつた。そこで、馬公は、飲食する暇もなく、これを教へ、これを徇へ、力を盡して世話をされた。誰が飢えて食なきか、誰が呻つてうめいて居るか、誰が嘆息して居るか、誰が冤罪あるも問はれず、又分願を得ずして苦んで居るか、誰が邦の害蟲となること、稻の節や根に食ひ入る蟲の如きか、或は又羊の如く意地わるく、狼の如く貪り、そして、穢な事を喋舌らず、城を覆す様なことをするか。かくの如きものに對しては、一一之を始末し、これを吹いてやり、これを暖めてやり、手を摩して撫でてやり、これに針を打つてやり、之に藥を飲ませてやり、ひどい奴は仕方が無いから、驅らし者にした上に磔にする。かくて、馬公の境内は、すでに富み、すでに強く、馬公を尊崇して、吾が父となし、これに懐いて、その命に違ふものな

いやうに成つた。かうなれば軍隊を繰り出して、各地の叛將を征伐することさへ出来るので、ひとり自分の邦土を守るのみではない。かくの如く、境内がすつかり治まつたから、その記念として、谿堂を其住宅の隅に造られたが、その名の如く、流水播播として平かに鋪いて居る。そして、水の浅い處には蒲や蓮が生えて居るし、深い處には蘘葦の類が抽き出て居る。馬公が賓客を會して、宴を催されるときは、鼓聲駭駭として鳴り響くのが常であるが、就中、この新築の谿堂に於て宴を開かれるときは、賓客たる將校の面々は、酒に酔ひ、肴に飽き、そして眺めやれば、流には魚の跳るがあり、岸には鳥の集まれるがあり、急よ興を助けるから、歌ひつ、舞ひつ、鼓聲は考考として、更に賑やかに響く。しかし、ここは宴會に使用するばかりでなく、馬公は谿堂に居て、琴瑟を御し、そして、幕僚どもを此に會して、經を稽へ、律を訪ひ、治國濟民の事に就いても、色色研究せられ、これを實際に施して違はず、人が之を用ひても屈挫することがない。堂の名にしおふ溪の中には、浮草もあり、菰もあり、龜も居れば、魚も居る。そして、閒暇の折折は、馬公自ら中流に居り、左右に詩書を置いて、時たま之を稽かれる。願はくは、人民どもを厭ひ棄つることなく、そして、その治下を克く覆育して愈よ功績を擧げられる様にありたい。

【餘論】蔣注に「相傳ふ、皇甫湜の手帖に云ふ、鄂塘は特に高古の風あり、敢て降旗を樹てむや。而して、作者の下、何人能く及ばむ。崔侍御、前日稱嘆す、終席滿座、燭を繼ぐことを覺えず、我が

唐、國を有してより、退之文宗一人のみ、欽慰の極に任へず。湜の侍郎宗伯に上る、鄂塘は正にこの鄂州の深堂を謂ふなり。公、時に兵部侍郎たり、宗伯といふは、文章の宗伯なり」とある。これは、主として、その文に就いて云つたものであるが、この詩も亦た古意古調、當時に在つて稀に見るところ、流石に學人の作たるに負かぬものである。

送陸欽州詩 并序 陸欽州を送る詩 并に序

貞元十八年二月十八日、祠部員外郎陸君、出刺欽州。朝廷夙夜之賢、都邑游居之良、齋咨涕洟、咸以爲不當去。欽大州也、刺史尊官也。由郎官而往者、前後相望也。當今賦出於天下、江南居十九、宣使之所察、欽爲富州、宰臣之所薦、聞天子之所選用、其不輕而重也、較然矣。如是而齋咨涕洟、以爲不當去者、陸君之道、行乎朝廷、則天下望其賜、刺一州、則專而不能、咸先一州而後天下、豈吾君與吾相之心哉。於是昌黎韓愈、道願留者之心、而泄其思、作詩曰。

【訓讀】貞元十八年二月十八日、祠部員外郎陸君、出でて歙州に刺たり。朝廷夙夜の賢、都邑游居の良、齋香涕淚、威な以爲へらく、當に去るべからず、と。歙は大州なり、刺史は尊官なり、郎官よりして往くもの、前後相望めり。當今、賦の天下に出づる、江南は十の九に居り、宣使の察するところ、歙を富州となす。宰臣の薦聞するところ、天子の選用するところなり。その輕からずして重きや、較然たり。かくの如くして、齋香涕淚、以て當に去るべからずと爲すは、陸君の道、朝廷に行はるときは、天下その賜を望み、一州に刺たるときは、專にして、威きこと能はず、一州を先にして天下を後にす、豈に吾が君と吾が相との心ならむや。ここに於て、昌黎の韓愈、留まらむことを願ふ者の心を道うて、その思を泄らし、詩を作つて曰く、

我衣之華兮。我佩之光。

我が衣の華なる、我が佩の光れる。

陸君之去兮。誰與翱翔。

陸君の去る、誰と與にか翱翔せむ。

歙此大惠兮。施于一州。

この大惠を歙めて、一州に施す、

今其去矣。胡不爲留。

今その去る、胡ぞ爲に留めざる。

我作此詩。歌于遠道。

我、この詩を作つて、遠道に歌ふ。

無疾其驅。天子有詔。

その驅ることを疾にするなかれ、天子詔あらむ。

【字解】(一) 華、華美、立派なること。(二) 佩、佩玉、腰に佩びたる玉の飾、舊注に「一本本校に光翔の下昔令の字あり、去の下に令の字なし。今古詩賦を按ずるに、句句韻及び踏韻を用ふるものあり、廣歌、是れなり。隔句に韻及び令を用ひ、而して、令、上句の末に在り、韻、下句の末に在るものあり、廣歌、是れなり。隔句韻を用ひ、而して、上句韻あらす、令あらす、下句、韻を押し、合あるものあり、權韻の類、是れなり。今、この詩、もし廣歌の例を用ふれば、華光、令あつて韻せず、その去の字の一句、又并せて無きなり。もし權韻の例を用ふれば、光翔、當に韻を用ふべく、而して、當に令あるべからず。華、以て令あるべしと雖も、而して、去復た以て令なかるべからざるなり。もし權韻の例を用ふれば、下三句、令へりと爲す。而して首句、當に令あるべからざるなり。韓公は、嚴に深きものなり、應に此の如くなるべからず。蓋し、校本从ふところ、これを失ふなり。今、定めて諸本に从ひ、嚴經及び買取巾扇の首章を以て例となす。もし權韻を以て例と爲さむと欲すれば、止だ校本首句一の令字を去るのみ、尤も簡便となす。但し、此本なし、敢て意を以て創めざるのみ」といつて居る。(三) 翱翔、鳥の飛び廻はること。ここでは、遊行、又は周旋の義。

【題義】陸は大道。(二) 疾其驅、馬を驅ることを急ぐ。

【題義】陸歙州、名は修。貞元十八年二月、祠部員外郎を以て、出でて、歙州に刺史となつたから、韓愈は詩を以て送り、併せて序を作つたのである。例の如く序の大意を下に述べると——貞元十八年二月十八日、祠部員外郎陸君は、長安を出でて、歙州の刺史となつた。そこで、朝廷に在官し、朝早く出勤し夜遅く退廳するといふ賢良なる吏僚、竝に都鄙に游居する良民どもは、一齊に嘆息流涕し、かういふ人は、いつまでも、中央政府に居るが善いので、決して、長安を去るべき譯のものではないといった。しかし、歙は大州であるし、刺史は、尊貴の官職である。郎官から、かくの如き刺史に

任せられて出かけるものは、前後相望んで、その先例、頗る多く、無論、陸君に取つては榮轉であつて、先づ目出たいと申さねばならぬ。今日、天下の租税は、江南が十分の九を占めて居る。そして、宣慰使などの檢察するところに據ると、歛は富有の州である。その州の刺史として、内閣大臣が推薦して奏聞し、天子が選用されたのであるから、陸君の歛州に刺たるや、もとより、輕からずして、その任務の重いことは、較然として明白である。然るに嘆息流涕して、陸君は都を去つてならぬといふものの考は如何といふと、陸君の道が中央政府の朝廷に行はるれば、天下を擧げて其賜を望み、つまり、御蔭に預ることが出来るが、一州の刺史となるときは、その州だけ其賜を専有し、決して、天下に遍ねく行き渡ることは出来ない。かくて、一州を先にして天下を後にするは、吾が天子と宰相との本心ではあるまい、これは、千慮の一失に相違ないと、かう云ふのである。そこで、昌黎出身の韓愈は、陸君を留めたいと願ふ人人の心中を道うて、その思を泄らさむが爲に、左の如き詩を作つた。

【詩意】わが著て居る衣裳は華美であるし、我が腰に付けた佩玉は燦爛として光つて居る。しかし、陸君にして都を去らば、今後、誰と共に周旋すべきか、陸君の大惠を斂めて、唯だ一つの州に施すことになり、今愈し出立されるといふのに、何故、わが爲に陸君を引き留めないのか。われは、此詩を作つて、都大路を歌つて歩く。陸君よ、その馬を驅ることを急がずに、すこし緩々くりして、ぼつぼつ行くが善からう。もしかすると、天子が詔を下されて、陸君の地方就任は、沙汰止みになるかも知れない。

【餘論】これは、序に於て一般人の志望を述べ、詩に於て自分も亦た同じ様な考を持つて居るといふ様なことを云つたので、序と詩と、兩兩相俟つて、はじめで、その真意を見るべく、どちらか一つでは意義が十分でない、これは、まさしく韓愈の創體であらう。

送李愿歸盤谷并序 并序 李愿の盤谷に歸るを送る 并に序

太行之陽有盤谷。盤谷之間，泉甘而土肥，草木藂茂，居民鮮少。或曰：謂其環兩山之間，故曰盤。或曰：是谷也，宅幽而勢阻，隱者之所盤旋。友人李愿居之，愿之言曰：人之稱大丈夫者，我知之矣。利澤施于人，名聲昭于時，坐于廟朝，進退百官，而佐天子出令，其在外，則樹旗旄，羅弓矢，武夫前呵，從者塞途，供給之人，各執其物，夾道而疾馳，喜有賞，怒有刑，才峻滿前，道古今而譽盛德，入耳而不煩，曲眉豐頰，清聲而便體，秀外而惠中，飄輕裾，翳長袖，粉白黛綠者，列屋而閒居，妬寵而負恃，爭妍而取

憐大丈夫之遇。知於天子用力於當世者之所爲也。吾非惡此而逃之。是有命焉。不可幸而致也。窮居而閒處。升高而望遠。坐茂樹以終日。灌清泉以自潔。採於山。美可茹。釣於水。鮮可食。起居無時。惟適之安。與其有譽於前。孰若無毀於其後。與其有樂於身。孰若無憂於其心。車服不維。刀鋸不加。理亂不知。黜陟不聞。大丈夫不遇於時者之所爲也。我則行之。伺候於公卿之門。奔走於形勢之途。足將進而趨。口將言而囁。處穢汙而不羞。觸刑辟而誅戮。僥倖於萬一。老死而後止者。其於爲人。賢不肖何如也。昌黎韓愈聞其言而壯之。與之酒。而爲之歌曰。

【訓讀】太行の陽に盤谷あり。盤谷の間、泉甘くして土肥え、草木藎茂、居民鮮少。或は曰く、その兩山の間を環るを謂ふ、故に盤といふと。或は曰く、この谷や、宅幽にして勢阻、隱者の盤旋するところと。友人李愿、これに居る。愿の言に曰く、人の大丈夫と稱するもの、我、これを知る、利澤人に施し、名聲時に昭かに、廟朝に坐し、百官を進退し、而して、天子を佐けて令を出す。その外に在つては、旗旄を樹て、弓矢を羅ね、武夫前に呵し、從者途を塞ぎ、供給の人、各、その物を執り、道を來

んで疾く馳す、喜べば賞あり、怒れば刑あり、才峻前に滿ち、古今を道うて盛徳を譽め、耳に入つて煩はしからず、曲眉豐頰、清聲にして便體、外に秀でて中に惠なる、輕裾を飄し、長袖を翳し、粉白黛綠の者、屋を列して閒居し、寵を妬んで恃を負ひ、妍を争うて憐を取る。大丈夫の天子に遇知せられて、力を當世に用ふる者の爲すところなり。吾、これを惡んで之を逃るるに非ず、これ命あり、幸にして致すべからざるなり。窮居して閒處し、高きに升つて遠きを望み、茂樹に坐して以て日を終り、清泉に濯うて以て自ら潔くし、山に採つて、美茹ふべく、水に釣して鮮食ふべし、起居時なく、惟だ適これを安んず。その前に譽あらむよりは、その後に毀なきに孰若ぞ。その身に樂あらむよりは、その心に憂なきに孰若ぞ。車服維がす、刀鋸加へず、理亂知らず、黜陟聞かす。大丈夫の時に遇はざる者の爲すところ、我は之を行はむ。公卿の門に伺候し、形勢の途に奔走し、足將に進まむとして趨進し、口將に言はむとして囁し、穢汙に處つて羞ぢず、刑辟に觸れて誅戮せられ、萬一を僥倖し、老死して後に止むもの、その人たるに於て、賢不肖、何如ぞやと。昌黎韓愈、その言を聞いて之を壯として、これに酒を與へ、これが爲に歌うて曰く。

盤之中、維れ子の宮。  
盤之土、以て稼すべく、

送李愿歸盤谷并序

【字解】(一)盤、盤谷の時。

(二)維、是れに同じ。(三)宮、宮室の宮、家と同義。何も立派な宮

盤之泉可濯可沿。盤の泉、濯ふべく沿ふべし。

盤之阻誰爭子所。盤の阻、誰か子の所を争はむ。

窈而深廓其有容。窈にして深し、廓として其れ容るるあり。

繚而曲如往而復。繚つて曲り、往いて復るが如し。

嗟盤之樂兮。嗟盤の樂。

樂且無央。樂んで且つ央なし。

虎豹遠跡兮。虎豹跡を遠ざかり、

蛟龍遁藏。蛟龍遁藏し。

鬼神守護兮。鬼神守護して、

呵禁不祥。不祥を呵禁す。

飲且食兮壽而康。飲み且つ食ひ、壽にして康、

無不足兮奚所望。足らざるなし、奚ぞ望むところ。

膏吾車兮秣吾馬。吾が車に膏し、吾が馬に秣ひ、

從子于盤兮。

子に盤に従ひ、

終吾生以徜徉。

吾が生を終るまで、以て徜徉せむ。

【題義】ここに在る李愿に就いては、蔣注に「この序、貞元十七年に作る。公、年わづかに三十四のみ。愿は、西平忠武王晟の子」とあつて、魏叔子・杜子皇も同説である。しかし、閻若璩は、證を擧げて之を辨じ、別に同名の隱士李愿といふものがあつたといひ、その言は、茶餘客話にも引いてある。李西平は、徳宗時代の大功臣であつて、その子の李愿は、貞元十七年頃には、宿衛の將となつて、幅を利かし、なかなか山に引ッ込むどころではなく、且つその人物も親に似ずして、案外つまらなく、荒侈を以て敗れ、權近に結納したといふことである。但し、隱士の李愿は、盤谷に居たといふ外、一切分からず、いはば、この序に因つて、幸に其人ありと後世に知られて居るだけのことである。盤谷は、卷五盧郎中雲夫寄示詩の題下に注して置いたが、太行山中の溪谷で、孟州濟源縣に在る。それから、例の如く、下に序の大意を解説すると――太行山の南方に、盤谷といふ處がある。その盤谷の間は、泉が甘くて、土地が肥え、自然に草木が繁茂して居るが、浮世に遠くして、居民は極めて少い。そこを何故盤谷と名づけたか、盤は元とめぐるといふ義、そこで、或人は、その谷が兩山の間にくぐり入つて居るから、盤と名づけたといふし、或人は、この谷には居室を構へられるが、甚だ幽僻であ

殷ばかりを云ふのではなく、禮記に「饋に一飯の宮あり」とまへある。  
【一】 霖。霖霖する、耕作する。  
【二】 可沿。流に従つて上下する。  
【三】 阻。屈折、地勢の隱なるを云ふ。  
【四】 窈而深。窈は幽靜にして奥深き貌。  
【五】 廓。からりとして開いて居ること、空虚の貌。  
【六】 有容。その居を容れることが出来る。  
【七】 繚而曲。盤谷の中に通じて居る路がめぐり廻つて居る。  
【八】 央。牛ばといふのが本義であるが、このは、かぎると訓すべし。  
【九】 壽而康。命が長くして安寧無事であるといふこと。  
【一〇】 膏。即ち油、車に油をさして出かける用意をする。  
【一一】 秣。馬に秣を與へて出かける用意をする。



つて、その地勢も、懸け離れて遠く、謂はゆる酒屋へ三里、豆腐屋へ二里、隠者どもが遊びめぐるから、盤と名づけたのであるといつた。いづれにしても、閒靜な好い處、名が既に其實を示して居るので、ここに、わが友李愿といふ男が住んで居る。李愿の平生の言ひ草は、下の如くである。世間から推稱せられて、あれこそ大丈夫といはれるものは、大抵分かつたもので、利益徳澤を人に施し、その名譽を明かにして、誰知らぬものもなく、廟堂の上に坐わり込んで、百官を或は進め或は退け、天子を輔佐して號令を出し、一寸外に出かけるときには旗旛を立て、弓矢をつらね、武士は、その行く先を拂ひ、従者は、ぞろぞろと路に一ばいに成る位、打揃つて、主人公を護衛して、スハといふ時の用心を爲し、色色の御用人は、その物を執つて、路の兩側を走り、何か欲しいといへば、途中でも直ぐに事が辨じる。それで勢威の赫灼たる、飛ぶ鳥も落ちる程で、一寸喜ばれると賞賜があるし、怒られると刑罰を被る。そこで、内に御還りになると、一代の才俊といはれる人が、幫間の役を務めて、御前に充ち滿ち、古今の人物を例に引いて、主人公の盛徳をほめそやし、いかにも巧にいふ諛諛であるから、耳に入つても、決して、うるさくはなく、それと知りつつも嬉しい位。それから本能の満足させる爲めには、眉は麗しく頬はぼつてり、聲は涼しくして歌ふに適し、體はしなやかで舞ふには持つて来いといふ位、外貌すでに秀美なる上に心は伶俐、能く氣が利いて、痒い處へ手が届くばかり、それが軽い裾を飄し、長い袖を振りかざし、おしろいは白く、眉墨は緑に、さながら畫けるが如き美人

が幾人となり、金屋をつらね、何もせずして閑居し、或は他の寵を妬み、或はおのが美を恃み、朝から晩までお化粧三昧、散散にめかし込んで、主人公の愛憐を得やうと心がけて居る。大丈夫が天子のお眼鏡に叶ひ、樞要な位地に上り、その才力を十分に當世に布き行ふ者の爲すことは、大抵上の様なことである。かく申す某も、矢張人であるから、何もこれが厭だといつて、わざと世を避けたのではないが、もともと天命の然らしめるところで、機俸を願つて得られるものでないから、今更致方なく格別求めやうとしない。かかる世間的態度とは丸で打つて變つて、貧窮に居り、民間に暮らし、高い處に登つて遠景を望み、ある時は木蔭に坐して日を送り、ある時は清泉に臨んで心身を洗ひ、山に入つて薇蕨を採れば、その味のうまさ、水に釣つて魚蝦を得れば、その新らしさ、とても、都に居ては求められない。それから、起きるも、寐るも、勝手次第で、時間の制限といふものなく、唯だ心の思ふ儘にして安んじて居る。全體、わが前で褒められるよりも、後に於て諂られない方が餘程宜しく、身體にこれぞといふ樂がなくとも、精神に苦痛の無い方がはるかに勝つて居る。それで官位なきが故に、車服を繁ぐ面倒もなく、罪にかかるともなきが故に、刀鋸を加へられることもない。かくて全く世を棄てて世に棄てられたから、天下の治亂も知らず、朝廷の進退も聞かず、まことに、のん氣で、長生が出来さうである。これは大丈夫といはれるものが當世に用ひられず、自ら勇退する者の爲すところであつて、自分は、今之を行はうと思ふのである。われは天命に協はぬ故、世に謂はゆる大丈夫

の事も出来ず、止むを得ず隠者の事を行はうとするのであるが、翻つて考ふれば、去るべき時に去らず、思ひ切り悪くへばり付いて、富貴利祿を求める手合のさまを見ると、まことに情なく、われながら善いことをしたと思ひ當る節がある。彼等は、公卿の門に御機嫌伺ひに罷り出で、權要の相會する處に奔走して、お世辭を振りまき、御無理御尤もで押し通し、泣く兒と地頭とは勝てぬといふので、足は往かうと思つても、びくびくして往くことも出来ず、口は言ひたいけれども、もちもちして物いふことも出来ず、鼻息を伺ひ、お髯の塵を拂ひ、散汗らはしい眞似をしながらも、恬として恥とも思はず、時には刑憲に觸れて誅戮される様な危険な目に遭ひ、萬一の場合を僥倖して、幸福を得やうと心がけ、一生かくの如くして、空しく暮らして仕舞ふ。かくの如き手合と自ら不遇なることを知つて隠遁するものと、その人たる點に於て、いづれか賢、いづれか不肖、それは言ふまでもないことであらう。李愿の言葉を、昌黎の韓愈、即ちかく申す某が聞いて、その心意氣を壯なりとし、末世の今には珍らしい氣骨ある男だといふので、別れる時に酒を與へて飲ましめ、又わざわざ詩を作つて之に贈つたが、その文句は、左の如くである。

【詩意】名だたる盤谷の中は、李愿の住處であるし、盤谷の地は、李愿の稼穡する處である。盤谷の泉は、心身を濯ふべく、流に従つて上下し、その風景を賞することも出来る。盤谷は、その路が險阻であつて、何人が來つて汝の居處を争ひ奪はうぞ、全く獨占といつても善い位。それで、盤谷は、幽邃にして奥深いが、その内部は、案外にも廓然として開け、そこに居宅を構へることが出来、溪谷の地勢は、めぐり曲つて、往けども、往けども、又ぞろ後へ戻る様な氣がする程である。かかる谷の中に住んで居ると、浮世の塵も飛んで來ないから、その樂は、かぎりなく、山は深しと雖も、虎豹など跡を遺ざけて、害を加へることもなく、水は近しと雖も、蛟龍は遁藏して、禍を及ぼすことなく、李愿その人、すでに隠君子であるからには、鬼神も、それとなく守護し、不祥の者を叱りつけて、これを禁厭するであらう。そこで、悠悠として山肴野味を飲食し、爲すこともなく暮らして居ると、命は長くして、身は健かであるし、何も望まなければ、決して不足に感ずることもない。ああ、まことに羨むべき境涯である。われも、いつかは車に油をさし、馬に秣ひ、李愿その人に盤谷に従ひ、ともに隠れて閑居の樂を恣にし、一生を終るまで、山水の間に徘徊し、世の憂きふしを忘れて仕舞ひたいものである。

【餘論】この篇の序はあつさりとして、まことに宜しい。その第一節は得意の人を形容し、第二節は閑居の人を形容し、第三節は奔走伺候の人を形容し、其於て爲人、賢不肖何如也といひ、讀者の判断に任かせて、自然旨意を明かにした處は、餘情に富み、含蓄が深く、比較的に學び易くて好い。しかし、これを絶妙の美文とするのは、ちと不賛成で、予は東坡の言を疑ふものである。東坡は何と云つたかといふと、曰く「歐陽公言ふ、吾に文章なし、惟だ陶淵明の歸去來の辭のみを。余謂ふ、唐に文章な

し、韓退之の送李愿歸盤谷序のみ。平生、この作に效はむと欲し、毎毎筆を執つて輒ら罷む、因つて、自ら笑つて曰く、且つ退之をして獨歩せしむるに若かず。しかし、熟ら考ふれば、これは東坡が聊か爲にするところあつて、唯だ一寸真似の出来ないとを褒めたものと見れば善いので、これを本當にしたならば、東坡は、一個の没眼識漢たるに終るであらう。それから、蔣注に「按するに、この序、孟州濟源縣に石刻あり、その間、少しく異同あり、唐人の跋に云ふ、昌黎韓愈は知名の士、愿の賢を高しとす、故に序して之を送る云云と。歐陽の集古錄に曰く、當時、退之、官尙は未だ顯はれず、その道、未だ當世に宗師とせられず、故に但だ知名の士と云ふなり、然れども、當時愿を送るもの少からずと爲す、而して、獨り此序を刻す、蓋し、その文章、すでに時に重んぜらるるなり」とある。最後に、詩だけに就いて、翟景淳は「一歌尤も灑落」といひ、蔣之翹は「歌詞精峭にして、離騷招隱の遺に似たり」といひ、ともに、簡單ながら、善く當つて居る。

送張道士并序

張道士を送る并に序

張道士嵩高之隱者、通古今學、有文武長材、寄迹老子法中、爲道士、以養其親、九年、聞朝廷將治東方貢賦之不如法者、三獻書、不報、長揖而去。

去、京師士大夫多爲詩以贈、而屬愈爲序、詩曰、

【訓讀】張道士は嵩高の隱者、古今の學に通じ、文武の長材あり、跡を老子の法中に寄せて道士となり、以て其親を養ふこと九年、朝廷、將に東方貢賦の法の如くならざるを治めむとするを聞き、三たび書を獻せしが報せられず、長揖して去る。京師の士大夫、多く詩を爲つて以て贈り、而して、愈に屬して序を爲らしむ。詩に曰く、

大匠無棄材、尋尺各有施。

大匠に棄材なし、尋尺各々施すあり。

況當營都邑、杞梓用不疑。

況んや都邑を營むに當つては、杞梓用ひられむこと疑はず。

張侯嵩山來、面有熊豹姿。

張侯、嵩山より來る、面に熊豹の姿あり。

開口論利害、劍鋒白差差。

口を開いて利害を論ず、劍鋒白差たり。

恨無一尺捶、爲國管羌夷。

恨むらくは、一尺の捶、國の爲に羌夷を管つなきを。

詣闕三上書、臣非黃冠師。

闕に詣つて、三たび書を上る、臣は黃冠の師に非ず。

臣有膽與氣、不忍死茅茨。

臣は膽と氣とあり、茅茨に死するに忍びず。

又不媚笑語不能伴兒嬉。又笑語に媚びず、兒嬉に伴ふ能はず。  
 乃著道士服衆人莫臣知。乃も道士の服を着けて、衆人、臣を知るなし。  
 臣有平賊策狂童不難治。臣に賊を平らぐるの策あり、狂童治め難からず。  
 其言簡且要陛下幸聽之。その言簡にして要、陛下幸に之を聽け。  
 天空日月高下照理不遺。天は空しうして、日月高く、下に照らして理遺さず。  
 或是章奏繁裁擇未及斯。或は是れ、章奏繁くして、裁擇未だ斯に及ばず。  
 寧當不袞報歸袖風披披。寧ら當に報を袞たすして、歸袖、風披披たるべし。  
 答我事不爾吾親屬吾思。我に答ふ、事、爾らず、吾が親、吾に思を屬す。  
 昨宵夢倚門手取連環持。昨宵、夢に門に倚り、手に連環を取つて持す。  
 今日有書至又言歸何時。今日書あり至る、又言ふ、歸るは何の時ぞ。  
 霜天熟柿栗收拾不可遲。霜天柿栗を熟し、收拾遅かるべからず。  
 嶺北梁可構寒魚下清伊。嶺北梁構ふべし、寒魚、清伊を下らむとす。  
 既非公家用且復還其私。すでに公家の用に非ざれば、且く復た其私に還らむ。

從容進退間無一不合宜。從容たり進退の間、一として宜しきに合はざるなし。

時有利不利雖賢欲奚爲。時に利と不利とあり、賢と雖も奚爲せむと欲する。

但當勸前操富貴非公誰。但だ當に前操を勸ますべし、富貴、公に非ずして誰ぞ。

【字解】(一) 大匠無棄材。立派な大工は、どんな材木でも吃皮用に立てるから、すたり物は無い。(二) 尋尺。尋は八尺、即ち一ひろ、大小長短といふ調。(三) 栢梓。栢は栢杞、即ちく、梓はあづき。栢杞は、根が薬になり、梓は版木にしたり、又弓にしたりするが、ともに建築用の材木ではない。(四) 燕侯。侯は公といひ、君といふに同じ。(五) 嵩高。即ち嵩山、前に數ば見ゆ。(六) 差差。はつきりと見えること。(七) 緹。靛、しもと。(八) 莞夷。ともに未開の種族で、莞は西方、夷は東方であるが、こゝでは引括めて蠻夷と見れば善い、即ち魏賊を蔑視して云ふ。(九) 黃冠。道士の戴くもの。(一〇) 茅茨。草ぶきの家。(一一) 狂童。詩經などに數ば見ゆる字面で、こゝでは賊魁の稱に用ふ。(一二) 章奏。上書の個條が繁多なること。(一三) 裁擇。裁は取裁、えり分けること。(一四) 歸袖。歸り行く人の袖。(一五) 披披。ひらひら翻へる貌。(一六) 屬吾思。思を吾に屬す、自分の事を心にかけて居る。(一七) 連環。丸い環。環は還と音通で、從つて、その體語として用ふる。環を手持つて、この環、即ち還の音の通り、早く歸れといふ調。(一八) 清伊。伊は川の名、即ち伊水。前に序中及び詩中の嵩高が、或は嵩南に作つてある處から、朱子は「伊水は、嵩北に在り、もし、前兩處、嵩南に作らば、即ち此處、伊に作るべからず。若し、彼の嵩高に作らば、これ乃ち伊に作るべきのみ」といひ、蔣之翘は之を辨じ「本文すでに嶺北といふ、その伊の字なること、疑なし、即ち前に嵩南に作るも、亦た何の礙か之あらむ」といつて居る。(一九) 前操。道士として嵩高に隱居して居る其高操。

【題義】張道士は、他書に見えぬから、その經歷は、少しも分からず、唯だこの序に依つて、その人、塵外に居るも濟世の志あるものだとはいふことが分かるだけである。前に韓愈の遺詩に、飲城南道邊

古墓上、蓬中丞過贈兵部衛員外少室張道士の一首があつて、その條下に注した通り、その張道士は、矢張この人であらうと思はれる。趙曜北は昌黎道を以て自ら任ず、孟子、楊墨を距ぐに因つて、故に終身亦た佛老を闢く。その世の仙を求むるものに於ける、もとより謂ふ、吾寧屈曲在世間、安能從汝與神仙。佛骨を誅むるの一表、尤も生平の定力を見る。然れども、平生往來するところ、又二氏の人多し。張道士を送るが如き、詩あり。惠師・靈師・澄觀・文暢・大願を送る、皆詩文あり。或は疑ふ、その交遊、檢束なく、平日の持論と互に異なるを。知らず、昌黎正に此を借つて以て其議論を暢べむとするを（中略）張道士に於ける、亦た貶詞なし。すなはち、その上書して事を言ひ、用ひられずして歸る、もとより、尋常黃冠者流に異なるを以てなり」と云つて居る。それから、蔣注には「退之の贈、意、詩に在り、序は特だ詩の小引たるのみ、李漢、これを此に次す、殊に體を失へりと爲す」とあるのは、至極尤もなことである。例に依つて、序の大意を述べると——張道士は、嵩山に住んで居る隱者で、古今の學に通じ、文武兩道に達した天晴の材能あるに拘はらず、身を老子の法に託して道教を信奉し、道士となつて其親を養つて居た。元和九年、朝廷に於ては、法度の通りに貢賦を上納せぬ東方の藩鎮を始末されむとする計畫ある由を聞き、三たび闕下の上書して、その經綸を述べた處が、御取り上げに成らなかつた故に、長揖して都より嵩山に歸ることにした。そこで、長安の士大夫どもは、甚だ氣の毒に思ひ、詩を作つて之に贈るもの多く、そして、韓愈に命じて其序を

作らしめ、韓愈も、亦た次の詩を作つた。

【詩意】立派な大工には棄てる材木なく、どんな物でも用に立て、長短ともに各、施すところがある。まして、都邑を経營するに當つては、枸杞や梓の如きものでも、用ひられることは、もとより疑が無。これと同じく聖天子が至治を布かれるに際しては、草莽野人の言でも、必ず御聞取りに成るべき筈である。さきに、張君は、嵩山から上京されたが、顔は熊豹の姿で、中中しつかりして居るし、口を開いて政治上の利害得失を論ずれば、劍の鋒先が、はつきりと白く見えるやうである。若し一尺の鞭を與へたならば、國家の爲に、光夷に比すべき彼の叛賊輩を敲き作すであらうに、さう出来ないのは、まことに遺憾である。張君は、三たびまで闕下に至つて上書し、私は、元來、道士でも何でもない、膽氣があつて、茅茨の中に平然として死するに忍びず、又他人の笑語に調子を合はせて媚びることも出来ず、子供らしい遊戯の御相手をする事も出来ず、世の中の事が馬鹿げて居るから、止むなく道士の衣服を着けて船晦して居るので、誰も本當に私を知つて居るものはありません。私には、賊を平ぐる策略があつて、かの賊魁を取つちめることも、さう六つかしくはありません。その要領を手短に申し上げますから、願はくは、陛下、これを聴き玉へと申し上げた。聖天子の徳はからりとした青天の上に、日月の高く懸るが如く、下土を照らして、一物をも残さぬ筈であるのに、御返事の無いのは、ひよつとすると、その章奏が餘り頻繁なる爲に未だ決裁選擇に及ばず、その儘、留め置かれ

る爲めでもあらうか、然らば、御挨拶を待たずして、歸り行く衣の袖を、ひらひら風に翻すのは、あまり短氣過ぎるでは無からうか。すると、張君は徐に之に答へて、否、否、決して、さういふ次第ではない、吾が親は、絶えず吾が事を思つて居られるので、昨夜の夢には門に倚つて吾を待ちつつ、丸い環を手にし、早く還つて来いと言ひたげの氣色を爲せるを見たし、今日は、手紙が来て、何日歸るかといはれた。時しも秋、霜が降つた後には、柿や栗の實が熟したから、早く取り入れる必要があるし、寒魚が清き伊水の流に上るについては、嶺北に梁を設けて、それを捕獲せねばならぬ。すでに、御上の用を仰せ付けられぬ上は、しばらく立ち還つて、一家の私事を始末する必要があるから、それで、俄に出立するのであるといつた。なる程、承れば、御尤もな次第、張君は、進退の間、毎に従容、一として其宜しきに合はぬことはない。今回の不本意は、推察致すが、時には、利あり、不利あり、たとひ賢者でも、何とも仕方がない。それにつけても従前の高操を更に勵まされむことを希望するので、眞正の富貴は、張君の一身に限られて居る。

【餘論】大臣の四句は、張道士の言、必ず聖明の采擇あるべきことを云うて總括となし、張侯嵩高來より陛下幸聽之に至る十八句は、その人物材能より今次の上書に及び、天空日月高の四句は、その報せざりし所以を揣摩し、章奏の氣を言うて、天子の聖徳を傷けず、事當不、矣、報の二句は問、答、我事不爾の十二句は答、これに因つて、張道士の東歸は、必ずしも、上書の採用されぬ其不滿の爲でもないといひ、聊か之を慰める意味合もあつて、極めて面白く、時有利不利の四句は、更に將來の修養を望んだので、富貴の二字は尋常費用せるものより以上に、深い意味があると見ねばならぬ。

送鄭十爲校理 井序 鄭十の校理と爲るを送る 井に序

祕書御府也。天子猶以爲外且遠。不得朝夕視。始更聚書集賢殿。別置校讐官。曰學士。曰校理。常以寵丞相爲大學士。其他學士皆達官也。校理則用天下之名能文學者。苟在選。不計其秩次。惟所用之。由是集賢之書盛積。盡祕書所有。不能處其半。書日益多。官日益重。四年。鄭生澗始以長安尉。選爲校理。人皆曰。是宰相子。能恭儉守教訓。好古義。施於文辭者。如是而在選。公卿大夫家之子弟。其勸耳矣。愈爲博士也。始事相公於祭酒。分教東都生也。事相公於東大學。今爲郎於都官也。又事親黨而炙之矣。其高大遠密者。不敢隱度論也。其勤已務博施以己之

有欲人之能不知古君子何如耳。今生始進仕。獲重語於天下。而慷慨若不足。真能守其家法矣。其在門者可進賀也。求告來寧。朝夕侍側。東都士大夫不得見其面。於其行日。分司吏與留守之從事。竊載酒肴。席定鼎門外。盛賓客以餞之。既醉。各爲詩五韻。且屬愈爲序。

【訓讀】秘書は御府なり。天子猶は以爲へらく、外にして且つ遠く、朝夕視ることを得ず、と。始めて更に書を集賢殿に聚めて、別に校讐の官を置く。曰く、學士、曰く校理、常に以て丞相を寵して大學士と爲す。その他の學士も、皆達官なり。校理は、天下の文學を能くするに名あるものを用ふ。苟くも、選に在れば、その秩次を計らず、惟だ之を用ふるところのままなり。これに由つて、集賢の書、盛に積み、秘書有るところを盡すも、その半に處ること能はず。書、日に益す多く、官、日に益す重し。四年、鄭生誦、はじめて長安の尉を以て、選ばれて校理となる。人皆曰く、これ宰相の子、能く恭儉、教訓を守り、古義を好み、文辭に施すものなり。かくの如くして選に在り、公卿大夫の子弟、其れ勤めむのみ、と。愈の博士たるや、はじめて、相公に祭酒に事へ、東都生に分教せしとき、相公に東大學に事ふ。今、都官に即たるや、又相公に居守に事ふ。三たび屬吏となる、時を經ること五年、道徳を前後に觀、教誨を左右に聽く、親しく薫して之に炙すといふべし。その高大遠密なるもの、敢て隱に度論せざるなり、その己を勤め、博く施すことを務め、己の有を以て人の能くせむことを欲する。古しへの君子も何如なるを知らざるのみ。今、生、はじめて進仕して、重語を天下に獲たり、而かも慷慨として足らざるが若くす、真に能く其家法を守れり。その門に在るもの、進んで賀すべきなり。求め告げ、來事して、朝夕側に侍す。東都の士大夫、その面を見るを得ず。その行くの日に於て、分司の吏と留守の從事と、竊に酒肴を載せて、定鼎門外に席し、賓客を盛にして、以て之を餞す。すでに酔うて、各、詩五韻を爲り、且つ愈に屬して序を爲らしむ。

相公倦台鼎。分正新邑洛。才子富文華。校讐天祿閣。壽觴嘉節過。歸騎春衫薄。鳥哢正交加。楊花共紛泊。親交誰不羨。去去翔寥廓。

相公、台鼎に倦んで、新邑洛に分正たり。才子、文華に富み、天祿閣に校讐す。壽觴、嘉節過ぎ、歸騎、春衫薄し。鳥哢正に交加、楊花共に紛泊たり。親交誰か羨まざらむ、去去寥廓に翔れ。

【字解】(一)相公、鄭餘慶を指す、即ち鄭校理の父。(二)倦、宰相の職に居ること飽きた。(三)分正、新邑洛は洛陽。安祿山の亂後、規度一變せしが故に、新邑といつたので、分司は即ち留守。唐書を見ると「元和元年、鄭餘慶、相を罷めて太

子實等となり、國子祭酒に遷り、冬十一月庚戌、河南尹に遷り、三年夏六月甲戌、河南尹より東都留守に拜せられた、後六年十月、東都留守に除せられ、その後、韓愈も河南より京師に至り、七年二月、職方員外郎を以て復た國子博士となつた。【三】才子、鄭校理を云ふ。【四】校書、古書を校正すること。【五】天祿閣、三輔故事に「天祿閣は、大殿の北に在り、以て秘書を閣す」とあり、唐法に「天祿は、獸の名。漢時、この獸を買するものあり、因つて以て閣に名づけ、以て秘書を閣す」とある。漢代、初は未央宮に在つて、唐何、これを造り、その中に秘書を藏し、賢才をして此に居らしめ、劉向なども、こゝで古書を校正した。【六】鳥呀、鳥の鳴く聲。【七】粉泊、亂れて風泊する。【八】去去、去れ去れといつて相囑する辭。【九】朝露、漢書司馬相如傳に「朝露、すてに露の字に類ける」とあり、文選謝朓の詩に寄言辭者、露已高翔とある、天上に飛翔せよといふ義。

【題義】鄭十の十は、例の排行、名は涵といひ、鄭餘慶の子である。舊唐書鄭餘慶傳に「子涵、本名は涵、文宗藩邸の時の名同じきを以て、名を涵と改む。貞元十年、進士に擧げられ、父の諱官を以て累年仕へず、秘書省校書郎より、洛陽尉に遷り、集賢院修撰に充てられ、長安尉集賢校理に改めらる」とある。集賢院は、元の集賢殿で、唐書に「開元十三年、集賢殿を改めて、集賢殿となし、四部の書を其中に聚めて、修撰校理を置き、五品以上を學士となし、六品以下を直學士となし、宰相張説を以て大學士となす」とあつて、玄宗の時に始まつたのであるが、後には、學士の下に修撰校理等を置かれた。蔣注に「公、元和四年六月を以て都官員外郎となり、東都に分司たり。涵、求め告げて來寧す。公、その行に於て、この序を作り、以て之を送る。蓋し五年の春なり、故に歸騎春衫薄の句あり」といつて居る。それから、例の如く序の大意を下に解説すると――秘書といふのは御府で、そこに歴代の

典籍が收容してあるが、天子は猶ほ儼然と召され、何分宮外に在り、その上遠く朝夕に其書を見ることが出来ず、まことに不便だといふので、はじめて、改めて書を宮中の集賢殿に聚め、別に校書官を置きて學士と稱し、校理と稱した。それから、常に宰相を尊寵する意味で、これを長官として、大學士と稱さしめ、その他の學士どもも、無論、皆立派な官職であるし、校理は、天下で文學を能くするといふ評判あるものを用ひた。苟くも其選に入りさへすれば、從來の秩祿位階の如何に關せず。隨意に之を擢用することになつて居る。かくて、集賢殿の書籍は、盛に堆積し、秘書に在るだけの者を盡しても、その半ばにも及ばぬ位、書は日にまし多くなり、官は日にまし重くなつた。元和四年、鄭涵といふ人は、はじめ、長安の尉から選ばれて、集賢校理となつた。そこで、皆皆評判して、鄭涵は、宰相鄭餘慶の子であつて、能く恭儉であり、家庭の教訓を守り、古い義理を探究することを好んで、これを文辭に施すものである。かういふ人を擢用すると、公卿大夫の家の子弟などの勳みにもなるから、まことに善いことであるといつた。私は、國子博士となつた時、鄭相公は國子祭酒、即ち大學總長であつたから、その下に隸屬し、次に洛陽の生徒に分教した時、相公は河南尹であつたから、その下に隸屬し、次は都官員外郎となつた時、相公は東都留守であつたから、その下に隸屬し、三たび、相公の屬吏となつて、五年の久しきを經過した。その間、相公の前後に在つて、その道徳を觀、相公の左右に在つて、その教誨を受け、取りも直さず、薰陶せられ且つ親炙して居たのである。相



公の高遠密なる諷見に就いては、敢て私に付度して議論するまでもなく、公然それを評論することも出来るし、相公が己を勤め、しかも博く他に施すことを務め、自分に材能があるから、他人も矢張り、それ程の材能があつて欲しいといつて、後進の士を誘掖指導されることに就いては、古しへの君子も、かほどまでではあるまいと思はれる。その御子息たる鄭誦が、初めて進んで仕官し、そして、如上の好評を天下に得つつも、なほ慷慨として足らざるが如くし、セツセと勉強して居るのは、まことに能く其家法を守るものと申すべく、鄭氏の門に在る後進の吾吾どもは、進んで御喜を申すべき筈である。この度は、休暇を願つて、御親父の安否を問ふ爲に洛陽に來り、朝夕、その側に伏持されて居たが、洛陽の士大夫どもは、お目にかかることが出来ず、長安に歸る爲に出發せらるる其當日、大學分校の役人は、留守の從事等と共に、酒肴を載せ、定鼎門の外に席を設け、多勢寄り集まつて饌別を爲し、すでに酔ひし後、各五韻の詩を作り、その上、予に命じて序を作らしめたから、下手ではあるが、この文を作つた——なほ題下の自注に「洛の字を得たり」とあるのを見ると、その時、分韻を爲したのである。

【詩意】鄭相公は、久しく宰相の位に居られたが、台鼎の重きに任ずることに飽きて、洛陽の留守となられた。その御子息たる鄭誦は、才子として世に知られ、文章風華に富み、集賢校理に任じ、古しへの天祿閣に比すべき祕府に出仕して、校讐に従事して居られる。今次、親を洛陽に省し、日ごとに奉觴を薦められて居たが、花咲き句よ佳節は、いつしか過ぎ、再び長安に歸るといふので、春著の衣裳、いとも輕げに、馬に乗じて出立されむとして居る。今しも、鳥の聲は、交る鳴き合せ、柳の花は紛紛として亂れ飄り、旅行には持つて來いといふ晚春の好期節である。平生親交あるもの、君の出仕を見て羨ましく思はぬものは無い位。さらば、疾く此を去つて、彼の天上に比すべき朝廷に翱翔し、追追と出身されむことを囑望するの情に堪へぬ。

【餘論】この首は、席上の規定に従つて、矢張五韻、即ち十句で出來て居る。短い割合には、變化があつて面白く、その門地聲望より始め、今次洛陽に來事せしことより、長安に還ることを敘し、そして、將來の榮達を囑望したのである。

送汴州監軍俱文珍 并序 汴州の監軍俱文珍を送る 并に序

今之天下之鎮陳留爲大屯兵十萬連地四州左淮右河抱負齊楚濁流浩浩舟車所同故自天寶已來當藩垣屏翰之任有弓矢鉄鉞之權皆國之元臣天子所左右其監統中貴必材雄德茂榮耀寵光能俯達人情仰喻天意者然後爲之故我監軍俱公輟侍從之榮受腹心之寄

奮其武毅。張我皇威。遇變出奇。先事獨運。偃息談笑。危疑以平。天子無東顧之憂。方伯有同和之美。十三年春。將如京師。相國隴西公。飲餞於青門之外。謂功德皆可歌之也。命其屬咸作詩以鋪釋之。詩曰。

【訓讀】今の天下の鎮、陳留を大なりとす。兵を屯すること十萬、地を連ぬること四州、淮を左にし、河を右にし、齊楚を抱負し、濁流浩浩として、舟車の同じうするところなり。故に天寶より已來、藩垣屏翰の任に當り、弓矢鉄鉞の權あり、皆國の元臣、天子の左右とするところなり。その監、中貴を統ぶ、必ず材雄に、德茂に、榮耀龍光、能く俯して人情に達し、仰いで天意を諭すものにして、然る後に之を爲す。故に我が監軍俱公、侍從の榮を蒙り、腹心の寄を受け、その武毅を奮ひ、我が皇威を張り、變に遇うて奇を出し、事に先つて獨り運す。偃息談笑、危疑以て平かなり。天子、東顧の憂なく、方伯、同和の美あり、十三年春、將に京師に如かむとす。相國隴西公、青門の外に飲餞す。謂ふ、功德皆之を歌ふべきなりと。その屬に命じて、成な詩を作つて、以て之を鋪釋せしむ。詩に曰く、

奉使羌池靜。臨戎汴水安。使に奉じて、羌池靜に、戎に臨んで汴水安し。  
冲天鵬翅闊。報國劍鋞寒。天に沖して鵬翅闊く、國に報いて劍鋞寒し。

曉日驅征騎。春風詠采蘭。

曉日、征騎を驅り、春風、采蘭を詠す。

誰言臣子道。忠孝兩全難。

誰か言ふ臣子の道、忠孝兩全難しと。

【字解】(一) 奉使羌池靜。俱文彥が邊に使を奉じて西邊に使すると、その地が平靜に成つたといふこと。舊唐書の本傳は極めて簡單で、その出身の大第さへ疎略書いて無から、詳しいことは分からぬ。(二) 臨戎汴水安。俱文彥が監軍となつて汴州に在官せしことを云ふ。(三) 劍鋞。鋞は刀の先端。(四) 采蘭。文選東晉補亡詩に蘭被南風。言采其蘭とあつて、李善注に蘭に蘭つて以て香草を采るは、以て其父母に供養せむとすとある。

【題義】蔣注に「隴西公董晉。汴州陳留郡節度使となつて、汴州に治す。中常侍俱文彥、監軍たり。公、觀察推官たり。文珍、將に京師に如かむとす、序詩を作り、以て之を送る、時に貞元十三年なり」とある。それから、序に云ふところは——今日天下の藩鎮の中では、陳留が一番大きく、兵を屯すること十萬、地は汴州高麗の四州を連ね、淮水を左にし、黃河を右にし、齊を抱き、楚を負ひ、二水は濁流浩浩として、舟は水中を行き、車は岸上を通り、まことに、四方必衝の要害になつて居る。されば、天寶安史の亂より以來、藩屏の重任に當り。兵馬を統轄し、鉄鉞を授けられて、その地の節度使となつたものは、いづれ、國家の元老で、天子が左右とせられるところの人人であつた。そして、その監軍たるものは、中貴、即ち宦官輩を統御し、必ず材力雄に、德望茂く、榮耀龍光を受け、俯しては人情に達し、仰いで天意を諭す者にして、はじめて就任することが出来る。我が監軍俱公文

珍は、侍従の榮職を止め、腹心の重寄を受けて、この郡に監軍となり、その武毅を奮ひ、我が皇威を張り、蠻事に遇へば、奇策を出し、事の起る前に、獨り其處置をなし、毎毎のんきさうに休息しつゝ譏笑して居られたから、下民一般、危疑の念は、いつしか平かになつて騷擾などは、決して起らず、その爲に、天子は東顧の憂なく、一方の旗頭たる面は、同心和協の美を成すに至つた。ここに、貞元十三年の春、俱公は、事を以て長安に上京せむとし、相國關西公董晉は、青門の外に餞別の饗を設けて酒を置いた。そして、俱公従前の功徳は、皆歌ふべきものであるといふので、その屬僚に命じ、各詩を作つて、その功徳を鋪張尋釋せしめた。そこで、予も亦た詩を作つたが、即ち左の通りである。

【詩意】俱公は、曩に使命を奉じて、西邊羌族の住んで居る地方に赴き、見事に之を平定したが、今回は、藩鎮の兵を撫御し、泮水一帶の地方が安靜になつた。俱公の志氣は、颯が闊い翅を展げて、天に沖するが如く、そして、國家に報いむが爲に、切ッ先の寒げに見ゆる劍を平生佩用して居られる。今次、長安に赴いて、天子への忠勤を勵む爲に、征騎を驅つて發足されたが、都に著するは、春の盛りで、關を探ることを詠じて、親を養ふ至情をも盡されるであらう。臣子の道、忠ならむと欲すれば孝ならず、孝ならむと欲すれば忠ならず、兩つながら全うすることは六つかしいといふが、わが俱公に於ては、決して、さういふことは無い。

【餘論】奉使の二句は俱公の經歷、冲天の二句は俱公の志氣、曉日の二句は今長安に行くことを忠孝兩面に繋げ、そして、七八で之を收結して居るので、その結構は極めて緊密である。樊汝霖は、「この序正集に入らず、李漢、文珍の故を以て公の爲に諱むか」といつたが、これが普通の宦官ならば兎に角、俱文珍に於ては、決して諱む必要はない。舊唐書の本傳に據れば、後に順宗即位。二王の徒が頻りに權勢を振つた時、俱文珍は、姓名を改めて劉貞亮といつて居たが、ひとり之に對抗し、遂に順宗に勸めて廣陵王を太子とし、やがて即位したのが憲宗で、遂に二王の一黨を追ひ斥けたから、時議、貞亮の忠董を嘉し、仍つて、累遷して右衛大將軍知内侍省事となり、元和八年に卒した時、憲宗は、その朝戴の功を思うて、開府儀同三司を贈られたとのことである。かばかりの人物なれば、たとひ中貴であつた處が、累と爲すに足らず、従つて、樊汝霖の此言は、未だ其當を得ざるものと云はねばならぬ。

石鼎聯句詩 井序

石鼎聯句の詩 井に序

元和七年十二月四日、衡山道士軒轅彌明、自衡下來、舊與劉師服進士、衡湘中相識、將過太白、知師服在京、夜抵其居宿、有校書郎侯喜、新

有能詩聲。夜與劉說詩。彌明在其側。貌極醜。白髮黑面。長頸而高結。喉中又作楚語。喜視之若無人。彌明忽軒衣張眉。指爐中石鼎。謂喜曰。子云能詩。能與我賦。此乎。劉往見衡湘間人。說云。年九十餘矣。解捕逐鬼物。拘囚蛟螭虎豹。不知其實能否也。見其老。頗貌敬之。不知其有文也。聞此說大喜。即援筆題其首兩句。次傳於喜。喜踊躍。即綴其下。云云。道士啞然笑曰。子詩如是而已乎。即袖手竦肩。倚北牆坐。謂劉曰。吾不解世俗書。子爲我書。因高吟曰。龍頭縮菌蝨。豕腹漲彭亨。初不似經意。詩旨有似譏喜。二子相顧慚駭。欲以多窮之。即又爲而傳之喜。喜思益苦。務欲壓道士。每營度欲出口。吻聲鳴益悲。操筆欲書。將下復止。竟亦不能奇也。畢即傳道士。道士高踞大唱曰。劉把筆。吾詩云云。其不用意。而功益奇。不可附說。語皆侵劉侯。喜益忌之。劉與侯皆已賦十餘韻。彌明應之如響。皆穎脫含譏諷。夜盡三更。二子思竭不能續。因起謝曰。尊師非世人也。某伏矣。願爲弟子。不敢更論詩。道士奮曰。不然。章不可以不

成也。又謂劉曰。把筆來。吾與汝就之。即又唱出四十字爲八句。書訖使讀。讀畢謂二子曰。章不己就乎。二子齊應曰。就矣。道士曰。子皆不足與語。此寧爲文耶。吾就子所能而作耳。非吾之所學於師而能者也。吾所能者。子皆不足以聞也。獨文乎哉。吾語亦不當聞也。吾閉口矣。二子大懼。皆起立。牀下拜曰。不敢他有問也。願聞一言而已。先生稱吾不解人間書。敢問解何書。請問此而已。道士寂然若無聞也。累問不應。二子不自得。即退就座。道士倚牆睡。鼻息如雷鳴。二子怛然失色。不敢喘。斯須曙鼓鼗。二子亦困。遂坐睡。及覺日已上。驚顧。覓道士不見。即問童奴。奴曰。天且明。道士起出門。若將便旋然。奴怪久不返。即出到門。覓無有也。二子驚惋自責。若有失者。問遂詣余言。余不能識其何道士也。嘗聞有隱君子彌明。豈其人耶。韓愈序。

【訓讀】元和七年十二月四日。衡山の道士軒轅彌明。衡より下り来る。奮と劉師服進士と衡湘中に相識る。將に太白を過ぎむとし、師服の京に在るを知り、夜、その居に抵つて宿す。校書郎侯喜あり、新

に詩を能くするの聲あり、夜、劉と詩を説く。彌明、その側そばに在り、貌極めて醜みにく、白鬚しろいひげ、面、長頸ながのどにして高結たかくむす、喉中のど、又楚語ちよを作す。喜、これを視て、人なきが若し。彌明、忽ち衣きぬを軒のりげ、眉まゆを張り、體中の石鼎いしとうを指し、喜に謂つて曰く、子、詩を能くすと云ふ、能く我われと此こを賦ふせむやと。劉、往ゆに衡湘けいしやうの間の人の説くを見る。云ふ、年九十餘、鬼物おにものを捕逐とらし、蛟虜かう虎豹こへうを拘囚とらするを解すと、その實に能くするや否やを知らざるなり。その老を見て、頗る之を親敬おんけいす。その文あるを知らざるなり、この説を聞いて、大に喜び、即ち筆を授り、その首兩句を題して次に喜に傳ふ。喜、踊躍うごして、即ち其下に綴つづぬ、云云と。道士亞然あぜんとして笑つて曰く、子の詩、かくの如きのみかと。即ち手を袖そでにし、肩かたを竦こかし、北牀きたじやうに倚つて坐し、劉に謂つて曰く、吾、世俗せきじゆの書を解せず、子、我が爲ために書せよと、因つて高吟かうぎんして曰く、龍頭縮りゆうとうしゆく、齒齋しさい、豕腹漲しふくちやう、彭亨へいけいと。初めより、意を經るに似ず。詩旨ししゆ、喜を讀るに似たるあり、二子相顧あひまみて慚は駭あし、多きを以て之を窮めむと欲し、即ち又爲つて之を喜に傳ふ。喜、思益しやくす苦、務めて道士を壓おさせむと欲し、營度えいどして口吻くふんより出さむと欲する毎に、聲の鳴ること益ますますす悲かなむ。筆を操つて、書せむと欲し、將まさに下さむとして復た止み、竟つひに亦た奇なること能はざるなり。舉つて、即ち道士に傳ふ。道士高く踞まして大に唱へて曰く、劉、筆を把とれ、吾が詩云うたふ、と。それ意を用ひざるも、しかも功益こうやくす奇なり、附説ふせつすべからず、語、皆劉侯りうこうを侵す。喜、益ますますす之を思おもひ。劉と侯と、皆すでに十餘韻じゆじゆんを賦す。彌明、これに應ずること響こたの如く、皆頽脫たいだつにして譚瀾たんらんを含めり。夜三更やさんせいを盡つくすとき、

二子思竭しきつきて、續つぐこと能はず。因つて起つて謝して曰く、尊師そんしは世人せじんに非ざるなり。某か、伏たせり、願ねがはくは、弟子でしとならむ、敢て更に詩を論せずと。道士奮ふんつて曰く、然らず、章あき以て成なさすむばあるべからざるなりと。又劉に謂つて曰く、筆を把とり來れ、吾、汝なんぢと之を就あさむと。即ち又四十字を唱出して八句と爲し、書し訖しりて讀よましむ、讀よみ畢はつて、二子に謂つて曰く、章あき、すでに就あらずやと。二子齊いっしく應へて曰く、就あれり。道士曰く、子、皆與みなに語るに足らず、これ事ことろ文と爲さむや、吾、子の能くするところに就いて作るのみ、吾が師しに學んで能くするところのものに非ざるなり、吾が能くするところのものは、子皆みな以て聞くに足らざるなり、獨り文のみならむや、吾が語も亦た當あたりに聞きくべからざるなり、吾、口を閉しぢむと。二子大に懼おそれて、皆起みなち、牀下しやうかに立つて拜まがして曰く、敢て他に問ふあるにあらざるなり、願ねがはくは、一言ひとことを聞かひのみ。先生稱せんせいしやうす、吾、人間の書を解せずと、敢て問ふ何の書を解するか。請こふ、此を問はむのみと。道士、寂然じやくぜんとして聞きくなきが若ごときなり、累かさりに問へども應へず、二子、自得じとくせず、即ち退ひいて座ざに就あく、道士、牀しやうに倚よつて睡ねり、鼻息びしき、雷かみの鳴るが如し。二子、怛然たんぜんとして色を失しひ、敢て喘あがず。斯須しよにして、曙鼓しよこ動ういて鼙鼙ひひたり。二子、亦た困こんで遂つひに坐睡ざすいす。覺さむるに及びて、日、すでに上ある。驚おどき顧かみて、道士を覺るに見えず、即ち童奴どうにに問ふ。奴曰く、天あま、且かつに明けむとす、道士、起つて門かどを出でで、將まさに便旋べんせんせむとするが若ごとく然ごとく。奴久ひさしく返かへらざるを怪あんで、即ち出ででて、門かどに到いたつて覺るに、有ることなきなり。二子驚おど愧かして自ら責とがめ失うふある

もの若し。しばらくありて、遂に余に語りて言ふ、余、その何の道士たるかを識ること能はざるなり。かつて聞く、隱君子彌明ありと、豈に其人か。韓愈序す。

巧匠斲山骨、剝中事煎烹。師服

巧匠、山骨を斲り、中を剝めて煎烹を事とす。

直柄未當權、塞口且吞聲。喜

柄を直くして未だ權に當らず、口を塞いで且聲を吞む。

龍頭縮菌蠢、豕腹漲彭亨。彌明

龍頭縮まつて菌蠢たり、豕腹漲れて彭亨たり。

外苞乾蘇文、中有暗浪驚。師服

外は乾蘇の文に苞まれ、中に暗浪の驚くあり。「なり」

在冷足自安、遭焚意彌貞。喜

冷に在つて、足自ら安く、焚かるるに遭うて、意彌よ貞。

謬當鼎鼐間、妄使水火爭。彌明

謬つて鼎鼐の間に當り、妄りに水火をして争はしむ。

大似烈士膽、圓如戰馬纓。師服

大は烈士の膽に似たり、圓は戰馬の纓の如し。

上比香爐尖、下與鏡面平。喜

上は香爐の尖なるに比し、下は鏡面と平かなり。

秋瓜未落蒂、凍芋強抽萌。彌明

秋瓜未だ蒂を落さず、凍芋強ひて萌を抽く。

一塊元氣閉、細泉幽竇傾。師服

一塊、元氣閉ち、細泉、幽竇傾く。

不值輪寫處、焉知懷抱清。喜

輪寫する處に値はずば、焉んぞ懷抱の清きを知らむ。

方當洪爐然、益見小器盈。彌明

方に洪爐の然ゆるに當つて、益す小器の盈つるを見る。

皖皖無刃迹、團團類天成。師服

皖皖として刃迹なく、團團として天成に類す。「隠す」

遙疑龜負圖、出曝曉正晴。喜

遙に疑ふ龜の圖を負うて、出でて曉の正に晒れたるに

旁有雙耳穿、上爲孤髻撐。彌明

旁に雙耳の穿てるあり、上に孤髻の撐ふるを爲す。

或訝短尾銚、又似無足鐘。師服

或は短尾の銚かと訝かり、又無足の鐘に似たり。

可惜寒食毬、擲此傍路坑。喜

惜むべし、寒食の毬、この傍路の坑に擲つことを。

何當出灰炆、無計離餅罌。彌明

何ぞ當に灰炆を出すべき、餅罌を離るるに計なし。

陋質荷斟酌、狹中愧提擎。師服

陋質、斟酌を荷ひ、狹中、提擎を愧づ。

豈能煮仙藥、但未汗羊羹。喜

豈に能く仙藥を煮むや、但未だ羊羹に汗されず。

形模婦女笑、度量兒童輕。彌明

形模、婦女笑ひ、度量、兒童輕んず。「横はるを見」

徒示堅重性、不過升合盛。師服

徒に堅重の性を示すも、升合を盛るに過ぎず。

旁似廢穀仰、側見折軸橫。喜

旁よりすれば廢穀の仰ぐに似たり、側つては折軸の

時於蚯蚓窠、微作蒼蠅鳴。彌明

時に蚯蚓の窠に於て、微に蒼蠅の鳴を作す。

以茲翻溢愆。實負任使誠。師服この翻溢の愆を以て、實に任使の誠に負く。

常居顧眄地。敢有漏洩情。喜常に顧眄の地に居り、敢て漏洩の情あらむや。

寧依暖熱弊。不與寒涼并。彌明寧ろ暖熱に依つて弊るるも、寒涼と并さず。

區區徒自效。瑣瑣不足呈。喜區區として徒に自ら效し、瑣瑣として呈するに足らず。

廻旋但兀兀。開闔惟鏗鏗。師服廻旋すれば、但だ兀兀たり、開闔すれば惟だ鏗鏗たり。

全勝瑚璉貴。空有口傳名。全く瑚璉の貴きに勝り、空しく口の名を傳ふるあり。

豈比俎豆古。不爲手所攬。豈に俎豆の古りて、手に攬げられざるに比せむや。

磨礱去圭角。浸潤著光精。磨礱して圭角を去り、浸潤して光精を著く。

願君莫嘲諷。此物方施行。彌明願はくは、君、嘲諷する莫れ、この物、方に施行す。

【字解】【一】巧匠。上手な細工人。【二】山骨。石をいふ。【三】榑中。中央を指める。【四】直柄。柄は鼎の主體より上の突起した部分。【五】未嘗。推測に代用することは出来ぬ。【六】龍頭。これは脚部で、そこに龍の頭を彫刻してある。【七】首。文選南都賦に芝房商蓋生三其限とあつて、轆んでおられる。【八】衣版。これは主部、即ち物を盛る處で、蓋の腹の如く肥大である。【九】酒影。酒は腹に同じ、影等は、張り切つた腹。【一〇】乾薪。乾燥した木の屑。【一一】足自安。足は鼎の脚部。【一二】鼎。鼎は鼎の小なるもの。【一三】駟馬。駟は昔に掛けた鞍で、駟馬が走る時に回くたつて見えるより云ふ。【一四】下。典義圖平

下は鼎の主部の裏面。【一】輪。水を注いで移す。【二】洪。大きな開置。【三】煖。莊子に煖煖然として鑪竈の間に在り」とあつて、その注に「顧る貌」とある。【四】龜負。禹の時、龜が背を負うて黄河から出て来た。【五】雙耳。鼎の主部の兩側を持つ處のあるをいふ、即ち取っ手。【六】孤。帶。帶のつかへて居る様である。【七】短尾。銚は銚子、小さい釜で柄が付いて居るし、又口がある。短尾は柄の短くない。【八】無足。あしがなへ、釜の脚、三つの短い足があつて酒を温むるに用ふ、その足の極めて短く殆んど無いと同じ様になつて居る種類。【九】寒食。寒食の日に關輔の邊に用ふる。昔に魯九寒食直歸。雨の時不見紅。上。の句下に解釋して置いた。【一〇】灰。他は燭燭、即ち燈火の燃えさし。【一一】餅。餅とも同。【一二】糝中。その内部の狭小なるをいふ。【一三】羊羹。羊の肝を集めて煮詰めるので、精力を増す效があるといふ。その色は赤い。日本の菓子羊羹は、その色の似たるより名づけたものであらう。【一四】升合。升合を盛るだけで、とても何斗といふ様に多くは遣入らぬ。【一五】旁。横から見。【一六】磨。車の心棒の破損して役に立たぬもの。【一七】側。横つ倒しになる。【一八】蓋。蓋の出入する様な小さな隙間。【一九】。あまり水を多く入れてこぼれる。【二〇】任使。命ぜられ使はれる。【二一】。廟堂の祭器。廟堂。ふりかへつて加減する地位。【二二】。ぐるぐる廻して見ても、どちらから眺めても。【二三】。廟堂の祭器。その注に「扱は擧なり」とある。【二四】。二字とも同。【二五】。自然と内部から湯気が浸み込む。【二六】。施行。實用に供する。

【題義】石鼎聯句の由來に就いては、韓愈の序が之を詳にして居るから、ここに述べる必要もない。なほ其聯句の主唱者たる軒轅彌明といへる老道士は、實に韓愈の假稱であるといふことが、むかしから信せられて居るが、これに就いては、餘論に於て考査することにする。それから、この聯句は、序に元和七年十二月とあるから、韓愈が再び國子博士に在職して、ひまであつた時分の事で、その明年三

月には、比部郎中史館修撰に改められた。そこで、序文の大意はといふと——元和七年十二月四日に、衡山の道士軒轅彌明といふものが、山麓の幽栖を出でて著京した。この人は、もと進士劉師服が衡湘の地に居た時分から知り合つて居たから、今次、西の方、太白に往かうといふので、此に來り、丁度師服が在京することを知つて、夜、その家を尋ねて泊まり込んだ。ここに校書郎侯喜といふものがあつて、近ごろ、詩が上手だといふ評判を得たが、夜、劉師服を訪うて、詩の話をして居た。その時、彌明は其側に居たが、容貌極めて醜惡、白い鬚、黒い面、長い頸で、喉佛の高くなつた處から、楚地の訛を出して話をする。侯喜は之を注視して居たが、格別氣にも留めず居ると、彌明は、のけ者にされたのが不平であつたものと見え、忽ち衣を捲くり上げ、眉を張りつつ、爐中の石鼎を指して、侯喜に向ひ「貴公は、詩が上手だといふが、我と共に聯句をして、この石鼎を賦すか如何だ」といつた。さきに、劉師服は、衡湘地方の人の話を聞いたことがあるが、この道士は、年九十餘、しかも通力があつて、鬼物を捕へたり追ひ拂つたりし、蛟虯虎豹を拘禁囚繫する術を會得して居るといつたが、實際、そんな事を能くするや否やは知らず、唯だその年老いたるを見て、餘程表面的に崇敬して居た。又その人に文事の心得があるといふことを知らなかつたが、今彌明親らかく言ひ出せしことを聞いて、大に喜び、即坐に筆を把つて、最初の二句を作り、次に之を侯喜に渡すと、侯喜は踊つて大に喜び、待つて居ましたと云はぬばかり、直に其下に云々と續けた。すると、道士は嗔然として大笑し、貴公

の詩は、これ丈の事か」といひ、直に手を袖に入れ、肩を聳かし、北側の獨立に倚つて坐し、劉師服を顧みて「乃公は、世俗の書體を知らない、貴公、代つて書いて呉れろ」といつて、龍頭縮齒、豕腹張彭亨と高吟したが、初めから、格別考へもせぬやうであつて、その意味は、どうやら、侯喜の詩名あつて其實未だ相副はざるを譏るやうであつた。侯劉二子は、相顧みて慙愧し、これは句數を多くして困らせて遣らうといふので、直に其後を作つて、侯喜に渡すと、侯喜は、詩思益す苦んだが、務めて道士を壓服して呉れやうといふので、經營量度して、口吻から唱へ出さうとする毎に、その聲は益す悲しげに聞こえ、筆を執つて書かうとして復た中止し、いかにしても奇句を拈り出すことが出来なかつた。そこで、侯喜が擧つて道士に渡すと、道士は高胡坐をかきながら、大聲に呼ばはつて、劉君、筆を持って、吾が句は云云だ」といひ、少しも意を用ひずして、直に打ち出したが、その功力は益す奇であつて、ここに附説することも出来ぬ位、そして、その語は、劉侯二人にあて付けてあつたから、侯喜は愈よ忌忌しく思つて、やがて劉師服と二人で、各すでに十餘韻を賦したが、彌明が之に應じて、その後の句を作ることとは、さながら響の聲に隨ふが如く、いづれも、誰が囊中より穎脱して、ちくちくと刺すが如く、譏り嘲る意味を含んで居た。かくて、夜は三更を過ぎ、二人ともに考へが盡きて、後を續けることが出来なくなつたから、乃ち起つて、睡んで挨拶を爲し、尊師は到底世間並の御方ではない、某等は恐れ入りました。願はくは、弟子となつて、教を受けたい。今後高慢らしく詩を論ず



ることは致しませぬ」といつた。すると、道士は、奮然として、いや左様では御坐らぬ、何は鬼もあれ、折角遣りかけたものだから、これは是非まとめなければ成らぬといひ、又劉師服に向つて「筆を持つて来い、乃公は、汝の爲に之をまとめて遣はさう」といひ、即坐に四十字を唱へ出して八句となし、やがて、それを書き訖ると、二人に命じて讀ましめ、讀み畢ると、二人に向つて「どうだ、これで愈よまとまつたではないか」といふと、二人は聲を揃へて「いかにも、まとまりました」といつた。すると、道士は、「こんなのは、話にも成らないので、文といはれるものではない、吾は、しばらく貴公等の出来る範圍に就いて作つたので、吾が師に學んで能くするところは、こんなものではない。しかし、吾が能くするところは、貴公達に聞かせても、分らないから仕方がない。ひとり、文ばかりではない、わが話としても聞き取れることは出来まいから、乃公は口を閉ぢて、何も申さぬぞ」といつた。二人は、大に懼れ、皆皆牀下に起立して拜を爲し、「外の事は承はらないでも宜しいが、ただ一言お聞き申したい。さきに、先生は、自分は、人間なみの書體を知らぬと仰せられたが、然らば、如何なる書體を解されるか、それを承はりたい」といつたが、道士は、寂然として聞かぬかの如く、つづけて問ふたけれども、返事もしない。二人は、不満足ではあるが、仕方がないから、退いて、おのが座に就くと、道士は平氣で、例の衝立に倚りかかつた儘、睡つたが、その躰は、さながら雷の鳴るが如くであつた。二人は、怛然として色を失ひ、敢て喚きもせず、息を凝らして見て居たが、しばらくし

て、曉の街鼓が擊撃として鳴り響き、二人とも、疲れはてて、遂に坐睡りをした。やがて、目が覺めると、太陽は、すでに上つて居たから、大に驚き、顧みて道士を捜したが見つからない。そこで、下部の小童に問ふと、小童が答へて云ふには「夜の明けむとする頃、道士は、身を起して、門を出て往つたが、すぐに戻つて来さうな様子であつた。しかし、久くして返らぬから、變だと思つて、早速ここより出て、門まで往つて探したが、影だに見えませぬ」といつた。二人は驚愕して、自ら手ぬかりを責め、茫然として自失したやうであつた。しばらくして、余の處に来て、その話をした。余は、その人が如何なる道士かを識別することは出来ない。但し、隱君子で彌明と名乗るものがあるといふことを聞いて居たが、てつきり、その人ではあるまいか、そこで、二人の話を其儘書いて、それを序にする——その聯句といふのは、即ち次の如くである。

【詩意】世に上手といはれる細工人が、山の骨とも稱すべき石を削り、その中を窪めて、鼎の形をなし、それで、物を煮る用に供した。その柄は眞直に伸ばしてあるが、權衡に代用することも出来ず、口には蓋をして、聲を出させぬ様にしてある。真中には、龍頭の彫刻があるが、縮まつて、鉞が寄つて居るし、主部は、豕の腹の如く、脹れて彭亨として居る。その外面は、乾いた苔の模様に包まれ、中には水を入れて、暗浪が騒いで居る。その冷かな時分に、鼎の足は、もとより確ツかりして居るが、下から火を焚かれて、その意、愈よ眞、決して移變することはない。誤つて、その形を大小の鼎

の中間に置いたから、まことに使ひ善いものとして、妄りに水火を調はしめる様なことになつた。その石鼎の大きさは、烈士の膽程であるし、その圓さ加減は、駈ける時に戰馬の紐が輪を爲す位である。上の方は、香爐の様に尖つて居るし、下なる裏面は、鏡の如く平かである。全體の形は、秋の瓜が未だ帯を落さざるが如く、凍れる芋魁が無理に芽を出した様である。この鼎は、もと一塊の石でありながら、その中に元氣を閉ぢ、そして、幽深なる穴から湧いた細泉の水を満たしたので、その移して注ぐ處を見なければ、どうして、鼎その物の懷抱の薩張りと綺麗なことを知られやうか。その大きな圓爐裏の中で火の燃ゆる時に當つて、小器たる石鼎の内では、水が熱せられた爲に、分量が殖えて、中に一ぱいに成つて居る。その時、ちツと石鼎を眺めると、いかにも手際よく出來て居て、刃で削つた跡もなく、團圓として天然に渾成したやうである。遙に見れば、龜が圖を負うて河の中から這ひ出で、曉の晴れたるに乗じて、その脊を乾して居るやうであり、その旁に取ツ手が付いて居るが、上に向つて、櫂の支へた様である。或は、柄の短い銚子の如く、足の無い鍋の如く、寒食の日、遊戯に用ふる筈が、惜むらくは、路に沿へる坑の中に棄てられたと思ふばかりである。石鼎は、決して灰や燃えさしの中から脱出することなく、又その用は餅餌と同じである。もと石で造つたので、賤しい物であるのに、わざと斟酌して、特に此座敷に持つて來られたのは、有り難いが、中が狭くて、水が澤山這入らず、或は役に立たぬ場合があつて、提撃を愧づることもある。もとより仙藥を煮られることはないが、

羊羹に汗されることもない。その形貌が奇妙だといつて、婦女輩は笑ひ、その這入る量の少いことに就いて、兒童が輕んじて居る。いたづらに堅く重い特性を示して居るが、盛るところは、わづか升合に過ぎぬ。傍から見ると、車の轂の破損したやうであるし、側つて居る時には、折れた軸が横はつて居る如くである。時たま蚯蚓の出入しさうな細い隙間から蒸氣を吐いて、蠅の鳴く様な聲をなして居る。もし溢れて灰神樂を起したならば、それを扱ふ人の誠意に背くことになる。常に人から注意して顧阿される地位に居るが、本來は、機密を漏洩する様な私情は、少しもない。たとひ、暖熱の爲に使ひ古されるとも、寒涼には一向關係ない。區區として、おのが職務だけは全うして居るが、もとより瑣瑣たることであつて、格別見せつけて獻呈するだけのものでもない。いくら廻して見ても同じ形で、元元として居るし、蓋を明けたり閉ぢたりすれば、鏗鏗たる音を爲すだけである。その用途から云へば、瑚璉の貴きにも勝つて居るが、唯だ萬口に其名を傳ふるだけで、格別尊崇されることもなく、俎豆の祭器の古びたるとは異にして、何にしても重いから、一寸手で舉げるといふことは出來ぬ。そこで、磨いて圭角を去り、内部から湯垢が浸みると、澤が出て來る。たとひ立派ではなくとも、願はくは、君、嘲つたり諷つたりするな。現に此物を使用して居て、その役に立つところが尊いのである。【餘論】詰まらぬものだが、石鼎は、形狀奇古にして、兎に角、役に立つといふことを形容し敘述したので、その間、作者は、他に對して嘲けつたり、からかつたりして居るから、その名を見て篇と考へれ

ば、大抵は分かる。しかし、これを一篇の詩として見ると、章法參差、語意重複を免れないので、たとへば、俳諧の附合の如く、その句から句に移る處に、特殊の興味は有るが、全體としては支離滅裂で、前に出て居る韓孟の聯句の、宛ら一手に出でたるが如きものとは、大に其趣を異にして居る。蔣注に「張文潛の本校、この本と特に異なり、蓋し蔡文忠に本づくなり、然れども、増損太だ多し、何の本に得たるかを知らず」とあり、又「これ特に文を以て滑稽とし、殊に風致の采るべきなし、宜しく外集に入るべし、一本に此篇なし、極めて體を得たり」といつて居る。それから、軒輊彌明が韓愈の假名なりや否やに就いて、洪興祖は「石鼎聯句の詩、或は云ふ、皆退之の作るところと、是れ然らず、劉侯、皆公の門人なり」と雖も、應に謙語輕薄、かくの如きの甚しかるべからず、且つ彌明の極めて醜なるを序す、豈に亦た退之自ら謂はむや。予が同年李道立云ふ、かつて唐人作るところの賈島の碣を見るに、云ふ、石鼎聯句に稱するところの軒輊彌明は、即ち君なりと。鳥は范陽の人、彌明は衡山の人、鳥は本と浮屠にして、彌明は道士、附會の妄信すべきものなし。ひとり、仙傳拾遺に彌明の傳あり、退之の語を祖述すと雖も、亦た必ず是人あらむ。聯句、若し以て公の作と爲さば、一口に出づるが若くならむ。今その劉侯の句を讀むに、彌明に及ばざること遠き甚し、何ぞ是に至らむや。蓋し聞く、君子は己を損して以て人の美を成す、未だ人を抑へて以て勝を取るを聞かざるなり」といひ、一應尤もらしいが、韓愈が假りに軒輊彌明と稱し、實際劉侯二人と聯句をなし、そして、し

らばくれて序文を草し、世人をかついだものとすれば、何でもないので、元と元と、遊戯の閒文字であるから、劉侯二人を識つた處で、おのが容貌を醜惡に形容した處で、少しも、不思議はない。要するに、洪興祖は、頭から遊戯の文字といふことに想及せず、四角張つた議論をして居るから、事が面倒になる。これに較べると、朱子などは、流石に捌けたもので、「この詩の句法、全く韓公に類す、而して、或者の謂はゆる公の姓名を寓するものなり。蓋し、軒輊の反切は韓に近く、彌の字の義、又愈の字と相類す。即ち張籍の説るところ、人と無實嚴雜の説を爲すものなり。故に竊に意ふ、或者の言、是に近し。洪氏の疑ふところ、容貌聲音の陋は、乃ち故らに幻語を爲り、以て笑諷を資け、又以て其事實を亂し、讀者をして之を覺らざらしむるのみ。列仙傳の如きは、又好事者、この序に因つて、これに附著す、尤も以て據となすに足らざるなり」といつて居て、大に我が論旨を助け、且つ若干の辨證をも提供したものである。然るに、焦竑は「退之の石鼎聯句の詩に道士軒輊彌明あり、その語、往往にして高古羣を出づ。或者は謂ふ、即ち退之の撰するところにして、特に彌明に擬言するのみと。今按ずるに、張南軒、淳熙の間、靜江に守たり、奏疏に曰ふあり、臣の領するところの州に、唐帝祠あり、城を去ること二十里にして近し。その山を堯山といふ、高廣にして一境の望たり。祠は始まることを詳にせずと雖も、然れども、唐の衡岳道士彌明の詩刻ありと。これに據るときは、石鼎聯句は、その人なしといふを得むや」といつて居るが、謂はゆる詩刻は、多分後人が軒輊彌明を實在の人

として捏造したものに過ぎざるべく、殊に張南軒の如き道學先生には、例の遊戯文字の事など、分かつらう筈がなく、折角ながら、この例證は、決して、有力なる者に非ざるを遺憾とする。

### 韓昌黎集終

### 韓昌黎詩年譜

韓文、即ち韓愈の詩文全集は、元と李漢の編次に係るものであるが、詩の部分は、手當り次第に振き集めたものと見え、編年でもなく、分類でもなく、絶えて定準の認むべきものならず、その中の數卷は、殊に蕪雜極まるものである。そこで、予が講説に於ては、各詩に就いて、一一、その年代を考致したが、ここでは、年譜として、全體を年月順に排列して見ることにした。彼の作詩を透して、韓愈の閱歷を研究しやうといふ様な場合には、些かながら、參考に成ることと思ふ。主として、參考に供したのは、顧嗣立の集注本の前に見した昌黎年譜、方成珪の韓文箋正の後に附けた昌黎先生詩文年譜の二種であつて、往往私見を以て、先後入れ替へた處などがある。又講説中に述べたことと一致しないこともあらうが、それは新に研究した結果を年譜に編成したのだから、しばらく、後者を以て定説として貰ひたい。しかし、一時の間に合せに、大急ぎで作つたものであるから、もとより、挂漏あるを免れず、その完全なものは、更に他日を待つ外なく、仍つて、大方の是正を切望する次第である。

唐代宗大曆三年戊申 一歲。韓愈生、字は退之。

大曆四年己酉 二歲。

大曆五年庚戌 三歲。父母を喪うて孤となり、兄會に養はる。

大曆六年辛亥 四歲。

大曆七年壬子 五歲。

大曆八年癸丑 六歲。

大曆九年甲寅 七歲。兄會に従ひ、洛を去つて、秦地に在り。學を好み、他生の習ふところを記し、言出づれば文を成す。

大曆十年乙卯 八歲。

大曆十一年丙辰 九歲。

大曆十二年丁巳 十歲。

大曆十三年戊午 十一歲。前年、兄起居舍人韓會、元載に坐して官を貶せられ、この年、韶州に至る。愈、これに従ふ。

大曆十四年己未 十二歲。

德宗建中元年庚申 十三歲。文を能くす。

建中二年辛酉 十四歲。

建中三年壬戌 十五歲。韓會、貶所に歿す。一家移つて嵩に居る。

贈河陽李大夫(補遺).....下卷 六〇五頁

建中四年癸亥 十六歲。

興元元年甲子 十七歲。

貞元元年乙丑 十八歲。中原多故を以て、地を河南に避け、なほ嫂氏と居る。

貞元二年丙寅 十九歲。

出門(卷二).....上卷 三三八頁

貞元三年丁卯 二十歲。

烽火(卷二).....上卷 三四六頁

貞元四年戊辰 二十一歲。

貞元五年己巳 二十二歲。

貞元六年庚午 二十三歲。

貞元七年辛未 二十四歲。

落葉一首。送陳羽(卷二).....

上卷 二一六頁

貞元八年壬申

二十五歲。陸贄、主司として、明水賦、御溝新柳詩を試む。愈、第に春宮に擢んでらる

北極一首。贈李觀(卷二).....

上卷 一九一頁

貞元九年癸酉

二十六歲。博學宏詞科に試みられしが第せず。

貞元十年甲戌

二十七歲。河陽に還りて墳墓を省す。

重雲一首。李觀疾贈之(卷一).....

上卷 一七九頁

謝自然詩(卷一).....

上卷 一二四頁

貞元十一年乙亥

二十八歲。五月、潼關を出でて東歸し、二鳥賦を作る。九月、東京に之かむとし、

途、田横の墓下に出づ。

馬厭穀(卷二).....

上卷 三三六頁

岐山下。二首(卷一).....

上卷 一八六頁

長安交游者一首。贈孟郊(卷一).....

上卷 一八五頁

孟生詩(卷五).....

上卷 七三五頁

貞元十二年丙子

二十九歲。董晉に擧げられて、秋、汴州觀察推官となる。

利劍(卷二).....

上卷 三五二頁

貞元十三年丁丑

三十歲。

送汴州監軍俱文珍(補遺).....

下卷 六八三頁

貞元十四年戊寅

三十一歲。

天星。送楊凝郎中賀正(卷三).....

上卷 三六八頁

古風(卷二).....

上卷 三二八頁

貞元十五年己卯

三十二歲。二月、董晉薨す。喪を護して京師に至る。四日にして汴州亂れ、留後陸

長源殺さる。その秋、徐州に赴きて、張建封に依り、節度推官となりしが、意を得ず。

汴州亂。二首(卷二).....

上卷 三四七頁

贈張徐州。莫辭酒(補遺).....

下卷 六二五頁

嗟哉董生行(卷二).....

上卷 三四〇頁

此日足可惜一首。贈張籍(卷二).....上卷 一九四頁

贈族姪(補遺).....下卷 六一三頁

幽懷(卷二).....上卷 二二二頁

鯢鯢(卷二).....上卷 三五四頁

汴泗交流。贈張僕射(卷三).....上卷 三七〇頁

忽忽(卷三).....上卷 三七四頁

鳴鴈(卷三).....上卷 三七五頁

雉帶箭(卷三).....上卷 三七九頁

從仕(卷五).....上卷 七四八頁

暮行河堤上(卷一).....上卷 一七七頁

驚驥(卷二).....上卷 三三一頁

貞元十六年庚辰 三十三歲。五月、徐を去る。その十五日、徐軍亂る。復た難を免るるを得たり。冬、京師に在り。

海水(補遺).....下卷 五九九頁

歸彭城(卷二).....上卷 二一七頁

送僧澄觀(卷七).....下卷 九一頁

夜歌(卷一).....上卷 一七八頁

河之水二首。寄子姪老成(卷三).....上卷 三五九頁

山石(卷三).....上卷 三六三頁

貞元十七年辛巳、三十四歲。

將歸。贈孟東野・房蜀客(卷五).....上卷 七四四頁

贈侯喜(卷三).....上卷 四〇〇頁

送李愿歸盤谷(補遺).....下卷 六六一頁

貞元十八年壬午 三十五歲。調して國子四門博士を授けらる。

送陸欽州(補遺).....下卷 六五七頁

貞元十九年癸未 三十六歲。監察御史に拜せらる。その冬、抗疏せしを以て罪を得、陽山令に貶せらる。

哭楊兵部凝・陸欽州參(卷四).....上卷 五四五頁

落齒(卷四).....上卷 五四一頁

苦寒(卷四).....上卷 五四六頁

題炭谷湫祠堂(卷五).....上卷 六六〇頁

貞元二十年甲申 三十七歲。春、はじめて陽山に至る。

貞女峽(卷三).....上卷 三九九頁

同冠峽(卷二).....上卷 二三〇頁

次同冠峽(卷九).....下卷 三三六頁

答張十一功曹(卷九).....下卷 三三八頁

叉魚 招張功曹(卷九).....下卷 三三〇頁

李員外寄紙筆(卷九).....下卷 三三五頁

縣齋讀書(卷四).....上卷 五三五頁

送惠師(卷二).....上卷 二三一頁

送靈師(卷二).....上卷 二四一頁

和歸工部送僧約(卷九).....下卷 三六六頁

順宗永貞元年(貞元二十一年)乙酉 三十八歲。三月、江陵法曹參軍に移る。

聞梨花發 贈劉師命(卷九).....下卷 三五八頁

梨花下 贈劉師命(卷九).....下卷 三六四頁

劉生詩(卷四).....上卷 四六七頁

縣齋有懷(卷二).....上卷 二五二頁

醉後(卷二).....上卷 二二二頁

宿龍宮灘(卷九).....下卷 三二八頁

郴州祈雨(卷九).....下卷 三四〇頁

射訓狐(卷五).....上卷 七四一頁

東方半明(卷三).....上卷 三九四頁



赴江陵途中。寄三學士(卷二).....	上卷	一五七頁
八月十五夜。贈張功曹(卷三).....	上卷	四〇八頁
湘中。酬張十一功曹(卷九).....	下卷	三四二頁
郴口。又贈二首(卷九).....	下卷	三四三頁
薦士(卷二).....	上卷	三〇八頁
合江亭(卷二).....	上卷	二六三頁
題木居士。二首(卷九).....	下卷	三四五頁
晚泊江口(卷九).....	下卷	三四七頁
湘中(卷九).....	下卷	三四八頁
謁衡嶽廟(卷三).....	上卷	四一三頁
峒嶼山(卷三).....	上卷	四二〇頁
別盈上人(卷九).....	下卷	三四九頁
洞庭湖阻風(卷三).....	上卷	四三二頁

岳陽樓。別竇司直(卷二).....	上卷	二七五頁
陪杜侍御。遊湘西兩寺(卷二).....	上卷	二六九頁
潭州泊船。呈諸公(補遺).....	下卷	六三三頁
龍移(卷三).....	上卷	三七八頁
永貞行(卷三).....	上卷	四二二頁
喜雪。獻裴尚書(卷九).....	下卷	三五〇頁
憲宗元和元年(永貞二年)丙戌三十九歲。夏、召して國子博士に拜せられむとし、朝に還る。		
春雪(卷九).....	下卷	三五五頁
春雪(補遺).....	下卷	六一二頁
春雪間早梅(卷九).....	下卷	三五九頁
早春雪中聞鶯(卷九).....	下卷	三六三頁
杏花(卷三).....	上卷	四三八頁
寒食日出遊(卷三).....	上卷	四五〇頁

秋懷詩 十一首(卷一).....上卷 一三三頁

有所思聯句(補遺).....下卷 六三七頁

遣興聯句(補遺).....下卷 六三九頁

贈劍客李園聯句(補遺).....下卷 六四二頁

贈張籍(卷五).....上卷 六七七頁

調張籍(卷五).....上卷 六八一頁

醉贈張祕書(卷二).....上卷 二二四頁

短燈檠歌(卷五).....上卷 七五〇頁

贈崔立之(補遺).....下卷 六〇二頁

元和二年丁亥 四十歲。權知國子博士となり、乞うて東都生を分教す。  
元和聖德詩(卷一).....上卷 三七頁

三星行(卷四).....上卷 五〇五頁

酬裴十六功曹巡府西驛塗中見寄(卷四).....上卷 五八九頁

寄皇甫湜(卷五).....上卷 六九一頁

陸渾山火。和皇甫湜。用其韻(卷四).....上卷 五二二頁

元和三年戊子 四十一歲。眞博士に改めらる。  
東都遇春(卷四).....上卷 五七六頁

遠遊聯句(卷八).....下卷 二八四頁

贈唐衢(卷三).....上卷 三九七頁

李花。贈張十一署(卷三).....上卷 四三五頁

感春。四首(卷三).....上卷 四四一頁

憶昨行。和張十一(卷三).....上卷 四五七頁

鄭羣贈簞(卷四).....上卷 四七三頁

南山詩(卷一).....上卷 九七頁

題張十一旅舍。三詠(卷九).....下卷 三七〇頁

入關詠馬(卷九).....下卷 三六七頁

答張徹(卷二).....上卷 二九五頁

豐陵行(卷四).....上卷 四七八頁

遊青龍寺。贈崔大補闕(卷四).....上卷 四八一頁

贈崔立之評事(卷四).....上卷 四八八頁

送文暢師北游(卷二).....上卷 二八六頁

送區弘南歸(卷四).....上卷 四九七頁

喜侯喜至。贈張籍張徹(卷二).....上卷 三二三頁

剝啄行(卷四).....上卷 五〇七頁

城南聯句(卷八).....下卷 一八二頁

會合聯句(卷八).....下卷 二二五頁

鬪雞聯句(卷八).....下卷 二二三頁

納涼聯句(卷八).....下卷 二四〇頁

秋雨聯句(卷八).....下卷 二五一頁

征蜀聯句(卷八).....下卷 二六〇頁

同宿聯句(卷八).....下卷 二七二頁

雨中。寄孟刑部幾道聯句(卷八).....下卷 二七七頁

孟東野失子(卷四).....上卷 五一四頁

祖席前字(卷十).....下卷 五〇三頁

秋字(卷十).....下卷 五〇六頁

崔十六少府攝伊陽。以詩及書見投。因酬三十韻(卷四).....上卷 五六〇頁

元和四年己丑 四十二歲。都官員外郎に改められ、東都省に守たり。

送李翱(卷四).....上卷 五九六頁

和虞部盧四酬翰林錢七赤藤杖歌(卷四).....上卷 五五五頁

送侯參謀赴河中幕(卷四).....上卷 五六八頁

同竇牟韋執中。尋劉尊師不遇(補遺).....下卷 六〇九頁

送湖南李正字歸(卷四).....上卷 六〇〇頁

元和五年庚寅 四十三歲。河南縣令を授けらる。

送鄭十爲校理(補遺).....下卷 六七七頁

感春 五首(卷四).....上卷 五八二頁

莎棚聯句(卷八).....下卷 二七六頁

送石處士赴河陽幕(卷四).....上卷 五九八頁

新竹(卷四).....上卷 五三八頁

晚菊(卷四).....上卷 五四〇頁

燕河南府秀才(卷四).....上卷 五九二頁

河南令舍池臺(卷五).....上卷 六三三頁

月蝕詩 效玉川子作(卷五).....上卷 七一八頁

學諸進士作精衛銜石填海(卷九).....下卷 三九三頁

峽石西泉(卷九).....下卷 三七三頁

招揚之罟(卷五).....上卷 六一二頁

元和六年辛卯 四十四歲。行職方員外郎となり、河南より京師に至る。

辛卯年雪(卷五).....上卷 六〇三頁

李花 二首(卷五).....上卷 六〇八頁

寄盧仝(卷五).....上卷 六一六頁

誰氏子(卷五).....上卷 六三〇頁

醉留東野(卷五).....上卷 六〇五頁

酬司門盧四兄雲夫院長望秋作(卷五).....上卷 六二五頁

石鼓歌(卷五).....上卷 六四〇頁

送無本師歸范陽(卷五).....上卷 六三五頁

送陸暢歸江南(卷五).....上卷 六六九頁

雙鳥詩(卷五).....上卷 六五二頁

元和七年壬辰 四十五歲。復た召されて四子博士となる。

贈劉師服(卷五).....上卷 六五七頁

送進士劉師服東歸(卷五)

上卷 六七三頁

送劉師服(卷五)

上卷 七五二頁

和崔舍人詠月二十韻(卷九)

下卷 三七八頁

盧郎中雲夫寄示送盤谷子詩兩章歌以和之(卷五)

上卷 六八六頁

石鼎聯句(補遺)

下卷 六八七頁

元和八年癸巳 四十六歲。進學解を作りて宰臣に知られ、擧げられて守尚書比部郎中史館修撰となる。

和武相公早春聞鶯(卷十)

下卷 四五三頁

和武相公詠孔雀(卷七)

下卷 一〇三頁

酬藍田崔立之詠雪見寄(補遺)

下卷 六三〇頁

元和九年甲午 四十七歲。十一月、考功郎中となり、十二月、知制誥となる。

飲城南道邊古墓上。逢中丞過贈禮部衛員外少室張道士(補遺)

下卷 六三五頁

江漢一首。答孟郊(卷一)

上卷 一八二頁

獻山南鄭相公樊員外酬答爲詩。依賦以獻(卷七)

下卷 九七頁

奉和虢州劉給事使君三堂新題二十一詠(卷九)

下卷 四一二頁

早赴街西行香。贈盧李二中舍人(卷七)

下卷 一〇九頁

奉酬振武胡十二丈大夫(卷九)

下卷 三九五頁

送張道士(補遺)

下卷 六七〇頁

元和十年乙未 四十八歲。

奉和庫部盧四兄元日朝廻(卷九)

下卷 三九七頁

寒食直歸遇雨(卷九)

下卷 四〇〇頁

題百葉桃花(卷九)

下卷 四〇三頁

春雪(卷九)

下卷 四〇四頁

戲題牡丹(卷九)

下卷 四〇五頁

芍藥(卷九)

下卷 四一一頁

寄崔二十六立之(卷五)

上卷 七〇二頁

雪後。寄崔二十六丞公(卷七).....	下卷	八七頁
送李尙書赴襄陽。八韻(卷十).....	下卷	四四七頁
示爽(卷六).....	下卷	九頁
元和十一年丙申。四十九歲。中書舍人に遷り、太子右庶子となる。		
人日城南登高(卷六).....	下卷	一三頁
晚寄張十八助教周郎博士(卷七).....	下卷	一一一頁
桃源圖(卷三).....	上卷	三八六頁
感春。三首(卷七).....	下卷	一〇五頁
大行皇太后挽歌詞。三首(卷十).....	下卷	四五七頁
和席八。十二韻(卷十).....	下卷	四五〇頁
和侯協律詠筭(卷十).....	下卷	四六七頁
題張十八所居(卷七).....	下卷	一一二頁
奉酬盧給事雲夫四兄曲江荷花行見寄。并呈上錢七兄閣老		

張十八助教(卷七).....	下卷	一一四頁
奉和錢七盆池所植(卷七).....	下卷	一九頁
記夢(卷七).....	下卷	一二〇頁
聽穎師彈琴(卷五).....	上卷	六六六頁
酬馬侍郎寄酒(卷十).....	下卷	四六五頁
符讀書城南(卷六).....	下卷	一頁
元和十二年丁酉。五十歲。彰義行軍司馬となり、裴度に淮西に従ひ、その歸るや、功を以て刑部侍郎となる。		
閒遊。二首(卷十).....	下卷	四六三頁
贈刑部馬侍郎(卷十).....	下卷	四七五頁
過鴻溝(卷十).....	下卷	四七二頁
送張侍郎(卷十).....	下卷	四七三頁
奉和裴相公女東征途經女儿山下作(卷十).....	下卷	四七六頁

- 鄆城晚飲。奉贈副使馬侍郎及馮李二員外(卷十)……………下卷 四七七頁
- 晚秋鄆城夜會聯句(卷八)……………下卷 二九六頁
- 酬別留後侍郎(卷十)……………下卷 四七九頁
- 同李二十八夜次襄城(卷十)……………下卷 四八〇頁
- 同李二十八員外。從裴相公野宿西界(卷十)……………下卷 四八一頁
- 過襄城(卷十)……………下卷 四八二頁
- 宿神龜。招李二十八馮十七(卷十)……………下卷 四八三頁
- 次硤石(卷七)……………下卷 四八四頁
- 和李司勳過連昌宮(卷十)……………下卷 四八五頁
- 桃林夜賀晉公(卷十)……………下卷 四八九頁
- 次潼關。先寄張十二閣老使君(卷十)……………下卷 四八六頁
- 次潼關。上都統相公(卷十)……………下卷 四八八頁
- 晉公破賊回重拜台司。以詩示幕中賓客。愈奉和(卷十)……………下卷 四九二頁

示兒(卷七)……………下卷 一四七頁

庭楸(卷七)……………下卷 一五四頁

元和十三年戊戌 五十一歲。

送李員外院長分司東都(卷十)……………下卷 四九〇頁

獨釣。四首(卷十)……………下卷 四九五頁

譴瘴鬼(卷七)……………下卷 一四三頁

元和十四年己亥 五十二歲。佛骨を論じて、潮州刺史に貶せられ、冬、袁州に移る。

元日。酬蔡州馬十二尙書去年蔡州元日見寄之什(卷十)……………下卷 五〇〇頁

琴操。十首(卷一)……………上卷 六八頁

路傍塚(卷六)……………下卷 三二頁

左遷至藍關。示姪孫湘(卷七)……………下卷 五二二頁

武關西逢配流吐蕃(卷十)……………下卷 五二二頁

次鄧州界(卷十)……………下卷 五二二頁

食曲河驛 <small>(卷六)</small> .....	下卷	三四頁
過南陽 <small>(卷六)</small> .....	下卷	三六頁
題楚昭王廟 <small>(卷九)</small> .....	下卷	三三五頁
瀧吏 <small>(卷六)</small> .....	下卷	三七頁
題臨瀧寺 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五二四頁
將至韶州。先寄張端公使君借圖經 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五二九頁
晚次宣溪。辱韶州張端公使君惠書敘別。酬以絕句。二首 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五二五頁
題秀禪師房 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五二八頁
過始興江口感懷 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五三〇頁
贈別元十八協律。六首 <small>(卷六)</small> .....	下卷	四五頁
初南食。貽元十八協律 <small>(卷六)</small> .....	下卷	五六頁
宿曾江口。示姪孫湘。二首 <small>(卷六)</small> .....	下卷	六〇頁
答柳柳州食蝦蟆 <small>(卷六)</small> .....	下卷	六三頁

別趙子(卷六)..... 下卷 六八頁

元和十五年庚子(卷六) 五十三歲。春。袁州に至り、九月、召して國子祭酒に拜せらる。

量移袁州。張韶州端公以詩相賀。因酬之 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五三四頁
韶州。留別張端公使君 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五三一頁
次石頭驛。寄江西王中丞閣老 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五三六頁
除官赴闕。至江州。寄鄂岳李大夫 <small>(卷六)</small> .....	下卷	七二頁
遊西林寺。題蕭郎中舊堂 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五三七頁
自袁州還京。行次安陸。先寄隨州周員外 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五四〇頁
寄隨州周員外 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五四四頁
題廣昌館 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五四二頁
酒中。留上襄陽李相公 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五四六頁
去歲自刑部侍郎。以罪貶潮州刺史。乘驛赴任。其後家亦譴逐。小女道死。殯之肩峰驛旁山下。蒙恩還朝。過其墓。留題驛梁 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五四九頁



賀張十八祕書得裴司空馬 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五五二頁
詠燈花 同侯十一 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五〇二頁
雨中 寄張博士籍侯主簿喜 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五五六頁
<small>長慶元年辛丑 五十四歲。兵部侍郎に遷る。</small>		
杏園 送張徹侍御歸使 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五五四頁
南山有高樹行 贈李宗閔 <small>(卷六)</small> .....	下卷	七六頁
猛虎行 <small>(卷六)</small> .....	下卷	八一頁
奉和兵部張侍郎酬鄆州馬尙書 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五五八頁
南內朝賀 歸呈同官 <small>(卷七)</small> .....	下卷	一二六頁
朝歸 <small>(卷七)</small> .....	下卷	一三一頁
詠雪 贈張籍 <small>(卷九)</small> .....	下卷	三八二頁
送侯喜 <small>(卷九)</small> .....	下卷	三九二頁
<small>長慶二年壬寅 五十五歲。使を鎮州に奉じ、王廷湊を叱す。秋、吏部侍郎に遷る。</small>		

早春與張十八博士籍遊楊尙書林亭 寄弟三閣老 兼呈白馮二閣老 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五六〇頁
奉使常山 早次太原 呈副使吳郎中 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五六三頁
夕次壽陽驛 題吳郎中詩後 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五六五頁
奉使鎮州 行次承天行營 奉酬裴司空 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五八〇頁
鎮州路上 謹酬裴司空相公重見寄 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五八二頁
鎮州初歸 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五六六頁
同水部張員外 曲江春遊 寄白舍人 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五六八頁
和水部張員外宣政衛賜百官櫻桃詩 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五七一頁
送桂州嚴大夫 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五七六頁
奉和僕射裴相公感恩言志 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五八三頁
奉和裴僕射相公假山 十一韻 <small>(卷七)</small> .....	下卷	一六二頁
奉和李相公題蕭家林亭 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五八六頁

奉和僕射相公朝迴見寄(卷十) ..... 下卷 五八五頁

和李相公攝事南郊覽物興懷。呈一二知舊(卷七) ..... 下卷 一五九頁

和杜相公太清宮紀事陳誠上李相公。十六韻(卷十) ..... 下卷 五八八頁

奉酬天平馬十二僕射暇日言懷見寄之作(卷十) ..... 下卷 五七八頁

鄆州谿堂詩(補遺) ..... 下卷 六四六頁

長慶三年癸卯。五十六歲。京兆尹となり、御史大夫を兼ね、冬、復た兵部侍郎となり、吏部侍郎に遷る。 ..... 下卷 五七四頁

早春。呈水部張員外。二首(卷十) ..... 下卷 五〇七頁

送鄭尙書赴南海(卷十) ..... 下卷 一六九頁

送諸葛覺往隨州讀書(卷七) ..... 下卷 一六六頁

長慶四年甲辰。五十七歲。夏より疾を得、官を辭して家居す。冬歿す。禮部尙書を贈り、諡して文といふ。 ..... 下卷 一六六頁

與張十八。同效阮步兵一日復一夕(卷七) ..... 下卷 一五七頁

翫月。喜張十八員外以王六祕書至(卷七) ..... 下卷 一七三頁

南溪始泛。三首(卷七) ..... 下卷 一七三頁

(以下無年可致)

君子法天運(卷二) ..... 上卷 二一四頁

條山蒼(卷三) ..... 上卷 三八二頁

贈鄭兵曹(卷三) ..... 上卷 三八三頁

古意(卷三) ..... 上卷 四〇五頁

青青水中蒲。二首(卷四) ..... 上卷 五一頁

嘲魯連子(卷五) ..... 上卷 六七五頁

雜詩(卷五) ..... 上卷 七〇〇頁

答孟郊(卷五) ..... 上卷 七四六頁

病中贈張十八(卷五) ..... 上卷 六九三頁

病鷓 <small>(卷六)</small> .....	下卷	一六頁
華山女 <small>(卷六)</small> .....	下卷	二一頁
讀皇甫湜公安園池詩。書其後。二首 <small>(卷六)</small> .....	下卷	二七頁
雜詩。四首 <small>(卷七)</small> .....	下卷	一三二頁
讀東方朔雜事 <small>(卷七)</small> .....	下卷	一三七頁
木芙蓉 <small>(卷九)</small> .....	下卷	三六八頁
梁國惠康公主挽歌。二首 <small>(卷九)</small> .....	下卷	三七四頁
酬王二十舍人雪中見寄 <small>(卷九)</small> .....	下卷	三九一頁
送李六協律歸荆南 <small>(卷九)</small> .....	下卷	四〇一頁
盆池。五首 <small>(卷九)</small> .....	下卷	四〇八頁
遊城南。十六首 <small>(卷九)</small> .....	下卷	四二八頁
太安池 <small>(卷十)</small> .....	下卷	四五四頁
遊太平公主山莊 <small>(卷十)</small> .....	下卷	四五五頁

晚春 <small>(卷十)</small> .....	下卷	四五六頁
廣宣上人頻見過 <small>(卷十)</small> .....	下卷	四六一頁
枯樹 <small>(卷十)</small> .....	下卷	四九九頁
答道士寄樹雞 <small>(卷十)</small> .....	下卷	五一頁
芍藥歌 <small>(補遺)</small> .....	下卷	五九五頁
苦寒歌 <small>(補遺)</small> .....	下卷	六〇七頁
嘲鼾睡。六首 <small>(補遺)</small> .....	下卷	六一七頁
晝月 <small>(補遺)</small> .....	下卷	六二三頁
辭唱歌 <small>(補遺)</small> .....	下卷	六二七頁
知音者誠希 <small>(補遺)</small> .....	下卷	六二九頁
池上絮 <small>(補遺)</small> .....	下卷	六三六頁

309  
65

昭和四年五月十日印刷  
昭和四年五月十五日發行

### 著者權所有

編輯者	國民文庫刊行會
右代表者	東京市神田區小川町一番地 鶴田久作
印刷者	東京市本郷區西片町十番地 渡邊一郎
印刷所	東京市小石川區西古川町廿五番地 中外印刷株式會社

續國譯漢文大成 文學部第八卷

【非賣品】

### 發行所

電話神田(五三三八五番)  
振替東京(八五七二番)

### 國民文庫刊行會

續國譯漢文大成 文學部第八卷

一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、  
十一、  
十二、  
十三、  
十四、  
十五、  
十六、  
十七、  
十八、  
十九、  
二十、

終